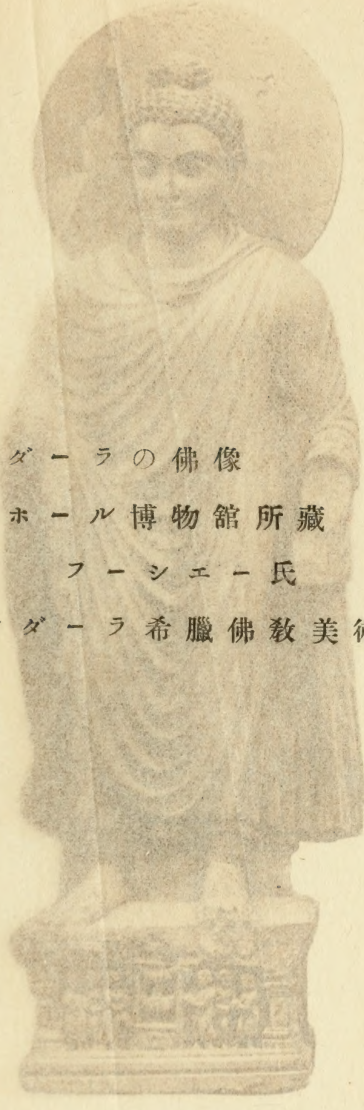
大正拾年
五月　日

赤沼智善
西村九郎右衛門

呈
石川老師

阿含と佛教

全



ガンダーラの佛像

ラホール博物館所藏

フーシエー氏

『ガンダーラ希臘佛教美術』より

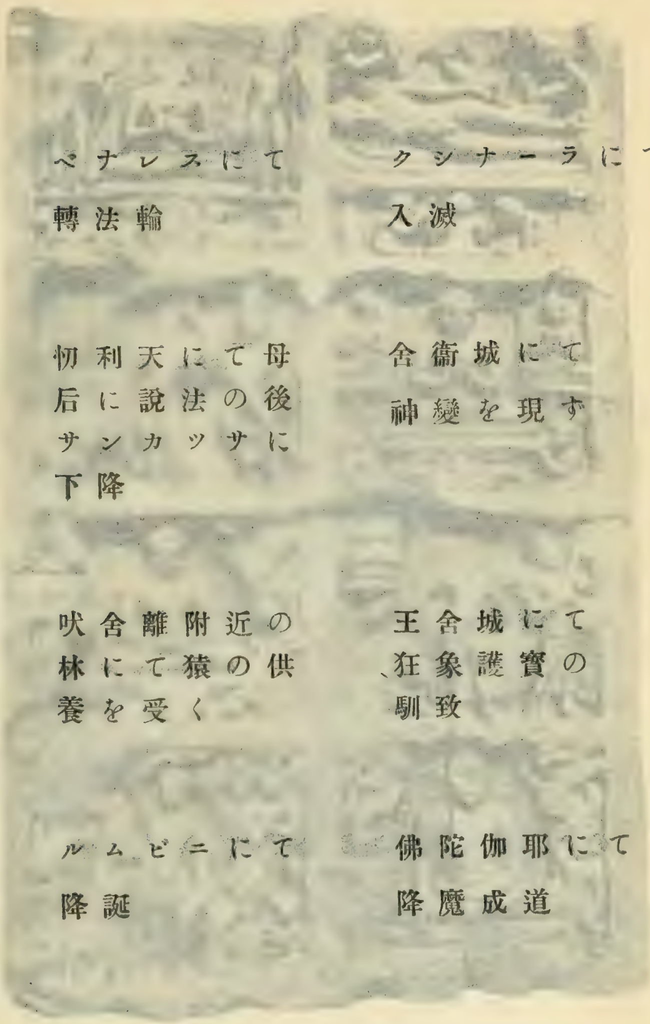
ガンダーラの佛像

ラホール博物館所藏

フーシェー氏

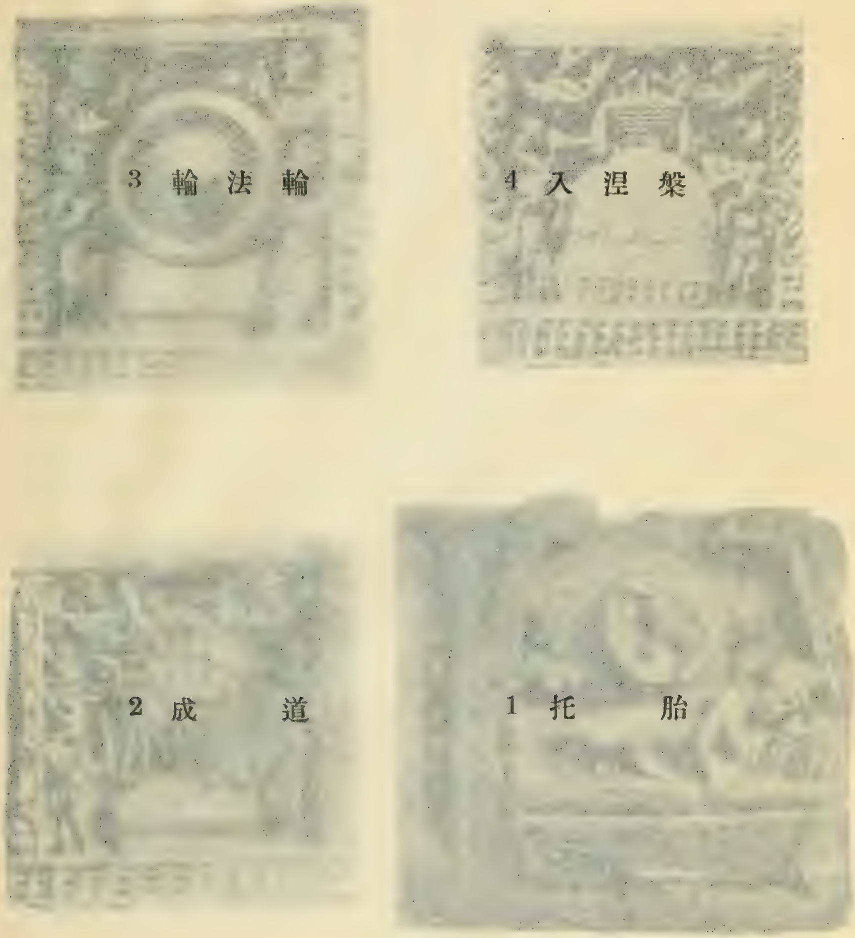
「ガンダーラ希臘佛教美術」より




ベナレスにて
轉法輪
クシナーラにて
入滅
忉利天にて母
后に說法の後
サンカッサに
下降
舍衛城にて
神變を現ず
吠舍離附近の
林にて猿の供
養を受く
王舍城にて
狂象護寶の
馴致
ルムビニにて
降誕
佛陀伽耶にて
降魔成道

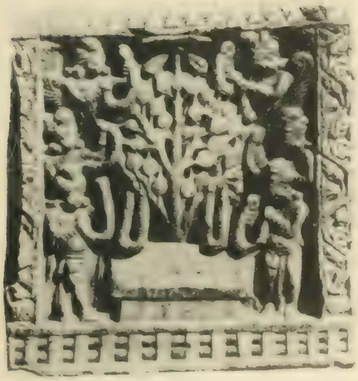
サールナート發掘





2,3,4 サーンチー　1はガンダーラ
塔の西門






四百五十五頁より四百九十三頁迄の奇數頁は四百五十七頁より四百九十五頁へ順に繰下げ。卽ち四百五十五頁を空頁とし、之を四百五十七頁に下げ四百五十六頁の漢文に當らしむ。以下四百九十五頁までこれに準ず

拙なきこの著を

恩師 Ñāniss ara 僧正

に捧ぐ

自　　序

本書は眞宗大谷大學豫科の敎科書として編纂されたもので本科に入つて佛敎々學の根本的研究をなす基礎學として先づ『阿含經典』そのものに親しむ事を目的としたものである。この目的に副ふために私は先づ本書を佛法僧の三編に分ち第一編に於ては佛傳に關する史料の阿含經及び律典中に散說せられたるものを集め第二編に於ては釋尊の說法の代表的と思はれるものを集錄し第三編に於ては戒律の撮要として波羅提木叉を出し三編相俟つて佛敎の敎主釋尊の人格とその敎とこの人格者の下にその敎を受けて佛弟子達が敎團の規約といふ具體的生活の中に味識體達し行く姿を示さうとした。第一編第二編の下には簡單に編者の見た佛陀と佛陀の說き給ふた敎の梗概を付け加へ後世の大乘敎學の發達に至る徑路を微か乍ら示したつもりである。第三編僧伽の下ではこれまで比丘の戒律生活に關する記述が公刊されてゐないから前二編と比較しては多少委しく通俗的に書いて見た。これに依つて敎主と敎法と敎團の生活とが不完全ながら一卷の中に顯はされてゐるつもりである。

既に本書の目的が讀者が『阿含經典』そのものに親しまれるやうにと云ふのであるから編者の苦心は阿含經の抜粹方法に費やされ又漢譯の阿含經典の讀書力を養ふために漢譯の『阿含經』を主にしてその不明の點を明かにする爲

に巴利原典の譯を對照した。この對照に原典の英譯のあるものは成るべく英譯を出すやうにしたが、これは西洋に紹介せられた佛敎の一端を示さん爲である。

この對照に就いて、第一編の下には、漢譯と英譯とがぴつたりと對照され得なかつたことは甚だ遺憾であるが、讀者の寛恕を請うて、その對譯の發見されなんだ場合はその前後の二三頁を探されんことを願ふ。對照する關係上經文中の反復してある點は、抄錄抄譯したが、文意に至つては斷じて傷つけないつもりである、校正してゐながら、編纂の上にも、各編の下に附けた編者の意見の中にも缺點や言ひ足らなんだ點を見出して、佛祖に對し、又讀者に對し、慚愧に堪えない次第であるが、然し今迄小乘經典として餘りに見返られなかつた最も古い、さうして最も尊い、釋尊の言行錄が抜粋ではあるが、今迄よりは廣く多くの人々に讀まれるやうになつたといふ事は編者の大きな喜びである。編者は讀者がこの書より進んで漢譯四阿含、巴利原典五阿含に行いて、もつと突き込んで生きた大聖釋尊の奕々たる光に接せられんことを念ずるものである。本書の成るに及んで本書の出版を勸め又御助力下さつた藤岡了淳兄、戒律の事について少なからぬ助言を頂いた西本龍山兄及び、本書の編纂に力を借された譽田慶瑛兄に厚く御禮を申し、又丁子屋書店主人西村君が、本書の出版を犧牲的に引き受けて茲に公刊を見るに至つたについて深く謝意を表したい。

大正十年四月　　　　赤沼智善

目　　次

第三編　僧　　伽

以　上

D. = Dīgha Nikāya 長阿含

M. = Majjhima Nikāya 中阿含

S. = Samyutta Nikāya 雜阿含

A. = Anguttara Nikāya 增一阿含

Dhp. A. = Dhammapada A tthakatha 法句經註

Thera G. = Thera Gātha 上座偈

Therī G. = Therī Gātha 上座尼偈

Sn. = Sutta-nipāta 諸經要集

阿含の佛教

序　説

印度アーリヤ (Ārya) 民族は、中央亞細亞の原住地を出でゝ、パンヂャーブ (Panjāb) に移り、梨俱吠陀 (Ṛg Veda) に殘されたる彼の多神教的天然崇拜の宗教を有せしが、漸次時代の推移と共に、所謂吠陀時代の末期には、その天然崇拜の宗教も、自然に高められ且つ深められて、その崇拜の對象なりし天然を超越する普遍的實在を求むるの傾向顯はれ、雜駁なる多神を統一する一神格に對する憧憬と思索起りぬ。この傾向はやがて梵書 (Brāhmaṇa) 時代となりて、高潮せられたる宇宙の本體原理梵 (Brāhman) の思想となり、優婆尼沙土 (Upaniṣad) 時代となりて、更にこの思索の傾向を個人の上に及ぼし、個人の中心人格なる我 (Ātman) を認め、この宇宙の本體と個人の中心人格との關係を考察して、我は梵也 (Aham Brāhma asmi Vṛhad āranyakopaniṣad, 1, 4, 10) てふ梵我一如 (Brahma ātma aikyam) の思想を生み、後來この境地を身を以て體現する聖者の出現を待ちぬ。

今少しく委しくこの思想の徑路を辿り見ん。吠陀時代にありては人智猶進まず、多少雄偉なるもの又は怪奇なるものを見ては、皆靈ありとなし、日月星晨の天體、電雷雲風の空中の現象、山川樹木水火の地物悉く之を神として、崇拜し、此に對して攘災招福を祈れり。この物活論 (animism) は何れの國にありても、その宗教思想の初期に存するものなるが、印度に於ては、佛教興起時代にありても猶存續し、當時の民間信仰の一部を形作れり。

然らばこの多神教が如何にして一神教的色彩を帶ぶるに至りしかと云ふに、二種の理由あり。一には民衆の信仰上の要求に依る。卽ち宗教の信仰がその性質として雜多なる神々の中より特に一神を抽き出し、此に向つて熱心なる祈禱を捧ぐるものなるが故に、一神の

神格は自然に擴大せられて、他諸神の神格を包容するに至るが故也、二には民衆思想の統率者婆羅門 (Brāhmaṇa) 中の哲學的思索の偏向ある人々が多神教の多元的なるに滿足せずして更にその中心本體を求めたるが故なり。此の二個の理由により、吠陀時代の末期に至つて、漸次に普遍の實在に對する思想顯れ來れり。然れども此の思想は、只此の時代に髣髴として姿を示せりと云ふまでにて、未だ一般民衆の心靈を支配する權威なかりしことは云ふまでもなし 民衆は依然として從來の成立宗教の信者なり。又彼等の指導者たる婆羅門にありても其の大多數は思想信仰の動搖に依つて起る自己の地位の不利を喜ぶ者に非ず。されば自然舊慣を墨守し、その宗教を固定化せんと欲す。此れ蓋し婆羅門が嘗て自然現象等の偉大に感じその宗教的情熱より讃詠せし利倶吠陀(Ṛg Veda)の歌頌が祈禱祭祀の時の諷詠の便利の爲めに別に沙摩吠陀(Sāma Veda)として編纂され、更に祭文の聚集として耶柔吠陀(Yajur Veda)として編纂されし所以にして、婆羅門はこの三吠陀を以つて神々の祭祀を行はしめ民衆の具體的宗教生活となせり。而してこの宗教生活に於て神に仕へ、三吠陀を誦し祭祀を司ざるは獨り婆羅門の善くする所なれば權力は次第に婆羅門に集り Panjāb より恆伽の流に沿ふて、東方倶流 (Kuru) の地に移住せし時代には益々權威高く婆羅門族は遂に社會の最上位を占むるに至れり。

此の結果として所謂梵書時代に至りては、婆羅門は潑溂たる生氣を失ひて益々保守的に傾き、その努力は吠陀の文句の意義を說き祭祀の法式を說き吠陀の教權を確立し、祭祀の萬能を叫び、教理を煩瑣にし、儀式を秘密にし、自己の地位を堅めて、婆羅門至上主義を建設し、嘗て民衆の宗教たりしものを全然その掌中に獨占するに至れり。これ長き印度の哲學宗教史に於て最も不振の甚しき時代なりとす。只此の時代の所產として後代に貢獻せしは吠陀末期の普遍實在を求むる傾向を受けて發生せし梵(Brāhman) の思想なりとす。梵は元利倶吠陀(Ṛg Veda)の祈禱主(Brahmanaspati or Bṛhaspati)より起れる思想にて人熱心に祈れば、神を動し得るといふ事より祈禱に

偉大を認め祈禱主を普遍實在の大原理とせしものなるが、梵書時代に至り祈禱は神よりも偉大にして神をも動かし得るといふ信仰生じたるより、遂に祈禱を普遍の原理となし、神話時代の Brāhmanaspati の Pati (主)を取り去り梵(Brāhman)と呼び祈禱――聖智――原理の意味の徑路を辿りて、宇宙に普遍する實在原理となせるなり。

斯くの如く、梵書時代に於ては婆羅門は吠陀の天啓、祭祀の萬能、自族の至上を主張し、煩瑣なる訓詁と祕密の儀式とにその力を盡すのみにて、後世に貢獻せし點より云はゞ只梵の思想のみなりき。茲に於て人心弛緩して又生々の氣を見ず。民心倦怠の極茲に一轉して、

第一に創作的哲學を生む傾向を生じ、

第二に戲論を離れたる眞面目なる宗敎的解脫を求むるの風を生じ

第三には懷疑的虛無主義の流行、

を見るに至りぬ。

1. 優婆尼沙土 (Upaniṣad. 奥義書) はその哲學的の方面に於て梵書の沈滯を破らんとせしものなるが、その運動が主として婆羅門に依らずして刹帝利種の人々に依つて創始せられたるは注意すべきことゝす。耆那(Jaina)敎祖 Vardhamāna 及び釋尊も同じく刹帝利種に出で、印度に於ける二大宗敎的運動を開始せられたるも亦婆羅門の宗敎獨占とそれに依て起れる沈滯を破らんとする自由解放を求むる運動なりしなり。

優波尼沙土はその正統派たる地位よりして Veda 敎權主義を固持せしも、その哲學的思索の高潮し來るや往々にして吠陀の神聖を犯し自由の精神を發揮し婆羅門の尊貴に對しても、「この敎義は汝以前嘗て婆羅門族に知られざりき。これに依つて全世界の統治權は遂に刹帝利族にありき」と叫ぶに至れり。而して一般に祭祀宗敎の倣す無きを見、茲に沈潛して心靈の眞に憩ふべき所を尋ね、吠陀時代の原人(Puruṣa)の思想を承けて吾人生活體の內部に靈妙なる我 (Ātman) を發見し梵書が說く所の梵と一なりとし、煩惱と迷妄に掩はれたる眞性自我を開顯する所に萬人の安住所ありとせり。この眞性自我を見出して開顯する智を我智 (Ātma-vidya) 梵智 (Brāhma-vidya) と云

ひ、この境を叙事詩の薄伽梵歌(Bhagavatgīta)には梵涅槃(Brāhmanirvāna)と云ふ。而して消極的言辭を以て顯はせば解脫(Vimokṣa)なり。

解脫とは迷妄の差別界より離脫するの義にして Upaniṣad 主義に依れば、不自然の差別に執するが故に茲に生死あり輪廻あり苦惱あり、若し内に向ひて尊嚴なる自我、一切宇宙を包括する自我、不可得(agrhya)にして不朽(asīrya)、無着(asanga) 無縛 (asīta) 惱まさるゝことなく (na vyathate) 滅せらるゝことなき (na riṣyata) 自我を發見し、宇宙の本體原理たる梵と一なるを知れば、茲に死なく生なくして常住の天地に入るを得るなり。法性常住の平地に生死の波瀾を生せしむるものは無明の風なり。心中に愛欲(Kāma)一度生じて、諸法實相の鏡に苦惱の塵垢積る。今愛着を斷じ無明を破し、梵我一如 (Brāhma ātma aikyam) の眞智を開顯すれば差別はその儘にして平等、現象の中に實在現前して生死その儘に不滅なる梵涅槃を證するなり。是れ優婆尼沙土哲學の宗教的意義なり。然しながら優婆尼沙土には本體を眞とし現象を迷妄とする考方なかりしと云ふにはあらず。後の吠檀陀 (Vedānta) の一派が現象界を否定して差別迷妄論の無宇宙觀を生ずるに至りし種子は優婆尼沙土にありし也。これ其の哲學的究明の結果と見るべきなり、然し優婆尼沙土は單に冷かなる智慧を弄ばんとするものに非ず、其目的は自己靈性の證悟解脫の宗敎にあり。而して實驗的宗敎情味の上より生滅に處して而も愛着を離れ流轉の諸法の上に生々の實現を見、生死卽涅槃、現實の肉身を以つて常樂の涅槃に住する本體現象相卽論こそ、Upaniṣad の聖者達が理想とせし所なりとす、この可能はやがて釋尊の證悟に依て證明せられたるなり。

2. 梵書の沈滯より生じたる三の風潮の中、第二の眞面目に三界の苦惱より解脫せんとする修行者を生せし風に就いていへば、紀元前六世紀の頃よりして出家となりて終世を離欲解脫の修行に委ぬる人々を生せり。この内にも二種あり、一は必しも苦行を修せず、施物に衣食し、或は單獨に又は團體にて四方に遊行し道を聞き、又他に道を傳へ自由なる求道者なると共に熱心なる社會の敎育者とな

り、正統派の婆羅門が占星、夢兆の祭式の相談相手たりしが如く、道德宗敎哲學のことに就いて〻民衆の相談相手となり〻社會の尊信する所となりぬ。Rhys Davids 氏の云ふが如く歐洲文藝復興期の前に中部歐洲を遊歷せし學者が來るべき變動の前兆であり又新時代を建設するに力ありしが如く、この印度の遊行者の遍歷も當時の社會狀態を語るものにして又佛敎興起の先驅をなせり。他の一は苦行者にして、Veda 以來讃稱せられし苦行(Tapas)を極端に修し、犬戒牛戒蝙蝠戒等の甚しき苦行に依つて快樂を退け肉體を蹂躪し、眞我を肉體の繫縛より放たんとせり。耆那敎(Jainism) の Vardhamāna は後者の苦行者に屬し、佛陀は前者の遊行者(Paribhāja) に屬す。この遊行者の數は頗る多かりしもの丶如く、佛敎經典には數多の遊行者が各々數百の弟子を率ひて林野の生活をなせるを記せり。(M. N. 77, 78, 79, D. 9)。釋尊が六年苦行し給ひし優留毘羅 (Uruvelā) 林の如きも亦是れ等遊行者の集り住する所なりしなり。

3. 第三に顯はれたるは懷疑的虛無主義にして其出現の年代は今明白に定むる由なきも、大體 Upaniṣad 時代と見得べく、佛陀より以前なるは、此 Lokayatā (順世派)の語が巴利長阿含經 (Dīgha Nikāya) 等に顯はる丶に依つて知るべし。この派は無神論 (Williams' Dic.) を主張する唯物論 (Petersburg Dic.) にして恐く當時の科學思想を代表するものにして詭辨を事とし現世の享樂を主義とす。佛敎經典に記載せらる丶六師外道中の阿耆多翅舍欽婆羅 (Ajitakesa kambara) は「人は四大より成り死すれば四大に歸るのみ」と云ひ、(D. 1) 末伽梨瞿舍利(Makkhaligosala) は運命論者にして人の道德的努力を否定し(D. 1) 富蘭耶迦葉(Pūraṇa kassapa) は一切無害無功德と叫ぶが如き皆懷疑派の系統に屬するものなり。

以上の三風潮は梵書時代の沈滯を破りて、佛敎興起時代にまで流れし三大潮流也。されど猶この外に看過すべからざるものあり、即ち當時の民間信仰なりとす、此の民間信仰は Veda の物活論を繼承すると共に他種族の影響をも受け混沌を極む。一方には梵天、帝釋、吉祥天、四王天崇拜の如き、有神論的信仰あり。この中帝釋は吠陀

の因陀羅（Indra）神の變化にして、梵天は普遍の原理たりし梵を神格化して梵天(Brahmān）となしたるものなり。梵天上生の思想は佛陀當時最も盛なりし思想也。Veda の Agni の信仰も變化し來り、拜火は梵天に生れんとするものゝ修行となりぬ、その他吠陀の下級神、他種族の神々も民間に信仰せられ、樹に森に山に川に皆神靈あり、龍神(Nāga)夜叉(Yaksa)羅刹(Rakṣa)畢舎荼(Pisāca)等の怪靈ありて人々の献供を要求せり。又方角より來る禍惡を除かんと欲して、常に六方を禮するものあり。甚しきは只東方に驀進すれば死する所に於て生天すと信ずるものあり。沐浴して罪業の消滅を信ずるものあり。阿闥婆吠陀(Atharva Veda)繼承の呪術は盛に行はれ、奇怪なる呪法、卜徵術觀掌術夢判斷等一般に行はれたり。

以上は佛教興起以前の宗教思索の徑路及び狀態なり。吾人はこれよりして、佛陀出現の時代的要求たる四理由を數ふるを得べし。

一、吠陀の教權衰へて婆羅門の祭祀主義が人心を滿足せしめざること。

二、優婆尼沙土の心靈的解脫の宗教も只理論のみにて、後來是を實證して衆人に範を垂るべき人の實現を待ちしこと。

三、印度民族が紀元前六七世紀には南方 Dekkan を越えて錫蘭に及び其民族的膨脹と文化の開展に依り、他種族との接觸及び之が包容多大となり、從て一般に信仰の動搖を來し民間の信仰繁多となり、人心此が統一を要求せしこと。

四、嘗て四姓の中前三姓は宗教に關與することを得しが第四の首陀羅は宗教の圏外に排斥せられしも、その數を夥しく增加するに及び一種の勢力となり自然にその種姓の宗教を要求せしこと。又前三姓にありて祭祀はその司祭者として婆羅門を要し費用多端にして貧困なる毘舍等の善く支辨する所に非ず、從つてそれらも自己の宗教を要求せしこと。

佛陀は如上の雰圍氣の中に如上の要求に應じて世界の民衆に對し

て絶大の使命を帶びて誕生せり。

今進んで印度佛教史の第一期を講ずるに當り簡單に當時の政治方面に一瞥を與ふるも無要に非るべし。

Mahābharata に記載する kurū 地方の戰爭を若し紀元前十世紀若しくは九世紀の出來事とすれば、紀元前八七世紀頃には既にその內亂終りて Ārya 民族は東方遠く Videha, Magadha 地方にまで移住し、その部族は數多に分れて各々貴族的共和政治を行ひしものならん。やがて紀元前七六世紀となれば自然の中に貴族的共和政體に一種の革命起りて漸次專制的なる主權者を戴く王國となり行き、佛陀出現當時には四大王國と十數の小王國と五六の殘存せる共和國あるに至れり。而してこの十數の小王國と殘存せる共和國とはその隣强の大王國に漸次に併呑せらるゝ運命を有するものにして、大王國も亦次第に接近し來つて爭亂興り、遂に全印度を統一する大王國を現出せんとする趨勢なりしなり、かの轉輪聖王 (Cakkavatti) の思想はこの趨勢を神話的に表現せしものなり。

佛敎經典 (A. I. P 213. 同本中阿 202) には佛陀當時の印度を十六大國と分類せるが、この分類は佛陀時代よりも少くとも半世紀若しくは一世紀以前の現狀なりしならんと思はる。

	國　名(種族名)	都　市	王
1.	Anga	Campā	
2.	Magadha	Rājagaha	Bimbisāra Ajātasattu
3.	Kāsi	Bārāṇasi	
4.	Kosara	Sāvatthī, Ayodhya, Sākēta	Pasenadī Vidūdabha
5.	Vajji { Videha Licchavi	Mithilā Vesāli	
6.	Mallā { Mallā Mallā	Pāvā Kusināra	
7.	Ceti (Pācinavamsadaya)		
8.	Vamsā (or Vatsā)	Kosambi	Udena
9.	Kurū	(Kammāsa amma はその一邑にて佛	

陀嘗て止住し給ふ)

10. Pancālā……………………(Kampilla, kanauj)

11. Macchā (Matsyā)

12. Sūrasenā…………………Madhurā…………………Avantiputta

13. Assakā……………………Potali

14. Avanti……………………Ujjeni……………………Pajjotā

15. Gandharā…………………Takkasilā…………………Pukkusati

16. Kambojā…………………Dvānaka

この中四箇の大王國あり、Kosalā, Magadhā, Avanti, Vamsā にして、Kāsi 王國は既に Kosarā 王に合併せられ、Pancāla も定めし Kosala の配下なりしなるべし。Angā 國は Magadhā の領たり。Sūrasena 及 Assakā は Avanti の配下にあり、Ceti は Vamsā の領なりしならん。Kurū. Macchā の國狀は明かならざれども、當時重要なる地位を占めず、Gandhārā は婆羅門教學の中心地なれども Kambojā と共に當時の政治の中心舞臺を離るゝこと遠し。Vajji と Mallā とは獨立の共和國にして先に示せし如く、Vjji は Mithilā を首府とする所の Videhā 人と Vesāli を首都とする Licchvi 人とあり。Mallā は Pāvā を首都とするものと Kusināra を首都とするものとの二種族に分る。

されば當時の政治舞臺は上出の四大王國の勢力の競爭にして、その間に介在する群小王國及び共和國は漸次に之等の大王國に合併せられしなり。半獨立を維持せし Sākya 族は釋尊入滅の二年前その隣强にして且つ親屬たりし喬薩羅(Kosalā)王毘瑠璃 (Vidūdabha) に殲滅せられ、跋耆(Vajji)族も亦釋尊滅後遠からずして、その親屬なる摩揭陀(Magadha)の阿闍世王に滅ぼされたり。而して此の四大王國の關係如何と云ふに、摩揭陀の頻婆娑羅 (Bimbisāra) の一妃喬薩羅皇后(osala-devi)は、喬薩羅の波斯匿 (Pāsenadī) の妹たり。Vamsā の Udena 王の妃 Vāsula-dattā は Avanti 王 Pajjota の娘にして斯くの如く結婚政策に依つてその間の平和を得來りしが、時々其の間にも戰鬪行はれ、喬薩羅は摩揭陀と戰ひ、Avanti は Vamsā と干戈を交へぬ。摩揭陀國王 Ajātasattu は Avanti の王 Pajjotā の勢力を恐れて

一時その邊境を堅めしめしことあり。之れ等の戰爭の結果は今日之を知るに由なきも、漸次にMagadha國王勢力を得來つて、阿闍世王の晩年には大體に於て、印度統一の端緒を開きたるが如く、紀元前四世紀に至りて遂に摩掲陀王統は全印度の統治權を得、阿育(Asoka)王は傳來し來れる轉輪聖王の理想を實現せし人となれり。この外にSumsumāra の Bhagga 人、Allakappa の Buli 人、Kesa putta の Kālāma 人、Rāmagama の Koliya 人、Anupiya の Moriya 人等あり、經典中少分づゝ記載あるも皆勢力なき小部屬にして云ふに足らず。

又交通は遠く海邊にまで及んで Orissa, Kalinga 地方及びSuppīraka, Bhārukaccha 地方より商賈の往來ありたれども、記事少くしてその國狀を知るに由なし。

之を要するに、佛陀出現當時はアーリア民族の恆伽下流の殖民も既に歲月を經、他方 Dekkan を越えて遠く Ceylon に移住したる者あり、その文化は遠く南印度に及びしも、文化的中心は恆河の沿岸にして夫等の諸國の政體も漸次に貴族的合議政體より專制的王政に移り他日全印度を統一すべき一大王國の出現を豫想せしむるものありしなり。

本論 第一編 佛陀

第一章 太子の出家

釋尊成道後その出家以前を追懷して宣はく。

我は嘗て極めて優柔なる身なりき、泉池美しき父の家に迦尸(Kāsi)の衣をのみ撰びて纏ひ、冷熱等を避くるために白き傘蓋は常に我が頭上にかざされ、住むに三時殿あり。雨時の四ヶ月は舞姬達に圍繞せられて雨時殿を下らざりき。されど我老を見て老の來るべきを知りて青春の誇を捨て、病者を見てやがて病むべきを知て健康の誇を捨て、死者を見て死の襲ふべきを知り生存の誇を捨てぬ。と

(A III. 38 Sukhumāla. 同本、中、117 柔輭經(昃六・三九))

小なりと雖も印度の一侯國の儲君と生れたる悉達多 (Siddhartha)は、幼より何となく沈鬱の少年なりしが、その青春の時期に及ぶや歡樂境裡にありて、人生の轉變に深く心を惱まし、年二十九、一子羅睺羅 (Rāhura) の誕生を聞くに及び遂に意を決して棄恩入無爲の沙門となりぬ。耆那敎祖 Vardhamāna の出家もこの前後なるべく、佛弟子舍利弗 Sāriputta, 目連 Moggallana, 大迦葉 Mahākassapa の出家も程遠からぬ時なり。殊に Benaresの富豪の子耶舍Yasa, 及び Kurū の富豪の子賴吒惒羅 (Raṭṭhapāla) 等の出家が皆時を續いて起り、その動機がその享受し得る歡樂を厭ふてのことなるを見れば當時一般に有識の青年間に人生に對する深き懷疑と煩悶ありしを推察し得るなり。蓋し既成宗敎がその力を失ひ民心が其適歸する所を知らざる時代にありては當然の事也。然れども Siddhartha の出家は年二十九の時なれば、漫然と風潮に動かされたるが如き輕薄なるものに非ざるは云ふまでもなし。人生生活にも既に深き經驗を加へ、その心靈的實驗の深まれば深まる程淺薄なる樂欲の苦痛に堪えず。假令「何樂なりとも欲情と不善に汚されたるものはいさぎよしとせず」(M. 75 Māgandiya s, 同本、中 153 鬚閑提經昃六、九〇)。かく熟考の結果止む

に止まれずして斷行したる也。

太子十九歳納妃後その出家まで十年間如何なる生活をなし給ひしや之を知るに由なし。元より經典の記載するが如く、父淨飯王の庇護の下に舞姬と音樂との間に優遊し給ひしのみに非ざるべし。侯國の儲君としてその侯國の現在及び將來にも注意を怠らざりしは想像し得る所なり。されど如何に英邁なるにせよ、大勢は一人の能く左右し得る所に非ず、當時の釋種の國（東西十六里、南北二十里面積三百二十方里）は序論にも云ひしが如く、その隣境憍薩羅の配下にありて、辛うじて獨立の體面を維持すと雖も、何時その兇惡の手の下らんやも計り難ければ迦維羅城主の位置は有爲の靑年の志望を滿足せしむるものに非ず。之れ亦悉達多の精神が自然に內面的に向ひたる一因たらずとせず。太子出家して王舍城に來り給ひし時、頻婆娑羅王その出家を停めんとて摩揭陀王國を献せんと申し出でしこと經典の註释(Dhp. A I.p. 85, Sn A. p. 383 ff ctc)に記せるが如き、又成道後に至つて、時に如何にせば害破害、殺破殺なしに世を統治し得るやと靜慮し給ひしが如き(S. IV. 2. 10, Dhp. A. IV.p. 31 .)幾分この政治上の問題に觸るゝを見る也。何れにもせよ太子は其の一子羅睺羅 (Rāhula) の誕生を聞きて愛着の强さ子に如くものはなし、未だその成長せざる中に之を斷たんと、その夜大放棄 (Mahā Nikkhanta) を決行し給へり。絕大の使命を帶べる人の出家をば天人は之を歡呼し、惡魔は之を悲しみて既にその出家の途上に於て是を拒まんとせり。太子は Rāmagāma を過ぎて末利耶族 (Moriya) の阿奴摩川 (Anomā) の河畔にて鬚髮を剃除し、遠く王舍城 (Rājagaha) に向ひ給へり。この道は最大二强國の首都舍衞城と王舍城を連絡する二大道の一也。太子はこの途中 Anomā 河附近にて苦行者跋伽婆 (Bhārgava P. Bhaggava) の幽棲を訪ひ、その苦行の實際を見て解脫の道に非ずとなし、去つて吠舍離 (Vesāli) を過ぎ王舍城に至り阿羅羅迦藍 (Alālakālāma) 鬱陀迦羅摩子 (Uddaka Rāmaputta) の二仙を尋ね給へり。されどその說くところは禪定の恍惚境に入ると云ふ神秘主義なれば共に太子を滿足せしむる能はず。太子は再び遊行の旅に

上り給ひぬ、斯くの如く太子はその求道の途を王舍城にとり給ひしは蓋し敎權的婆羅門敎學の中心は北方 Takkasila にあり、王舍城は新興の王國として、印度に於ける權力の中心所在地にして同時に自由派敎學の中心地たればなり。

第二章　成道の自覺

太子は王舍城に入りて頻婆娑羅王に會しその王國の提供を斥けて、今は自ら安穩に達する無上殊勝の道を求めて、南方伽耶(Gayā)に向ひ給へり。かくて鬱留毘羅(Uruvelā)といふ將軍附屬の村に到着し、その森の繁みの中に「白砂の汀ある美しき小川 Neranjana の畔に心地好き一地點を見出して此の處こそ我が精進の場所なれとその座を定め給ひぬ。

太子は先づその修道の第一歩として嘗て跋伽婆等の苦行者の許にて見聞せし苦行を實修し給ひぬ。この苦行の相は載せて M. 12 Mahāsīhanada S. 大獅々吼經及 M. 36 Mahāsaccaka S. 大薩茶迦經にあり。實にそれは

日に燒かれ　　　寒さに凍え
恐れの森に　　　只一人
衣なく　　　　　火もなくて
目的に奮ひ立ちて　牟尼は坐せり

の生活なりき、されどこの六年の苦行は太子の胸中に何等の平和を齎らさず、太子は遂にその効なきを知つて嘗て父王の許にありし時、經驗せし閻浮樹下の靜慮(jhāna)を思ひ出し、改めてこの新しき道を辿り給ひぬ、六年の苦行は全く畫餅に歸し、その友なりし五人の比丘は太子を墮落者として放棄し去る。太子は今や絕體絕命の境にあり。危機は一日の中に頂點に達せり。明暗の鬪爭は朝より夕に達せり。金剛座上の太子は實に血塗れの決死者也。されど其の夕の幕の下ると共に鬪爭茲に果てゝ勝利は遂に來りぬ。平安は水の如くその心中に流れて一切の事象は物の鏡に映ずるが如く明にその海印三昧に映れり。而して沙門は佛陀となりぬ。「生は盡きぬ。梵行は成就せり。成すべき事は成し了れり。この生の外に他の生なし」との自覺者となりぬ。この自覺者の境地は至妙にして云ひ顯はし難けれども、暫く煩惱の滅盡せる側より顯はして涅槃と云ひ、外界の繫縛より離脫せる方面よりして解脫と云ひ、印度本來の主智的傾向を承け

之を主觀的に顯はして覺 (Bodhi) と云ふ。而してこの境地は釋尊以後無數の人々の理想境となり、救濟の源泉となりしと共に佛教教學の研究の主題目となれり。

已に成すべき事をなし終れる人の成すべき事は化他の大行なり。佛陀は成道後七七日涅槃の樂を味ひて後、この化他の說法に就て考慮し給ひしがこの所證の法の餘りに幽妙にして人々の了解し難きをあやぶみ少しく躊躇し、梵天の勸請に依つて愈々大法宣傳の覺悟を定め給ひぬ。宣はく

耳ある人の聞いて信を開く樣
この不死の門は彼等に開かれたり。と

茲に於て佛陀は當時印度の宗教的聖地なる Bārāṇāsí に向ひ、その途中 Ājīvaka Upaka に遇ひ、「卿の容姿靜寂なり、顏色淸淨にして光あり、卿の師は誰ぞや」と聞かれ、無師にして獨り悟り、正覺を得、涅槃に達せるを宣言し、世界の迷闇を破らん爲めに、不死の太鼓 (Amatā-Dundubhi) を叩かん爲に Benares に行く途中なるを告げ更に道を進めて Isipatana なる鹿野苑 (Migadaya) に於て、甞て友なりし五比丘に初めてその所證の法を宣傳し給ひぬ、その說法は今傳へて巴梨律大會都 (Vinaya, Mahāvagga I. 6. 17.) 等に存する轉法輪經 (Dhammacakkapavattana S.) これなり。五比丘は先づ佛陀の威嚴に打たれて、更にその簡明なる中道の敎を聞きて茲に續いて開悟し師と同じき阿羅漢果に達しぬ。茲に於て天下六阿羅漢あり。更に分つて曰へば、佛あり法あり五人の僧伽あり。神聖なる三寶茲に備はりぬ。

佛陀の自內證の如何なるものなるかを闡明せんは容易の事に非ず。吾人は之を第二章法の下に讓りて、今次に佛陀の語の如何なる意義にして他に如何なる影響を與へたるかを見んとす。

第三章　佛陀の意義

これより佛陀の敎法は非常の勢を以て擴がり數年を出でざるに印度宗敎界の一大勢力となりぬ。耶舍(Yasa)及その友人五十四人の歸佛を初めとして成道第二年には既に當時摩揭陀に於て盛名ありし三迦葉兄弟のその徒千人を伴なうて歸投するあり、舍利弗、目連もその二百五十人の大衆を卒へて。佛敎の傘下に集まり、王舍城に於て、「沙門喬答摩は子をなくするものなり」との非難起れる程となりぬ、この新宗敎は如何にしてかく速に擴まるに至りしか、思ふにこれが外因に二あり。

一は當時の思想の自由なり。

二は當時の良好なる經濟狀態なり。

釋尊當時の思想界の大勢は既に序論に於て述べし如くなるが、その混亂せる狀態にありて彼等は遺憾なく思想及びその發表の自由を有せり。古代婆羅門敎は宗門的組織を有せざるが故に敎權否定の新思想に對して、之を壓迫する機關を有せず、又その婆羅門の多くも嘗て自族の有せし宗敎に嫌たらずして、新しき命を求むる眞摯なる求道者なりしを以つて毫も當時の自由思想に對して抑壓せんとしたる形勢なし。加ふるに當時の王者、富豪は競ふて自由思想家を擁護し、彼等の休息し宿泊し談論する集會所を處々に建設し、就いて其の敎ふるところを聞くを樂みたる程なれば、獨り釋尊のみならず總て當時の遊行者は、各地を遍歷して、自由に大膽にその所信を吐露する事を得たるなり。されば一般の民衆にありても．その公然許されたる信敎の自由に依りてこの絕世の大導師に恰も渴きたる者の水に就くが如くに歸投せる也。又當時の經濟狀態の順調なりし事も佛敎の傳播に與つて力あり。その人民の大多數は土地を有する自作農民にして、租稅としては僅に所得の十分の一を拂ふに過ぎず、從つて數多き遊行者に、その衣食住を給するが如き優にその能力中にありたるなり。されば何人も眞摯なる求道者は家を捨てゝ比丘となり、專心にその道を辿ることを得たるなり。

扨て内因に至りてはその數多かるべしと雖も、その最初にして最後なるものは、その道を體現せし偉大にして崇高なる人格にあり。その所說の中道は理論的結論に非ずして、經驗上の總和也。その四聖諦も論理に依つて考察せられしに非ずして實踐上の直觀なり。その八聖道も只空論に依つて編み出されたる德目に非ずして、その完全なる人格の分析也。されば佛敎の感化はその魏々たる佛陀の光顏に接して、透徹せる法音を聞くに始終す。而してその「我れに來れ」(Ehi)の語は、基督の「我れに從へ」(follow me)の如く、その全人格の發動として接觸し來る程の人を悉く攝取せずんば置かざる也。されば多くの佛弟子の歸佛の次第を見るに、先づ第一に佛陀の名聲を聞きて行いて其の人を見んとするに初り、第二にその色身の端正に打たれ、第三に懇切なる說法を聞くに終るを常とす。今少しく經典に就いてこの實際の模樣を驗せん。

給孤獨長者(Anātha-piṇḍika 本名 Sudatta 須達)が要用ありて舍衞城より王舍城に至り友人の家に宿りて、その主人の「佛陀」と云ひしを聞きて、五種の喜を生じ夜中にも拘らず、佛陀を尋ねて歸佛せしは有名なる傳說なり。婆羅門世羅(Sela)はその師 Keniyaの「佛陀」と云ひしに驚きて、「師は佛陀と云ひしや」と三度反復して問ひ、遂に佛弟子となり、多くの苦行者は「佛陀」と曰ふ語を聞きて、Buddho, Buddho と天に向つて合掌し。Peshawar 附近の王者たりし Mahākap-pina は商人の來りて、中天竺の消息を傳へる中に、佛陀につひて云々するを聞き歡び極つて語る能はず、王位を捨て、遠く佛を尋ねて歸佛したる等その例頗る多し。聖典獨り布敎するのみに非ず、佛陀の語そのものが已に大布敎をなせしを知るべし。かくて佛陀の名聲は旭日の昇るが如き勢にて四方に輝き渡れり。曰く「沙門喬答摩は釋種にして、釋種より出家し、如來、應供、正等覺、明行足、善逝、世間解、無上師、調御丈夫、佛、世尊也、彼は天、魔、梵天、沙門、婆羅門その他の人々を含む一切の世界を、自ら知り自ら證りて敎化す。彼は初めも善く中も善く、終も善き文義具足の法を說き、完全淸淨の梵行を說く」と、この名聲は遠く南印度 Godhāvarī 河畔

にも及びたれば、聖者 Bāvarī はその子弟 Ajita, Tissa, Mogharāja 等をして、佛を尋ねしめ又上說の如く Peshawar の北にもその名聲轟きて摩訶劫賓那(Mahākappina)を歸佛せしめ、Supppāraka の富樓那(Puṇṇa)も世尊の弟子となり、後歸鄕して傳道したれば、今の Bombay 附近一帶の地にも傳はれり。かくて人々はこの佛陀の語とその名聲を聞きて目の當り佛を拜せんとて其止宿の精舍に集ひ來れり。

古來佛敎には、「色身の說法」なる語あり。偉大なる人格者はその言口を聞かざるに先づその對機を歸服せしむる威容を具す。吾人は佛陀に於いて殊にこの著しき實例を見るなり。異學 Upaka が佛陀の色身の美しさを讃えて、佛の誰なるやを問ひしことは上に說きしが、Upaka は後遂に佛弟子となれり。婆羅門 Vacchagotta は佛陀の顏色の淸淨なるを讃嘆して優婆塞(Upāsaka)となれり。S. I. 5 には一天使が佛陀及びその弟子の日に只一食するのみにて、顏色の淸淨悅豫なる理由を尋ねたるを記せり。波斯匿王亦嘗て同樣の問を世尊に致せり。比丘 Vakkali が常に佛陀の色身を愛樂して之を見ん事を願ひしは諸經に記するところなり。婆羅門 Māgandiya は釋尊を見てこれぞ我が娘に最も相應しき婿なりと佛陀に結婚を申し込みて敎化せられ。憍薩羅王の國師の子 (PurohitaPutta) Jenta は嘗てその種性と富と權勢と美貌とに憍りしが佛陀が比丘の僧伽に圍繞せられて太陽の如く輝き給ふを見て慢心を去りて佛弟子となり。(Thera. G. 423–8) M. 91. 同本中阿 161 梵摩經には鬱多羅 (Uttara) がその師 Brahmāyu に佛陀の威儀に就いてなせし委しき讃美的報告を記載せり。之を要するに佛の色身は內心の證悟外に顯はれて一種云ふ可からざる威嚴と溫容と魅力とを具へしものなるべし。されば佛弟子は或は獅子に喩へて佛陀を讃へ、或は大象に喩へて Himālaya の山に住む輝き勝れし大象なりと歌へり。

佛陀の音聲に就ては、余の知れる範圍にては、Digha N. の Soṇadanda S. に美しき音聲、美しき修辭、溫和なる語勢を有し給ふ等の記載あるのみなれども、旣に四無所畏具足の佛陀なれば如何なる說法の會座にありても、その所說に權威あり聞く者をして悅服せしめ

ずんば置かざりしことは想像するに餘あり。況んや佛陀は天成の大說法者にして、或は短刀直入に敵の短所を發き又は諄々として長廣舌を振ひ、その說話の構想巧みにして措辭の微妙なるは原典の示す所也。されば聞く人は「恰も倒れたるを起し蔽はれたるを顯はし、迷へる者に道を示し眼ある者が形色を見得る樣に暗の中に光を齎らすが如く、喬答摩は種々の法を說き給ふ」と讃嘆し「世尊の語は大娑羅樹の葉皮枝樹肉の落ちて樹心のみ殘るが如し」(M. 72)と悅服せり。

然らばこの「佛陀」とは何ぞや。その意義如何。乞ふ少しく之を說かん。抑も佛陀の語は他より釋尊を呼びし尊稱に非ずして、自ら自分を呼び給ひし自信の語なり。初轉法輪の會座に於て五比丘の友よと呼ぶと叱して、我れは如來、應供、正等覺者也と曰ひ、Doṇa 婆羅門の問に對して我れは天に非ず夜叉にも非ず健達婆(Gandarbha)にも非ず、又人間にも非ず佛陀也。其故は漏盡なるが故にと宣ひしが如き是也。この佛陀の語は Budh 知るといふ語根 (root) より出來し名詞にて覺者と譯すべきものなるが、又目覺めるの義もあり。余は佛陀の語の本義は、眠りたる者 (Supito) 醉ふたる者 (Matto) の反對覺めたる(或は醒めたる)もの所謂覺醒者也と信ず、されば世の人々の皆醉ひつぶれゐるに獨り覺め(醒め)たるものといふ稱呼は世間に一種の驚愕と感激と敬慕とを與へたるなり。この佛陀の語は覺者と云ふ普汎的意義よりして過古に逆上りて古來の聖者即ち過去七佛二十四佛を顯はす語となり、或は其の意義を擴大して三種の佛 1 佛陀 Buddha 2 獨覺 Pacceka Buddha 3 聲聞佛 Sāvaka Buddha に用ひられ自覺、覺他、覺行窮滿、の義ありとなさるゝに至りしと雖も、生身の佛 (Dharamaṇaka Buddha) の義に於ては只釋尊のみを指す也。

この佛陀は四無所畏を具し又十力あり十八不共の德あり。知るべきを知り、見るべきを見、有眼者、有智者、法有者、梵有者、言說者、示敎者、義利に導き、不死を與へ給ふ法の主、如來に在まし、義を知り法を知り、程度を知り、對機を知悉し給ふ五知具足者也。又一切の愛欲を淨化してその行業、自然に道德の法則に契ひ(戒)、

心意の修養完成して任運自爾に深き內觀に入り(定)、內觀の力に依つて一切事象の眞相を透觀する人(智)也。この人は如實に到達すべき處に到達せし人(Tathāgatatta)なる故如來(Tathagata)と呼ばれ、衆の供養に應ずる資格ある故應供(arahan)と呼ばれ、一切を明瞭に證悟せし人故正等覺(Sammāsambuddha)と呼ばれ、智慧(Vijja)と行爲(Carana)と完全に調和し具足せる人故明行足(Vijjacarana Sampanna)と呼ばれ、幸福の人故Sugata(漢譯善逝)と呼ばれ、世間の一切を知了し給ふ故世間解(Lokāvidu)と呼ばれ、人中に於いて上なき人故、無上士(anuttara)と呼ばれ、人を巧みに調順する御者なる故調御丈夫(Purisadammasāratthi)と呼ばれ、人天の師なるが故に天人師(Sattha devamanussānam)と呼ばれ、覺めたる人故佛陀(Buddha)と呼ばれ、世に敬重せらるべき人故世尊(Bhagavā)と稱せらる。これを如來の十號と曰ふ。又勝利者なるが故に勝者(Jina)と呼ばれ、十力(Dasabala)と呼ばれ、諸天の神々よりも勝れし人ゆゑ天中天(Devātideva)と呼ばるゝに至れり。猶この外に佛陀の異稱としてMahāvyutpatti(翻譯名義大集)には八十一名を擧げ、Abhidhānappadīpika(名燈)には三十二名を擧ぐ。

されば要するに佛陀の意義は世皆愛欲(kāma)の酒に醉ひ、無明の夢に眠るに、獨りその夢より覺め(醒め)たるもの、同情心よりして他の人々をも無明の眠りより覺ましむるが佛陀の語の義なり。佛成道後第一年その得たる六十人の弟子を傳道に遣はさんとして餞の語に宣はく、

「比丘等よ余は人天の繼縛より解脫せり、汝等も亦人天の繼縛より脫れたり。比丘等よ、行け、多くの人々の利益のため幸福のため世間に對する同情より人天の幸福利益のために行いて遊行せよ、二人にて一つの道を行くなかれ、比丘等よ初善中善後善の文義具成の法を說き完全清淨の梵行を宣傳せよ。世には心眼の塵垢に多く包まれぬ者もあり。然し若し法を說かざれば彼等は解脫を得ざるべし。彼等は此の敎を了解すべし」云々と。佛陀が濟度者として有し給ふかの鴦屈摩羅(Angulimāla)や提婆達多(Devadatta)護寶(Dhanapāla)を

見ること羅睺羅の如しと云ふ博大の同情と愛憐とが茲に中心となりて一大宗敎運動となり、佛陀の赴き給ふ處には河水の海に入るが如くに人々來り集まれり。

第四章　開顯と相承

無師獨悟は古來佛陀の特性の一也。師無くして證悟れりとは佛陀が其の初轉法輪の途上異學優波迦に對して宣言し給ひしところなり。されば巴利雜阿含 (S. XXII. 7) には佛陀を稱して、「如來應供等正覺者は成らざりし道の成就者、知られざりし道の啓示者、說かれざりし道の說示者、道を知り、道に明に、道に巧みなる人なり。されば比丘等よ、今弟子等はこの道を後より踏み、此の道に隨順して住す。これはこれ差別也」。と云へり。意は佛陀は道の啓示者にして弟子はその道の奉戴者なりと云ふことなり。この道とは我等の心靈を束縛して苦惱を感せしむる樂欲を淨化し、差別に執着して諸法平等の實相を覆ふ無明を破り現世に於て涅槃に入る道なり。卽ち八正道之れ也。一般人の如く樂欲の一邊に着せず苦行者の如く自苦の極端に走らず、二邊を離れたる中道也。哲理的智見の上より曰へば有邊無邊を離れたる中道なり。卽ち一切有爲法は因緣所生也と知つて諸法の生滅に驚かず、又因果を撥無する道德的自棄に陷らず、我見我執の妄情を拂ふ中道を踏みて涅槃を實證せしは佛陀也。佛陀は自らの經驗より一切衆生をして同じき中道を踏みて涅槃を實證せしめんとす。これその證悟より自然に發動する大慈悲心也。

世尊甞て Udumbarikā 園に獅々吼して宣はく、「世尊は自ら證りて證悟の爲めに法を說き、自ら調順して調順の爲めに道を說き、自ら寂靜に入りて寂靜のために法を說き、自ら彼岸に渡りて他をして彼岸に渡らしめんがために法を說き、自ら涅槃に入りて又涅槃に入れしめんがために法を說く」と而して續いて宣はく「來れ智者よ欺かざる者よ、正直なる者よ、我は敎示し。法を說く、敎示したるが如く隨順する者は、良家の子が家を捨てゝ沙門となれるその目的の無上の梵行の終極を現世に實現して住すべし」と。世尊はその大慈悲心より法を說き給ふや無上の權威を以て敎へ給ふ。初轉法輪の會座に於て「友」と呼びかけし五比丘を叱して如來也佛陀也と宣ひしは吾等の知る處也。

拘薩羅の波斯匿王嘗て世尊に尋ねて曰く。「世尊は無上正等覺者也と主張し給ふや」と、佛宣はく「我れは無上正等覺者なるが故に無上正等覺者也と主張す」と。王の曰はく「されど世尊、世には世尊より年老ひたる沙門あり。喩へば六師の如き是なり。多くの弟子を有し人々に尊敬せらる。而も無上正等覺者也と曰はず」。世尊宣はく「世に年若く小なりと雖も蔑る可からざるもの四あり。王子と蛇と火と比丘なり」と以て佛陀の權威ある自信を見る可きなり。

師なくして悟れる佛陀はその説法の態度に於て斯くの如く權威あり。佛陀は正覺を悟りて正覺を得たりと宣ふ故に無畏なり。漏盡を得て漏盡を得たりと宣ふ故に無畏なり。これは障碍の法なりと實驗して障碍の法と宣ふが故に無畏なり。この道は苦惱の滅盡に達すと實驗して苦惱滅盡の道を宣ふが故に無畏なり。これを如來の四無畏と云ふ。されば佛陀の權威は自信の背景を有する權威也。眞に自信ある人は他面常に謙敬の德を失はず。されば偉大なる權威を以て說法し給ふ佛陀は傳統相承の先輩を尊敬し、法を尊敬し、僧伽に對しても謙敬に之を尊重し給ふ。卽ち佛陀は自身三寶に歸依し恭敬する人也。茲に法とは佛陀の敎法にして同時に過現未三世に渡りて常住なる理法也。佛陀はその開顯者に過ぎず。佛陀宣はく「生あるが故に生死あり………此の界は如來世に出づるも出でざるも常住也。法性常住、法性堅固?緣起性のもの也?如來は是れを悟り通曉して開示し、說示し、宣說し、建立し、披露し、明白にして見せしむる許りなり」と。されば佛陀はこの法に無限の尊敬を拂ひ、「獅子、兎を打つにも、その全力を用ふるが如く、我は四衆に說法し乃至、獵師に說法するにも注意して之をなす。これ法を尊敬するが故なり」と宣へり。今若しこの理法か三世に亙りて常住なるものとすれば、過古にありてもこの理法を悟り給ひし人ありし筈也。これを佛陀は「この道は大聖人の行きし道也」、と云ひ自己以前の此法の開顯者を認め茲にその自己の敎法の傳燈相承を立て給ひぬ。故に佛陀は宣はく、「喩へば人ありて森に入り古人の踏みし跡を辿りて古城を見、之を修補して新城を營むが如く我も亦過古諸佛の跡を踏みて證悟せり」と

云ひ、舍利弗目連が歸佛して佛兩人を上首とし給ふや喜ばざる比丘あるに對して、過古諸佛通誡の偈を說きてこれ諸佛の敎也と云ひ、又王舍城の人々の非難に對しても過古の諸佛がなし給ひしが如く正義を宣傳するもの也と答ひ、佛成道第二年迦維羅衞城に歸り家より家に乞食したるに、父王之を咎めて「我が種族を耻かしめんとするが」と問ふに對し「これは我が種族の習慣也」と答へ、その種族の祖先は過去の諸佛也と宣ひしが如き皆この傳統相承の恭敬心の發露也。此れ親鸞聖人が只如來の御代官を申しつる許り也と宣ふと一對にして、宗敎の妙趣の存する所也。過古七佛或は二十四佛の思想が佛在世に確立せしや否やは今之を論ぜざるも、相承の思想はその宗敎の敎祖に必然的に存在するものにして、その眞面目なる謙敬の態度より生れ、宗敎の永續する所以も又茲に秘み居ることを忘る可からず。

然らばその過去の諸佛とは誰ぞや。思ふに釋尊もその生に於て一印度人なれば、1. 吠陀の敎權を否定し、2. 苦行の功德を否定し、3. 祭祀の無効を叫び、4. 我の敎理を破壞し、5. 四姓の平等を唱へ給ひしは一見印度の宗敎の破壞の如きも、これ只その不合理なる弊を破り給ひしのみにして蓋し眞意は古代信仰の文字以上の眞精神の正確なる開闡者にして、印度の宗敎的生命を復興し新しき力を與へ給ひし也。されば過古の正等覺者とは元よりこれぞと婆羅門敎の古仙人を指すに非ざれ共、又必ずしも夫等の古聖以外を曰ふにも非るべし。佛陀が當時の婆羅門を誡め給ふ中には、古の婆羅門を賞揚し給ふ語少しとせず。而して釋尊はこの古聖人の意を世に實現せんとして顯はれ給ひしものならん。換言すれば佛陀は婆羅門敎以外に佛敎と曰ふ特別の宗敎を開かんとの意志に非ずして、正當なる故聖者の道を布かんとなし給ひし也。これ親鸞聖人が故聖人の敎を信じてそのまゝこれを人にも傳へ聞かしめんといふ態度と同じきものあり。四姓平等の宗敎的社會改革の如きも、只古聖の道に歸り給ひしに外ならず。

されど茲に誤解すべからざるは、佛敎が全然印度といふ民族的の檻に囚はれたりと曰ふには非ず只後人の考ふるが如く全然民族的色

彩なき無籍の宗教に非るを曰ふのみ。釋尊は上古印度の最も純粹なる精神を發揮せし人にして、印度は釋尊を得て、その有する純粹なる印度精神を表現するを得たる也。されど最も純なるものは古今に通り東西に亙りて誤あるものに非ず。不純なる民族的要素を含まざる佛教は斯くて遠く異國に傳はり、他の印度の諸宗教と異なりて世界的大宗敎となれるなり。

佛陀は又僧伽に對しても非常なる尊敬を拂ひ給ふ。佛陀は宣はく、「我れは如來が僧伽を率ゆるとは思はず、僧伽も亦如來に依賴するとは思はず」と、將に之れ親鸞聖人の「弟子一人も持たず」と宣ふに等しき同朋主義也。同朋主義は眞の對等の敬愛より起る。佛陀は一切衆生の悉有佛性を認め、その個性の尊貴を認め、且つ僧伽の敎法宣傳の師匠にしてその傳持者なるを尊び給ふ也。さればこそ、人の衣を佛に献せんとするを特に僧伽に献せしめ、常に僧伽の供養は佛陀を供養するよりも大利益ありと敎へ給ひしなれ。

第五章　佛陀の日常生活及び その行化範圍

釋尊の敎は中道の敎也。現世の快樂を求むる心を退くると共に、只徒らに肉體を蹂躪して聖道ありとなすに非ず。されば衣食住はこの法の器を支持する爲めの用なり。食は以て我が命を支持すれば足れり。衣は一は禮義のため、一は寒暑蚊虻を防ぐが爲め、住は雨露風熱を防　んが爲めなり。されば比丘具足戒を受くる時、比丘の四依なる敎を受くるを常とす。四依とは、1. 食は乞行に依りて得たる食に依り、2. 衣は襤褸 に依り、3. 住は樹下に依り、4. 藥は腐尿藥(Pūtimuttam)に依る事也。これを比丘の基礎生活の基本となす。されど元より招待せられたる家に行きて美食を受け或は將來せられたる食を受け供養の錦衣を着け、壯麗の精舍に住むことも妨げざる也。要は比丘生活の基本を四依に置きて一分の享樂的氣分の生ずるをも許さゞる也。されば佛弟子は招待を受けて他の家に至る時、月の如く他家に入り白鳥の池に入りて汚れざるが如きを要す (Dhp. A. II. P. 169. S. XVI. 3; 4.)　佛陀はその味覺の盛ならんとする時は、一人子の肉を食べるが如く思へと敎へ給へり。

斯く一方に享樂氣分を退くると共に他面には功利的苦行を「水なきに浴みするが如し」と排斥し、かの苦行者の輩が食について二十二三種の苦行、衣服について十三種の苦行、姿態(威儀)について五種の苦行をなすことを破し給ふ。又提婆達多が比丘は生涯 1. 森に住むこと、2. 乞行して招待を受けざること、3. 糞掃衣(Paṇskula) を纏ふこと、4. 樹下生活をなすこと、5. 魚肉を食はざることの五の制度を設けんと乞ふや之を生活上の束縛となさんことの弊を見て退け給ひたり。されば當時の苦行者の一派よりしては「宛然在家の生活に等しと批評され、禿頭沙門美食を貪ぼる」と曰はれ、佛陀が供養の肉をも食べ給ふ故 Āmgandha (肉臭) ありと曰はれ、Māgadiya 遊行者は釋尊の草蓐を床とせらるゝを見て贅澤漢 (Bahūnaka) 也と呼べり。律本には釋尊敎團の安樂なるを見て衣食の爲めに敎團に入れる

ものあるを傳ふ。されど之等の批評は當時の極端なる苦行者の云ふところなるを忘るべからず。佛陀はその生活を簡易にし修道に便ならしめんが爲めに、一日一坐食 Ekāsanabhattam (略して一食)の制を立て給ふ。一日一坐食とは早朝に一椀の粥を呑み午に食を取り、午を過ぎて更に堅軟の食を取らざるの謂也 。かくして佛陀はその僧伽と共に三衣を纏ひ一日に一食し献納せられし伽藍（佛陀の居室を特に香屋 (Gandhakuti) と曰ふ)に住し給へり。

又佛陀は序論にも曰へるが如く當時の遊行者の一人なれば長く一處に滯在せず雨期の三ケ月を除く外は處々に遊歷し給へり。この遍歷は、一は布敎のため、一は當時遊行者の生活に從ひしため又當時の經濟狀態より餘義なくせられし點もありて上說の如く當時の經濟狀態は良好なりとは云ひ、數百の弟子を伴ふて長く一所に滯在せられてはその住民の負擔重きに過ぐるに由るなり。現に佛陀が三ケ月の安居を過ぎて猶その冬と夏とを王舍城に過し給ひし時「沙門釋氏の徒は子を持つが故に諸方暗み諸方彼等に顯はれず」との非難起り、Dakkhinagiri に移り給ひし事あり。故に佛陀の一年はその雨期三ケ月を一處に過し他の九ケ月は一處に一週日以上停らざる樣四方に遊歷し給ひしなり。

今佛陀の一日が如何にして過されしかを見るに滯在の時と遍歷の時との相違はあれども、大體に於て日出前に起床し、若し滯在の時なれば乞行の時(午前十時より十一時頃迄)の來る迄室にあつて靜坐し、或は弟子を引見し、遊行の時なれば、この間に四里乃至五里の道を步き、乞行の時來て衣を整へ鉢を手にし、村又は町に入つて家每に乞行し、招待を受けらるゝ時は其の家に行いて食事終りて後謝禮の說法をなし、乞行の時は精舍又はその滯在の森に歸つて食事し終つて弟子等に說法せらる、日の盛りには森の中又は樹の下に行いて禪定に入り又は休息を取り、時過ぎて遍歷の時なれば更らに旅を續け、滯在の時なれば寺庭に弟子を集めて訓誨し、或は集會室に集りて法を談ずる比丘等の處に行いてその談論の中に入り、或は村邑の人々の尋ね來るに對して法を說き給ふ。異敎徒の尋ね來つて道を

論議するも此の時にして、又時として佛陀の方より尋ね行かるゝ事もあり。夕暮人々の散ずるを待つて沐浴し、中夜更くるまで弟子等と談合せられ更らに少しく運動を取り、中夜に正念正心に寢に就き給ふ也。

A. VI. 43 (中阿 118 昃六、三九) に曰く、

『或る時世尊、舍衞城の給孤獨精舍に住し給ひき、時に世尊は晨朝、衣を著け鉢を取り、乞行のため舍衞城に入り、乞行し終つて、食後鉢を收め、長老阿難に告げ給はく、「阿難陀よ、東園鹿母樓閣 (Pubbārāma Migāramātu Pāsāda) に行き日中を過さん」と阿難は世尊の御語の儘にと答へぬ。かくて世尊は阿難と共に東園鹿母樓閣に行き、夕暮に禪定より出でゝ阿難陀に告げ給はく、「阿難陀よ、東房の川 (Pubbakotthaka (nadi)) に行きて浴みせん」と、世尊は四肢を洗ひ終つて、身體を乾かさん爲めに一衣を著して在ましぬ。』これ佛陀の一日を叙する數多き例の中の一也。この例は午後禪定より立ちて後の說法を曰はずと雖も、普通多くの來訪者或は集會所の比丘に對する說法は禪定より立ちて後入浴の前なるを常とす

又僧伽には特定の日、一月の中に四日あり。八日と十五日と二十三日と三十日に當る。これを布薩の日 (Uposatha) と曰ふ。この日には比丘は相集つて互に罪の汚れなきを語り、他の罪ありと認めたるものあれば之を告げ知らせんことを乞ふ。而して僧伽の法律書の撮要たる波羅提木叉 (Pātimokkha) を誦す。(最も波羅提木叉を誦するは月に二回とす) 在俗の信者優婆塞優婆夷はこの日特に八戒を守り、精舍に行いて法を聞くを常とす。而してその十五日は滿月の夜にして淸光洒るが如き廣場に於て師弟互に問答し法を談り合ふ也。

佛弟子の中の一詩人婆耆娑 (Vangīsa) が

今夜十五夜に心身淸淨のためにとて、
五百の比丘集まれり。
總て繼縛を斷ち、
罪垢なく再び生を受けぬ聖者也。
(佛はかの) 大臣等に圍繞せられて、

大海を限りとする領地を
巡行するかの轉輪聖王に似たり。

と歌ひたるは佛陀が自恣の日 (Parivāra) に東園精舎鹿子母講堂の前庭に滿月の光を浴びて舍利弗等五百の比丘と共に互に犯罪の有無を問ひたゞし給へるを見て感激して歌へる也。又世尊五百の比丘と七百の在家の信者と數多の諸天と共に膽波(Campā)の Gaggarā 池畔に住し給ふを見て同詩人は

雲なき空の月の如く
曇なき日の輝くが如く
アンギラサよ、大牟尼よ、汝は、
榮光を以て全世界を照し給ふ。

と歌へり。王侯貴人の行いて釋尊を訪ふも亦多く夕暮又は初夜にして頻婆娑羅王波斯匿王は屢々精舍に世尊を訪ひ奉れり。波斯匿王は或る時世尊に申して曰く、「世尊、我々王者にても談話中に臣等の爲めに口を挾まれ遮らるゝ事あり。然るに佛陀の僧伽は寂然として一語を發するものもなく又咳をなすものもなく法を謹聽す」と。Kattika 月 (印度曆第八月十月の半より十一月の半に當る) の滿月の夜(白水蓮の夜 Komudi と云ふ)阿闍世王は餘りに月の美しきに誘はれて世尊を耆婆の菴婆林に訪ふ。世尊は千二百五十人の比丘に圍繞せられて月夜阿屋に安坐し給ふ。寂然として一語を發するものなし。阿闍世はその菴婆林近くに至りて餘りに靜寂なるに打たれて恐怖して毛髮を竪立せしめしと曰ふ。佛教教團の訓練は概ね斯くの如きものなりし也。

佛陀平生の生活は斯くの如きものなるが、佛陀は時として疫病流行の地に入りて人民の恐怖を除き、自ら進んで兇賊の住處に行いて教化し、夜叉を退治して人民を安んじ、交戰國の間に立ちて之を仲裁し、國政をあづかる大臣の尋ねに應じて。他國の國狀を說いて戰爭を未發に防ぎ、又時々公會堂(Santhāgara) 等の落慶式に臨みて法話をなし給へり。されば佛陀の感化は至る所頗る深く印象し、人々は佛陀の安居を終りて去り給ふを悲しみ、遠くより歸り給ふを聞い

て歡喜せり。

されど佛陀の最も意を用ゐ給ひしは僧伽の事にして佛陀の全心は比丘、比丘尼が互に和ぎてその道を修するに注がれたり。佛陀はこの數多き弟子達の個性を研べてそれぞれ適當なる公案を與へ給ふ。法句經註等には舍利弗が嘗て金工たりし一比丘に不淨觀を授けしも幾度も成功せず佛陀に之れを語りしに佛陀は金蓮を化作して之を禪思せしめ阿羅漢果を得しめ給ひたるを記せり。又自ら病室を訪ふて病める比丘を看護し教を垂れ給ふ。比丘の遠くより來るものあれば慇懃に之を迎へてその衣食住の支給宜しきやを尋ねその所得を聞き給ふ。もし佛陀に一の惱みありしとすればそれはその僧伽に對する惱みなりしなり。憍賞彌 (Kosambi) の比丘の和平を缺きて相諍ひ、佛陀の教をも奉せず爭ふを見て怏々として樂まず、阿難をも伴はず去つて只一人 Pārileyya の幽林の生活をなし給ひし事ありき。又迦維羅衞城にて比丘等爭ひし時去つて獨り林中に日中を過し給ひしが若し我れ比丘衆を見ずんば恰も犢の母牛を離れ種子の水を離れたらんが如かるべしと僧伽に歸り給ひ僧伽は我に依つて堅固なりと宣ひし事あり。されば比丘等も此の佛陀の一子地(Ekaputta bhūmi)の愛に打たれて無限の信敬を捧げ奉れるなり。

又佛陀が法を尊敬して住し給ひし事は上第四章に曰ひし如くなるが、佛陀はその一日の生活の中に常に禪定に入りて無爲の樂を得給ひし外時々自己の法教を反誦して樂しみ給ひたる事明白なり。佛陀が獨り自室にて十二因縁の法教を反誦し給ひたる事、又佛陀の病中大周那 Mahā Cunda が七菩提分法を說いて佛陀の病平癒せし事等經典に見ゆ。又 Soṇa kuṭikaṇṇa が Avanti の邊國より佛を訪ひ奉り一夜を佛の香室に過すを許され命に依て暗誦せし經文を誦して佛之を喜び給ひし事あり。蓮如上人の病中御文を讀ましめて我の作りしもの乍ら殊勝なりと曰はれしと似通ふを覺ゆ。

されば佛陀は一沙門として乞食生活を送り給ひたれども、その樂しみや頻婆娑羅王に勝り、嚴冬茅屋にありて安眠して Hatthaka 長者(手長者)を感せしめ、眞に涅槃第一樂を享受し給ひし也。

かくて佛陀はその成道の曉より滿四十五年間人天の大導師として法を說き最後に Kusināra にて須跋陀 Subaddha を濟度し、正法久住の責任を僧伽に委ねて涅槃に入り給ひぬ。佛陀の行化し給ひし範圍は東は Angā の Campā 市を限り、北は Kapilavatthu, Sāvatthi. 西は Kurū の Kammāsadamma に及び南方は Gayā, Kosambī, を結び付くる線を超へ給はざりしもの丶如し。漢譯雜阿 30. 30. には佛陀が修摩、分陀羅を經て迦繞伽 Kalingaに至り給ひしが如く記載すれども、同本 S. VI. 6 には之を缺き確實とするに足らず。巴利法句經註(Dhp A II 1112.)には佛陀が Candabhāgā 河追摩訶劫賓那を出迎ひ給ひたりと記載し、Dīpavaṃ sa (島史) Mahāvaṃ sa (大史) には釋尊が Ceylon に三度來り給へりと記せること、此の事は元より信を措くに足らず。佛陀及び佛弟子の住せし主なる精舍林窟等は左の如し。

1. 頻婆娑羅王の献せし竹林 Veḷuvana Kalandakanivāpa.
2. 須達多の献せし祇園精舍 Jetavana Anāthapiṇḍikārāma.
3. 舍衞城の東 Visākā の献せし東園鹿母樓閣 Pubbārāma Migāramātu Pāsāda.
4. 吠舍離大林 (Mahāvana) の重閣講堂 Kutagārasālā.
5. Citta 家主の菴園に寄附せし Kosala Macchikasanda の Ambātakārāma.
6. 娼婦 Ambapāli の献せし吠舍離の Ambāpālivana.
7. Dakkhiṇagiri の Ekanāla 村に近き大寺 Mahāvihāra (Sn. A. p 136)
8. Ghosita 長者の献納せし Kosambī に近き Ghositārāma.
9. Videha の Gokulanika vihāra (Sn. A. p 46)
10. Pātāliputta の Kukkutārāma.
11. Nālanda の Pāvalikambavanārāma.
12. Jetavana に近き Mallikārāma.
13. Kapilavatthu の Nigrodhārāma.
14. Sakka の Sāma 村の Pokkharaṇiyavihāra.
15. Sāketa の Kālakārāma.

16. Isipatana の大寺 (Mahāvihāra)
17. Ajakarani 河畔の Lonagirivihāra.
18. Sīlāvati 邑附近の Sudassanavihāra (善觀精舍)
19. 竹林精舍に近き Moranivāpa の paribbajakārāma.
20. Magadha の Tapodārāma (溫泉園)
21. 舍衞城の Rājakārāma (王寺)

等これ等に佛陀及び佛弟子は時々住せし也。尤も中には Mallikā 園の如き Moranivāpa paribbajakārāma の如き必ずしも佛教々團の所有に非ずして、總ての遊行者に屬せしもあり。この他佛陀は林間山中窟内制底等に居住し給へり。

1. Kosala Ujuñña 邑の Kaṇṇakattha 鹿野苑
2. 王舍城に近き Maddakucchi の鹿野苑
3. Benares の Khemiya 菴婆林
4. Kosambī の Siṃsapa 樹林
5. 王舍城の Siṃsapa 樹林
6. Kosala の Siṃsapa 樹林
7. Koliya の Kuṇḍadhana 林
8. Ceti の Pācīnavamsadaya.
9. Madhurā の Kuṇḍa 林
10. Kosala の Icchānangala 村の林
11. Anga の Jātiyā 林
12. Sāketā の Kantakī 林
13. 同 上 の Anjana 林
14. Vesali の Ugga 長者所有の Nāga 林
15. Vesali の Gosingasāla 林
16. Kosala の Palāsa 林
17. Kembila 邑の Nicelu 林
18. Kosambi の Pārileyya 林
19. 王舍城に近き靈鷲山 Gijjhakūtā.
20. Pipphaliguha 窟

21. Sattapaṇṇiguha 七葉窟
22. Indakakūṭa.
23. Indasalaguha.
24. Isigiri 山側の Kālasilā の Sukarakhata 洞
25. Ālāvi の Aggalava 塔
26. 王舍城附近の Pāsānaka 制底
27. Vesali 附近の Bahuputta (多子塔) を始め六塔

等是れなり。

猶釋尊在生中その名聲轟き感化の及びし地域は第三章に既に說けるが如く、南方は Godhavarī 河畔、海濱の Suppāraka, 西北方は Peshawar 地方東方は Kalingā に亘り殆んど全印度に普ねかりし也。

第六章　佛身に對する考察

釋尊の宗教は云ふまでもなく、智見を明かにして諸法の實相を見、誤れる迷執を打破して自身開悟する宗教なり。故に先づ修道を肝要とす。修道に三あり、戒定慧是れなり。戒を守りて身心を清淨にし、清淨なる身心にて禪定に入り。精神の集中に依りて智見を開いて諸法の實相を體得する也。然れどもその修道の原動力、戒定慧三學の基礎となるものは如來に對するの信なりとす。信は實に佛道修行者の踏み出す第一步なり。佛陀の偉大なる人格、透徹せる智見、博大なる慈愛は人々を驅つて無限の信愛を捧げしむ。而してこの信愛が佛弟子をして佛陀の踏み給ひし道を同じく踏ましむる動力となれるなり。されば經には比丘は先づ信を生じ、世尊は如來應供等正覺明行足善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なりと信じて向上の道を踏むと云ひ、如來を憶念し信樂し歡喜し、心垢を除くものは梵布薩に住し梵と共に住し、梵に依つて信樂し歡喜する也。と示し、比丘婆耆舍は、先には我れ詩作に醉ひて町より町をさ迷ひしが完き佛陀を見て、信我れに生じぬとその修道の踏み出しに就いて述べ、卑疑(Pingiya) 婆羅門は「婆羅門よ、我れ寸時と雖ども彼大智大賢喬答摩を離れず。現世に時を距てず利益あり、又渴愛を滅し禍を離れしむる法を說き、何處にも無比なる(喬答摩を離れず)、我れ彼を心と眼とを以て見、夜も怠らず禮拜しつゝ夜を過す。………信と悅と心と念とは我をして喬答摩の敎に歸せしむ」とその熱情を示し、中阿、求解經(M 47. Vīmansaka S.)にはその信仰が根柢ありて確實に他に依つて動かされざる可きを示せり。又比丘 Merajina はその師に對する信がやがてその自己の踏み行く途に對する信なるを示して、「我れ師の說き給へる法を聞きしより、一切智者、他に破らるゝことなき人に疑惑を生ぜざりき。隊商の主、大雄者、最上無上の御者の道及び行跡に疑惑を起さゞりき」と歌へり。

かくの如く佛弟子は佛陀及その敎法に對して信敬を致せり。波斯匿王の臣 Isidatta はこの信に依て佛陀の在ます方面に足を向けて寢

ず、末利夫人は佛陀の宣ふことは何事も我れにとりて眞實なりと斷言せり。而して佛陀は この信を讃嘆して、「かく我が 善說し開顯せる法に於て只我を信じ愛するものは、菩提に進み又は天界に生るべし」と宣へり。

この信は一方諸比丘の道行の基本的動力なりしと共に、他方優婆塞優婆夷在家信者の救濟的宗教となれり。而して宗教史的に見れば、かの幼稚なる天然崇拜の宗敎が沈滯して祭式宗敎となり、一轉して觀念的哲學となれる印度の宗教界に、初めて人格に對する信仰を中心要素とする一宗敎團體を形成するに至れる也。

かくの如くして佛弟子の佛陀に對する信仰はやがて隱微の間に、佛陀に超人格的資格を與ふるの素因となれり。蓋し信仰はその對象の表面より裏面へと進み、益々これを深め行くものなればなり。元より面の當り佛陀をその人間としての形にて見奉る故に、未だその信仰の內要を開展して生じ來る形而上的理論を構成せずと雖も、佛滅後逝ける師を追思して漸次に組み立てられし形似上的佛身論は既に萠芽をその佛徒の信仰の上に有せしなり。何となればこの信仰は、佛陀在生中既に一定の方面に向て開展し佛身は單なる肉身に非ずして法と或る關係を有するもの也との思想を生じたればなり。

茲に云ふ法とは敎法にして佛陀が一切衆生を愛憐して開顯し給ひし敎法也。「法は世尊を根とし世尊を導者とし、世尊を依處とす」といふは世尊の敎法の主なるを示し、この敎法は佛陀が宇宙萬法の根底をなせる原理を自ら悟りて說き給ひしものなれば、法とは同時にその宇宙の原理を指す。原理と敎法とは佛陀と云ふ一人格を介して同一なれば、人と法とは一如にして、佛陀は肉身所成なると同時に、法を體とする人格者なりといふを得べし。故に巴利長阿第二七經九に曰く、「法身梵身法有梵有といふはこれ如來の名稱なり」。と。世尊は又嘗て跋迦梨比丘が餘り佛の肉身を愛樂するに對して、肉身を見るものは正しく我を見るものに非ず、法を見るもの我を見ると宣ひ、この思想は佛傳に入りて、世尊が忉利天より僧佉舍に下降の時、蓮華色比丘尼が最先に世尊を迎ひたるに對し、須菩提(Subhūti)は獨

り靈鷲山に在りて空定に入り、諸法無我の理を觀じゐたるに、佛陀は我れを最初に見たる者は蓮華色比丘尼に非らずして須菩提なりと宣へり、と傳へられ、又「智眼に依り世尊の法身を見る」といふ語を生ずるに至れり。元よりこの原始的意義は佛陀の佛陀たるは、肉身に非ずしてその主觀にあれば、その所說の敎法を通じてその主觀に觸るゝものが佛陀を見るとの義なれども、後來佛敎形似上學の發達と共に、法卽ち原理が佛陀なりと云ふ法身觀を生ずるに至れり。

茲に又この法身の觀念を他面より增長發達せしめし一思想あり。そは一乘道の思想なり。抑も佛陀の敎は獨り釋尊のみ悟りて說き給ひしものに非ずして、三世の諸佛同證一味なると共に、師弟同一菩提を步み、同一涅槃に到る平等解脫の法也。故に婆蹉種(Vaccha-gotta)婆羅門は佛に白して曰く。

> 喬答摩よ、もしこの法を喬答摩のみが成就して比丘が成就し得ずば…………喬答摩と比丘が成就し得て、比丘尼が成就し得ずば、………白衣の在家淨行の優婆塞が成就し得ずば、………白衣の在家樂欲のものが成就し得ずば………白衣の在家淨行の優婆夷が成就し得ずば………白衣の在家樂欲のものが成就し得ずば、そのためにこの梵行は不完全なり。然れどもこの法を喬答摩も比丘も比丘尼も白衣の在家淨行の優婆塞優婆夷も、白衣の在家樂欲の優婆塞優婆夷も成就し得るが故にこの梵行は完全也。
>
> 喬答摩よ、恰も恆伽河が海に傾き海に向ひ海に注ぎ海に入りて停るが如く喬答摩の會衆は在家も出家と共に涅槃に傾き涅槃に向ひ、涅槃に注ぎ涅槃に入りて停る。

と。この平等解脫の理想は、社會的に顯はれて四姓平等論となり、宗敎的には一乘眞實の理を生ずるに至れり。故に「四念住は一乘道、三世の人々皆この一乘道に依つて暴流を渡る」と云ひ。「邊城に出入する者か皆一門よりするが如く、三世に亙りてこの世より出離する者は皆五蓋を盡し、心垢を無くし四念住を修し七覺支を修して出づ」と云ひ、「比丘等よ、この道は衆生の淸淨のための一乘道也」。と云ひ、又これを指して梵乘法乘と呼べり。これ後世の大乘佛敎に入り、

唯有一乘法無二亦無三と一乘眞實を談じ一切衆生悉有佛性と一切成佛を談ずる源となれり。かくの如く佛陀の踏みて悟り給ひし道は三世諸佛の同じく踏み在家出家共に踏みて悟る道なり。されば一切諸佛及び衆生の證悟の背景には、これを裏づけたる普遍的眞理ある筈なり。この眞理＝如を指して法性 (Dhammatā) 常住にして如來世に出づるも出でざるも不變常住也と云ひ、茲に眞如の觀念に到達し、やがて眞如を體とする佛身卽ち法身觀を生ずる準備となれり。

之れを要するに、釋尊在生中、根本敎團にありては第一に佛陀の偉大なる人格が人々をして歸依信順の念を生ぜしめ、この信仰が漸次深まり行き佛陀に對して、一種の超人的觀念を構成するに至り、第二に佛陀の體顯し開顯し給ひし敎法の觀念より佛陀の肉身より精神を重ずる傾向が法身論の端緖を開き、第三に三世諸佛師弟同證一味の一乘法の思想がその證悟の背景たる普遍的理卽ち眞如を見るに及び法身論に到達せんとする勢を示したり。されば吾人は佛弟子が佛陀の在世中旣に肉身の佛陀以外に隱微の間に人を通じて法を見、その法と人との一如を見たりといふも、大過なきを信ず。

佛弟子は佛陀在世中、上說の如き考察に進みゐたりしが、佛陀倶尸那羅にて涅槃の雲に入り給ふや、悲痛に沈みし佛弟子は、如來の死後存在の問題に留意するに至れり。抑も證悟の人卽ち如來死後の存在問題は世間の常無常宇宙の邊無邊等の問題と共に、佛陀在世當時より一般に智識階級に論議せられたりしが、修道に急なる佛徒の與りて論ずべきことに非ざれば、佛陀は之れを稚見愚見なりとして排し、假令他婆羅門の此の問題を提げて論じ來る者あるも捨置記として取り上げ給はざりき。佛弟子も亦面の當り佛陀の溫容に接し、金口の說法を聞いては修道に急なれば、佛陀の訓誨に從ひ斯くの如き哲學的思索に入るを要せざりき。彼等はひたすら諸行無常の理を思考し、苦本を脫したる佛が再び後有を受け給はざるを思ひ、又自らも苦本を絕ち後有を惹かざるの幸を喜び居たり。我が梵行は成就せり。生は盡きぬ。後有を招くこと無しと歌ひ、「菴婆果の幹が切らるればその幹の菴婆果は離れ落つるが如く、如來の身は生の源を斷

ちて存す。その身のあらん限りは人天は之れを見れども生命限り盡きて身が破るれば人天は之を見ること能はず」と教へられてその後有を招かず、人天も見ざる境地とは如何なるものかを積極的に考察せずして滿足せり。偶々その同學者の死に合ふてその人の證悟の問題を佛陀に尋ねし比丘あれども猶その大師の生存中なれば、聖者の死が果して何を意味するかは緊急の問題に非ず。從つてその無餘涅槃に就いては如上の消極的說示にて滿足せし也。然れども吾人はその消極的說示中に「身が破るれば人天も見ること能はず」と云ひ、「如來は大海の如く甚深にして不可量不可測なり。如來は生存すと云ふも適せず、せずと云ふと亦適せず」と云ふを見、それが後世俱舍論等に顯はれたる灰身滅智的の絕無に非るを知るなり。佛陀在世の比丘等にとりては、死は必然にして避くべからざるもの、且つ梵行成就の聖者の死はその涅槃の完成にして生死輪廻を超越する境界に到ることなれば却つて慶賀すべきことなり。されば彼等は生を願はず死を希はず、靜かに時の至るを待てり。

然れども茲に佛陀が弟子等に對し、自らを燈明となし法を歸依所となして修道すべきを懇諭して涅槃し給ふや、比丘等は世尊の餘り速に世を去り給ひしを悲しみ、慈顏を再び見奉るべからざるを思ふと共に、如來死後存在の問題、換言すれば無餘涅槃の意義を考察するに至れり。經典中最古の一と信ぜらるゝ巴利大般涅槃經に依れば、佛陀は若し欲すれば一劫の間若くばその殘餘の劫を生存し得るとあり。これ一方には如來の超人的人格なるを示すと共に、他方如來不滅の思想を顯はし、漢譯遊行經には佛滅後大迦葉遲れて來れるに、佛陀棺中より金色の足を出して示し給へりとあり。(同本 Parinibbāna Sutta にはなし)これ又如來不滅の思想を示すものにして、佛に三十二相あり八十隨形好あり八相成道し給ふ等佛陀を神話的に莊飾する始めにして、後に應化身の思想生ずるに至つて、大乘涅槃經(盈五 22 b) に我身畢竟不從婬欲和合而得生也………如是大小便利出入息等隨順世間如是示と云ふに至れり。然し無餘依涅槃の哲理的考察に就いては未だ充分の發達を示さず、只如來が有量無量の壽量を內心

の喜びを以つて平靜に捨て給へり、と云ひ、寂滅眞樂の境に入り給へりといふ位にて、未だ無餘依涅槃の境界を積極的に說かず。されど是等の文はその涅槃が斷見外道の徒が考ふるが如き空無に非ず。さりとて天界の生の如き疎雜のものに非ざるを示すと見るを可とすべし。然り彼等の觀察せし無餘涅槃は假令その表現が消極的なりとは云へ、そは全くの消滅に非ずして、彼岸に於ける永遠の生命を顯はす。故に陀驃摩羅子 (Dabba Mallaputta) の入滅を讃ずる詩に、

熱打せられし堅鐵と、
燃ゆる火と、
次第に消えては、
その行衞の知られざるが如く、
かく正解脫の人、
愛の束縛の暴流を亙り、
不動の安樂に達せし人の、
行衞は知られざる也。

とあり、諸行無常の偈にはそれら生滅の無くなれるこそ樂なり（寂滅爲樂）と云ふ。玆にその涅槃を指して不動の安樂と云ひ、この眞樂の境に入りたる人をば惡魔も諸天も見ること能はずと云ふは、明確に涅槃界の相狀を示さゞれとも、それが空無に非ざることは明白なりとす。涅槃に關しては後に第二編法の下にて說くことあらんも、この境界を表現するに就いては初期佛敎はウパニシャドがその梵我一如境を顯はし、梵涅槃を顯はすに消極的なるが如く消極的表現法を取れり。Ṣvetaṣvatara Upaniṣad (6. 1. 4) に、そこには日もなく月もなく星もなし、天に電光なく地に火光なく只彼れは獨り輝けりとあるはその梵涅槃の境にして、巴利雜阿 2. 3. 6.(雜 49. 14. 辰四 89) に、生るゝことなく老ゆることなく、死することなく、消ゆることなく、生れ還ることなき處、斯くの如き世界の終邊には步行して到り得ず、知ることを得ず見ることを得ず達することを得ずと我は云ふ。とあるは聖者のみが達しうる涅槃境にして、その表現に於て揆を一にするを見るべし。只「この世より他界に入りて怨みなし」等と

世の常の苦樂を超越したる眞樂の境なるを示し、前に出せる文の如く、如來は生存すといふも適せず、せずと云ふも亦適せずと有無を離れたる幽玄不可思議の實在なるを示すのみ、之を要するに佛滅後間もなき間は、世尊を追懐してその生前より抱持せる如來觀を幾分發展せしめ、その大師の死後猶何處にか不滅なれといふ欲求より漸次に法身常住の思想の萠芽を有し初めたるなり。

斯くの如く佛陀入滅後の佛弟子は徐々として思想的に佛身に對する考察を進め來りしが、他方彼等は具體的崇拜の中にその悲痛なる追懐の情を慰めんとせり。而して大體に於いて、その思想的佛身考察は比丘のなせし所にして、具體的崇拜は在家の信者のなせし所と云ふを得べし。元よりこれ一應の區別にて二者互に相交錯することは云ふまでもなし、今玆にその具體的崇拜を分類して見んに、

一、遺物の崇拜

a. 經文崇拜

b. 遺骨崇拜

e. 遺愛物崇拜

二、遺跡崇拜

三、未來佛に對する憧憬。

1. 遺物の崇拜とは、所謂駄都(Dhātu) 卽ち遺品の崇拜にして、之れに三種あり、卽ち說示駄都(Uddesika dhātu)、舍利駄都 (Sarira dhātu) 及び受用物駄都(Paribhoga dhātu)也。

a. 說示駄都とは Jātaka 及 Bodhivaṃsa には無形にして精神的なるもの (Avatthaka manamattaka) とあり、余は佛陀の遺法從つて經典そのものを指すもの也と信ず。佛陀は涅槃に際して比丘等に「阿難よ、汝等の中或る者は師の語は過ぎ去り我等の師なしと思ふならん。されど阿難陀よ、かく思ふことなかれ。汝等の爲めに我が說きし法と律とは汝等の師なり」と訓誨し、又「法を燈明とし、法に依るべし」と敎へ給へり。又四大敎法を說きてその法と律との傳承について注意を與へ給へり。されば佛滅後佛徒が敎法を尊信し依所とせしことはいふ迄もなく、滅後久しからずして阿難は雨行大臣に今や佛

弟子は人に依らずして法に依り、法を誦することを語れり。而してこの法は佛滅の年經典として編輯せられたれば法を尊信することは經典を尊信することにて敬虔なる佛徒にとりては經典は佛陀が遺弟に殘されし最も貴重なる遺産なり。この考は自然經典讀誦そのものに功德を認むるに至れり。余は今日南方佛教徒がピリト(Paritta)と稱し、攘災のために經典を誦する風が頗る古代より行はれたるものなるを信ず。後世支那日本の佛教に及びて寫經供養及經塚等の事あるは同じくこの說示馱都の遺風なりとす。

b. 舍利馱都卽ち遺骨の崇拜は頗る多くその中最も重要なるは、佛身火葬の後八分して各々之を奉祀したるもの之れ也。史實の示す處に依れば佛滅後二百年阿育王はこの遺骨を再び集め、全印度に八萬四千塔を建立せりといふ。迦尼色迦王も亦遺骨塔を建立せり。現今名古屋市に奉安せる佛骨は八分奉安の中釋迦族が起塔奉祀せるものにして近年藍毘尼園の近くにて發掘せられしもの也。迦尼色迦王奉安の佛骨も亦近年發掘せられたり。この外傳說に依れば Utkala (今の Orissa) の帝利富沙　跋利迦　(Tapussa, Bhallika) の二商人は佛成道後間もなく佛に歸しその毛髮を得て歸國し奉安せりと云ひ、大須摩那 (Mahā Sumana) 天子は佛陀より一握の毛髮を得て之を錫蘭佛足山頂に安置すと云ひ、法顯、玄奘の傳ふる處に依れば、羯饒夷(Kanauj)阿踰闍(Ayodhya)憍賞彌 (Kosambi) 摩偸羅 (Mathula) 梵衍那 (Bāmiān) 縛喝 (Balkh) に近き納縛毘訶羅 (Navavihāra) 迦比試 (Kapiśa) 等皆佛身の一部を奉安せりといふ。中にも最も今日有名なるは錫蘭 Kandyの佛牙寺に奉安する佛齒なりとす。支那日本に於ける舍利奉安に就いては今茲に言を費す要なかるべし。

c. 受用馱都卽ち遺愛物の崇拜は又頗る盛にして涅槃經に佛滅前佛の衣が金色に輝けりとあるはこの遺物崇拜を示し、大迦葉は佛の遺囑を受けて彌勒佛にその衣を附屬すべく今に鷄足山(Kukkutāpada)にありと信ぜられ。法顯玄奘は佛衣佛鉢佛杖等が那竭羅、布路河城(Peshawar)等に崇拜せられしを語る、後世遺鉢の傳持は法燈の傳持を示す語となれり。

2. 遺跡崇拜は佛陀が入滅前阿難の問に對して佛を思慕するものは佛生處と佛成道處と轉法輪處と入滅處の四處を巡拜すべきを敎へ給ひたるに初まり、後世佛陀を圖畵するに當つてこの四處を佛陀四大事件の場所として佛傳を代表するに至り、今日に至るまで南方佛敎徒はこの四所巡拜をなしつゝあり。菩提樹はもと伽耶の成道地の聖樹として崇拜せられしが後には獨立に崇拜の對象となり、今日にありては伽耶の菩提樹と錫蘭 Anurādhapura の菩提樹と最も有名なり。又錫蘭佛足山の佛足跡は佛の錫蘭傳道の時殘し給ひし跡なりとし今日尙巡禮の信者その數を知らず。

3. かく一方に純理的に佛身の考案を進むると共に他方には遺物遺跡の崇拜起りしが、滅後の遺弟は猶此れに依つて滿足せず、又稍ともすれば不振に陷らんとする佛敎の前途に對し、その正法の久住を欲するの餘り、佛陀の出現を未來に要望するに至れり。而して一度入涅槃せし佛陀はこの世に絕對に出ることなきは佛敎本來の敎理なれば、この要望は自然未來他佛出現の希望となり彌勒出現說を生むに至れり。彌勒菩薩のことは巴利D. 26に人壽八萬歲の時 Benares の鷄頭城(Ketumati 城)に出現すとあり、佛の自說か若しくは佛時代の思想の如く思はるゝ節なきに非れども、滅後佛陀追思の情より自然に生れしものと見るを妥當とすべし不幸にして吾人は殆んど巴利原典に彌勒佛に關する記事を有せざるが故に何れなりと確定する程度に達せず。

之を要するに、佛徒は佛陀在世中より既に佛陀の背景となる過境的實在を認め初めつゝありしが滅後この追思の情より次第にこの實在の認識を强め深むると共に一方に於ては遺物遺跡等の具體的崇拜に追慕の情を慰め、未來佛の出現の希望に佛法久住の信を置きたるものと曰ふを得べし。

(1)我聞(2)如是、一時(3)佛、遊(4)舍衛國、在(5)勝林(6)給孤獨園、爾時世尊、告諸比丘、自我昔日出家學道爲從優遊從容閑樂極柔輭來、我在父王(7)悅頭檀家時、爲我造作種々宮殿、春殿夏殿及以冬殿爲我好遊戲故。

復造種々若干華池、(8)青蓮華池、紅蓮華池、赤蓮華池、白蓮華池、於彼池中殖種々水華、青蓮華紅蓮華赤蓮華白蓮華、常水常華、使人守護、不通一切、爲我好遊戲故。

於其池岸殖種々陸華、(9)修摩那華婆師華瞻蔔華修揵提華摩頭揵提華阿提牟多華波羅頭華、爲我好遊戲故。

而使四人沐浴於我、沐浴我已、赤栴檀香用塗我身、香塗身已、著新繒衣、上下內外表裏皆新、晝夜常以繖蓋覆我、莫令太子夜爲露所沾晝爲日所炙。

如常他家麤䵚麥飯豆羹薑菜爲第一食、如是我父悅頭檀家最下。使人粳粮餚饌爲第一食。復次若有野田禽獸、最美(10)禽獸提帝邏梪吒、劫賓闍邏、奚米何犂泥奢施羅米如是野田禽獸最美禽獸、常爲我設如是之食。

我憶、昔時、父悅頭檀家於夏四月、昇正殿上、無有男子、唯有女妓而自娛樂、初不來下。我欲出至園觀之時、三十名騎揀選上乘、鹵薄前後侍從導引。況復其餘。我有是如意足此最柔輭。

我復憶昔時、看田作人止息田上、往詣(11)閻浮樹下、結跏趺坐離欲離惡不善之法、有覺有觀

(1) 『中阿含經』第二十九柔輭經 (昃六 39) 同本 Anguttara Nikāya III. 38 Sukhumāla.

(2) 六成就 1 信成就(如是) 2 聞成就(我聞) 3 時成就(一時) 4 主成就(佛) 5 處成就(舍衛國勝林給孤獨園) 6 衆成就(諸比丘)

(3) 佛 Buddha 佛陀、覺者。

(4) 舍衛國 Sāvatthi.

(5) 勝林 Jetavana.

(6) 給孤獨園 Anāthapiṇḍikassārāma. 給孤獨長者建立の精舍

(7) 悅頭檀王 Suddhodana. 淨飯王

(8) 青蓮華 Uppala. 紅蓮華(黃) Paduma. 赤蓮華 Kumuda. 白蓮華 Puṇḍarīka.

(9) 須摩那華 Sumanā. 婆師華 Vassikā. (雨時華と譯す) 瞻蔔華 Campakā. 修犍提華 Sugandhika. 摩頭犍提華 Madhugandhika. 阿提牟多華 Atimuttaka. 波羅頭(賴?)華 Pātala.

(10) 提帝邏惒吒 Dhataraṭṭha 鵞の一種 劫賓闍羅 Kapiñjala 雉 何犁泥 ?Kariṇī 乳牛 奢施羅 ?Saddūla 豹

(11) 閻浮樹 Jambu.

離生喜樂得初禪成就遊。我作是念、不多聞愚痴凡夫自有病法不離於病、見他人病憎惡薄賤不愛不喜不自觀已。我復作是念、我自有病法不離於病、若我見他病而憎惡薄賤不愛不喜者我不宜然。我亦有是法故、如是觀已因不病起貢高者卽便自滅。我復作是念不多聞愚痴凡夫自有老法不離於老見他人老憎惡薄賤不愛不喜不自觀已。我復作是念、我自有老法不離於老、若我見他老而憎惡薄賤不愛不喜者、我不宜然。我亦有是法故。如是觀已若(1)因少壯起貢高者卽便自滅。(我復作是念、不多聞愚痴凡夫、自有死法不離於死、見他人死憎惡薄賤不愛不喜不自觀已。我復作是念我自有死法不離於死、若我見他死而憎惡薄賤不愛不喜者我不宜然、我亦有是法故。如是觀已若因壽起貢高者卽便自滅)。不多聞愚痴凡夫爲不病貢高豪貴放逸、因欲生痴不行梵行。不多聞愚痴凡夫爲少壯貢高豪貴放逸因欲生痴不行梵行。不多聞愚痴凡夫爲壽貢高豪貴放逸因欲生痴不行梵行。於是世尊卽說頌曰

病法老法　乃死亡法　如法自有　凡夫見惡　若我憎惡　不度此法
我不宜然　亦有是法　彼如是行　知法離生　無病少壯　爲壽貢高
斷諸貢高　見無欲安　彼如是覺　無怖於欲　得無有想　行淨梵行

佛說如是彼諸比丘聞佛所說歡喜奉行。

(1) 三憍 Tayo-madā 1 無病貢高——健康の憍
2 少壯貢高——青春の憍
3 壽 貢 高——生存の憍

出家求道

我[1]聞如是、一時佛遊舍衞國、在於[2]東園鹿子母堂。爾時世尊則於晡時從燕坐起、堂上來下、告尊者阿難、我今共汝至[3]阿夷羅婆提河浴。尊者阿難白曰唯然。尊者阿難執持戶鑰、遍詣諸屋、而彷徉見諸比丘、便作是說。諸賢可共詣[4]梵志羅摩家。諸比丘聞已便共往詣[5]梵志羅摩家。

世尊將尊者阿難、往至阿夷羅婆提河、脫衣岸上、便入水浴。浴已還出拭體著衣。

爾時尊者阿難立世尊後、執扇扇佛。於是尊者阿難叉手向佛白曰、世尊梵士羅摩家極好整頓甚可愛樂。唯願世尊以慈悲故往至梵志羅摩家。世尊爲尊者阿難默然而受。於是世尊將尊者阿難往至梵士羅摩家。爾時梵士羅摩家衆多比丘集坐說法。佛住門外待諸比丘說法訖竟。衆多比丘尋說法訖默然而住。世尊知已欬敲門。諸比丘聞卽往開門。

世尊便入梵士羅摩家、於比丘衆前敷座而坐、問曰、諸比丘向說何等、以何事故集坐在此。時諸比丘答曰、世尊向者說法、以此法事集坐在此。世尊歎曰、善哉善哉、比丘集坐當行二事[6]一曰說法、二曰默然。所以者何。我亦爲汝說法。諦聽諦聽、善思念之。時諸比丘白曰唯然當受教聽。

佛言、有二種求、一曰聖求、二曰非聖求。云何非聖求。有一實病法、求[7]病法、實老法死法愁憂慼法、(求老法死法愁憂慼法、)實穢汙法求穢汙法。云何實病法求病法。云何病法耶。兒子兄弟是病法也。象馬牛羊奴婢錢財珍寶米穀、是病害法、衆生於中觸染貪著憍慠受入、不見

(1) 『中阿含經』第五十六羅摩經（昃七·73）同本 Majjhima Nikāya No. 26. Ariya Pariyesana Sutta（聖求經）兩仙人訪問修行の事は Majjhima Nikāya 85 Bodhikumāra Sutta（菩提王子經）にも出づ。

(2) 東園鹿子母堂 Pubbārāma Migāramātapāsāda. 舍衞城外にあり鹿子母毘舍佉の建立せしもの。

(3) 阿夷羅婆提河 Aciravatī. 舍衞城の北側を流るゝ河。今 Naukhān と呼ばる。

(4) 梵志羅摩 Rammaka brāhmaṇa

印度四姓 1 婆羅門 Brāhmaṇa（僧） 2 刹帝利 Khattiya（武士）
3 毘舍 Vessa（農商） 4 首陀羅 Sudda（賤業者）

(5) Sannipatitānam vo Bhikkhave dvayam karaṇiyam dhammī vā kathā, ariyo vā tumhībhāvo 比丘等よ、汝等の相集まれる時爲すべき二つの事あり。法の話と聖なる沈默なり。

(6) 巴利は生法老法病法死法悲法穢法を出せり。

災患、不見出要而取用之。云何老法死法愁憂慼法穢汙法耶。兒子兄弟是穢汙法。象馬牛羊奴婢錢財珍寶米穀是穢法害法。衆生於中染觸貪著憍慠受入、不見災患、不見出要而取用之。彼人欲求無病無上安穩涅槃、得無病無上安穩涅槃者、終無是處。是謂非聖求。云何聖求耶、有一作是念、我自實病法、無辜求病法、我自實老法死法愁憂慼法穢汙法、無辜求穢汙法。我今寧可求無病無上安穩涅槃、求無老無死無愁憂慼無穢汙無上安穩涅槃耶。我時年少童子清淨青髮盛年、年二十九、爾時極多樂戲莊飾遊行、我於爾時父母啼哭諸親不樂、我剃除鬚髮著(1)袈裟衣、至心捨家無家學道、護(2)身命清淨、護口意命清淨、我成就此戒身已、欲求無病無上安穩涅槃無老無死無憂愁慼無穢汙無上安穩涅槃、故便往(3)阿羅々伽羅摩所、問曰、阿羅々、我欲於汝法行梵行、爲可爾不。阿羅々答我曰、賢者我無不可、汝欲行便行。我復問曰、阿羅々云何汝此法自知自覺自作證耶、阿羅々答我曰、我度一切識處、得無所有處成就遊。我復作是念、不但阿羅々獨有此(5)信、我亦有此信、不但阿羅々獨有此精進、我亦有此精進、不但阿羅々獨有此慧、我亦有此慧。阿羅々於此法自知自覺自作證、我欲證此法。故便獨住遠離空安靖處、心無放逸修行精勤、我獨住遠離空安靖處、心無放逸修行精勤已、不久得證彼法。證彼法已、復往詣阿羅々伽羅摩所、問曰、阿羅々此法自知自覺自作證、謂度一切無量識處、得無所有處成就遊耶。彼答我曰、賢者我是法自知自覺自作證、謂度無量識處、得無所有處成就遊。彼復語我曰、賢者是爲如我作證汝亦然、

(1) 袈裟衣 Kāsaya 比丘の衣服。其色黄色なるより名けしもの也。

(2) 三業 1 身業 2 口業 3 意業

(3) 阿羅々伽羅摩 Ālāra Kālāma

(4) 初禪 悪不善の法を捨離し、疎き覺と觀の心作用を有し、遠離より生ずる樂に浸たる定

二禪 前の疎き覺觀の作用止み心境透徹し集中し、定より生ずる喜樂に浸る定

三禪 前の喜を離れ捨念に住し正心正念に身に悦樂溢るゝ定

四禪 其樂も離れ苦も離れ以前の喜憂一切を離れ苦樂共に無き清淨なる捨念に住する定

空無邊處

識無邊處

無所有處

非想非々想處

(5) 巴利には信 Saddha 勤 Viriya 念 Sati 定 Samādhi 慧 Pañña の五根を出せり。

如汝此法作證我亦然。賢者汝來共領此衆。是爲阿羅々伽羅摩師處我與同等。最上恭敬最上供養最上歡喜。我復作是念、此法不趣智、不趣覺不趣涅槃。我今寧可捨此法更求無病無上安穩涅槃。我卽捨此法往詣(1)鬱陀羅々摩子所問曰、鬱陀羅我欲於汝法中學、爲可爾不。鬱陀羅々摩子答我曰、賢者我無不可。汝欲學便學。我復問曰、鬱陀羅汝羅摩子、自知自覺自作證何等法耶。彼答我曰、賢者度一切無所有處、得非有想非無想處成就遊。賢者我父羅摩自知自覺自作證謂此法也。我不久得證彼法。復往鬱陀羅々摩子所問曰、鬱陀羅汝父羅摩是法自知自覺自作證謂度一切無所有處、得非有想非無想處成就遊耶。彼答我曰。如我父羅摩此法作證汝亦然。如汝此法作證我父亦然。賢者汝來共領此衆。……………我復作是念。此法不趣智不趣覺不趣涅槃我今寧可捨此法更求無病無老無死無愁憂慼無穢汗無上安穩涅槃。卽往象頂山南鬱鞞羅梵士村名曰斯那、於彼中地、至可愛樂、山林鬱茂尼連禪河清流盈岸。若族姓子欲有學者可於中學我亦當學、我今寧可於此中學。卽便持草往詣覺樹到已、布下敷尼師檀結跏趺坐、不至得漏盡要不解坐。(2)我求無病無上安穩涅槃、便得無病無上安穩涅槃、求無老無死無愁憂慼無穢汗無上安穩、得無老無死無愁憂慼無穢汗無上安穩、生知生見定道品法、生已盡、梵行已立所作已辦不更受有知如眞我初覺無上正盡覺已。

(1) 鬱陀羅々摩子 Uddaka Rāmaputta

(2) 「比丘等よ我は生法にして生法の禍を知り、不生無上の安穩涅槃を求めて不生無上の安穩涅槃を得たり。我は老病死悲穢の法にして不老不病不死無悲無穢の安穩涅槃を求めて、不老不病不死無悲無穢の安穩涅槃を得たり。『我が心は解脱し、これは我が最後の生にして、再び生有を受くる事なし』との不動の智見我れに生せり」。

六年苦行

爾[1]時[2]菩薩、如是觀察專正思惟、坐訖合口以齒相拄、舌築上顎一念攝心、如是繫念調伏身意以齒舌顎攝心繫念修習之時腋下汗流。更復重發勇猛精進心無所著不錯不亂住寂靜心一定不動如是最上苦身意口悉皆不動。

是時復作如是念言、我今可入不動三昧。爾時菩薩從口喘息及以鼻氣悉皆除滅。口鼻滅已卽時便從兩耳孔中出大風聲、其風聲氣猶如酥蘇在大甕裏搖攪於酪出大音聲、如是如是、菩薩閉其口鼻之氣不使出時、於兩耳孔出風氣聲亦復如是。菩薩復念、我今已發精進之心無處染著、捨於懈怠乃至如是最上苦行最勝難行。重復思惟我可更入不動三昧。

爾時菩薩既寂定身及口意已還止口鼻及耳喘息一切皆杜。既口鼻耳悉寂定已、內風壯大不得出故、氣衝於頂譬如勇健最大力人取好利斧打棒他腦。如是如是。菩薩從其口鼻及耳閉氣不出內風壯故、打腦之聲亦復如是。菩薩復念我今已發精進之心無處染著捨於懈怠乃至如是最上苦行最勝苦行思惟是已卽便更入不動三昧。

爾時菩薩從口鼻耳及頂喘息一切皆停不令其出。乃至遮止不得出故內風強盛在兩肋間迴轉鼓動譬如屠兒或屠兒子善解殺牛而彼屠(兒)等或執利劍或捉利刀而破牛肚或復破肋如是如是菩薩乃至內風強故兩肋間轉穿破之聲亦復如是。思惟是已乃至更發精進之心最勝苦行。

我今還入不動三昧爾時菩薩從口鼻耳閉氣不出內風強故令身熱惱譬如最大二壯力

（1） 『佛本行集經』第二十四。二十五。（辰八、15 foll.）

（2） 巴利『中阿含經』第八十五、菩提童子經に曰く。「王子よ、かくて私はこの様に考へた。齒と齒を嚙み合せ上顎に舌を引き付け、心を抑へ押し付け押し伏せやうと。王子よ私はかく齒と齒を嚙み合せ上顎に舌を引き付け心を抑へ付け押しつけ押し伏せたが兩脇に汗が流れた。例へば力の強い人が弱い人の頭か肩を摑んで抑い付け押し付け押し伏せた（場合の）様に齒と齒を嚙み合せ上顎に舌を引き付け心を抑へ付け押し付け押し伏せて兩脇に汗が流れた。然も王子よ私の精進（の心）は逸がず、私の正念は亂れず確かりして居た。私の身體は元氣に滿ち、その最上の苦惱により最上の壓抑を意識して勇み立つてゐた。

王子よ又私はこの様に考へた。無息定を修め様と。王子よそれで私は口と鼻から出入する呼吸を止めたが、呼吸は口と鼻から出ることが出來ないので、耳から出る風の音が悽まじいものであつた。喩へば鍛冶の鞴の口から悽まじい音を立てゝ出る音の様であつた。然も王子よ私の精近（の心）は逸かず、私の正念は亂れず確かりしてゐた。私の身體は元氣に滿ち、その最上の苦惱に依り最上の壓抑を意識して勇み立つてゐた。

王子よ又私はこの様に考へた。私は（猶）無息定を修めやうと。王子よそれで私は口と鼻と耳から出入する呼吸を止めたが、呼吸は口と鼻と耳とから出る事が出來ないので烈しい風氣が頭の項邊を衝いた。丁度力の強い人が鋭い刀の尖で頭の項邊を衝き攪す様であつた。然も王子よ、私の精進（の心）は逸かず私の正念は亂れず確かりしてゐた。私の身體は元氣に滿ち。その最上の苦惱に依り、最上の壓抑を意識して勇み立つて居た。

王子よ又私はこの様に考へた。私は（猶）無息定を修めやうと。王子よそれで私は口と鼻と耳から出入する呼吸を止めたが呼吸は口と鼻と耳から出ることが出來ないので烈しい頭痛を起した。丁度丈夫な陶器の破片で頭に鉢卷をした様であつた。然も王子よ私の精進（の心）は逸かず私の正念は亂れず確かりしてゐた。私の身體は元氣に滿ちその最上の苦惱により最上の壓抑を意識して勇み立つてゐた。

王子よ又私はこの様に考へた。私は（猶）無息定を修めやうと。王子よ、それで私は口と鼻と耳から出入する呼吸を止めたが、呼吸は口と鼻と耳から出る事が出來ないので、烈しく腹を切り刺した。丁度巧みな屠牛者又は屠牛者の弟子が鋭利な牛割き庖刀で腹を切り割く様であつた。然も王子よ、私の精進（の心）は逸かず、私の正念は亂れず、確かりしてゐた。私の身體は元氣に滿ち。その最上の苦惱に依り最上の壓抑を意識して勇み立つて居た。

王子よ又私はこの様に考へた。私は（猶）無息定を修めやうと。王子よそれで私は口と鼻と耳から出入する呼吸を止めたが呼吸は口と鼻と耳から出る事が出來ないので烈しい熱を身體に生じた。丁度力の強い二人の男が一人の弱い男の

士取一弱人各執一臂(1)、將其向彼大火聚上或燔或炙、如是如是、菩薩以內氣不出故身受熱惱亦復如是。思惟是已、乃至、更發精進之心、一切無著、已捨懶怠得於正念心不散亂、一切寂靜、身口及意並得正受如是勝妙最上苦行。

爾時上界有諸天來見於菩薩如是苦行各相謂曰、今此悉達大智太子已取命終。而彼衆中復更別有其余天子共相謂曰、此之悉達太子、現今其命未終初欲取盡、或復更有諸天子曰、此之悉達大聖太子現亦不死後亦不終。何以故、此之太子是阿羅漢。凡羅漢者有如是行、不須怪之。爾時菩薩在彼蘭若所用心處作苦行時、即得成於最大苦行。是時菩薩坐所、四面周市所有隣比、聚落諸人皆來見於菩薩如是苦行、作如是言、此沙門既行大苦行、是故立名言大沙門。大沙門名起於彼唱。以是義故有此名稱。

爾時菩薩復更如是思惟。世間或有沙門或婆羅門、制限食故而建立行。各守清淨。彼等或復唯食於麥、或食煮麥或食麥屑、或以麥作種々諸食而以活命。如是更復或食烏麻或食粳米、或食小豆或食大豆、乃至或食純大豆飯或大豆汁或大豆屑、或以大豆作種々食持用活命。或有沙門及婆羅門、斷一切食建立淨行。我今亦可斷一切食而行苦行。菩薩如是內心思惟。爾時彼處忽有諸天隱身不現、來菩薩所白言大聖仁者願莫如是思惟此念欲得全斷一切食所以者何、仁今若欲斷一切食而行苦行者、我等諸天各將一切天味下來入於仁者毛孔之中而令仁者得存活命、又復仁者不損害身。爾時菩薩聞此語已如是思

(1) 腕を捕へて燃ゆる炭火に炙り熱する樣であつた。然も王子よ、私の精進(の心)は違まず、正念は亂れず確かりして居た。私の身體は元氣に滿ち、その最上の苦惱に依り最上の壓抑を意識して勇んでゐた。

時に諸天の中には私を見て、沙門喬答摩は死んで仕舞つたと思つた者もあつた。又或者は沙門喬答摩は死んで仕舞はせぬが軈て死ぬであらうと思つた。又或者は沙門喬答摩は死んで仕舞つたのでもない。又死にもしない。沙門喬答摩は阿羅漢である。阿羅漢の生活といふものはこう云ふものであると考へてゐた。

王子よ又私はこの樣に考へた。今度は全然斷食をしやうと。王子よ其時諸天は私に近付き「斷食し給ふ勿れ。若しさうなされば我々は天漿を持ち來つて卿の毛孔から注ぎ入れて卿の生命を支へます」と曰つた。其の時私は思ふには、「私は總ての苦行をなさうと(心に)約した。然るに若し諸天が天漿を持ち來つて毛孔から注ぎ入れて私の生命を支へるならば

惟。我今既語二一切人一曰、我全不レ噉二一切諸食一。而今諸天自隱二其身一將二天味一來、入二我毛孔一令二我活命一。此則是我最大妄語誑二惑一切一。如レ是念已、告二彼天一曰、汝等諸天雖レ有二此心一是事不レ然。爾時菩薩斷二彼諸天如是意一已日別止レ食二一粒烏麻一、或一粳米小豆大豆綠豆赤豆大麥小麥如レ是日々各別一粒。……………身體羸瘦喘息甚弱如二八九十衰朽老公一全無二氣力一手脚不レ隨如是如是。菩薩支節連骸亦然。菩薩如レ斯減二少食飲一精勤苦行、身體皮膚皆悉皺𧘀。譬如二苦瓠未二好成熟一割二斷其蔕一置二於日中一被レ炙萎黃其色似レ熟肌枯皮皺片々自離如二枯頭骨一。菩薩既以二少進食一故一故其兩眼睛深遠陷入、猶二井底水望一レ見二星宿一。……時彼聚落所有羊子牛子馬子行二於彼林一見二於菩薩如是苦行一見已、各生二大歡喜一發二希有心一、恒常承二事供養菩薩一。

* * * * * *

爾[1]時[2]菩薩復作二如是思惟一念言、若有二沙門及婆羅門一過去世時求二自利一故受二於大苦一。或心不レ喜或復身心悉皆不レ喜、如レ是所レ受彼諸沙門及婆羅門不レ過二此苦一。如レ我今求二自利益一故今受二於此身及心不喜等苦一。若復來世有二諸沙門及婆羅門一爲二自利一故所レ受身心一切苦時不レ過二於此一。如レ我今求二自利益一故身心受レ苦。唯未レ證二得上人之法一。未レ得二知見一未レ證二增益一。更復何道而取二菩提一。菩薩更又如是思惟、我念昔在二父王宮內一觀二作田一時、値二一涼冷閻浮樹蔭一、我見レ彼已坐二彼蔭下一、捨二離一切諸欲染心一、厭二薄一切不善之法一、起二分別心一樂二於寂定一而生二喜樂一、證二得初禪一。我今可三還念二彼禪定一此路應レ向二菩提之道一……………爾時菩薩作二是念一。彼之樂者唯遠二諸

(1) 佛本行集經(辰八•18)
(2) それは私の妄語になる」そこで私は諸天の請を斥けて、「其の必要がない」と曰つた。

王子よかくて私はこの樣に考へた。「私はほんの少しづゝ豆の汁か扁豆の汁か山黎豆の汁か豌豆の汁かを一口づゝ食べ樣」と。王子よ、私はその樣に實行して身體は非常に痩せて來た。私の手足はその爲に丁度切つて捨てられて枯れた葦の樣に痩せ私の臀はその爲に駱駄の足の樣に細り、私の背骨はそのために編んだ繩の樣に見ゑ、肋骨はその爲に丁度こはれ腐ちた古家の垂木の樣に突起してゐた。又瞳はそのために眼の中に深く落ち凹んで、丁度深い井戸の中に宿つた星の樣に見ゑた。又頭の皮膚は丁度未熟の苦瓠が風熱に晒されて腐ち萎れた樣に腐ち皺んでゐた。王子よ私は腹の皮を摩すらうとして、背骨を摑み、背骨を摩すらうとして、腹の皮を摑むことが出來た。それ程に、その苦行の爲に腹の皮と背骨が一つにひつ付いてゐた。王子よ又私は大小便をしやうとしてよろめいて其場に倒れ身體を清々しくさせ樣と思つて水をつければ根の腐つた毛が身體から離れ落ちた。王子よ私を見て或者は沙門喬答摩は黑いと云ひ或者は沙門喬答摩は薄黑いと云ひ或者は沙門喬答摩の膚は薄靑いと曰つた。王子よそれ迄清淨であつた私の皮膚の色は全くその爲に亡せて仕舞つたのであつた。

王子よ斯くて私はこの樣に考へた。「過去の如何なる沙門婆羅門が烈しい嚴しい鋭どい苦受を受けたとしても、これは最上である。これより上の苦受はない。又未來の如何なる沙門婆羅門が烈しい嚴しい鋭どい苦受を受けるにしてもこれは最上である。これより上の苦受はない。又現今の如何なる沙門婆羅門が烈しい嚴しい鋭どい苦受を受けてゐるにしても、これは最上であるこれより上の苦受はない。然も私はこの酷烈な苦行に依つて猶超人の法、充分に聖なる智見に達しない。或は別に菩提に達する道があるのではないか」と。

王子よ其の時私はこの樣に思つた。「私は父の釋迦王が耕田の時に凉しい閻浮樹下に坐して欲不善の法を離れ遠離より生ずる樂を味はふ初禪に住して居た事を覺ゑてゐる。或は此が菩提に達する道でなからうかと。かくて私は正念に思惟して此が菩提に達する道であると云ふ見解を生じた。王子よ又私はこの樣に考へた。私は欲と不善とを離れた安樂を恐るべきであらうか。否、欲と不善との泥じてない安樂は恐るべきではない。

乳糜供養

欲及不善法、我今豈可不知彼樂、我今乃可證彼樂、故爲欲成就一切知見。菩薩更復如是[1]思惟、我欲成就知見樂者應得生樂、但我羸瘦無有氣力、豈可以身瘦無力故能得彼樂、我今可爲身求力故而食麤食……[2]爾時軍將斯那耶那婆羅門家有於二女。一名難陀(隋言喜)二名婆羅(隋言力)……將於家常所有之食及油酥等、至於菩薩苦行之處到已頂禮於菩薩足、將所賣食奉上菩薩……是時有一牧羊之子、見於菩薩以苦行故身大瘦損、彼羊子見菩薩如是大精勤苦、向於菩薩心生歡喜、卽便長跪白菩薩、大聖尊者我今意欲承事尊者供養尊重、未審尊者納受乎不。菩薩報言若知時汝欲所作如是果辨。時彼羊子卽爲菩薩塗摩身體、將羊乳汁奉上菩薩以用爲食。又爲菩薩折尼拘陀大樹之枝插於地上作於蔭涼。時彼所折尼拘陀枝、因以菩薩威神力故卽從地生、更著松柯葉花子、皆悉具足。時人見之喚彼樹、爲羊子所種尼拘陀樹。爾時菩薩食麤食時彼五仙人共相謂言、悉達太子今已失禪復其本性。何況不失於持戒也。此今成是懈怠之人、不得寂定心生憒亂。彼等如是平量訖已、於菩薩邊生疲倦心誹謗之心捨離菩薩而別他行漸至向於波羅棕國入鹿野園而修禪定。

[2][3]當於是時而彼善生村主之女從初始見菩薩已來至於彼日爲菩薩作布施熟食並及器皿。……爾時菩薩六年既滿至春二月十六日時、內心自作如是思惟我今不應將如是食食已而證阿耨多羅三藐三菩提。我今更從何誰邊求美好之食誰能與我……

(1) それにこんなにひざく痩せ衰へた身體ではその安樂に達する事は容易でない。私は寧ろ實質ある飯の粥を食べ様さ。かくて王子よ私はその實質ある飯の粥を食べた。處が其の時迄沙門喬答摩が法を體得すればそれを我々に說き示すであらうさ思つて私に隨侍してゐた五人の比丘は「沙門喬答摩は贅澤漢である。贅澤をする爲に精進を捨て離れた」さ日つて私を捨てゝ去つて仕舞つた。

(2) 佛本行集經第二十五(辰八•19)

(3) At that time, in the solitude of Uruvela, there lived in a village a rich man, named Sena. He had a daughter named Sujātā having attaind the years of puberty, she repaired to a place where there was a Banyan tree, and made the following prayer to the divine guardian of the place: — "If I marry a husband that will prove a suitable match, and the first fruit of our union be a male child, 1 will spend annuary in arms deeds 100,000 pieces of silver, and make offering at this spot." Her prayer was heard, and its twofold object granted. When Bodhisattva had ended the six years of his fasting and mortification, on the full moon day of the month Vesakha, Sujātā was preparing to make her grateful offering to the deva of the Place. She had been keeping one thousand cows in a place abounding with sweet vines; the milk of those thounsand was given to five hundred cows; ············ and that sixteen cows fed eight others with their milk. So these eight cows gave a milk, rich, sweet and flavoured beyond all description. On the day of the full moon of Ve-akha, Sujāta rose at an early hour to make ready her offering············ She took the milk and poured it into a large caldron, set on the fire which she had herself kindled. The milk began to boil; bubbles formed on the surface of the liquid, turned on the right and sunk in, not a single drop being spilt out; no smoke arose from the fireplace. Four kings

彼善生村主之女集聚一千牸牛而搆乳取轉更將飲五百牸牛。更別日搆此五百牛轉持乳將飲於二百五十牸牛。後日搆此二百五十牸牛之乳、還更飲百二十五牛。後日搆此一百二十五牸牛乳、飲六十牛。後日搆此六十牛乳、飲三十牛。後日搆此三十牛乳、飲十五牛。後日搆此十五牛乳、著於一分淨好粳米、煮上乳糜。此時現種々相。或復出於滿花瓶相、或現功德河水淵相、或時現於萬字之相、或現功德千輻輪相。或復現出乳糜向上涌沸上至半多羅樹須臾還下。或現乳糜向上、高一多羅樹訖已還下。或現山高一丈夫狀、還入彼器無有一渧離於彼器而落餘處。……………菩薩至尼連河岸於彼水中既澡浴已、…………坐龍女奉献之筌提、取彼善生村主之女所献乳糜、如意飽食、悉皆淨盡。以金鉢器棄擲河中、從坐而起、安庠漸向菩提樹。

三明を得

(2) 爾時菩薩降伏魔怨、滅其毒刺、建立法幢。初離欲惡有覺有觀離生喜樂入初禪、內靜一心滅覺觀定生喜樂入第二禪、離喜受聖人說住於捨有念有想身受樂入第三禪、離憂喜捨苦樂念清淨入第四禪。爾時菩薩住於正定、其心淸白、光明無染、離隨煩惱柔輭調和無有搖動。至初夜分得智得明攝持一心獲天眼通。菩薩卽以天眼觀察一切衆生死此生彼好色惡色勝劣貴賤隨業而往皆悉了知。是諸衆生緣身語意造諸惡業誹謗聖人邪見業故身壞命終便生惡趣。菩薩復觀見諸衆生緣身語意造諸善業正見業故身壞命終便生天

(1) of Devas watched about while the caldron was boiling; the great Brahmā kept open an umbrella over it; a Sakka brought feul and fed the fire. Other Devas, by their Supernatural power, infused honey into the milk, and communicated thereto a flavour, such as the like is not to be found in the abode of men. On this occasion alone, and on the day Bodhisattva entered the state of Nibbāna, the Devas infused honey into his food. .... She mistook Bodhisattva for a Deva and offered the boiled milk with a golden cup. ——— The legend of Gautama by Bigandet. vol. 1 p.p. 78-80. Jātaka l. p. 68.

(2) 方廣大莊嚴經第九(宙四•46)

(3) 巴利中阿含第八十五菩提王子經、(前頁和譯續き)王子よ私は實質ある食事をして欲を離れ不善法を離れ覺と觀との心の作用存し遠離から生ずる喜樂を味はふ初禪に入り、次に覺と觀とを靜め心が透徹し集中し覺も觀もなく定から喜樂の生ずる二禪に入り續いて前の喜をも離れ捨念に住し正心正念に賢聖の所謂捨念に住する者か得るといふ樂を覺ゆる第三禪に入り、引き續いて樂をも苦をも前の喜と憂をも總て無くした不苦不樂捨念正心淸淨の第四禪に入つた。かくて寂靜になり淸淨になり透明になり欲を離れ汚れを去り從順にて何時でも役に立ち堅固にて何物にも煩はさるゝことなき心を以て過去生の事を憶ひ初めた。さうして種々の前生喩へば一生二生………百生千生多數の成壞劫の生を何の生に於ては斯く々々の名であり、斯く々々の氏族斯く々々の種姓であり、斯く々々の職業で斯く々々の苦樂を經驗し斯く々々の壽命であつた事其の處から死んで、何の處に生れ斯く々々の名であり乃至斯く々々の壽命であつたことを委しく細かい處まで想ひ起した。王子よ斯くて私は其の夜の初分に第一明を體得し無明は去り明を生じ闇は破れて光が顯はれた。熱心に不撓に精進にその事に止住したからである。

上[1]。於中夜分攝持一心、證得憶念過去宿命。無量百千那由他拘胝數生、乃至成劫壞劫皆悉憶知。一々住處、若名若姓、若色相若飲食、若苦樂若受生、若死沒、所有色相住處事業、若自若他皆悉了知。菩薩作是念言、一切衆生住於生老病死險惡趣中不能覺悟。云何令彼了知生老病死苦蘊邊際。作是思惟、此老病死從何而有、即時能知、因生故有、以有生故老病死有。如是生者復因何有、即時能知因有故有、有因取故有、取因愛故有、愛因受故有、受因觸故有、觸因六處故有、六處因名色故有、名色因識故有、識因行故有、行因無明故有。……

……復更思惟、因何無故老死無、因何滅故老死滅、即時能知無明滅故即行滅行滅故即識滅、乃至生滅故即老死滅、老死滅故即憂悲苦惱滅。復更思惟、此是無明、此是無明因、此是無明滅、此是滅無明道。更無有余。此是行、此是行因、此是行滅、此是滅行道、乃至此是老死、此是老死因、此是老死滅、此是滅老死道。此是憂悲苦惱如是大苦蘊生乃至滅如是應知此是苦、此是集此是苦集滅、此是滅苦集道、應如是知。菩薩於後夜分明星出時、佛世尊調御丈夫聖智所應知、所應得、所應見所應證彼一切一念相應慧、證阿耨多羅三藐三菩提成等正覺具足三明。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

生[2]死無有量　往來無端緒　求於屋舍者　數々受胞胎

以觀此屋　更不造舍　梁棧已壞　臺閣摧折　心已離行　中間已滅

(1) (次に)この寂靜になり清淨になり透明になり欲を離れ汚れを去り從順にて何時にても役に立ち堅固にて何物にも煩はさるゝことなき心にて衆生の生死を知る事につとめた。淸淨にして人眼を超越する天眼にて衆生の彼處に死して此處に生れ卑賤尊貴美醜幸福不幸の種々の差別あり衆生がそれ々々の業に從つてゐるのを見た。「斯々の衆生は身に惡業を具し口に惡行を具し心に惡行を具して聖者を誹謗し邪見にて邪見より生ずる業を負うて身解けて死後苦所惡所無樂所の地獄に生れ、斯々の衆生は身口意に善行を具し聖者を誹謗せず正見を有し正見から生ずる業に依つて身解けて死後善趣天界に生れる」とこの樣に人眼に超越した淸淨なる天眼にて衆生の生死、卑賤尊貴美醜幸福不幸それぞれ衆生の業に從つて差別あるを見た。王子よ、私はその夜の中分に第二明を體得し、無明は去り明を生じ闇は破れて光が顯はれた。熱心に不撓に精進にその事に止住したからである。

次にこの寂靜になり…………何物に煩はさるゝことなき心を以て漏の滅盡の智慧につとめた。此は苦なりと如實に知り、此は苦の集なりと如實に知り此は苦の滅なりと如實に知り、此は苦の滅の道也と如實に知り、此は漏なりと如實に知り、此は漏の集なりと如實に知り、此は漏の滅也と如實に知り、此は漏の滅の道也と如實に知つた。さうしてかく知り斯く見ることに依つて心は欲漏から解脫し有漏から解脫し無明漏から解脫し、斯く解脫して解脫をしたと云ふ智識が生じた。生は盡きた、梵行は成就した。なすべき事は成し終つた。これが最後の生で、此の後再び生を受くる事はないと。王子よ私はその夜の後分に第三明を體得し、無明は去り明を生じ闇は破れて光が顯はれた。熱心に不撓に精進にその事に止住したからである。

(2) 出曜經第二十八心意品(藏六 47)

Looking for the maker of this tabernacle, I had to run through a course of many births, as long as I could not find (him); painful was birth again and again.

But now, maker of the tabernacle, thou hast been seen; thou shall not make up this tabernacle again. All thy rafters are broken, thy ridge-pole is sundered; the mind, approaching the Eternal, has attaind to the extinction of all desires.——Dhmmapada vv. 153, 154.

二賈客の供養

[1]爾時世尊於彼處盡一切漏除一切結使、卽於菩提樹下結跏趺座、七日不動受解脫樂。爾時世尊過七日已從定意起、於七日中未有所食。時有二賈客兄弟二人一名瓜二名優波離。將五百乘車載財寶去菩提樹不遠而過。時樹神篤信於佛曾與此二賈客舊知識。欲令彼得度卽往至賈人所語言。汝等知不、釋迦文佛如來等正覺、於七日中具足諸法、於七日中未有所食、汝等可以蜜麨奉獻如來。令汝等長夜得利益安穩此樂。爾時兄弟二人聞樹神語已歡喜、卽持蜜麨往詣道樹、遙見如來顏貌殊異、諸根寂定最上調伏如彼調象無有卒暴、如水澄靜無有塵穢。見已發歡喜心於如來所前至佛所頭面禮足在一面立。時二人白世尊言、今奉獻蜜麨慈愍納受。時世尊復作如是念。今此二人奉獻蜜麨。當以何器受之復作是言。過去諸佛如來至眞等正覺以何物受食。諸佛世尊不以手受食也。時四天王立在左右、知佛所念、往至四方、各人取一石鉢奉上世尊。白言願以此鉢受彼賈人麨蜜。時世尊慈愍故卽受四天王鉢令合爲一。受彼賈人麨蜜已、以此勸喩而開化之、卽呪願曰、

所爲布施者　必獲其利義　若爲樂故施　後必得安樂

汝等賈人今可歸依佛歸依法。卽受佛敎言、大德我今歸依佛歸依法。是爲優婆塞中最初受二歸依是賈客二人爲首。

[2]更詣一離婆那樹下結跏趺坐思惟不動。遊解脫三昧而自娛樂…………七日後卽詣文驎樹文驎水文驎龍王宮、到彼已結跏趺坐、七日思惟不動、遊解脫三昧而自娛樂。爾時七

(1) 四分律三十一(列五•3右)　　同本 Mahāvagg: Vinay Text I. p.p. 144–152.

At that time the Blessed Buddha dwelt at Uruvelā, on the bank of the river Nerañjarā, at the foot of the Bodhi tree, just after he had become Sambuddha. And the Blessed One sat cross-legged at the foot of the Bodhi tree uninterrnptedly during seven days, enjoying the bliss of emancipation.

Then the Blessed One (at the end of these seven days) during the first watch of the night fixed his mind upon the Chain of Causation, in direct and in revers order: From Ignorance spring the Sankhāras, from the Sankhāras spring Consciousness, from Consciousness spring Name-and-Form, from Name-and-Form spring the Six provinces (of the six sences), from the Six provinces springs Contact, from Contact springs Sensation, from Sensation springs Thirst, from Thirst springs Attachment, from Attachment springs Existence, from Existence springs Birth, from Birth spring old Age and Death, grief, lamentation, sufferings, dejection, and despair. Such is the origination of this whole mass of Suffering, Again, by the destruction of Ignorance, which consists in the complete absence of lust, the Sankhāras are destroyed, by the destruction of Sankhāras, Consciousness are destroyed, ... by the destruction of Birth, Old Age and Death, grief, lamentation, suffering, dejection and despair are destroyed. Such is the cessation of this whole mass of Suffering.

Then the Blessed One, during the middle watch of the night, and also during the third watch of the night, fixed his mind upon the Chain of Causation in the same way as above.

Then the Blessed One went from the foot of the Bodhi tree to the Ajapāla banyan tree and spent seven days cross-legged at the tree, then went to the Muchalinda tree. And when he had reached it he sat cross-legged at the foot of the tree, uninterruptedly during seven days, enjoying the bliss of Emancipation.

At that time a great cloud appeared out of season, rainy weather, storms and darkness. And the nāga (or Serpent) king Muchalinda came out from his abode, and seven times encircled the body of the Blessed One with his windings, and kept extending his large hood over the Blessed One's head, thinking to himself: May no coldness (touch) the Blessed One! May no heat (touch) the Blessed One! May no vexation by gadflies and gnats, by storms and sunheat and reptiles (touch) the Blessed One!

And at the end of those seven days, when the Nāga king Muchalinda saw the open, cloudless sky, he loosened his windings from the body of the Blessed One, made his own appearance disappear, created the appearance of a youth and stationed himself in front of the Blessed One.

(2) 四分律三十一(列五•6左)

日天大雨、極寒。文驎龍王自出其宮以身遶佛頭蔭佛上。而白佛言不寒不熱耶。不爲風飄日曝不爲蚊虻所觸嬈耶。爾時七日後雨止清明。還解身不還遶佛。卽化作一年少婆羅門在如來前合掌胡跪禮如來足。時世尊七日後從三昧起卽以此偈而讚曰。

離欲歡喜樂　觀察法亦樂　世間無恚樂　不嬈於衆生
世間無欲樂　越度於欲界　能伏我慢心　此最第一樂

爾時文驎龍王前白佛言。我所以身繞如來頭蔭如來者、但恐如來身寒熱風飄日曝蚊虻所嬈。以是故遶佛身頭蔭其上耳。佛告龍王、汝今歸依佛法。答言如是。我今歸依佛法。是謂畜生中受二歸依龍王爲首

爾時世尊遊文驎龍王樹下住已、便往詣阿踰波羅尼拘律樹下、到已敷坐具結跏趺坐作是念言、我今已獲此法、甚深難解難知、永寂休息微妙最上。智者能知非愚者所習。衆生異見異忍異欲異明、依於異見樂於檪窟。衆生以是樂於檪窟故於緣起法甚深難解。復有甚深難解所、滅諸欲愛盡涅槃是處亦難見故我今欲說法餘人不知。則於我唐勞疲苦耳。爾時世尊說此二偈非先所聞。亦未曾說。

我成道極難　爲在檪窟說　貪恚愚痴者　不能入此法
逆流回生死　深妙甚難解　著欲無所見　愚痴身所覆

爾時世尊作是思惟已、默然而不說法。時梵天王遙知如來心中之所念已、念世間大敗壞

(1)

And the Blessed One, perceiving that, on this occasion, pronounced this solemn utterance: Happy is the solitude of him who is full of joy, who has learnt the Truth, who sees (the Truth). Happy is freedom from malice in this world, (self–) restraint towords all beings that have life. Happy is freedom from lust in this world, getting beyond all desires; the putting away of that pride which comes from the thought "I am!" This truly is the highest happiness!"

Then the Blessed One, at the end of those seven days, arose from that state of meditation, and went from the foot of the Muchalinda tree to the Rājāyatana tree; when he had reached it, he sat cross-legged at the foot of the Rājāyatana tree uninterruptedly during seven days, enjoying the bliss of emancipation.

At that time Tapussa and Bhallika, two merchants, came travelling on the road from Ukkala (Orissa) to that place. Then a deity who had been (in a former life) a blood relation of the merchants thus spoke to the merchants: "Here my noble friends, at the foot of the Rājāyatana tree, is staying the Blessed One, who has just become Sambuddha. Go and show your reverence to him, by offering him rice-cakes and lumps of honey. Long will this be to you for a good and for a blessing."

And the merchants took rice-cakes and lumps of honey, and went to the place where the Blessed One was; having approached him and respectfully saluted the Blessed One, they stationed themselves near him, standing near him, the merchants thus addressed the Blessed One: 'May, O Lord, the Blessed One accept from us these rice-cakes and lumps of honey, that may be to us for a good and a blessing!

Then the Blessed One thought: 'The Tathāgatas do not accept food with their hands. Now with what shall I accept the rice-cakes and lumps of honey?' Then the four Mahārāja gods, understanding by the power of their minds the reflection which had arisen in the mind of the Blessed One, offered to the Blessed One, from the four quarters of the horison four bowls made of stone, saying 'May, O Lord, the Blessed One accept herewith the rice-cakes and lumps of honey!' The Blessed One did so and he ate.

And Tapussa and Bhallika, when the Buddha had cleanced his bowl and his hands, bowed down in reverence at the Buddha's feet and said: 'We take our refuge, Lord, in the Buddha and in the Dhamma; may the Buddha receive us as disciples who, from this day forth while our life lasts, have taken their refuge.' These were the first in the world to become lay disciples of the Buddha by the formula which contained only the dyad.

梵天勸請

(1)如來今日獲此妙法、云何默然而住、令世間不聞耶、時梵天如力士屈伸臂頃從彼而來到如來前、頭面禮已在一面立、白世尊言、唯願如來說法、唯願善逝說法。世間衆生亦有垢薄智慧聰明易度者。能滅不善法成就善法。爾時世尊告梵天王、如是如是、梵王如汝所言。我向者在閑靜處而生此念言。我今已獲此法此法甚深難知難解、永寂休息微妙最上、賢聖所知非愚者所習……………我今欲說法余人不知、則於我唐勞疲苦耳。…………是故梵天我默然而不說法。爾時梵天復向佛言、世間大敗壞今如來獲此正法云何默然不說。令世間不聞耶。願唯世尊時演正法流布於世世間亦有垢薄聰明易度者。能滅不善法成就善法爾時梵天說此語已復說偈言。

摩竭雜垢穢　而佛從中生　願開甘露門　爲衆生說法

爾時世尊、受梵天勸請已、卽以佛眼觀察世間衆生。世間生世間長有小垢有多垢。利根鈍根有易度有難度、畏後世罪能滅不善法成就善法猶如憂鉢池鉢頭池拘牟頭池分陀利池憂鉢頭拘牟頭分陀利華、有初出地未出水或有已出地與水齊、或有出水塵水不著。如來亦復如是。以佛眼觀世間衆生世間生世間長少垢多垢利根鈍根、易度難度畏後世罪、能滅不善法成就善法。爾時世尊卽與梵天而說此偈。

梵天我告汝　今開甘露門　諸聞者信受　不爲嬈故說

梵天微妙法　牟尼所得法

(1) 四分律三十二(列五•7) 以下九十三頁に至る總て Mahāvagga。九十三頁を見よ。

Then the Blessed One, at the end of those seven days, arose from that state of meditation, and went from the foot of the Rājīyatana tree to the Ajapāla banyan tree. Then in the mind of the Buddha who was alone, the following thought arose: "I have penetrated this doctrine which is profound difficult to perceive and to understand, which brings quietude of heart, which is exalted, which is unattainable by reasoning, abstruse, intelligible only to the wise. This people, on the other hand, is given to desire intent upon desire, delighting in desire. To this people, therefore, the law of causality and the chain of causation will be a matter difficult to understand; Now if I proclaim the doctrine, and other men are not able to uderstand my preaching, there would be but weariness and annoyance to me. And then the following stanzas, unheard before, occurred to the Buddha:

"With great pains have I acquired it. Enough! why should I now proclaim it? This doctorine will not be easy to beings that are lost in and hatred.

Given to lust, surrounded with thick darkness, they will not see what is repugnant to their mind, abstruse, profound, defficult to perceive, and subtle."

When the Buddha pondered over this matter, his mind became inclined to remain in quiet, and not to preach the doctrine. Then Brahmā Sahampati, thought: "Alass! the world perishes! The world is destoyed! if the mind of Tathāgata inclines itself to remain in quiet, and not to preach the doctrine." Then the Brahmā disappeared from Brahmā's world, and appeared before the Buddha as quickly as a strong men might stretch his bent arm out or draw back his out-stretched arm.

And after having saluted the Buddha, the Brahmā said to him: "Lord, may the Buddha preach the doctrine! may the perfect One preach the doctrine! there are beings whose mental eyes are darkened by scarecely any dust; but if they do not hear the doctrine, they cannot attain salvation. These will understand the doctrine." He further said: "The Dhamma hitherto manifested in Magadha has been impure, thought out by contaminated men. But do thou now open the door of the Immortal; Let them hear the doctrine discovered by the spotless One! As a man standing on a rock, on mountain's top, might overlook the people all around, thus O wise One, assending to the highest palace of Truth, look down, all-seeing One, upon the people lost in suffering, overcome by birth and decay, - - thou, who hast freed thyself from suffering! Arise O hero; O victorious One! Wander through the world, O leader of the pilgrim band, who thyself art free from debt. May the Buddha preach the doctrine, there will be people who can understand it!"

爾時梵天、知下世尊受二勸請一已上、禮二世尊足一、右遶三匝而去。卽沒不ㇾ現。

* * * * * *

(1)如人不ㇾ上二須彌頂一　豈能得ㇾ見二世界邊一、　大聖菩提道已成、　速登二法堂一智眼照。
引二導群盲一令ㇾ離ㇾ苦　悲二愍一切諸衆生一　世尊疾捨二此樹間一　遍世遊行廣濟度。
自得二已利一天人勝　諸苦盡已得二清涼一　佛不ㇾ增二減諸善根一　到二於清淨法彼岸一
如來世間無ㇾ有ㇾ比　況欲二勝上一亦復無　三界獨步稱二世尊一　……………
衆生久來被二毒箭一　所謂天人等世間　値二遇世尊一應二拔除一　願爲ㇾ彼作二歸依處一
多時失ㇾ路今化取　不ㇾ聞二正義一無量劫　如三羸瘦人得二脂腴一　如三乾土地得二水澆一
唯願世尊降二法雨一　諸佛無ㇾ有二慳惜法一　三世諸聖樂二行壇一　過去諸佛入二涅槃一
無ㇾ不ㇾ說二是正眞法一　尊今亦是祁羅種　能度二無量諸衆生一　共二彼諸佛一無ㇾ有ㇾ殊
敎二衆善法一今時至　開二諸衆生清淨眼一　普令ㇾ得ㇾ見二正道途一　入二於邪見荊棘林一
應ㇾ示三純直離二險逕一　乘二此路一已得二甘露一　世尊衆瞽欲ㇾ墮ㇾ坑　余人濟拔悉不ㇾ能
大險引導世尊是　又能方便敎二發意一　今時已至願莫ㇾ辭　共ㇾ聖多劫不ㇾ可ㇾ期
猶如二優曇花難一ㇾ遇　……………　世尊已渡二煩惱海一　衆生沒溺須ㇾ出ㇾ之
譬如下人得二伏藏財一　持以富ㇾ他不中獨用上　世尊得ㇾ法無盡藏　願爲二衆生一分別宣。

When he had spoken thus, the Buddha said to the Brahmā : "The following thought Brahmā, has occurred to me: I have penetrated this doctrine,…………… This doctrine will not be easy to understand …………… When I pondered over this matter my mind became inclined to remain in quiet, and not to preach the doctrine."

And a second time ………… a third time the Brahmā solicited the Buddha to preach the doctrine.

Then the Buddha when he had heard the Brahmā's solicitation, looked, full of compassion towards sentient beings, over the world, with his all-perceiving eye of a Buddha. And he saw beings whose mental eyes were darkened by scarecely any dust, and beings whose eyes were covered by much dust, beings sharp of sense and blunt of sense, of good disposition and of bad disposition, easy to instruct and difficult to instruct, some of them seeing the dangers of future life and of sin.

As, in a pond of blue lotuses, water-roses, white lotuses, some lotuses born in the water, do not emerge over the water, but thrive hidden under the water; ………………… and other lotuses, born in the water, grown up in the water, stand emerging out of the water, and the water does not touch them, – thus the Buddha, looking over the world with the eye of a Buddha saw beings of different kinds and addressed the Brahmā in the following stanzas : "Wide opened is the door of the Immortal to all who have ears to hear; let them send forth faith to meet it. The Dhamma sweet and good I spake not, Brahmā, despairing of the weary task, to men."

Then the Brahmā Sahampati understood: "The Buddha grants my request that He should preach the doctrine." And he bowed down before the Buddha, and passed round him with his right side towards him; and then he straightway disappeared.

(1) 佛本行集經三十三(辰八•49)

異學優波迦

[1]爾時世尊復作是念、我今當先與誰說法、聞便卽解。卽念阿蘭迦蘭垢薄利根聰明有智、我今寧可先與說法。念已復更智生。今阿蘭伽蘭命終已經七日。亦有諸天來白我言阿蘭伽蘭命終來七日、時佛作是念言、何其苦哉、汝有所失、此法極妙、如何不聞。若得聞者速疾得解。爾時世尊復作是念、我今當與誰說法速疾得解。念曰鬱頭藍子垢薄利根聰明有智。我今寧可先與說法作是念已復更智生鬱頭藍子昨日命終。諸天亦來白我言、鬱頭藍子昨日命終。佛言、何其苦哉、汝有所失、此法微妙如何不聞若得聞者速得解脫。

爾時世尊復作是念。我今先當與誰說法聞我法者速得解脫。此五比丘執事勞苦、不避寒暑侍衞供養我今寧可先與說法耶。時世尊復作是念、五比丘今於何處居止。卽以天眼清淨過於天人(眼)、觀五比丘於波羅㮈國仙人鹿苑中見已、卽往詣彼仙人鹿苑所。

時見優陀耶梵志亦在路行。遙見世尊、前白佛言、瞿曇、諸根寂靜顏色怡悅、汝師是誰、爲從誰學、爲學何法。爾時世尊以偈報言、

一切智爲上　一切欲愛解　自然得解悟　云何從人學
我亦無有師　亦復無等侶　世間唯一佛　澹然常安穩
我是世無着　我爲世間最　諸天及世人　無有與我等
欲於波羅㮈　轉無上法輪　世間常盲冥　當擊甘露鼓

梵志問曰、向瞿曇所說我無著最勝者、願聞其義。佛以偈報言。

(1) 以下七四頁五比丘濟度まで四分律第三二(列五•7)

Now the Buddha thought: "To whom shall I preach the doctrine first?" Who will understand this doctrine easily?" And the Buddha thought: "There is Ālāra Kālama; he is clever, wise, and learned; long since have the eye of his mind been darkened by scarcely any dust. What if I were to preach the doctrine first to Ālāra Kālama? He will easily understand this doctrine." Then an invisible deity said to the Buddha: Ālāra had died seven days before. And the Buddha thought: "Highly noble was Ālāra Kālama. If he had heard my doctrine, he would easily have understood it."

Then the Buddha thought of Uddaka Rāmaputta as the same way with Ālāra Kālama, and knew he has died seven days ago. Then the Buddha thought: "The five bhikkhus have done many servises to me, they attented on me during the time of exertions to attain sanctification by undergoing austerities. And the Buddha saw by the power of his divine, clear vision, surpassing that of men, that the five bhikkhus were living at Benares in the park Isipatana. So He went forth to Benares.

Now Upaka, a man belonging to Ajīvaka sect, saw the Buddha travelling on the road, between Gaya and the Bodhi tree; and he said to the Buddha: "Your countenance, friend, is serene; your complexion is pure and bright. In whose name, friend, have you retired from the world? Who is your teacher? Whose doctrine do you profess?" The Buddha said to him, in the following stanzas: "I have overcome all foes; I am all-wise; I am free from stains in every way; I have left everything; and have obtained emancipation by the destruction of desire. Having myself gained knowledge, whom shall I call my master? I have no teacher; no one equal to me; in the world of men and gods, no beings is like me. I am the holy one in this world, I am the highest teacher, I alone am the absolute Sambuddha; I have gained coolness by the extinction of all passion and have obtained Nirvāna. To found the Kingdom of Truth I go to the city of the Kāsis; I will beat the drum of the Immortal in the darkness of this world."

Upaka replied: "You profess then, friend, to be the holy, absolute Jina." Buddha said: "Like me are all Jinas who have reached extinction of the Āsavas; I have overcome all states of sinfulness; therefore, Upaka, am I the Jina.

When he had spoken thus, Upaka the Ajīvaka replied: "It may be so, friend;" shook his head, took another road, and went away.

我脫一切結　得盡於諸漏　我勝諸惡法　優陀我最勝

爾時梵志默然。時世尊捨去往仙人鹿苑所。五比丘遙見世尊來、各々相誡曰。此瞿曇沙門行不着路、迷荒失志、若來至此汝等莫與言語、亦莫禮敬。更別施小座令座。時世尊漸々至五比丘所。時五比丘不自覺皆起迎禮敬、或有爲敷座、或有爲執衣鉢者、或有取水與洗足者、時世尊作是念、此愚痴人不能堅固其志共作制限而復自壞。何以故、不堪佛威神故。我今寧可卽就座而坐。

[1](五比丘)猶輕如來面呼姓名、佛告五人、汝等愚痴立要、云何而不牢固、汝莫輕於佛面稱姓名、自使長夜受大苦報。我今已成無上正覺、應共一心聽受敎誡。汝若隨順無違無逆、不久當得族姓出家淨修梵行、現證道果、生死已盡梵行已立所作已作、解了五陰止宿泥洹。五人復言、卿先如是難行苦行、尙不得過人法聖利滿足。況今失道放恣多。欲過人之法其可得乎。佛復告曰、汝等莫輕如來無上正覺。佛不失道、亦不多欲。五人聞已乃捨本心。

佛[1]復告曰、世有二邊不應親近、一者貪著愛欲說欲無過。二者邪見苦形無有道迹。捨此二邊便得中道生眼智明覺向於泥洹。何謂中道所謂八正。正見正思正語正業正命正方便正念正定是爲中道。復有四聖諦苦聖諦苦集聖諦苦滅聖諦苦滅道諦。何謂苦聖諦所謂生苦老苦病苦憂悲惱苦、怨憎會苦、愛別離苦所求失苦、以要言之五陰盛苦、是謂苦聖諦。何謂苦集聖諦、所謂有愛及俱生煩惱處々樂著、是謂苦集聖諦。何謂苦滅聖諦所謂愛斷

The Buddha came to Benares, to the park Isipatana, to the place where the five bhikkhus were. When they saw him they concerted with each other, saying, "Friend, there comes the samaṇa Gotama, who lives in abundance, and has turned to an abundant life. Let us not salute him; nor rise from our seats when he aproach; nor take his bowl and his robe from his hands. But let us put a seat; if he likes, let him sit down. "But when the Buddha aproached they kept not their agreement. And the Buddha sat down on the seat they have prepared; and washed his feet. Now they addressed the Buddha by his name and with the appellation, "Friend."

The Buddha said to them: "Do not address, O bhikkhus, the Tathāgata by his name and the appellation, 'Friend.' The Tathāgata is the holy absolute Sambuddha. Give ear, O bhikkhus, the Immortal has been won by me; I will teach you; to you I preach the doctrine. If you walk in the way I show you, you will, ere long, have penetrated to the truth, having yourselves known it and seen it face to face; and you will live in the possession of that highest goal of the holy life, for the sake of which noble youths fully give up the world and go forth into the houseless state."

The five bhikkhus said to the Buddha: "By those observances, friend Gotama. by those austerities, you have not been able to obtain power surpassing that of men, nor the superiority of full and holy knowledge and insight. How will you now, living in abundance, having given up your exertions, having turned to an abundant life, be able to obtain power surpassing that of men, and the superiority of full and holy knowledge and insight?"

The Buddha said to them: "The Tathāgata, O bhikkhus, does not live in abundance,············ The Tathāgata is the holy, absolute Sambuddha. Give ear, O bhikkhus; I will teach you············ A second time and a third time they said to the Buddha the same thing as above.

When they had spoken thus, the Buddha said to them: "Do you admit, O bhikkhus, that I have never spoken to you in this way before this day?" "You have never spoken so, O Lord." "The Tathāgata, O bhikkhus, is the holy, absolute Sambuddha. Give ear, O bhikkhus, I will teach you················

And the Buddha was able to convince the five bhikkhus, and they again listened willingly to the Buddha. They gave ear, and fixed their mind on the knowledge which the Buddha imparted to them.

(1) 五分律第五(張一•30)

And the Buddha thus addressed the five bhikkhus: "There are two extremes, O bhikkhus, which he who has given up the world, ought to avoid. What are these two

無レ餘滅盡泥洹是謂二苦滅聖諦一。何謂二苦滅道聖諦一所謂八正道是謂二苦滅道聖諦一。是法我先未レ聞。眼生智生明生覺生通生慧生是法應レ知我先未レ聞眼生乃至慧生是法已知。我先未レ聞眼生乃至慧生是苦聖諦、是苦聖諦已知。我先未レ聞眼生乃至慧生、是苦集聖諦。是苦集聖諦應レ斷、是苦集聖諦已斷。我先未レ聞眼生乃至慧生是苦滅聖諦、是苦滅聖諦應レ證、是苦滅聖諦已證。我先未レ聞眼生乃至慧生是苦滅道聖諦、是苦滅道聖諦應レ修、是苦滅道聖諦已證。我先未レ聞眼生乃至慧生我已如實知。是三轉十二行法輪得レ成二無上正覺一。說二是法一時地爲六返震動。

憍陳如遠二離塵垢一、於二諸法中一得二法眼淨一。佛問憍陳如解未。憍陳如解未。憍陳如答曰、已解世尊。地神聞已告二虛空神一、虛空神告二四天王天一、四天王天告二忉利天一、如レ是展轉至二梵天一言、佛今於二波羅　一轉二無上法輪一先所レ未レ轉。若沙門婆羅門、若天若魔、若梵一切世間所レ未レ曾レ轉。諸天歡喜兩二種々花一。皆有二光明一如二星墜一レ地。於二虛空中一作二天伎樂一。於レ是憍陳如從レ坐起、頂二禮佛足一白レ佛言、世尊願與二我出家、受一具足戒一。佛言善來比丘受二具足戒一於二我善說法律一能盡二一切苦一淨二修梵行一。憍陳如鬚髮自墮、袈裟著レ身鉢盂在レ手。是爲下憍陳如已得二出家一受上具足戒一。自レ是已後名爲二阿若憍陳如一。佛便爲二四人一說法教誡。跋提婆頗二人得二法眼淨一見レ法得レ果。見レ法至レ果已從レ坐立頂二禮佛足一白レ佛言、世尊願與二我出家一受二具足戒一。…………佛復爲二二人一說法教誡。額鞞摩訶納得二法眼淨一見レ法得レ果受二具足戒一亦如二上說一。

extremes? A life given to pleasures, devoted to pleasures and lusts: this is degrading, sensual, vulger, ignoble, and profitless; and a life given to mortifications: that is painfull, ignoble, aud profitless. By avoiding these two extremes, O bhikkhus, the Tathāgata has gained the knowledge of the Middle Path which leads to insight, which leads to wisdom, which conduces to calm, to knowledge, to the Sambodhi, to Nirvāna.

"Which, O bhikkhus, is this Middle Path the knowledge of which the Tathāgata has gained, which leads to insight, to wisdom, and conduces to calm, to knowledge, to the Sambodhi, and to Nirvāna? It is the holy eightfold Path, namely, Right Berief, Right Aspiration, Right Speech, Right Conduct, Right Means of Livelihood, Right Endeavour, Right Memory, Right Meditation. This, O bhikkhus, is the Middle Path the knowledge of which the Tathāgata has gained, which leads to insight··············· which conduces··········· to Nirvana."

"This is the Noble Truth of Suffering; Birth,········ decay,········ illness,············ death,········ presence of objects we hate,········ separation from objects we love,········ not to obtain what we desire is suffering. Briefly, tbe fivefold clinging to existence is suffering. This is the Noble Truth of the cause of suffering; Thirst, that leads to rebirth, accompanied by pleasure and lust, finding its delight here and there. This thirst is threefold, namely, thirst for pleasure, thirst for existence, thirst for prosperity. This is the Noble truth of the Cessation of suffering: it ceases with the complete cessation of this thirst,— a cessation which consists in the absence of every passion,— with the abandoning of this thirst, with the doing away with it with the destruction of desire. This is the Noble Truth of the Path which leads to the cessation of suffering: that holy eightfold Path, that is to say, Right Belief,··········· Right Meditation.

This is the Noble Truth of Suffering; of this doctrine, which formerly had not been heard of, have I obtained insight, knowledge, understanding, wisdom, intuition.

"This Noble Truth of Suffering must be understood,··········· and has been understood by me. This is the Noble Truth of the cause of Suffering, and this Noble truth of the cause of Suffering must be abandened,··········· and has been abandoned by me. This is the Noble Truth of the cessation of suffering, and this Noble Truth of the cessation of suffering must be seen face to face,··········· and has been seen. This is the Noble truth of the Path which leads to the cessation of suffering, and this Noble Truth which leads to the cessation of suffering must be realized,········ and has been realized by me.

耶舍出家

佛告五比丘、汝等一心求正斷煩惱。我先亦一心求正斷煩惱、故得成無上正覺。於意如何、色爲是常、爲無常乎。答曰無常。又問若無常者爲苦爲樂。答曰苦。又問若苦爲我爲非我。答曰非我。受想行識亦如是。問答亦如上。是故諸比丘色若內若外若過去未來現在皆應如實見於非我、受想行識亦如是。夫爲聖弟子應作是觀、厭離無染便得解脫、得解脫智。梵行已立所作已作。說是法時五比丘一切漏盡、得阿羅漢道。爾時世間有六阿羅漢。

(1)復有長者子、名曰耶舍。本性賢善厭離世間、喜樂聞法。世尊作是念、彼耶舍長者子、當以信出家。便往婆羅水邊敷草坐宿。時彼長者子五欲自娯已便得暫眠。一切伎直皆眠臥。長者子須臾便覺。視己屋舍猶若丘塚。觀諸伎直皆如木人、更相荷枕鼻涕目淚口中流涎。琴瑟箏笛樂器縱橫。甚大驚怖生厭難心、走向父所住處見亦如是。益生厭離。卽便向閤、閤忽自開、向門及大城門皆自然開。逕趣婆羅水邊高聲大唱。我今憂厄無所歸趣。爾時世尊伸金色臂招言。童子來此、此處無爲無有憂厄。耶舍聞佛語聲一切憂厄豁然消除。卽脫琉璃屐著於岸邊渡水詣佛。遙見世尊姿容殊特猶若金山、生歡喜心到已頭面禮足却坐一面。佛爲說種々妙法示敎利喜、次說四諦苦集滅道。卽於坐上遠離塵垢、得法眼淨。後伎直覺共求耶舍不知所在、白其父母。父母四向推求絡繹而追、…………其父夜至城門、待開出城、見其屐跡尋跡追之、既到水邊見琉璃屐在岸上、乍喜乍悲、卽捨屐渡水。佛遙見之恐壞子善心化令有障使子見父而父不見子父問佛曰、沙門見我子不。佛言且坐、若

"As long, O Bhikkhus, as I did not possess with perfect purity this true knowledge and insight into these four Noble Truths, with its three modifications and its twelve constituent parts; so long, O Bhikkhus, I knew that I had not yet obtained the highest, absolute Sambodhi in the world of men and gods, in Māra's and Brahmā's world, among all beings, Sāmanas and Brāhmanas, gods and men.

"But since I possessed with perfect purity this true knowledge and insight into this four Noble Truth, with its three modifications and twelve constituent parts, then I knew that I had obtained the highest, universal Sambodhi in the world of men and gods.

"And this knowledge and insight arose in my mind: "The emancipation of my mind cannot be lost; this is my last birth; hence I shall not be born!"

Thus the Buddha spoke. The five bhikkhus were delighted, and they rejoiced at the words of the Buddha. And when this exposition was pronounced, the venerable Kondañña obtained the pure and spotless Eye of the Truth: 'Whatsoever is subject to the condition of origination, is subject also to the condition of cessation.'

And the Buddha pronounced this solemn utterance: 'Truely Kondañña has pereciv-ed it, ("Aññāsi") truely Kondañña has perceived it! 'Hence the venerable Kondañña received the name Aññata-Kondañña.

And the venerable Aññata-Kondañña, having understood the Truth ············ thus spoke to the Buddha: "Lord, let me receive the pabbajja and upasampada ordination from the Buddha." "Come, O Bhikkhu," said the Buddha, "well taught is the doctrine; lead a holy life for the sake of the extinction of suffering." Thus this venerable person received the upasampada ordination.

And the Buddha administerd to the other bhikkhus exhortion and instruction by discourses relating to the Dhamma. And the venerable Vappa, Bhaddiya, Mahānāma, and Assaji having seen the Truth, having mastered the Truth received the upasampada ordination.

(1) 正分律第一五(張一•91)

Yasa awoke sooner than usual, and saw his attendants sleeping; one had her lute leaning against her arm-pit; one had her tabor leaning her neck; one had her drum against her arm-pit; one had dishevelled hair; one had saliva flowing from her mouth; and they are muttering in their sleep. One would think it was a cemetery one had fallen into. When he saw it the evils of the life he led manifested themselves to him; his mind became weary of worldly pleasure. And Yasa gave utterance to this Solemn exclamation; 'Alas! what distress, what danger!'

在之者何憂不見。聞此語念言沙門必不妄語便前禮佛足却坐一面。佛爲說種々妙法示教利喜。所謂施論戒論生天論五欲過患出生諸漏在家染累出家不著、說如是種々助菩提法然後說諸佛常所說法所謂苦集盡道。彼即坐上遠離塵垢得法眼淨見法得果已。受三自歸次受五戒。是爲諸優婆塞於人中耶舍父最初受三歸五戒。耶舍聞佛爲父說四眞諦法漏盡意解。然後令其父子兩得相見。父語子言、汝起還家、汝母失汝憂愁殆死。佛語其父言、若人解脫於漏寧能還受欲不。答言不能。佛言我爲汝說法。時耶舍觀諸法漏盡、心得解脫。其父白佛言、佛爲我說法而使耶舍快得善利。於是耶舍從坐起白佛言、世尊願與我出家受具足戒佛言善來比丘乃至鉢盂在手亦如上說。爾時世間有七阿羅漢。時耶舍父從坐起頂禮佛足白佛言。惟願世尊與耶舍受我明日食。佛默然受之。更頂禮足右繞三匝而去、還家辨種々多類飲食。佛至時將耶舍著衣持鉢往到某家就座而坐。長者夫婦手下食、食已行澡水畢、婦取小牀於佛前坐。佛言姉妹汝歸依法歸依僧依比丘僧。即受三歸次受五戒。是爲耶舍母初受三自歸五戒。爾時世尊爲耶舍母擧家大小說種々妙法示教利喜皆遠離塵垢得法眼淨見法得法。見法得法已皆受三自歸次受五戒。

爾時耶舍有四友人一名滿足、二名善博、三名離垢、四名牛王。聞耶舍於沙門瞿曇所出家修梵行共議言其道必勝。乃使豪族不顧世榮。我等可共到大沙門所淨修梵行。四人欣悅慕道於心便往耶舍所問言。汝所修梵行豈能具足爲最勝乎。答曰此道無量爲最勝也。便

And Yasa, going forth into houseless state, through the gate which was opened by non-human-beings, went to the deer park Isipatana. He, when heard there was no danger and no distress, became joyfull; and sat down near him, the Buddha preached to him in due course: that is to say, he talked about the merits obtaind by arms-giving, about the duties of morality, about heaven, the evils, the vanity, and the sinfullness of disires, and about the blessings of the abandonment of desire. When the Buddha saw that the mind of Yasa was prepared, impressive, free from obstacles to understand the Truth, elated, and believing, then the Buddha preached what is the principal doctrine of the Buddha, namely the four Truths. Just as a clean cloth free from black specks properly takes the dye, thus Yasa even while sitting there, obtained the pure spotloss Eye of the Truth.

The setthi, the father of Yasa, seeking for Yasa, went himself to the deer park Isipatana and saw on the ground the marks of Yasa's gilt slippers, so he followed them up. He went to the Buddha, but he could not see Yasa by the miraculous power of the Buddha.

The setthi, by the preaching of the Buddha, saw the Truth, penetrated the Truth, and said to the Buddha; 'Glorious, Lord!. just as if one should set up, Lord, what had been overturned, should reveal what had been hidden, or should point out the way to one who had lost his way, or should bring a lamp into the darkness, in order that those who had eyes might see visible things, thus has the Buddha preached the doctrine in many ways. I take my refuge in the Buddha, in the Dhamma and in the Sangha; may the Buddha receive me from this day forth while my life lasts as a disciple who has taken his refuge in him.

This is the first person in the world who became a lay-disciple by the formula of the holy triad.

And Yasa, while the instruction was administered to his father,............... had his mind released the Āsavas, and soon after the Setthi was gone, received the upasampada ordination. At that time there were seven Arahats in the world.

And in the forenoon of the next day, the Buddha having put on his under-robes took his alms-bowl and his cīvara on, went with Yasa, as his attendant to the house of the setthi............... And by the preaching of the Buddha, the mother and the wife of the venerable Yasa obtained the pure, and spotless Eye of the Truth: 'Whatever is subject to the condition of origination is subject also to the condition of cessation.' And they took their refuges in the Three Ratnas. These were the first females in the world who became lay disciples by the formula of the holy triad.

將四人往到佛所頂禮佛足却住一面。佛爲說種々妙法示敎利喜。皆於坐上遠離塵垢得法眼淨見法得果。…………受具足戒。受戒未久懃修不懈得阿羅漢。爾時世間有十一阿羅漢。耶舍昔所交遊復有五十人。聞耶舍於瞿曇所修行梵行、共議出家乃至得阿羅漢皆如上說爾時世間有六十一阿羅漢

[1]於是世尊告諸比丘。汝等各々分部遊行世間。多有賢善能受敎誡者。吾今獨往優爲界鬱毘羅迦葉所而開化之。諸比丘受敎分部而去。

[2]世尊從鹿苑漸々遊行、到婆羅林在樹下坐。時有同友三十人、各將其婦於中遊戲。一人無婦。雇一婬女假好衣服共遊此園。欲極情肆樂。而彼婬女著其好衣忽然叛去。相助追覓至婆羅林。遙見世尊姿容挺特猶若金山、見已生希有心、皆到佛所頂禮佛足却坐一面。向佛曰、大沙門見有一女人來不。佛言寧欲自求爲欲求他。答曰我寧自求不求婦女。佛言、且坐爲汝說法。皆受敎更禮而坐。佛爲說種々妙法示敎利喜乃至苦集盡道。三十人皆遠離塵垢得法眼淨見法得果。出家受具足戒。

世尊便到迦葉所。迦葉事一毒龍、著別靜室無敢入者。唯除迦葉。佛故暮往到其所、求索寄止龍室中宿。答曰甚不愛也。中有毒龍。恐相害耳、佛言無苦龍不害我。答言若不畏者隨意入宿。佛卽持草入室敷座而坐作是念、我當稍化龍身使形如著。適坐須臾龍大瞋恚身皆烟出。佛亦出烟。龍擧身火然。佛亦擧身出火。二火俱盛龍室烔然。時迦葉及諸弟子來繞龍

Now four lay persons, friends of Yasa, belonging to the setthi families of Benares, by name Vimala, Subāhu, Punnaji, and Gavanpati, heard that Yasa has cut off his hair and beard, and has gone forth into the houseless state, then they thought: 'Surely that cannot be a common doctrine and discipline.' So they went to the Buddha, led by their friend Yasa and through the preaching of the Buddha, having seen the Truth, received the upasampada ordination. And while they received exhortation and instruction from the Buddha by discourse relating to the Dhamma, their minds became free from attachment to the world, and were released from the Āsavas. At that time there were eleven Arahats in the world.

Now fifty persons, friends of Yasa, became arahats in the same way as above, so at this time there were sixty-one arahats in the world,

(1) 五分律第一六(張二•1)

And the Buddha said to the Bhikkhus: 'I am delivered from all fetters human and divine. You, O Bhikkhus, are also delivered from all fetters, human and divine. Go ye now, O Bhikkhus, and wander, for the gain of the many, for the welfare of the many, out of compassion for the world, for the good, for the gain, and for the welfare of gods and men. Let not two of you go the same way. Preach, O Bhikkhus, the doctrine which is glorious in the beginning, in the middle and in the end, in the spirit and in the letter; proclaim a comsummate, perfect, and pure life of holiness. There are beings whose mental eyes are covered by scarecely any dust,but if the doctrine is not preached to them, they cannot attain salvation. They will understand the doctrine. And I will go also, O Bhikkhus, to Uruvelā, to Senānini- gama, in order to preach the doctrine.'

(2) 五分律第一五(張一•93)

Now on the way to Uruvelā, the Buddha sat down at the foot of a tree. At that time there was a party of thirty friends, rich young men, who were sporting in that same grove together with their wives. One of them had no wife; for him they had procured a harlot. Now while they were indulging in their sports, that harlot took up the articles belonging to them and ran away. Then they, roaming about that grove in search of that woman, saw the Buddha sitting at the foot of a tree, and said to the Buddha: 'Pray Lord, has the Blessed One seen a woman passing by?' 'What have yon to do, young men, with the woman?' 'We were sporting, Lord, in this grove, and a harlot has taken up the article belonging to us, and ran away, we are in search of that woman and roam about this grove.' 'Now what think you, young men? which would be the better for you; that you should go in search of a woman, or that yon should go in search of yourselves?' 'That, Lord, would be the better for us, that we should go in search

三迦葉の濟度

室[1]悲慟言、可惜大沙門不用我語為龍所害。明旦佛以鉢盛龍而出、語迦葉言此鉢毒龍衆人所畏今以降矣。迦葉心念、是大沙門雖神不如我道眞……爾時黑雲大雨七日佛所住林及迦葉家浩成一水。迦葉恐佛為水所漂、乘船來視、乃見世尊在尼連禪河水上經行。迦葉復念、是大沙門神則神矣。水大瀑漲不為漂沒乃方在上經行然不如我已得阿羅漢道。於是世尊飛昇虛空告迦葉言、汝非羅漢。何為虛妄自稱得道。迦葉白言實爾世尊實爾世尊。復白佛言、願得於大沙門所出家受具足戒。佛言報汝弟子未。答言未佛言可先報之。迦葉受教還語弟子言、汝等知不、我欲於大沙門所淨修梵行。汝等從我為善、不樂隨意。五百弟子同聲言、我等見佛降龍已、生信心但待師耳願皆隨從。……迦葉及五百弟子既受戒已以先被服事火之具皆棄尼連禪河中。

迦葉有二弟、大名那提迦葉、小名伽耶迦葉。大弟有三百弟子、小弟有二百弟子。去兄一由旬居在下流見兄事火之具隨水來下、恐兄為惡人所害大水所漂、二弟卽將五百弟子逆水而上、見兄師徒皆作沙門恠而問之。何故如此。答言、此道最勝出要之法、無有過者。二弟及其五百弟子皆共議言、我兄智慧第一而今樂之。此道必勝皆當相與同兄出家卽共詣佛出家受具足戒。

時世尊度此千梵志授具足戒已、將至象頭山中。象頭山中有千比丘僧以三事教化。一者神足教化二者憶念教化三者說法教化。彼神足教化者或化一作無數、或無數還為一、內

of ourselves.' 'If so, young men, sit down, I will preach you the Truth.'

And as the result of the preaching, these thirty persons received the upasampada ordination.

....

(1) 五分律第一六(張二•1)

And the Buddha went to the hermitage of the Jatila Uruvela-Kassapa; having gone there, he said to Kassapa: 'If it is not disagreeable to you Kassapa, let me spend one night in the room where your sacred fire is kept.' 'It is not disagreeable to me, great Samana, but there is a savage Nāga (or serpent) king of great magical power, a dreadfully venomous serpent; let him do no harm to you.' 'he is not likely to do any harm to me. Pray, Kassapa, allow me a place in the room where your fire is kept.' 'Stay there, Samana, as you wish it.'

Then the Buddha entered the room, and sat down cross-legged, keeping the body erect and surrounding himself with watchfulness of mind................ That night having elasped, the Buddha, leaving intact the skin, hide, ligaments, bones and marrow of that Nāga, and conquering the Nāga's fire by his fire, threw him into his alms-bowl, and show him to Kassapa, saying 'Here you see the Nāga, Kassapa; his fire has been conquered by my fire.' Then Kassapa thought: 'Truely the great Samaṇa has possess high magical powers and great faculties, in that he is able to conquer by his fire the fire of that savage Nāga king, who is possessed of magical power, that dreadfully venomous serpent. He is not, however, holy arahā as I am.'....................

After having seen many magical powers displayed by the Buddha, still Kassapa thought:' Truely great Samaṇa possesses high magical powers, he is not, however, holy like me.' Then the Buddha thought: 'This foolish man will still for a long time think in the same way, what if I were to move his mind. And the Buddha said to Kassapa: 'You are not holy arahā, Kassapa, nor you entered the path of Arahatship, nor do you walk in such a practice as will lead you to Arahatship, or to entering the path of Arahatship.' Then Kassapa prostrated himself, inclining his head to the feet of the Buddha, and said to the Buddha: 'Lord, let me receive the pabbajja and upasampada ordination.

His two brothers, Nadi-Kassapa and Gaya-Kassapa, with their Jatilas, also received upasampada ordination from the Buddha.

外[1]通達石壁皆過。如遊虛空無所妨礙、於虛空中結跏趺坐、亦如飛鳥周旋往來。入地如水出沒自在、履水如地而不沒溺、身放煙火如大火聚。日月有大神德靡所不照能以手捫摸身至梵天往來無礙。是謂世尊神足敎化千比丘。憶念敎化者敎言汝當思惟是、莫思惟之、當念之莫念之、當滅之當成就之。是謂世尊憶念敎授千比丘。說法敎化者一切熾然。何等一切熾然。眼熾然色熾然、眼識熾然。眼觸熾然。若復眼觸因緣生受、若苦若樂若不苦不樂亦名爲熾然。何等爲熾然熾然者欲火恚火癡火也。復如何名熾然。熾然者生老病死愁憂苦惱熾然。我說此苦所生處乃至意亦如是。爾時世尊以此三事敎授千比丘。爾時千比丘受此三事敎授已卽時無漏心解脫無礙解脫智生。

爾[2]時世尊化此千比丘已便作是念。我先許瓶沙王請。若我成佛得一切智先來至羅閱城。我今應往見瓶沙王。卽正衣服將大比丘千人皆是舊學螺髻梵志皆已定調柔永得解脫。從摩竭國界遊化至杖林中爾時世尊於杖林中善住尼拘律樹王下坐。時瓶沙王聞沙門瞿曇出自釋種出家學道……………善住尼拘律樹王下坐。彼沙門瞿曇有大名稱靡所不聞。所謂名稱者如來、至眞、等正覺、明行足、爲善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊。於天及世間人若魔天及梵天衆沙門婆羅門衆中自知得神通知證常自娛樂、與人說法上中下言悉善、義味深邃具足演布修諸梵行。善哉乃得見如是阿羅漢。我今寧可自往見大沙門瞿曇。時王瓶沙駕萬二千乘車、將八萬四千人前後圍繞、以王威勢出羅閱城、欲見

(1) 四分律第三三(列五•15)

And the Buddha, after having dwelt at Uruvelā as long as he thought fit, went forth to Gayasīsa, accompanied by a great numher of Bhikkhus, by one thousand Bhikkhus who all had been Jatilas before. There, at Gayasīsa, the Buddha addressed the Bhikkhus: 'Everything, O Bhikkhus is burning, And how is everything burning? The eye is burning; visible things is burning; the mental impressions based on the eye are burning; the contact of the eye with visible things is burning; the sensation produced by the contact with visible things, be it pleasant, be it painful, be it neither pleasant nor painful, that also is burning. With what fire is it burning? I declare unto you that it is burning with the fire of anger, with the fire of ignorance; it is burning with the anxieties of birth, decay, death, grief, lamentation, suffering, dejection, and despaire

'The ear is burning,……… the nose is durning,……… the tongue is burning,……… the body is burning,………… the mind is burning,………….

'Considering this, O Bhikkhus, a disciple learned in the scriptures, walking in the Noble Path, becomes weary of the eye, weary of visible things, weary of the mental impressions based on the eye, weary of the contact of the eye with visible things, weary also of the sensation produced by the contact. He becomes weary of the ear,………… of the nose………… of the tongue,………… of the body………… of the mind,…………… . Becoming weary of all that, he divests himself of passion; by absence of passion he is made free; when he is free, he becomes aware that he is free; and he realises that re-birth is exhausted; that holiness is completed; that duty is fulfilled; and that there is no further return to this world.'

Where this exposition was propounded, the minds of those thousand Bhikkhus become free from attachment to the world, and were released from the Āsavas.

(2) 四分律第三三(列五•15)

And the Buddha, wandering from place to place, came to Rājāgaha, and dwelt near Rājāgaha, in the Latthivana pleasure garden, near the sacred shrine of Supatittha. Then the Magadha king Seniya Bimbisāra heard: 'The Samana Gotama Sakyaputta, has just arived at Rājāgaha and staying in the Latthivana. Of him the blessed Gotama, such a glorious is spread broad: "Truely he is the blessed, holy, absolute Sambuddha, endowed with knowledge and conduct, the most happy One, who understands all worlds, the highest One, who guides men as a driver curbs a bullock, the teather of gods and men, the blessed Buddha. He makes known the Truth, which he has understood himself and seen face to face, to this world system with its devas, its Māras, its Brahmās, to all beings, Samanas, Brāhmanas, gods and men; he preaches that Dhamma which is glorious in the

世尊時王瓶沙往杖林中齊車所至處、卽下車步進入林、遙見世尊顏貌殊特、猶如紫金、便發歡喜心、於如來所前、頭面禮足已在一面坐、…………時摩竭陀國人作是念、爲大沙門從鬱鞞羅迦葉學梵行耶、爲鬱鞞羅迦葉幷弟子衆從大沙門瞿曇學梵行耶。時世尊知其國人心中所念、卽以偈向鬱毘羅迦葉說。

汝等見何變　捨諸事火具　吾今問迦葉　云何捨火具

爾時迦葉復以偈報世尊言

飮食諸美味　愛欲女及祀　我見如是垢　故捨事火具

問。　飮食諸美味　於中無所樂　天上及世間　今說樂何處

答。　我見迹休息　三界無所礙　不異不可異　不樂事火祀

爾時迦葉從坐起、上昇虛空還下、禮世尊足、以手摩捫如來足、以口嗚之自稱姓字。世尊是我師、我是弟子卽持扇在如來後而扇。時摩竭國人自相謂言、大沙門瞿曇不從迦葉學梵行。迦葉及弟子衆從大沙門瞿曇學梵行。爾時世尊知摩竭國人無有疑故漸次爲說法、勸令發歡喜心。所謂法者布施持戒生天之法呵欲不淨讃嘆出離爲樂。時摩竭國人瓶沙王爲首、八萬四千人十二那由他天、諸塵垢盡得法眼淨。…………時世尊受瓶沙王請已、卽從坐起著衣將千比丘萬二千乘車八萬四千衆前後圍繞以佛威神入羅閱城、爾時値天雨世尊前後中則清明上有雲蓋。世尊現此變化入羅閱城。時釋提桓因化作一異婆羅門、

beginning, in the middle, in the end, in the spirit and in the letter; he proclames a consummate, perfect, and pure life." It is good to obtain the sight of holy men like that.' And Bimbisāra, surrounded by twelve myriads of Magadha Brāhmaṇas and householders, went to the place where the Buddha was; having aproached him and respectfully saluted the Buddha, he sat down near him.

Now those twelve myriads of Magadha Brāhmaṇas and householders thought: 'How now is this? has the great Samana placed himself under the spiritual direction of Uruvela Kassapa, or has Uruvela Kassapa placed himself under the spiritual direction of the great Samana?'

And the Buddha having understood the reflection which had arisen in the minds of those myriads, addressed the venerable Uruvela Kassapa in this stanza: 'What knowledge have you gained, O inhavitants of Uruvela, that has induced you, who were renowned for your penances, to forsake your sacred fire? I ask you, Kassapa, this question: How is it that your fire sacrifice has become deserted?' Kassapa replied: 'It is visible things and sounds, and also tastes, pleasures and woman that the sacrifices speak of; because I understood that whatever belongs to existence is filth, therefore I took no more delight in sacrifice and offerings.' 'But if your mind, Kassapa,' said the Buddha, 'found there no more delight, either in visible things, or sounds, tastes,– what is it in the world of men or gods in which your mind now found delight? Tell me that.' Kassapa replied: 'I have seen the state of existence and the obstacles to perfection have ceased, which is free from attachment to sensual existence, which cannot pass over into another state, which cannot be led to another state; therefore I took no more delight in sacrificas and offerings.'

Then the venerable Uruvela Kassapa rose from his seat, adjusted his upper robe so as to cover one shoulder, prostrated himself, inclining his head to the feet of the Buddha and said: 'My teacher, Lord, is the Buddha, I am his pupil; my teacher is the Buddha, I am his pupil.' Then those twelve myriads of Magadha Brāhmaṇas and householders understood: 'Uruvela Kassapa has placed himself under the spiritual direction of the great Samana.' And the Buddha preachd to them the Dhamma in due cource, and the eleven myriads, with Bimbisāra at their head, obtained the pure and spotless Eye of the Truth..................

And when the night had elasped, the Magadha king Seniya Bimbisāra ordered

手執二金杖金澡缾金柄扇一、自在二空中一去レ地四指、在二如來前一引導。復以二無數方便一讃二嘆佛法僧一。時摩揭國人皆作二是念一。是誰威神化二作此婆羅門形一。時摩揭國人向二釋提桓因一而說レ頌曰、

誰化二作梵志一　今在二衆僧前一　歎二誦佛功德一　汝所事者誰

爾時釋提桓因復以レ偈報二摩竭國人一。

勇猛一切解　愛欲及飮食　慙愧念二知足一　我是彼弟子
世無レ有二與等一　不レ見二相似者一　如來至眞佛　我是給使者
滅二欲及瞋恚一　無明永已盡　漏盡阿羅漢　我是給仕者
猶如レ度二溺者一　瞿曇是法船　最勝度二彼岸一　我是給使者
已度二四流際一　能說二不死法一　最勝無礙法　我是給仕者

爾時摩揭國王瓶沙復作二是念一。若使下世尊將二諸弟子一入二羅閱城一先至上二園中一者、我當卽以二此園地一施レ之立二精舍一。時羅閱城諸園中迦蘭陀竹園最勝。時世尊知二摩竭王心中所念一、卽將二大衆一詣二竹園一已。王卽下レ象自疊二象上褥一、作二四重一敷レ地願二世尊坐一、持二金澡瓶一水授二如來一令二清淨一白レ佛言、我今以二此竹園一施二佛及四方僧一時世尊以二慈愍心一受二彼園一…………漸次爲レ王說レ法、勸令レ發二歡喜心一

excellent food, both hard and soft to be prepared, and had dinner time announced to the Buddha in the words: 'It is time, Lord, the meal is ready.' And in the forenoon the Buddha entered the city of Rājāgaha accompanied by a great number of Bhikkhus, by one thousand Bhikkhus who all had been Jatilas before.

At that time Sakka the king of devas, assuming the appearance of a young Brāhmaṇa, walked in front of the Bhikkhu fraternity with Buddha at its head, singing the following stanzas: 'the self-controlled One with the self-controlled, with the former Jatilas, the released One with the released, the Buddha, gold coloured like an ornament of singi gold, has entered Rājāgaha.'

'The emancipated One with tbe emancipated, with former Jatilas, the released One with the released, the Buddha, gold-coloured like an ornament of singi gold, has entered Rājāgaha.'

'He who has crossed the ocean of passion with them who have crossed it, with the former Jatilas, the released One with the rsleased, the Buddha, gold-coloured like an ornament of singi gold, has entered Rājāgaha.'

'He who is possessed of the ten Noble states and of the ten powers, who understands the Pass of Kamma and possessed the ten attributes of Arahatship, the Blessed One, surrounded by ten hundred of followers, has entered Rājāgaha.'

The people when they saw Sakka the king of devas, said: 'This youth indeed is handsome; this youth indeed has a lovely appearance; this youth indeed is pleasing. Whose attendant may this youth be?'

When they talked thus, Sakka addressed those people in this stanza: 'He who is wise, entirely self-controlled, the unrivalled Buddha, the Arahat, the most happy upon earth: his attendant am I.'

And Bimbisāra thought: 'there is the Veluvana, my pleasure garden, which is not too far from the town and not near, suitable for going and coming, easily accessible for all people who want to see him, by day not too crowded, at night not exposed to much noise and alarm, clean of the smell of people, hidden from men, well fitted for a retired life. What if I were to make an offering of the Veluvana pleasure garden to the fraternity of Bhikkhus with the Buddha at its head?' So he took a golden vessel with water in it, to be poured over the Buddha's hand; and dedicated the garden to the Buddha by saying, 'I give up this Veluvana, Lord, to the frafernity of Bhikkhus with the Buddha at the head.'

(5)爾時世尊在羅閱祇竹園精舍、彼有一邑名那羅陀。有故梵志名曰沙然。受學弟子二百五十。門徒之中有二高足。一名優波提舍、二名拘律陀。爾時頞鞞著衣持鉢入城乞食。顏色和悅諸根寂定。衣服齊整視地而行。時優婆提舍出遊遙見頞鞞威儀庠序歎未曾有。往至便問。何所法像衣服反常。寧有師宗可得聞乎。頞鞞對曰、瞿曇沙門是我大師、我等所尊從而受學。優婆提舍言、汝等大師說何等法。頞鞞言、我年幼稚學日初淺。豈能宣師廣大之義。今當爲汝略說其要。我師所說、法從緣生亦從緣滅。一切諸法空無有主。優婆提舍聞已、心悟意解得法眼淨。便還所住、爲拘律陀說所聞法。拘律陀聞亦離塵垢得法眼淨。卽問言、如來遊化今在何住。答言今在迦蘭陀竹園。拘律陀言、如來是我等師、便可共住禮敬問訊。優波提舍言、二百五十弟子、師臨終時囑吾等成就。豈可不告而獨去乎。二人卽往弟子所語言、我等欲從瞿曇沙門淨修梵行。汝等各々隨意所樂。時二百五十弟子皆悉樂從。二人便將弟子俱詣竹園。世尊遙見告諸比丘。彼來二人一名優波提舍二名拘律陀。此二人者當於我弟子中爲最上首。智慧無量神足第一。須臾來到。佛爲漸次說法布施持戒生天之論訶欲不淨讚歎出離。卽於坐上漏盡意解皆前白佛願得出家淨修梵行。佛言善來比丘於我法中修行梵行得盡苦源。卽名出家受具足戒。

時羅閱城中諸長者自相誡勅言、汝等有兒者各自愼護婦有夫主者亦愼護之。今大沙門從摩竭國界度諸梵志自隨今來至此當將此諸人去。

(1) 五分律第十六 (張二•3)

At that time Sanjaya, a paribbājaka resided at Rājāgaha with a great retinue of paribbājakas, two hundred and fifty. at that time Sāriputta and Moggallāna led a religious life as followers of Sanjaya; these had given their word to each other: 'He who first attains to the immortal shall tell the other one.' Now one day Sāriputta saw the venerable Assaji who went through Rājāgaha for alms; whose walking, turning back, regarding, looking, drawing his arms back, and stretching them out were decorous; who kept eyes on the ground, and was dignified in deportment. Seeing him he thought: 'Indeed this person is one of those Bhikkhus who are the worthy ones, in the world, or who have entered the path of Arahatship. What if I were to approach this Bhikkhu to ask him of his teacher. .... Then he went to Assaji and exchanged greeting with him; standing at his side he said to him; 'Your countenance, friend, is serene; pour complexion is pure and deright. In whose name, friend, have you retired from the world? who is your teacher? whose doctrine do you profess?'

Assaji replied: 'There is, friend, the great Samana Sakyaputta, in His name have I retired from the world; He is my teacher; and his doctrine do I profess.' Sāriputta asked: 'And what is the doctrine, Sir, which your teacher holds, and preaches to you?'

Assaji replied: 'I am only a young disciple, friend; I have but recently received the ordination; and I have newly adopted his doctrine and discipline. I cannot explain to you the doctrine in detail; but I will tell you in short what it means.............
"Of all objects which proceed from a cause, the Tathāgata has explained the cause, and He has explained their cessation also; this is the doctrine of the great Samana."

Sāriputta, after having heard this text, obtained the pure and spotless Eye of the Truth. And he said to himself: 'If this alone be the Dhamma, now you have reached up to the state where all sorrow ceases, the state which has remained unseen through many myriads of Kappas of the past.'

Then Sāriputta went to Moggallāna and told him that he met the venerable Assaji. And Moggallāna too, after having heard the text from Sāriputta, obtained the pure and spotless Eye of the Truth. And Sāriputta and Moggalāna took two hundred and fifty paribbājakas with them, and went to the Buddha, which was against the wish of Sanjaya, who began to vomit hot blood from his mouth.

At this time many distinguished young Magadha noble men led a religious life under the direction of the Buddha. The people were annoyed, murmured and became angry, 'The Samana Gotama causes fathers to beget no sons; causes wives to become widows; causes families to become extinct, etc.,'

— Mahāvagga: Vinaya Text. I. p.p. 144-152.

難陀及び羅睺羅の出家

然[1]彼釋種童子難陀當於彼時在重閣上、共孫陀利昇樓觀看、遊邀而坐。爾時難陀在樓閣上、遙見世尊將至其處、速即驚起下於重閣、往至佛邊頂禮佛足、却立一面。因白佛言、善來世尊、何從遠至、唯願垂神入我堂室、昇座而坐。爾時世尊入彼堂室、昇座坐已、慰喩難陀。慰喩已訖默然而坐。爾時難陀白佛言、世尊唯願今者於此受供。我遣備辦餚饍飲食。佛告難陀、我已食訖、不須備辦。爾時釋種童子難陀復白佛言、今有蜜漿、非時飲不。佛告難陀、我隨汝意。爾時難陀復白佛言、唯然世尊。於是難陀執持佛鉢盛非時漿、奉與世尊、於時世尊未爲受取。爾時難陀即持彼鉢將與侍者。而彼侍者復不受取。爾時世尊從座而起、與諸侍從相逐而還、欲向本處。難陀亦從重閣持彼蜜漿、欲隨佛去。爾時釋種女孫陀利見釋難陀執其滿鉢非時蜜漿從世尊行。其孫陀利梳頭未訖、便即高聲喚難陀言、聖子難陀欲何去也。爾時難陀指彼鉢言、欲將此鉢奉送如來、至彼即還。即時孫陀利言聖子速來莫久住彼。爾時世尊出難陀家、爲難陀故步行東西、在於街巷、欲令城內一切人民見彼難陀執非時漿隨逐於佛。…………爾時世尊至僧伽藍、喚一比丘、令取難陀手中蜜漿。難陀頂禮佛足白言、世尊我今辭佛。欲還向家。佛告離陀、汝莫還去。…………世尊正心正意告難陀言、來汝比丘、入我法中、行梵行盡諸苦故。爾時如來作是語已、難陀鬚髮即自墮落。

爾時世尊於晨朝時、與大比丘一千二百五十人俱、詣向王宮。如所鋪座次第而坐。爾時羅睺羅母別作一枚歡喜丸、喚羅睺羅、內著手裏、作如是言。汝羅睺羅往至比丘僧衆之內、是

(1) 本行集經第五十六 (辰九•57)

On the third day, when seeking alms at the coronation-hall where congratulations were being offered to Prince Nanda on his wedding, the Master handed the prince his bowl and wished him luck. And he, taking the bowl, followed the Buddha. At that time Janapadakalyānī was looking out of a window, with her hair half combed, and she, having seen him following the Buddha, said to him: "Why, Prince Nanda, is off with the Master? Come back soon, dear Lord!" So, Nanda wished the Master to take his bowl from him, but as the Master purposely did not do so, he unwillingly went to the vihāra. The Master ordained him, though Nanda wished it not.

— "Psalms of the Brethren," P. 126.

And in the forenoon on the seventh day, the Buddha, having put on his under-robes, took his alms-bowl and with cīvara on, went to the residence of the Sakka Suddhodana, and sat down on a seat laid out for him.

Then the Princess, the mother of Rāhula, said to young Rāhula: "This is your father, Rāhula, go and ask him for your inheritance." Then Rāhula went to the Buddha, stationd himself before the Buddha and said: "Your shadow, Samana, is a place of bliss." The Buddha rose from his seat and went away, and Rāhula followed the Buddha from behind and said: "Give me your inheritance, Samana; give me your inheritance, Samana." Then the Buddha said to Sāriputta: "Well, Sāriputta, confer the pabbajja ordination on young Rāhula."

汝父者施歡喜丸。……時羅睺羅持歡喜丸遍觀一切諸比丘已、直往佛邊而白佛言如是沙門蔭凉快哉、如是沙門蔭凉快哉。……爾時世尊教化訖已從座而起還於本處。爾時羅睺羅母遣羅睺羅往向父邊乞取父封。時羅睺羅隨佛而行。且行且語、作如是言、唯願沙門與我封邑。爾時世尊自授手指與羅睺羅。時羅睺羅執佛指已傍佛行。爾時世尊將羅睺羅至於靜林遙喚長老舍利弗言、汝舍利弗將羅睺羅令其出家。時舍利弗而白佛言、如世尊教。承佛教已度羅睺羅而出家也。

淨飯王聞羅睺羅之出家已迷悶躃地、經於少時還得醒悟、從城出至尼拘陀林到於佛所、頂禮佛足却坐一面而白佛言。世尊往昔在家之日、諸解相師婆羅門等已嘗授記、若其在家必當得作輪聖王。世尊今己捨家出家。我見世尊出家之後、作是思惟、欲以王位付與難陀。世尊於後復令出家。彼既出家。我復思惟。……今者望欲留羅睺羅擬付王位。復爲世尊將出家也。世尊如是、將羅睺羅出後之後豈不斷我王種姓耳。復次世尊、雖復如此、兼戀子情穿徹皮肉筋骨及髓、是故世尊從今日後、作如是敎制。諸比丘有出家者、令諮父母許出家已然後乃放。爾時佛告輸頭檀王、如大王意我不違也、我必當敎作如是事。

Then the Sakka Suddhodana went to the place where the Buddha was; having approached him and having respectfully saluted the Buddha, has sat down near him. Sitting near him he said to the Buddha: "Lord, I ask one boom of the Buddha." The Buddha replied: "The perfect Ones, Gotama, are above granting boons before they know what they are." Suddhodana said: "Lord, it is a proper and unobjectionable demand." "Speak, Gotama."

"Lord, when the Blessed One gave up the world, it was a great pain to me; so it was when Nanda did the same; my pain is excessive when Rāhula too did so. The love for a son, Lord, cuts into the skin; having cut into the skin, it cuts into the hide; having cut into the hide it cuts into the fresh,............... the ligaments,............... the bones; having cut into the bones, it reaches the marrow and dwells in the marrow. Pray, Lord, let their reverences not confer the pabbajja ordination on a son without his fathes's and mather's permission."

Then the Buddha taught, incited, animated, and gladdened the Sakka Suddhodana by religious discourse; and the Sakka Suddhodana, having been gladdened by the Buddha, rose from his seat, respectfully saluted the Buddha, and passing round him with his right side towads him, went away.

In consequence of that and on this occasion the Buddha, after having delivered a religious discourse thus addressed the Bhikkhus: "Let, no son, O Bhikkhus, receive the pabbajja ordination without his father's and mother's permission. He who confers the ordination on a son without that permission, is guilty of a dukkaṭa offence."

"Mahāvagga": "Vinaya Text." I. p. 208–210.

給孤獨長者の歸佛

[1]如是我聞一時佛住王舍城寒林中丘塚間。時給孤獨長者有小因緣、至王舍城止宿長者舍。夜見長者告其妻子僕使作人言、汝等皆起破樵然火、炊飯作餅、調和衆味莊嚴堂舍。給孤獨長者見已作是念、今此長者何所爲作、爲嫁女娶婦、爲請賓客國王大王耶。念已卽問長者、汝何所作、爲嫁女娶婦、爲請賓客國王大臣耶。時彼長者答曰、否。唯欲請佛及比丘僧設供養耳。時給孤獨長者、聞未曾聞佛名字已、心大歡喜、身諸毛孔皆悉怡悅。問彼長者曰、何名爲佛。長者答曰、有沙門瞿曇是釋種子。於釋種中剃除鬚髮著袈裟衣、正信非家出家學道、得阿耨多羅三藐三菩提。是名爲佛。給孤獨長者言、云何名僧。彼長者曰若婆羅門種、或刹帝利、毗舍種、首陀羅種、善男子等剃除鬚髮著袈裟衣、正信非家而隨佛出家。是名爲僧。今日請佛及現前僧、設諸供養。給孤獨長者、問彼長者曰、我今可往見世尊不。彼長者答言、汝且住此。我請世尊來至我舍、於是得見。時給孤獨長者、卽於其夜至心念佛因得睡眠。天猶未明、忽見明相。謂天已曉、欲出其舍、行向城門。至城門下、夜始二更、城門未開。王家常法待遠使命來往、至初夜盡城門乃閉。中夜已盡輒復開門、欲令行人早得往來。爾時給孤獨長者見城門開而作是念。定是夜過天曉門開。乘明相去於城門。出城門已、明相卽滅輒還闇冥。給孤獨長者心卽恐怖身毛爲竪。得無爲人及非人或奸狡人恐怖我耶。卽便欲還。爾時城門側有天神住。時彼天神卽放身光、從其城門至寒林丘塚間光明普照。告給孤獨長者言、汝且前進可得勝利。愼勿退還。時彼天神卽說偈言。

Now at time the householder Anāthapiṇḍika was the husband of the sister of the Rājāgaha Seṭṭhi. And Anāthapiṇḍika went Rājāgaha on some business or other. Anāthapiṇḍika, seeing the Rājāgaha Seṭṭhi giving orders to his work-people to cook congey and rice etc., thought: Now formerly this householder was wont, when I arived, to lay aside all other business, and exchange the greetings of courtesy with me; but now he appears excited and is giving orders to his slaves and work-people. How can it be? Is he taking or giving in marrige, or has he set a great sacrifice on foot, or has he invited the Magadhan Seniya Bimbisāra, together with his retinue, for to-morrow's meal?"

When the Seṭṭhi was told by Anāthapiṇḍika the thoughts that had passed through his mind, he replied: "I am neither taking nor giving in marrige, nor have I invited the king to to-morrnw's meal. But a great sacrifice I have set on foot, for the Sangha, with the Buddha at its head, has been invited for to-morrow's meal at my house."

"Did you, O householder, say 'the Buddha'?" "Yes, it was 'the Buddha' what I said." and three times the same question was put, and the same rely was given.

"Hard is it, O householder, to meet even with the mere expression in the world — the news, that is, of a Buddha. Would it be possible for us, at this very time, to go and visit that Blessed One the Arahat, the very Buddha?" "It is not now, O householder, the proper time to pay a visit to the Buddha; but early on the morrow you shall go and visit him."

Then Anāthapiṇḍika, pondering of the visit he was about to pay, lay down to sleep with his thoughts so bent upon the Buddha that thrice in the night he arose, thinking the daylight had appeared. And Anāthapiṇḍika went up to the gate leading to the Sīta-vana, and celestial being opened the gate. And he emerged from the city, the light disappeared and a thick darkness arose, and fear and trembling and consternation sprung up within him, so that a longing came upon him to turn back again from that spot. But Sivaka the Yakkha, himself the while invisible, caused a sound to be heard, saying:

'A hundred elephants, a hundred steeds, a hundred chariots with mules,
A hundred thousand virgins with their jewelled earings on,—
These are not worth, O householder, the sixteenth portion of one single stride.
Go on, go on, O householder! advance, and not retreat, shall profit thee.'

(1) 雜阿含第二三(辰三•27–8)

善良馬百匹　黃金滿百斤　騾車及馬車　各々有百乘　種々諸珍奇
重寶載其上　宿命種善根　得如此福報　若人宗重心　向佛行一步
十六分之一　過前福之上

是故長者汝當前進、愼勿退還。卽復說偈

雪山大龍象　純金爲莊飾　巨身長大牙　以此象施人　不及向佛福
十六分之一

是故長者當速前進得其大利。非退還也復說偈言

金菩闍國女　其數有百人　種々衆妙寶　瓔珞具莊嚴　以是持施與
不及行向佛　一步之功德　十六分之一。

是故長者當速前進得其勝利。非退墮也。時給孤獨長者問天神言、賢者汝是何人。天神答曰我是摩頭息揵大摩那婆先是長者善知識於尊者舍利弗大目揵連所起信敬心、緣斯功德今得生天、典此城門。是故告長者但當進前愼莫退還。前進得利非退還也。時給孤獨長者作是念。佛興於世非爲小事。得聞正法亦非小事。是故天神勸我令進往見世尊。時給孤獨長者尋其光明、逕至寒林丘塚間。爾時世尊出房露地經行。給孤獨長者遙見佛己、卽至其前以俗人禮法恭敬問訊。云何世尊安穩臥不。爾時世尊說偈答曰。

婆羅門涅槃　是則常安樂　愛欲所不染　解脫永無余　斷一切希望

Then the darkness disappeared before Anāthapiṇḍika and a bright light arose, and the fear and trembling and consternation that had spring up within him were appeased.

And Anāthapiṇḍika arrived at the Sītavana; and at that time the Buddha who had arisen at early dawn, was walking up and down meditating in the open air. And the Buddha saw Anāthapiṇḍika when he was coming from afar; and the Buddha left the place where he had been walking up and down, and sat himself down on the seat put out for him. And when he was so seated, he addressed Anāthapiṇḍika, and said: "Come hither, Suddatta!"

Then Anāthapiṇḍika, glad and happy at the thought that the Buddha had addressed him by his name, went up to the place where the Buddha was, and bowed down before him, falling at his feet, and said:

"I trust, my lord, the Blessed One has slept in peace!"

"He ever sleeps in peace, the Arahat who is free,

"Who is not touched by lusts, but calm and free from sin,

"Has broken all the bars to freedom of the mind, has quenched the anguish in his heart,

"Has fixed peace in his mind, and peaceful, sleeps in peace."

Then the Buddha discoursed to Anāthapiṇḍika in due order; that is to say he spoke to him of giving, of rightuousness, of heaven, of the danger, the vanity, and the defilement of lusts, of the advantages of renunciation. And when the Buddha saw that Anāthapiṇḍika had become prepared, softend, unprejudiced, and upraised and believing in heart, then he proclaimed that which is the doctrine of the Buddhas; that is to say, Suffering, its Origin, its Cessation, and the Path. And just as a clean cloth from which all stain has been washed away will readily take the dye, just even so did Anāthapiṇḍika, even while sitting there, the pure and spotless Eye of the Truth. that is to say, the knowledge that whatever has a becoming, in that is inherent also the necessity of dissolution. Thus did Anāthapiṇḍika see and master, understand and penetrate the Truth; and he overcame uncertainty, and dispelled all doubts, and gained full knowledge, becoming dependent upon no one else for his knowledge of the doctrine of the teacher. and he addressed the Buddha, and said:

"Most excellent, Lord, most excellent! Just as if a man were to set up that which is thrown down, or to reveal that which is hidden away, or were to point out the right road to him who has gone astray, or were to bring a light into the darkness so that those who had eyes could see external forms —

讃佛偈

調伏心熾然　心得寂止息　止息安穩眠

爾時世尊將給孤獨長者往入房中、就座而坐。端身繫念。爾時世尊爲其說法、示敎照喜已。世尊說諸法無常宣布施福事生天福事欲味欲患欲出遠離之福。給孤獨長者聞法見法得法入法解法度諸疑惑不由他信、不由他度入正法律心得無畏。卽從座起正衣服爲佛作禮右膝著地合掌白佛言。已度世尊、已度善逝、我從今日盡其壽命歸佛歸法歸比丘僧、爲優婆塞、證知我。爾時世尊問給孤獨長者、汝名何等。長者白佛。名須達多以常給孤貧辛苦故、時人名我爲給孤獨。世尊復問汝居何處。長者言、世尊在拘薩羅人間城名舍衞。唯願世尊來舍衞國。我當盡壽供養衣服飲食房舍牀臥隨病湯藥。佛問長者、舍衞國有精舍不。長者白佛無也。佛言、汝可於彼建立精舍令諸比丘往來宿止。長者白佛、但使世尊來舍衞國、我當造作精舍房舍。世尊默然受請。時長者知佛受請已、從座起稽首佛足而去。

[4]十五清淨日　其衆五百人　斷除一切結　有盡大仙人　清淨相習近
清淨廣解脫　不更受諸有　生死已永絕　所作者已作　得一切漏盡
五蓋已雲除　拔刺根本愛　師子無所畏　離一切有余　害諸有怨結
超越有余境　諸有漏怨敵　皆悉已潛伏。　猶如轉輪王　懷受諸眷屬
慈心廣宣化　海內悉奉用。　能伏魔怨敵　爲無上導師　信敎心奉事
三明老死滅　爲法之眞子　無有飄轉患　拔諸煩惱刺　敬禮日種胤

just even so, Lord, has the Truth been made known to me, in many a figure, by the Blessed One. And I, even I, betake myself, Lord, to the Buddha as my refuge, to the Dhamma, to the Sangha. May the Blessed One accept me as a disciple, as one who, from this day forth as long as life endures, has taken his refuge in him. And may the Blessed One consent to accept at my hand the to-morrow's meal for himself and for his order.

And when the Buddha had finished his meal, and had cleanced his hands and his bowl, Anāthapiṇḍika took his seat on his side, and said to the Buddha : "May the Blessed One concent to spend the rainy season of Was at Sāvatthī, together with the order of Bhikkhus."

"The Tathāgata, O householder, take pleasure in solitude,"

"I understand, O Blessed One, I understand, O Happy One." When he had come back to Sāvatthī, he bought the garden of Jeta the Kumāra at the price of gold which covered the Jetavana with pieces laid side by side. And he built here dwelling-rooms, retiring-rooms, and store-rooms over the gateways, service halls, halls with fire-places in them, store-houses outside the Vihāra, closets, cloisters halls for exercise, wells, sheds for the well, bath-rooms, halls attached to the bath-rooms, ponds, and open-roofed sheds.

— Mahāvagga : Vinaya Text III p. 179-189.

(1) 雜阿含四五 (昃四•63)

To-day, at full moon, for full purity.
Five hundred brethren are together come.
They all have cut their fetters and their bonds ;
Seers who are free from rebirth and from ill. (1234)
And as a king who ruleth all the world,
Surrounded by his councillors of state,
Toureth around his empire everywhere,
Driving throughout the lands that end in sea, (1235)
So him who is our victor in the fight,
The peerless Master of our caravan,
We followers attend and wait upon,
Who hold the triple lore, slayers of Death. (1236)
All we are sons of the Exalted One.
No sterile babbler is among us found.
I worship him who strikes down craving's darts.
I greet the offspring of the Sun's great line. (1237)

— Thera-gātha : Psalms of the Brethren, P. 403.

(1)一時、佛遊釋中在釋家都邑名彌婁離。爾時拘薩羅王波斯匿與長作共俱有所爲故、出詣邑名城。拘薩羅王波斯匿、至彼園觀、見諸樹下、寂無音聲。遠離無惡、無有人民隨順燕座見已憶念世尊。拘薩羅王波斯匿告曰、長作今此樹下寂無音聲遠離無惡無有人民隨順燕坐此處我數往見佛。長作世尊今在何處我欲往見。長作答曰、天王我聞世尊遊釋中在釋家都邑名彌婁離。拘薩羅王波斯匿復問曰、長作釋家都邑名彌婁離去此幾許。長作答曰天王去此三拘婁舍。拘薩羅王波斯匿告曰、長作可勅嚴駕我欲詣佛。長作受敎卽勅嚴駕白曰、天王嚴駕已訖隨天王意。拘薩羅王波斯匿卽昇乘出城外往至釋家都邑名彌婁離。爾時彌婁離門外衆多比丘露地經行。拘薩羅王波斯匿往詣諸比丘所問曰、諸尊世尊今在何處。晝行衆多比丘答曰、大王彼東向大屋開牕閉戶世尊今在彼中晝行、大王欲見便往詣彼、到已住外謦欬敲戶、世尊聞者必爲開戶。拘薩羅王波斯匿卽便下車若有王刹利頂來而得入處敎令大地有五儀飾、劍蓋華鬘及珠柄拂嚴飾之屣。彼盡脫已授與長作。長作念曰、天王今者必當獨入我等應共住此待耳。於是拘薩羅王波斯匿眷屬圍遶步往至彼東向大屋到已住外謦欬敲戶。世尊聞已卽爲開戶、拘薩羅王波斯匿便入彼屋前至佛所、稽首禮足再三自稱姓名。我是拘薩羅王波斯匿我是拘薩羅王波斯匿。世尊答曰、如是大王汝是拘薩羅王波斯匿汝是拘薩羅王波斯匿。拘薩羅王波斯匿再三自稱姓名已稽首佛足却座一面。

(1) 中阿含五九(昃七・89以下) 增一阿含三二(昃二・58)參照

以下一一五頁までの和譯 巴利中阿含第八九 Dhammacetia Sutta.

世尊が、釋迦種族のメータルパ(Metalupa)といふ邑にゐ給うた時の事であつた。喬薩羅王波斯匿は所用ありて、ナガラカ (Nagaraka) に來てゐられた。デーガカーラヤナ(Digha-Kārāyana) を呼んで曰ふには、「Kārāyanaよ、馬車の用意をせよ。園園に行いて美しい景色を眺めたいと思ふ」と。「陛下よ、かしこまりました」と答へて、馬車を用意し、その旨を申したので、波斯匿王は美々しい車に乘り、大王の鹵簿にて町を出掛け園園に入つた。

大王は園園の林藪の中を逍遙し乍ら、騷がしい音響のない、人いきれのない、遠離獨捿に相應しい美しき樹下を見て、世尊の事を思ひ出し、こういふ靜かな美しい樹下にて世尊應供正等覺者に御給事申し上げたらばと思うた。それで王はデーガ・カーラーヤナを呼び掛けた。

「カーラーヤナよ、 私はこういふ靜かな美しい樹下にて世尊を御給事申し上げたいと思ふ。世尊は今、何處に在ますであらうか」と。「大王、世尊は今メータルパといふ釋迦種族の邑にゐられます」「この市からそのメータルパ迄、何れ程の距離であるか」。「大王、そんなに遠くはゝりません。三由旬程でありますから日沒迄に行く事が出來ます」。「それでは馬車の用意をせよ。世尊に御遇に參らう」。「陛下、かしこまりました」。

かくて大王は、美々しき車にて市を出掛け、日沒迄にメータルパに着し、精舍に進み車を捨てゝ徒步にて入つた。其時、多勢の比丘が露地を經行してゐたが、大王は比丘等に近づいて世尊に御遇ひしたいが、今何處に在ますかと尋ねた。「大王よ、この戸の閉ぢてゐる室にゐ給ふから、音なく近づき靜かに椽に上り、咳拂をして閂を叩かれなば世尊は戸を開き給ふでありましやう」と比丘等は答へた。大王は劍と冠をカーラヤナに渡したが、カーラヤナは思ふ樣「大王は獨り行かれる、我々は茲に殘らればならぬ」と。大王は敎へられた樣に進んで室の閂を叩いた。世尊は戸を開き給うた。大王は室に入り、世尊の御足を頭禮し、世尊の御足に接吻し、手にて世尊の御足を磨り、名乘を擧げた。「世尊、私は喬薩羅の王波斯匿であります。世尊、私は喬薩羅の王波斯匿であります」と。

世尊問曰、大王見我有何等義而自下意稽首禮足供養承事耶。拘薩羅王波斯匿答曰、世尊我於佛有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善、世尊弟子衆善趣向也、世尊我坐都坐時見母共子諍、子共母諍、父子兄弟姉妹親屬展轉共諍、彼鬪諍時母說子惡子說母惡、父子兄弟姉妹親屬相更說惡、況復他人、我見世尊弟子諸比丘衆從世尊行梵行、或有比丘少多起諍捨戒罷道不說佛惡不說法惡不說衆惡、但自責數我爲惡我爲無德、所以者何、以我不能從世尊自盡形壽修行梵行、是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善、世尊弟子衆善趣向也。復次世尊我見一沙門梵志、或九月或十月、少多學行梵行捨隨本服復爲欲所染染欲著欲爲欲所縛憍慠受入不見災患不見出要而樂行欲。世尊我見世尊弟子諸比丘衆自盡形壽修行梵行、乃至億數我於此外不見如是淸淨梵行如世尊家。是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善世尊弟子衆善趣向也、復次世尊我見一沙門梵志羸瘦憔悴形色極惡身生白皰人不憙見、我作是念此諸尊何以羸瘦憔悴形色極惡身生白皰人不憙見此諸尊必不樂行梵行、或身有患或屏處作惡、以是故諸尊羸瘦憔悴形色極惡身生白皰人不憙見、我往問彼、諸尊何故羸瘦憔悴形色極惡身生白皰人不憙見諸尊不樂行梵行耶、爲身有患耶爲屏處作惡耶是故諸尊羸瘦憔悴形色極惡身生白皰人不憙見。彼答曰大王是白病大王是白病。世尊我見世尊弟子諸比丘衆樂行端正面色悅澤形體淨潔無爲

「大王よ、貴方は如何なる理由で、身體にはこの樣な最上の謙敬を示し、心供養をなされるのでありますか」。

「世尊、私には世尊に對する如法の信(Lit.法の隨逐)があります。それは、世尊は正覺者、法は世尊に依つての妙說、僧伽は善行(の團體)といふ事であります。世尊私はこの世に於て十年二十年三十第四十年、自ら梵行を行し乍ら、後に沐みし膏を塗り鬚髮を刈り込み五欲に取り卷かれて耽り樂しむ一類の沙門婆羅門を見ます。又私は茲に生涯、生命のある限り、圓滿淸淨の梵行を行してゐる比丘を見ます。世尊私はこの敎團以外に、斯くの如き圓滿淸淨の梵行を見ません。世尊、これも私が世尊に對して世尊は正覺者、法は世尊に依つての妙說、僧伽は善行の團體といふ如法の信ある一由であります

「世尊、又王は王と爭ひ、刹帝利は刹帝利と爭ひ、婆羅門は婆羅門と爭ひ、家主は家主と爭ひ、母は子と爭ひ、子は父と爭ひ、兄弟姉妹相爭ひ、朋友相爭ふてゐますが、この敎團に於ては、私は比丘等が和合して爭なく水と乳の如く爭なく互に慈眼を以て相見て住するを認めます。この敎團以外にこの樣な和合衆を見ることが出來ません。世尊、これも私が世尊に對して如法の信ある一由であります。

「世尊、又私は園林めぐりをして、或る沙門婆羅門が瘦せ、衰へ、顏色靑ざめ、血管が太く顯はれ、人を見るに眼のすはつてないのを見ます。その時私は思ひます。この人々は必ず梵行を行するを樂しまないのであらう。或は又、何か惡業をしてそれを隱してゐるため、この樣に瘦せ衰へ、顏色靑ざめ血管が太く顯はれ、人を見るに眼がすはらないのであらうと。それで私は其人々の處へ行いて、大德等は何故にその樣に瘦せ衰へ、顏色靑ざめ血管が顯はれ、人を見るに眼がすはらないのであるかと尋ねますと、大王よ我々は病氣でありますと答へます。世尊、私は茲では皆の人が愉快相に樂し相に諸根悅豫し、優遊し、謙敬にて最上の行をなし鹿の如き優しき心にて住するを見ます。

無求護他妻食如鹿、自盡形壽修行梵行、我見已作是念、此諸尊何故樂行端正面色悅澤形體淨潔無爲無求護他妻食如鹿自盡形壽修行梵行、此諸尊或得離欲或得增上心現法樂居易不難得、是故此諸尊樂行端正面色悅澤形體淨潔無爲無求護他妻食如鹿自盡形壽修行梵行、若行欲樂行端正者我應樂行端正、何以故我得五欲功德易不難得、若此諸尊得離欲得增上心於現法樂居易不難得、是故此諸尊樂行端正面色悅澤形體淨潔無爲無求護他妻食如鹿自盡形壽修行梵行、是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善世尊弟子衆善趣向也復次世尊我見一沙門梵志聰明智慧、自稱聰明智慧博聞決定諳識諸經制伏强敵、談論覺了名德流布一切世間無不聞知、所遊至處壞諸見宗輒自立論而作是說我等往至沙門瞿曇所問如是如是事、若能答者當難詰彼、若不能答亦難詰已捨之而去。彼聞世尊遊某村邑往至佛所尙不敢問於世尊事、況復欲難詰耶、是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善世尊弟子衆善趣向也。復次世尊我見一沙門梵志聰明智慧自稱聰明智慧、博聞決定諳識諸經制伏强敵談論覺了名德流布一切世間無不聞知、所遊至處壞諸見宗輒自立論、而作是說我等往至沙門瞿曇所、問如是如是事、若能答者當難詰彼、若不能答亦難詰已捨之而去。彼聞世尊遊某村邑往至佛所問世尊事、世尊爲答、彼聞答已便得歡喜稽首佛足繞三帀而去、是謂我於佛而有法靖因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善世

それで私はこの様に思ひます、眞に此等の大德等は世尊の敎に於て前のものにない他の卓越殊勝を見るからこの様に愉快相に樂し相に、諸根悅豫し、優遊し、謙敬にて、最上の行をなし、鹿の如き優しき心にて住するのであるさ。世尊これも私の世尊に對して如法の信ある一由であります。

「世尊、又私は灌頂をした刹帝利種の王であります。殺したいさ思へば殺し、生したいさ思へば生かし、放逐したいさ思へば放逐する事も出來ます。而も私は會議で坐してゐる時、私の話し最中に口を挿さむものを止むる事が出來ません。私の話が終つてからにせよさ曰つても、私の話し最中にじやべり出すものがあります。然るに今茲では、世尊が數百の會衆に法を說いてゐられる時、弟子達の中で噴嚏をし咳をするものがありません。甞て世尊が數百の會衆に說法してゐ給ふた時であります。或る比丘が咳をするさ、同學の人が膝で突いて尊者靜かになさい、音を立てゝはならぬ。私共の師匠が法を說いてゐられるからさ申しました。私はこの様に思ひました。實に奇特であり、希有である。劔も用ひず棒も用ひずしてこの會衆はかくも善く調伏せられてゐるさ。世尊私はこの敎團の外にこの様によく調伏せられた會衆を見たことがありません。これが世尊、私の世尊に對して如法の信ある一由であります。

尊弟子衆善趣向也。復次世尊我見一沙門梵志聰明智慧自稱聰明智慧博聞決定諳識諸經制伏强敵談論覺了名德流布一切世間無不聞知、所遊至處壞諸見宗輒自立論而作是說我等往至沙門瞿曇所問如是如是事、若能答者當難詰彼若不能答亦難詰已捨之而去、彼聞世尊遊某村邑往至佛所問世尊事、世尊爲答、彼聞答已便得歡喜而歸佛法及比丘衆世尊受彼爲優婆塞終身自歸乃至命盡。是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善世尊弟子衆善趣向也。復次世尊我見一沙門梵志、聰明智慧自稱聰明智慧博聞決定諳識諸經制伏强敵談論覺了名德流布一切世間無不聞知、所遊至處壞諸見宗輒自立論、而作是說、我等往至沙門瞿曇所問如是如是事、若能答者當難詰彼若不能答亦難詰已捨之而去。彼聞世尊遊某村邑往至佛所問世尊事、世尊爲答彼聞答已便得歡喜、即從世尊求出家學而受具足得比丘法、佛便度彼而授具足得比丘法、若彼諸尊出家學道而受具足得比丘法已獨住遠離心無放逸修行精勤彼獨住遠離心無放逸修行精勤已若族姓子所爲剃除鬚髮著袈裟衣至信捨家無家學道者唯無上梵行訖於現法中自知自覺自作證成就遊、生已盡梵行已立所作已辨不更受有、知如眞若彼諸尊如法已乃至得阿羅訶、得阿羅訶已便作是念諸賢我本幾了幾失、所以者何、我本非沙門稱沙門、非梵行稱梵行、非阿羅訶稱阿羅訶、我等今是沙門是梵行是阿羅訶。是我謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善世尊弟子衆

「世尊、又私はこういふ事を見ます。或る賢こい怜悧な議論に長じ、毛髪の先をも割く様に巧みな刹帝利種の人々が、智慧を抱き見を抱いて他の所論を明快に破りて遍歴する。彼等は世尊が何々の村又は邑に到着されたと聞いて問題を用意する、我々は沙門喬答摩の處へ行いてこの質問をしやう。かく問はれてかく答へるならばこの様に議論を吹き掛けやうと。然も彼等が世尊の所へ近づけば、世尊は法を說いて示し敎へ鼓舞し、喜ばしめ給ふ。彼等は法話に依り示し敎へられ、鼓舞し喜ばされて問も掛けず况して議論はせない。必ず世尊の弟子となることを告白する。世尊、これが私の世尊に對する如法の信ある一由であります。

「世尊、又同様に婆羅門家主沙門の賢こい人々も世尊に行いて示敎を得、鼓舞され喜ばされ、世尊の許可を得て出家し、隱棲して熱心に修行し、程なく家を出てゝ出家せる目的たる無上の梵行の結果を現法に自ら實現して住し、この様に云ふ、我々は何も少しも失はない、何故なら我々は前には沙門でなく、婆羅門でなく、阿羅漢でなくして沙門であり、婆羅門であり、阿羅漢であるというてゐたが今こそ我々は正しく沙門であり、婆羅門であり、阿羅漢であるからと。世尊、これが私の世尊に對する如法の信ある一由であります。

善趣向也。復次世尊我自若居國無過者不殺、有過者令殺、然在都座我故不得作如是說、
卿等並住無人問卿事、人問我事卿等不能斷此事、我能斷此事於其中間競論餘事不待
前論訖、我數見世尊大衆圍遶說法、彼中一人鼾眠作聲、有人語彼、君莫鼾眠作聲君不用
聞世尊說法如甘露耶。彼人聞已卽便默然。我作是念、如來無所著正盡覺衆調御士現奇
甚特所以者何、以無刀杖皆自如法安穩快樂、是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如
來無所著正盡覺所說法善世尊弟子衆善趣向也。復次世尊我於仙餘及宿舊二臣出錢
財賜亦常稱譽彼命由我、然不能令彼仙餘及宿舊二臣下意恭敬尊重供養奉事於我。如
爲世尊下意恭敬尊重供養奉事也。是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著
正盡覺所說法善世尊弟子衆善趣向也。復次世尊我昔出仙宿一小屋中欲試仙餘宿舊
二臣知彼頭向何處眠耶、爲向我、爲向世尊、於是仙餘宿舊二臣則於初夜結跏趺默然燕
座至中夜聞世尊在某方處便以頭向彼以足向我、我見已作是念、此仙餘及宿舊二臣不
在現勝事是故彼不下意恭敬尊重供養奉事於我如爲世尊下意恭敬尊重供養奉事也。
是謂我於佛而有法靖、因此故我作是念、如來無所著正盡覺所說法善世尊弟子衆善趣
向也。復次世尊我亦國王、世尊亦法王、我亦刹利世尊亦刹利、我亦拘薩羅世尊亦拘薩羅、
我年八十世尊亦八十、世尊以此事故我堪耐爲世尊盡形壽下意恭敬尊重供養奉事。世
尊我今多事欲還請辭。世尊告曰、大王自知時於是拘薩羅王波斯匿聞佛所說善受持誦、

「世尊、又このイシダツタ(Isidatta)とプラーナ(Purāṇa)の二人の大工棟領は私の祿を食み私に依つて住し、私に生命を與へられ、私に依つて名譽を得てゐる。然るに彼等は、世尊に對するが如く私に對して尊敬を示さない。世尊嘗て私が白沙を運び上げてゐる時でありましたが、イシダツタとプラーナ棟領を調べて見ますと、彼等二人は或る雜沓した家に宿りましたが、彼等は夜更まで法話をして、それから世尊の在ます所を尋ね聞き、世尊の方に頭を向け私の方を足にして寢ました。それで私はこの樣に考へました。實に奇特である、實に希有である。イシダツタ、プラーナの二人の棟領は私の祿を食み、私に依つて住し、私に生命を與へられ、私に依つて名譽を得てゐながら彼等は世尊に對するが如く私に尊敬を拂はない、實にこれらの人々は世尊の教に前のものとは違つた卓越殊勝を見てゐるのであると、世尊、これが私の世尊に對して如法の信ある一由であります。

「世尊、又世尊も刹帝利、私も刹帝利であり、世尊も喬薩羅人、私も喬薩羅人であり、世尊も八十私も八十であります。世尊、これに依つて私は世尊に最上恭敬を拂ひ、心の供養をなすに相應しいのであります。世尊、それでは私はこれで御暇します、用事か澤山ありますから」。

「大王よ、それでは貴方の好まれる樣に」。

かくて喬薩羅の王波斯匿は座を立ち、世尊を拜し、右繞して去つた。

即從坐起稽首佛足繞三帀而去。

爾時尊者阿難住世尊後執拂侍佛、於是世尊廻顧告曰、阿難若有比丘依彌婁離林住者、令彼一切集在講堂、於是尊者阿難受佛敎已若諸比丘依彌婁離林住者令彼一切集在講堂、還詣佛所白曰。世尊若有比丘依彌婁離林住者彼一切已集講堂、唯願世尊自當知時。於是世尊將尊者阿難往至講堂、比丘衆前敷坐而坐、告曰、比丘今拘薩羅王波斯匿在我前說此法莊嚴經已稽首我足繞三帀而去、比丘汝等當受持此法莊嚴經善誦善習、所以者何、比丘此法莊嚴經如義如法爲梵行本趣智趣覺趣至涅槃、若族姓子至信捨家無家學道者亦當受持當誦當習此法莊嚴經。

* * * * * *

(1)如是我聞一時佛在羅閱城耆闍掘山中與大比丘衆千二百五十人俱。是時摩竭王阿闍世欲伐跋祇王自念言彼雖勇健人衆强以我取彼不足爲難、時阿闍世王命婆羅門大臣禹舍而告之曰汝詣耆闍崛山至世尊所持我名字禮世尊足問訊世尊、起居輕利遊步强耶、又白世尊跋祇國人自恃勇健民衆豪强不順伏我我欲伐之不審世尊何所誡勅若有敎誡汝善憶念勿有遺漏、如所聞說如來所言終不虛妄。大臣禹舍受王敎已即乘寶車詣耆闍崛山到所止處下車步進至世尊處問訊畢一面坐白世尊曰摩竭王阿闍世稽首佛

世尊は波斯匿王が立ち去ると間もなく、比丘等を呼び掛け給ふた。「比丘等よ、喬薩羅の王、波斯匿は法塔を談つて去つた。比丘等よ、この法塔を受持せよ、比丘等よこの法塔を反復して誦し、この法塔を傳持せよ。比丘等よ法塔には利益あり、梵行の初めである。

—— 巴利中阿含第八十九 Dhammacetiya Sutta.

(1) 以下一九六頁まで長阿含二(昃九・9以下)

以下一九七頁まで巴利長阿含第一六涅槃經 (Parinibbāna Sutta)

Thus have I heard. The Exalted One was once dwelling in Rājagaha, on the hill called the Vulture's Peak. Now at that time Ajātasattu, the son of the queen-consort of the Videha clan, the king of Magadha, had made up his mind to attack the Vajjians; and he said to himself, 'I will strike at these Vajjians, mighty and powerful though they be, I will root out these Vajjians, I will destroy these Vajjians, I will bring these Vajjians to utter ruin!' So he spake to the Brahmin Vassakāra Prime-minister of Magadha, and said: 'Come now, brahmin, do you go to the Exalted One, and bow down in adoration at his feet on my behalf, and inquire in my name whether he is free from illness and suffering, and in the enjoyment of ease and comfort and vigorous health. Then tell him that Ajātasattu, son of Vedehi, in his eagerness to attach the Vajjians has resolved, "I will strike at these Vajjians, mighty and powerful though they be,...................... I will bring these Vajjians to utter ruin!" And bear carefully in mind whatever the Exalted One may predict, and repeat it to me. For the Buddha speak nothing untrue!'

Then Vassakāra went to the Buddha at Vulture's Peak, and delivered to him the message even as the king had commanded.

Now at that time the venerable Ānanda was standing behind the Buddha and fanning him. And the Buddha said to him: "Have you heard, Ānanda, that the Vajjians foregather often and frequent the public meetings of there clan?" "Lord, so I have heard," "so long, Ānanda," rejoind the Blessed One, "as the Vajjians foregather thus often, and frequent the public meetings of their clan; so long may they be expected not to decline, but to prosper."

足敬問慇懃起居輕利遊步强耶、又白世尊跋祇國人自恃勇健民衆豪强不順伏我、我欲伐之不審世尊何所誡敕。爾時阿難在世尊後執扇扇佛、佛告阿難、汝聞跋祇國人數相集會講議正事不。答曰聞之。佛告阿難、若能爾者長幼和順轉更增盛其國久安無能侵損。阿難汝聞跋祇國人君臣和順上下相敬不。答曰聞之。阿難若能爾者、長幼和順轉更增盛其國久安無能侵損。阿難汝聞跋祇國人奉法曉忌不違禮度不。答曰聞之。阿難若能爾者、長幼和順轉更增盛其國久安無能侵損。阿難汝聞跋祇國人孝事父母敬順師長不。答曰聞之。阿難若能爾者長幼和順轉更增盛其國久安無能侵損。阿難汝聞跋祇國人恭於宗廟致敬鬼神不。答曰聞之。阿難若能爾者長幼和順轉更增上其國久安無能侵損。阿難汝聞跋祇國人閨門眞正潔淨無穢至於戲笑言不及邪不。答曰聞之阿難若能爾者、長幼和順轉更增盛其國久安無能侵損。阿難汝聞跋祇國人宗事沙門敬持戒者瞻視護養未嘗懈倦不。答曰聞之。阿難若能爾者長幼和順轉更增盛其國久安無能侵損。時大臣禹舍白佛言、彼國人民若行一法猶不可圖況復具七、國事多故今請辭還歸。佛言可宜知。是時禹舍卽從座起遶佛三帀揖讓而退。

其去未久佛告阿難汝勅羅閱祇左右諸比丘盡集講堂。對曰唯然。卽詣羅閱祇城集諸比丘盡會講堂白世尊曰諸比丘已集、唯聖知時。爾時世尊卽從座起詣法講堂就座而坐告諸比丘我當爲汝說七不退法諦聽諦聽善思念之。時諸比丘白佛言唯然世尊願樂欲聞。

"So long, Ānanda, as the Vajjians meet together in concord, and rise in concord, and carry out their undertakings in concord,— so long as they enact nothing not already established, abrogate nothing that has been enacted, and act in accordance with the ancient instructions of the Vajjians as established in former days,— so long as they honour and esteem and revere and support the Vajjian elders, and hold it a point of duty to hearken to their words,— so long as no woman or girls belonging to their clans are detained among them by force or adbuction,— so long as they honour and esteem and revere and support the Vajjian shrines in town or country, and allow not the proper offerings and rites as formerly given and performed, to fall into desuetude,— so long as the rightful protection, defence, and support shall be fully provided for the Arahants among them, so that Arahants may enter the realm, and the Arahants therein may live at ease,— so long may the Vajjians be expected not to decline, but to prosper, "

Then the Buddha addressed Vassakāra and said: "When I was once staying, O brahmin, at Vesāli at the Sāranda Shrine, I taught the Vajjians these conditions of welfare; and so long as these conditions shall continue to exist among the Vajjians, so long as the Vajjians shall be well instructed in those conditions, so long may we expect them not to decline, but to prosper, "

"We may expect then," answered the brahmin, "the welfare and not the decline of the Vajjians when they are possessed of any one of these conditions of welfare, how much more so when they are posssssed of all the seven. So Gotama, the Vajjians cannot be overcome by the king of Magadha; that is not in battle, without diplomacy or breaking up their alliance. And now, Gotama, we must go; we are busy and have much to do."

"Whatever you think most fitting, O brahmin." was the reply. And Vassakāra, delighted and pleased with the words of the Buddha, rose from his seat and went his way.

Now soon after he had gone the Buddha addressed Ānanda and said: "Go now, Ānanda, and assemble in the Service hall such of the Brethren as live in the neighbourhood of Rājagaha," ....

And the Buddha went to the Service Hall; and when he seated, he addressed the brethren, and said: "I will teach you, O mendicants, seven conditions of the welfare of a company. Listen and attend, and I will speak.

七不退法

佛告諸比丘、七不退法者、一曰數相集會講論正義、則長幼和順法不可壞、二曰上下和同敬順無違、則長幼和順法不可壞、三曰奉法曉忌、不違制度、則長幼和順法不可壞、四曰若有比丘力能護衆多諸知識、宜敬事之、則長幼和順法不可壞、五曰念護心意孝敬爲首、則長幼和順法不可壞、六曰淨修梵行不隨欲態、則長幼和順法不可壞、七曰先人後已不貪名利、則長幼和順法不可壞。

佛告比丘、復有七法、令法增長無有損耗、一者樂於少事、不好多爲、則法增長無有損耗、二者樂於靜默、不好多言、三者少於睡眠、無有昏昧、四者不爲群黨言無益事、五者不以無德而自稱譽、六者不與惡人而爲伴黨、七者樂於山林閑靜獨處、如是比丘則法增盛無有損耗。

佛告比丘、復有七法、令法增長無有損耗、何謂爲七、一者有信、信於如來至眞覺十號具足、二者知慚、恥於己闕、三者知愧、羞爲惡行、四者多聞其所受持上中下善義味深奥清淨無穢梵行具足、五者精勤苦行滅惡修善勤習不捨、六者昔所學習憶念不忘、七者修習智慧知生滅法、趣賢聖要盡諸苦本。如是七法則增長無有損耗。

佛告比丘、復有七法、令法增長無有損耗、何謂爲七、一者敬佛、二者敬法、三者敬僧、四者敬戒、五者敬定、六者敬順父母、七者敬不放逸、如是七法則法增長無有損耗。

佛告比丘、復有七法、則法增長無有損耗、何謂爲七法、一者觀身不淨、二者觀食不淨、三者

" So long as the mendicants, as the brethren forgather oft, and frequent the formal meetings of their Order, (2) so long as they meet together in concord, rise in concord, and carry out in concord the duties of the Order, (3) so long as the brethren shall establish nothing that has not been already prescrived, and abrogate nothing that has been established, and act in accordance with the rules of the Order as now laid down, (4) so long as the brethren honour and esteem and revere and support the elders of experience and long standing, the fathers and leaders of the Order, and hold it a point of duty to hearken to their words, (5) so long as the brethren fall not under the influence of that craving which, spring up within them, would give rise to renewed existence, (6) so long as the brethren deright in a life of solitude, (7) so long as the brethren so train their minds in self-possession that good men among their fellow-disciples shall come to them, and those who have come shall dwell at ease, so long may the brethen be expected not to decline but to prosper.............

" Other seven conditions of welface, (1) so long as the brethren shall not engage in, or be fond of, or be connected with business, (2) shall not be in the habit of, or be fond of, or be partakers in idle talk, (3) shall not be addicted to, or be fond of, or indulge in slothfulness, (4) shall not frequent, or be fond of, or indulge in society, (5) shall neither have nor fall under influence of, wrong desires, (6) shall not become the friends, companions, or intimates of evildoers, (7) shall not come to a stop on their way to Nirvāna in Arahatship because they have attained to any lesser thing.

" Other seven conditions of welfare. (1) so long as the brethren shall be full of faith, (2) modest in heart, (3) afraid of wrong doing, (4) full of learning, (5) strong of energy, (6) active in mind, (7) full of wisdom.

" Other seven conditions of welfare' (1) so long as the brethren shall exercise themselves in the sevenfold higher wisdom, that is to say, in mental activity, (2) search after truth, (3) energy, (4) joy, (5) peace, (6) earnest contemplation, (7) equanimity of mind.

" Other seven conditions of welfare, (1) so long as the brethren shall exercise themselves in the realization of the ideas of the impermanency of all phenomena, bodily or mental, (2) of the absence of any soul, (3) of corruption, (4) of the danger of wrong thougts, (5) of the necessity of getting rid of them, (6) of puriy of heart, (7) of Nirvāna.

不樂世間、四者常念四想、五者起無常想、六者無常苦想七者苦無我想、如是七法則法增長無有捐耗。佛告比丘、復有七法則法增長無有捐耗何謂爲七、一者修念覺意閑靜無欲出要無爲、二者修法覺意、三者修精進覺意、四者修喜覺意、五者修猗覺意、六者修定覺意、七者修護覺意、如是七法則法增長無有捐耗。

佛告比丘有六不退法、令法增長無有捐耗、何謂爲六、一者身常行慈不害衆生、二者口宣仁慈不演惡言、三者意念慈心不懷壞損、四者得淨利養與衆共之平等無二、五者持賢聖戒無有闕漏亦無垢穢必定不動、六者見賢聖道以盡苦際。如是六法則法增長無有捐耗。

佛告比丘復有六不退法令法增長無有捐耗、一者念佛、二者念法、三者念僧、四者念戒、五者念施、六者念天、修此六念則法增長無有捐耗。

爾時世尊於羅閱祇隨宜住已告阿難言、汝等皆嚴吾欲詣竹園。對曰唯然。卽嚴衣鉢與諸大衆侍從世尊路出摩竭次到竹園往堂上坐與諸比丘說戒定慧修戒獲定得大果報修定獲智得大果報修智心淨得等解脫盡於三漏欲漏有漏無明漏已得解脫生解脫智、生死已盡梵行已立所作已辨不受後有。

"Six conditions of welfare will I teach you, (1-3) so long as the brethren shall persevere in kindness of action, speach, and thought towards their fellow-disciples, both in public and in private, (4) shall divide without partiality, and share in common with their upright companions, all such things as they receive in accordance with the just provisions of the Order, down even to the mere contents of a begging bowl, (5) shall live among the saints in the practice, both in public and in private, of those virtues which unbroken, intact, unspotted, unblemished, are productive of freedom, and praised by the wise; which are untarnished by the desire of future life, or by the belief in the efficacy of outward acts; and which are conducive to concentration of heart, (6) shall live among the saints, cherishing, both in public and in private, that noble and saving insight which leads to the complete destruction of the sorrow of him who acts according to it. ....

Now when the Buddha had sojourned at Rājāgaha as long as he thought fit, he addressed Ānanda and said: "Come, Ānanda, let us go to Ambalaṭṭhika." And the Buddha proceeded to Ambalaṭṭhika, there the Buddha stayed in the king's house and held that comprehensive religious talk with the brethren, saying: "Such and such is upright conduct; such and auch is earnest contemplation; such and such is intelligence. Great becomes the fruit, great the advantage of earnest contemplation, when it is set round with upright conduct. Great becomes the fruit, great the advantage of intellect when it is set round with earnest contemplation. The mind set round with intelligedce is set quite free from the Intoxcations, that is to say, from the Intoxication of Sensuality, from the Intoxication of Becoming, from the Intoxication of Delusion, from the Intoxication of Ignorance."

And then the Buddha proceeded, with a great company of the brethren, to Nāranda and stayed in the Pāvarika mango grove.

Now Sāriputta came to the Buddha, took his seat respectfully at his side, and said: "Lord! such faith have I in the Exalted One, that methinks, there never has been, nor will there be, nor is there now any other, whether wanderer or brahmin, who is greater and wiser than the Exalted One, that is to say, as regards the higher wisdom."

"Grand and bold are the words of thy mouth, Sāriputta, verily, thou hast burst forth into a song of ecstasy! of cource then thou hast known all the Exalted Ones in the past, in the present, comprehending their minds with yours, and aware what their conduct, wisdom, mode of life are?

巴陵弗城

爾時世尊於竹園隨宜住已、告阿難曰、汝等皆嚴、當詣巴陵弗城。對曰唯然。卽嚴衣鉢、與諸大衆侍從世尊、路由摩竭、次到巴陵弗城巴陵樹下坐。時諸清信之士聽佛與諸大衆遠來至此巴陵樹下、卽共出城、遙見世尊在巴陵樹下、容貌端正諸根寂定善調第一譬猶大龍以水清澄無有塵垢、三十二相八十種好莊嚴其身。見已歎喜漸到佛處頭面足禮却坐一面。爾時世尊漸爲說法示敎利喜、諸清信士聞佛說法卽白佛言、我欲歸依佛法聖衆唯願世尊哀愍聽許爲優婆塞、自今以後不殺不盜不婬不欺不飮酒奉戒不忘明欲設供唯願世尊與諸大衆垂愍屈顧。爾時世尊默然許可。諸清信士見佛默然卽從座起遶佛三作禮而歸。尋爲如來起大堂舍平治處所掃灑燒香嚴敷寶座供設既辨。往白世尊所設已具、唯聖知時、於是世尊卽從座起著衣持鉢與大衆俱詣彼講堂澡手洗足處中而坐。時諸比丘在左面座諸清信士在右面座。

"Not so, O Lord!" "You see then, Sâriputta, that you know not the hearts of the Able Awakened Ones of the past and of the future. Why therefore are your words so grand and bold? Why do you burst forth into such a song of ecstasy?"

"O Lord! I have not a knowledge of the hearts of the Able Awakened Ones that have been, and are to come, and now are. I only know the lineage of the faith. Just, Lord, as a king might have a border city, strong in its foundations, and only one gate; and king might have a watchman there, clever and wise, to stop all strangers and admit only men well known. And he, on patrolling in his sentry walks over the approaches all round the city, might not so observe all the joints and crevices in the ramparts of that city as to know where even a cat could get out. He might well be satisfied to know that all living beings of larger size that entered or left the city, would have to do so by that gate. thus only is it, Lord, that I know the Lineage of the faith.

"I know that the Able Awakened Ones of the past putting away all hankering after the world, ill-will, sloth, worry and perplexity— those five findrances— training their mind in the four kinds of mental activity; thoroughly exercising themselves in the seven-fold higher wisdom, received the full fruition of Enlightenment. And I know that the Able Awakened Ones of the time to come will do the same and I know that the Able Awakened One of to-day has done so now."..................

Then the Buddha proceeded, with a great company of the brethren, to Pātaligāma. Now the disciples at Pātaligāma heard of his arrival there, and they went on to the place where he was, took there seat respectfully beside him, and invited him to their vilage rest house. And the Buddha signified, by silence, his consent.

Then the Pātaligāma disciples rose from their seats and went away to the rest house. On arriving there they strewed all the rest house with fresh sand, placed seats in it, set up a water-pot, and fixed an oil lamp. Then they returned to the Buddha and told him what they have done and said: "It is time for you to do what you deem most fit."

And the Buddha robed himself, took his bowl and other things, went with the brethren to the rest-house, washed his feet, entered the hall, and took his seat against the center pillar, with his face towards the east. and the brethren took their seats round the Buddha, against the western wall, and facing the east. And the Pātaligāma disciples took their seats opposite the Buddha, against the eastern wall and facing towards the west.

阿闍世王築城

爾時世尊告諸清信士曰、凡人犯戒有五衰耗、何謂爲五、一者求財所願不遂、二者設有所得日當衰耗、三者在所至處衆所不敬、四者醜名惡聲流聞天下、五者身壞命終當入地獄。又告諸清信士、凡人持戒有五功德、何謂爲五、一者諸有所求輙得如願、二者所有財產增益無損、三者所往之處衆人敬愛、四者好名善譽周聞天下、五者身壞命終必生天上。時夜已半告諸信士宜各還歸、諸清信士卽承佛教遶佛三帀禮足而還、

爾時世尊於後夜明相出時至閑靜處天眼清徹見諸大天神各封宅地中神下神亦封宅地、是時世尊卽還講堂就座而坐。世尊知時故問阿難。誰造此巴降弗城。阿難白佛、此是禹舍大臣所造以防禦跋祇。佛告阿難、造此城者正得天意吾於後夜明相出時至閑靜處以天眼見諸大神天各封宅地中下諸神亦封宅地、阿難當知諸大神天所封封地有人居者安樂熾盛、中神所封中人所居下神所封下人所居功德多少各隨所止。阿難此處賢人所居商賈所集國法眞實無有欺罔、此城最勝諸方所推不可破壞此城久後若欲壞時必以三事、一者大水、二者大火、三者中人與外人謀乃壞此城、時巴陵弗諸清信士通夜供辨時到白佛、食具已辨。唯聖知時。時清信士卽便施設手自斟酌食訖行水、別取牀敷在佛前座。

Then the Buddha addressed the Pātaligāma disciples and said: "Fiveford, O householders, is the loss of the wrong-doer through his want of rectitude. (1) The wrong-doer, devoid of rectitude, falls into great poverty through sloth; (2) his evil repute gets noised abroad; (3) whatever society he enters — whether of nobles, brahmins, heads of houses, or men of religious order — he enters shyly and cofused; (4) he is full of anxiety when he dies; (5) on the dissolution of the body, after death, he is reborn into some unhappy state of suffering or woe. This, O househorders, is the fivefold loss of the evil-doer!

"Fivefold, O householders, is the gain of the well-doer through his practice of rectitude. (1) The well-doer, strong in rectitude, acquires great wealth through his industry; (2) good reports of him are spread abroad; (3) whatever society he enters, he enters confidint and self-possessed; (4) he dies without anxiety; (5) on the dissolution of the body, after death, he is reborn into some happy state in heaven. This, O householders, is the fivehold gain of the well-doer."

When the Buddha had thus taught the lay disciples at Pātaligāma, and incited them and roused them, and gladdened them, far into the night with religious discourse, he dismissed them, saying: "The night is far spent, O householders. It is time for you to do what you deem most fit." "Even so, Lord!" answered the disciples of Pātaligāma, and they rose from their seats, and bowing to the Buddha, and keeping him on their right hand as they passed him, they departed thence.

Then the Buddha entered into his private chamber. .... And the Buddha, with great and clear vision, surpassing that of ordinary men, saw thousands of fairies haunting Pātaligāma. And he rose up very early in the morning, and said to Ānanda: "Who is it then, Ānanda, who is building a fortress at Pātaligāma?"

"Sunīdha and Vassakāra, Lord, the chief ministers of Magadha, are building a fortress there to keep back the Vajjians."

"They act, Ānanda, as if they had consulted with the Tāvatimsa angels. And so far, Ānanda, as Āryan people resort, as far as merchants travel, this will become the chief city, Pātali-putta, a centre for the interchange of all kinds of wares. But three dangers will hang over Pātali-putta, that of fire, that of water, and that of dissension among friends."

爾時世尊卽示レ之曰、今汝此處賢智所レ居多持レ戒者淨修二梵行一善神歡喜卽爲呪願可レ敬知レ敬可レ事知レ事博施兼愛有二慈愍心一諸天所レ稱常與レ善俱不三與二惡會一、爾時世尊爲說レ法已卽從レ座起、大衆圍遶侍送而還。大臣禹舍從二佛後一行、時作二是念一、今沙門瞿曇出二此城門一、卽名二此門一爲二瞿曇門一、又觀二如來所レ渡河處一、卽名二此處一爲二瞿曇河一。爾時世尊出二巴陵弗城一至二于水邊一時水岸上人民衆多中有二乘レ船渡者一或有レ乘レ筏或有二乘レ桴而渡レ河者一。爾時世尊與二大衆一譬如二力士屈二伸臂一頃忽至二彼岸一世尊觀二此義一已卽說レ頌曰。

佛爲二海船師一　法橋渡二河津一　大乘道之轝　一切渡二天人一　亦爲二自解結一

渡レ岸得二昇仙一　都使二諸弟子一　縛解得二涅槃一

爾時世尊從二跋祇一遊行至二拘利村一在二一林下一告二諸比丘一、有二四深法一、一曰聖戒、二曰聖定、三曰聖慧、四曰聖解脫、此法微妙難レ可二解知一、我及汝等不レ曉了一故久在二生死一流轉無レ窮。爾時世尊觀二此義一已則說レ頌曰。

戒定慧解上　唯佛能分別　離レ苦而化レ彼　令レ斷二生死習一

Now Sunīdha and Vassakāra went to the Buddha aud invited him saying:

"May the venerable Gotama do us the honour of taking his meal, together with the company of the brethren, at our house to-day." and the Buddha signified, by silence, his concent.

And the Buddha repaired, with the brethren, to the dwelling-place of Sunīdha and Vassakāra, and sat down on the seat prepared for him. And with their own hands they set the sweet rice and the cakes before the brethren with the Buddha at their head, and waited on them till they had enough. And when the Buddha had finished eating his meal, the ministers brought a law seat, and sat down respectfully at his side. The Buddha gave thanks in these verses:

"Wheresoever the prudent man shall take up his abode,
Let him support the brethren there, good men of self-control,
And give the merit of his gifts to the deities who haunt the spot,
Revered, they will revere him: honoured, they honour him again;
Are gracious to him as a mother to her own, her only son.
And the man who has the grace of the gods, good fortune he beholds."

And when he had thanked the ministers in these verses he rose from his seat and departed thence. And they followed him as he went, saying: "The gate the Samana Gotama goes out by to-day shall be called Gotama's gate and the ferry at which he crosses the river shall be called Gotama's ferry," and the gate he went out at was called Gotama's gate.

And the Buddha went on to the river. And at that time the river Ganges was brimfull and overflowing; and wishing to cross to the opposite bank some began to seek for boats, some for rafts of wood, while some made rafts of basket-work. Then the Buddha as instantaneously as a strong man would strech forth his arm, or draw it back again when he had streched it forth, vanished from this side of the river, and stood on the further bank with the company of the brethren.

And the Buddha beheld the people who wished to aross to the opposite bank looking some of them for rafts of the wood, and some of them for rafts of basket-work; and brake froth at that time into this song:

"They who have crossed the ocean drear
Making a solid path across the pools —
Whilst the vain world ties its basket rafts —
These are the wise, these are the saved indeed!"

爾時世尊於拘利村、隨宜住已、告阿難。俱詣那陀村阿難受教即著衣持鉢與大衆俱侍從世尊、路由跋祇到那陀村止揵椎處。爾時阿難在閑靜處默自思惟。此那陀村十二居士、一名伽々羅、二名伽陵伽、三名婆伽陀、四名伽利輸、五名遮樓、六名婆那樓、七名婆頭樓、八名藪婆頭樓、九名陀梨與㝹、十名藪達利舍、十一名耶輸、十二名耶輸多樓。此諸人等今者命終爲生何處。復有五十人命終、又復有五百人命終斯生何處、作是念已從靜處起至世尊所頭面禮足在一面坐白佛言、世尊我向靜處默自思惟此那陀村十二居士伽々羅等命終、復有五十人命終、又有五百人命終、斯生何處唯願解說。佛告阿難、伽々羅等十二人斷五下分結命終生天於彼即般涅槃不復還此、五十人命終者斷除三結婬怒癡薄得斯陀含還來此世盡於苦本、五百人命終者斷除三結得須陀洹不墮惡趣必定成道往來七生盡於苦際。

Now the Buddha proceeded, with a great company of the brethren to Kotigāma; and there he stayed in the village itself. And at that place the Buddha addressed the brethren and said: "It is through not understanding and grasping four Aryan Truth, O brethren, that we have had to run so long, to wander so long in this weary path of transmigration, both you and I! what are these four? The Aryan truth about sorrow; the Aryan truth about the cause of sorrow; the Aryan truth about the cessation of sorrow; and the Aryan tr th about the path that leads to that cessation. But when these Aryan truths are grasped and known the craving for future life is rooted out, that which leads to renewed becoming is destroyed, and then there is no more birth."

By not seeing the Aryan Truths as they really are,
Long is the path that is traversed through many a birth;
When these are grasped, the cause of rebirth is removed,
The root of sorrow uprooted, and then there is no more birth."

There too, while staying at Kotigāma, the Buddha held that comprehensive religious talk with the brethren, saying: "Such and such is upright conduct; such and such is earnest contemplation; such and such is intelligence. Great becomes the fruit, great the advantage of earnest contemplation, when it is set round with upright conduct. Great becomes the fruit, great the advantage of intellect when it is set round with earnest contemplation. The mind set round with intelligence is set quite free from the Intoxication.

Then the Buddha proceeded to the Nādikas with a great companions of the brethren and there he stayed in the Brick Hall.

And the venerable Ānanda went to the Buddha and said to him: "The brother named Sālha has died at Nādika, Lord, where has he been reborn, and what is his destiny? The sister named Nandā has died, Lord, at Nādika. Where is she reborn, and what is her destiny?" And in the same term he inquired concerning the lay disciple Suddatta, and the devout lady Sugatā, the lay disciples Kakucha, Kalinga, Nikaṭa, Katissabha, Tuttha, Santuttha, Bhadda, aud Subhadda.

"The brother named Sālha, Ānanda, by the destruction of the Intoxications has by himself, and in this world, known and realized and attained to Arahatship, to emancipation of heart and mind. The sister named Nandā has by the complate destruction of the five bonds that bind people to this lower worlds of lust, become an inheritor of the highest heavens, there to pass entirely, thence

阿難夫生有レ死自世之常此何足レ恠、若一一人死來問レ我者非二擾亂一耶、阿難答曰、信爾、世尊實是擾亂。佛告二阿難一今當下爲レ汝說二法鏡一使中聖弟子知二所生處三惡道盡得二須陀洹一不レ過二七生一必盡二苦際一亦能爲レ他說上レ如レ是事、阿難法鏡者謂聖弟子得二不壞信一歡喜信二佛如來無所著等正覺十號具足一歡喜信下法眞正微妙自恣所說無レ有二時節一示二涅槃道一智者所行上歡喜信下善共和同所行質直無レ有二諛諂一道果成就上下和順法身具足上向二須陀洹一得二須陀洹一向二斯陀含一得二斯陀含一向二阿那含一得二阿那含一向二阿羅漢一得二阿羅漢一、四雙八輩是謂下如來賢聖之衆甚可二恭敬一世之福田信三賢聖戒清淨無穢無レ有二缺漏一明哲所行獲二三昧定。阿難是爲二法鏡一使三聖弟子知二所生處三惡道盡得二須陀洹一不レ過二七生一必盡二苦際一亦能爲レ他說二如レ是事一、

never to return. The devout Sudatta, Ānanda, by the complete destruction of the three bonds, and by the reduction to a minimum of lust, ill-will, and stupidity, has become a Sakadāgamin, who on his first return to this world will make an end of sorrow. The debout Sugata, by the complete destruction of the three bonds, has become converted, is no longer liable to be reborn in a state of suffering, and is assured of hereafter attaining to the enlightenment of Arahatship. The devout Kakudha, by the complete destruction of the five bonds that bind people to there lower worlds of lust, has become an inheritor of the highest heavens, there to pass entirely away, thence never to return. The others, and more than fifty devout men in Nādika, and more than ninety devout men in Nādika became Anāgamins and Sakadāgamins. More than five hundred devout men of Nādika, who have died, became Sotapattins.

"Now there is nothing strange in this, Ānanda, that a human being should die; but that as each one does so you should come to me, and inquire about them in this manner, that is wearisome to me. I will, therefore, teach you a way of truth, called the Mirror of Truth, which if a disciple of the noble ones possess he may, if he should so desire, himself predict of himself: 'Purgatory is destroyed for me, and rebirth as an animal or a ghost, or in any place of woe is no more. I am converted I am no longer liable to be reborn in a state of suffering, and am assured of hereafter attaining to the enlightenment.

"What then, Ānanda, is this Mirrow of Truth? It is the consciousness that the disciple of the Arahats is in this world possessed of faith in the Buddha — believing the Exalted One to be the Arahat, the Fully-enlightened One, Wise, Upright, Happy, World-knowing, Supreme, the Bridler of men's wayward hearts, the Teacher of gods and men, the Exalted and Awakened One. And that he is possessed of faith in the Truth — believing the Truth to have been proclaimed by the Fxalted One, of advantage in this world, passing not away, welcoming all, leading to salvation, and to be attained to by the wise, each one for himself, and that he is possessed of faith in the Order — believing the multitude of the disciples of the Exalted One who are walking in the four stages of the noble eightfold path, the righteous, the upright, the just, the law-abiding — believing this Church of the Buddha to be worthy of honour, of hospitality, of gifts, and of reverence; to be the supreme sowing ground of merit for the world; to be possessed of the virtues beloved by the good, virtues unbroken, intact, unspotted unblemished, virtues which makes men truely free, virtues which

娼婦菴婆波利

爾時世尊、隨宜住已、卒阿難及大衆路由跋祇、到毗舍離、坐一樹下。有一婬女、名菴婆婆梨。聞佛將諸弟子來至毗舍離坐一樹下、卽至佛所頭面禮足却坐一面。爾時世尊漸爲說法、示敎利喜。聞佛所說發歡喜心、卽白佛言從今日始歸依三寶、唯願聽許於正法中爲優婆夷盡此形壽不殺不盜不邪婬不妄語不飮酒。又白佛言唯願世尊及諸弟子明受我請卽於今暮止宿園。爾時世尊默然受之、女見佛默然許可卽從座起頭面禮足遶佛而歸。其去未久佛告阿難當與汝等詣彼園觀。對曰唯然、佛卽從座起攝持衣鉢與衆弟子千二百五十人俱詣彼園、時毗舍離諸隸車輩聞佛在菴婆婆梨園中止住卽便嚴駕五色寶車或乘靑車靑馬衣蓋幢幡官屬皆靑五色車馬皆亦如是。時五百隸車服色盡同欲往詣佛。菴婆婆梨辭佛還家中路逢諸隸車時車行奔疾與彼寶車共相鉤撥捐折幢蓋而不避道、隸車責曰汝恃何勢行不避道衝撥我車捐折幢蓋。彼曰諸貴我已請佛明日設食歸家供辨、是以行速無容相避。諸隸車卽語女曰、且置汝請當先與我、我當與汝百千兩金。女尋答曰先請已定不得相與。時諸隸車又語女曰、我更與汝十六倍百千兩金必使我先。女猶不肯、我請已定不可爾也。時諸隸車又語女曰、我今與爾中分國財可先與我。女又曰設使舉國財寶我猶不取、所以然者、佛住我園先受我請此事已了終不相與。諸隸車等各振手歎咤今由斯女闕我初福、卽便前進徑詣彼園觀、爾時世尊遙見五百隸車車馬數萬塡道而來告諸比丘汝等欲知忉利諸天遊戲園觀威儀容飾與此無異、汝等比丘當自攝心具諸威儀、

are praised by the wise, are untarnished by the desire of future life or the belief in the efficacy of outward acts, and are conducive to concentration of heart.

"This, Ānanda, is the way, the Mirrow of Truth, which if a disciple of the noble ones possess, he may if he should so desire, himself predict of himself: "Purgatory is destroyed for me .... "

Then the Buddha proceeded, with a great company of the brethren, to Vesāli, and there he stayed at Ambapāli's grove. Now there the Buddha addressed the brethren and said: "let a brother be mindful and self-possessed; this is our instruction to you. And how does a brother become mindful? Herein, O Bhikkhus, a brother continues as to look upon the body that he remains strenuous, self-possessed and mindful, having overcome both the hankering and dejection common in the world. And in the same way as to feelings, moods, or ideas, he continues so to look upon each that he remains strenuous, self-possessed, and mindful, having overcome both the hankering and the dejection common in the world. And how does a brother become self-possessed? He acts, O Bhikkhus, in full presence of mind whatever he may do in going out or coming in, in looking forward or looking round, in bending in his arm or in stretching it forth, in wearing his robes or in carrying his bowl, in eating or drinking, in masticating or swallowing, in obeying the calls of nature, in walking or standing or sitting, in sleeping or walking, in talking and in being silent.

"Thus let a brother be mindful and self-possessed; this is our instruction to you.

Now the courtezan Ambapāli heard that the Buddha had arrived at Vesāli, and was staying there at her mango grove. Then she went to the Buddha and she — instructed, aroused, incited, and gladdened with his words -- said to him: "May the Exalted One do me the honour of taking his meal, together with the brethren, at my house to-morrow?" And the Buddha gave, by silence, his consent. Then when Ambapāli saw that the Buddha had consented, she rose from her seat and departed thence.

Now the Licchavis of Vesāli heard that the Buddha was staying at Ambapāli's grove, so ordering a number of state carriages to be made ready, they each mounted one of them and went forth with their train from Vesāli. Some of them were dark, dark in colour, wearing dark clothes and ornaments: some of them were fair, fair in colour, and wearing light clothes and ornaments: some of them were red, ruddy in colour, and wearing red clothes and ornaments: some of them were white,

云何比丘自攝其心、於是比丘內身身觀精勤不懈、憶念不忘捨世貪憂、外身身觀精勤不懈憶念不忘捨世貪憂、內外身觀精勤不懈捨世貪憂受意法觀亦復如是。云何比丘具諸威儀、於是比丘可行知行可止知止左右顧視屈伸俯仰攝持衣鉢食飲湯藥不失宜則善設方便除去蔭蓋行住座臥覺寤語默攝心不亂是謂比丘具諸威儀。爾時五百隷車往至菴婆婆梨園頭面禮足却座一面、如來在座光明獨顯蔽諸大衆、譬如秋月又如天地清明淨無塵翳日在虛空光明獨照。爾時五百隷車圍遶侍坐、佛於衆中光明獨明。是時座中有一梵志名曰并饗即從坐起偏袒右肩右膝著地叉手向佛以偈讚曰、

摩(1)竭鴦伽王　為快得善利　身被寶珠鎧　世尊出其土　威德動三千
名顯如雪山　如蓮華開敷　香氣甚微妙　今覩佛光明　如日之初出
如月遊虛空　無有諸雲翳　世尊亦如是　光照於世間　觀如來智慧
猶闇覩錠燎　施衆以明眼　決了諸疑惑

時五百隷車聞此偈已復告并饗汝可重說、爾時并饗即於佛前再三重說。時五百隷車聞重說偈已、各脫寶衣以施并饗并饗即以寶衣奉上如來、佛愍彼故即為納受。爾時世尊告毘舍離諸隷車曰、世有五寶甚為難得、何等為五、一者如來至眞出現於世甚為難得、二者如來正法能演說者此人難得、三者如來演法能信解者此人難得、四者如來演法能成就者此人難得、五者嶮危救厄知反復者此人難得、是謂五寶為難得也。時五百隷車聞佛示

pale in colour, and wearing white clothes and ornaments. And Ambpāli drove against the young Licchavis, axle to axle, wheel to wheel, and yoke to yoke, and thé Licchavis said to Ambapāli: "How is it, Ambapāli, that thou drivest up against us thus?"

"My lords, I have just invited the Exalted One and his brethren for their morrow's meal," said she. "Ambapāli! give up this meal to us for a hundred thousand," said they. "My lords, were you to offer all Vesāli with its subject territory, I would not give up so honourable a feast!"

Then the Licchavis cast up their hands, exclaiming: "We are outdone by this mango girl! we are outreached by this mango girl!" and they went on to Ambapāli's grove.

When the Buddha saw the Licchavis approaching in the distance, he addressed the brethren and said: "O brethren, let those of the brethren who have never seen the Tāvatinsa gods, gaze upon this company of the Licchavis, behold this company of the Licchavis, compare this company of the Licchavis— for they are even as a company of Tāvatinsa gods.

And after the instruction given by the Buddha, they— instructed, roused, incited, and graddened with his words— invit d the Buddha, with the brethren for to-morrow's meal.

"O Licchavis, I have promised to dine to-morrow with Ambapāli the courtezan" was the reply.

Then the Licchavis cast up their hands, exclaiming: "We are outdone by this mango girl! we are outreached by this mango girl!" And expressing their thanks and approval of the words of the Buddha, they rose from their seats and bowed down before the Buddha, and keeping him on their right hand as they passed him, they departed thence.

(1) Like the red lotus, sweet-scented, full-blown,
At dawn of day, unspent its perfume's treasure,
Behold him! th'Angirasa shedding radiance,
As shines the sun filling all heaven with glory.

—Pingiya's gātha, Anguttara N. V. 195.

—The Book of Kindred Sayings I, p. 1o7.

敎利喜已、即白佛言、唯願世尊及諸弟子明受我請。佛告隷車、卿已請我、我今便爲得供養已。菴婆婆梨女先已請訖。時五百隷車聞菴婆婆梨女已先請佛、各振手而言、我欲供養如來、而今此女已奪我先。即從座起、頭面禮佛、遶佛三帀、各自還歸。時菴婆婆梨女即於其夜種々供辦、明日時到、世尊即與千二百五十比丘整衣持鉢、前後圍繞、詣彼請所、就座而坐。時菴婆婆梨女即設上饌、供養佛及僧、食訖去鉢、幷除机案、時女手執金瓶、行澡水畢、前白佛言、此毘耶離城所有園觀最勝、今以此園貢上如來、哀愍我故、願垂納受。佛告女曰、汝可以此園施佛爲首及招提僧、所以然者、如來所有園林房舍衣鉢六物、正使諸魔釋梵大神力天、無有能堪受此供者。時女受敎、即以此園施佛爲首及招提僧。佛爲受之、而說偈言、

(1)起塔立精舍　園果施清涼　橋船以渡人、　曠野施水草　及以堂閣施
其福日夜增　戒具清淨者　彼必到善方

時菴婆婆梨女取一小牀、於佛前坐、佛漸爲說法、示敎利喜、施論戒論生天之論、欲爲大患、穢惡不淨、上漏爲礙、出要爲上。爾時知彼女意柔軟和悅、陰蓋微薄、易可開化、如諸佛法、即爲彼女說苦聖諦苦集苦滅苦出要諦、時菴婆婆梨女信心清淨、譬如淨潔白氎易爲受色、即於座上遠塵離垢、諸法法眼生、即向佛誓爲優婆夷、禮佛而去。

爾時世尊、於毘舍離隨宜住已、告阿難、路由跋祇、至竹林叢。于時彼土穀貴饑饉、乞求難得。

……佛告命諸比丘。此土饑饉乞求難得、汝等宜各分部、隨所知識、詣毘舍離及越祇

And at the end of the night Ambapāli made ready in her mansion sweet rice and cakes, and announced the time to the Buddha, saying: "The hour, lord, has come, and the meal is ready!"

And the Buddha went with the brethren to Ambapāli's mansion and seated himself on the seat prepared for him. And Ambapāli the courtezan set the sweet rice and cakes before the Order, with the Buddha at their head, and waited upon them till they refused any more.

And when the Buddha had quite finished his meal, and had cleansed the bowl and his hands, the courtezan had a low stool brought, and sat down at his side, and addressed the Buddha and said: "Lord, I present this pleasaunce to the order of mendicants of which the Buddha is the chief." And the Exalted One accepted the gift; and after instructing, rousing, inciting and gladdening her with religious discourse, he rose from his seat and departed thence.

(1) Planters of groves and fruitful trees,
And they who build causeway and dam,
And wells construct and watering sheds,
And to the homeless shelter give:
Of such as these by day and night,
For ever doth the merit grow.
In righteuousness and virtue's might,
Such folk from earth heaven go.

—Samyutta N. I, 5, 8.

—The Book of Kindred Sayings I, p. 46.

Now when the Buddha had remained so long as he wished at Ambapāli's grove, he addressed Ānanda and said: "Come, Ānanda, let us go on to Beluva."

Then the Buddha proceeded, with a great company of the brethreu, to Beluva, and there stayed in the village.

Now the Buddha there addressed the brethren and said: "O mendicants, do you take up your abode round about Vesāli, each according to the place where his friends, acquintances, and intimates may live, for the retreat in the rainy season. I shall enter upon the rainy season here at Beluva."

自燈明自歸依

國於彼安居可以無之吾獨與阿難於此安居所以然者恐有短乏。是時諸比丘受教即行、佛與阿難獨留。於後夏安居中佛身疾生舉體皆痛、佛自念言我今疾生舉身痛甚而諸弟子悉皆不在若取涅槃則非我宜今當精勤自力以留壽命。爾時世尊於靜室出坐清涼處。阿難見已速疾往詣而白佛言、今觀尊顏疾如有損、阿難又言世尊有疾我心惶懼憂結荒迷不識方面氣息未絶猶少醒悟默思。如來未滅度世眼未滅大法未損、何故今者不有教令於衆弟子乎。佛告阿難衆僧於我有所須耶若有自言我持衆僧斯人於衆應有教命如來不言我持於衆我攝於衆豈當於衆有教令乎、阿難我所說法內外已訖終不自稱所見通達吾已老矣年粗八十譬如故車方便修治得有所至吾身亦然以方便力得少留壽自力精進忍此苦痛不念一切想入無想定時我身安穩無有惱患、是故阿難當自熾燃熾燃於法勿他熾燃當自歸依歸依於法勿他歸依、云何自熾燃熾燃於法勿他熾燃當自歸依歸依於法勿他歸依、阿難比丘觀內身精勤無懈憶念不忘除世貪憂觀外身觀內外身精勤不懈憶念不忘除世貪憂受意法觀亦復如是是謂自熾燃熾燃於法勿他熾燃當自歸依歸依於法勿他歸依。佛告阿難吾滅度後能有修行此法者則爲眞我弟子第一學者。

佛身病生ず

佛告阿難但至遮婆羅塔、對曰唯然。如來即起著衣持鉢詣一樹下、告阿難敷座吾患背痛欲於此止、對曰唯然尋即敷座。如來坐已阿難敷一小座於佛前坐。佛告阿難諸有修四神足多修習行常然不忘在意所欲可得不死一劫有餘阿難佛四神足已多修行專念不忘在

"So it be, lord!" said those brethren, in assent, to the Exalted One. And they entered upon the rainy season round about Vesāli, each according to the place where his friends, acquitances, and intimates lived: whilst the Buddha stayed even there at Beluva.

Now when the Buddha had thus entered upon the rainy season, there fell upon him a dire sickness, and sharp pains came upon him, even unto death. But the Buddha, mindful and self-possessed, bore them without complaint. Then this thought occurred to the Buddha: "It would not be right for me to pass away without addressing the disciples, without taking leave of the Order. Let me now, by a strong effort of the will, bend this sickness down again, and keep my hold on life till the allotted time be come." And he bent that sickness down again, and kept his hold on life till the time he fixed upon should come. And the sickness abated upon him.

Now very soon after the Buddha began to recover. And when he had quite got rid af the sickness, he came out from his lodging, and sat down in the shadow thereof on a seat spread out there. And Ānanda went to the Buddha, saluted him and said to him: "I have beheld, lord, how the Exalted One was in health, and I have beheld how the Exalted One had to suffer. And though at the sight of the sickness of the Exalted One my body became weak as a creeper, and the horison became dim to me, and my faculties were no longer crear, yet notwithstanding I took some little comfort from the thought that the Exalted One would not pass away untill at least he had let instruction as touching the Order."

"What, then, Ānanda? Does the Order expect that of me? I have preached the truth without making any distinction between exoteric and esoteric doctrine; for in respect of the truths, Ānanda, the Tathāgata has no such thing as the closed fist of a teacher, who keeps some things back. Surely, Ānanda, should there be any one who harbours the thought, 'It is I who will lead the brotherhood,' or 'The Order is dependent upon me,' it is he who should lay down instruction in any matter concerning the Order. Now the Tathāgata, Ānanda, thinks not that it is he who should lead the brotherhood, or that Order is dependent upon him. Why then should he leave instructions in any matter concerning the Order? I too, O Ānanda, am now grown old, and full of years, my journey is drawing to its close, I have reached my sum of days, I am turning eighty years of age; and just as a worn-out cart, Ānanda can be kept going only with the help of thongs, so, methinks, the body of the Tathāgata can only be kept going by bandaging it up.

惡魔再現

意所欲如來可止一劫有餘爲世除冥多所饒益天人獲安。爾時阿難默然不對、如是再三又亦默然、是時阿難爲魔所蔽矇々不悟、佛三現相而不知請。佛告阿難宜知是時、阿難承佛意旨即從座起禮佛而去、去佛不遠在一樹下靜意思惟其間未久時魔波旬來白佛佛意無欲可般涅槃今正是時宜速滅度。佛告波旬且止且止我自知時如來今者未取涅槃須我諸比丘集又能自調勇捍無怯到安樂處逮得已利爲人導師演布經教顯於句義若異論能以正法而降伏之又以神變自身作證、如是弟子皆悉未集又諸比丘尼優婆塞優婆夷普皆如是亦復未集、今者要當廣於梵行演布覺意使諸天人普見神變。時魔波旬復白佛言、佛昔於欝鞞羅尼連禪水邊阿遊波尼俱律樹下初成正覺、我時至世尊所勸請如來可般涅槃今正是時宜速滅度、爾時如來即報我言止止波旬我自知時如來今者未取涅槃須我諸弟子集乃至天人見神變化乃取涅槃、佛今弟子已集乃至天人見神變化今正是時何不滅度。佛言止止波旬佛自知時不久住也是後三月於本生處拘尸那竭娑羅園雙樹間當取滅度時魔即念佛不虛言今必滅度歡喜踊躍忽然不現。魔去未久佛即於遮婆羅塔定意三昧捨命住壽當此之時地大震動擧國人民莫不驚怖衣毛爲竪。佛放大光徹照無窮幽冥之處莫不蒙明各得相見爾時世尊以偈頌曰

有無二行中　吾今捨有爲　內專三昧定　如鳥出於卵

爾時賢者阿難心驚毛竪疾行詣佛、頭面禮足却住一面白佛言、恠哉世尊地動乃爾是何

It is only, Ānanda, when the Tathāgata, by ceasing to attend to any outward thing, becomes plunged by the cessation of any separate sensation in that concentration of heart which is concerned with no material object —— it is only then that the body of the Tathāgata is at ease.

Therefore, O Ānanda, be ye lamps unto yourselves. Be ye a refuge to yourselves. Betake yourselves to no external refuge. Hold fast to the Truth as a lamp. Hold fast as a refuge to the Truth. Look not for refuge to any one besides yourselves. And how, Ānanda, is a brother to be a lamp unto himself, a refuge to himself to no external refuge, holding fast as a refuge to the Truth, holding fast to the Truth as a lamp, looking not for refuge to any one besides himself?

"Herein, O mendicants, a brother continues, as to the Body so to look upon the body that he remains strenuous, self-possesssed, and mindful, having overcome both the hankering and the dejection common in the world. And in the same way as to feelings, moods, and ideas, he continues so to look upon each that he remains strenuous, self-possessed, and mindful, having overcome both the hankering and the dejection common in the world.

"And whosoever, Ānanda, either now or after I am dead, shall be a lamp unto themselves, and a refuge unto themselves, shall betake themselves to no external refuge, but holding fast to the Truth as their lamp and holding fast as their refuge to the Truth, shall look not for refuge to any one besides themselves —— it is they, Ānanda, among my bhikkhus, who shall reach the very topmost Height! —— but they must be anxious to learn."

Now the Buddha, after he had returned from the round for alms in Vesāli and he had finished eating, said to Ānanda: "Take up the map, Ānanda; I will go and spend the day at the Ch̄apāla Shrine."

There at Ch̄apāla Shrine the Buddha said to Ānanda: "How delightful a spot, Ānanda, is Vesāli and how charming the Udena Shrine and the Gotamaka Shrine, and the Shrine of the Seven Mangoes, and The Shrine of Many Sons, and the Sārandada Shrine, and the Ch̄apāla Shrine! Ānanda, whosoever has developed, practised, dwelt on, expanded and ascended to the very heights of the four paths of Iddhi, and so mastered them as to be able to use them as a vehicle, and as a basis, he, should he desire it, could remain for an aeon or for that portion of the aeon which had yet to run,. Now the Tathāgata has thoroughly practised and developed them and he could therefore should he desire it, live on yet for an aeon, or for that portion of the aeon which has yet to run."

因緣、佛告阿難凡世地動有八因緣何等八、夫地在水上水止於風風止於空空中大風有時自起則大水擾、大水擾則普地動是爲一也。復次阿難有時得道比丘比丘尼及大神尊天觀水性多觀地性少欲知試力則普地動、是爲二也。復次阿難若始菩薩從兜率天降神母胎專念不亂地爲大動是爲三也。復次阿難菩薩始出母胎從右脅生、專念不亂則普地動是爲四也。復次阿難菩薩初成無上正覺當於此時地大震動是爲五也。復次阿難佛初成道轉無上法輪魔若天沙門婆羅門諸天世所不能轉、則普地動是爲六也。復次阿難佛教將畢專念不亂欲捨性命則普地動是爲七也。復次阿難如來於無餘涅槃界般涅槃時地大振動是爲八也。以此八因緣今地大動。爾時世尊卽說偈言。

無上二足尊　照世大沙門　阿難請天師　地動何因緣　如來演慈音
聲如迦毗陵　我說汝等聽　地動之所由　地因水而止　水因風而住
若虛空風起　則地爲大動　比丘比丘尼　欲試神足力　山海百草木
大地皆震動　釋梵諸天尊　意欲動於地　山海諸鬼神　大地爲震動
菩薩二足尊　百福相已具　始入母胎時　地則爲大動　十月處母胎
如龍臥茵蓐　初從右脅生　時地則大動　佛爲童子時　消滅使緣縛
成道勝無量　地則爲大動　昇仙轉法輪　於鹿野苑中　道力降伏魔
則地大爲動　天魔頻來請　勸佛般涅槃　佛爲捨性命　地則爲大動

But even though a suggestion so evident and a hint so clear were thus given by the Buddha, Ānanda was incapable of comprehending them; and besought not the Buddha saying: 'Vouchsafe, lord, to remain during the aeon! Live on through the aeon, O happy One! for the good and the happiness of the great multitudes, out of pity for the world, for the good and the gain and the weal of gods and men!' So far was his heart possessed by the Evil One.

A second and third time did the Buddha say the same thing, and a second and third time was Ānanda's heart thus hardened.

Then the Buddha said to Ānanda: 'You may leav me, Ānanda, while, and do whatsoever now seems to thee fit. "Then, Ānanda passing him on the right sat down at the foot of a certain tree not far off thence.

Now not long after Ānanda had been gone, Māra approached the Buddha and standing there, addressed the Buddha in these words: "Pass away now, lord; let the Exalted One now die. Now is the time for the Exalted One to pass away —— even according to the word which the Exalted One spoke when he said: 'I shall not die, O Māra,' until the brethren and sisters of the Order, and untill the lay-disciples of either sex shall have become true hearers, wise and well trained, ready and learned, carrying the doctrinal books in their memory, masters of the lesser corollaries that follow from the larger doctrine, correct in life, walking according to the precepts —— until they, having thus themselves learned the doctrine, shall be able to tell others of it, preach it, minutely explain it and make it clear —— until they, when others start vain doctrine easy to be refuted by the truth, shall be able in refuting it, to spread the wonder-working truth abroad!'

'And now, lord, the brethren and sisters of the order and the lay-disciples of either sex have become all this, are able to do all this. Pass away now therefore, lord; let the Exalted One now die! The time has come for the Exalted One to pass away —— even according to the Exalted One's word, "I shall not die, until this pure religion of mine shall have become successful, prosperous, wide-spread, and popular in all its full extent, —— until, in a word, it shall have been well proclaimed among men. "And now, lord, this pure religion of thine has become all this. The time has come for Exalted One to pass away.'

And when he had thus spoken, the Buddha said to Māra: 'O Evil-One! make thyself happy, the death of the Tathāgata shall take place before long. At the end of three months from this time the Tahāgata will pass away."

人尊大導師　神仙盡後有　難動而取滅　時地則大動　淨眼說諸緣
地動八事動　有此亦有餘　時地皆震動

八衆

佛告阿難世有八衆、何謂八一曰刹利衆二曰婆羅門衆三曰居士衆四曰沙門衆、五曰四天王衆六曰忉利天衆七曰魔衆八曰梵天衆。我自憶念昔有往來與刹利衆坐起言語不可稱數以精進定力在所能現彼有好色我色勝彼、彼有妙聲我聲勝彼彼辭我退、我不辭彼、彼所能說我亦能說彼所不能我亦能說、阿難我廣爲說法示敎利喜已卽於彼沒彼不知我是人是天、如是至梵天衆往返無數廣爲說法而莫知我誰。阿難白佛言甚奇世尊未曾有也。乃能成就如是。佛言如是微妙希有之法阿難甚奇甚特未曾有也、唯有如來能成此法。又告阿難如來能知受起住滅、想起住滅、觀起住滅、此乃如來甚奇甚特未曾有法、汝當受持。爾時世尊告阿難、俱詣香塔在一樹中敷座而坐、佛告阿難香塔左右現諸比丘普敕令集講堂阿難受敎宣令普集、阿難白佛大衆已集唯聖知時、爾時世尊卽詣講堂就座而坐告諸比丘、汝等當知我以此法自身作證、成最正覺、謂四念處四意斷四神足四禪五根五力七覺意賢聖八道、汝等宜當於此法中和同敬順勿生諍訟、同一師受同一水乳於我法中宜勤受學共相熾然共相娛樂。比丘當知我於此法自身作證布現於彼謂貫經祇夜經受記經偈經法句經相應經本緣經天本經未曾有經證喩經大敎經汝等當善受持稱量分別隨事修行、所以者何如來不久是後三月當般泥洹。諸比丘聞此語已皆悉愕然

Thus the Buddha while at the Shrine of Chāpāla deliverately and consciously rejected the rest of his natural term of life. And on his so rejecting it there arose a mighty earthquake, awful and terrible, and the thunders of heaven burst forth. And when the Buddha beheld this, he broke out at that time into this hymn of exultation:

'His sum of life the sage renounced,
The cause of life immeasurable or small;
With inward joy and calm, he broke,
Like coat of mail, his life's own cause.'

Now the following thought occured to Ānanda: 'Wonderful indeed and marvellous is it that this mighty earthquake should arise! What my be the proximate, what the remote cause of the appearance of this earthquake?" So he came up to the Buddha and asked him to explain why this mighty earthquake arose.

"Eight are the proximate, eight the remote causes, Ānanda, for the apprearance of a mighty earthquake. (1) This great earth is established on water, the water on wind, and the wind rests upon the space. And when the mighty winds blow, the waters are shaken, and by the moving of the waters the earth is shaken. (2) A recluse or a brahmin of great power, and who has the feelings of his heart well under his control; ora god or fairy of great might and power, — when such a one by intence meditation on the idea of the minutest portion of earth and on the idea of the widest expanse of water has succeeded in realizing the comparative value of things he can make this earth move and tremble and be shaken violently. (3) When a Bodhisatta consciously and deliberately leaves his form in the heaven of delight, and descends into this mother's womb. (4)When a Bodhisatta quits his mother's momb. (5) When a Tathāgata arrives at the supreme and perfect enlightenment. (6) When a Tathāgata founds the sublime kingdom of righteuousness. (7) When a Tathāgata consciously and deliberately rejects the remainder of his life. (8) When a Tathāgata passes entirely away in that utter passing away in which nothing whatever is left behind, this earth quakes and trembles and is shaken violently.

Now of eight kinds, Ānanda, are these assemblies. Which are the eight? Assemblies of nobles, Brahmins, householders, and wanderers, and of the angel hosts of the Guardian Kings, of the Great Thirty-Three, of the Māras and of the Brahmās.

Now I call to mind, Ānanda, how when I used to enter into an assembly of many hundred nobles, before I had seated myself there or talked

殞絕迷荒自投於地、舉聲大呼曰、何駃哉佛取滅度、何痛哉世間眼滅、我等於此已爲長衰、或有比丘悲泣躃踊宛轉逃不能自勝、猶如斬蛇宛轉廻遑莫知所奉。佛告諸比丘曰汝且止勿懷憂悲、天地人物無生不終、欲使有爲不變易者無有是處、我亦先說恩愛無常合會有離、身非己有、命不久存。爾時世尊以偈頌曰

我今自在　到安隱處　和合大衆　爲說此義　吾年老矣
餘命無幾　所作已辨　今當捨壽　念無放逸　比丘戒具
自攝定意　守護其心　若於我法　無放逸者　能滅苦本
盡生老死

又告比丘、吾今所以誡汝者何、天魔波旬向來請我、佛意無欲可般涅槃、今正是時宜速滅度。我言止止波旬佛自知時、須我諸比丘集乃至諸天普見神變。波旬復言、佛昔於欝鞞羅尼連禪河水邊阿遊波尼俱律樹下初成佛道、我時白佛、佛意無欲可般涅槃、今正是時宜速滅度、爾時如來即報我言、止止波旬我自知時如來今者未取滅度須我諸弟子集乃至天人見神變化乃取滅度、今者如來弟子已集乃至天人見神變化、今正是時宜可滅度。我言止止波旬佛自知時不久住也是後三月當般涅槃。時魔即念、佛不虛言、今必滅度歡喜踊躍忽然不現魔去不久即於遮波羅塔定意三昧捨命住壽、當此之時地大震動天人驚怖衣毛爲竪、佛放大光徹照無窮幽冥之處莫不蒙明各得相見、我時頌曰。

to them or started a conversation with them, I used to become in colour like unto their colour, and in voice like unto their voice. Then with religious discourse I used to instruct and incite, and quicken them, and fill them with gladness. But they knew me not when I spoke, and would say: "Who may this be who thus speaks? a man or a god?" Then having instructed ...... and gladdened them with religious discourse, I would vanish away. But they knew me not even when I vanished away, and would say:—— "Who may this be who has thus vanished away? a man or a god?"

'This was the same with the other seven kinds, they did not know me either in speaking or in vanishing away. Now these, Ānanda, are the eight assemblies.'

'On one occassion, Ānanda, I was resting under the goatherd's Nigrodha tree on the bank of the Nerañjarā immediately after having reached the great enlightenment. Then Māra came to me and standing besides me, he addressed me in the words: 'Pass rway now, lord! Let the Exalted One now die! Now is the time for the Exalted One to pass away!"

'And, Ānanda, I said to Māra: "I shall not pass away, O Evil One! until not only the brethren and sisters of the Order, but the lay-disciples of either sex shall have become true hearers and shall be able to preach it, ——- until they, when others start vain doctrine easy to be refuted by the truth, shall be able in refuting it to spread the wonder working truth abroad! I shall not die until this pure religion of mine shall have become successfull prosperous wide-spread, and popular in all its full extent, in a word, until it shall have well proclaimed among men"

'And now again to-day, Ānanda, at Chāpāla's shrine Māra came to me and he sought me to pass away. And I answered him and said: "Make thyself happy, the passing away of the Tathāgata shall take place before long. At the end of three months from this time the Tathāgata will pass away!" And now again, Ānanda, the Tathāgata has to-day at Chāpāla's Shrine consciously and deliberately rejected the rest of his alloted term of life.'

And when he had thus spoken Ānanda said to the Buddha: 'Vouchsafe, lord, to remain during the aeon: live on through the kalpa. O Exalted One! for the good and the happiness of the great multitudes, out of pity for the world, for the good and the gain and weal of gods and men!'

'Enough now, Ānanda, beseech not the Tathāgata!'; was the reply. 'The time for making such request is past.'

有無二行中　吾今捨有爲　內專三昧定　如鳥出於卵

爾時賢者阿難卽從座起偏袒右肩右膝著地長跪叉手白佛言唯願世尊留住一劫勿取滅度慈愍衆生饒益天人。爾時世尊默然不對、如是三請、佛告阿難汝信如來正覺道不。對曰唯然實信、佛言汝若信者何故三來觸嬈我。爲汝親從佛聞從佛受、諸有能修四神足多修習行常念不忘在意所欲可止不死一劫有餘佛四神足已多習行專念不忘在意所欲可止不死一劫有餘爲世除冥多所饒益天人獲安。爾時何不重請使不滅度再聞尙可乃至三聞猶不勸請留住一劫一劫有餘爲世除冥多所饒益天人獲安、今汝方言豈不愚耶、吾三現相汝三默然汝於爾時何不報我如來可止一劫一劫有餘爲世除冥多所饒益。且止阿難吾已捨性命已來已吐欲使如來自違言者無有是處譬如豪貴長者吐食於地寧當復有肯還取食不、對曰不也、如來亦然已捨已吐豈當復自還食言乎。佛告阿難俱詣菴婆羅村卽嚴衣鉢與諸大衆侍從世尊路由跋祇到菴婆羅村在一山林爾時世尊爲諸大衆說戒定慧修戒獲定得大果報修定獲慧得大果報修智心淨得等解脫盡於三漏欲漏有漏無明漏已得解脫生　脫智生死已盡梵行已立所作已辦不受後有。爾時世尊於菴婆羅村隨宜住已、佛告阿難汝等皆嚴當詣瞻婆村犍茶村婆梨婆村及詣負彌城、對曰唯然卽嚴衣鉢與諸大衆侍從世尊路由跋祇漸至他城於負彌城北止尸舍婆林佛告諸比丘當與汝等說四大敎法諦聽諦聽善思之。諸比丘言唯然世尊願樂欲聞。何謂爲四若有

And again the second time and the third time, Ānanda besought the Buddha in the same words.

'Hast thou faith, Ānanda, in the wisdom of the Tathāgata?' 'Even so, lord!' 'Now why, then, Ānanda, dost thou trouble the Tathāgata even until third time?'

'From his own mouth have I heard this saying: "Whosoever has practised...... could remain in the same birth for an aeon or for that portion of the aeon which has yet to run." Now the Tathāgata has thoroughly practised and developed them, and he could, therefore, should he desire it, live on yet for an aeon, or for that portion of the aeon which has yet to run.'

'Hast thou faith, Ānanda?' 'Even so, lord.'

'Then, O Ānanda, thine is the fault, thine is the offence —— in that when a suggestion so evident and a hint so clear were given thee by the Tathāgata, thou wast yet incapable of comprehending them, and thou besought not the Tathāgata to live on for an aeon. If thou shouldst then have besought the Tathāgata, the Tathāgata might have rejected the appeal even to the second time, but the third time he would have granted it. Thine therefore, O Ānanda, is the fault, thine is the offence!

"On one occasion, Ānanda, I was dwelling at Rājagaha, on the hill called the Vulture's peak, ········· and once in the Banyan Grove ········· at the Robber's Cliff ········· in the Sattapaṇṇi cave on the slope of Mount Vebhara ········· at the Black Rock on the slope of Mount Isigiri ········· in the Sītavana Grove in the mountain cave Sappasoṇḍika ········· in the Tapoda Grove ········· in the Bambu Grove in the Squirrel's Feeding Ground ········· in the Jīvaka's Mango Grove ········· in the Dear Forest at Maddakucchi ············ here at Vesāli at the Udena Shrine ········· at the Gotamaka Shrine ········ at the Shrine of the Seven Mangoes ········· at the Bahuputta shrine ········· at the Sārandada Shrine, and I spoke to thee and said: "How pleasant, Ānanda, is this Vulture's Peak ············ this Sārandada Shrine. Whosoever, Ānanda, practised, and developed the Four Iddhi he, should he desire it, could remain in the same birth for an aeon or for that portion of the aeon which has yet to run." But thou besought not the Tathāgata to remain. And now to-day, Ānanda, at the Chāpāla shrine it was the same. Thine therefore, O Ānanda, is the fault, thine is the offence."

'But now, Ānanda, have I not formerly declared to you that it is in the very nature of all things, near and dear unto us, that we must devide ourselves from them, leave them, sever ourselves from them?

四大教法

比丘作如是言諸賢我於彼村彼城彼國躬從佛聞躬受是敎、從是聞者不應信亦不應毀當於諸經推其虛實依律依法究其本末、若其所言非經非律非法當語彼言佛不說此汝謬受耶所以然者我依諸經依律依法汝先所言與法相違。賢士汝莫受持莫爲人說當捐捨之。若其所言依經依律依法者當語彼言、汝言是眞佛所說、所以然者我依諸經依律依法汝先所言與法相應賢士汝當受持廣爲人說愼勿捐捨此爲第一大敎法也。復次比丘作如是言我於彼村彼城彼國和合衆僧多聞耆舊、親從其聞親受是法是律是敎從其聞者不應信亦不應毀當於諸經推其虛實依法依律究其本末、若其所言非經非律非法者當語彼言、佛不說此汝於彼衆謬聽受耶所以然者我依諸經依律依法汝先所言與法相違。賢士汝莫持此莫爲人說當愼捨之、若其所言依經依法依律者、當語彼言汝所言是眞佛所說、所以者何、我依諸經依律依法汝先所言與法相應。賢士汝當受持廣爲人說愼勿捐捨此爲第二大敎法也。復次比丘作如是言我於彼村彼城彼國衆多比丘持法持律持律儀者親從其聞親受是法是律是敎。從其聞者不應信亦不應毀當於諸經推其虛實依法依律究其本末、若其所言非經非律非法者當語彼言佛不說此汝於衆多比丘謬聽受耶所以然者我依諸經依律依法、汝先所言與法相違。賢士汝莫受持莫爲人說當捐捨之、若其所言依經依律依法者當語彼言、汝所言是眞佛所說、所以然者我依諸經依律依法汝先所言與法相應賢士汝當受持廣爲人說愼勿捐捨是爲第三大敎法也。復次比丘作如是

How then, Ānanda, can this be possible —— whereas anything whatever born, brought into being, and organized, contains within itself the inherent necessity of dissolution —— how then can be possible that such a being should not be dissolved? No such condition can exist! And that which has been relinquished, cast away, renounced, rejected, and abandoned by the Tathāgata—— the remaining sum of life surrendered by him —— verily with regard to that the word has gone forth from the Tathāgata saying: "The passing away of the Tathāgata shall take place before long. At the end of three months from this time the Tathāgata will die!" That the Tathāgata for the sake of living should repent him again of that saying —— this can no wise be!"

Then the Buddha proceeded, with Ānanda, to the Mahāvana, to the Kutāgara Hall. There the Buddha addressed the brethren and said: "Therefore, O brethren —— ye to whom the truths I have perceived have been made known by me —— having thoroughly made yourselves masters of them, practise them, meditate upon them, and spread them abroad; in order that pure religion may last long and be perpetuated, in order that it may continue to be for the good and happiness of the great multitudes, out of pity for the world, to the good and the gain and the weal of gods and men! Which then, O brethren, are the truths? They are these:

The four earnest meditations, The fourfold great struggle against evil.
The four roads to saintship, The five moral powers,
The five organs of spiritual sense, The seven kinds of wisdom,
The Aryan eightfold path.

Behold now, O brethren, I exhort you, saying: 'All component things must grow old. Work out your salvation with dilligence. The final extinction of the Tathāgata will take place before long. At the end of three months from this time the Tathāgata will die!'

'My age is now full ripe, my life draws to its close:
I leave you, I depart, relying on myself alone!
Be earnest then, O brethren, holy, full of thought!
Be steadfast in resolve! Keep watch o'er your own hearts!
Who wearies not, but holds fast to this truth and law,
Shall cross this sea of life, shall make an end of grief.'

言我於彼村彼城彼國一比丘持法持律持律儀者親從其聞親受是法是律是教。從其聞者不應信亦不應毀、當於諸經推其虛實依法依律究其本末、若所言非經非律非法者當語彼言佛不說此汝於一比丘所謬聽受耶、所以然者我依諸經依法依律、汝先所言與法相違。賢士汝莫受持莫爲人說當捐捨之、若其所言依經依律依法者當語彼言汝所言是眞佛所說所以然者我依諸經依律依法汝先所言與法相應。賢士當勤受持廣爲人說愼勿捐捨是爲第四大教法也爾時世尊於負彌城隨宜住已告賢者阿難俱詣波婆城對曰唯然即嚴衣鉢與諸大衆侍從世尊路由末羅至波婆城闍頭園中、時有工師子名曰周那、聞佛從彼末羅來此城即自嚴服至世尊所頭面禮足在一面坐、時佛漸爲周那說法正化示教利喜、周那聞佛所說信心歡喜則請世尊明日舍食、時佛默然受請、周那知佛許可即從座起禮佛而歸尋於其夜供設飯食明日時到唯聖知時、爾時世尊法服持鉢大衆圍遶往詣其舍就座而坐時周那尋設飲食供佛及僧別煮栴檀樹耳世所奇珍獨奉世尊、佛告周那勿以此耳與諸比丘周那受教不敢輙與、時彼衆中有一長老比丘晚暮出家於其座上以餘器取爾時周那見衆食訖幷除鉢器行澡水畢即於佛前以偈問曰。

敢問大聖智　正覺二足尊　善御上調伏　世有幾沙門

爾時世尊以偈答曰

如汝所問者　沙門凡有四　志趣各不同　汝當識別之　一行道殊勝

And the Buddha proceeded to Bhanda-gāma and after that to Hatthi-gāma, and then went on to Bhoga-nagara. There at Bhoga-nagara the Buddha stayed at the Ānanda Shrine. And the Buddha, there, addressed the brethren and said: 'I will teach you, O brethren, these four Great Authorities. In the first place, brethren, a brother may say thus: "From the mouth of the Exalted One himself have I heard, from his own mouth have I received. This is the Truth, this the law, this the teaching of the Master." The word spoken, brethren, by that brother should neither be received with praise or treated with scorn, but every word and syllable should be carefully understood and then put beside the Suttas and compared with the Vinaya. If when so compared they do not harmonize with the Suttas, and do not fit in with the rules of the Order, then you may come to the conclusion: "Verily, this is not the word of the Exalted One, and has been wrongly grasped by that brother." But if they harmonize with the Suttas and fit in with rules of the Order, then you may come to the conclusion: "Verily this is the word of the Exalted One and has been well grasped by that brother." This, you should receive as the first Great Authority.

'Again, brethren, a brother may say thus: "In such and such a dwelling place there is a company of the brethren with their elders and leaders. From the mouth of the company have I heard, face to face have I received. This is the truth this the law, this the teaching of the Master." In this case too, you should treat the word as above.

'Again, brethren, a brother may say thus: "In such and such dwelling-place, many elders of the Order, deeply read, holding the faith as handed down by tradition, versed in the truths, versed in the regulation of the Order, versed in the summaries of the doctrines and law. From the mouth of the elders have I heard, from their mouth have I received. This is the truth, this the law, this the teaching of the Master." In this case too, you should treat the word as above.

'Again, brethren, a brother may say: "In such and such a dwelling-place there is there living a brother, deeply read, holding the faith as handed down by tradition, versed in the truths, versed in the regulations of the Order, versed in the summaries of the doctrine and the law. From the mouth of that elder have I heard, from his mouth have I received, This is the truth, this the Law, this the teaching of the Master." In this case, too, you should treat the word spoken, in the same way as above. This, brethren, you should receive as the fourth Great Authority. These, brethren, are the Four Great Authorities."

二善說道義　三依道生活　四爲道作穢　何謂道殊勝　善說於道義
依道而生活　有爲道作穢　能度恩愛刺　入涅槃無疑　超越天人路
說此道殊勝　善解第一義　說道無垢穢　慈仁決衆疑　是爲善說道
善敷演法句　依道以自生　遙望無垢場　名依道生活　內懷於姧邪
外像如淸白　虛誑無誠實　此爲道作穢　云何善惡俱　淨與不淨雜
相似現外好　如銅爲金塗　俗人遂見此　謂聖智弟子　餘者不盡爾
勿捨淸淨信　一人持大衆　內濁而外淸　現閑姧邪迹　而實懷放蕩
勿視外容貌　卒見便親敬　現閑姧邪迹　而實懷放蕩

爾時周那取一小座、於佛前坐、佛漸爲說法示敎利喜已、大衆圍遶侍從而還、中路止一樹下、告阿難言吾患背痛汝可敷座、對曰唯然尋卽敷座、世尊止息時阿難亦敷一小座於佛前坐、佛告阿難向者周那無悔恨意耶設有此意爲由何生阿難白佛言周那設供無有福利所以者何如來最後於此舍食便取涅槃、佛告阿難勿作是語今者周那爲獲大利爲得壽命得色得力得善名譽生多財寶死得生天所欲自然、所以者何佛初成道能施食者佛臨滅度能施食者此二功德正等無異、汝今可往語彼、周那我親從佛聞、周那設食今獲大利得大果報、時阿難承佛敎旨卽詣彼所告周那曰、我親從佛聞、周那設食今獲大利得大果報、所以然者佛初得道能飯食者及臨滅度能飯食者此二功德正等無異。

Then the Buddha proceeded with Ānanda and a great company of the brethren, to Pāva and there at Pāva the Buddha stayed at the Mango Grove of Chunda who was by family a smith.

Now Chunda heard that the Buddha had come to Pāve and was staying there in his mango Grove. So he went to the place where the Buddha was, and after having received the religious discourse, invited the Buddha to to morrow's meal.

Now at the end of the night, Chunda made ready in his dwelling place sweet rice and cakes, and a quantity of truffles. And he announced the hour to the Buddha, saying: 'The hour, lord, has come, and the meal is ready.'

When the Buddha had come and seated on the seat prepared for him, he addressed Chunda and said: 'As to the truffles you have made ready, serve me with them, Chunda, and as to the other food, the sweet rice, and cakes, serve the brethren with it.' 'Even so, lord!' said Chunda, and the truffles he served the Buddha; whilst the other food, the sweet rice and cakes, he served to the members of the Order.

Now the Buddha addressed Chunda and said: 'Whatever truffles, Chunda, are left over to thee, those bury in a hole. I see no one, Chunda, on earth nor in Māra's heaven and Brahmā's heaven, no one among Samanas and Brāhmaṇas, among gods, and men by whom, when he has eaten it, that food can be properly assimilated, save a Tathāgata.'...

Now when The Buddha had eaten the rice prepared by Chunda, there fell upon him a dire sickness, the disease of dysentery, and sharp pain came upon him, even unto death. But the Buddha, mindful and self-possessed, bore it without complaint;

"When he had eaten Chunda's food,
The copper-smith's ——— thus have I heard ———
He bore with fortitude the pain,
The sharp pain even unto death!
When he had eaten, from the truffles in the food
There fell upon the teacher sickess dire,
Then after nature was relieved the Exalted One announced and said:
'I now am going on to Kusināra.'

Now the Buddha went aside from the path to the foot of a certain tree; and he said to Ānanda: 'Fold, I pray you, Ānanda, the robe in four; and spread it out for me. I am weary, Ānanda, and must rest awhile!"

And the Buddha seated himself on the seat prepared for him by Ānanda, and said to Ānanda: 'Fetch me, I pray you, Ānanda, some water. I am thirsty, Ānanda, and woud drink."

末利人福貴

周那舍食訖　始聞如是言　如來患甚篤　壽行今將訖　雖食栴檀耳

而患猶更增　抱病而涉路　漸向拘夷城

爾時世尊卽從座起小復前行詣一樹下又告阿難吾背痛甚汝可敷座。對曰唯然、尋卽敷座。如來止息。阿難禮佛足已在一面坐、時有阿羅羅弟子名曰福貴、於拘夷那竭城向波婆城、中路見佛在一樹下容貌端正諸根寂定得上調意第一寂滅、譬如大龍亦如澄水清淨無穢。見已歡喜善心生焉。卽到佛處頭面禮足在一面坐而白佛言、世尊出家人在清淨處慕樂閑居甚奇特也、有五百乘車經過其邊而不聞見、我師一時在拘夷那竭城波婆城二城中間道側樹下靜默而坐、時有五百乘車經過其邊車聲轟々覺而不聞、是時有人來問我師、向群車過寧見不耶、對曰不見、又問聞耶、對曰不聞、又問汝在此耶在餘處耶、答曰在此、又問汝醒悟耶答曰醒悟、又問汝爲覺寐答曰不寐、彼人默然是希有也、出家人專精乃爾、車聲轟々覺而不聞、卽語我師曰向有五百乘車從此道過、車聲振動尙自不聞豈他聞哉、卽爲作禮歡喜而去。佛告福貴我今問汝隨意所答、群車振動覺而不聞雷動天地覺而不聞何者爲難。福貴白佛言千萬車聲豈等雷電、不聞車聲未足爲難雷動天地覺而不聞斯乃爲難。佛告福貴我於一時遊阿越村在一草廬時有異雲暴起雷電霹靂殺四特牛耕者兄弟二人人衆大聚、時我出草廬彷徉經行、彼大衆中有一人來至我所頭面禮足隨我經行我知而故問彼大衆聚何所爲耶、其人卽問佛向在何所爲覺寐耶、答曰在此時不寐

Ānanda said to the Buddha: 'But just now, lord, about five hundred carts have gone over. That water, stirred up by the wheels, has become shallow and flows fouled and turbid. This river Kakuttha, lord, not far off, is clear and pleasant, easy to get down into, and delightful. There the Exalted One may both drink the water and cool his limbs.'

Again the second time and third time the Buddha asked Ānanda to fetch some water, so Ānanda, taking a bowl, went down to the streamlet. And lo! the streamlet which stirred up by the wheels, was but just now become shallow and was flowing fouled and turbid, had begun, when Ānanda came up to it, to flow clear and bright and free from all turbidity.

Then Ānanda thought: 'How wonderful, how marvellous is the great might and power of the Tathāgata. For this streamlet which was flowing fouled and turbid, now is flowing clear and bright.' And taking water in the bowl he returned to the Buddha, and said: 'Let the Exalted one drink the water.' Then the Buddha drank of the water.

Now at that time Pukkusa a young Mallian, a disciple of Alāra Kālāma's was passing along the high road from Kusinārā to Pāva. He saw the Buddha seated at the foot of a tree, and went up to the place where the Buddha was. He saluted the Buddha, and took his seat respectfully on one side and said to the Buddha: 'How wonderful a thing it is, lord! and how marvellous, that those who have gone forth out of the world should pass their time in a state of mind so calm! Formerly, lord, Alāra Kālāma was once walking along the high road; and leaving the road he sat himself down under a certain tree to rest during the heat of the day. Now, lord, five hundred carts passed by one after the other, each close to Alāra Kālāma. And a certain man who was following close behind that caravan of carts, went up to the place where Alāra Kālāma was, and spake as follows to Alāra Kālāma: "But, lord, did you see those five hundred carts go by?" "No, indeed, I saw them not."

"But, lord, did you hear the sound of them." "No, indeed I heard not."

"But, lord, were you then asleep?" "No, sir, I was not asleep."

"But, lord, were you then conscious?" "Even so, sir."..................

'Then thought that man: "How wonderful a thing is it, how marvellous that those who have gone forth out of the world should pass their time in a state of mind so calm." and after giving utterance to his deep faith in Alāra Kālāma, he departed thence.'

'Now what you think, Pukkusa, which is the more difficult thing either to do or to meet with ——— that a man, being conscious and awake, should neither see nor hear the sound of five hundred carts passing by, one after

也其人亦歎希聞得定如佛者也電雷霹靂聲聒天地而獨寂定覺而不聞。乃白佛言向有異雲暴起電雷霹靂殺四特牛耕者兄弟二人彼大衆聚其正爲此。其人心悅卽得法喜禮佛而去。爾時福貴被二黃疊價直百千卽從座起長跪叉手而白佛言今以此疊奉上世尊願垂納受、佛告福貴、汝以一疊施我一施阿難、爾時福貴承佛敎旨一奉如來一施阿難佛愍彼故卽爲納受、時福貴禮佛足已於一面坐、佛漸爲說法示敎利喜、施論戒論生天論欲爲大患不淨穢汙上漏爲礙出要爲上、時佛知福貴意歡喜柔煗無諸蓋纏易可開化、如諸佛常法卽爲福貴說苦聖諦苦集苦滅苦出要諦時福貴信心淸淨譬如淨潔白疊易爲受色、卽於座上遠塵離垢諸法々眼生見法得法決定正住不墮惡道成就無畏而白佛言、我今歸依佛歸依法歸依僧唯願如來聽我於正法中爲優婆塞、自今已後盡壽不殺不盜不婬不欺不飮酒、唯願世尊聽我於正法中爲優婆塞、又白佛言世尊遊化若詣波婆城唯願屈意過貧聚中、所以然者欲盡有家飮食牀臥衣服湯藥奉獻世尊、世尊受已家內獲安、佛言汝所言善爾時世尊爲福貴說法示敎利喜、已卽從座起頭面禮足歡喜而去、其去未久阿難尋以黃疊奉上如來如來哀愍卽爲受之被於身上、爾時世尊顏貌縱容威光熾盛諸根淸淨面色和悅阿難見已默然自思念、自我得侍二十五年未曾見佛面光澤發明如今、卽從座起右膝著地叉手合掌前白佛言自我得侍二十五年未曾見佛光色如今不審何緣、願聽其意、佛告阿難有二因緣如來光色有殊於常、一者佛初得道成無上正眞覺時、二

the other, close to him,—— or that a man, being conscious and awake, should neither see nor hear the sound thereof when the falling rain goes on beating and splashing and lightnings are flashing forth, and the thunderbolts are crashing?'

'What in comparison, lord, can these five hundred carts do? That certainly more difficult, both to do and to meet with, that a man, being conscious and awake, should neither see nor hear the sound thereof when the falling rain goes on beating and splashing, and the thunderbolts are crashing.'

'Now on one occasion, Pukkusa, I was dwelling at Ātuma, and was at the Threshing-floor. And at that time, the falling rain began to beat and splash, and the lightning to flash forth, and the thunderbolts to crash; and two peasants, brothers, and four oxen were killed. Then, Pukkusa, a great multitude of people went forth from Ātuma and went up to the place where they were killed. Now at that time, Pukkusa, I had gone forth from the Threshing-floor and was walking up and down thinking at the entrance to the Threshing-floor. And a certain man came up to me, and I said to him. "Why then sir, is this multitude of people assembled together?"

'"But just now the falling rain began to beat and splash, and the lightnings to flash forth, and the thunderbolts to crash; and two peasants, brothers and four oxen were killed. Therefore is this great multitude of the peopfe gathered together. But where, lord, were you?"

'"I, sir, have been here all the while."

'"But, lord, did you see it" "I, sir, saw nothing."

'"But, lord, did you hear it?" "I, sir, heard nothing."

'"Were you, lord, asleep?" "I, sir, was not asleep."

'"Were you then conscious, lord?" "Even so, sir."

'"So that you, lord, beng conscious and awake, neither saw, nor heard the sound thereof when the falling rain went on beating and splashing and the lightnings were flashing forth, the thunderbolts were crashing.

'"That is so sir."' Then, Pukkusa, the thought occurred to that man: "How wonderful a thing is it, and marvellous, that those who have gone forth out of the world should pass their time in a state of mind so calm!" And after giving utterance to this deep faith in me, he departed from me.'

Then Pukkusa addressed the Buddha in these word: 'Now I, lord, as to the faith that I had in Alāra Kālāma, that I winnow away as in a mighty wind, and wash it away as in a swiftly running stream. Most excellent, lord, are

者臨レ欲二滅度一捨二於性命一般涅槃時、阿難以二此二緣一光色殊レ常、爾時世尊卽說レ頌曰

金色衣光悅　細軟極鮮淨　福貴奉二世尊一　如二雪白毫光一

佛命二阿難一吾渴欲レ飲汝取レ水來、阿難白言向有二五百乘車一於二上流一渡レ水濁未レ淸可三以流レ足不レ中飲也。如是三勅阿難汝取レ水來、阿難白言今拘孫河去レ此不レ遠淸冷可レ飲亦可二澡浴一時有二鬼神一居二在雪山一篤二信佛道一卽以レ鉢盛二八種淨水一奉二上世尊一佛愍レ彼故尋爲レ受レ之而說レ頌曰

佛以二八種音一　勅二阿難一取レ水　吾渴今欲レ飲　飲已詣二拘尸一　柔軟和雅音

所レ言悅二衆心一　給二侍佛左右一　尋白二於世尊一　向有二五百車一　截レ流渡二彼岸一

渾二濁於此水一　飲恐不レ便レ身　拘留河不レ遠　水美甚淸冷　往レ彼可二取飮一

亦可レ澡二浴身一　雪山有二鬼神一　奉二上如來水一　飲已威勢强　衆中師子步

其水神龍居　淸澄無二濁穢一　聖顏如二雪山一　安祥度二拘孫一

爾時世尊卽詣二拘孫河一飲已澡浴、與レ衆而去中路止息在二一樹下一告二周那一曰、汝取二僧伽梨四牒一而敷、吾患二背痛一欲二暫止息一、周那受レ敎敷置已訖佛坐二其上一、周那禮已於二一面一坐而白レ佛言、我欲二般涅槃一我欲二般涅槃一佛告レ之曰宜レ知二是時一、於レ此周那卽於二佛前一便般涅槃、佛時頌曰

佛趣二拘孫河一　淸涼無二濁穢一　人中尊入レ水　澡浴度二彼岸一　大衆之原首

敎二勅於周那一　吾今身疲極　汝速敷二臥具一　周那尋受レ敎　四二牒衣一而敷

如來旣止息　周那於レ前坐　卽白二於世尊一　我欲レ取二滅度一　無愛無憎處

the words of thy mouth, most excellent! .... And I betake myself, lord, to the Exalted One as my refuge, to the Truth, aud to the Brotherhood. May the Exalted One accept me as a disciple, from this day forth, as long as life endures!'

Now Pukkusa ordered a man to bring a pair of robes of cloth of gold burnished and ready to wear, and presented it to the Buddha, saying: 'Lord, this pair of robes of burnished cloth of gold is ready to wear. May the Exalted One show me favour and accept it at my hands!'

'In that case, Pukkusa, robe me in one, and Ānanda in one! And Pukkusa did so. ....

Now not long after the Mallian Pukkusa had gone, Ānanda placed that pair of robes on the body of the Buddha; and when it was so placed on the body of the Buddha it appeared to have lost its splendour! And Ānanda said to the Buddha: 'How wonderful a thing is it, lord, and how marvellous, that the colour of the skin of the Buddha should be so clear so exceeding bright! This pair of robes of burnished cloth of gold seemed as if it had lost its splendour!'

'It is even so, Ānanda. There are two occasions on whieh the colour of the skin of a Tathāgata becomes clear and exceeding bright. What are the two? On the night, Ānanda, on which a Tathāgata attains io the supreme and perfect insight, and on the night in which he passes finally away in that utter passing away which leaves nothing whatever to remain, —— on these two occasions the colour of the skin of the Tathāgata becomes clear and exceeding bright. And now this day, Ānanda, at the third watch of the night, in Upavattana of Kusināra, in the Sāla Grobe of the Mallians, between the Twin Sāla tree, the utter passing away of the Tathāgata will take place. Come. Ānanda! Let us go on to the river Kakuttha.' 'Even so, lord,!' said Ānanda, in assent to the Buddha.

The pair of robes of cloth of gold, All burnished, Pukkusa had brought,
Clad on with them the Master then, Shone forth in colour like to gold.

Then the Buddha with a great company of the brethren went on to the river Kakuttha; and he went down into the water and bathed and drank. And coming up out again on the other side, he went on to the Mango Grobe. There he said the venerable Chundaka, 'Fold, I pray you, Chundaka, a robe in four and spread it out. I am weary and would lie down.' And the Buddha laid himself down on his right side, with one foot resting on the other; and calm and self-possessed he meditated, intending to rise up again in due time. And the venerable Chundaka seated himself in front of the Buddha.

今當レ到ニ彼方　無量功德海一　最勝告レ彼曰　汝所作已辨　今宜レ知ニ是時一
見ニ佛已聽許一　周那倍精勤　滅レ行無レ有レ餘　如ニ燈盡火滅一

時阿難卽從レ座起前白レ佛言、佛滅度後葬法云何、佛告ニ阿難一汝且默然思ニ汝所業、諸淸信士自樂爲レ之、時阿難復重三啓佛滅度後葬法云何、佛言欲レ知ニ葬法一者當レ如ニ轉輪聖王、阿難又白、轉輪聖王葬法云何、佛告ニ阿難一聖王葬法先以ニ香湯一洗ニ浴其體一以ニ新劫貝一周遍纏レ身以ニ五百張疊一次如纏レ之內ニ身金棺一灌以ニ麻油一畢擧ニ金棺一置ニ於第二大鐵槨中栴檀香槨一次重ニ於外一積ニ衆名香一厚衣ニ其上一而闍ニ維之一訖收ニ舍利一於ニ四衢道一起ニ立塔廟一表刹懸レ繒使ニ諸行人皆見ニ法王塔一思ニ慕正化一多レ所ニ饒益一、阿難汝欲レ葬レ我先以ニ香湯一洗浴用ニ新劫貝一周遍纏レ身以ニ五百張疊一次如纏レ之內ニ身金棺一灌以ニ麻油一畢擧ニ金棺一置ニ於第二大鐵槨中栴檀香槨一次重ニ於外一積ニ衆名香一厚衣ニ其上一而闍ニ維之一訖收ニ舍利一於ニ四衢道一起ニ立塔廟一表刹懸レ繒使ニ諸行人皆見ニ佛塔一思ニ慕如來法王道化一生獲ニ福利一死得レ上天一於レ時世尊重觀ニ此義一而說レ偈曰

阿難從レ座起　長跪白ニ世尊一　如來滅度後　當下以ニ何法一葬上　阿難汝且默
思ニ惟汝所行一　國內諸淸信　自當ニ樂當レ之　阿難三請已　佛說ニ轉輪葬一
欲レ葬ニ如來身一　疊裹內ニ棺槨一　四衢起ニ塔廟一　爲レ利ニ益衆生一　諸有ニ禮敬一者
皆獲ニ無量福一

佛告ニ阿難一天下有ニ四種人一應レ得レ起ニ塔香花繒蓋伎樂供養一何等爲レ四、一者如來應レ得レ起レ塔二

And the Buddha said to Ānanda: 'Now it may happen, Ānanda, that some one should stir up remorse in Chunda the smith, by saying: "This is evil to thee, Chunda, and loss to thee in that when the Tathāgata had eaten his last meal from thy provision, then he died!" And such remorse in Chunda the smith should be checked by saying: "This is good to thee, Chunda, and gain to thee, in that when the Tathāgata had eaten his last meal from thy provisiou, then he died. From the very mouth of the Exalted One, Chunda, have I heard, 'these two offerings of food are of equal fruit, and of much greater profit than any other —— and which are the two? The offering of food whicn when a Tathāgata has eaten, he attains to supreme and perfect insight; and the offering of food which, when a Tathāgata has eaten, he passes away by that utter passing away in which nothing whatever remains behind —— these two are of equal profit and of much greater profit than any others. There has been laid up by Chunda the smith a kamma redounding to length of life, redounding to good birth, to good fortune, to good fame, to the inheritance of heaven and of sovereign power.' " In this way, Ānanda should be checked any remorse in Chunda the smith.'

And the Buddha proceeded with a great company of the brethren to the Sāla Grove of the Mallas, the Upavattana of Kusināra on the further side of the river Hiranyavatī: and there he said to Ānanda: 'Spread over for me, I pray you, Ānanda, the couch with its head to the north, between the twin Sāla trees. I am weary and would lie down.' and the Buddha laid himself down on his right side, with one leg resting on the other; and he was mindful and self-possessed.

Now at that time the twin Sāla trees were all one mass of bloom with flowers out of season; and all over the body of the Tathāgata these dropped and sprinkled and scattered themselves, out of reverence for the successor of the Buddhas of old.

Then the Buddha said to Ānanda: 'The twin Sāla trees all one mass of bloom with flowers out of season; all over the body of the Tathāgata these drop and sprinkle and scatter themselves, out of reverence for the successor of the Buddhas of old. And heavenly Mandārava flowers, too, and heavenly sandal-wood powder come falling from the sky, and all over the body of the Tathāgata they descend and sprinkle and scatter themselves, and heavenly music sound in the sky, and heavenly songs come wafted from the skies, all out of reverence for the successor of the Buddhas of old! ....

者辟支佛、三者聲聞人、四者轉輪王、阿難此四種人應得起塔香華繒蓋伎樂供養。爾時世尊以偈頌曰。

佛應第一塔　辟支佛聲聞　及轉輪聖王　典領四城主　斯三應供養
如來之所記　佛辟支聲聞　及轉輪王塔

爾時世尊告阿難俱詣拘尸城末羅雙樹間。對曰唯然即與大衆圍繞世尊在道而行有一梵志從拘尸城趣波婆城中路遙見世尊顏貌端正諸根寂定見已歡喜善心自生前至佛所問訊訖一面住而白佛言、我所居村去此不遠唯願瞿曇於彼止宿清旦食已然後趣城、佛告梵志且止且止汝今便爲供養我已、時梵志慇懃三請佛答如初、又告梵志阿難在後汝可語意、時梵志聞佛敎已即詣阿難問訊已於一面立白阿難言我所居村去此不遠欲屈瞿曇於彼止宿清旦食已然後趣城。阿難曰止梵志汝今已爲得供養已梵志復請慇懃至三、阿難答曰時既暑熱彼村遠迥世尊疲極不足勞嬈。爾時世尊觀此義已即說頌曰

淨眼前進路　疲極向雙樹　梵志遙見佛　速詣而稽首　我村今在近
哀愍留一宿　清旦設微供　然後向彼城　梵志我身倦　道遠不能過
監藏者在後　汝可往語意　承佛敎旨已　即詣阿難所　唯願至我村
清旦食已去　阿難曰止止　時熱不相赴　三請不遂願　憂惱不悅樂
咄此有爲法　流遷不常住　今於雙樹間　滅我無漏身　佛辟支聲聞

'Now it is not thus, Ananda, that the Tathāgata is rightly honoured, reverenced, venerated, held sacred or revered. But the brother or the sister, the devout man or woman, who continually fulfils all the greater and the lesser duties, who is correct in life, walking according to the precepts ——— it is he who rightly honours, and revered the Tathāgata with the worthiest homage. Therefore, O Ānanda, be ye constant in the fulfilment of the greater and the lesser duties, and be ye correct in life walking according to the precepts; and thus Ānanda, should it be taught.'

Now at that time Upavāna was standing in front of the Buddha fanning him. And the Buddha was not pleased with Upavāna, said to him: 'Stand aside, O brother, stand not in front of me!' And Ānanda said to the Buddha: 'This venerable Upavāna has long been in close personal attendance and service on the Exalted One. And now, at the last moment, the Exalted One is not pleased with Upavāna. What may be cause and what the reason that the Exalted One is not pleased and speaks thus with him?'

'In great numbers, Ānanda, are the gods of the ten world-systems assembled together to behold the Tathāgata. For twelve leagues, Ānanda, around the Sāla Grove of the Mallas, the Upavattana of Kusināra, there is no spot in size even as the pricking of the point of the tip of a hair which is not pervaded by powerful spirits. And the spirits, ynanda, are murmuring and say: "From afar have we come to behold the Tathāgata. Few and far between are the Tathāgatas, the Arahant Buddhas who appear in the world: and now to-day, in the last watch of the night, the death of Tathāgata will take place, and this eminent brother stands in front of the Tathāgata, concealing him, and in his last hour we prevented from beholding the Tathāgata." thus, Ānanda, the spirits murmur.'

'There are spirits, Ānanda, in the sky, but of worldly mind who dishevel their hair and weep, who stretch forth their arms and weep, who fall prostrate on the ground, and roll to and fro in anguish at the thought; "Too soon will the Exalted One die! Too soon will the Exalted One pass away! Full soon will the Light of the world vanish away!"

'There are spirits, too, Ānanda, on the earth, and of worldly mind, who also .... roll to and fro in anguish.

'But the spirits who are free from passion bear it, calm and self-possessed, mindful of the saying which begins:——— "Impermanent indeed are all component things. How then is it possible wheras anything whatever, when born, brought into being, and organized, contains within itself the inherent necessity of dissolution should not be dissolved? no such condition can exist!'

一切皆歸滅　無常無選擇　如火焚山林

爾時世尊入拘尸城、向本生處末羅雙樹間、告阿難曰、汝爲如來於雙樹間敷置牀座、使頭北首面向西方、所以然者吾法流布當久住北方。對曰唯然、卽敷座令北首、爾時世尊自四牒僧伽梨、偃右脅、如師子王累足而臥。時雙樹間所有鬼神篤信佛者、以非時花布散于地。爾時世尊告阿難曰、此雙樹神以非時華供養於我、此非供養如來、阿難白言、云何名爲供養如來、語阿難、人能受法能行法者、斯乃名曰供養如來、佛觀此義而說頌曰。

佛在雙樹間　偃臥心不亂　樹神心淸淨　以花散佛上　阿難白佛言
齋何名供養　受法而能行　覺華而爲供　紫金華如輪　散佛未爲供
陰界入無我　乃名第一供

比丘梵摩那

爾時梵摩那在於佛前執扇扇佛、佛言汝却勿在吾前、時阿難默自思念此梵摩那常在佛左右供給所須、當尊敬如來視無厭足、今者末後須其瞻視、乃命使却、意將何因、於是阿難卽整衣服前曰、佛言此梵摩那常在佛左右供給所須、當尊敬如來視無厭足、今者末後須其瞻視而命使却、將有何因、佛告阿難、此拘尸城外有十二由旬、皆是諸大神之所居宅、無空缺處、此諸大神皆嫌此比丘當佛前立、今佛末後垂當滅度、吾等諸神冀一奉覲、而此比丘有大威德、光明暎蔽、使我曹等不得親近禮拜供養、阿難我以是緣故命使却。阿難白佛此尊比丘本積何德、修何行業、今者威德乃如是乎、佛告阿難、乃往過古久遠九十一劫時

'In times past, lord, the brethren, when they had spent the rainy seasan in different districts, used to come to see the Tathāgata, and we used to receive those very reverend brethren to audience, and to wait upon the Exalted One. But, lord, after the end of the Exalted One, we shall not be able to receive those very reverent brethren to audience, and to wait upon the Exalted One.'

'There are these four place, Ānanda, which the believing clansman should visit with feelings of reverence. What are the four? The place at which the believing man can say:—— "Here the Tathāgata was born!" is a spot to be visited with feelings of reverence. The place at which the believing man can say:—— "Here the Tathāgata attained to the supreme and perfect insight!" and "Here was the kingdom of righteousness set on foot by the Tathāgata!" and "Here the Tathāgata passed finally away in that utter passing away which leaves nothing whatever to remain behind!" are the places to be visited with feelings of reverence. These are the four places, Ānanda, which the believing clansman should visit with feelings of reverence. And there will come, Ānanda, to such spots, believers, brethren and sisters of the order, or devout men and momen, and will say:—— "Here was the Tathāgaga born! ········· or "Here the Tathāgata passed away!" And they, Ānanda, who shall die while they, with believing heart, are journeying on such pilgrimage, shall be reborn after death, when the body shall dissolve, in the happy realms of heaven.'

'How are we to conduct ourselves, lord, with regard to womankind?' 'As not seeing them, Ānanda.'

'But if we should see them, what are we to do?' 'No talking, ynanda.?'

'But if they should speak to us, lord, what are we to do?' 'Keep wide awake, Ānanda.'

'What are we to do, lord, with the remains of the Tathāgata?'

'Hinder not yourselves, Ānanda, by honouring the remains of the Tathāgata. Be zealous, I beseech you, Ānanda, in your own behalf! Devote yourselves to your own good! There are wise men, Ānanda, among the nobles the brahmins and the heads of houses who are firm believers in the Tathāgata; and they will do due honour to the remains of the Tathāgata.'

'But what should be done, lord, with the remains of the Tathāgata?'

'As men treat the remains of a king of kings, so Ānanda, should they treat the remains of the Tathāgata. They wrap the body of a king of kings, Ānanda, in a new cloth. When that is done they wrap it in carded cotton wool. (Contnd.)

世有佛名毘婆尸時此比丘以歡喜心手執草炬以照彼塔由此因緣使今威光上徹二十八天諸天神光所不能及。爾時阿難卽從座起偏袒右肩長跪叉手而白佛言莫於此鄙陋小城荒毀之土取滅度也所以者何更有大國瞻婆大國毘舍離國王舍城婆祇國舍衛城迦維羅衞國波羅捺國其土人民衆多信樂佛法佛滅度已必能恭敬供養舍利、佛言止止勿造斯觀無謂此土以爲鄙陋所以者何昔者此國有王名大善見此城時名拘舍婆提大王之都城。阿難我自憶念曾於是處六返作轉輪聖王終措骨於此、今我成無上正覺復捨性命措身於此自今以後生死永斷無有方土措吾身處此最後邊更不受有。爾時世尊在拘尸那竭城本所生處娑羅園中雙樹間臨將滅度告阿難曰汝入拘尸那竭城告諸末羅諸賢當知如來夜半於娑羅園雙樹間當般涅槃汝等可往諮問所疑面受教誡宜及是時無從後悔、是時阿難受佛敎已卽從座起禮佛而去與一比丘垂涙而行入拘尸城見五百末羅以少因緣集在一處時諸末羅見阿難來卽起作禮於一面立白阿難言、不審尊者今入此城何甚晚暮欲何作爲、阿難垂涙言、吾爲汝等欲相饒益故來相告、卿等當知如來夜半當般涅槃汝等可往諮問所疑面受教誡宜及是時無從後悔、時諸末羅聞是言已擧聲悲號宛轉躃地絶而復甦譬如大樹根拔枝條摧折同擧聲言、佛取滅度何其駛哉、佛取滅度何其速哉群生長衰世間眼滅。是時阿難慰勞諸末羅言、止止勿悲天地萬物無生不終欲使有爲而常存者無有是處。佛不云乎合會有離生必有盡、時諸末羅各相謂言吾等

Again they wrap it in a new cloth, and so on till they have wrapped the body in five hundred successive layers of both kinds. Then they place the body in an oil vessel of iron, and cover that close up with another oil vessel of iron. They then build a funeral pyre of all kinds of perfume, and burn the body of the king of kings. And then at the four cross roads they erect a cairn to the king of kings. This, Ānanda, is the way in which they treat the remains of a king of kings. And as they treat the remains of a king of kings, so, Ānanda, should treat the remains of the Tathāgata. At the four cross road a cairn should be erected to the Tathāgata. And whosoever shall there place garlands or perfumes or paint or make salutation there, or come in its presence calm in heart—— that shall long be to them for a profit and a joy. 'The men, Ānanda, worthy of a cairn, are four in number. Which are the four? A Tathāgata, an Able Awakened One, is worthy of a cairn. One awakened for himself alone, a true hearer of the Tathāgata, and a king of kings are worthy of a cairn. And on account of what circumstance, Ānanda, is a Tathāgata, an Able Awakened One, worthy of a cairn? At the thought, Ānanda: —— "This is the cairn of that Exalted One, of that Able Awakened One," the hearts of many shall be made calm and happy; and since they there had calmed and satisfied their hearts they will be born after death in the happy realms of heaven. It is on account of this circumstance, Ānanda, that a Tathāgata is worthy of a cairn. The cases of the other three are the same with the above. These four Ānanda, are the persons worthy of a cairn.

Now Ānanda went into the Vihāra, and stood leaning against the lintel of the door and weeping at the thought: "Alas! I remain still but a learner, one who has yet to work out his own perfection. And the Master is about to pass away from me —— he who is so kind!'

Now the Buddha called a certain brother and said: Go now, brother, and call Ānanda in my name and say: "Brother Ānanda, the Master calls for thee." Then Ānanda came to the Buddha, and the Buddha said to Ānanda: 'Enough, Ānanda, Do not let yourself be troubled; do not weep! Have I not already on former occasion told you that it is in the very nature of all things most near and dear unto us that we must divide ourselves from them, leave them, sever ourselves from them? How then, Ananda, can this be possible —— whereas anything whatever born, brought into being, and organized, contains within itself the inherent necessity of dissolution —— how, then, can this be possible, that such a being should not be dissolved?

最後の弟子須跋陀

還歸將諸家族幷持五百張白疊共詣雙樹時諸末羅各歸舍已將諸家族幷持白疊出拘尸城詣雙樹間至阿難所阿難遙見默自念言彼人衆多若一一見佛恐未周聞佛先滅度我今寧可使於前夜同時見佛、卽將五百末羅及其家族至世尊所頭面足禮在一面立、阿難前白佛言某甲某甲諸末羅等及其家族問訊世尊起居增損、佛報言勞汝等來當使汝等壽命延長無病無痛、阿難乃能將諸末羅及其家屬使見世尊、時諸末羅頭面禮足於一面坐、爾時世尊爲說無常示敎利喜、時諸末羅聞法歡喜卽以五百張疊奉上世尊佛爲受之、諸末羅卽從座起禮佛而去、是時拘尸城內有一梵志名曰須跋年百二十耆舊多智聞沙門瞿曇今夜於雙樹間當取滅度、自念言吾於法有疑唯有瞿曇能解我意今當及時自力而行卽於其夜出拘尸城詣雙樹間至阿難所問訊已一面立白阿難曰我聞瞿曇沙門今夜當取滅度故來至此求一相見我於法有疑願見瞿曇一決我意寧有閑暇得相見不、阿難報言止止須跋佛身有疾無勞擾也、須跋固請乃至再三吾聞如來一出世如優曇鉢華時時乃出、故來求現欲決所疑寧有閑暇暫相見不、阿難答如初佛身有疾無勞擾也。時佛告阿難汝勿遮止聽使來入此欲決疑無嬈亂也設聞我法必得開解、阿難乃告須跋汝欲覲佛宜知是時、須跋卽入問訊已一面坐而白佛言、我於法有疑寧有閑暇一決所滯不、佛言恣汝所問須跋卽問云何瞿曇諸有別衆自稱爲師不蘭迦葉、末伽梨憍舍利、阿浮陀翅舍金披羅、波浮迦旃、薩若毗耶梨弗、尼犍子此諸師等各有異法瞿曇沙門能盡知耶不

No such condition can exist! For a long time, Ānanda, have you been very near to me by acts, words and thoughts of love, kind and good, that never varies, and is beyond all measure. You have done well, Ānanda,' Be earnest in effort, and you too shall soon be free from the Intoxications!'

The venerable Ānanda said to the Buddha: 'Let not the Exalted One die in this little wattle-and-daub town, in this town in the midst of the jungle, in this branch township. For, lord, there are other great cities, such as Champa, Rājagaha, Sāvatthi, Sāketa, Kosambī, and Benares. Let the Exalted One die in one of them. There there are many wealthy nobles and brahmins and heads of houses, believers in the Tathāgata, who will pay due honours to the remains of the Tathāgata."

Say not so, Ānanda! Say nat so, Ānanda, long ago, Ānanda, there was a king, by name Mahā- Sudassana, a king of kings, a righteous man who ruled in righteousness, Lord of the four quarters of the earth, conqueror, the protector of his people, possessor of the seven royal treasures. This Kusināra, Ānanda, was the royal city of king Mahā -Sudassana, under the name of Kusāvatī, and on the east and on the west it was twelve leagues in length, and on the north and on the south it was seven leagues in breadth.

"That royal city Kusāvatī, Ānanda, was mighty and prosperous and full of people, crowded with men, and provided with all things for food. Just, Ānanda, as the royal city of the gods, Alakamanda by name, is mighty prosperous, and full of people, crowded with the gods, and provided with all kinds of food, so, Ānanda, was the royal city Kusāvatī.

'Both by day and by night, Ānanda, the royal city Kusāvatī resounded with the ten cries; that is to say, the noise of elephants, and the noise of horses, and the noise of chariots; the sounds of the drum, of the tabor, and of the lute; the sounds of singing, and the sounds of the cymbal and of the gong; and lastly, with the cry: – "Eat, drink, and be merry!"

'Go now, Ānanda, and enter into Kusināra, and inform the Mallas of Kusināra, saying:— "This day, O Vāsetthas, in the last watch of the night, the final passing away of the Tathāghata will take place. Be favourable herein, O Vāsetthas, be favourable.

盡知耶、佛言止止用論此爲吾悉知耳今當爲汝說深妙法諦聽諦聽善思念之、須跋受教、佛告之曰若諸法中無八聖道者則無第一沙門果第二第三第四沙門果須跋以諸法中有八聖道故便有第一沙門果第二第三第四沙門果須跋今我法中有八聖道有第一沙門第二第三第四沙門外道異乘無沙門果、爾時世尊爲須跋而說頌曰

我年二十九　出家求善道　須跋我成佛　今已五十年　戒定智慧行
獨處而思惟　今說法之要　此外無沙門

佛告須跋若諸比丘皆能自攝者則此世間羅漢不空、是時須跋白阿難言諸有從沙門瞿曇已行梵行今行當行者爲得大利、阿難汝於如來所修行梵行亦得大利我得面覲如來諮問所疑亦得大利今者如來則爲以弟子莂而別我已、卽白佛曰我今寧得於如來法中出家受具戒不。佛告須跋若有異學梵志於我法中修梵行者當試四月觀其人行察其志性具諸威儀無漏失者則於我法得受具戒須跋當知在人行耳。須跋復白言外道異學於佛法中當試四月觀其人行察其志性具諸威儀無漏失者乃得具戒今我能於佛正法中四歲使役具諸威儀無有漏失乃受具戒。佛告須跋我先已說在人行耳。於是須跋卽於其夜出家受戒淨修梵行於現法中自身作證生死已盡梵行已立所作已辦得如實知更不受有、時夜未久卽成羅漢是爲如來最後弟子、便先滅度而佛後焉、是時阿難在佛後立撫牀悲泣不能自勝歔欷而言、如來滅度何其駛哉、世尊滅度何其疾哉大法淪曀何其速哉

Give no occas'on to reproach yourselves hereafter, saying :— 'In our own village did the death of our Tathāgata take place, and we took not the opportunity of visiting the Tathāgata in his last hours.'"

'Even so, lord,' said Ānanda, in assent, to the Exalted One; and he robed himself and taking his bowl, entered into Kusināra attended by another member of the order.

Now at that time the Mallas of Kusināra were assembled in the council hall on some public affair.

And Ānanda went to the council hall of the Mallas of Kusināra; and informed them, saying :— 'This day, O Vāsetthas, in the last watch of the night, the final passing away of the Tathāgata will take place. Be favourable herein, O Vāsetthas Be favourable. Give no occasion to reproach yourselves hereafter; "In our own village did the death of our Tathāgata take place, and we took not the opportunity of visiting the Tathāgata in his last hours."'

And when they had heard this saying of nanda, the Mallas with their young men and maidens and their wives were grieved, and sad and afflicted at heart. And some of them wept, dishevelling their hair, and stretched their arms and wept, fell prostrate on the ground, and rolled to and fro in anguish at the thought: 'Too soon will the Exalted One die! Too soon will the Happy One pass away! Full soon will the light of the world vanish away!, Then the Mallas went to the Sāla Grove of the Mallas, to the Upavattana, and to the place where Ānanda was.

Then Ānanda thought: 'If I allow the Mallas of Kusināra, one by one, to pay their respects to the Exalted One, the whole of them will not have been presented to the Exalted One until this night brightens into the dawn. Let me, now, cause the Mallas of Kusināra to stand in groups each family in a group, and so present them to the Exalted One, saying: "Lord! a Mallas of such and such a name, with his children, his wives, his retinue, and his friend, humbly bows down at the feet of the Exalted One"' And Ānanda, in this manner, presented all the Mallas of Kusināra to the Buddha in the first watch of the night.

Now at that time a Wanderer named Subhadda, who was not a believer, was dwelling at Kusināra, and he heard the news: 'This very day, they say, in the third watch of the night, will take place the final passing away of the Samana Gotama.' Then thouht the Wanderer Subhadda: 'This I have heard from fellow wanderers old and well stricken in years, teachers and disciples, when they said: "Sometimes and full seldom do Tathāgatas appear in the world, the Able Awakened Ones." At this day, in the last watch of the night, the final passing away of the Samana Gotama will take place.

阿難の悲泣

群生長衰世間眼滅、所以者何我蒙佛恩得在學地所業未成而佛滅度。爾時世尊知而故問、阿難比丘今爲所在、時諸比丘白如來曰阿難比丘今在佛後撫牀悲泣不能自勝歔欷而言、如來滅度何其駃哉世尊滅度何其疾哉大法輪噎何其速哉群生長衰世間眼滅、所以者何我蒙佛恩得在學地所業未成而佛滅度。佛告阿難止止勿憂莫悲泣也汝侍我以來身行有慈無二無量言行有慈意行有慈無二無量、阿難汝供養我功德其大若有供養諸天魔梵沙門婆羅門無及汝者汝但精進成道不久。爾時世尊告諸比丘過古諸佛給侍弟子亦如阿難、未來諸佛給侍弟子亦如阿難然過去佛給侍弟子語然後知、今我阿難擧目即知如來須是世尊須是此是阿難未曾有法、汝等持之轉輪聖王有四奇特未曾有法、何等四、聖王行時擧國人庶皆來奉迎見已歡喜聞敎亦喜、瞻仰威顏無厭足、轉輪聖王若住若坐及與臥時國內民盡來王所見王歡喜聞敎亦喜瞻仰威顏無有厭足是爲轉輪聖王四奇特法、今我阿難亦有此四奇特之法、何等四、阿難默然入比丘衆衆皆歡喜爲衆說法亦歡喜、觀其儀容聽其說法無有厭足、復次阿難默然至比丘尼衆中優婆塞衆中優婆夷衆中見俱歡喜、若與說法聞亦歡喜、觀其儀容聽其說法無有厭足、是爲阿難四未曾有奇特之法。爾時阿難偏露右肩右膝著地而白佛言、世尊現在四方沙門耆舊多智明解經律清德高行者來覲世尊我因得禮敬親覲問訊佛滅度後彼不復來無所瞻對當如之何、佛告阿難汝勿憂也、諸族姓子常有四念、何等四、一曰念佛生處歡喜欲見欲念不忘生戀

'Now a certain feeling of uncertainty has sprung up in my mind; and this faith have I in the Samana Gotama, that he, methinks, is able so to present the truth that I may get rid of this feeling of uncertainty.'

Then Subhadda went to Ānanda, and said to him: 'Thus I have heard from fellow wanderers .... and this faith have I in him that he, methinks, is able so to present the truth that I may get rid of this feeling of uncertainty. O that, even I, Ānanda, might be allowed to see the Samana Gotama!'

But Ānanda said to the Wanderers Subhadda: 'Enough! friend Subhadda. Trouble not the Tathāgata. The Exalted One is weary.' And again Subhadda made the same request till the third time, and received the same answer.

Now the Buddha overheard this conversation of Ānanda with Subhadda and called Ānanda and said to him: 'It is enough, Ānanda! Do not keep out Subhadda. Subhadda may be allowed to see the Tathāgata. Whatever Subhadda may ask of me, he will ask from a desire for knowledge, and not to annoy me. And whatever I may say in answer to his question, that he will quickly understand.' Then Ānanda said to Subhadda: 'Enter in, friend Subhadda, for the Exalted One gives you leave.'

Then Subhadda went to the place where the Buddha was, and said to him: 'The leaders in religious life who are heads of companies of disciples and students, well known, renowned, founders of schools of doctrine, esteemed as good men by the multitude —— Purāna Kassapa, Makkhali Gosali-putta, Ajita Kesakambala, Pukkuda Kaccāyana, Sanjaya Belatthi-putta, and Nigantha Nāṭa-putta —— have they all, according to their own assertion, thoroughly understood things? or have they not? or are there some of them who have understood, and some who not?'

'Enough Subhadda! Let this matter rest whether they, according their own assertion, have thoroughly understood things, or whether they have not, or whether some of them have understood and some have not! The truth, Subhadda, will I teach you. Listen well to that, and give ear attentively, and I will speak! In whatever doctrine and discipline, Subhadda, the Āryan eightfold path is not found, neither in it is there found a man of true saintliness of the first, of the second, of the third, of the fourth degree. And in whatever doctrine and discipline, the Āryan eightfold path is found, in it is found the men of true saintliness of the first, of the second, of the third, or of the fourth degree. Now in this doctrine and discipline, Subhadda, is found the Āryan eightfold path, and in it too are found, Subhadda, the men of true saintliness of all the four degree. Void are the systems of other teachers —— void of true saints. And in this one, Subhadda, may the brethren live the Life that's Right, so that the world not bereft of Arahants.

慕心、二曰念佛初得道處歡喜欲見憶念不忘生戀慕心、三曰念佛轉法輪處歡喜欲見憶念不忘生戀慕心、四曰念佛般泥洹處歡喜欲見憶念不忘生戀慕心、阿難我般泥洹後族姓男女念佛生時功德如是、佛得道時神力如是、轉法輪時度人如是、臨滅度時遺法如是、各詣其處遊行禮敬諸塔寺、已死皆生天、除得道者。佛告阿難、我般涅槃後諸釋種來求爲道者當聽出家授具足戒、勿使留難、諸異學梵志來求爲道亦聽出家授具足戒、勿試四月、所以者何、彼有異論、若小稽留則生本見。爾時阿難長跪叉手前白佛言、闡怒比丘虜憍自用佛滅度後當如之何。佛告阿難、我滅度後若彼闡怒不順威儀不受敎誡汝等當共行梵檀罰、勅諸比丘不得與語、亦勿往反敎授從事。是時阿難復白佛言佛滅度後諸女人輩未受誨者當如之何。佛告阿難、莫與相見、阿難又白設相見者當如之何。佛言莫與相語、阿難又白設與語者當如之何。佛言當自撿心阿難汝謂佛滅度後無覆護失所持耶、勿造斯觀我成佛來所說經戒卽是汝護汝所持、阿難自今日始聽諸比丘捨小小戒上下相呼當順禮度斯則出家敬順之法佛告諸比丘汝等若於佛法衆有疑於道有疑者當速諮問宜及是時無從後悔、及吾現存當爲汝說。時諸比丘默然無言、佛又告曰汝等若於佛法衆有疑於道有疑當速諮問宜及是時無從後悔及吾現存當爲汝說。時諸比丘又復默然、佛復告曰汝等若自慚愧敢不問者當因知識速來諮問、宜及是時無從後悔。時諸比丘又復默然、阿難白佛言我信此衆皆有淨信無一比丘疑佛法衆疑於法者。佛告阿難我亦自知今此

'But twenty-nine was I when I renounced
The world, Subhadda, seeking after Good.
For fifty years and one year more, Subhadda,
Since I went out, a pilgrim have I been
Through the wide realm of System and of Law ———
Outside of that no victory can be won!

'Yea, not of the first, nor of the third, nor of the fourth degree. Void are the systems of other teachers —— void of true saints. But in this one, Subhadda, may the brethren live the perfect life, that the world be not bereft of Arahants.'

And when he had thus spoken, Subhadda said to the Buddha: 'Most excellent, lord, are the words of thy mouth, most excellent! .... And I betake myself, lord, to the Exalted One as my refuge, to the truth and to the Order. I would fain be accepted as a probationer under the Exalted One, as a full member in his Order.'

'Whosoever, Subhadda, has formerly been a follower of another doctrine, and thereafter desires to be received into the higher or lower grade in this Dhamma and Vinaya, he remains on probation for the space of four months; and at the end of the four months, the brethren, exalted in spirit, receive him into the lower or into the higher grade of the order. Nevertheless in this case I acknowledge the difference in persons' And the Buddha ordered Ānanda to receive Subhadda into the Order.

So Subhadda was received into the higher grade of the Order under the Exalted One; and he, after his ordination, remained alone and separate, earnest, zealous, and resolved. And ere long he attained to that supreme goal of the higher life, and he became conscious that birth was at an end, that the higher life has been fulfilled, that all that should be done has beem accomplished, and that after this present life there would be no beyond! So the venerable Subhadda became yet another among the Arahants! and he was the last disciple whom the Exalted One himself converted.

Now the Buddha addressed Ānanda and said: 'It may be that in some of you the thought may be arise: "The word of the master is ended, we have no teacher more!" But it is not thus, Ānanda, that you should regard it. The Truths and Rules of the Order, which I have set forth and laid down for you all, let them, after I am gone, be the Teacher to you.'

衆中最小比丘皆見道跡不趣惡道極七往返必盡苦際。爾時世尊即記莂千二百弟子所得道果時世尊披鬱多羅僧出金色臂告諸比丘汝等當觀如來時々出世如優曇鉢花時一現耳爾時世尊重觀此義而說偈言

右臂紫金色　佛現如靈瑞　去來行無常　現滅無放逸

是故比丘無爲放逸我以不放逸故自致正覺無量衆善亦由不放逸得、一切萬物無常存者此是如來末後所說。於是世尊即入初禪定從初禪定起入第二禪從第二禪起入第三禪從第三禪起入第四禪從四禪起入空處定從空處定起入識處定從識處定起入不用定從不用定起入有想無想定從有想無想定起入滅想定。是時阿難問阿那律、世尊已般涅槃耶、阿那律言未也、阿難世尊今者在滅想定、我昔親從世尊聞從四禪起乃般涅槃。於時世尊從滅想定起入有想無想定從有想無想定起入不用定從不用定起入識處定從識處定起入空處定從空處定起入第四禪從第四禪起入第三禪從第三禪起入第二禪從第二禪起入第一禪從第一禪起入第二禪從第二禪起入第三禪從第三禪起入第四禪從第四禪起佛般涅槃。當於爾時地大震動諸天世人皆驚怖、諸有幽冥日月光明所不照處皆蒙大明各得相見迭相謂言彼人生此彼人生此、其光普遍過諸天光時忉利於虛空中以文陀羅花優鉢羅波頭摩拘摩頭分陀利花散如來上及散衆會又以天末栴檀而散佛上及散大衆佛滅度已時梵天王於虛空中以偈頌曰

'Ānanda! when I am gone, address not one another in the way in which the brethren heretofore addressed each other ——— with the epithet that is, of "Āvuso" (Friend). A yunger brother may be addressed by an elder with his name, or his family name, or the title "Friend." But an elder should be addressed by a younger brother as "Sir" or as "Venerable Sir."

'When I am gone, Ānanda, let the Order, if it should so wish, abolish all the lesser and minor precepts.

'When I am gone, Ānanda, let the higher penalty be imposed on brother Channa.'

'But what, lord, is the higher penalty?', asked Ānanda.

'Let Channa say whatever he may like, Ānanda, the brethren should neither speak to him, nor exhort him, nor admonish him.'

Then the Exalted One addressed the brethren, and said: —— 'It may be, brethren, that there may be doubt or misgiving in the mind of some brother as to the Buddha, or the doctrine, or the path, or the method. Inquire, bretheen, freely. Do not have to reproach yourselves afterwards with the thought: ——— "Our teacher was face to face with us, and we could not bring ourselves to inquire of the Exalted One when we were face to face with him." '

And when he had thus spoken the brethren were silent.

And again the second and the third time the Exalted One said to the brethren, in the same way: ....

And even the third time the brethren were silent, So the Buddha said thus: ... 'It may be, brethren, that you put no questions out of reverence for the teacher. Let one friend communicate to another.'

And when he had thus spoken, they were silent.

And Ānanda said to the Exalted One: —— 'How wonderful a thing is it, lord, and how marvellous! Verily, I believe that in this whole assembly of the brethren, there is not one brother who has any doubt or misgiving as to the Buddha, or the doctrine, or the path, or the method!

'It is out of the fullness of faith that thou hast spoken, Ānanda! But, Ānanda, the Tathāgata knows for certain that in this whole assembly of the brethren there is not one brother who has any doubt or misgiving as to the Buddha, or the doctrine, or the path, or the method! For even the most backward, Ānanda, of all there five hundred brethren has become converted, is no longer liable to be born in a state of suffering, and is assured of hereafter attaining to the Enlightenment.

比丘及び諸天の讚歌

一切民萠類　皆當捨諸陰　佛爲無上尊　世間無等倫　如來大聖雄
有無畏神力　世尊應久住　而今般涅槃

爾時釋提桓因復作頌曰

陰行無有常　但爲興衰法　生者無不死　佛滅之爲樂

爾時毗沙門主復作頌曰

福樹大叢林　無上福娑羅　受供之良田　雙樹間滅度

爾時阿那律復作頌曰

佛以無爲住　不用出入息　本由寂滅來　靈曜於是沒

爾時梵摩那比丘復作頌曰

不以懈慢心　約己修上慧　無著無所染　離愛無上尊

爾時阿難比丘復作頌曰

天人懷恐怖　衣毛爲之堅　一切皆成就　正覺取滅度

爾時金毗羅神復作頌曰

世間失覆護　群生永盲冥　不復覩正覺　人雄釋師子

爾時密跡力士復作頌曰

今世與後世　梵世諸天人　更不復覩見　人雄釋師子

Then the Buddha said to the brethren: 'Behold now, brethren, I exhort you, saying: "Decay is inherent in all component things! Work out your salvation with diligence!" ' This was the last word of the Tathāgata!

Then the Buddha entered into the first stage of Rapture. And rising out of the first stage he passed into the second and into the third and into the fourth, then rising out of the fourth he entered into the state of mind to which the infinity of space is alone present. And passing out of the mere consciousness of the infinity of space he entered into the state of mind to which the infinity of thought is alone present. And passing out of the mere consciousness of the infinity of thought he entered into a state of mind to which nothing at all was specially present. And passing out of the consciousness of no special object he fell into a state between consciousness and unconsciousness. And passing out of the state between consciousness and unconsciousness he fell into a state in which the consciousness both of sensations and of ideas had wholly passed away.

Then Ānanda said to the venerae Anuruddha: 'O my lord, O Anuruddha, the Exalted One is dead,"

'Nay, brother Ānanda, the Exalted One is not dead. He has entered into that state in which both sensations and ideas have ceased to be.'

Then the Exalted One passing out of the state in which both sensations and ideas have ceased to be, entered into the state between consciousness and unconsciousness. And then he entered into the state of mind to which nothing at all is specially present. And after that he entered into the state of mind to which the infinity of thought is alone present. And passing out of the mere consciousness of the infinity of thought he entered into the state of mind to which the infinity of space is alone present. And passing out of the mere consciousness of the infinity of space he entered into the fourth stage of Rapture, and into the third, into the second and into the first. And again passing out of the first stage of Rapture he entered into the second. And passing out of the second stage he entered into the third. And passing out of the third stage he entered into the fourth stage of Rapture. And passing out of the last stage of Rapture he immediately expired.

When the Exalted One died there arose, at the moment of his passing out of the existence, a mighty earthquake, terrible and awe-inspiring: and the thunders of heaven burst fouth.

when the Exalted One died, Brahmā Sahampatī, at the moment of his passing away from existence, uttered this stanza:——

爾時佛母摩耶復作頌曰

佛生樓毗園　其道廣流布　還到本生處　永棄無常身

爾時雙樹神復作頌曰

何時當復以　非時花散佛　十方功德具　如來取滅度

爾時娑羅園林神復作頌曰

此處最妙樂　佛於此生長　卽此轉法輪　又於此滅度

爾時四天王復作頌曰

如來無上智　常說無常論　解群生苦縛　究竟入寂滅

爾時忉利天王復作頌曰

於億千萬劫　求成無上道　解群生苦縛　究竟入寂滅

爾時焰天王復作頌曰

此是最後衣　纏裹如來身　佛旣滅度已　衣當何處施

爾時兜率陀天王復作頌曰

此是末後身　陰界於此滅　無憂無喜想　無復老死患

爾時化自在天王復作頌曰

佛於今後夜　偃右脅而臥　於此娑羅園　釋師子滅度

'They all, all beings that have life, shall lay
Aside their complex form —— that aggregation
Of mental and material qualities,
That gives them, or in heaven or on earth,
Their fleeting individuality!
E'en as the teacher —— being such a one,
Unequalled among all the men that are,
Successor of the prophets of old time,
Mighty by wisdom, and in insight clear —
Has died.'

When the Exalted One died, Sakka, the king of the gods, at the moment of his passing away from existence, uttered this stanza: —

'They're transient all, each being's parts and powers,
Growth is their very nature, and decay.
They are produced, they are dissolved again:
To bring them all into subjection —— that is bliss.'

When the Exalted One died, the venerable Anuruddha, uttered these stanzas: ———

'When he who from all craving want was free,
Who to Nirvāna's tranquil state had reached,
When the great sage finished his span of life,
No gasping struggle vexed that steadfast heart!
All resolute, and with unshaken mind,
He calmly triumphed o'er the pain of death.
E'en as a bright flame dies away, so was
The last emancipation of his heart.

When the Exalted One died, the venerable Ānanda, uttered this stanza: ——

'Then was there terror!
Then stood the hair on end
When he endowed with every grace ——
The supreme Buddha —— died!'

When the Exalted One died, of these of the brethren who were not yet free from the passions, some streched out their arms and wept, and some fell headlong on the ground, rolling to and fro in anguish at the thought 'Too soon has the Exalted One died! Too soon has the Happy One passed away! Too soon has the Light gone out in the world!

阿那律諸比丘を誡む

爾時他化自在天王復作頌曰

世間永衰冥　星王月奄墜　無常之所覆　大智日永翳

爾時異比丘而作頌曰

是身如泡沫　危脆誰當樂　佛得金剛身　獨爲無常壞　諸佛金剛體
皆亦歸無常　速滅如少雪　其餘復何冀

佛般涅槃已、時諸比丘悲慟殞絕自投於地宛轉號咷不能自勝、歔欷而言如來滅度何其駛哉世尊滅度何其疾哉大法淪翳何其速哉、群生長衰世間眼滅、譬如大樹根拔枝條摧抑又如斬蛇宛轉迴遑莫知所奉時諸比丘亦復如是悲慟殞絕自投於地宛轉號咷不能自勝歔欷而言、如來滅度何其駛哉世尊滅度何其疾哉大法輪翳何其速哉、群生長衰世間眼滅。爾時長老阿那律告諸比丘、止止勿悲諸天在上儻有怪責。時諸比丘問阿那律上有幾天阿那律言充滿虛空豈可計量皆於空中徘徊騷擾悲號躃踊垂淚而言如來滅度何其駛哉世尊滅度何其疾哉大法淪翳何其速哉群生長衰世間眼滅、譬如大樹根拔枝條摧折又如斬蛇宛轉迴遑莫知所奉是時諸天亦復如是皆於空中徘徊騷擾悲號躃踊垂淚而言、如來滅度何其駛哉世尊滅度何其疾哉大法淪翳何其速哉群生長衰世間眼滅。時諸比丘竟夜達曉講法語已。阿那律告阿難曰、汝可入城語諸末羅佛已滅度所欲施作宜及時爲。是時阿難卽起禮佛足已將一比丘涕泣入城遙見五百末羅以少困緣集在

But those of the brethren who were free from the passions bore their grief collected and composed at the thought:— 'Impermanent are all component things! How is it possible that they should not be dissolved!'

Then Anuruddha exhorted the brethren, and said: —— 'Enough, my brethren! weep not, neither lament! Has not the Exalted One formerly declared this to us, that it is in the very nature of all things near and dear unto us, that we must divide ourselves from them, leave them, sever ourselves from them? How then, brethren, can this be possible —— that whereas anything whatever born, brought into being, and organized, contains within itself the inherent necessity of dissolution —— how then can this be possible that such a being should not be dissolved? No such condition can exist! Even the spirits, brethren, will reproach us.'

'But of what kind of spirits, Sir, is the venerable Anuruddha thinking?'

'There are spirits, brother Ānanda, in the sky, but of worldly mind, who dishevel their hair and weep, and stretch forth their arms and weep, fall prostrate on the ground, and roll to and fro in anguish at the thought: "Too soon has the Exalted One died! Too soon has the Light gone out in the world!" There are spirits, too, Ānanda, on the earth, and of worldly mind, who tear their hair and weep, and stretch forth their arms and weep, fall prostrate on the ground, and roll to and fro in anguish at the thought: "Too soon has the Blessed One died! Too soon has the Happy One passed away! Too soon has the Light gone out in the world!" 'But the spirits who are free from passion bear it, calm and self-possessed, mindful of the saying which begins: —— "Impermanent indeed are all component things. How then is it possible that such a being should not be dissolved?"

Now Anuruddha and Ānanda spent the rest of that night in religious discourse. Then Anuruddha said to Ānanda: —— 'Go now, brother Ānanda, into Kusināra and inform the Mallas of Kusināra, saying: —— "The Exalted One, O Vāseṭṭhas, is dead; do, then, whatever seemeth to you fit!"

'Even so, lord!' said Ānanda, in assent to Anuruddha. And having robed himself eary in the morning, he took his bowl, and went into Kusināra with one of the brethren as an attendant.

Now at that time the Mallas of Kusināra were assembled in the council hall concerning that very matter.

And the venerable Ānanda went to the council hall of the Mallas of Kusināra; and he infomed them, saying: —— 'The Blessed One, O Vāseṭṭhas, is dead; do, then, whatever seemeth to you fit!'

末羅人の供養

一處、諸末羅見阿難來皆起奉迎禮足而立白阿難言、今來何早、阿難答曰我今爲欲饒益汝故晨來至此、汝等當知、如來昨夜已取滅度、汝欲施作宜及時爲。時諸末羅聞是語已莫不悲慟扪涙而言、一何駛哉佛般涅槃一何疾哉世間眼滅。阿難報曰止止諸君勿爲悲泣欲使有爲不變易者無有是處佛已先說生者有死合會有離一切恩愛無常存者。時諸末羅各相謂言宜各還歸辦諸香花及衆伎樂速詣雙樹供養舍利竟一日已以佛舍利置於牀上使末羅童子舉牀四角擎持幡蓋燒香散花伎樂供養入東城門遍諸里巷使國人民皆得供養然後出西城門詣高顯處而闍維之。時諸末羅作是語已各自還家供辦香華及衆伎樂詣雙樹間供養舍利竟、一日已以佛舍利置於牀上諸末羅等衆來舉牀皆不能勝。時阿那律語諸末羅、汝等且止勿空疲勞今者諸天欲來舉牀、諸末羅曰天以何意欲舉此牀、阿那律曰汝等欲以香花伎樂供養舍利竟一日已以佛舍利置於牀上使末羅童子舉牀四角擎持幡蓋燒香散花伎樂供養入東城門遍諸里巷使國人民皆得供養然後出西城門詣高顯處而闍維之、而諸天意欲留舍利七日之中香花伎樂禮敬供養然後以佛舍利置於牀上使末羅童子舉牀四角擎持幡蓋散花燒香作衆伎樂供養舍利入東城門遍諸里巷使國人民皆得供養然後出城北門渡凞連禪河到天冠寺而闍維之、是上天意使牀不動。末羅曰諸快哉斯言隨天意、時諸末羅自相謂言我等宜告入城街里街里平治道路掃灑燒香還來至此於七日之中供養舍利時諸末羅即共入城街里街里平治道路掃

And when they had heard this saying of the venerable Ānanda, the Mallas, with their young men and their maidens and their wives, were grieved, and sad, and afflicted at heart. And some of them wept, dishevelling their hair, and some stretched forth their arms and wept, and some roled to and fro in anguish at the thought: —— 'Too soon has the Exalted One died! Too soon has the Happy One passed away! Too soon has the Light gone out in the world!'

Then the Mallas of Kusināra gave orders to their attendants, saying: — 'Gather together perfumes and garlands, and all the music in Kusināra!

And the Malas of Kusināra took the perfumes and garlands, and all the musical instruments, and five hundred suits of apparel, and went to the Upavattana, to the Sālā Grove, where the body of the Exalted One lay. There they passed the day in paying honour, reverence, respect, and homage to the remains of the Exalted One with dancing, and hym s, and music, and with garlands and perfumes; and in making canopies of their garments, and preparing decoration wreaths to hang thereon.

Then the Mallas of Kusināra thought: 'It is too late to burn the body of the Buddha to-day. Let us now perform the cremation to-morrow.' And in paying honour, reverence, respect, and homage to the remains of the Buddha, they passed the second day too and then the third day and the fourth and fifth and the six day also.

Then on the seven day the Mallas of Kusināra thought: 'Let us carry the body of the Buddha by the south and outside, to a spot on the south and outside of the city, paying it honour and reverence, and respect and homage with dance and song and music, with garlands and perfume, and there, to the south of the city, let us perfome the cremation ceremony!'

And thereupon eight chieftains among the Mallas bathed their heads and clad themselves in new garments with the intention of bearing the body of the Buddha. But, behold, they could not lift it up! Then the Mallas said to Anuruddha: 'What, lord, can be the reason, what can be the cause, that eight chieftains of Mallas are unable to lift it up?' 'It is because you, Vāseṭṭhas, have one purpose, and the spirits have another purpose.'

'But what, lord, is the purpose of the spirits?' 'Your purpose, O Vāseṭṭhas, is this: Let us carry the body of the Buddha, by the south, and outside, to a spot on the south, and outside of the city, and there, to the south of the city, let us perfome the cremation ceremony. But the purpose of the spirits is this: Let us carry the body of the Buddha by the north to the north of the city, and entering the city by the north gate, let us bring it through the midst of the city into the midst thereof.

灑燒香訖已出城於雙樹間以香花伎樂供養舍利訖、七日已時日向暮舉佛舍利置於牀上、末羅童子奉舉四角擎持幡蓋燒香散花作衆伎樂、前後導從安祥而行時忉利諸天以文陀羅花優鉢羅花波頭摩花拘物頭華分陀利華天末栴檀散舍利上充滿街路諸天作樂鬼神歌詠、時諸末羅自相謂言且置人樂請設天樂供養舍利於是末羅奉牀漸進入東城門止諸街巷燒香散花伎樂供養、時有路夷末羅女篤信佛道手擎金花大如車輪供養舍利、時有一老母舉聲讚曰此諸末羅爲得大利如來末後於此滅度舉國士民快得供養、時諸末羅設供養已出城北門渡凞連禪河到天冠寺置牀於地、告阿難曰我等當復以何供養、阿難報曰我親從佛聞親受佛敎、欲葬舍利者當如轉輪聖王葬法、又問阿難轉輪聖王葬法云何、答曰聖王葬法先以香湯洗浴其身以新劫貝周偏纏身五百張疊次如纏之、內身金棺灌以麻油畢舉金棺置於第二大鐵槨中栴檀香槨、次重於外積衆名香厚衣其上而闍維之、收拾舍利於四衢道起立塔廟表刹懸繒使國行人皆見王塔思慕正化多所饒益、阿難汝欲葬我先以香湯洗浴用新劫貝周匝纏身以五百張疊次如纏之內身金棺灌以麻油畢舉金棺置於第二大鐵槨栴檀香槨、次重於外積重衆香厚衣其上而闍維之、收檢舍利於四衢道起立塔廟表刹懸繒使諸行人皆見佛塔思慕如來法王道化生獲福利死得生天、除得道者。時諸末羅各相謂言、我等還城供辦葬具香花劫貝棺槨香油及與白疊、時諸末羅卽入城供辦葬具已、還到天冠寺以淨香湯洗浴佛身、以新劫貝周匝纏身

And going out again by the the eastern gate, let us carry it to the shrine of the Mallas called Makuṭa-bandhana, to the east of the city, and there let us perform the cremation ceaemony.' 'Even according to the purpose of the spirits, so, lord, let it be.'

Then immediately all Kusināra down even to the dust bins and rubbish heaps became strewn knee-deep with Mandārava floweas from heaven! and while both the spirits from the skies, and the Mallas of Kusināra upon earth, paid honour, and reverence, and respect, and homage to the body of the Buddha, with dance and song and music with garlands and with perfumes, they carried the body by the north to the north of the city; and entering the city by the north gate they carried it through the midst of the eity into the midst thereof; and going out again by the eastern gate they carried it to the shrine of the Mallas called Makuṭa-bandhana; and there to the east of the city, they laid down the body of the Buddha.

Then the Mallas said to Ānanda: 'What should be done, lord, with the remain of the Tathāgata?' 'As men treat the remains of a king of kings, so, Vāseṭṭhas, should they treat the remains of the Tathāgata.'

'And how, lord, do they treat the remains of a king of kings?' Ānanda told the Mallas of Kusināra as he had been told by the Buddha. Therefore the Mallas gave orders te their attendants, saying: 'Gather together all the carded cotton wool of the Mallas!'

Then the Mallas wrapped the body of the Buddha in a new cloth. And when that was done, they wrapped it in carded cotton wool. And when was done, 'they wrapped it in a new cloth, and so on till they wrapped the body of the Buddha in five hundred layers of both kinds. And then they placed the body in an oil vessel of iron, and covered that close up with another oil vessel of iron, And then they built a funeral pyre of all kinds of perfumes, and upon it they placed the body of the Buddha.

Now at that time the venerable Mahā Kassapa was journeying along the high road from Pāvā to Kusināra with a great company of the brethren, with about five hundred of the brethren. And Mahā Kassaya left the high road, and sat himself down at the foot of a certain tree. Just at that time a certain naked ascetic who had picked up a Mandārava flower in Kusināra was coming along the high road to Pāvā. Now Mahā Kassapa saw the naked ascetic coming in the distance; and when be had seen he said to that naked ascetic: 'O friend! surely thou knowest our Master?'

'Yea, Friend! I know him. This day the Samana Gotama has been dead a week! That is how I obtained this Mandārava flower.'

五百張疊次如纏之、內身金棺、灌以香油、奉舉金棺、置於第二大鐵槨中栴檀木槨、重衣其外、以衆名香而積其上。時有末羅大臣名曰路夷、執大炬火欲燃佛積、而火不燃、又有大末羅次前燃其積火又不燃。時阿那律語諸末羅言止止諸賢非汝所能火滅不燃是諸天意。末羅又問諸天何故使火不燃、阿那律言天以大迦葉將五百弟子從波婆國來今在半道及未闍維欲見佛身、天知其意故火不燃、末羅又言願遂此意。爾時大迦葉將五百弟子從波婆國來在道而行、遇一尼乾子手執文陀羅花、時大迦葉遙見尼乾子就往問曰汝從何來、報言吾從拘尸城來、迦葉又言汝知我師否乎、答曰知、又問我師存耶、答曰滅度已來已經七日、吾從彼來得此天華、迦葉聞之悵然不悅、時五百比丘聞佛滅度皆大悲泣宛轉號咷不能自勝、抆淚而言、如來滅度何其駛哉世尊滅度何其疾哉大法倫翳何其速哉群生長衰世間眼滅、譬如大樹根拔枝條摧折又如斬蛇宛轉迴遑莫知所奉。時彼衆中有釋種子字拔難陀、止諸比丘言汝等勿憂、世尊滅度我得自在彼者常言當應行是不應行是自今已後隨我所爲。迦葉聞已悵然不悅、告諸比丘曰速嚴衣鉢時詣雙樹及未闍維可得見佛、時諸比丘聞大迦葉語已即從座起侍從迦葉詣拘尸城渡尼連禪河水到天冠寺至阿難所問訊已一面住語阿難言、我等欲一面覲舍利及未闍維寧可見不、阿難答言雖未闍維難復可見所以然者佛身既洗以香湯纏以劫貝五百張疊次如纏之藏於金棺置鐵槨中栴檀香槨重衣其外以爲佛身難復可見迦葉請至三阿難答如初以爲佛身難復得見。

On that of those of the brethren who were not yet free from the passions, some stretched out their arms and wept, and some fell headlong on the ground, and some reeled to and fro in anguish at the thought: 'Too soon has the Exalted One died! Too soon has the Happy One passed away! Too soon has the Light gone out in the world!' But those of the brethren who were free from the passions bore their grief self-possessed and composed at the thought: 'Impermanent are all component things! How is it possible that they should not be dissolved?'

Now at that time a brother Subhadda, who had been received into the Order in his old age, was seated in that company. He said to those brethren: 'Enough, sirs! Weep not, neither lament! We are well rid of the great Samana. We used to be annoyed by being told: "This beseems you, this beseems you not." But now we shall be able to do whatever we like; and what we do not like, that We shall not have to do!'

But Mahā Kassapa exhorted the brethren; 'Enough, my brethren! Weep not, neither lament! Has not the Exalted One formerly declared this, that it is in the very nature of all things near and dear unto us that we must divide ourselves from them, leave them, sever ourselves from them? How then, brethren, can this be possible that such a being, born, brought into being, and organized and which ,contains within itself the inherent necessity of dissolution should not be dissolved? No such condition can exist!

Now just at that time four chieftains of the Mallas had bathed their heads and clad themselves in new garments with intention of setting on fire the funeral pyre of the Buddha. But, behold, they were not able to set it alight: Then the Mallas said to Anuruddha: 'What, lord, can be the reason, and what the cause of this?' 'The purpose of the spirits, Vāseṭṭhas, is different.' 'But what, sir, is the purpose of the spirits?'

'The purpose of the spirits, O Vāseṭṭhas, is this: —— That venerable brother Mahā Kassapa is now journeying along the way from Pāvā to Kusināra with a great company of the brethren. The funeral pyre of the Exalted Ond shall not catch fire until Mahā Kassapa shall have been able to salute the feet of the Exalted One,'

Then Mahā Kassapawent on to Makuṭa-bandhana of Kasināra, to the place where the funeral pyre of the Buddha was. And when he had come up to it he arranged his robs on one shoulder; and after bowing down with clasped hands, he thrice walked reverently round the pyre, and them, uncovering the feet, he bowed down in reverence at the feet of the Buddha. And those five hundred brethren did the same as Kahā Kassapa did, And when the homage of Mahā Kassapa and of those five hundred brethren was ended the funeral pyre caught fire of itself.

時大迦葉適向香積、於時佛身從重槨內雙出兩足、足有異色、迦葉見已怪問阿難、佛身金色是何故異、阿難報曰向者有一老母悲哀而前手撫佛足淚墮其上故色異耳、迦葉聞已又大不悅卽向香積禮佛舍利時四部衆及上諸天同時俱禮、於是佛足忽然不現、時大迦葉繞積三匝而作頌曰

諸佛無等等　聖智不可稱　無等之聖智　我今稽首禮　無等等沙門
最上無瑕穢　牟尼絕愛枝　大仙天人尊　人中第一雄　我今稽首禮
苦行無等侶　離著而敎人　無染無垢塵　稽首無上尊　三垢垢已盡
樂於空寂行　無二無疇匹　稽首十力尊　遠逝爲最上　二足尊中尊
覺四諦止息　稽首安隱智　沙門中無上　廻邪令入正　世尊施寂滅
稽首湛然迹　無熱無瑕玼　其心常寂定　練除諸塵穢　稽首無垢尊
慧眼無限量　甘露滅名稱　希有難思議　稽首無等倫　吼聲如師子
在林無所畏　降魔越四姓　是故稽首禮

大迦葉有大威德四辨具足、說此偈已時彼佛積不燒自燃、諸末羅等各相謂言今火猛熾焰盛難止閣維舍利或能消盡當於何所求水滅之、時佛積側有娑羅樹神篤信佛道尋以神力滅佛積火、時諸末羅復相謂言此拘尸城左右十二由旬所有香花盡當採取供佛舍利尋詣城側取諸香花以用供養時波婆國末羅民衆聞佛於雙樹滅度皆自念言今我宜

Now as the body of the Buddha burned itself away, from the skin and the integument, and the fresh and the nerves, and the fluid of the joints, neither soot nor ash was seen. Only the bones remained behind. Just as one sees no soot no ash when ghee or oil is burned; so it was. Only the bones remained behind. And of those five hundred pieces of raiment the very innermost and outermost were both consumed.

Then the Mallas surrounded the bones of the Buddha in their council hall with a lattice work of spears and with a rampart of bows; and there the seven days they paid honour, and reverence, and respect, and homage to them with dance and song and music, and with garlands and perfumes.

Now the king of Magadha, Aj tasattu, the son of the queen of the Videha clan, heard the news that the Buddha had died at Kusināra.

Then the king of Magadha, Ajātasattu, sent a messenger to the Mallas, saying, —— 'The Exalted One was a Kshatriya and so am I. I am worthy to receive a portion of the relics of the Exalted One. Over the remains of the Buddha will I put up a sacred cairn, and in their honour will I celebrate a feast!'

And the Licchavis of Vesali heard the same news, and sent a messenger to the Mallas, saying:—— 'The Exalted One was a Kshatriya and so are we. We are worthy to receive a portion of the relics of the Exalted One. Over the remains of the Buddha will we put up a sacred cairn, and in their honour will we celebrate a feast!'

And the Sākiyas of Kapila-vatthu heard the same news, and sent a messenger to the Mallas, saying:—— 'The Buddha was the pride of our race. We are worthy to receive a portion of the relics of the Exalted One. Over the remains of the Exalted One will we put up a sacred cairn, and in their honour will we celebrate a feast!'

And the Bulis of Allakappa heard the same news and sent a messenger to the Mallas, saying:—— 'The Buddha was a Kshatriya and so are we. We are worthy to receive a portion of the relics of the Exalted One. Over the remains of the Exalted One will we put up a sacred cairn, and in their honour will we celebrate a feast!'

And the Koliyas of Rāmagāma heard the same news, and sent a messenger to the Mallas, saying:—— 'The Exalted One was a Kshatriya and so are we. We are worthy to receive a portion of the relics of the Exalted One. Over the remains of the Exalted One will we put up a sacred cairn, and in their honour will we celebrate a feast!'

往求舍利分自於本土起塔供養、時波婆國諸末羅即下國中嚴四種兵象兵馬兵車兵步兵到拘尸城遣使者言、聞佛衆祐止此滅度彼亦我師敬慕之心來請骨分當於本國起塔供養拘尸王答曰如是如是誠知所言但爲世尊垂降此土於茲滅度國內士民當自供養遠勞諸君舍利分不可得、時遮羅頗國諸跋離民衆及羅摩伽國拘利民衆毗留提國婆羅門衆迦維羅衛國釋種民衆毗舍離國離車民衆及摩竭王阿闍世聞如來於拘尸城雙樹間而取滅度、皆自念言今我宜往求舍利分、時諸國王阿闍世等即下國中嚴四種兵象兵馬兵車兵步兵進渡恒水即勅婆羅門香姓汝持我名入拘尸城致問諸末羅等起居輕利遊步强耶、吾於諸賢每相宗敬隣境義和曾無諍訟、我聞如來於君國內而取滅度、唯無上尊實我所天故從遠來求請骨分欲還本土起塔供養、設與我者舉國重寶與君共之。時香姓婆羅門受王教已即詣彼城語諸末羅曰摩竭大王致問無量起居輕利遊步强耶吾於諸君每相宗敬隣境義和曾無諍訟、我聞如來於君國內而取滅度、唯無上尊實我所天故從遠來求請骨分欲還本土起塔供養、設與我者舉國重寶與君共之。時諸末羅報香姓曰如是如是如君言、但爲世尊垂降此土於茲滅度國內士民自當供養、遠勞諸君舍利分不可得。諸國王即集群臣衆共立議作頌告曰

吾等和議　遠來拜首　遜言求分　如不見與　四兵在此
不惜身命　義而弗獲　當以力取

And the brahmin of Veṭhadīpa heard the same news, and sent a messenger to the Mallas saying: 'The Exalted One was a Kshatriya, and I am a brahmin. I am worthy to receive a portion of the relics of the Buddha. Over the remains of the Buddha will I put up a sacred cairn, and in their honour will I celebrate a feast!'

And the Mallas of Pāvā heard the news of the death of the Buddha, and sent a messenger to the Mallas, saying: 'The Exalted One was a Kshatriya and so are we. We are worthy to receive a portion of the relics of the Buddha. Over the remains of the Buddha will we put up a sacred cairn and in their honour will we celebrate a feast!'

When they heard these things the Mallas of Kusināra spoke the assembled crowds, saying: 'The Exalted One died in our village domain. We will not give away any part of the remains of the Exalted One!' When they had spoken, Doṇa the brahmin addressed the assembled crowds, and said:

'Hear, gracious sirs, one single word from me.
Forberance was our Buddha wont to teach.
Unseemly is it that over the division
Of the remains of him who was the best of beings
Strife should arise, and wounds; and war!
Let us all, sirs, with one accord unite
In friendly harmony to make eight portions.
Wide spread let cairn spring up in every land
That in the Light of the world mankind may trust!'

'Do thou then, O brahmin, thyself divide the remains of the Exalted One equally into eight parts, with fair division.'

'Be it so sirs! said Doṇa the Brahmin, in assent, to the assembled brethren. And he divided the remains of the Buddha equally into eight parts, with fair division. And he said to them: 'Give me, sirs, this vessel, and I will set up over it a sacred cairn, and in their honour will I establish a feast.' And they gave the vessel to Doṇa the brahmin.

And the Moriyas of Pippalivana heard the news that the Buddha had died at Kusināra, and sent a messenger to the Mallas, saying: 'The Exalted One was a Kshatriya and so are we. We are worthy to receive a portion of the relics of the Exalted One. Over the remains of the Exalted One will we put up a sacred cairn, and in their honour will we celebrate a feast!' And when they heard the answer, saying: 'There is no portion of the remains of the Exalted One left over. The remains of the Exalted One

香姓婆羅門遺骨を分つ

時拘尸國卽集群臣衆共立議以偈答曰

遠勞諸君　屈辱拜首　如來遺形　不敢相許　彼欲擧兵
吾斯亦有　畢命相抵　未之有畏

時香姓婆羅門曉衆人曰諸賢長夜受佛敎誡、口誦法言心服仁化一切衆生常念欲安寧可諍佛舍利共相殘害、如來遺形欲以廣益舍利現在但當分取衆咸稱善尋復議言誰堪分者、皆言香姓婆羅門仁智平均可使分也、時諸國王卽命香姓汝爲我等分佛舍利均作八分、於時香姓聞諸王語已卽詣舍利處頭面禮畢徐前取佛上牙別置一面尋遣使者齎佛上牙詣阿闍世王所語使者言、汝以我聲上白、大王起居輕利遊步强耶、舍利未至傾遲無量耶、今付使者如來上牙並可供養以慰企望、明星出時分舍利訖當自奉送、時彼使者受香姓語已卽詣阿闍世王所致香姓婆羅門之言、爾時香姓以一瓶受一石許卽分舍利均爲八分已告衆人言願以此瓶衆議見與自欲於舍起塔供養、皆言智哉是爲知時卽共聽與。時有畢鉢村人白衆人言乞地焦炭起塔供養、皆言與之。拘尸國人得舍利分卽於此土起塔供養、波婆國人遮羅國羅摩伽國毗留提國迦維羅衛國毗舍離國摩竭陀國阿闍世王等得舍利分已各歸其國起塔供養。香姓婆羅門持舍利瓶歸起塔廟、畢鉢村人持地焦炭歸起塔廟當於此時如來舍利起於八塔第九瓶塔第十炭塔第十一生地髮塔。

are all distributed, ' then they took away the embers.

So the king of Magadha, Ajātasattu made a cairn in Rājagaha over the remains of the Exalted One, and celebrated a feast.

And the Licchavis of Vesali,................ in Vesali.

And Sākiyas of Kapila-vatthu............... in Kapila-vatthu.

And the Bulis of Allakappa .... in Allakappa.

And the Koliyas of Rāmagāma............ in Rāmagāma.

And Veṭhadīpaka the brahmin............ in Vethadīpa.

And Mallas of Pāvā.......................... in Pāvā.

And Mallas of Kusināra..................... in Kusināra.

And Doṇa the brahmin made a cairn over the vessel

And the Moriyas of Pippalivana made a cairn over the embers.

Thus were there eight cairns (Thupa) for the remains, and one for the vessel, and one for the embers. This was how it ushd to be.

第二編　法

第一章　四　聖　諦

佛陀の教は哲學として初まりたるに非ずして宗教として起り、原理探究の學に非ずして實踐體顯を專一とする教なり。巴利中阿含(M. 63)に宣はく、「佛陀の教には要なきことを曰はず、世界常無常邊無邊、如來の死後存在の有無等は涅槃に入るに要なし。故に之れを說かず」と、又巴利雜阿含 (S. L VI.) に宣はく、「我れは總てを說かず、只一部を說く。涅槃の爲めにならざるものは說かず、涅槃のためになるもののみを說く」と。佛陀は必ずしも優波尼沙土が代表する當時の原理探究の哲學的傾向を否定し給はざるも、唯それが智慧の方面に局分され、概念の取り扱ひとなり了れるを見、全人格的に體顯の遠きを慮り、一切是れを戲論(Papañca vacana) として斥け專ら個人の心眼の覺め來て、不動の安住を體顯する樣、必要なる教を垂れ給へり。故にその教は隨機便宜の教也。その對機に應じその機會に臨みて隨宜の教を垂れ給ふ也。されば其の教には一貫せる精神と一定の規矩あるは云ふ迄もなけれども、又甲乙の時に從つて其の所說に相違なき能はず。佛陀は嘗て一比丘が、一在家信者と「受」に就いて論議せし時、阿難陀に告げ給はく、「阿難よ、吾が教法は、かくの如く機會に應じて說かれたるものなり。故に或は二受と說き三受と曰ひ、六受乃至百受と說く」と。佛陀はその機會に應じて對機が明了に了解する樣分別して（毘婆娑 Vibhajja）說き給ふ。而してこの分別は、單なる理論としての學解的分類に非ずして、衆生をしてその頭腦を整理し、以て道行に便ならしめん爲め也。故に毘婆娑師卽ち分別說者 (Vibbajjavāda) としての佛の說法には、時として二受と說き六受と說く、等の相違なき能はず、この佛陀の分別的傾向を受け、時には更らに分別し、時には合會して、相違矛盾せる教を會通し、佛陀の教全體に一貫せる理路を尋ね、之れに整頓せる形而上學理論の背景を與へんとするものを論部となす。論(Abhidhamma) は教の後に起る神學なり宗乘なり。この論部の有部衆的大成を「毘婆娑」といふも、佛陀が「我は毘婆娑師卽ち分別說者な

り」と曰はれしを受くるものにして、毘婆娑は三世實有法體恒有の唯物的神學を作り、これに對して龍樹の中論の如き皆空論を生み、無著世親の唯心論を生めり。これ等種々の敎系の發展は一には雜多なる佛陀の敎法中に一の中心原理を掴まんとする努力より生れ、二には先驅の思想の偏倚を匡めんとするに依るものなるが、吾人は今佛陀の敎法そのものに就いて研究し、その中に後世の敎系發達のあるべき種子を見、以て佛陀の敎の如何なるものなるかを髣髴せしめんとす。

佛陀の最初の敎說なる初轉法輪經には佛陀の敎は中道にしてこの中道を踏むには四諦の理に明かなるべきを說けり。四諦とは苦集滅道諦にして佛敎々說の根本的基礎をなし、その小乘なると大乘なるとを問はず、四諦がその敎義の根基とならざるものなし。この四諦は人生の實相と理想とを示すものにして、更に分つていへば、

苦諦は所知　　　集諦は所斷
滅斷は所證　　　道諦は所修

にして現實の實相の苦なるを如實に知り、その源を探りて、苦諦構成の因たる煩惱を斷じ、滅諦の證すべきを知りて、この境に入るべき道行を修するを勸むるが四諦の敎旨なりとす。卽ち(1)もの其ものゝ當體と、(2)當體の因と、(3)當體の滅と、(4)當體の滅に至る道とを分ち示して、修道上の知識の整頓をなすものとす。かるが故にこの四諦の理法は、單に苦集滅道として用ひらるゝのみならず、總ての方面に向ひ、一々の事物に就いて用ひらる。例へば玆に受法ありとすれば我れ等はその受を知り、受の因を知り、受の滅を欲して、受の滅に至る道、卽ち八聖道を修する也。故にこの四諦は、解脫涅槃に達すべき修道上の知識整頓の形式なりといふを得べし。

第二章　現實の實相、苦諦

佛陀の出發點は、時代苦悶を背景とせる個人の生活に對する苦惱也。既成宗教の權威衰へて雜多の思想紛亂し、統一的勢力ある宗教の起らざる時代にありては、生活を統御する規範を失ふ爲めに、感受性强き青年が生活そのものに對して懷疑と煩悶に陷るは當然の事也。

既に前章にも述べたるが如く、悉達太子は宮中の奧深く歡樂の酒に浸り乍ら、老者を見て老の來るべきに恐れ、乃至死者を見て死の襲ふべきに慄き、老死を結果として有する生のあまり無意義なるに悶え給ひぬ。後期の佛傳には太子は父王の出家を停まるべしといふ勸告に對し、若し「後有を有せざる樣になし給らば出家せざるべし」と宣へりと傳ふ。太子は又當時の一般信仰たりし輪廻の思想にも脅され、現實の生の無意味なると、その生が復永劫の輪廻の連鎖なるを知りて、この生より脫すべき方法を見出さんとて一沙門となり給へるなり。

從て釋尊の世相に對する觀察は深刻にして精徹し、この人生全體を擧げて大苦蘊 Mahādukkha khanda)也と宣へり。されば佛陀が弟子等に說き給ひし世相の觀察はもと佛陀がその求道中に實驗し給ひたるものにして、又同時に「同一乘」に依つて解脫を求むる佛弟子の修行の出發點なりとす。

人生の實相は何ぞや。曰く苦、空、無常、無我也。又非常、不淨、無我、苦也。人生は苦惱に滿ち、そらごとたわごと、まことあることなし。有爲轉變にして常住のものあることなく、人間には常一主宰の靈體なく、五蘊合集の體也。而してこの假和合の體は不淨に滿つ、これを一括して見れば人生は苦也。もとより人間に樂なきに非れども、そは時間の制限を受くるものなるが故に、換言すれば無常なるが故に苦を引き起す樂也。佛陀は大苦蘊經に、

寒暑に洒され、風熱蚊虻に苦められ、
飢渴に惱まさる苦、
勤め勵みて而も富を得る能はざる苦、
富を得て水火王賊の難を恐るゝ苦、
自他骨肉の苦、

爭鬪刀杖の苦、
刑罰の苦、
老病死の苦、

を擧げ、斯くの如き苦が悉く樂欲 (Kāma) を緣とし、樂欲に依ることを明にし、小苦蘊經にはその樂欲に飽滿なきを以て、苦惱と絕望とがその終極なるを敎へ給ふ。又分別聖諦經には、衆生身には生老病死の四苦あり。別に憂悲苦憂惱の苦あり。求不得苦あり。一括して五取蘊は悉く苦なりと敎へ又これに怨憎會苦 (Amanāpasamyoga dukkha) と愛別離苦(Manāpavippayoga dukkha) とを加ふ。これ現實の世相なり。若し又眼を轉じて、生の依つて來る所と、その去る所とを見れば、苦の生は今世一世に非ずして曠劫の昔より流轉し、永劫の未來に亘りてこの苦の生を續けざる可からず。巴利、雜阿含 XVI. 1—10 には閻浮提州、總ての草を細かく切りて、その數よりも無明に蓋はれ渴愛に縛られし衆生の生の數は多く、大地を豆粒程にして、その數よりも輪廻の生は多く。父母兄弟の死に遇ふて流せし淚は、四大海水よりも多く、その一人の呑みし母の乳も、又四大海水よりも多し。一劫に衆生の一人が重ねし白骨が、若し腐敗せずしてあらば、毗富羅 (Vipulla) の山より高く、斯く衆生の生死は無始也と曰へり。斯くの如く吾等は無始生死の苦を續けて、今世また死魔 (Maccu) の襲ふ所となる、「空にありても、海の中にありても又山の洞窟に入りても、世に死魔に勝ち得る所あるなし」死は人生の苦の最大なるもの也。人として死を恐れざるものなし。而もこの死は人生の歸着點にして又生の出發點也。故にもし醉生夢死の徒は別として、苟も人生の實相に開眼し來らば、何人と雖も頭燃を拂ふの急を以て、解脫の道を求めざる可からず。世尊嘗て人間の壽命に就いて、王舍城竹園に說法し給ひし時、惡魔顯はれて歌ふらく。

人の壽命長し。
善き人はそを輕しめず。
乳に飽ける赤子の如く振舞へかし、
死の來ることなければなり。

世尊之に答へて歌ひ給はく。

人の壽命短し。
善き人はそを輕しむ。
頭髮の燃ゆるが如く振舞へかし、
死の來らぬことなければなり。

と、前者は常識の世界にして、後者は人生開眼者の世界也。斯くの如く人生の實相に驚きを立てたる人の前には涅槃の理想境顯はれ來る。この人は其の理想の實現に向ふ求道の第一歩として、進んでその苦の依つて來る所を窮めんとす。

第三章　世相の由來、集諦

人生に開眼して、世相の實際を見たるものは、進んで道を求む。その人の理想は涅槃の實現にして、第一着手は苦惱の原因を求むるにあり。而してこの場合、佛陀成道の徑路は、その人の指針たり、又其の徑路にして、「同一乘」の意義茲に存す。その人は世尊の見給ひしが如く、苦の因がこれを過古に取りて曰へば業 (Kamma) にあり。現世に取りて云へば樂欲にあるを知る。卽ち一括して曰へば自身の心にあり。心が一切の責任者たるを知る。大苦蘊經に示されしが如く、所有ゆる苦は樂欲 (Kāma) を緣とし、樂欲に依り、この樂欲に飽滿なきが故に人生に苦惱と絕望とあり。而してこの樂欲とは吾人の肉體上の五欲を指し、可愛の色聲香味觸を對象として貪となりて發露し、不可愛の色聲香味觸を對象としては瞋として現はる。若し又この樂欲を更に根本的に還元して見れば渴愛 (Tanha) 也。卽ち意欲是れ也。この意欲は自己の存在の永續を欲するものとして、有欲 (Bhavatanha) として顯はれその生存が殊勝ならんことを欲して、殊勝有欲 (Vibhavatanha) として顯はれ、色等の五境に對して樂欲(Kāma) 卽ち欲愛(Kāmatanha) として顯はる。三者は表現の方面に於て異れども、その源は一にして、生きんとする意欲を指して曰ふ也。この意欲は吾人の存在と根を同ふする最も根本的なるものにして、その活動が盲目的なれば、その盲目的の方面よりして之を無明といふ。故に人生の一切の不幸苦惱は、之を欲の方面より曰へば渴愛を根源とし、その渴愛が盲目的にして起るべからざるに起る方面より曰へば、無明を根源とすと云ふべし。更に詳說すれば、吾人には生きんとする盲目的なる意欲ありて、この意欲よりして、計すべからざるに計し、執すべからざるに執し、種々の煩惱を生じ人生の苦惱を惹起する也。之を現在世に取りて曰へば一切諸法無我なるに我を計し、我所なきに我所と計し、無常なるに常と計し、不淨なるに淨と計し、苦なるに樂と計す。この顚倒の妄見は皆生きんとする意欲が盲目にして睿智の指導なきより發露するものにして、これに依て種々の惡德煩惱を生じ、その煩惱に依りて苦惱を受くる也。又之れを因果關係より見れば不淨無常の人生は、他作自受に非ずして、

自作自受也。卽ち前生の業の感受する所にして、その責任は前生の中心主觀が負ふべきもの也。故に今生の苦惱は前生の惡業の結果にして又今生の意欲の生ずる所也。されば何れよりするも、無明を內容とする渴愛が我等の苦惱の根源たるを知るべし。

今此の渴愛が如何に、又如何なる煩惱として顯はれ來るかを見れば、先づ最も根本的なるものは貪瞋癡の三也。貪は可愛の境を貪求し、瞋は不可愛の境を嫌厭する也。共に愛欲(Kāmatanha)が境を異にして顯はれたるもの也。痴は妄昧にして境に迷ひ、決斷なきことにて智慧の指導なき渴愛の一方面なり。この貪瞋痴は不善根 (Akusalamūla)と曰はれ一切不善の根本なり。五逆十惡皆これより起るが故也。この三毒は又種々の對境に應じて異れる惡德煩惱となる。卽ち

五蓋となり。

六又は七隨眠となり、

十煩惱(根本)となり、

五下分結、五上分結の十結となり、

十六心垢等となる。

これ等は皆無明を內容とする渴愛が、對象に應じて顯はるゝ心理作用を、便宜に從つて分類せしものにして互に相交錯す。佛陀のこれを說き給ふや、對機の智眼を開き、その修道に便ならしめんとなし給ひし也。今これ等の惡德を列擧せん。

I　三毒　Ti visā :

1　貪　Rāga

2　瞋　Dosa

3　痴　Moha

II　五蓋(障)　Pañca nīvaraṇā :

1　貪欲　Kāmachanda

2　瞋恚　Vyāhāda

3　惛眠　Thīnamiddha

4　掉悔　Uddhacchakukkuccha

5　疑　Vicikicchā

III　六(七)結　Cha (Satta) Saññojanā

五鈍使 / 七結

- 1 貪 Rāga
  - 欲貪 Kāmarāga
  - 有貪 Bhavarāga
- 2 瞋 Patigha
- 3 慢 Māna *
- 4 無明 Avijja
- 5 見 Diṭṭhi **
- 6 疑 Vicikicchā

(1–4 and 6 = 五鈍使; 1 (欲貪, 有貪)–6 = 七結)

(七結に嫉 Issā, 慳 Macchariya を加へて九結と云ふ)。

*七慢
1 慢 Māna
2 過慢 Atimāna
3 慢過慢 Mānatimāna
4 我慢 Asmimāna
5 增上慢 Abhimāna
6 卑下慢 Ūnamāna
7 邪慢 Micchāmāna

**五利使
1 有身見 Sakkāyadiṭṭhi
2 邊見 Antagāha diṭṭhi
3 邪見 Miccha diṭṭhi
4 見取見 Diṭṭhi parāmāsa
5 戒禁取見 Sīlabbataparāmāsa

IV 十結 Dasa saññojanā

五下分結
1 身見 Sakkāya diṭṭhi
2 疑 Vicikicchā
3 戒取 Sīlābbataparāmāsa
4 欲貪 Kāmarāga
5 瞋 Patigha

五上分結
6 色貪 Rūparāga
7 無色貪 Arūparāga
8 慢 Māna
9 掉擧 Uddhacca
10 無明 Avijja

V　十六心垢　Solasa cittassa Upakilesā　(イ)

1	不法欲	Abhijjavisamalobha	2	瞋	Vyāpāda
3	忿	Kodha	4	恨	Upanāha
5	覆	Makkha	6	自負(惱)	Palāsa
7	嫉	Issā	8	慳	Macchariya
9	諂	Māya	10	誑	Sātheyya
11	剛腹(頑固)	Thambha	12	報復心	Sārambha
13	慢	Māna	15	憍	Mada
16	放逸	Pamāda	14	過慢	(Atimāna)

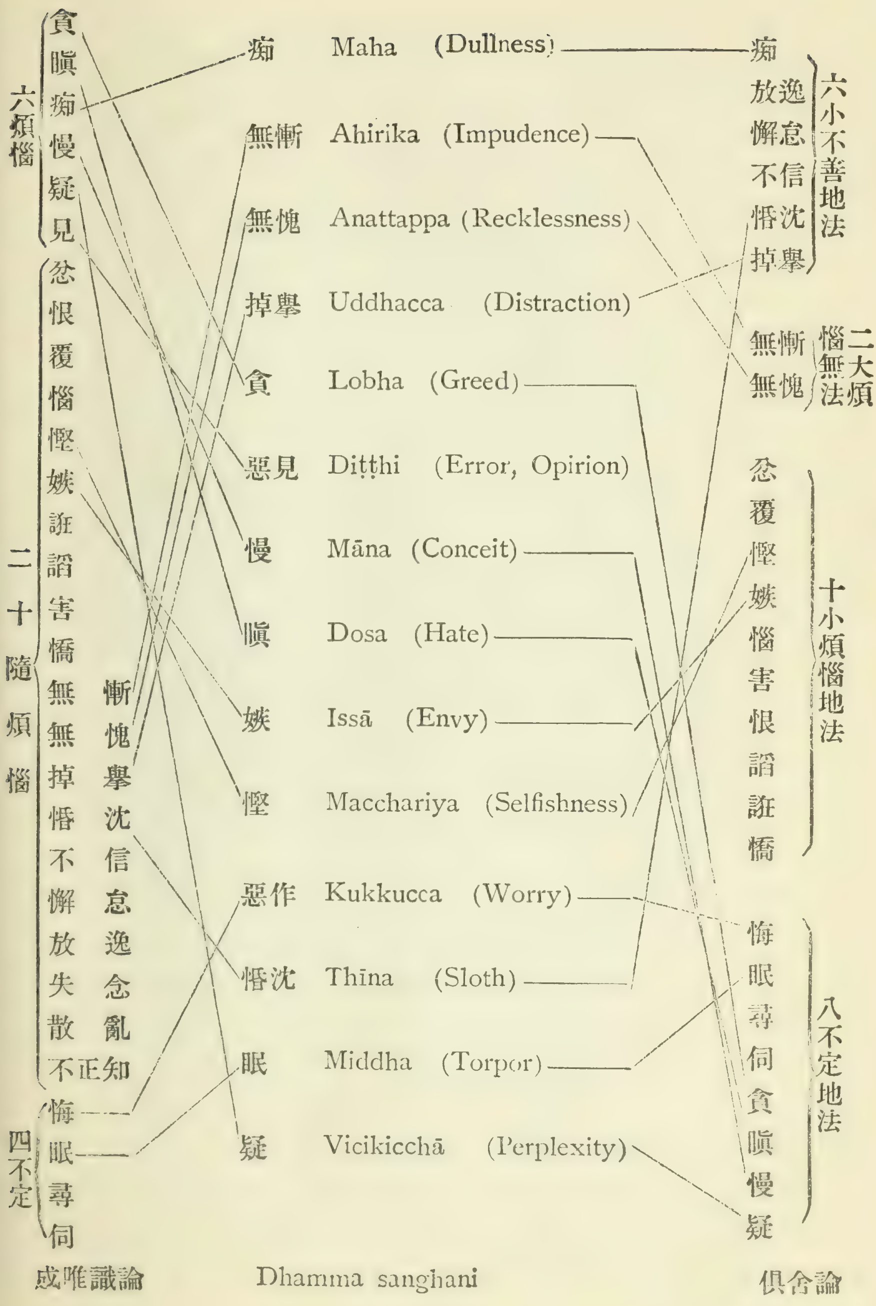
この外

無慚	Ahirika	無愧	Anottappa
害	Vihimsa	不信	Asaddha
懶惰	Alasya	懈怠	Kusita
散亂	Vikkhepa	掉擧	Uddhacca
惡作	Kukkuccha	惛沈	Thīna
催眠	Tandī	睡眠	Middha
僞善	Kohana	失念	Muṭṭhasati
饒舌	Lapana		

(イ)　M. 7 Vatthu fama s. 同本中阿第九三經水淨梵志經に出づ。

等の目あり。

後世斯くの如き煩惱の分類を整理し分類し、これを心所 Cetasika と呼びて一々を實體あるものとせしは、有部宗にしてその大成を見たるは倶舍論なりとす。上座部系の南方佛教又その法聚 Dhamma Sanghani に、心所としての煩惱の名を列ねたり。今對照せは左の如し。


六煩惱
貪
瞋
癡
慢
疑
見
二十隨煩惱
忿
恨
覆
惱
慳
嫉
誑
諂
害
憍
無慚
無愧
掉擧
惛沈
不信
懈怠
放逸
失念
散亂
不正知
四不定
悔
眠
尋
伺
成唯識論
癡 Maha (Dullness)
無慚 Ahirika (Impudence)
無愧 Anattappa (Recklessness)
掉擧 Uddhacca (Distraction)
貪 Lobha (Greed)
惡見 Diṭṭhi (Error, Opirion)
慢 Māna (Conceit)
瞋 Dosa (Hate)
嫉 Issā (Envy)
慳 Macchariya (Selfishness)
惡作 Kukkucca (Worry)
惛沈 Thīna (Sloth)
眠 Middha (Torpor)
疑 Vicikicchā (Perplexity)
Dhamma sanghani
六小不善地法
癡
放逸
懈怠
不信
惛沈
掉擧
二大煩惱地法
無慚
無愧
十小煩惱地法
忿
覆
慳
嫉
惱
害
恨
諂
誑
憍
八不定地法
悔
眠
尋
伺
貪
瞋
慢
疑
倶舎論

この表に依て知らるゝ如く、上座部系の分類は、有部系のそれの如く精密ならず。これ有部が經部よりも論部に重きを置き、宗教としてよりは哲學として發達したるに依り、斯くの如く分析を主として繁鎖に流れ、その結果として三不善根の貪瞋を不定地法に列したるが如き、純理的にして正確なれども、宗教の境地を遠かるものとなれり。

これを要するに、一切の惡德煩惱は貪瞋痴三毒の變化にして、貪瞋痴は無明を內容とする渴愛を本とす。玆に於て苦惱を離脫せんとする行者は、習學と禪定とに依り、智慧を研き渴愛の內容無明を明にせざるべからざると共に、不合理なる意欲そのものを滅せざる可からず。試に佛弟子に就いてその修證の實驗を見るに皆この渴愛を問題とす。Vāsitthī 比丘尼が、「我れは諸の憂の源を知れり」といふは渴愛を指し、Mudita 比丘は「我れ愛の箭を拔かずしては食はじ飮まじ精舍を出でじ脇をつけて臥することもなさじ」と歌ひ、Rāhula は「諸欲に盲へたる輩は、邪網に覆はれ、愛の蓋に覆はれ、放逸の縛に縛せらる、恰も筌の中の魚の如し。我れはこの欲を捨て、魔の縛を解き愛を根本より拔きて、我れは淸凉寂靜となれり」と歌ひ、その他、「愛の網を破れり」と云ひ「愛盡(Tanhakhaya)に達せり」と云ひ、Dhammapada の成道偈及び上座偈 v. 184 には、「屋工よ、汝は今見出さる」と云ふも愛を指して云ふ也。又上座偈 v. 663 には渴愛を生の織工(Sibbani)と呼べり。斯くの如く、屋工又は生の織工を見出し、その屋工又は生の織工を滅盡せる人を阿羅漢と云ふ。

然し乍ら愛盡とは抑も何を意味するか。根本佛教にありては、簡單に渴愛卽ち意欲を滅せよと敎ふれども、意欲は果して云ふが如く滅し得るものなるか。この問題の解答の如何によりて、大乘小乘の別を生じ來れりと見ることもなし得べし。思ふに意欲は、個人主體の內存的力なれば滅し得るものに非ず、又滅すべきものにも非ず。滅し了れば個體の存在もなく、又證悟そのものも、亦意義なきものとなるべし、釋尊はひたすら道行に急なれと勸め給ひしより、あまり深く此の問題に觸れ給はず。佛敎團の比丘、比丘尼又簡單に、愛の箭を拔き愛の網を破り愛盡に達せりと表現せりと雖も、その表現は未だ表現し盡さゞるものなりし也。故に釋尊滅後の敎徒は、無我の敎を文字通りに解す

ると共に、渴愛の滅盡も文字通りに主張し、その結果敎理としては、灰身滅智の空無なる涅槃を生み出し、宗敎生活としては、固定したる消極的沒情主義となるに至れり。然れ共これは根本佛敎の表現し足らざりしを、表現するを要せざりしが故に表現せざりしを、敎理として固定せしめたるものにして、釋尊及び佛弟子の眞意に非ず。從て後世大乘敎に入りて佛身の考察と相並んで、無我論は一轉して佛性論となり、渴愛の絕滅は渴愛の淨化となり、嘗て個體の存在を希求せし意欲は、度衆生の大菩提心として復活し來れる也。

更に吾人は十二因緣に立ち戾りて今一應渴愛と無明との關係を調べ、進んで根本佛敎の主觀主義を見、大乘敎との關係を尋ねんとす。

十二緣起は吾人眼前の事象が如何樣に斯くの如く開展し來れるかを研究せる結果也。

老死 (Jarāmaraṇa) 今吾人の眼前にありて最も强く吾人を脅かすものは老死也。茲に老死を擧げたるは、その最も强きものを擧げて、病(Vyādhi)、愁(Soka)、悲(Parideva)、苦(Dukkha)、憂(Domanassa)、惱(Upāyāsa)等を含蓄せしめしものなり。

生 (Jāti)　而してこの老死等の苦惱あるは、云ふ迄もなく吾人の生あるが故也。事物は瞬間も同一の狀態にあるべきものに非れば生は既に老死を含んで老死の始也。

有 (Bhava)　今この生に幾何の種類あるかを驗すれば、欲界の生(欲有)、色界の生(色有)、無色界の生(無色有)あり。故に今この生を存在と云ふ概念に入れて有といふ。

取 (Upādāna)　然らば、その存在の因は何ぞや、曰く取着也。取着の心より作業をなし、作業生存を生じ來る。

愛 (Tanha)　取着するは、そのものを貪求卽ち愛するより來る。今茲に愛と曰ふは根本の渴愛に非ずして意欲が欲愛(Kāmatanha)として顯はれたるを曰ふ。巴利中阿含正見經には「愛とは六境に對する愛なり」と曰へるはその經證なり。

受 (Vedana)　斯くの如く對境を貪求するは知覺(受)に依りて、その對境の如何なるものなるかを認知するに依る。

觸 (Phassa)　知覺は感覺より起る。

六處 (Salāyatana)　感覺は眼耳鼻舌身意の心理的機能あるに依る。

名色 (Nāmarūpa)　その心理的機能は吾人の心身を構成する五蘊あるに依る。名は受、想、思、觸、作意の精神作用を云ふ。色は四大と四大を以て構成したる色をいふ。名色は卽ち五蘊也。

識 (Viññāna)　五蘊は自覺意識に依て統一せられ、自覺意識に統一せらるゝが故に五蘊和合の身を成ず。この統一作用ある自覺意識を識といふ。

行 (Sankhāra)　自覺意識は中心に我といふ意志あるに依る。行といふはその我意識なり。

無明 (Avijja)　我といふ中心意志には盲目的に生きんとする意欲ありて、その中軸となる。今その意欲の盲目的方面を顯はして無明といひ、これを染緣起の原初となす。されば玆に無明といふ中には、その生きんとする意欲としての愛、卽ち有愛(Bhavatanha)を含む。

十二因緣に就いては古今その說明法多し、或はこれを三世兩重の因果と解し、又は胎生學的說明を加ふ。もとよりこれらの說明の不可能なるには非ざれども吾人は玆に心理的說明を取るを最も妥當なりと信ず。而してこの十二緣起の說明に於て最も困難を感ずるは、愛と行と無明との關係也。今玆にては受に依つて起る愛を欲愛(Kāmatanha)と解釋し、根本的意欲を無明に攝したるものと見て說明したれども行に至つては最も說明の困難を感ず。抑も行は Sankhāra 卽ち集成 (aggregation) の義にして集成したるもの卽ち物體を指す。諸行無常 (Anicca vata Sankhāra) といふ「行」これ也。次に身語意の三行といふ時は、業(Karma)の意味を有すれども、尙精確に云へば斯くの如き善惡の身語意業を作る心狀態卽ち意志を指すものと見るを妥當とすべし。福行、非福行、不動行、(Puññasankhara' Apuññasankhāra, Aneñjasankhāra)といふ時も亦これに同じ。次に五蘊卽ち色受想行識の行は俱舍論に依れば受想の二心所を除きたる他の心所を指すものとなされたれども、巴利雜阿含 XXII. 56,57 に依れば、六思身、卽ち思なりとせり。思とは思慮決定にして吾人の中心主觀の動作を云ふ。然らばこの思を何が故に行といふかといふに、行は先に說くが如く、集成の義なれば吾人

の意識活動を集成し統一する力として意志卽ち思を斯く名けし也。故に吾人は今行を上に出せし意義を有するものと解して、意識活動を集成統一する力たる意志と解釋せり。

この十二緣起を他の形にて顯はせしは、巴利雜阿含 XII 66. 漢譯雜阿含十二卷九經にして、老死は依身(Upadhi)卽ち有あるに依り、依身は渴愛あるに依り、渴愛は可愛の六境に向つて發露するが故に、今可愛の六境を無常苦無我病畏と見れば、渴愛止み依身を受くるなく、從つて老死等の苦なしと說けり。對境を無常等と見るとは、睿智を以て、渴愛の內容を變じ、淨化する事に外ならず。

されば斯の如く十二緣起を心理學的に見來れば一切現象の根原は盲目的なる意志活動也。この思想を最も簡單に現はすは、法句 (Dhammapada) の第一偈第二偈也。

諸法は心に導かれ心に統べられ心に作らる、
若し汚れたる心を以て言ひ且つ行ひなば
苦の彼に隨ふこと車輪の挽く人の跡に隨ふが如し。(v. i)
諸法は心に導かれ心に統べられ、心に作らる、
若し淨き心にて言ひ且つ行ひなば、
樂の彼に從ふこと影の形を離れざるが如し。(v. ii)

又巴利雜阿含に曰く、

世間は心に依て導かれ、心に依つて惱まされ心の領域に行く。(S IV. 186)

比丘等よこの人間は心の所作也。(A. X 208)

諸法は心を本とし、心に作らる、一切諸法は心所變也。故に心不淨なれば對境も不淨、心淨なれば對境も淨なり。此に於て問題は外境を如何にせんに非ずして心を轉換するにあり。「自淨其意是諸佛敎」といふもの、蓋し佛敎を最も簡明に顯はすものにして、後世この思想を受けて、無着、世親の多元的唯心論となり。起信論の一元的唯心論となり、華嚴經の、三界唯一心、心外無別法となり心淨國土淨、或は一人成佛草木國土悉皆成佛等の大乘敎の所談を見るに至れる也。要は人間の苦惱が心に源を有し心より起るが故に、宗敎としての問題はこの心を如何すべきやにあるを示すものなり。

以上吾人は人間の苦惱は、無明を內容とする渴愛の所作にして、此の渴愛より一切の惡德煩惱の生ずるを見たり。而して吾人の修道はその煩惱(渴愛を含みて)を斷ずるにあるを知れり。然しその煩惱を斷ずるとは如何なる意味なりや。この問題は、佛陀の高唱せられし無我論及佛陀所證の涅槃に關する考察の如何に依つてその解決を異にし、佛滅後の所謂小乘敎徒は字義通りに、解釋して、煩惱を斷じて灰身滅智の涅槃を得と解し、龍樹を始祖とする大乘敎は渴愛を淨化して涅槃を得ること卽ち不斷煩惱得涅槃と解せり。吾人は釋尊の敎理の當然の歸結が大乘的解決に入るべきを暗示せしがこの問題は次節に入りて更に論ずる所あるべし。

第四章　理想境、滅諦

佛敎徒の終極の理想は、云ふ迄もなく涅槃(Nibbāna)の實現也。この涅槃といふは煩惱(Kilesa)の滅盡せる側より顯はし、婆伽梵歌の梵涅槃(Brahma nirvāna)に當る。煩惱を滅盡せるものが、外界の繫縛より離脫する方面より之を解脫(Vimokkha)と云ひ、優波尼沙士も之を解脫と云ふ。又この境地に入れる人が淸澄の主觀と透徹せる睿智を有するよりして、これを菩提(Bodhi)卽ち覺と云ふ。優波尼沙士の梵智我智(Brahma-vidya, ātma-vidya)に當る。されば涅槃の內容を要約して曰へば、煩惱を滅盡し終り、一切外界の繫縛より離脫し、透徹せる睿智の生せし境地なりといふを得べし。然らばこの境地を如何にして實現すべきかと曰へば、曰く、貪瞋痴の三毒を滅する也。舍利弗は一異學の問に對して、「涅槃とは貪の滅、瞋の滅、痴の滅なり」と敎ゆ。更に根本に進んで曰へば渴愛の滅也。渴愛の滅(Tanhāyavippahānaṁ)とは前節に云ふが如く、我他彼此の差別の見に囚はるゝ迷妄裡に、個別的に生きんとする意欲を淨化して、我と我所とを離れて任運自爾の生活に入ること也。釋尊之を先づ體得し佛弟子亦之を身證せり。この境地は說くべきの境地に非ずして、身證すべき境地なるが故に、經典中この涅槃に就いて積極的に分明に說かれたる個所なし。巴利雜阿含(S. XL III 12—44)には涅槃の異名として、

無爲	Asankhata.	終邊	Anta.
無漏	Anāsava.	眞	Sacca.
彼岸	Pāram.	微妙	Nipunam.
難見	Sududdasam.	無老衰	Ajajjara.
堅固	Dhuva.	不見	Apalokitam.
無顯示	Anidassanam.	無停滯	Nippapañca.
寂靜	Santam.	不死	Amatam.
甘美	Panitām.	吉祥	Sivam.
安隱	Khema.	愛盡	Tanhakhaya.
希有	Acchariya.	無有	Abbhūta.
無禍	Anītika.	無禍法	Anītikadhamma.

無病　Avyāpajja.
離貪　Virāgo.
清淨　Suddhi.
解脫　Mutti.
無住屋(無欲)　Anālaya.
島　Dīpa.
避難所　Lena.
渡し場　Tānam.
歸依所　Saranam.
終極所　Parāyana.

を擧げ、Udāna 73. には、

無生　Ajatam.
無有　Abhūtam.
無爲　Akatam.
無作　Asankhatam.

の名を擧く、猶錫蘭所傳の巴利語彙 (Abhidhānapadīpikā) には、

無色　Arūpam.
無邊　Anantam.
不滅　Akkharam.
無輪廻　Vivāttam.
完　Kevalam.
離群　Apavagga.
無死　Accutam.
足　Padam.
瑜伽安隱　Yogakkhemā.
無作界　Asankhatadhātu.
消滅　Nibbutiyā.

を加ふ。吾人はこれらの異名列擧に依りて、多少その境地を髣髴するを得と雖も、進んでその內容を知らんとせば、佛陀成道後の生活及び諸阿羅漢の生活を知らざるべからず。而して此の佛陀及諸阿羅漢の具體的生活を知らん事は頗る難事なれども吾人は之れを要約して左の如く云ふを得べしと信ず。

I. 禪定に住して心清淨、
II. 生死に住して生死に驚かず、
III. 彼我の見なく一切衆生を包容す。

I. 定は涅槃に至るべき睿智を得る方便なると共に、又應果の人の樂也。佛陀は七日七夜禪定に入りて他を忘れて定生の樂を得と語り、伊車那伽羅村 (Icchānangala) にて、三月衆を退けて出入息の禪定に入り、阿兜摩村(Atuma)にて大雷雨の中に、禪定に入りて何事も知らずと宣ふ。佛陀及諸阿羅漢は所謂「靜かなる心の所有者」にして、行住坐臥常に禪定を離れず、心を一點に集中し(Ekaggata)、寂靜にして五根を守ると雖も．又特に日中後に禪定に入り給ふを常とす。舍利弗佛陀に來りしにその顏色特に悅豫也。佛陀何故に然るやと問ひ給ふに空定

に入れるが爲めにと答ふ。佛弟子は偶々病に犯さるゝ事あるも定力に依つてその痛苦に堪えて之を醫し、飢渴に遇ふも定力に依て之を忘る。其の定を分類していへば、四禪也。初禪は有尋有伺の靜慮にして遠離より生ずる喜樂を味ひ、第二禪に進みてその尋伺を靜め、定より生ずる喜樂を得、三禪に入りて如上の荒き喜悅を捨て正心正念に安樂に住し、四禪に進みて、不苦不樂の捨念清淨に住す。この境地に至れば心は何等の外物に囚はるゝ事なく、それ自らにて充足し、「靜寂清淨透明にして欲を離れ、汚を捨て從順にて何時にても働く用意あり。何物にも煩はさるゝ事なし。彼の身體は清淨と透明の感に滿たされて住す、猶全身白淨の衣に包まるゝが如し」猶比丘は進んで空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非々想處を經て想受滅定 (Saññā vedayita nirodha) に進む。佛陀はその入滅に先つて、この九定に出入して後、涅槃に入り給ひ、舍利弗は定の入住出に巧みにして、瞬時も心を支配して心の支配を受けずといふ。凡位の比丘はその修道として禪定を修すれども、果上の人は果位の樂として定に住し自在に心清淨を得る也。

II. 生死に住して生死に驚かず。生死は人生にありては必然のことなり。この必然が人間にとりて苦惱となるはその心のこの必然に對する態度に依る。吾等は既に問題は外境に非ずして、心の依着にあることを知れり。「依着ありて動亂あり、依着なければ動亂なし。動亂なければ寂靜、寂靜なれば樂なし。樂なければ來往なし。來往なければ死生なし。死生なければ此の世彼の世なし。是れ苦の終邊なり」。この依着なき人は心平かなる故に、世の實相を諦觀し、苦空無常無我の理に通じ、從て生死に處して生死に驚かず、苦難に遇うて苦難に破られず任運自爾の生活をなす。巴利本事經 (Iti-vuttaka 44 に、所謂その「五根亂されず、可愛非愛を受け、苦樂を感じてしかも貪瞋痴の滅したる境」といふはこの境にして、巴利雜阿含 XII. 55. に曰く、「斯くの如き人は苦生ずれば生じたりと見、苦滅すれば滅したりと見て、これに拘泥せず、之に疑惑せず、他に依賴せずして自ら知る、之を正見の人と曰ふ」と。同じく巴利雜阿含 XXII. 55. に曰く、「多聞の人聖弟子は聖法を知り聖法に通じて色等五蘊を我と見ず、又その無常を知り斯くしてその驚くに足らざるに驚かず、我あらざるに非ずや我將來あら

ざるに非ずやと驚かず」と。巴利雜阿含 XXXVI. 6. に曰く、「願はしき事にも心を動かさず、厭ふべきことにも激せず、此等に順はず又逆はず、之を破らず又滅せず、汚れなく憂なき道を知りて、自ら彼岸に至りしを知了す」と。身體ある限り寒暑蚊虻飢渇病老の苦を免がるゝを得ずと雖も、果上の人はこれらの苦に逆はず、又五欲の樂を逐はず、從つて身苦を感ずるも心苦を解脱する也。佛陀は Baggha の Nakula-pitā が老いて多病なるに對し、身は病むとも心は病むなと敎へ給ひ、舍利弗之を布演して「五蘊を我々所と見ればその變化によりて心惱む、これ心の病。五蘊を我々所と見ざれば、その變化に遇ふも心惱まず、これ心の無病」。と曰ひしはこの消息を語るもの也。

この境地に遊ぶ比丘には、過古は逐ふべきものに非ず、未來は希ふべきものに非ず。たゞ現在に滿足して法の諦觀を事とす。

過古を逐はざれ、　　　　未來を待たざれ。
過古は過ぎ去り　　　　　未來は達せらるゝことなし。
たゞひたすらに　　　　　現在の法を止觀すべし。
打ち勝(かた)れず打ち動かされず。　そを(如實に)知りて增長せよ。
今日熱心になすべきをなせ、　誰か明日死するを知らんや。
かくて死魔の大軍の　　　禍なかる可ければなり。
かく熱心に撓まず　　　　日夜に住するを
『善き一夜』と　　　　　善き牟尼等は說き給へり。

かく過古未來に心を勞せず現在安住を事とするが故に心勞なし。先に引用せるが如く、一天使釋尊に「森に住する靜寂の苦行者は只一食を食するのみにて如何にその顏色の悅豫なるや」と問ふ。佛陀、「過古に悲まず、未來に焦燥せず只現在の事のみにて身心を支持するが故に然り」と答へ給ふ。かく現在に安住して、彼等は法を重んじ、師を重んじ、僧伽を重んじ、敬虔の生活をなすと雖も、未來は旣にその問題に非ざる故に、惡業も功德もその要なし。法句 (Dhammapada) v. 412 に曰く (Dhp. A II. p. 200)

此處に福業も罪業も
共に(脫れて)著を伏し
憂なく汚なく淸淨なるもの

この人を婆羅門といふ。

と。宗敎の第一義の世界には、善惡、禍福、功德無功德の差別なし。寒來れば寒殺し、熱來れば熱殺し、生死に處して生死に逆はず、任運法爾の生活をなす。之を果位の人の生活とす。

III. 然れども此人の生活は、冷酷なる沒情の生活に非ずして、悲心十方を蓋ふ情熱の生活也。これ吾人が既に、煩惱を滅するといふは字義通りの斷滅に非ずして其淨化なりと曰ひし所以也。感情を殺せし枯木寒巖の冷かなる生活に非ずして豐淳なる情熱の淸く迸出する生活也。

この事は佛陀が比丘を傳道に遣はし給ふ時、又は經法を附囑し給ふ時、「衆生の慈みのため、衆生の安樂のため、世界の愛憐のため、人天の幸福の爲め」と宣ふにても知られ、又佛弟子が身命を捨てゝ佛陀に歸投するもの、その智慧の偉大なるを感激する點もあれども、殊に其師主としての慈悲同情に打たれし爲なるにても知らるべし。「如來佛陀の一切有情の愛憐 (Buddhassa Tathagatassa Sabbabhūtānukampi) といひ、「彼れ有眼者は慈悲を垂れて我が爲めに法を說きぬ」といふもの、これにして自ら道を悟りし以上、一切衆生又皆この一乘道に依りて證悟し得べしとの信知より、一代四十五年の說法あり、故にその說法は慈悲の活動にして、この慈悲は「憂を斷ちし人の憂に沈める世間を憐れむ慈悲」なれども、その憂に沈む人々が憂を脫し得べきを信じて卽ち他の個性を尊信しての愛也。敬を伴ふ愛也。この愛はやがて大乘に入りて普賢の德 (Samantabhadıasya guṇa) と象徵され、佛心者大慈悲是也と曰はるゝに至れり。佛陀が病比丘を訪ふてその汚を洗ひ遣り給ひしもこの慈心よりし、從來の積弊を破り、祭祀主義を捨て敎權主義を破り、四姓平等を說いて一切衆生を、普く宗敎に入らしめしもその情熱の然らしむる所なりしなり。進んで疫病流行の地に入り給ひしも、鴦屈摩を敎化されしも、狂象 Dhanapāla を馴致されしも皆この慈悲也、佛陀は提婆達多、鴦屈摩、Dhanapāla を見ること羅睺羅と同じければ、これを一子地 (Ekaputta bhūmi) の愛といふ。斯くの如きは獨り佛陀のみに非ずして一切の佛弟子皆然也。佛敎徒が四攝事 (Catu sangraha) を修するはこの佛心よりし、布施をなし、愛語を以て他に接し、他に對して利益ある行爲をなし、他と事を同じふす。

Sutta-nipāta 8 Metta Sutta(慈經)に曰く、

母がその身危機に臨みても、尙その一人の子を護るが如く、總ての有情に對して度なき迄に慈悲の情を養へよ。全世界に向つて、上にも下にも周圍にも、相異なれりてふ反對の情に依つて、汚されず交はらしめざる慈悲の情を養はしめよ。行住坐臥正念を持たしめよ。この心は世界に於ける最善の心なり。

故に比丘 Sopaka は歌ふて曰く、

母のいとしき一人子に善きが如く、

何處にありても、總ての有情に善かれかし

と。舍利弗の弟、離波多迦提羅婆尼耶 (Revatakhadiravaniya) は歌ふて曰く。

佛陀の示し給ひしが如く、次第に積み重ねし無量の慈心の、善く修練せられたるを(我れに)認む。總てのものを友とし同胞とし、

總てのものを愛憐れみ、

常に瞋恚の心なきを樂しみ、慈悲の心を修む。

と。而して此の愛を擴大して一切衆生二足四足多足にも及ぼすべきは、佛徒の勤めにして彼等はこれが爲めに、四無量心を修す。四無量心とは慈 (Metta) 悲 (Karuna) 喜 (Mudita) 捨 (Upekha) の四にして、慈具足の心を以て一方を滿して住し、二方三方四方一切世界を、怨みなく憤りなき廣大無量の慈具足の心を以て滿して住す。悲心を以て同樣に一切世界を滿して住す。慈悲內に滿れば外對敵なし。毒蛇すらも悲心內に滿つるものを害せずといふは、佛徒の信仰にして、又その經驗也。斯く慈悲內に燃ゆ。茲に於てその心無限に擴がり廣く大にして、喜悅心に滿つ、此の喜悅を以て更に一切世界を滿たす。而も此の佛陀の慈悲心は智慧を母として生れたるものなるが故に、小さき彼我の見に囚はれず、捨心無取着にして一切世界を滿す。一言にして言へば佛徒の理想は小さき彼我の見を脫し、一切衆生を包容して、心豐かに道行に進むにあり。

以上の說く所を以て、佛陀及び佛徒の涅槃の境地は、心寂靜にして動亂せず、生死苦難に遇うて之に逆はず、一切の衆生を抱いて苦樂を共にするにあるを知るべし。約して曰へば人間性の完全なる發達の境

地にして、大乘の菩薩精神はこれを表はせるものに外ならず。

既に斯くの如く見來れば、吾人が前章の終りに述べるが如く、渇愛を根本とする煩惱を斷じて入證する涅槃の境地とは、後世貶しめ賤しめられし所謂聲聞の自利的枯木寒巖的沒情的生活に非ずして、溫乎として一切の衆生を抱き、衆生苦惱我苦惱、衆生安樂我安樂の生活たり、又同時に純乎として、生死海中にありて、煩惱の泥に染まぬ淸淨の生活たるを知るを得べし。煩惱を斷ずるとは、煩惱の淨化を意味し、不斷煩惱得涅槃とは、もと〻〻無體の煩惱が、睿智の指導を受けて、愛のこゝろと靈化したるを云ふに外ならず。

扨て斯くの如き涅槃は、現生に於て到達すべき境地にして、既に釋尊及び諸比丘に依りて實現せられたる理想也。然し乍ら茲に斯くの如き聖者の死後は如何にとの問題起る。この死後の問題は佛陀の論議をするを欲し給はざりし事なるは既に說けり。然し聖者の死後が涅槃の連續なるは云ふ迄もなければ、茲に生前と死後の涅槃について、區別を立て、二種の涅槃を說くに至れり。一は有餘依涅槃(P. Sa-upadisesa nibbāna S. Sopad iśesa nirvāna) 二は無餘依涅槃 (P. Anupadisesa nibbāna S. Nirupadisésanirvāna) なり。一は依身ある涅槃、他は依身なき涅槃の義也。有餘依涅槃の事は現生に達し得る主觀的境地なれば比較的知り易きも、無餘依涅槃は佛陀が積極的に說示せられざりしため、的確にその相狀を知り難し。この說示なきは死後の問題が宗敎としては現在の問題に含蓄せられある爲にして偶々說示あるも、その消極的なるは、一方優波尼沙土の表現法を襲用し他方その內容が意路不到の境なれば、その超絕的方面を顯はして、消極的說示を用ひたるなり。先に引用せしが如く「燃ゆる火の次第に消えて、其行衞の知られざるが如く、不動の安樂に達せし人の行衞は知られず」といひ、「生老病死なく步行にて到るを得ず、知ること見ること達すること能はざる世界の終邊」と云ひ、

水も地も炎も風も停止せず、星も輝かず、日も輝さず、月も光なく、闇もなき所、聖者婆羅門は聖智に依つて、自らこの境地を知り、色無色苦樂を超ゆ。(Udāna 10)

と云ひ、又、

地水火風なく空處なく識所なく無所有處なく非想非々想處なく、この世にも非ず彼の世にも非ず、日も月もなく、來とも往とも住とも消とも云ふ可からず。不住不轉無環境也。(Udāna 71)

と云ふ。

斯くの如く强いて說示せんとすれば、否定的說示を要する境なれども、又無に非ず、その故は否定に非ずして否定に依つて顯はさるゝ境なれば也。涅槃、その語は實にかくの如き意義也とす。故に佛陀は「比丘等よ、不生不有不爲不作あり。比丘等よ、若し不生不有不爲不作なければ、生有爲作の出離はあらざるべし（字義通りに譯すれば知られざるべし）不生不有不爲不作あるが故に生有爲作の出離は知らる」と生有爲作を離れたる實在境なるを示し給へり。而してこの境地が主客兩觀分離相對の疎境に非ざるを示して、

不可見にして無邊に働く識、一切の方面に滅すれば、そこには水も地も火も風も固定せず、長も短も細も塵も淨不淨も、色も名も餘りなく滅す、識滅すれば此等は皆滅す。

と識滅を出せり。故に若しこの消極的說示を文字通りに取りて、その否定の力を見ざれば俱舍論等の小乘敎徒の如く、阿羅漢と曰へば枯木の如き人格を思はせ、無餘涅槃と云へは灰身滅智の空無なりとする說明を取るに至る。而して佛滅後、佛陀の敎說を固定化し、從つて沈滯せる比丘等は只傳統の文字に囚はれて、その包含せる意義生命を見る事を得ず、觀察は漸次に唯物論的傾向となり、佛說の形骸を抱いて僧苑の中に退化沈淪するに至れり。この傾向にあきたらずして、革命の烽火を擧げ保守派を小乘聲聞の徒と一括して葬り去り、囚はれたる文字學を脫して根本佛敎の眞意を開闡せるは大乘敎徒にして、これに二流あり、一は龍樹を中心とする空系にして、甞て涅槃を顯はすに用ひられたる消極的說明の「不」の一字に依つて、主客合融の境地、眞實實在を開顯し、生死に卽したる涅槃を見たり。中觀論涅槃品には(署一、五四左)

涅槃與ㇾ世間　　　無ㇾ有少分別
世間與ㇾ涅槃　　　亦無少分別
涅槃之實際　　　及ㇾ與世間際

如是二際者　　無毫釐差別

と云へり。他の一は大乘涅槃經の代表する有系大乘教にして、甞て四顛倒として排せられたる常樂我淨を反對に涅槃の四相として復活せしめ、涅槃の積極的意義を積極的に顯示せり。大般涅槃經二五（盈六、二三左）に曰く、

云何涅槃非大涅槃、不見佛性而斷煩惱是名涅槃、非大涅槃、以不見佛性故、無常無我惟有樂淨無、以是義故、雖斷煩惱、不得名爲大般涅槃也。若見佛性、能斷煩惱、是則名爲大涅槃也。以見佛性故。得名爲常樂我淨、以是義故、斷除煩惱亦得稱爲大般涅槃。

と。世親の唯識論に於ては「灰身滅智」の語を「轉識得智」と變へ、四智開顯の積極的涅槃界を示せり。

斯くの如く大乘に入りては、無餘依涅槃とは絕對的實在界たるを示したりと雖も、猶その通過し來りたる小乘教の涅槃の消極的方面をも傳へ來れるが故に、涅槃を死の意味に解して、無住處涅槃 (S. Apratiṣṭhita-nirvāna. P. Apatiṭṭhita nibbāna) の語を生じ、法華經壽量品 XV. vv. 1-3, 23 には「かくて涅槃に入るを示し、衆生の調御のために方便を語り、而も亦入滅せずして常に此の世にて法を說く」と述べ、大般涅槃經三六（盈六、七十三右）には「如來常住無有變易、常樂我淨終不畢竟入於涅槃」とあり、その他「智慧有る故に生死に住せず、慈悲あるが故に涅槃に入らず」等と曰へり。これ皆涅槃を消滅卽ち死と見ての經說也。されば涅槃の眞義は、絕對的實在界にして、入涅槃とはその絕對的實在界に入りて、思ふが如く如來の化をなす眞活動の舞臺に入る事に外ならず。

尙彌蘭陀經 (Milinda panha) 卷四には涅槃は比喩說明推理論證に依つてその色、相、壽、量、を知るべからず、只その性質に關しては蓮華の一性質と水の二性質と藥の三性質と大洋の四性質と食物の五性質と虛空の十性質と如意寶珠の三性質と亦旃檀の二性質と醍醐の泡の三性質と山の頂上の五性質とを以つて顯はし得るとせしも今多く茲に曰ふの要なし。提婆菩薩はその楞伽經中外道小乘涅槃論(暑五、58 a)に外道小乘の二十種の涅槃を出しその誤謬なるを斷ぜり。その中「諸の受陰盡きて燈火の滅するが如く種壞し風止むを涅槃と名くるは第一小

乘外道論師なり」と云へり。蓋し佛滅後の小乘教徒の涅槃の消極的解釋の誤謬を指摘するものなるべし。

吾人は以上の所說に依りて、不充分なれとも、龍樹等の空系の教學が根本佛教の何れに根ざし、華嚴經法華經等の大乘教學が、釋尊の敎說の正當なる解釋として生れたるものなるを指摘し得たりと信ず。

第五章　修道生活、道諦

佛敎徒の理想は涅槃の實現なることは、前節に述べしが如し。然れども この涅槃は未だ全く世に齎らされざる理想に非ずして、既に師主佛陀によつて身證體達せられたる理想なり。佛陀の生活は涅槃界の生活にして、その一擧手一投足は悉く佛徒の範として則るべき生活也。佛徒は涅槃の實現を望みながら、眼前にその涅槃の體現者の生活を見る。故にその涅槃は遠き將來にほのみゆる陽炎の如き理想に非ずして眼前火の如く燃ゆる現實の具體的生活なり。されば佛徒が涅槃の實現を望んで、修道生活をなす力は、佛陀の菩提及びその生活に對する信に湧き、この佛陀を師主と仰ぐ信仰より彼等の生活の一切の規範を生じ來れる也。この意味に於いて、龍樹の所謂「佛法の大海には信を以つて能入とする」といふは至言にして、信は道元功徳の母たり。「信に依つて出家する」とは佛弟子の修道生活の踏み出しを最も明快に顯はす語也。佛に對する信は同時に、佛の敎法に對する信なるは云ふ迄もなければ、佛徒は佛陀を信じ涅槃を望みて佛の敎法の如く修行す。故に證果を得るとは他の語を以て曰へば佛の敎を成じ遂ぐる也。この故に阿羅漢の告白は常に「見よ、法の善き性質を、我れ三明に達し佛の敎を成就せり」とあり。

斯くの如く佛陀に對する信がその修道の出發となり、佛陀の敎法がその修道の指導となり、佛陀の生活がその修道の光明となるが故に、佛徒の感激の方面よりすれば、その證果は悉くこれ佛陀の賜物なり。故に比丘セーナカ (Senaka) は「永く塵垢に汚され、邪見の繩に縛られたる我れセーナカを、彼の世尊はあらゆる纒縛より脫せしめ給ひぬ」と喜び、大目犍連は、

> 我れ八定及び無想定に入るに、常に退墮せんとせしが、その都度世尊は我が前に顯はれて怠る勿れと勵まし誤りなきを得しめ給へり。
> 我れは實に師に引きづられて悟りに達せる弟子なり。

と感謝せり。

斯くの如く信は修道の第一步にして、又その修道の力の源泉たること明白なれども、原始佛敎の眞義は信に依つて救濟さるゝの宗敎に非

ずして、自らを燈明とし自らを歸依として、不放逸に自修自行するの宗教なり。「自燈明自歸依」は佛陀がその入滅に先つて懇ろに訓諭せられし所にして、他に依憑せずして自らの證果は自ら開くべきを旨とす。佛陀は「我れは如來が僧伽を率ゆるとは思はず、僧伽も亦如來に依賴するとは思はず」と宣ひ修道得證の全責任は之を佛徒自身に負はしめ給へり。されば比丘 Sankicca は「他の守るべきものもなく、又他に守らるゝこともなき比丘は、樂慾に思ひなく安樂を受くるなり」(上座偈 v. 600) と歌へり。これ佛陀にとりては、自己の道は萬人の道にして自己の得しものは萬人の得るべきものなり。自他平等にして一向に階位の差別を見給はざりしに依る、故に佛陀は、

我は內もなく外もなく法を宣說したり。法に關しては如來には、ものを後に隱すが如き師匠の所謂「閉ぢたる拳」なるものなし。

と宣へり、如來の道には一向に秘密なくして師弟同じく同一の乘に乘じて證悟を得べければなり。故に得證と否とは一に佛徒の精勤に修道するや否やにあり。されば佛徒の得證は之を攝して信行の二に依るとするを得べき也。

此の信行の二者は佛教修道上の二大要項にして、聖淨二門の區別も、この二者に對する態度より來る。吾人は此の點に關しては次章に少しく論及せんとするも今は直に根本佛教の行が如何なるものなりしやを驗せんとす。

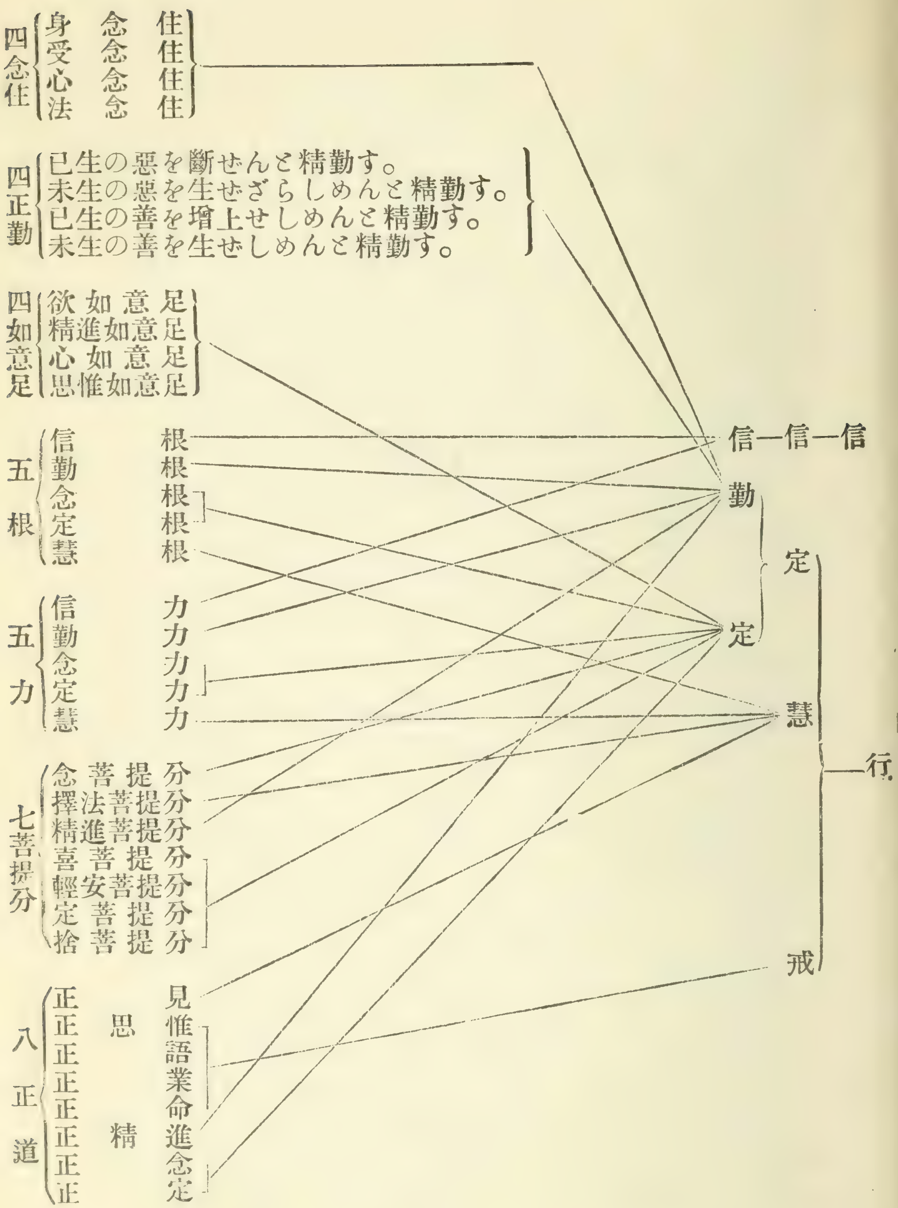
行は之を戒定慧の三に分つを普通とし、此の三者相俟つて涅槃に趣向せしむるが故に之を道(Magga)といふ。この道は佛陀がその轉法輪經に示し給ひしが如く、五欲の快樂に耽る樂欲に偏せず、又徒らに自らを苦しむる苦行に走らず、二邊を離れたる中道也。佛徒の智見が有無の邊見を離れたる中道の見たるが如く、その行も亦苦樂を離れたる中道なり。この中道は實に佛教の眞面目にして、當時の懷疑時代の極端に走れる快樂が聖道に遠きを示すと共に、又不具なる苦行宗教の無意味なるを喝破して、眞に合理的に靈性の開發を主としたるもの也。後世龍樹の八不中道、唯識宗の唯識中道、天台宗の空假中の三諦の如き皆茲にその源を有する也。當時苦行派より佛教の傘の下に來れる比丘 Anganika Bharadvāja が「我れ安樂に依りてこの安樂を得ぬ」とい

ひしは佛陀の中道實行が、苦行派の苦行に比して、極めて安樂なるを示すもの也。

而して此の中道は最初の轉法輪經には八正道として示され、佛陀入涅槃の前には三十七道品として示されたり。宣はく、

比丘等よ、これまで汝等に語れる我が證得の法をば汝等は皆執持し實行し默想し廣く弘めざる可からず。この法とは三十七道品なり。

と。三十七道品とは四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分、八聖道これ也。初轉法輪に於ては八聖道のみを出し、その入滅の夕には四念處以下二十九支を加ふ。この二十九支は佛陀が隨宜に分類しその分類に依つて、自らも實行し、又他をも實行せしめんため、說き給ひしものにして、實を尅すれば八聖道に收まるべきもの也。然れば道は約すれば八聖道開けば三十七道品となり。更に戒定慧の三に攝し得べきものなり。


四念住
身念住
受念住
心念住
法念住
四正勤
已生の惡を斷ぜんと精勤す。
未生の惡を生ぜざらしめんと精勤す。
已生の善を增上せしめんと精勤す。
未生の善を生ぜしめんと精勤す。
四如意足
欲如意足
精進如意足
心如意足
思惟如意足
五根
信根
勤根
念根
定根
慧根
五力
信力
勤力
念力
定力
慧力
七菩提分
念菩提分
擇法菩提分
精進菩提分
喜菩提分
輕安菩提分
定菩提分
捨菩提分
八正道
正見
正思惟
正語
正業
正命
正精進
正念
正定
信—信—信
勤
定
定
慧
戒
行

今吾人は一々これ等の行目に就いて解釋するの餘裕を有せず。戒はこれを次編僧伽の下に讓り、茲には念處經に依りて、佛弟子等の如何に道を修せしかの一例を出さん。

衆生を淸淨ならしめ、愁悲を滅し、苦憂を斷じ、聖智(Nyāya)を得せしめ涅槃を實證せしむる唯一乘は四念住也。…………比丘等よ茲に比丘あつて森に入り樹下に行き空屋に行いて趺坐し、身體を正直にし、正心に心を凝し、正心に息を吸ひ息を出す。長く息を吸ふ時は長く息を吸ふことを自覺し、長く息を出す時は長く息を出すことを自覺し、…………「我れは全身を知覺して息を呼吸すべしとの考へにて之を實行す、…………斯くの如く自身に於いて身を觀じて住し、他身に於いて身を觀じて住し身の生法滅法生滅の法なるを引き續きて觀じ「茲に身あり」と自覺し智慧と自己集中とのために正心たるべし。茲に世に執着なく自由なるを得べし。

又行住坐臥その他一切の行動に於いても斯くの如く明に意識して之をなし正心たるべし。

次にこの現身に就いて種々の不淨の滿つることを意識し、四大所成の身なるを意識し、死後身體の腐敗し行く樣を觀じて住する。かくて茲に身ありと自覺し、智慧と自己集中のために正心たるべし。茲に世に執着なく自由たるを得べし。(受と心と法とに就ても明了に之を觀じて住すること身に於けるが如し)。

四正勤は惡法を捨し善法を增上せしめん爲めの努力精進也。四如意足は三明六通を得る爲めの行業にして一種の修禪也。五根五力は同一のものをそれが證悟の機關となる點より根と云ひ、證悟の增上の力となる點より力といふ。七菩提分八聖道は常の解釋の如し。

この他、佛徒は前節に出せし四無量心四攝事を修す。この修行は佛弟子の衆と共に苦樂を同うし、敢て進んで「不請の友」となる大乘的精神あるを示す。佛弟子阿羅漢を自利小行の聲聞と貶するは誣ゆるも甚しと曰はざるべからず。この外に

小欲 (Appicchā)	知足 (Santuttha)
遠離 (Pavivitta)	精勤 (Āraddhaviriya)
住念 (Upatthita-satī)	定心 (Samāhita)

持智慧 (Paññavā)　　　　　不停滯 (Nipapañca cārāna)

の八大人法(Atthamahāpurisadhammā)等ありと雖も、分類の方法を異にするのみにて內容の相違に非ず。

斯くの如く種々の行業德目ありと雖も、之を要するに比丘は信を以てその修道の出發點とし、その修道の力とし、戒を以つて自己を淨め、從つて心を正うし、靜慮に入りて眞智を硏き證果を得る也。

扨て又實際に入りて比丘等の修行を見るに、その修道に二あり、思索(Patisankhāni)と修習(Bhāvana)也。思索は平生理を硏盡して智慧を明かにし、修習はその硏盡せし所を實際に行ふことなり。而してこの修習は森に入り、林に入りて修するものにして、主として一種の公案を携へ行いて思索練磨するものとす。この公案は業處 (Kammatthāna 業道、作爲處) と呼ばれ七項目四十あり。

I　十遍處　Dasa Kasiṇa Maṇḍala

1	地大遍一切處	Pathavī Kasiṇa
2	水 〃	Āpo 〃
3	火 〃	Tejo 〃
4	風 〃	Vāyo 〃
5	青色 〃	Nīla 〃
6	黃色 〃	Pī'a 〃
7	赤色 〃	Lohita 〃
8	白色 〃	Odāta 〃
9	空無盡 〃	Ākāsa 〃
10	識無盡 〃	Viññāṇa 〃

II　十不淨　Dasa asubhā

1	膨脹想	Uddhumātakaṁ
2	青瘀想	Vinīlakaṁ
3	膿爛想	Vipubbakaṁ
4	壞想	Vicchiddukaṁ
5	鳥獸噉想	Vikkhāyitakaṁ
6	散想	Vikkhittakaṁ
7	散亂想	Hatavikkhittakaṁ

8	血塗漫想	Lohitakaṁ
9	蟲噉想	Pulavakaṁ
10	骨想	Aṭṭhikaṁ

III 十念 Dasa anussati

1	念佛	Buddhānussati
2	念法	Dhammānussati
3	念僧	Saṅghānussati
4	念戒	Silānussati
5	念捨	Cāgānussati
6	念天	Devatānussati
7	念死	Maraṇasati
8	念身	Kāyagatāsati
9	念息	Anāpānasati
10	念寂	Upasamānussati

IV 四無量心 Catuaparimānacittā

1	慈	Mettā
2	悲	Karunā
3	喜	Mudita
4	捨	Upekkhā

V 四無色 Catu āruppā

1	空無邊處	Ākāsānancāyatanaṁ
2	識無邊處	Viññānancāyatanaṁ
3	無處有處	Akincaññāyatanaṁ
4	非想非々想處	Nevasaññānāsaññāyatanaṁ

VI 一想 Ekasañña

1	食厭想	Āhāre patikkūlasañña

VII 一配分 Ekam vavatthānaṁ

1	四大配分	Catudhātuvavatthānaṁ

この外 空業處 Suññakammāyatanaṁ

斯くの如く大略四十一業處ありと雖も必ずしもこの全部を修するに及ばず各々その性狀と能力とに應じて、佛陀又は先輩の與ふる業道に

就いて思索練磨し、證悟する也。朱利般毒が佛陀の敎に依り、白の布片を携へ拂塵 (Rajoharaṁ) 々々と磨でて、白布の汚れ行くを見て、應果を得しが如き好乎の實例なり。さればこそ佛陀は「我が敎示したるが如く隨順するものは良家の子が家を捨てゝ沙門となれるその目的の無上の梵行の終極を現世に於て七年乃至七日の中に自ら實現して住すべし」と宣ひ、又この敎法は「この法は現世に果報あり、時を隔つるに非ず、來り見よと云ひ得る法にて、涅槃に導く敎、獨り銘々の知るべき法」と曰はれ得る也。

されば涅槃に向ふ佛弟子の修行を要約して曰へば、佛陀を信じ、法と僧伽とを尊敬し、二邊を離れて中道を踏み、不放逸に身心を制御してその靈性の開發を謀り、知恩と博愛生活を送るものと曰ふべし。佛滅後時を隔て一方實際の修道者なきに至り、行と證とは自己に縁遠きものとなるに及び、その證を高峰の花の如く眺むると共に、その行を複雜にして企圖し易からざるものゝ如くし、他方佛陀を特殊的に菩薩として取り扱ふに及び、過去の佛陀の前に本願 (Panidhi) を起し、授記(Vyākarana) を得、波羅密行 (Pārāmitā) を修し、今生初めて八相成道を得給へりとなす等、歴劫迂廻の說を生ずるに至れり。法相宗の三祇百大劫の修行を談ずるが如き、此傾向を最も極端にせしもの也。後來の實大乘に入りて初發心時便成正覺と云ひ、信滿成佛と談じ肉身の成佛をいふは畢竟ずるに根本佛敎の眞義を復活せしものに外ならず。

第六章　優婆塞優婆夷の宗教

我等は前章に於て信が佛教の入門にして行と相並んで衆生證果の因なることを見たり。然れども比丘の宗教にありては信は佛陀を師主と仰ぐ出發點にして證果の唯一の因にあらず、得證と否とは一にその行に關はる。後世の聖道門の行信の關係又これに同じく淨土門の行信交際とその趣を異にせり。

然らば吾等の淨土門はその端緒を何れに發するものなるか、吾等は今此の章に於て暫らく阿含關係の經律の上にこの端緒を験せんとす。

佛滅七世紀出世の龍樹菩薩は一大佛教を判じて難行道易行道とし、「世間の道に難あり易あり、陸道の步行は則ち苦しく、水道の乘船は則ち樂しきが如し、菩薩の道も亦是の如し、或は勤行精進のものあり。或は信方便の易行を以て疾く阿惟越致地に至るものあり」と云ひ、難行道は丈夫士幹の人の行く所にして易行道は儜弱怯劣の徒の就く道なることを示せり。

舍利弗目連の徒は、その信佛の信も所謂不壞の信なりと雖も最も著しく吾人の眼に映ずるはその修行也。須達長者や波斯匿王はその行業としては八戒を守るのみにして、在俗の生活に於て唯一の光となるものは佛陀に對する信仰なり。卽ち比丘にありてはその信裏に隱れて行表に顯はれ、在家の信者に於ては行顯はれずして信表に顯はる。聖道門は信をその出發點とすれども得證の如何はその行に依り、淨土門は行を談せざるに非れども、得證は信佛の因緣に在りとす。果して然らば聖道門は龍樹の所謂丈夫士幹の比丘の宗教にして、淨土門は須達や波斯匿を先達とする儜弱怯劣の優婆塞優婆夷の宗教と云ふ可からざるか。

この問題は佛教史上重大なる問題にして輕々に論斷すべきに非ざれども、吾人は根本佛教の硏究に於て然かく信ずべき多くの理由を有す。

夫れ根機に差別あることは現實の事態なり。釋尊は自ら出家の道を取り、斷惑證理の過程を經給ひ、その弟子の多くをして又同じき道を取らしめ給ひしも、この出家の道が到底一切の民衆に行き亘らしめ得るものに非ざるを知り、茲に在家人の進むべき他の一道あることを敎

へ給へり。在家人の道とは先づ出家の如く家を捨てゝ欲望斷滅の道を取るに及ばず、その戒に於て比丘の二百五十戒の如く煩はしからず、只八戒を布薩の日に守れば足れり。行に於ても三十七道分の多きを行せず又必ずしも禪定を修するに及ばず、散心の儘に佛陀を信じ、三寶に歸依し廣く布施する也。大名(Mahānāma)佛陀に「優婆塞とは何ぞや」と問ふ。佛陀は「歸依三寶者是也」と答へ給ふ。更に「優婆塞の信とは何ぞや」と問ふ。「如來の菩提を信ずること也」と答へ給ひぬ。

信は同一の信なれども この信が比丘に顯はれ在家に顯はるゝに從つてその色彩を異にし來る。比丘にとりては信佛はその道行の發足なれば、その信は理智的相對的にして、梵行修道の力となり、在家の信者に取りては信が一切なれば、その信は情熱的絶待的にして信仰の對象に對して自然に超人的資格を與ふ。卽ち比丘の信は智が主にして信が從なる傾あり。佛陀嘗て舍利弗に「汝は四諦に就いて佛陀を信ずるや」と宣ふに、舍利弗「四諦に就いては我れ之を明了に知るが故に、佛陀を信ずるに及ばず、知らず證らざれば信せん、されど我れは知り證れり」と答へたり。又巴利增一阿含 vi. 55 には「了解(Pativedha)は信よりも高し尊し」と說けり。之れ後世倶舍論に於て、信を大善地法の一とし その義を澄淨とし、心を澄淨ならしむる精神作用なりと、信を比較的輕く見るに至りし所以なりとす。然るに在家人の信は、信佛がその生活の唯一の規範となり、生命となるもの故に、その信は著しく絶對的色彩を帶び來る。先に出せし末利夫人が、「佛陀に於て眞實なることは我れに於ても常に眞實なり」と言ひし心情は、親鸞聖人の「法然上人にすかさせまひらせて、地獄に墮ちたりとも後悔せずといふの信を想起せしむ。波斯匿王、ブラフマーユ婆羅門等の佛陀に對する不壞の信が殆んど狂熱的に燃え上れるが如きも、在家信者の信の特殊性を思はしむ。これ在家人に取りては、佛陀は單なる先覺者に非ずして、自己救濟主たるの意義を有し、信は先覺者に對するの信に非ずして、自己救濟主に對する信となればなり。かくてその信仰は救濟を約束とする他力教的意義を含み來るなり。

この信仰の意義の絶對化と相並んで、他力敎を生ずるに力ありし他の有力なる思想あり、卽ち當時の生天の思想なり。三十三天、夜摩天、

兜率天、化樂天、他化自在天、梵天は當時一般の民衆が生れんと願ひし善趣にして、佛陀も亦一般信者の目標として之を許し給へり。但し、此等の諸天は猶三界中にあるが故に無常を免かれず、生死の輪圍の境を越へず。故に現在に涅槃に入り了る者には全く要なき世界なれども、現生に涅槃を體現し得ざる者が、暫らく天界に生を受けて順次生の解脱を得んとするは自然の事なり。佛陀は大名（Mahānāma）に「病床の人に說法する時、世の恩愛を斷じ、生天を勸むるを第一とし、己身の離脱を第二とすべきを敎へ、進んで梵天界より心を解脫し、自身の滅に心を運ぶ人は優婆塞と雖も、比丘の得達者と區別なし」と說き給へり。かくの如く、生天は佛敎の本義には非ざれども、人心の深きに根ざせるものなるが故に、釋尊當時には有力なる民間信仰として行はれ、多くの優婆塞優婆夷の宗敎たりし也。斯くして前出の在家人の信內容はこの生天思想と相結び、佛陀入滅後、佛陀の法身觀の發達と共に益々他力敎的意義を强め來り、一方彌勒佛の信仰と共にその住處兜率に生天せんとの信仰起り、他方阿彌陀佛の信仰と共に、界外の極樂（Sukhāvatī）往生を念願するに至れり。彌勒の兜率上生と、阿彌陀佛の極樂往生とは、爾來最も勢力ある他力淨土敎となりて、支那を經て日本に傳はるに至れり。

斯くの如く、比丘は自行を以て解脫し、在家人は信佛の易行に依つて救濟せらる。故に後世龍樹菩薩は二道判を以て佛敎を大判し、一は捨家、捨妻子の丈夫士幹の道にして、他は不能捨家、不能捨妻子の儜弱怯劣の凡夫の道なりとせしなり。

我等は在家宗敎の完成者を、親鸞聖人に認む。釋尊にありては、比丘と在家人との區劃餘りに明白にして、その宗敎に於ても、道德に於ても二元的二重的たるを免かれず、而して此の僧俗差別の二元的宗敎二重的道德は遠く流れて、佛敎史二千五百年間、二つの平行線の如く相合致せずして來りしが、親鸞聖人に至りて、比丘も人間本然の制約を破らずして、在家の位置に下り、僧俗の別なき宗敎が完成せられ、宗敎本來の最も普遍的たるべき約束が果成せられたるなり。我等はこの意味に於て親鸞聖人を佛敎の完成者と認むるものなれども、今は此點迄論議する必要なきを以て之を略す。

最後に吾人は玆に只一言付け加へんとするものあり。そは、後世の秘密佛教も亦優婆塞優婆夷の信仰にその萠芽の一を有することなり。先きにも云ふが如く、佛陀の敎說はそれ自身に於ては秘密晦冥の臭なく、最も合理的にして、修道者が各々自を燈明とし、自らを歸依とし其の智見を研いてその行爲を清淨にし、現在の禍福は勿論、未來世の爲の善根功德も問題とするものに非ざりしが、在家の信者に取りては、斯くの如き第一義的の宗敎生活は餘りに高く、現實の苦樂の生活は當面の問題として差し迫れる力を持てるよりして、彼等は、佛陀及びその敎說の力に依りて災禍を離れん事を願へり。この願求のこゝろに、佛陀を神秘化し、敎說を靈異化し、阿闥婆吠陀以來の攘災招福の明呪の思想と相結んで、秘密佛敎の端を發するに至れり。原始經典中、長阿含第二〇經の大會經（Mahāsamaya Sutta）、同じく長阿含第三二經の阿吒那智經（Ātānatiya Sutta）及び律部の蛇咬說咒（Vinaya Cūlavagga V. 6）、雜阿含（XI. 1. 3）の幢頭明護（Dhajaggam paritta）等の神明の守護、攘災招福の思想はこの秘密佛敎の母胎とも稱すべきものにして、後世編纂されし明護集（Paritta）中のものと共に、當時一般の在家信者の信仰の一部を形成しゐたるものとす。而して漸次に秘密晦冥の度を增し、後世婆羅門敎等の影響を受けて、秘密佛敎を生ずるに至れるなり。

比丘尼八敬戒

一。百夏の比丘尼も初受戒の比丘を拜すべし。

二。比丘に從ひて三月の安居をなすべし。

三。半月毎に比丘僧伽に,布薩の日と比丘より教誨を受くる時を尋ぬべし。

四。夏終りて,比丘及比丘尼兩敎團の前にて自恣をなすべし。

五。重罪を犯し,摩那埵を受くる者は,之を兩敎團より受くべし。

六。二年六法(不殺畜生,不盜錢,不摩觸,不小妄語,不非時食,不飮酒)を修し,然る後兩僧伽より,授具足戒の許可を受くべし。

七。いかなる事ありとも比丘を謗る可からず。

八。比丘の敎誨を受くべく,比丘を敎誨すべからず。

舍利弗四諦を說く

(1)一時佛遊舍衛國在勝林給孤獨園爾時世尊告諸比丘此是正行說法、謂四聖諦、廣攝廣觀分別發露開仰施設顯示趣向。過古諸如來無所著等正覺、彼亦有此正行說法謂四聖諦、未來諸如來無所著等正覺、彼亦有此正行說法謂四聖諦。我今現如來無所著等正覺亦有此正行說法謂四聖諦。

舍梨子比丘聰慧速慧捷慧利慧廣慧深慧出要慧明達慧辨才慧、舍梨子比丘成就實慧。所以者何謂我略說此四聖諦、舍梨子比丘則能爲他廣敎廣觀分別發露開仰施設顯現趣向。舍梨子比丘廣敎廣示此四聖諦時令無量人而得於觀。舍梨子比丘能以正見爲導御也、目連比丘能令立於最上眞際謂究竟漏盡、舍梨子比丘生諸梵行猶如生母、目連比丘長養諸梵行猶如養母、是以諸梵行者應奉事供養恭敬禮拜舍梨子目乾連比丘、所以者何、舍梨子目連比丘爲諸梵行者求義及饒益求安隱快樂、爾時世尊說如是已卽從座起入室燕坐、於是尊者舍梨子告諸比丘、諸賢世尊爲我等出世、謂爲他廣敎廣示此四聖諦、云何爲四謂苦聖諦苦習苦滅苦滅道聖諦。

諸賢云何苦聖諦謂生苦、老苦、病苦、死苦、怨憎會苦、愛別離苦、所求不得苦、略五盛陰苦。諸賢說生苦者此說何因、諸賢生者謂彼衆生彼々衆生種類。生則生出則出成則成與起五陰已得命根是名爲生。諸賢生苦者謂衆生生時身受苦受遍受覺遍覺、心受苦受遍受覺遍覺身心受苦受遍受覺遍覺、身熱受遍受覺遍覺心熱受遍受覺遍覺身心熱受遍受覺

（1） 中阿含第七(昃五・41-43)

同本巴利中阿含第一四一經 (Vol. III. pp. 248-252)

或時世尊はベナレスの仙人住所鹿野苑 (Isipatana Migad˙ya) に在した。世尊は「比丘等よ」と弟子達を呼びかけ、比丘等は「世尊よ」と御答申し上げた。世尊は宣ふやう。「比丘等よ、如來應供正等覺者はベナレスの仙人住所鹿野苑に於て、未だ嘗て沙門婆羅門惡魔梵天に依つて如何なる世界にも轉ぜられたることなき無上の法輪を轉じた。卽ち四眞諦は示され說かれ知らされ建立され開かれ顯はされ明かにせられたのである。

四眞諦とは何ぞや、苦聖諦と苦集聖諦と苦滅諦と苦滅道諦とである。比丘等よこの四眞諦が、ベナレスの仙人住所鹿野苑に於て、如來應供正等覺者に依つて轉ぜられたる無上法輪である。

比丘等よ、舍利弗と目犍連に事へ、之を崇めよ、彼等は賢者にして梵行を行ずる者の攝受者である。比丘等よ、舍利弗は喩へば母の如く、目犍連は喩へば養母の如し。舍利弗は豫流果を育て、目犍連は無上果に至らしむ。比丘等よ、舍利弗は、四眞諦を廣く示し說き開き顯はし明かにすることの出來るものである」と。世尊は斯く宣うて座を立ち、如來の室に入り給うた。

世尊座を去り給うて間もなく、舍利弗は衆を顧みて、「比丘等よ、友よ」と呼び掛けた。比丘等も亦「友よ」の語を以て之に應じた。舍利弗は云ふやう。「友よ、如來應供正等覺者は、ベナレスの仙人住所鹿野苑に於て、未だ嘗て沙門婆羅門惡魔梵天に依つて、如何なる世界に於ても轉ぜられたることなき無上の法輪を轉じ給うた。卽ち四眞諦は示され說かれ建立され、開かれ顯はされ明かにせられたのである。

友よ、苦聖諦とは何であるか。生も苦、老も苦、死も苦、憂悲苦惱絕望も苦である。欲するものを得ざるも苦である。略して曰へば五取蘊は苦である。

友よ、生とは何ぞや、それぞれの衆生のそれぞれの衆生の類に生れ、生れ落ち、顯はれ興り(五)蘊顯現し、(六)處の獲得を云ふのである。

遍覺、身壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺一心壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺一身心壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺、諸賢說二生苦一者因レ此故說。

諸賢說二老苦一者此說二何因、諸賢老者謂、彼衆生彼々衆生種、類、彼爲二老耄一頭白齒落盛壯日衰身曲脚戾體重氣上柱レ杖而行、肌縮皮緩皺如二麻子一諸根毀熟顏色醜惡是名爲レ老、諸賢老苦者謂衆生老時身受二苦受覺受覺遍覺一身心受二苦受覺受覺遍覺、身熱受二遍受覺遍覺一心熱受二遍受覺遍覺一身心熱受二遍受覺遍覺、身壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺一心壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺一身心壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺一諸賢說二老苦一者因レ此故說。

諸賢說二病苦一者此說二何因、諸賢病者謂頭痛眼痛耳痛鼻痛面痛脣痛齒痛舌痛齶痛咽痛風喘咳嗽喝吐喉痹癲癇癕癭經溢赤痰壯熱枯槁痔瘻下痢、若有二如レ是此餘種々病一從二更樂觸一生不レ離レ心立二在身中一是名爲レ病、諸賢病苦者謂衆生病時身受二苦受遍受覺遍覺一心受二苦受遍受覺遍覺一身心受二苦受遍受覺遍覺、身熱受二遍受覺遍覺一心熱受二遍受覺遍覺一身心熱受二遍受覺遍覺、身壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺一心壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺一身心壯熱煩惱憂感受二遍受覺遍覺、諸賢說二病苦一者因レ此故說。

諸賢說二死苦一者此說二何因、諸賢死者謂彼衆生彼彼衆生種類命終無常死喪散滅壽盡破壞命根閉塞是名爲レ死、諸賢死苦者謂衆生死時身受二苦受遍受覺遍覺一心受二苦受遍受覺

友よ、老とは何ぞや、それぞれの衆生のそれぞれの衆生の類に於て、老い、老い腐ち、齒落ち髪白く、壽縮まり、諸根老衰することである。

友よ、死とは何ぞや、それぞれの衆生のそれぞれの衆生の類よりかくれ沒し、破壞、隱沒、死喪、五蘊分散、支體の拋棄をいふのである。

友よ、憂とは何ぞや。或る種の災患に遇ひ、或る種の苦法に遇ひ、憂ひ悲しみ、內心痛み憂ふるをいふのである。

友よ、悲とは何ぞや、或る種の災患に遇ひ、或る種の苦法に觸れ、嘆き悲しみ、愁傷し哀哭してゐることである。

友よ、苦とは何ぞや、身體の苦しみ、身體の樂しからざること、身體が觸れて生じたる苦不樂の經驗である。

友よ、惱とは何ぞや。心の苦しみ、心の樂しからざること、心が觸れて生じたる苦不樂の經驗である。

遍覺身心受苦受遍受覺遍覺、身熱受遍受覺遍覺心熱受遍受覺遍覺身心熱受遍受覺遍覺、身壯熱煩惱憂慼受遍受覺遍覺心壯熱煩惱憂慼受遍受覺遍覺身心壯熱煩惱憂慼受遍受覺遍覺、諸賢說死苦者因此故說。

諸賢說(1)怨憎會苦者此說何因、諸賢怨憎會者謂、衆生實有內六處不愛、眼處耳鼻舌身意處、彼同會、一有攝和習共合爲苦如是外處更樂覺想思愛亦復如是諸賢衆生實有六界不愛、地界水火風空識界、彼同會、一有攝和習共合爲苦是名怨憎會、諸賢怨憎會苦者謂衆生怨憎會時身受苦受遍受覺遍覺心受苦受遍受覺遍覺身心受苦受遍受覺遍覺、諸賢說怨憎會苦者因此故說。

諸賢(2)愛別離苦者此說何因、諸賢愛別離苦者謂、衆生實有內六處愛、眼處耳鼻舌身意處、彼異分散不得相應別離不會不攝不習不和合爲苦、如是外處更樂覺想思愛亦復如是、諸賢衆生實有六界愛、地界水火風空識界、彼異分散不得相應別離不會不攝不習不和合爲苦是名愛別離、諸賢愛別離苦者謂衆生別離時身受苦受遍受覺遍覺心受苦受遍受覺遍覺自心受苦受遍受覺遍覺、諸賢說愛別離苦者因此故說。

諸賢說所求不得苦者此說何因、諸賢謂、衆生生法不離生法欲得令我而不生者此實不可以欲而得老法死法愁憂慼法不離憂慼法欲得令我不憂慼者此亦不可以欲而得、諸賢衆生實生苦而不可樂不可愛念彼作是念若我生苦而不可樂不可愛念者欲得轉是

友よ、絕望とは何ぞや、或る種の災患に遇ひ、或る種の苦惱に觸れて、心挫け望みを失うた狀態である。

友よ、欲するものを得ざる苦しみとは何ぞや。身生法にして、生れざらんこと、生の來らざることを願ふは欲するものを得ざる苦しみである。同樣に身老法、病法、死法、憂悲苦惱絕望の法にして、老、病、死、憂悲苦惱絕望のあらざらんこと、來らざらんことを願ふは、欲するものを得ざる苦しみである。

友よ、略して云へば五取蘊は苦なりとは何ぞや。卽ち色取蘊、受取蘊、想取蘊、行取蘊、識取蘊、これが略して五取蘊は苦なりと日はるゝのである。

(1) Amanāpasaṁyoga dukkha 憎み嫌ふものと一つになる苦しみ。

(2) Manāpavippayoga dukkha 愛するものと別るゝ苦しみ。Vinaya Mahāvagga に出づ。上七七頁を見よ。

令可愛念、此亦不可以欲而得。諸賢衆生實生樂而可愛念、若我生樂可愛念者欲得令是常恒久住不變易法、此亦不可以欲而得。諸賢衆生實生思想而不可樂不可愛念、彼作是念、若我生思想而不可樂不可愛念者欲得轉是令可愛念、此亦不可以欲而得。諸賢衆生實有思想而可愛念、彼作是念、若我生思想可愛念者欲得令是常恒久住不變易法、此亦不可以欲而得、諸賢說所求不得苦者因此故說、諸賢說略五盛陰苦者此說何因、謂色盛陰覺想行識盛陰、諸賢說略五盛陰苦者因此故說、諸賢過去時是苦聖諦未來現在時是苦聖諦、眞諦不虛不離於如亦非顚倒眞諦審實合如是諦、聖所有聖所說、聖所見聖所了、聖所得、聖所等正覺、是故說苦聖諦。

諸賢云何愛習苦習聖諦、謂衆生實有愛內六處眼處耳鼻舌身意處、於中若有愛有膩有染有著者是名爲習、諸賢多聞聖弟子知、我如是知此法、如是見如是了如是視如是覺、是謂愛習苦習聖諦。如是知之云何知耶、若有愛妻子奴婢給使眷屬田地屋宅店肆出息財物爲所作業有愛有膩有染有著者是名爲習、彼知此愛習苦習聖諦。如是外處更樂覺想思愛亦復如是。諸賢衆生實有愛六界地界水火風空識界於中若有愛有膩有染有著者是名爲習、諸賢多聞聖弟子知、我如是知此法如是見如是了如是視如是覺是謂愛習苦習聖諦、如是知之云何知耶、若有愛妻子奴婢給使眷屬田地屋宅店肆出息財物爲所作業有愛有膩有染有著者是名爲習、彼知是愛習苦習聖諦。

友よ、苦集聖諦とは何ぞや。喜と貪とを伴ひ、其處此處に滿足を求め（そしてその結果として）未來の新しい生存を招くところの渇愛卽ち、欲愛、有愛、勝有愛、これを苦集聖諦といふのである。

諸賢云何愛滅苦滅聖諦、謂衆生實有愛內六處、眼處耳鼻舌身意處、彼若解脫不染不著斷捨吐盡無欲滅止沒者是名苦滅。諸賢多聞聖弟子知、我如是知此法、如是見如是了如是視如是覺、是謂愛滅苦滅聖諦。如是知之云何知耶、若有不愛妻子奴婢給使眷屬田地屋宅店肆出息財物不爲所作業、彼若解脫不染不著斷捨吐盡無欲滅止沒者是名苦滅、彼知是愛滅苦滅聖諦。如是外處更樂覺想思愛亦復如是、諸賢衆生實有愛六界地界水火風空識界、彼若解脫不染不著斷捨吐盡無欲滅止沒者是名苦滅、諸賢多聞聖弟子知、我如是知此法、如是見如是視如是了如是覺是謂愛滅苦滅聖諦。如是知之云何知耶、若有不愛妻子奴婢給使眷屬田地屋宅店肆出息財物不爲所作業、彼若解脫不染不著斷捨吐盡無欲滅止沒者是名苦滅、彼知是愛滅苦滅聖諦。

諸賢云何苦滅道聖諦、謂正見正志正語正業正命正方便正念正定、諸賢云何正見、謂聖弟子念苦是苦時、習是習滅是滅念道是道時、或觀本所作、或學念諸行、或見諸行災患、或見涅槃止息、或無著念觀、善心解脫時於中擇、遍擇決擇、擇法視遍視觀察明達是名正見、諸賢云何正志、謂聖弟子念苦是苦時習是習滅是滅念道是道時、或觀本所作、或學念諸行、或見諸行災患、或見涅槃止息、或無著念觀、善心解脫時於中心伺遍伺順隨伺、可念則念可望則望是名正志。諸賢云何正語、謂聖弟子除口四妙行諸餘口惡行遠離除斷不行不作不合不會是名正語。諸賢云何正業謂聖弟子除身三妙行諸餘身惡行遠離除斷不

友よ、苦滅聖諦とは何ぞや。その渇愛が殘りなく滅び、廢捨、除却され、解脱し、欲の無くなつたことである。

友よ、苦滅道聖諦とは何ぞや、これは八聖道である。卽ち正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。

友よ、正見とは何ぞや。苦の智、苦集の智、苦滅の智、苦滅道の智を有することである。

友よ、正思とは何ぞや。遠離思惟、無瞋思惟、無害思惟がこれである。

友よ、正語とは何ぞや。妄語を遠離し、離間語を遠離し、綺語を遠離することである。

友よ、正業とは何ぞや。殺生を遠離し、不與取を遠離し、邪淫を遠離することである。

行不作不合不會是名正業。諸賢云何正命謂聖弟子非無理求不以多欲無厭足不爲種々技術呪說邪命活但以法求衣不以非法亦以法求食牀座不以非法是名正命。諸賢云何正方便、謂聖弟子若有精進方便一向精勤求有力趣向專著不捨亦不衰退正伏其心是名正方便。諸賢云何正念、謂聖弟子若心順念背不向、念念遍念、憶復憶、心心不忘、心之所應是名正念。諸賢云何正定謂聖弟子若心住禪住順住不亂不散攝止正定是名正定。諸賢過去時是苦滅道聖諦、未來現在時是苦滅道聖諦、眞諦不虛不離於如亦非顚倒眞諦審實合如是諦聖所有、聖所知、聖所見、聖所了、聖所等正覺、是故說苦滅道聖諦於是頌曰。

佛明達諸法　見無量善德　苦習滅道諦　善顯現分別

尊者舍利子所說如是。

* * * * * *

八大人法

(1)一時佛遊婆奇瘦在鼉山怖林鹿野園中、爾時尊者阿耶律陀在枝提瘦水渚林中、彼時尊者阿那律陀在安靜處燕坐思惟心作是念、道從無欲非有欲得、道從知足非無厭得、道從遠離非樂會聚非住聚會非合聚會得、道從精勤非懈怠得、道從正念非邪念得、道從定意非亂意得、道從智慧非愚痴得。於是世尊以他心智知尊者阿耶律陀心中所念所思所行、

友よ、正命とは何ぞや。聖弟子が邪命食を廢して、正しき生活法に依つて生活することである。

友よ、正精進とは何ぞや。未だ生ぜざる惡不善の法を生ぜざらしめんと欲し勉め勵み心を堅めて居、既に生じたる惡不善の法を廢捨せんと欲し勉め勵み心を堅めて居、未だ生ぜざる善法を生ぜしめんと欲し勉め勵み心を堅めて居、既に生じたる善法を相續し增長し圓滿せしめんと欲し勉め勵み心を堅めて居ることである。

友よ、正念とは何であるか。熱心に正心に正念に身を觀じて住し、貪欲とそうしてそれから起る惱とを滅ぼし、熱心に正心に正念に受、心、法を觀じて住し貪欲とそうしてそれから起る惱とを滅ぼすことである。

友よ、正定とは何であるか。欲を離れ、惡不善の法を離れ、有覺有觀離生喜樂の第一禪に入りて住し、………第二禪………第三禪………第四禪に入つて住することである。

友よ、如來應供正等覺者は、ベナレスの仙人住所鹿野苑に於て、未だ嘗て沙門婆羅門惡魔梵天に依つて、如何なる世界にも轉ぜられたる事なき無上の法輪を轉じ給うた。卽ちこの四眞諦が示され說かれ知らされ建立され顯はされ明かにせられたのである。

---

(1) 中阿含卷一八(昃五•101-102)

同本、巴利增阿含八の部三〇 (Vol. IV. p.p. 228 foll.)

或時世尊跋伽のスンスマーラ山のブエーサカラー林に在した。其の時尊者阿那律(Anuruddha)はチエーテのパーチナワムサ林に住し、午後の禪定に於てこの樣に考へてゐた。「この法は少欲の法にして大欲の法に非ず、知足の法にして不知足の法にあらず、遠離の法にして聚會の法に非ず。精進の法にして懶惰の法に非ず。住正念の法にして妄念の法に非ず。寂靜の法にして喧噪の法に非ず。有智者の法にして無智者の法に非ず」と。

時に世尊は阿那律の心中の考を知り、壯士が腕を伸し屈めする程の時を以て、ブエーサカラー林に沒して、パーチナワムサ林の阿那律の前に顯はれ、設けの座について、阿那律に宣うた。

世尊知已卽入如其像定以如其像定猶若力士屈伸臂頃如是世尊從婆奇瘦鼉山怖林鹿野園中忽沒不現住枝提瘦水渚林中尊者阿那律陀前、是時世尊便從定覺嘆尊者阿那律陀曰、善哉善哉阿那律陀謂汝在安靜處燕坐思惟心作是念、道從無欲非有欲得、道從知足非無厭得、道從遠離非樂聚會非住聚會非合聚會得、道從精勤非懈怠得、道從正念非邪念得、道從定意非亂意得、道從智慧非愚痴得、阿那律陀汝從如來更受第八大人之念受已便思。道從不戲樂不戲、非戲非樂戲非行戲得、阿那律陀若汝成就此大人八念者汝必能離欲離惡不善之法至得第四禪成就遊、阿那律陀若汝成就大人八念而復得此四增上心現法樂居易不難得者如王王臣有好緘篋盛滿種種衣中前欲著便取著之中時中後若欲著衣便取著之隨意自在。阿那律陀汝亦如是、得糞掃衣爲第一服、汝心無欲行此住止行、阿那律陀若汝成就大人八念而復得此四增上心、現法樂居易不難得者如王王臣有好廚宰種々淨妙甘美餚饌、阿那律陀汝亦如是、常行乞食爲第一饌汝心無欲行此住止行、阿那律陀若汝成就大人八念而復得此四增上心現法樂居易不難得者如王王臣有好屋舍或樓閣宮殿、阿那律陀汝亦如是、依樹下止爲第一舍、汝心無欲行此住止行、阿那律陀若汝成就大人八念而復得此四增上心、現法樂居易不難得者如王王臣有好床座敷以 、氍氀毾𣰆覆以錦綺羅縠有襯體被兩頭安枕加陵伽波惒邏波遮悉哆羅那、阿那律陀汝亦如是草座葉座爲第一座、汝心無欲行此住止行、阿那律陀若汝成就

「善い哉善い哉、阿那律よ。汝は此の法は少欲の法にして大欲の法に非ず、知足の法にして不知足の法に非ず、遠離の法にして聚會の法に非ず、精進の法にして懶惰の法に非ず、住正念の法にして妄念の法に非ず、寂靜の法にして喧噪の法に非ず、有智者の法にして無智者の法に非ずと大人の覺を念じて居た。阿那律よ次で、この第八の大人覺卽ち、この法は戲論を樂しまざるもの丶法にして戲論を樂しむもの丶法に非ずと念ぜよ。阿那律よ、汝はこの八大人覺を念ずる限り離欲離不善法、有覺有觀離生喜樂の第一禪に入つて住するを期待し得る。第二禪第三禪第四禪に入つて住するを期待し得る。阿那律よ又汝はこの八大人覺を念じ、此等四禪の心勝れたる現法樂住へ困難なしに欲する儘に入りうる限り、喩へば家主又は家主の子がいろ〳〵の色の衣を衣服の箱に一杯に持つて心足るが如く、足るを知つて住し、樂しく撓まず安かに涅槃に向ふ汝には糞掃衣も心足る料であらう。又喩へば家主又は家主の子が、淨白の一粒撰りの精白米に數多の菜を付けた食事を以て事足るが如く、足るを知つて住し、樂しく撓まず安らかに涅槃に向ふ汝には行乞に依つて得たる團食も事足るべし。又喩へば家主又は家主の子が、善く內外を塗り堅め風を防ぎ、戶には善く閂して閉ぢ、窓は善く塞ぎたる層樓に住して心足るが如く、足るを知つて住し、樂しく撓まず安らかに涅槃に向ふ汝には樹下の座も心足る料である、又喩へば、家主又は家主の子に、長い房のついた毛布を布き、白色の毛布を布き、カダリー種の羊の毛にて織つたクツションを置き、最上の上敷を掛け、兩端赤色の枕ある寢床にて心足るが如く、足るを知つて住し、樂しく撓まず安らかに涅槃に向ふ汝には草を敷きつめた床も心足る料であり、又喩へば、家主又は家主の子に、種々の藥卽ち生蘇、酪、油、蜜、糖蜜があるが如く、足るを知つて住し、樂しく撓まず安らかに涅槃に向ふ汝には腐尿藥にて事足るであらう。此れに依つて、阿那律よ、汝は來るべき安居にも、このチエーテのパーチーナワムサ林に住するがよからう」と。

「世尊よ、かしこまりました」と阿那律は世尊に御答へ申し上げた。

かくて世尊は壯士の腕を伸し屈めするが如き僅かの時にて、パーチーナワムサ林より沒してブエーサカラ林に顯はれ、設けの座に就いて、比丘等に語り給うた。「比丘等よ、私は今八大人覺を汝等の爲に說くであらう。善く聽いて之を思念せよ。比丘等よ、八大人覺とは何であるか。比丘等よ、この法は少欲の法にして大欲の法に非ず、知足の法にして不知足の法に非ず、遠離の法にして聚會の法に非ず、精進の法にして懶惰の法に非ず、住正念の法にして妄念の法に非ず、寂靜の法にして喧噪の法に非ず、有智者の法にして無智者の法に非ず、戲論を樂しまざる者の法にして戲論を樂しむ者の法に非ずといふことである。

大人八念而復得此四增上心現法樂居不難得者如是汝若遊東方必得安樂無衆苦患、若遊南方西方北方者必得安樂無衆苦患、阿那律陀若汝成就大人八念而復得此四增上心、現法樂居易不難得者我尙不說汝諸善法住況說衰退、但當晝夜增長善法而不衰退、阿那律陀若汝成就大人八念而復得此四增上心、現法樂居易不難得者汝於二果必得其一、或於現世得究竟智或復有餘得阿那含、阿那律陀汝當成就此大人八念亦應得此四增上心、現法樂居易不難得已、然後於枝提瘦水渚林中受夏坐也

* * * * * *

三三昧

(1)世尊告諸比丘有三三昧、云何爲三、空三昧無願三昧無想三昧、彼云何名爲空三昧、所謂空者觀一切諸法皆悉空虛、是謂名爲空三昧、彼云何名爲無想三昧、所謂無想者於一切諸法都無想念亦不可見是謂名爲無想三昧、云何名爲無願三昧所謂無願者於一切諸法亦不願求、是謂名爲無願三昧、如是比丘有不得此三三昧久在生死不能自覺寤。

* * * * * *

少欲の法にして大欲の法に非ずとは如何なる義かといふに、茲に比丘あり少欲にして、我は少欲なりと知られんと欲せず、知足にして、我は知足なりと知られんと欲せず、遠離にして、我は遠離を樂しむと知られんと欲せず、乃至戯論を樂しまずして、我は戯論を樂しまずと知られんと欲しない。比丘等よ、此を少欲の法にして大欲の法に非ずといふのである。知足の法にして不知足の法に非ずといふは、如何なる種類のものでも得られた衣、食、住、藥にて滿足するをいふのである。遠離の法にして聚會の法に非ずといふは、遠離を樂しむ比丘の處へ、比丘比丘尼優婆塞優婆夷、王又は王の大臣外道外道の弟子等來るに比丘卽ち遠離に傾き遠離に向ひ遠離に留まり出離を樂しむ心にて眞實に鼓舞する話のみをすることである。精進の法にして、不精進の法に非ずとは、茲に比丘が惡不善の法を廢捨し、善法を發得する爲に精進し堅忍不抜に勤めて善法に對する責任を捨てないことである。住正念の法にして妄念の法に非ずとは、茲に比丘が正念を持し、最上の記憶にて遠き以前の言語行爲を記憶想起することである。寂靜の法にして喧噪の法に非ずとは初禪乃至四禪に入つて住することである。有智者の法にして無智者の法に非ずとは茲に比丘智慧ありて法の興廢に就いて熟知し苦滅道の事に貫き刺す聖智あるをいふのである。戯論を樂しまざるものゝ法にして戯論を樂しむものゝ法に非ずとは、其の心、戯論を無くすることに向ひ、その戯論の絕滅に心靜まり住し解脫することであると。

斯くて阿那律はその安居をパーチーナワムサ林に過し、獨り遠離し不放逸に不屈不撓に住して間もなく良家の子が家を出てゝ沙門となれるその目的の無上の梵行を成就して……阿羅漢となつた。應果を得て後、阿那律は次の偈を歌うた。

世に上なき佛は我がおもひを知りて
意成の身もて神通に依り我が前に顯はれ
我がおもひの上なるを說き
戯論の樂しむ可からざるを示し給ひぬ。
我はその法を知りてその敎を樂しみて住せしかば
三明は達せられ佛の敎は成し遂げられぬ。

---

(1) 增一阿含卷六(昃一•69)

同本巴利增一阿含三の部一六三 (Vol. I. P. 299)

比丘等よ、貪欲を知り破壞し破却し滅盡し離脫する爲には三法を修習せねばならぬ。三法とは空定、無想定、無願定である。

比丘等よ、瞋恚、愚痴、忿、恨、覆、自尊、嫉、慳、諂、誑、眘、喧噪、慢、增上慢、憍、放逸を知り、此等を破壞し破却し滅盡し離脫する爲にはこの三法を修めねばならぬ。

舍利弗空三昧に遊ぶ

(1)一時佛在舍衞國祇樹給孤獨園。爾時尊者舍利弗清旦從靜室起至世尊所、頭面禮足在一面坐。爾時佛告舍利弗曰、汝今諸根清淨顏貌與人有異、汝今遊何三昧、舍利弗白佛言唯然世尊、我恒遊空三昧、佛告舍利弗言、善哉善哉舍利弗乃能遊於空三昧、所以然者諸虛空三昧者最尊第一、其有比丘遊虛空三昧計無吾我人壽命、亦不見有衆生、亦復不見諸行本來、已不見亦不造行本、已無行更不受有、已無受有不復受苦樂之報、舍利弗當知我昔未成佛道坐樹王下便作是念、此衆生類爲不剋獲何法流轉生死不得解脫、時我復作是念無有空三昧者便浪流生死不得至竟解脫、有此空三昧但衆生未剋使衆生起想著之念、以起世間之想便受生死之分、若得是空三昧亦無所願便得無願三昧、以得無願三昧不求死此生彼都無想念、時彼行者復有無想三昧可得娛樂、此衆生類皆由不得三昧故流浪生死、觀察諸法已便得空三昧已得空三昧便成阿耨多羅三藐三菩提、當我爾時以得空三昧七日七夜觀視道樹目未曾眴以此方便知、空三昧者於諸三昧爲第一三昧王三昧者空三昧是也、是故舍利弗當求方便辨空三昧、如是舍利弗當作是學。

* * * * * *

(2)一時佛在釋翅闍婆梨果園與大比丘衆五百人俱、是時尊者舍利弗尊者目乾連於彼夏坐已將五百比丘在人間遊化漸次來至釋翅村中、爾時行來比丘及住比丘各々自相謂

（1） 増一阿含巻四一（昃三•22）

同本、巴利中阿含第一五一經（Vol. III. p. 293.）

或時世尊は王舍城の養栗鼠竹園に在した。時に長老舍利弗は夕暮禪定より立つて世尊の御許に近づき、禮をなして一面に座した。世尊は舍利弗に宣ふやう。「舍利弗よ汝の諸根は清淨にして、膚の色が輝き如何にも清く靜かに見ゆる。舍利弗よ汝は今日多く如何なる住に住したのであるか」。「世尊、今日私は多く空性の住に住しました」。「善い哉善い哉舍利弗よ、汝は今日多く大人の住に住した。舍利弗よ、空性は實に大人の住である。それ故に舍利弗よ、もし比丘にして空性の住に住せんと望まばこの様に思ひ運らさねばならぬ。「私は道を歩いて村に入り、其處に乞行し更に道に依つて乞行より歸つた。其の往還に於て眼所識の境卽ち色に於て、耳所識の境卽ち聲に於て………意所識の境卽ち法に於て、私に欲、貪、瞋、痴の心の所礙があつたであらうか」と。斯く考へ來つて若しあつたと知らばその惡不善の法を廢捨する爲に勤めねばならぬ。若しなかつたと知れば、その比丘は喜と樂とを以て日夜善法を學ぶことを續けねばならぬ。

又舍利弗よ、その比丘はこの様に考へねばならぬ。私の五欲は廢せられたるか。五蓋は除かれたるか、五取蘊は知られたるか、四念住、四正勤、四神足、五根、五力、七菩提分、八正道、及び止と觀とは修められたるか、明と解脱とは實證せられたるか」と。舍利弗よ、斯く考へ來つて、未だ五欲と五蓋は除かれず、五取蘊は知られず、四念住乃至止觀は修められず、明と解脱とは實證せられぬならば、比丘はその廢捨のため知了のため修習のため實證のために勤めねばならぬ。又既に五欲と五蓋は除かれ五取蘊は知られ、四念住乃至止觀は修められ、明と解脱とは實證せられたりと知らば、その比丘は喜と樂とを以て日夜善法を學ぶことを續けねばならぬ。

舍利弗よ、遠き過去の如何なる沙門婆羅門も施食を淨めたるものは、斯くの如く思念し思考して施食の淨めをした。又遠き未來の如何なる沙門婆羅門も施食を淨めんとするものは、皆斯くの如く思念し思考して施食の淨めをなすであらう。又現在の如何なる沙門婆羅門も施食を淨むるものは、皆斯くの如く思念し思考して施食の淸めをする。それ故に舍利弗よ、汝等皆斯くの如く學ばねばならぬ。「思念し思考して施食を淨むべし」と。汝等皆斯くの如く學ばねばならぬ。

（2） 増一阿含巻四一（昃三•20）

同本、巴利中阿含第六七經（Vol. I. p.p. 456–462）

或時世尊はチヤートウマ村のアーマラキー林に在した。其時舍利弗と目犍連は約五百の比丘を率へて、世尊を見奉らんが爲にチヤートウマ村に到着した。到來の比丘と在住の比丘と挨拶を交し、座具を整へ、衣鉢を片づけるので騷がしい音を立てゝゐた。世尊は阿難を呼び何故に漁夫達が魚を奪ひ合ふ時の樣な大聲を發してゐるのかと尋ね、阿難より所以（わけ）を聞き比丘等を呼ばしめ給うた。

言共相問訊又且聲音高大、爾時世尊聞諸比丘音聲高大、卽告阿難曰今此園中是誰音響聲大乃爾如似破木石之聲、阿難白佛言今舍利弗及目連將五百比丘來在此、行來比丘久住比丘共相問訊故有此聲耳、佛告阿難曰汝速遣舍利弗目乾連比丘不須住此、是時阿難受敎已卽往至舍利弗目乾連比丘處卽語之曰、世尊有敎速離此去不須住此、舍利弗報曰唯然受敎、爾時舍利弗目乾連卽出彼園中將五百比丘涉道而去。爾時諸釋聞舍利弗目乾連比丘爲世尊所遣卽往至舍利弗目乾連比丘所頭面禮足白舍利弗曰諸賢欲何所趣向、舍利弗報曰我等爲如來所遣各求安處、是時諸釋白舍利弗言諸賢小留意我等當向如來懺悔、是時諸釋卽往至世尊處頭面禮足在一面坐白世尊言、唯願世尊原捨遠來比丘過咎、唯願世尊以時敎誨其中遠來比丘初學道者新來入法中未覩尊顏備有變悔之心、猶如茂苗不遇潤澤便不成就、今比丘亦復如是、不覩如來而去者恐能有變悔之心。是時梵天王知如來心中所念猶如力士屈伸臂頃從梵天沒來至如來所頭面禮足在一面而立、爾時梵天王白世尊言唯願世尊原捨遠來比丘所作愆過以時敎誨、其中或有比丘未究意者便懷變悔之心、彼人不覩如來顏像便有變意還就本業、亦如新生犢子生失其母憂愁不食此亦如是、若新學比丘不得覩如來者當遠離此正法。爾時世尊便受釋種之諫及梵天王犢子之喩、是時世尊顧盼阿難便生斯念、如來已受諸人民及天人之諫、是時阿難卽往至舍利弗目乾連比丘所而語之曰、如來欲得與衆僧相見天及人

比丘等は世尊の召に世尊の御許へ行き、御尋ねに依り騷がしかつたわけを申し上げた。世尊は命じ給うた。「比丘等よ、去れ、私は汝等を退ける。私の近くで住むことはならぬ」と。「世尊、かしこまりました」と御答して比丘等は座を立ち、世尊を禮し右繞し、衣鉢を取つてその場を立ち去つた。

其時、チヤートウマ村の釋種等は會議の爲に公會堂に集まつて居たが、比丘等が遠くより來るを見て近づいて、「何處へ行くのか」と尋ね、世尊に退けられた事を聞いて、比丘等にこの樣に曰つた。「それでは暫らく茲に待つてゐて下さい。私達の力で世尊をなだめ申す事が出來るかも知れぬから」と。比丘等はこれを承知した。そこで釋種等は世尊の御許に近づき禮をなし一面に座して左の樣に申上げた。「世尊、比丘僧伽を御許し下さい。迎へて下さい。以前世尊が僧伽を護持し給うた如く今も僧伽を護持して下さい。この僧伽の中には新らしく出家し、この法と律に歸して間のないものもあります。彼等にして若し世尊を見奉る事が出來ないならば、或は心變り、退轉するかも知れませぬ。世尊喩へば若い種子が水を得ない爲に枯れて行く樣に、又若い犢が母牛を見る事が出來ない爲に衰ろへて行く樣に、彼等も世尊を見奉る事が出來ない爲に、或は心變り退轉するかも知れませぬ。それ故に世尊、彼等僧伽を許し迎へて下さい。以前の樣に僧伽を護持して下さい」。

梵天サハンパテも、世尊の御心を知り、壯士が腕を伸べたり、屈めたりする程の早さで、梵天界より姿を沒して、世尊の前に顯はれ、一肩に衣を掛け合掌して、チヤートウマの釋種等と同じい願をした。

かくてチヤートウマの釋種等と梵天サハンパテとは若い種子と幼ない犢の喩で世尊の御免しを乞ひ得たので、目犍連は衆を促して、共に再び世尊の御許に近づき世尊を禮して一面に座した。世尊は舍利弗にこの樣に宣うた。「舍利弗よ、汝は私が比丘等を退けた時にどの樣に考へたか」。「世尊、其時私はこの樣に考へました。世尊は比丘等を退け給うた。世尊は今事なきを好み、現法樂住に專心に住し給ふのであらう。我々も今事なきを好み、現法樂住に專心に住するであらうと」。「待てよ舍利弗、待てよ舍利弗、舍利弗よ汝は再びこの樣な心を起してはならぬ」。世尊は次で大目犍連に尋ね給うた。「目犍連、汝は私が比丘衆を退けた時にはどの樣に考へたか」。「世尊、私はこの樣に考へました。世尊は比丘等を退け給うた。世尊は今事なきを好み、現法樂住に專心に住し給ふであらう。私は今（世尊に代つて）舍利弗と共に比丘等を率ゆるであらう」と。「善い哉善い哉、目犍連、比丘等を率ゆるは我が舍利弗か若くば汝である」。

時に世尊は比丘等を呼び掛け給うた。「比丘等よ、海に出づる者は四つの恐怖を待ち設けねばならぬ。四つとは何かといふと、波浪の恐れと鰐魚の恐れと渦の恐れと、ススカ魚の恐れである。比丘等のこの法と律とに出家したる者も又これと同じい四つの恐れを待ち設けねばならぬ。

民皆陳啓此理、爾時舍利弗告諸比丘曰、汝等各收攝衣鉢共往世尊所、然如來已受我懺悔、是時舍利弗目連將五百比丘、至世尊所、頭面禮足在一面坐、是時佛問舍利弗曰、吾向者遣諸比丘僧於汝意云何、舍利弗言向者如來遣諸衆僧、我便作是念、如來好遊閑靜處無爲、不樂在鬧、是故遣諸衆僧耳、佛告舍利弗曰、汝後復生何念、聖衆是時誰之累、舍利弗白佛言、時我復生此念、我亦當在閑靜獨遊、不處市鬧中、佛告舍利弗曰、勿作是說、亦莫生此念云、我當在閑靜之處也、如今聖衆之累豈非依舍利弗目乾連比丘乎。爾時世尊告大目乾連曰、我遣諸衆僧汝有何念、目乾連白佛言、如來遣衆僧、我便生斯念、如來欲得獨處無爲、故遣聖衆耳、佛告目乾連、汝後復生何念、目乾連白佛言、然今如來遣諸衆聖、我等宜還收集之、令不分散、佛告目乾連、善哉目連、如汝所說、衆中之標首唯吾與汝二人耳、自今已往目乾連當教誨諸後學比丘、使長夜之中永處安隱之處、無令中退墮落生死、若有比丘成就九法者、於現法中不得長大、云何爲九、與惡知識從事、親近非事、恒喜遊行、恒抱長患、好蓄財貨、貪著衣鉢、多虛妄亂意、非定無有慧明、不解義趣、不隨時受誨、是謂若比丘成就此九者、於現法中不得長大、有所潤及。設有比丘能成就九者便有所成辦、云何爲九、與善知識從事修行正法、不著邪業、恒遊獨處、不樂人間、少病無患、亦復不多畜諸財寶、不貪著衣鉢、勤行精進、無有亂心、聞義便解、隨時聽法、無有厭足、是謂若有比丘成就此九法者於現法中多所饒益、是故目連當念勤加住誨諸比丘、使長夜之中致無爲之處。

比丘等よ、波浪の恐れとは何であるか。比丘等よ、茲に良家の子が信ありて出家しこの様に思ふ、私は生老病死憂悲苦惱絶望に沈み、苦に敗れてゐる。恐らく彼等は私に此全苦蘊を終滅せしむる法を說くであらうと。然るに斯くの如く出家した彼に同梵行者が敎誨し說示する。行くには斯くの如くせねばならぬ。歸るには斯くの如くせねばならぬ。斯くの如く見渡さねばならぬ、斯くの如く眺めねばならぬ、腕を伸すには斯くせねばならぬ、屈めるには斯くせねばならぬ。斯くの如く僧伽梨衣を纏はねばならぬと。彼はこの様に思ふ。私は已前家にあつた時には他に敎へ示した。然るに今これら私の子か孫の様なものが私を敎へねばならぬ諭さねばならぬと思つてゐると。かくて彼は腹を立て學則を捨てゝ還俗する。比丘等よ、波浪の恐れとは怒と絶望の名である。

比丘等よ鰐魚の恐れとは何であるか。これも亦斯くの如く出家した彼に同梵行者が敎誨し說示する。これは食べねばならぬ、これは食べてはならぬ。これは飮まねばならぬ、これは飮んではならぬ。適當のものを食べねばならぬ、不適當のものを食べてはならぬ。適當のものを飮まねばならぬ、不適當のものを飮んではならぬ。正しき時に食べ或は飮まねばならぬ、非時に食べ或は飮んではならぬと。彼はこの様に思ふ。私は家にあつた時食べたいものを食べ飮みたいものを飮み、食べたくなく飮みたくないものを飮食せなんだ。私の飮食に適當のもの不適當のもの、正時非時といふ事はなかつた。今信仰ある家主達が非時に甘美な食物を送つて呉れても、私は口を閉ぢられた様にさせられてゐると。かくて彼は學則を捨てゝ還俗する。比丘等よこれが鰐魚の恐れから學則を捨てゝ還俗したものと曰はれる。鰐魚の恐れとは食に煩はさるゝ事の名である。

比丘等よ渦の恐れとは何であるか。彼は斯くの如く出家して早朝衣をつけ鉢を取り、身口意を護らず、正念に住せず、諸根を制御せずして村又は邑に乞行に入る。かくて彼は其の處で家主又は家主の子等が、五欲に圍繞せられて享樂しつゝあるを見て、私も家にあつた時は五欲に圍繞せられて享樂してゐた、家には富があるから、富を享樂しつゝ功德を積むことが出來ると。かくて彼は學則を厭うて還俗する。比丘等よこれが渦の恐れで學則を厭うて還俗すると曰ふことである。渦の恐れとは五欲の名である。

比丘等よススカ魚の恐れとは何であるか。彼は斯くの如く出家して、早朝衣をつけ鉢を取り、身口意を守らず、正念に住せず、諸根を制御せず、村又は邑に乞行に入り、其の處にて、不仕だらの着物の着方をした婦人を見て、欲に心を捕はれ學則を厭うて還俗する。比丘等よこれがススカ魚の恐れから學則を厭うて還俗したと曰はれる。比丘等よススカ魚の恐れとは婦人の名である。比丘等よこの法と律とに出家したるものにこの四つの恐れが待ち設けられるのである。

八十年欲心なし

佛[1]般涅槃後不久尊者薄拘羅遊王舍城在竹林加蘭哆園爾時有一異學、是尊者薄拘羅未出家時親善朋友、中後仿佯往詣尊者薄拘羅所共相問訊却坐一面、異學曰賢者薄拘羅我欲有所問、爲見聽不、尊者薄拘羅答曰異學隨汝所問、聞已當思、異學問曰賢者薄拘羅於此正法律中學道幾時、尊者薄拘羅答曰異學我於此正法律中學道已來八十年、異學復問曰賢者薄拘羅汝於此正法律中學道已來八十年頗憶曾行婬欲事耶、尊者薄拘羅語異學曰汝莫作是問、更問餘事、賢者薄拘羅於此正法律中學道已來八十年頗憶曾起欲想耶、異學汝應作是問、於此異學便作是語、我今更問賢者薄拘羅汝於此正法律中學道已來八十年頗憶曾起欲想耶、於是尊者薄拘羅因此異學問便語諸比丘諸賢、我於此正法律中學道已來八十年以此起貢高者都無是想。若尊者薄拘羅作此說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說、諸賢我於此正法律中學道已來八十年未曾有欲想、若尊者薄拘羅作是說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說諸賢我持糞掃衣來八十年若因此起貢高者都無是相、若尊者薄拘羅作此說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說、諸賢我持糞掃衣來八十年未曾憶受居士衣未曾割截作衣未曾請他比丘作衣、未曾用針縫衣、未曾持針縫囊乃至一縷、若尊者薄拘羅作是說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說、諸賢我乞食來八十年若因此起貢高者都無是相、若尊者薄拘羅作是說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅

(1) 中阿含卷八(昃五•48)

同本巴利中阿含第一二四經 (Vol. III. p.p. 124 foll.)

或時尊者薄拘羅(Bakkula)は王舍城の養栗鼠竹園にゐられた。其の時、尊者在俗の友人であつた無衣迦葉(Acela-Kassapa)は、尊者の所へ行つて互に挨拶を交換し一面に座して尊者にこのやうに日つた。「薄拘羅よ、あなたは出家して何年になるか」、「出家してから八十年になる」。「薄拘羅よ、あなたはこの八十年の間に何度婦人と交つたか」。「迦葉よ、お前は私にそのやうな問をしてはならぬ。迦葉よ、この樣に問ふが宜しい。薄拘羅よあなたはこの八十年間何度欲の思を起したかと」。

「迦葉よ、私はこの八十年間、未だ嘗て欲の思を起したことを知らない。友よ、私はこの八十年間未だ嘗て害想を起したことを知らない。友よ、私はこの八十年間、未だ嘗て欲覺を起したことを知らない。友よ、私はこの八十年間、未だ嘗て害覺を起したことを知らない。………未だ嘗て在家の衣を受けたことを知らない。………未だ嘗て刄物にて衣を切つたことを知らない。………未だ嘗て針にて衣を縫つたことを知らない。………未だ嘗て色にて衣を染めたことを知らない。………未だ嘗て迦稀那衣を縫つたことを知らない。………未だ嘗て同學者の衣を縫ふ手傳をしたことを知らない。………招待を受けたことを知らない。………誰か私を招待すればよいといふ考を起したことを知らない。………在家の宅に入りて座し………其處に食事し………婦人の美しい姿を心に捕へたことも知らない。………婦人に說法し唯の四句の偈を說いたことも知らない。………比丘尼の住居に行つて比丘尼に法を說いたことも知らない。………式沙摩那に法を說いたことも沙彌に法を說いたことも知らない。………又この八十年、私は他を出家させた事も具足戒を授けたことも、他に助力を與へた事も、沙彌に給事をさせた事も、………溫浴室で浴みをしたことも、………石鹼をつけて洗つたことも、………同梵行者の身體をもみ療治した事も知らない。又この八十年たむし程の病氣にかゝつたことも知らず、ハリータキー丸程の藥を用ゐたことも知らない。凭り掛り、横に臥つたことも知らない。雨期の三月を村の住居で過したことも知らない。友よ、私は七日まで罪の垢れを以て國の布施食を食べたが八日目に慧明が生じたのである。

次に尊者優波掘多、阿育王に尊者薄拘羅の塔を示す、『王應に供養すべし」。王問うて曰く「彼れ何の功德かある」。答へて曰く「彼れ無病第一、乃至人の爲に一句の法を說かず、寂然として言ふ所なし。王曰く「一錢を以て供養せよ」諸臣王に白す。「功德既に等し。何が故に此に一錢を供養するや」王告げて曰く、「無明痴を除き智慧能く鑒察すと雖も又薄垢の名ありと雖も、世に於て何の益あらん」。時に彼の一錢還り來つて、王の所へ至る。衆皆この希有の事を見て尊者の小欲知足を讚す。雜阿含卷二十三(辰三.36)。Divyāvadāna p. 396.

作是說、諸賢我乞食來八十年未曾憶受居士請、未曾超越乞食、未曾從大家乞食於中當得淨好極妙豐饒食噉含消、未曾視女人面、未曾憶入比丘尼坊中、未曾憶與比丘尼共相問訊乃至道路亦不共語、若尊者薄拘羅作是說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說諸賢我於此正法中學道已來八十年未曾憶畜沙門、未曾憶爲白衣說法、乃至四句頌亦不爲說、若尊者薄拘羅作是說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說諸賢我於此正法律中學道已來八十年未曾有病乃至彈指頂頭痛者、未曾憶服藥乃至一片呵梨勒、若尊者薄拘羅作是說是謂尊者薄拘羅未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說、諸賢我結跏趺坐於八十年未曾猗壁猗樹、若尊者薄拘羅作此說是謂尊者薄拘聞未曾有法。復次尊者薄拘羅作是說、諸賢我於三日夜中得三達證若尊者薄拘羅作是說是謂尊者薄拘羅未曾有法。

復次尊者薄拘羅作是說、諸賢我結跏趺坐而般涅槃、尊者薄拘羅便結跏趺坐而般涅槃若尊者薄拘羅結跏趺坐而般涅槃、是謂尊者薄拘羅未曾有法。

* * * * * *

(1)世尊復曰、有三示現、如意足示現、占念示現、敎訓示現。云何如意足示視。有一沙門梵志有大如意足有大威德有大福祐有大威神、於如意足心得自在、行無量如意足之功德、謂分

「薄拘羅よ、私は以上の事を薄拘羅の奇蹟とし不思議として記憶するであらう。薄拘羅よ、私も亦この法と律とに於て出家し具足戒を得ることが出來るであらうか」と。

かくて無衣迦葉は、この法と律とに於て出家し具足戒を受けたが、間もなく遠離し不放逸に熱心に住して、良家の子が家を捨てゝ出家になつた目的である無上の梵行の終極を現法に自ら實證して、「生は盡き、梵行は成就せり、成すべき事はなし終れり、これより他の生あることなし」と知つて阿羅漢の一人となつた。

尊者薄拘羅は他の時、上衣をとりて、住房より住房へとめぐり、尊者達よ、進めよ進めよ、私は今日入涅槃するであらうと曰つて、(涅槃に入つた)。これも尊者薄拘羅の奇蹟不思議として我等は受持するであらう。

---

(1) 中阿含卷三五(昃五・74)

參照巴利增一阿含三の部六〇 (Vol. I. p. 170)

婆羅門よ、この神變に三種ある。神通神變 (Iddhipātihāriya) と記心神變 (Adesanāpātihāriya) と敎誡神變 (Anusāsanipātihāriya) である。

何をか神通神變といふ。婆羅門よ、茲に人あつて、種々の神通を有し、

一爲衆、合衆爲一、一則住一、有知有見不礙石壁猶如行空、沒地如水履水如地、結跏趺坐上昇虛空猶如鳥翔、今此日月有大如意足、有大威德有大福祐有大威神、以手捫摸身至梵天、摩納是謂如意足示現。摩納云何占念示現、有一沙門梵志、以他相占他意、有是意如是意實有是意、無量占不少占彼一切眞諦而無有虛設、不以他相占他意者、但以聞天聲及非人聲而占他意有是意如是意實有是意、無量占不少占彼一切眞諦而無有虛設、不以他相占他意、亦不聞天聲及非人聲占他意者但以他念他思他說聞聲已占他意有是意如是意實有是意、無量占不少占彼一切眞諦而無有虛設、不以他相占他意、亦不以聞天聲及非人聲占他意、亦不以他念他思他說聞聲已占他意者但以見他入無覺無觀定見已作是念、如是賢者不念不思如意所願、彼賢者從彼定寤如是念、彼從此定寤即如是如是念、彼亦占過去亦占未來亦占現在久所作久所說亦占安靜處住安靜處亦占至心心所有法、摩納是占念示現。摩納云何敎訓示現、有一沙門梵志、自行如是道如是迹、行此道行此迹已、諸盡得無漏、心解脫慧解脫自知自覺自作證成就遊、生已盡、梵行已立、所作已辨、不更受有、知如眞、彼爲他說、我自行如是道如是迹、行此道行此迹已諸漏已盡得無漏心解脫慧解脫自知自覺自作證成就遊、生已盡梵行已立所作已辨、不更受有知如眞、汝等共來亦自行如是道如是迹乃至、知如眞。彼亦自行如是道如是迹乃至知如眞。彼爲他說、他爲他說、如是展轉無量百千、摩納是謂敎訓示現。

一にして多となり、多にして一となり、或は現じ或は沒し、牆を過ぎ壁を過ぎ、山を貫いて障礙なきこと空を行くが如く、大地に出沒すること水中の如く、水上を走つて水面を破らざること大地を行くが如く、空中に趺座して行くこと飛鳥の如く、かの大威德大勢力ある月日をも、手を以て捫摸し、肉身の儘かの梵天宮までも到るといふのが神通神變である。

何をか記心神變といふ。婆羅門よ、茲に人あつて、前兆を見て、「汝の心はかくかく、汝はこの樣に考へてゐる。汝の考は斯くの如し」と言ひ當てる。幾度やつても、總て言ひ當つて間違はない。又或る人は、前兆に依らず、人、非人及び諸天の聲を聞いて、「汝の心はかく〻〻、汝はこの樣に考へてゐる。汝の考は斯くの如し」と言ひ當てる。幾度やつても、言ひ當つて間違はない。又或る人は、前兆に依らず、人、非人及び諸天の聲を聞かず、思つてゐる事が自然に口から洩れた語（喩へば夢の中のたわごとの如き）を聞いて、「汝の心は斯く〻〻、汝はこの樣に考へてゐる、汝の考は斯くの如し」と言ひ當てる。幾度やつても言ひ當つて間違はない。又或る人は前兆に依らず、人非人及び諸天の夢に依らず、思つてゐる事が自然に口から洩れた語に依らず、覺と觀とを離れ定に住した人の心を、心を以て知り、「この人は今心行を集中してゐられる。この集中の次にこういふ覺を起されるであらう」と言ひ當てる、幾度やつても言ひ當つて間違はない。これが記心神變である。

何をか教誡神變と曰ふ。婆羅門よ、茲に人あつてこの樣に教ゆる。「斯く考へよ、斯く考へるな。かく思へよ、斯く思ふな。これを捨てよ、これを實證せよ」と。これが教誡神變である。

婆羅門よ、この三種の神變の中、孰れを勝れたりと思ふか。

尊者喬答摩よ、神通神變はその神變をなす人のみその神變を享樂し、その神變をなす人丈けのものであり、幻術の如く見ゐます。又記心神變も、その神變をなす人のみその神變を享樂し、その神變をなす人丈けのものであり、幻術の如く見ゐます。尊者喬答摩よ、私は教誡神變がこの三神變の中で一番勝れて居ると思ひます。

大火を抱くも女を抱く勿れ

一[1]時佛遊拘薩羅在人間與大比丘衆翼從而行。爾時世尊則於中路忽見一處有大木積洞然俱熾。世尊見已便下道側更就餘樹敷尼師檀結跏趺坐、告諸比丘、汝等見彼有大木積洞然俱熾耶、時諸比丘答曰、見也世尊、世尊復告諸比丘曰、於汝意云何、謂大木積洞然俱熾、若抱若坐若臥、謂刹利女梵志居士工師女年在盛時沐浴香熏著明淨衣華鬘瓔珞嚴飾其身若抱若坐若臥、何者爲樂。時諸比丘白曰世尊前者是甚苦、後者是甚樂。

世尊告曰、我爲汝說不令汝等學沙門失沙門道、汝欲成無上梵行者寧抱木積洞然俱熾若坐臥、汝雖因此受苦或死、然不以是身壞命終趣至惡處生地獄中、若愚癡人犯戒不精進生惡不善法非梵行稱梵行非沙門稱沙門、若抱刹利女梵志居士工師女年在盛時沐浴香熏著明淨衣華鬘瓔珞嚴飾其身若臥者、彼愚癡人因是長夜不善不義受惡報身壞命終趣至惡處生地獄中。是故汝等當觀自義觀彼義觀兩義、當作是念、我出家學不虛不空有果有報有極安樂生諸善處而得長壽受人信施衣被飲食牀褥湯藥令諸施主得大福祐得大果報得大光明者當作是學。

世尊復告諸比丘曰於意云何、若有力士以緊索毛繩絞勒其蹲斷皮斷皮已斷肉斷肉已斷筋斷筋已斷骨斷骨已至髓而住、若從刹利梵志居士工師受其信施按摩身體支節手足、何者爲樂。時諸比丘白曰世尊前者是甚苦後者是甚樂。世尊告曰我爲汝說不令汝等學沙門失沙門道、汝欲成無上梵行者寧令力士以緊索毛繩絞勒其蹲斷皮乃至斷骨已

(1)　中阿含巻一(昃五・7-9)

同本巴利増一阿含七の部六八 (Vol. IV. p.p. 98-102)

或る時、世尊は數多の比丘を連れて、喬薩羅國を遊行して居られたが、途中、或る場所で盛んに火炎を揚げて火の燃えて居るのを御覽なされた。世尊は道を外けて樹の下に座を設けさせ、その上に座つて比丘等を呼び掛け給ふた。「比丘等よ、汝等はあの火炎を揚げて燃え盛る火を見るか」。「世尊、御言葉の通りであります」。

「比丘等よ、汝等は如何に思ふか。あの炎々と燃え盛る大火蘊を抱いて座臥すると、刹帝利の姫、婆羅門の娘、家主の女の軟かい手足を抱いて座臥すると何れか勝れると思ふか」。「世尊、それは少女の軟かい手足を抱いて座臥する方が勝つてゐます。あの燃え上つてゐる火を抱くは苦惱であります」。

「比丘等よ、私は汝等に告げ知らせる。破戒惡法不淨にして、その行爲疑はしく、其の所行を覆ひ包み、沙門に非ずして沙門と見せ、梵行者に非ずして梵行者と見せ、內心腐敗し、欲心溢れ、價値なき者が、燃え立つ火を抱いて座臥するは、猶少女の軟膚を抱いて座臥するよりも勝つてゐる。何故なれば、前者の場合には、死ぬるか、死ぬる程の苦しみを受ける丈けで死後苦所惡趣無樂所たる地獄に墮する因とはならないが、後者の場合はその者の永劫の不利苦惱となり、死後、苦所惡趣無樂所たる地獄に墮するからである」。

「比丘等よ、汝等は如何に思ふか。力の強い男が丈夫な繩で、兩方の腨を縛して、ゴスゴスと磨するとする。皮を破り肉を破り筋を切り骨を碎き髓に至つて留まると、富める刹帝利婆羅門家主の欵待を受けると何れが勝れると思ふか」。「世尊、それは富める刹帝利婆羅門家主の欵待を受ける方が勝つて居ます。兩腨を縛られて磨られ皮を破り肉を破り骨を碎くは苦惱であります」。

「比丘等よ、私は汝等に告げ知らせる。破戒惡法不淨にして………價値なき者が、力の強い男に丈夫な繩で兩腨を縛られてゴス々々と磨られ、皮を破り肉を破り筋を切り骨を碎き髓に至つて留まるは、猶富める刹帝利婆羅門家主の欵待を受けるよりも勝つてゐる。何故なれば、前者の場合では、死ぬるか死ぬる丈けの苦しみを受ける丈けで、その事が死後墮獄の因とならないが、後者の場合に於ては、長劫にその者の不利となり苦惱を招くものとなり、死後その爲に地獄に墮するからである。

至髓而住、汝雖因此受苦或死、然不以是身壞命終趣至惡處生地獄中、若愚癡人犯戒不精進生惡不善法、非梵行稱梵行、非沙門稱沙門、從刹利梵志居士工師受其信施按摩身體支節手足彼愚癡人因是長夜不善不義受惡報身壞命終趣至惡處生地獄中。

復告諸比丘曰於意云何、若有力士以瑩磨利刀截斷其髀、若從刹利梵志居士工師、受信施禮拜恭敬將迎、何者爲樂。時諸比丘白曰世尊、前者是甚苦、後者是甚樂。世尊告曰、我爲汝說、不令汝等學沙門失沙門道、汝欲成無上梵行者、寧令力士以瑩磨利刀截斷其髀、彼雖因此受苦或死、然不以是身壞命終、趣至惡處生地獄中、若愚癡人、犯戒不精進、生惡不善法、非梵行稱梵行、非沙門稱沙門、從刹利梵志居士工師受信施禮拜恭敬將迎、彼愚癡人因是長夜不善不義、受惡報身壞命終趣至惡處生地獄中。

世尊復告諸比丘曰於意云何、若有力士以鐵銅鍱洞然俱熾纏絡其身、若從刹利梵志居士工師受信施衣服、何者爲樂。時諸比丘白曰、世尊前者是甚苦、後者是甚樂。世尊告曰我爲汝說、不令汝等學沙門失沙門道、汝欲成無上梵行者、寧令力士以鐵銅鍱洞然俱熾纏絡其身、汝雖因此受苦或死、然不以是身壞命終趣至惡處生地獄中、若愚癡人犯戒不精進、生惡不善法、非梵行稱梵行、非沙門稱沙門、從刹利梵志居士工師受信施衣服、彼愚癡人因是長夜不善不義、受惡報身壞命終趣至惡處生地獄中。

世尊復告諸比丘曰於意云何、若有力士以熱鐵鉗鉗開其口、便以鐵丸洞然俱熾著其口

「比丘等よ、汝等は如何に考へるか。力の強い男に磨きすました利刀で髀を切られるこ、富める刹帝利婆羅門家主の合掌を受けるこ何れが勝れてゐるこ思ふか」。「世尊、それは富める刹帝利婆羅門家主の合掌を受ける方が勝つてゐます。力の強い男に磨きすました利刀で髀を切られば苦惱であります」。

比丘等よ、私は汝等に告げ知らせる。破戒惡法不淨にして………價値なき者が、力の強い男に磨きすました利刀で髀を切られるは、富める刹帝利婆羅門家主の合掌を受けるよりも勝つてゐる。何故なれば、前者の場合には死ぬるか、死ぬる位の苦惱を受ける丈けで、死後墮獄の因こならないが、後者の場合には、長劫にその者の不利こなり、苦惱の因こなり、死後地獄に墮するからである。

「比丘等よ、汝等は如何に考へるか。力の強い男に、赤熱した炎を吹いてゐる鐵の板を身體中に卷き付けられるこ、富める刹帝利婆羅門家主の信施の衣を享けるこ何れが勝つてゐるこ思ふか」。「世尊、それは富める刹帝利婆羅門家主の信施の衣を享ける方が勝つてゐます。赤熱した炎を吹いてゐる鐵の板を身體中へ卷き付けられるは苦惱であります。

「比丘等よ、私は汝等に告げ知らせる。破戒惡法不淨にして………價値なき者が、力の強い男に赤熱した炎を吹いてゐる鐵の板を身體中に卷き付けられるのは、猶、富める刹帝利婆羅門家主の信施の衣を享けるよりも勝つてゐる。何故なれば前者の場合には死ぬるか、死ぬる程の苦惱を受ける丈けで、死後墮獄の因こはならないが、後者の場合にては、永劫にその者の不利こなり苦惱の因こなり、死後地獄に墮するからである。

中、彼熱鐵丸燒脣、燒脣已燒舌、燒舌已燒齒、燒齒已燒咽、燒咽已燒心、燒心已燒腸、燒腸胃、已以下過、若從刹利梵志居士工師受信施食無量衆味、何者爲樂。時諸比丘白曰、世尊前者是甚苦、後者是甚樂。世尊告曰、我爲汝說、不令汝等學沙門失沙門道、汝欲成無上梵行者寧令力士以熱鐵鉗鉗開其口、汝雖因此受苦或死、然不以是身壞命終趣至惡處生地獄中、若愚癡人犯戒不精進生惡不善法、非梵行稱梵行、非沙門稱沙門、從刹利梵志居士工師受信施食無量衆味、彼愚痴人因是長夜不善不義受惡法報、身壞命終生地獄中。

世尊復告諸比丘曰、於意云何、若有力士以鐵銅牀洞然俱熾、强逼使人坐臥其上、若從刹利梵志居士工師、受其信施牀褥臥具、何者爲樂。時諸比丘白曰、世尊前者是甚苦、後者是甚樂。世尊告曰吾爲汝說、不令汝等學沙門失沙門道、汝欲成無上梵行者、寧令力士以鐵銅牀洞然俱熾、强逼使人坐臥其上、汝雖因此受苦或死、然不以是身懷命終生地獄中。若愚癡人犯戒不精進生惡不善法、非梵行稱梵行、非沙門稱沙門、從刹利梵志居士工師受其信施牀褥臥具、彼愚癡人因此長夜不善不義受惡報、身壞命終生地獄中。

世尊復告諸比丘曰、於意云何、若有力士以大鐵鍋釜洞然俱熾、撮擧人已倒著釜中、若從刹利梵志居士工師、受信施房舍泥治堊灑窓戶牢密爐火熅㬉、何者爲樂。時諸比丘白曰、世尊前者是甚苦、後者是甚樂。世尊告曰我爲汝說、不令汝等學沙門失沙門道、汝欲成無上梵行者寧令力士以大鐵釜洞然俱熾撮擧人已倒著釜中、汝雖因此受苦死、然不以是

「比丘等よ、汝等は如何に考へるか。力の強い男が炎々と炎を吹く赤熱した鐵の火箸で、口を開いてその中へ赤熱した火鐵の玉を入れる。唇を燒き口を燒き舌を燒き、喉を燒き胸を燒き腹を燒き腸を燒いて下から出る。これと比べて、富める刹帝利婆羅門家主の信施の食を享くるは何れが勝れると思ふか」。「世尊、それは富める刹帝利婆羅門家主の信施の食を享くる方が勝れてゐます。力の強い男に火鐵の火箸で口を開けられ、火鐵の玉をその口の中へ入れられるは苦惱であります」。

「比丘等よ、私は汝等に告げ知らせる。破戒惡法不淨にして………價値なき者が、力の強い男に火鐵の火箸で口を開けられ、火鐵の玉をその口の中へ入れられ、唇を燒き口を燒き舌を燒き、喉を燒き胸を燒き腸を燒くは、猶富める刹帝利婆羅門家主の信施の食を享くるよりも勝つてゐる。何故なれば、前者の場合には死ぬるか、死ぬる程の苦しみを受ける丈けで、死後墮獄の因とならないが、後者の場合にては、永劫にその人の不利となり苦惱の因となり、死後地獄に墮するからである。

比丘等よ、汝等は如何に考ふるか。力の強い男が頭を捕へて炎の燃え立つてゐる鐵の床の上に鐵の枕をさせて臥させると、富める刹帝利婆羅門家主の信施の座臥具を享くると何れが勝れると思ふか」。「世尊、それは富める刹帝利婆羅門家主の信施の座臥具を享くる方が勝つてゐます。力の強い男に頭を捕へられて炎の燃え立つてゐる鐵の床の上に鐵の枕をして臥せられるは苦惱であります」。

「比丘等よ、私は汝等に告げ知らせる。破戒惡法不淨にして………價値なき者が、力の強い男に頭を押へられて、炎の燃え立つてゐる鐵の床の上に鐵の枕をして臥せられるのは、猶、富める刹帝利婆羅門家主の信施の座臥具を享けるよりも勝つてゐる。何故なれば、前者の場合には、死ぬるか、死ぬ程の苦しみを受ける丈けで、死後墮獄の因とならないが、後者の場合では、永劫にその人の不利となり、苦惱の因となり、死後地獄に墮するからである。

「比丘等よ、汝等は如何に考へるか。力の強い男が足を上に頭を下に捕へて、炎の燃え立つて鐵の釜の中へ投げ入れる。其處で水泡の如く煮え立ち、一度は浮び一度は沈み、一度は横に流れると、富める刹帝利婆羅門家主の信施の住房を享くると何れが勝れると思ふか」。「世尊、それは富める刹帝利婆羅門家主の信施の住房を享くる方が勝つてゐます。力の強い男に頭下足上に捕へられて、炎の燃え立つてゐる鐵の釜の中へ投げ入れられ水泡の如く煮え立ち上下するは苦惱であります」。

「比丘等よ、私は汝等に告げ知らせる。破戒惡法不淨にして………價値なき者が力の強い男に頭下足上に捕へられ炎の燃え立つてゐる鐵の釜の中へ投げ込まれ、水泡の如く煮え立ち、一度は浮び一度は沈み一度は横に流れるは、猶富める刹帝利婆羅門家主の信施の住房を享けるよりも勝つてゐる。何故なれば前者の場合に於ては、死ぬるか死ぬ程の苦しみを受ける丈けで、死後墮獄の因とならないが、後者の場合は、永劫にその人の不利となり苦惱の因となり、死後地獄に墮するからである。

身壞命終趣至惡處生地獄中、若愚癡人犯戒不精進生惡不善法、非梵行稱梵行非沙門稱沙門、從刹利梵志居士工師受信施房舍泥治堊灑窓戸牢密爐火熅煖、彼愚癡人因是長夜不善不義、受惡報身壞命終趣至惡處生地獄中。說此法時、六十比丘漏盡結解、六十比丘捨戒還家、所以者何、世尊敎誡甚深甚難、學道亦復甚深甚難、

* * * * * *

佛[1]般涅槃後不久尊者阿難遊於金剛住金剛村中、是時尊者阿難無量百千衆前後圍繞而爲說法、於是尊者金剛子亦在衆中、尊者金剛子心作是念、此尊者阿難、故是學人未離欲耶、我寧可入如其像定以如其像定觀尊者阿難心、於是尊者金剛子便入如其像定以如其像定觀尊者阿難心、尊者金剛子卽知尊者阿難故是學人而未離欲、於是尊者金剛子從三昧起向尊者阿難而說頌曰。

山林靜思惟、　涅槃令入心、　瞿曇禪無亂、　不久息跡證、

於是尊者阿難、受尊者金剛子敎、離衆獨行精進無亂、族姓子所爲剃除鬢髮著袈裟衣至信捨家、無家學道者唯無上梵行訖彼卽於現法自知自覺自作證成就遊、生已盡梵行已立所作已辨、不更受有知如眞。

* * * * * *

「比丘等よ、それ故に汝等はこの様に學ばねばならぬ。我々は布施者に大利大益あり、我々の出家も無効でなく、增上ある様に、衣食座臥具湯藥の布施を受けやうと。比丘等よ、この様に學ばねばならぬ。比丘等よ、自身の事を考へても、不放逸に依つて成し遂げ得るに充分であり、又他の利を考へても不放逸に依つて成し遂げ得るに充分であり、又自他の利を共に考へても、不放逸になし遂げ得るに充分である」。

世尊この教誡を說き給ふ時、約六十の比丘は口より熱血を吐き、約六十の比丘は、「世尊、困難であります、非常に困難であります」と云うて、學を捨てゝ還俗し、約六十の比丘は依着を離れて、漏より心を解脫した。

(1) 中阿含第八(昃五•47) 同本巴利上座偈註

At a latei time, shortly after the Master had passed away, Vajjiputta formed an agreement with the chief Theras to preserve the Dhamma intact, and travelled with them from place to place. One day he saw the venerable Ānanda, who was still a student only, surrounded by a large congregation, teaching them the Norm. And to call forth endeavour in him to reach the higher Paths, he uttered this verse:

Come thou and plunge in leafy lair of trees,
Suffer Nibbāna in thy heart to sink!
Study and dally not, thou Gotama!
What doth this fingle fangle mean to thee? (119)

Hearing this and speech of others, dispelling poisonous odours, Ānanda grew agitated, and most of the night walked to and fro meditating. Then, lying down on his couch, he won arahatship.

— Thera Gātha Commentary.

— Psalms of the Brethren p. 106.

天使經

若[1]有衆生生於人間、不孝父母、不知尊敬沙門梵志、不行如實、不爲福業、不畏後世罪、彼因緣此身壞命終生閻王境界、閻王人收送詣王所白曰、天王此衆生本爲人時、不孝父母、不知尊敬沙門梵志、不行如實、不爲福業、不畏後世罪、唯願天王處當其罪、於是閻王以初天使善問善檢善敎善訶、汝頗曾見初天使來耶、彼人答曰、不見也、閻王復問、汝本不見一村邑中或男或女幼少嬰孩身弱柔軟仰向自臥大小便中不能語父母、父母抱移離不淨處澡浴其身令得淨潔。彼人答曰見也、閻王復問、汝於其後有識知時、何不作是念我自有生法不離於生、我應行妙身口意業。彼人白曰天王我了敗壞長衰永失耶。閻王告曰、汝了敗壞長衰永失今當考汝如治放逸行放逸人汝此惡業非父母爲非王非天亦非沙門梵志所爲、汝本自作惡不善業、是故汝今必當受報。閻王以此初天使善問善檢善敎善訶已、復以第二天使善問善檢善敎善訶、汝頗曾見第二天使來耶。彼人答曰不見也。天王閻王復問、汝本不見一村邑中或男或女年耆極老壽過苦極命垂欲訖、齒落頭白身曲僂步拄杖而行、身體戰動耶。彼人答曰見也。閻王復以第三天使善問善檢善敎善訶、汝頗曾見第三天使來耶。彼人答曰不見也。天王閻王復問、汝本不見一村邑中或男或女疾病困篤、或坐臥床或坐臥榻或坐臥地、身生極苦甚重苦不可愛念令促命耶。彼人答曰見也。閻王復復以第四天使善問善檢善敎善訶。汝頗曾見第四天使來耶。彼人答曰、不見也。天王閻王復問汝本不見一村邑中或男或女若死亡時、或一二日至六七日烏鵄所啄、豺狼所食、以火

(1) 中阿含巻一二(昃五•71-72)同本巴利増一阿含三の部三五 (Vol. 1. p. 138)

Death has three messengers, O priests. And what are the three? Suppose, O priests, one does evil with his body, his voice and his mind. Having done evil, he arrives after death at a punishment, a place of suffering, perdition, hell. Then, O priests, the guardians of hell seize him by the arms and they show him to Yāma, the ruler of the dead, saying, "Sire, this man did not do his duty to his friends, to his parents to the monks, or to the brahmans, nor did he honour his elders among his kinsfolk. Let your majesty inflict punishment upon him."

Then, O priests, king Yāma questions and addresses him touching the first of death's messengers. "O man! Did you not see the first of death's messengers visibly apear among men?" He replies, "Lord, I did not."

Then, O priests, king Yāma says to him, "O man! Did you not see among men a woman or a man, eighty or ninety or a hundred years of age, decrepit, crooked as the curved rafter of a gable roof, bowed down, leaning on a staff, trembling as he walked, miserable, with young long fled, broken-toothed, gray-haired and nearly bald, tottering, with wrinkled brow, and blotched with freckles?" He replies, "Lord, I did."

Then king Yāma says to him, "O man! Did not occur to you, being a person of mature intelligence and years, 'I also am subject to old age, and in no way exempt. Come now! I will act nobly with body, voice, and mind'?" He replies, "Lord, I could not, Lord, I did not think."

Then, O priests, king Yāma says to him, "O man! Through thoughtlessness you failed to act nobly with body, voice and mind. Verily, it shall be done unto you, O man, in accordance with your thoughtlessness. And it was not your mother who did this wickedness, nor was it your father, nor your brother, nor your sister, nor your friends and companions, nor your relatives and kinsfork, nor the deities, nor the monks and brahmans; but it was you yourself who did this wickedness, and you alone shall feel its consequences,"

Then, O priests, king Yāma questions and addresses him touching the second of death's messengers. "O man! Did you not see the second of death's messengers?" He replies "Lord, I did not."

Then king Yāma says to him, "O men! Did you not see among men women or men, diseased, suffering, grievously sick, rolling in their own filth, who when lying down had to be lifted up by others and had to be laid down again?" He replies, "Lord, I did."

燒或埋地中、或爛腐壞耶。彼人答曰見也。閻王復問、汝於其後有識知時何不作是念、我自有老法病法死法不離於死、我應行妙身口意業。彼人白曰、天王我了敗壞長衰永失。閻王復以第五天使善問善檢善敎善訶。汝頗曾見第五天使來耶。彼人答曰不見也。天王閻王復問、汝本不見王人捉犯罪人、種種考治截手截足、或截手足截耳截鼻、或截耳鼻、或臠臠割拔鬚拔髮或拔鬚髮或著檻中、衣裹火燒或以沙壅草纏火燒、或內鐵驢腹中、或著鐵豬口中或置鐵虎口中燒、或安銅釜中、或著鐵釜中煮、或段段截、或利叉刺或以鈎鈎、或臥鐵床以沸油燒、或坐鐵杵擣、或以龍蛇蜇或以鞭鞭、或以杖撾或以棒打、或生貫高標上、或梟其首耶。彼人答曰見也。天王閻王復問、汝於其後有識知時、何不作是念、我今現見惡不善法。彼人白曰天王我了敗壞長衰永失耶。閻王告曰、汝了敗壞長衰永失、今當考汝如治、放逸行放逸人汝此惡業非父母爲非王非天、亦非沙門梵志所爲、汝本自作惡不善業、是故汝今必當受報。閻王以此第五天使善問善檢善敎善訶已即付獄卒、獄卒便捉持著四門大地獄中、於是頌曰、

四柱有四門　壁方十二楞　以鐵爲垣墻　其上鐵覆蓋
地獄內鐵地　熾燃鐵火帀　深無量由延　乃至地底住
極惡不可受　火色難可視　見已身毛竪　怖懼怖甚苦
彼墮生地獄　脚上頭在下　誹謗諸聖人　調御善淸善

Then king Yāma questioned him how he did act after having seen the disease, and rebuked him as to his thoughtlessness as in the case of the first of death's messengers.

Then, O priests, king Yāma questions and addresses him touching the third of death's messengers. "O man! Did you not see the third of death's messengers?" He replies, "Lord, I did not."

Then king Yāma says to him, "O man! Did you not see among men a woman or a man that had been one day dead, or two days dead, or three days dead, and become swollen, black, and full of putridity?" He replies, "Lord, I did."

Then king Yāma questions him how he did act after having seen the dead, and rebuked him as to his thoughtlessness as in the case of the first of death's messengers. Then, O priests, when king Yāma has questioned and addressed him touching the third of death's messengers, he becomes silent.

Then, O priests, the guardians of hell inflict on him the torture called the fivefold pinion: they force a heated iron stake through his other hand; heated iron stakes through his foot, through his other foot, through the middle of his breast. There he experiences grievous, severe, sharp, and bitter pains; but he does not die so long as that wickedness is exhausted.

Then the gaurdians of hell lay him down, and hack him with axes. ....

Then the gaurdians of hell place him feet up, head down, and hack him with hatchets. ....

Then the gaurdians of hell harness him to a chariot, and they make him go forward and they make go back over ground that is blazing, flaming, and glowing. ....

Then the gaurdians of hell take him feet up, head down, and, into a heated iron kettle that is blading and flaming. There cooks and sizzles. And while he there cooks and sizzles, he goes once upwards, once downwards, and once sideways. There he experiences grievous, severe, sharp, and bitter pains; but he does not die so long as that wickedness is exhausted.

Then, O priests, the gaurdians of hell throw him into the chiefest of the hells. Now this chiefest of the hells, O priests, is

Symmetrical, and square in shape, four-gated, into parts laid off.
Of iron is its bounding wall, an iron roof doth close it in;
And of its glowing iron floor the light with dazzling brilliancy
Spreads for a hundred leagues around, and ever and for ay abides.

— Buddhism in Translations, p.p. 255–258.

象跡喩經

(1)一時佛遊舍衞國在勝林給孤獨園。爾時卑盧異學平旦則從舍衞國出往詣佛所、稽首作禮却坐一面、佛爲彼說法勸發渴仰成就歡喜、無量方便爲彼說法勸發渴仰成就歡喜已默然而住、卑盧異學佛爲、說法勸發渴仰成就歡喜已卽從坐起、稽首佛足繞三匝而去。爾時生聞梵志乘極好白象與五百弟子俱、以平旦時從舍衞出至無事處欲教弟子諷讀經書。生聞梵志遙見卑盧異學來便問、婆蹉晨起從何處來。卑盧異學答曰、梵志我見世尊禮事供養來。生聞梵志問曰、婆蹉頗知沙門瞿曇空安靜處學智慧耶。卑盧異學答曰、梵志何等人可知世尊空安靜處學智慧耶。梵志若知世尊空安靜處學智慧者亦當如彼、但梵志我所讀書有四句義、因四句義我必信世尊。世尊所說法善、如來弟子聖衆善趣、梵志譬善象師遊無事處於樹林間見大象跡、見已必信彼象極大而有此跡、梵志我亦如是、我所讀書有四句義、因四句義我必信世尊。

云何四句義、梵志智慧剎利論士多聞決定能伏世人無所不知、則以諸見造作文章行於世間、彼作是念、我往沙門瞿曇所問如是如是事、若能答者當復重問、若不能答便伏捨去、彼聞世尊遊某村邑便往彼所見世尊已尚不敢問、況復能伏、梵志我所讀書用得如此第一句義、我因此義必信世尊、世尊所說法善、如來弟子聖衆善趣如是。智慧梵志智慧居士智慧沙門論士多聞、決定能伏世人無所不知、則以諸見造文章行於世間、彼作是念、我往沙門瞿曇所問如是如是事、若能答者常復重問、若不能答便伏捨去、彼聞世尊遊某村邑、

(1) 中阿含卷三六(昃六•78-79)同本巴利中阿含第二七經(Vol. I. p.p. 175-184)

One afternoon, whilst the Blessed One was staying at Anāthapiṇḍika's Park, Jānussoṇi the brahmin set out from Sāvatthi in a white-canopied chariot, and seeing Pilotika the Pilgrim coming along in the distance, he hailed him, saying: 'Ho there, honoured Vacchāyana, whence come you at such an hour of the day?' 'Why sir, I am just returning from a visit to the samana Gotama.'

'And what do you think of him, honoured Vacchāyana? Does samana Gotama seem possessed of wisdom; is he learned, think you?' 'Who sir am I, that I should know the extent of Samana Gotama's attainments in wisdom? He that is his peer, he only may say of what wisdom samana Gotama is possessed!'

'What high praise the honoured Vacchāyana bestows upon samana Gotama!' 'Who sir, am I, that I should praise samana Gotama? Praised by the praised indeed is he, the exellent Gotama, the chief among gods and men!'

'But what particular quality has the honoured Vacchāyana observed in samana Gotama, that he should thus be moved to place such confidence in him?'

'Just as a capable elephant-forest ranger, entering the forest and there espying the huge footprint of an elephant, great in length and in breath, will come to the conclusion: "This elephont must be a big one," in the same way, percieving the four footprints of samana Gotama, I have come to the conclusion: "A Supremely Awakened One is the Blessed One; well proclaimed is the Truth by Blessed One; well lived is the life by the Brotherhood of the Blessed One." 'What are the four footprints?'

'Many a learned man have I seen of the warrior class, or of the priestly class or of the householder class, subtle, accomplished controversialists, able, so to say, to split hairs: of their wit, at is were, cleaving through fablics of views, and these have come to hear that samana Gotama was on his way to visit this or the other village or town. Accordingly they have framed a question for him. "We will go," they have said, "to samana Gotama and we will put this question to him. If he gives us this answer, we shall catch him this way; if he gives us that answer, we shall catch him that way;" if he gives us that answer, we shall catch him that way;" and in due cource, learning of the actual arrival of samana Gotama in such and such a place, they have gone thither with intent to encounter him. Then samana Gotama has instructed, fortified, quickened, and refreshed them with discource upon the doctrine, and thus instructed by samana Gotama, they have not even put their question to him, let alone caught him in his words, but have actually become followers of samana Gotama. And so sir, when I saw these first (warrior), second (priestly class) and third (householder) footprints of samana Gotama, I came to the conclusion: "A Supremely Awakened One is the Blessed One;

便至彼所見世尊已尚不敢問況復能伏、梵志我所讀書用得如此第四句義、我因此義必信世尊如來所說法善、如來弟子聖衆善趣、梵志我所讀書有此四句義、我因此四句義故必信世尊如來所說法善如來弟子聖衆善趣。

生聞梵志語曰、婆蹉汝大供養沙門瞿曇、所因所緣歡喜奉行。卑盧異學答曰、梵志如是如是我極供養於彼世尊、亦極稱譽、一切世間亦應供養。

時彼生聞梵志聞此義已卽從乘下右膝著地叉手向於勝林給孤獨園再三作禮南無如來無所著等正覺如是至三已還、乘極好白乘往詣勝林給孤園、到彼地卽下乘步進詣佛、共相問訊却坐一面、生聞梵志向與卑盧異學所共論事盡向佛說。世尊聞已告曰、梵志卑盧異學說象跡喩、猶不善作亦不具足、如象跡喩善作具足者今爲汝說當善聽之。

well proclaimed is the Truth by the Blessed One; well lived is the life by the Brotherhood of the Blessed One."

'I have also seen many learned ascetics, suttle, acute debaters, splitters of hairs, so to speak, who lived, one might say, to cut to pieces systems of thought with their skill and knowledge, and coming to hear that samana Gotama was on his way to a certain village or town, they have drawn up a query to put to him, such that if he answered it thus, they would trip him up thus, and if he answered it so, they would trip him up so. They have gone to samana Gotama at the place whither he had come, but samana Gotama has so instructed .... refreshed them with discourse upon the doctrine, that they have not even asked him their question, let alone tripped him up in his reply, but have actually entreated him that he might accept them as his disciples, henceforth under him to follow the homeless life, and they have recieved ordination at the hands of samana Gotama. Having become his disciples and living apart in earnest and resolute effort, in no long time they have realised and known for themselves, even in their present lifetime, that supreme goal of the Holy Life for the sake which young men of family go forth from home to homelessness, and they have said to themselves: "Truly we had lost our reason; truly we have regained our reason! Before we were no samanas, yet we thought ourselves to be samanas. Before we were not holy ones, nor delivered ones, yet we regarded ourselves as holy ones and delivered ones. But now are we samanas indeed; holy ones, delivered ones indeed!" And seeing this the fourth footprint of samana Gotama, I came this conclusion:" A supremely Awakened One is the Blessed One; ...."Yea beholding these four footprints, this was the conclusion to which I came.'

At these words, Jānussoṇi came down from his white-canopied chariot, and baring his right shoulder, extended his folded hands in the direction where dwelt the Blessed One and thrice repeated the joyous exclamation: 'Homage to the Holy One, the Exalted One, the Supremely Awakened one! Homage to the Holy One, the Exalted One, the Supremely Awakened One! Homage to the Holy One, the Exalted One, the Supremely Awakened One! Would that some time we might meet with the excellent Gotama and find fitting occasion to hold converse with him!'

Then Jānussoṇi went where the Blessed One was, and greeting him with the customary compliments of friendship and civility, sat down respectfully at one side and informed the Buddha of all that passed between Pilotika and himself, then the Buddha said: 'The simile of the elephant's footprint so far is not fully borne out. Hearken and give good heed and I shall tell how the simile is fulfilled in every detail!'

梵志譬善象師遊無事處於樹林間見大象跡、見已彼信彼象極大而有此跡。梵志善象師或不信者、於此林中復有母象名加梨㝹、身極高大彼有此跡、卽尋此跡復見大象跡、見已必信彼象極大而有此跡。梵志彼善象師或復不信、於此林中更有母象名加羅梨、身極高大彼有此跡、卽尋此跡復見大象跡、見已必信彼象極大而有此跡。梵志彼善象師或復不信、於此林中更有母象名婆惒㝹、身極高大彼有此跡、卽尋此跡復見大象跡見已必信彼象極大而有此跡、彼尋此跡已見大象跡、大象跡方極長極廣周匝徧著正深入地、及見彼象或去或來或走或立或臥、見彼象已便作此念、若有此跡必是大象。梵志如是若世中出如來無所著等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師號佛衆祐彼於此世天及魔梵沙門梵志乃至天人、自知自覺自作證成就遊、生已盡、梵行已立、所作已辦、不更受有、知如眞。彼說法初妙中妙竟亦妙、有義有文具足淸淨顯現梵行。彼所說法或居士居士子聞已得信於如來正法律彼得信已便作是念、在家至狹塵勞之處出家學道發露曠大、我今在家爲鏁所鏁不得盡形壽淨修梵行、我寧可捨於少財物及多財物捨小親族及多親族、剃除鬚髮著袈裟衣至信捨家無家學道。

Then the Buddha proceeded to speak as follows : 'Suppose, brāhmin, that an elephant-forest ranger upon entering the forest sees on the ground the huge footprint of an elephant, great in length and in breadth—— if he is an experienced ranger he will not there and then draw the conclusion . "Verily this is a big elephant, " and why not ? Because, there are in the elephant forest female elephants called "Dwarfs (Vamanikā) which have great feet, and this might be the footprint of one of them. And suppose that the ranger follows up the track and comes upon another footprint of an elephant, huge in length and in breadth, with the tall cane brake near by all trampled down. Still he does not immediately conclude that this indicates a huge elephant, for he knows that there are large-footed female elephants called "Black-tramplers" (uccākalikā) and this might be the footprint of one of these. Suppose that, still following up the track, he again meets with an elephant footprint of great length and breadth, with the tall cane-brake all about laid low and with marks of tusks upon it, still as an experienced ranger, he does not conclude at once that these are the tokens of a huge elephant, for in the forest are to be found large-footed female elephant called "Brake-tuskerd" (uccākaṇerukā) and this might be one of their footprints. Suppose that, still pursuing the track, he again finds an elephant footprint huge in length in breadth, with the tall brake all around crushed down and dented with tusk-marks and with the branches of trees strewn on the ground, and then catches sight of an elephant either walking or standing still or resting or lying down under the trees or out in the open, now will that elephant-forest ranger conclude : "There it is, the big elephant ! "

'In the selfsame way, O brahmin, here in this world an Accomplished One makes his appearance, and having of himself know and comprehended this entire universe of gods and men with its deities and Māras and Brahmās and its race of ascetics and recluses, he imparts his knowledge to others. Both in the letter and in the spirit he expounds the truth, excellent in its origin, excellent in the middle and in the end ; he makes known the holy life perfect and pure. The truth is heard by a householder or by the son of a householder or by one of some other rank in life, and, hearing it he is moved to put his faith in the Accomplished One. So believing with all his heart, reflects within

彼於後時捨小財及多財物、乃至至信捨家、無家學道、彼出家已捨親族相、受比丘要、修習禁戒、守護從解脫、亦復善攝威儀禮節、見纖芥罪常懷畏怖、受持學戒、彼離殺斷殺、棄捨刀杖、有慚有愧有慈悲心、饒益一切乃至昆蟲、彼於殺生淨除其心。彼離不與取斷不與取、與而後取樂於與取、常好布施歡喜無悋不望其報、彼於不與取淨除其心。彼離非梵行斷非梵行勤修梵行、精勤妙行淸淨無穢離欲斷婬、彼於非梵行淨除其心。彼離妄言斷妄言、眞諦言樂眞諦住眞諦不移動、一切可信不欺世間、彼於妄言淨除其心、彼離兩舌斷於兩舌行不兩舌不破壞他、不聞此語彼欲破壞此、不聞彼語此欲破壞彼、離者欲合合者歡喜、不作群黨不樂群黨、不稱說群黨事、彼於兩舌淨除其心。彼離麤言斷麤言、若有所言辭氣麤獷惡聲逆耳衆所不喜衆所不愛、使他苦惱令不得定、斷如是言、若有所言淸和柔潤順耳入心可喜可愛使他安隱、言聲具了不使人畏令他得定、說如是言、彼於麤言淨除其心。彼離綺語斷於綺語、時說眞說法說義說止息說樂止說、說事隨時得宜善敎善訶、彼於綺語淨除其心。彼離治生斷於治生、棄捨稱量及斗斛、亦不受貨不縛束人、不望折斗量、不以小利侵欺於人、彼於治生淨除其心。彼離受寡婦童女斷受寡婦童女彼於受寡婦童女淨除

himself: "Cramped and confined is household life, a den of dust, but the life of the homeless one is as the open air of heaven! Hard is it for him who bides at home to live out, as it should be lived, the holy life in all its perfection, in all its purity! How if I shear off hair and beard, and donning yellow raiment, leave home behind and henceforth follow the houseless life?"

'And so, not long after, abandoning his few or great possession, bidding farewell to a small or large circle of kinsmen and friends, he shears off hair and beard, and garbed in yellow, goes forth from home to homelessness.

'And now, vowed to the homeless life, wholly devoted to the life, and discipline of the monk, he abstains from all taking of life, shuns taking the life of any living thing. Laying aside cudgel and sword, he is mild and merciful, kind and compassionate towards every living creature. He refrains from the taking of what has not been given him, shuns taking things ungiven. Taking only what is offered him, waiting for such gifts, he abides heart-free from all thievish intent. Refraining from unchastity, he lives the pure, the chaste life. He shuns the sexual act, the vulgar, the common! He refrains from lying, shuns the uttering of untruth. He speaks the truth, holds to the truth; staunch and trustworthy, he is no worldly deciever. He abstains from tale-bearing, shuns slanderous speech. What he hears in this quarter he does not repeat in that, so as to create trouble for people here; and vice vercer. Those at variance he brings together and those already in union he encourages. Concord pleases him, rejoices him, in concord is all his delight. He speaks words that make for concord; he refrains from harsh speech, shuns speeking roughly. Whatsoever words are blameless, pleasant to the ear, loving, heart-moving, courteous, charming and delighting all hear them, such are the words he speeks. He abstains from idle chatter, shuns unprofitable conversation. Speaking in proper season, in accordance with fact, to the purpose, in accord with doctrine, with the discipline, his words are precious treasure, full of appropriate comparisons, discriminating and to the point. He abstains from doing any injury to seeds or growing plants. He partakes of but one meal a day, eats no evening meal; he shuns eating out of proper season. He keeps away from singing, dancing and threatrical representations. He shuns using garlands, scents, urguents, ornaments, decorations, adornments. He abstains from using broad or high beds. He declines to accept gold or silver, uncooked grain or raw meat. He abstains from the possession of women or girls, slaves male or female, goats or sheep, fowls or swine, elephants, cattle, horses, mares, fields or lands. He avoids having aught to do with fetching and carring messages. He abstains from trafficking and merchandising. He has naught to do with false balances, false weight or false measures. He shuns the crooked ways of bribery, deception and fraud. He keeps aloof from making,

其心、彼離受奴婢斷受奴婢彼於受奴婢淨除其心彼離受象馬牛羊斷受象馬牛羊彼於受象馬牛羊淨除其心、彼離受雞猪斷受雞猪彼於受雞猪淨除其心、彼離受田業店肆斷受田業店肆彼於受田業店肆淨除其心、彼離受生稻麥豆斷受生稻麥豆彼於受生稻麥豆淨除其心、彼離酒斷酒彼於飲酒淨除其心、彼離高大廣床斷高廣大床彼於高廣大床淨除其心、彼離華鬘瓔珞塗香脂粉斷華鬘瓔珞塗香脂粉彼於華鬘瓔珞塗香脂粉淨除其心、彼離歌舞倡妓及往觀聽斷歌舞倡妓及往觀聽彼於歌舞倡妓及往觀聽淨除其心、彼離受生色像寶斷受生色像寶彼於受生色像寶淨除其心、彼離過中食斷過中食於過中食淨除其心、一食不夜食學時食彼已成就此聖戒聚。

復行極知足、衣取覆形食取充軀、隨所遊至與衣鉢俱行無顧戀、猶如鷹鳥與兩翅俱飛翔空中、彼已成就此聖戒聚及極知足。

復守護諸根常念閉塞念欲明達守護念心而得成就、恒起正知、若眼見色然不受想亦不味色、謂忿諍故守護眼根、心中不生貪伺憂慼惡不善法、趣向彼故守護眼根、如是耳鼻舌身若意知法然不受想亦不味法謂忿諍故守護意根、心中不生貪伺憂慼惡不善法趣向彼故守護意根、彼已成就此聖戒聚及極知足守護諸根。

復正知出入、善觀分別屈伸低仰儀容庠序、善著僧伽梨及諸衣鉢、行住坐臥眠寤語默皆正知之、彼已成就此聖戒聚及極知足、守護諸根正知出入。

murder, abduction, highway, robbery, wholesale plundering and every deed of violence. He is contented with the robes he receives for the covering of his body and with the food he receives for the maintenance of his life, and whersoever he goes, he takes with him only such things as are proper and necessary. Even as the winged bird, whithersoever it flies, bears with it only its wings, so the monk is contented with what he gets of clothings and food and journeying, takes with him only needful requisites. By the faithful obserbance of this noble body of precepts of right conduct he enjoys cloudless happiness within.

'And having with the five organs of sense perceived their objects, he does not dwell upon the mental image thereof, takes no special note of the same. Inasmuch as the organs of sense being unrestrained, occasion is thereby given for the arising of craving and unhappiness and evil and insalutary thoughts, he practises restraint of the organs of sense, keeps a watch upon them, brings them into subjection, and by faithful adherence to this noble restraint of the senses, he enjoys glorious happiness within.

'He is mindful and recollected in all his comings and goings, in looking off and looking close by, in drawing in his arms and in streching them forth, in bearing his bowl and robe, in eating and in drinking, in tasting and in swallowing, in attending to naturés calls, in walking, in standing still and in sitting down; asleep or awake, speaking or keeping silence, at all times he is mindful and recollected.

'Strictly holding to this noble body of precepts, to this noble restraining of organs of sense, to this noble practice of recollectedness, he seeks out for himself a secluded place of abode, under a tree, in a rocky recess, in a mountain cave, in a place of tombs, in the heart of the jungle or on a heap of straw in the open fields; and having returned from his begging round and partaken of his meal, he sits down with legs crosed, body held upright, and deliverately practises recollectedness. Putting away worldly craving, he abides with thoughts free from craving; he clears his mind of craving. Putting away anger and ill-will, he abides benevolent-minded, Kindly and compassionate towards everything that lives, he clears his mind of all anger and ill-will. Putting away sloth and torpor, he dwells vigilant and alert. Wholly conscious and recollected, he clears his mind of sloth and torpor. Putting away restless brooding, he dwells in quietitude. His inward

復獨住遠離在無事處、或至樹下空安靜處山巖石室露地穰積、或至林中或在塚間、彼已在無事處或至樹下空安靜處敷尼師檀、結跏趺坐正身正願反念不向、斷除貪伺心無有諍見他財物諸生活具不起貪伺欲令我得、彼於貪伺淨除其心、如是瞋恚睡眠調悔斷惑度疑於諸善法無有猶豫、彼於疑惑淨除其心、彼斷此五蓋心穢慧羸、逮初禪成就遊、梵志是謂如來所屈如來所行如來所服。然彼不以之爲訖、世尊所說法善、如來弟子聖衆善趣。次逮第二禪成就遊、梵志是謂如來所屈如來所行如來所服。然彼不以之爲訖、世尊所說法善如來弟子聖衆善趣。次逮第三禪成就遊、梵志是謂如來所屈如來所行如來所服。然彼不以之爲訖、世尊所說法善如來弟子聖衆善趣。次逮第四禪成就遊、梵志是謂如來所屈如來所行如來所服。然彼不以此爲訖、世尊所說法善如來弟子聖衆善趣。彼已得如是定心、清淨無穢無煩柔輭善住得不動心、趣向漏盡智通作證、知此苦如眞知此苦集知此苦滅知此苦滅道如眞、知此漏如眞知此漏集知此漏滅知此漏滅道如眞、彼如是知如是見、欲漏心解脱有漏無明漏心解脱、解脱已便知解脱生已盡梵行已立所作已辨不更受有、知如眞、梵志是謂如來所屈如來所行如來所服。彼以此爲訖、世尊所說法善如來弟子聖衆善趣。

梵志於意云何如是象跡喩善作具足耶。生聞梵志答曰唯然瞿曇如是象跡喩善作具足。生聞梵志白曰世尊我已知、善逝我已解、世尊我今自歸於佛、法、及比丘衆、唯願世尊受我

thoughts quieted, he clears his mind of restless brooding. Putting away indecision, he dwells delivered from indecision. No longer questioning what things are good, he clears his mind from indecision.

'And now, having put away these five impediments,········ he attains to the first jhāna; and this is called a footprint of Tathāgata, a track of Tathāgata, a tusk-mark of Tathāgata. But the noble disciple does not come to the conclusion: "The Blessed One is a Fully-Awakened-One, the Doctrine is well proclaimed by the Blessed One; the life of the Brotherhood of the Blessed One is well lived."

'Again he attains to the second jhāna; and this is called a footprint, a track, a tusk-mark of Tathāgata. But still the noble disciple does not conclude: "The Blessed One is a fully-Awakened-One;········ the life of the Brotherhood of the Buddha is well lived."

'Again he attains to the third jhāna; and this is calld footprint, a track, a tusk-mark of Tathāgata. But still the noble disciple does not conclude: The Blessed One is fully-Awakened-One;········ The life of the Brotherhood······ is well lived."

'Again he attains to the forth jhāna; and this is called a footprint, a track, a tusk-mark of Tathāgata. But still he does not conclude: "The Blessed One is a Fully-Awakened-One;········ the life of the Brotherhood······ is well lived."

'Again he remembers of his previous forms of existence, and, with the Heavenly Eye the pure, the Superhuman, perceives how beings depart from this world and again return to it according to their own deeds, and these are the footprints, tracks, tusk-marks of Tathāgata. But he still does not conclude: "The Blessed One is a Fully-Awakened-One;··· the life of the Brotherhood········ is well lived."

'Again he turns mind to knowing the bringing to an end of the Banes, and he recognises, in their true nature, The Four Aryan Truth; and this is called a footprint, a track, a tusk-mark of Tathāgata. But still he does not conclude: "The Blessed One is a Fully Awakened-One;········ the life of the Brotherhood········ is well lived."

'Again thus perceiving, thus comprehending, he frees his mind from three Āsavas, and he knows: "I am delivered, life is lived out, the holy goal achieved; done all that was to do; for me there is no more life!" This, O brahmin, is called a footprint, a track, a tusk-mark of Tathāgata, and with this the noble disciple come to the conclusion: "The Blessed One is a Fully-Awakened-One; the Doctrine is well proclaimed by the Blessed One; the life of the Brotherhood is well lived." With this, O brahmin, the simile of the elephant's footprint is completely borne out.'································

— The First Fifty Discourses from the Collection of the Mediun Length Discourses. II. p. p. 20 — 32.

爲二優婆塞一從レ今日始終身自歸乃至命盡。

* * * * * *

法は現前樂

(1)一時佛住二王舍城迦蘭陀竹園一、時有二異比丘一於二夜明相出時一出二楊補河邊一、脫レ衣著二岸邊一入レ水洗浴、浴已上レ岸、被二一衣一待二身乾一、時有二一天子一放二身光明一普照二楊補河側一、語二比丘一言、汝少出家鮮白髮黑年始盛美、應レ習二五欲一、莊嚴瓔珞塗香華鬘五樂自娛、而於二是時一違レ親背レ俗悲泣別離剃二除鬚髮一著二袈裟衣一、正信非家出家學道、如何捨二現前樂一而求二非時之利一、比丘答曰我不下捨二現前樂一求中非時樂上、我今乃是捨二非時樂一得二現前樂一、天問、比丘云何捨二非時樂一得二現前樂一、比丘答曰如二世尊說一、非時之欲少樂多苦少利多難、我今於二現法中一已離二熾然一、不レ待二時節一能自通達、現前觀察緣自知覺如レ是、天子是名下捨二非時樂一得中現前樂上。

天復問、比丘云何復是如來所說非時之欲少樂多苦、云何復是如來所說、現法利樂乃至緣自覺知、答言我年少出家不レ能二廣宣如來所說正法律儀一、世尊近在二迦蘭陀竹園一、汝可レ往二詣如來一問中其所疑上、如二世尊說一隨レ憶受持。

天子復言比丘於二如來所一有二諸力天一、衆多圍遶我先無レ問、未レ易レ可レ詣。比丘汝若能爲先白二世尊一者我可二隨往一。比丘答言、當二爲レ汝去一。天白二比丘一唯然尊者我隨レ後來。時彼比丘往二詣佛所一稽

(1) 雜阿含經卷三八(辰四、21)　同本巴利雜阿含 I. 2. 10 (Vol I. p. 8)

The Exalted One was once staying at Rājagaha in the Tapodā Park. Now the venerable Samiddhi as the down drew near arose and went to the Hot Springs to bathe. And after his bath, he come out of the Hot Springs and stood clad in a single garment, drying his limbs.

Then a certain deva, when the night was far spent, illusminating all the Hot Springs with her effulgent beauty, come up to Samiddhi, and floating in the air, uttered these verses :——

Ne'er having had the fill thou seekest alms,
O almsman; yea, nor taking now the fill
Thou seekest alms. O almsman, take thy fill!

[Samiddhi :—] Naught of thine 'hour' know I. Mine hour is hid,
Not manifest. Therefore I seek mine alms
Not taking first my fill, lest the hour pass me by.

Now that fairy took her stand on the earth and spoke to Samiddhi Thus: Thou art young, bhikkhu, to have left the world, and callow, black-haired and blessed with the luck of youth; thou hast not in thine early prime had the fun that belongs to natural desires. Take thy fill, bhikkhu, of human pleasures. Give not up the things of the present to pursue that which involves time.

'I, friend, have not given up the things of the present to pursue that which involves time. Nay, I have given up that which involves time to pursue the things of the present. Things involving time, Friend, as the Exalted One hath said, are the pleasures of sence, full of ill, full of anxiety; that ways lies abundant disaster. A thing of the present is this Norm, not involving time, inviting to come and see, leading onward, to be regarded by the wise as a personal experience.

Then the fairy asked to explain in detail what Samiddhi said. Samiddhi replied:

'I, friend, am a novice; I have but lately left the world, and am newly admitted. I am not able to explain the Norm and Rule in detail. But the Exalted One, who is Aharat, fully enlightened, he is staying at Rājagaha in the Tapod Park. Go to that Exalted One and ask him of this matter. Bear in mind that wherewith he shall answer you.'

'Not easy is it, bhikkhu, for us to appoach the Exalted One, so is he surrounded by other and mighty devas. If thou, bhikkhu, wilt approach the Exalted One and ask him of this matter, we too may come to hear the doctrine.'

'Very well, friend,' responded Samiddhi, and he went to the Buddha, spake to the Buddha, telling him of the fairy's interview after his bathe, and said: 'If, lord, that fairy spoke truly, she is just here, not far from us.'

首禮足退住一面、以向天子問答具白世尊、今者世尊彼天子誠實言者須臾應至不誠實者自當不來。

時彼天子遙語比丘、我已在此我已在此。爾時世尊卽說偈言。

衆生隨愛想、　以愛想而住、　以不知愛故、　則爲死方便、

佛告天子、汝解此偈者便可發問。天子白佛、不解世尊、不解善逝。佛復說偈而告天子曰、

若知所愛者、　不於彼生愛、　彼此無所有、　他人莫能說、

佛告天子、汝解此義者便可發問。天子白佛、不解世尊、不解善逝。佛復說偈言、

見等勝劣者、　則有言論生、　三事不傾動、　則無輭中上。

佛告天子、解此義者、則可發問、天子白佛、不解世尊、不解善逝。佛復說偈言、

斷愛及名色、　除慢無所繫、　寂滅息瞋恚、　離結絕悕望、　不見於人天

此世及他世、

佛告天子、解此義者乃可發問、天子白佛、已解世尊、已解善逝。佛說此經已彼天子聞佛所說、歡喜隨喜卽沒不現。

*　*　*　*　*　*

'And when he had so said, that fairy said to Samiddhi: 'Ask, bhikkhu! Ask, bhikkhu, for I have won through! 'Then the Buddha addressed the fairy in verses:—

Men, 'ware alone of what is told by names,
Take up their stand on what is so expressed.
If this they have not rightly understood,
They go their ways under the yoke of death.
He who hath understood what is expressed,
Concerning him-who-speaks no fancies builds,
Nor do to such a man such things occur,
As might be laid, as faults, to his account.

'If thou knowest such a man, tell me, fairy.' 'Lord, I do not comprehend fully the matter of that which the Exalted One has stated in outline. Well for me if he would himself declare in full the matter that I may come to know it.'

The Exalted One:—— Whoso doth build fancies concerning values:——
'Equal am I, better, or worse than thou art'
Hereby he may quarrels provoke. But whoso
In all three ways holdeth his mind unshaken,
'Equal am I, or different occours not.'

'If thou knowest such a man, tell me, fairy.' 'Neither of this, lord, which the Exalted One has stated in outline, do I fully comprehend the meaning. Well for me if the Exalted One would himself declare in full the matter he has thus stated that I may come to know it.'

The Exalted One:—— He has renounced bondage to name and notion;
His mind is not set to imagine vain things;
For life in this world hath he cut all craving.
Him freed from bonds, happy, and void of longing,
Him gods and men here on this earth, or yonder,
Or in the heavens, in every sphere of being
Seeking, they seek vainly, they will not find him.

'If thou knowest such a one, fairy, tell me.' 'Of this, lord, that the Exalted One has stated in outline, I have come to know the meaning fully thus:

Let him commit no evil whatever
Throughout the World, in speech, or mind or body.
Dropping desires, mindfull and understanding,
Let him not work torment on self that is useless.'

—The Book of Kindred Sayings. I. p.p. 14—18

信は種子戒は雨

(1) 一時佛在拘薩羅人間遊行至一那羅聚落住一那羅林中、爾時世尊著衣持鉢入一那羅聚落乞食而作是念、今日大早、今且可過耕田婆羅豆婆遮婆羅門作飲食處。爾時耕田婆羅豆婆遮婆羅門五百具犂耕田、爲作飲食、時耕田婆羅豆婆遮婆羅門遙見世尊白言、瞿曇我今耕田下種以供飲食、沙門瞿曇亦應耕田下種以供飲食。佛告婆羅門、我亦耕田下種以供飲食、婆羅門白佛、我都不見沙門瞿曇若犂若軛若鞅若縻若鑱若鞭、而今瞿曇說言、我亦耕田下種以供飲食、爾時耕田婆羅豆婆遮婆羅門卽說偈言、

自說耕田者、　而不見其耕、　爲我說耕田、　令我知耕法、

爾時世尊說偈答言、

信心爲種子、　苦行爲時雨、　智慧爲犂軛、　慚愧心爲轅、　正念自守護、
是則善御者、　包藏身口業、　如食處內藏、　眞實爲眞乘、　樂住無懈息、
精進無廢荒、　安隱而速進、　直往不轉還、　得到無憂處、　如是耕田者、
逮得甘露果、　如是耕田者、　不還受諸有、

爾時耕田婆羅門白佛言、善耕田瞿曇、極善耕田瞿曇、於是耕田婆羅門聞世尊說偈心轉增信以滿鉢香美飲食奉世尊、世尊不受以因說偈得故卽說偈言、

不因說法故　受彼食而食、

時耕田婆羅門白佛言、瞿曇今以此食安著何處。佛告婆羅門、我不見諸天魔梵沙門婆羅

(1) 雜阿含卷四(辰二、22)同本巴利雜阿含 VII. 2. 10 (Vol. I. p. 171)

The Buddha was once staying on South Hill, at Ekanāla, a brahmin village. Now on that occasion it was the time for sowing, and Farmer Bhāradvāja, the brahmin, had harnessed five hundred ploughs, Then the Buddha dressed himself in the early morning and taking bowl and robe, drew near to the ploughing operation.

Now at that time Bhāradvāja's distribution of food was going on. And the Buddha come to the scene and stood at one side. Now Bharadvāja saw the Buddha standing there for arms, and thereat he said: Now I, recluse, plough and sow, and when I have ploughed and sown I eat. Do thou also plough and sow, and when thou have ploughed and sown, eat.'

'But I too, brahmin, plough and sow, and I have ploughed and sown, I eat.'

'But we see neither Master Gotama's team, nor his plough, nor his ploushare, nor his goad, nor his oxen. And yet Master Cotama says, "I too plough and sow."'

Then Bhāradvāja addressed the Buddha in a verse: ——

A ploughman by thine own confession thou?
No ploughing can I see!
The ploughman queried, tell me how to know
The ploughing done by thee.

The Buddha: —— Faith is the seed, and rain the discipline.
Insight for me is plough fitted with yoke,
My pole is conscience and sence-mind the tie,
And mindfulness my ploughshare and my goad.
Guarded in action, guarded too in speech,
And temperate as to my stomach's food,
I weed with truth, and my release from work
Is that fair thing of innermost desire.
Energy is my burden-bearing team,
Drawing my plough toward the haven sure.
Onward it goes nor ever turneth back;
And were it goes we shall weep no more.
Such is the ploughing that is ploughed by me.
The fruit it bears is food ambrosial.
Whose this ploughing hath accomplished, he
From suffering and from sorrow is set free.

The Brahmin: 'May it please Master Gotama to eat! A ploughman is Master Gotama, yea it is for fruit ambrosial that Gotama ploughs his ploughing!'

The Buddha: —— Not mine to enjoy presents for chanting verses.
Not normal this, brahmin, for minds discerning,

門天神世人堪食此食而得安身、婆羅門汝持此食、著無蟲水中及少生草地、時婆羅門卽持此食著無蟲水中、水卽煙起湧沸啾啾作聲、如熱丸投於冷水、啾啾作聲如是、彼食投著無蟲水中煙起涌沸啾啾作聲、時婆羅門作是念、沙門瞿曇實爲奇特、大德大力乃令飮食神變如是、時彼婆羅門見食瑞應信心轉增白佛言、瞿曇我今可得於正法中出家受具足不。佛告婆羅門、汝今可得於正法中出家受具足得比丘分。彼、卽出家已獨靜思惟所以族姓子剃除鬚髮著袈裟衣、正信非家出家學道。乃至得阿羅漢心善解脫。

* * * * * *

天子の謎

一[1]時佛在王舍城迦蘭陀竹園、時有異比丘於後夜時至搨補河邊、脫衣置岸邊入水洗浴浴已還上岸著一衣待身乾。時有一天子放身光明普照搨補河邊、問比丘言、比丘比丘是丘塚夜則起煙、晝則火然、彼婆羅門見已而作是言壞此丘塚發掘者智、持以刀劍又見大龜、婆羅門見已作是言除此大龜發掘者智、持以刀劍見有氍氀婆羅門見已作此言却此氍氀發掘者智、持以刀劍是有肉叚彼婆羅門見已作是言除此肉叚發掘者智、持以刀劍見有屠殺婆羅門見已作是言壞是屠殺處發掘者智、持以刀劍見有楞者彼婆羅門見已作是言却此楞者發掘者智、持以刀劍見有二道彼婆羅門見已作是言除此二道發掘者智、持以刀劍見有門扇婆羅門見已作是言、却此門扇發掘者智、持以刀劍見有大龍婆羅

Buddhas reject wages for chanting verses.
True to the norm, such is their practice ever.
On other grounds minister thou, O brahmin,
With food and drink to a great Seer made perfect,
To one from whom purged are all mental poisons,
In whom is calm, peace from all fret and worry.
Yea, here's the field, if for reward thou lookest.

When he had thus spoken, Bharadvāja said: 'Most excellent Master Gotoma, most excellent! ……… 'May Master Gotama suffer me as a lay-disciple, who from this day forth as long as life endured has taken in him refuge!'

——— The Book of the Kindred Saying, I. P.P. 216 — 219.

(1) 雜阿含卷三八(辰四、21)同本巴利中阿含第二三經 (vol. I. p.p. 142-145)

At one time the venerable Kumārakassapa lived in the Black Forest. And One night a certain resplendent deity, glorious to look upon, lighting up the entire forest with its radiance, approached Kumārakassapa and standing at one side thus addressed him:

'Monk this ant-hill smoketh by night and flameth by day. And the priest said: "Take thy keen implement, wise one, and dig deep!" And that wise one took his keen implement and, digging deep, came upon a bar. "Lo, a bar, Sir!" said he. The priest said: "The bar cast aside! Take thy keen implement, wise one, and dig deep!" And the wise one took his keen implement and, digging deep, came upon a bladder. "Lo, a bladder, Sir!" The priest said: The bladder cast aside! Take thy keen implement, wise one, dig deep!" And the wise one took his keen implement and, digging deep, came upon a fork. "Lo, a fork, Sir!" said he. The priest said: "The fork cast aside! Take thy keen implement and dig deep,' "And The wise one took his keen implement and, digging deep, came upon a casket. "Lo, a casket, Sir!" The priest said: "The casket cast aside! take thy keen implement and dig deep!" and the wise did so and came upon a tortoise. "Lo, a tortoise, Sir!" said he. The priest said: "The tortoise cast aside! take thy keen implement and dig deep!" The wise one did so and came upon a butcher's knife. "Lo, a butcher's knife, Sir!" said he. The priest said: "The butcher's knife cast aside! take thy keen implement and dig deep!" The wise one did so and came upon a scrap of fresh. "Lo, a scrap of fresh, Sir!" The priest said: "The scrap of fresh cast aside! Take thy keen implement and dig deep!" The wise one did so and came upon a serpent. "Lo, a serpent, Sir!" said he. And the priest said: "Let be the serpent! Dy homage to the serpent,'" But thou, monk, go thou to the Buddha and ask him to solve this riddle for thee; and as the Buddha shall give reply, even so do thou bear it in mind.

門見已作是言、止勿却大龍、應當恭敬、比丘汝來受此論往世尊、如佛所說汝隨受持、所以者何、除如來我不見世間諸天魔梵沙門婆羅門於此論心悅樂者、若諸弟子從我所聞然後能說。爾時比丘從彼天所聞此論已往詣世尊稽首禮足退坐一面、以彼天子所問諸論廣問世尊、云何爲丘塚、云何爲夜則煙起、云何爲晝則火燃、云何是婆羅門、云何發掘、云何智者、云何刀劍、云何爲大龜、云何氍氀、云何爲肉叚、云何爲屠殺處、云何爲楞耆、云何爲二道、云何爲門扇、云何爲大龍。佛告比丘、丘塚者謂衆生身麤四大色父母遺體摶食衣服覆蓋澡浴摩飾長養皆是變壞磨滅法、夜起煙者謂有人於夜時起隨覺隨觀晝行其教身業口業、婆羅門者謂如來應等正覺、發掘者謂精勤方便、智士者謂多聞聖弟子、刀劍者謂智慧刀劍、大龜者謂五蓋、氍氀者謂忿恨、肉叚者謂慳悋、屠殺者謂五欲功德、楞耆者謂無明、二道者謂疑惑、門扇者謂我慢、大龍者謂漏盡羅漢、如是比丘若大師爲聲聞所作哀愍悲念以義安慰、於汝已作汝等當作所作當於曝露林中空舍山澤巖窟敷草樹葉思惟禪思不起放逸莫令後悔、是則爲我隨順之教、即說偈言、

說身爲丘塚、　覺觀夜起煙、　晝業爲火然、　婆羅門正覺、　精進勤發掘、
默慧明智士、　以智慧利劍、　厭離勝進者、　五蓋爲巨龜、　忿恨爲氍氀、
慳嫉爲肉叚、　五欲屠殺處、　無明爲楞耆、　疑惑於二道、　門扇現我慢、
漏盡羅漢龍、　究竟斷諸論、　故我如是說。

For, monk, whether in the heaven or upon the earth, of the train of Māra or Brahmā, or among the race of ascetics and recluses, whether gods and men, none see I capable of satisfying the mind with an answer to this riddle, saving only the Accomplished One or a disciple of the Accomplished One, or one who has learned of these.'

So spake that deity and forthwith vanished from the spot.

Then Kumārakassapa, when the night was gone, went to the Buddha and informed him of all that has occured, and asked him to explain the meanings of ant-hill, the smoking by night, the flaming by day, the priest, the wise one, the keen implement, the digging, the bar, the bladder, the fork, the casket, the tortoise, the butcher's knife, the scrap of fresh, and the serpent.

The Buddha replied thus: 'The ant-hill, monk, repressents this body that is compounded of the Four Great Elements, begotten of a father and a mother, its growth furthered by material food, subject all to mutation and overthrow, to wasting away to dissolution, to destruction. What, for the day's doing, is considered and turned over in mind at night —— this is the smoking by night. What, considered and turned over in mind by night, is carried out by day in deed, word and thought —— this is the flaming by day. The priest, O monk, is a representation of the Buddha. The wise one typifies the onward aspiring monk. The keen implement signifies Noble Wisdom. The digging represents persevering effort. The bar is Unknowingness. "The bar cast aside." This means: "Put away Unknowningness!" "Take thy keen implement, wise one, and dig deep." The meaning of this is as said. The bladder represents wrath and desperation and the folk indecision. The casket is intended to typify the Five Hindrances of Craving, Ill-will, Dull Sloth, Restless Brooding and Dubiety. The tortoise represents the five Elements of Attachments, namely, Attachment to Body, Attachment to Sensation, Attachment to Perception, Attachment to the Mentations, Attachment to Consciousness. The butcher's knife stand for the Five Objects of Desire: Forms, sounds, ordours, flavours, contactions, all of them desired, delightfull, precious, pleasing, conjoined with desire, provocative of lust. The scrap of fresh typifies the lust for enjoyment. But as for the serpent, O monk, that is meant for a representation of the monk in whom all Bane has come to an end. "Let be the serpent! Slay not the serpent! Do homage to the serpent!" the meaning of this is as said.'

——— The First Fifty Discourses I. p.p. 182 — 185.

跋迦梨比丘

[1]一時佛住王舍城迦蘭陀竹園。爾時尊者跋迦梨住王舍城金師精舍、疾病困苦。尊者富隣尼瞻視供養。時跋迦梨語富隣尼、汝可詣世尊所、爲我稽首禮世尊足、問訊世尊、少病少惱起居輕利安樂住不。言跋迦梨住金師精舍、疾病困篤委積牀褥、願見世尊、疾病困苦氣力羸惙無由奉詣。唯願世尊降此金師精舍、以哀愍故。時富隣尼受跋迦梨語已、詣世尊所、稽首禮足退住一面、白佛跋迦梨所言。世尊答曰令彼安樂。富隣尼白佛言世尊尊者跋迦梨住金師精舍疾病困篤委在牀褥、願見世尊、無有氣力來詣世尊、善哉世尊詣金師精舍、以哀愍故。爾時世尊默然聽許。時富隣尼知世尊聽許已、禮足而去。

爾時世尊晡時從禪覺、往詣金師精舍、至跋迦梨住房。跋迦梨比丘遙見世尊、從牀欲起。佛告跋迦梨、且止勿起。世尊卽坐異牀、語跋迦梨、汝心堪忍此病苦不。汝身所患爲增爲損。跋迦梨白佛、世尊我身苦痛極難堪忍、欲求刀自殺、不樂苦生。佛告跋迦梨、我今問汝、隨意答我。云何跋迦梨色是常耶爲非常耶。跋迦梨答言無常。世尊復問若無常是苦耶。答曰是苦。世尊復問跋迦梨若無常苦者、是變易法、於中寧有可貪可欲不。跋迦梨白佛不也、世尊受想行識亦如是說。佛告跋迦梨、若於彼身無可貪可欲者是則善終後世亦善。

爾時世尊爲跋迦梨種種說法教示照喜已、從座起去、卽於彼夜尊者跋迦梨思惟解脫、欲執刀自殺不樂久生。時有二天身極端正、於後夜時詣世尊所、稽首禮足退住一面、白佛言、世尊、尊者跋迦梨疾病困苦、思惟解脫、欲執刀自殺、不樂久生。第二天言彼尊者跋迦梨已

(1) 雜阿含卷四七(辰四・76) 同本巴利雜阿含 XXII. 87. (Vol. III. P. P. 119-124)

世尊が王舍城の竹林栗鼠養餌所に住してゐ給うた時であつた。丁度その時、尊者跋迦梨は陶工の家に住し、重い病で苦しんでゐた。跋迦梨は看病僧を呼んで曰ふやう。「友よ、どうか世尊の御許へ行き、私の名で世尊の御足を頭禮して吳れ。『世尊、比丘跋迦梨は重い病で苦しんでゐますが、世尊の御足を頭禮し奉ります』と。又かう曰つて吳れ。世尊どうぞ哀憐を垂れて、比丘跋迦梨を見舞つて下され」と。

「承知をした」と、その看病の比丘は跋迦梨に答へて、世尊の御許へ行き、世尊を禮して一面に坐し、跋迦梨比丘の願を申し上げた。世尊は默然として之を許し給うた。かくて世尊は衣を着け鉢を手にし、跋迦梨比丘の處へ行き給うた。跋迦梨は世尊の來給ふを見て、床から起き出でた。世尊はこれを見て、「跋迦梨よ、床から起き上るには及ばない。茲に座が設けてあるから、私は此處へ座る」と仰せられて、座に卽き給うた。

坐し終つて、世尊は跋迦梨に宣ふやう。「病氣はいかゞ、辛抱出來るか。食事はよく進んでゐるか。給養はよく行き屆いて居るか。苦しみは增すことなく、減じはしないか。病は追々に癒りかけてゐないか」と。

「否、世尊、苦しみは重く、食事も進みません。苦しみは增して減じは致しません。病も進む許りで退きは致しません」。

「跋迦梨よ、汝には、何か後悔すること、殘念に思ふことがないか」。

「世尊、私には確に少なからぬ後悔と殘念に思ふことがあります」。

「それでは跋迦梨、汝は戒のことに就いて自らを責めてゐるのであるか」。

「世尊、私は戒のことで、自分を責めてゐるのではありません」。

「跋迦梨よ、汝は戒のことで自ら責めてゐないのであるとすると、何の後悔があり、何を殘念に思うてゐるのであるか」。

「世尊、私は世尊を見奉りに、世尊の御許へ參らうと長い事思うてゐました。然し私の身體にはそれ丈けの力がないので、世尊を見奉りに行くことが出來ないでゐました」。

「跋迦梨よ、この腐つた身體を見て何にしやうぞ。跋迦梨よ、法を見るものは私を見るものである。私を見るものは法を見るものである。跋迦梨よ、何故なれば法を見る事に依つて私を見、又私を見ることに依つて法を見るからである。

「跋迦梨よ、汝は色は常住のものと思ふか、無常のものと思ふか」。

「世尊、色は無常であります」。

「跋迦梨よ、受想行識は常住のものと思ふか、無常のものと思ふか」。

「世尊、無常であります」。

「跋迦梨よ、無常であるものは苦惱である。苦惱であるものは無我である。無常であるものは、これは私のもの、これは私、これは我といふものがない。かくの如く如實に知り、如實に知らねばならぬ。跋迦梨よ、斯くの如く見來つて、多聞の聖弟子は、色受想行識を厭ひ、厭うて欲を離れ、貪欲を離れて解脫し、解脫して解脫したりといふ智慧を生ずる。『生は盡きぬ、梵行は成就せり、成すべきことはなし終れり、これより他の生存なし』と知るのである」と。

世尊は斯く、跋迦梨を敎誨して、坐を立ち上りて靈鷲山に歸り給うた。

跋迦梨は世尊が去り給うて間もなく、看病の比丘に曰つた。「友よ、私を床に上せて、伊師耆利(Isigiri)山の山側黑曜岩の處へ連れて行つて吳れ。私の樣なものがどうして家の中で死なうと考へられやう」と。

看病の友は「承知した」と曰つて、跋迦梨を曰ふが儘に伊師耆利山の山側、黑曜岩の側へ運んでやつた。

於善解脫而得解脫、說此語已俱禮佛足即沒不現。爾時世尊夜過晨朝於大衆前敷座而坐告諸比丘、昨夜二天子來就跋迦梨所語、更告一比丘當往詣尊者跋迦梨比丘所語跋迦梨言、昨夜有二天來詣我所、稽首作禮退住一面語我言、尊者跋迦梨疾病困篤、思惟解脫欲執刀自殺不樂久生、第二天言尊者跋迦梨於善解脫而得解脫、說此語已即沒不現、此是天語、佛復記汝汝於此身不起貪欲、是則善終後世亦善。時彼比丘受世尊敎已、詣金師精舍跋迦梨房。爾時跋迦梨語侍病者、汝等持繩牀共擧我身著精舍外、我欲執刀自殺不樂久生。時衆多比丘出房舍露地經行、受使比丘詣衆多比丘言、諸尊跋迦梨比丘住在何所。諸比丘答言、跋迦梨比丘告侍病者令擧繩牀出精舍外、欲執刀自殺不樂久生。受使比丘即詣跋迦梨所、跋迦梨比丘遙見使比丘來語侍病者、下繩牀著地彼比丘疾來、似世尊使。彼侍病者即下繩牀著地。時彼使比丘語跋迦梨、世尊有敎乃天有所說。時跋迦梨語侍病者、扶我著地不可於牀上受世尊敎及天所說。時侍病者即扶跋迦梨置下於地。時跋迦梨言汝可宣示世尊告敎及天所說。使比丘以世尊語具告跋迦梨。跋迦梨言、尊者大師善知所知、善見所見、彼二天亦善知所知見所見、然我今日於色常無常決定無疑、無常者是苦決定無疑、若無常苦者是變易法於彼無可貪可欲決定無疑、受想行識亦復如是、然我今日疾病苦痛猶故、隨身欲執刀自殺不樂久生、即執刀自殺。時使比丘供養跋迦梨死身、已還詣佛所稽首禮足退坐一面具白佛自所見。

世尊はその日の午後とその夜とを、靈鷲山に御過しなされた。その夜、二人の天子あつて、光明赫々として、全靈鷲山を照し、世尊の御許に來り、世尊を拜して、その中一天子はこの樣に申し上げた。「世尊、跋迦梨比丘は解脱を思うてゐます」。他の天子は又この樣に申し上げた。「世尊、跋迦梨比丘は、善く解脱するでありませう」。二天子はこの樣に申し上げて、世尊を禮し右繞してその場から姿を消した。

その夜を過ぎて、世尊は比丘等を呼び、宣ふやう。「比丘等よ、跋迦梨比丘の處へ行いてこの樣に傳へよ。『友、跋迦梨よ、世尊と二天子の語を聞けよ、昨夜、光明赫灼たる二天子が全靈鷲山を輝かして世尊の許に來り、一天子は「世尊、跋迦梨比丘は解脱を思うてゐます」と申し上げ、他の天子は「世尊、跋迦梨比丘は善く解脱するでありませう」と申し上げた。世尊は又この樣に仰せられた。『跋迦梨よ恐るゝな、跋迦梨よ、恐るゝな。汝の死は惡くはない。汝の死は不幸ではない』と」。

「かしこまりました」と御答へして、彼等比丘等は跋迦梨の處へ行いて、「友、跋迦梨よ、世尊と二天子の語を聞けよ」と申し入れた。跋迦梨はこれを聞いて、看病の比丘に曰ふやう。「友よ、私を床から下して呉れ。どうして私の如きものが、高い座に坐つて世尊の教誨を聞かうと思はれやう」と。看病の比丘は、跋迦梨の語の如くにした。比丘等は世尊の仰の如く、跋迦梨に申し傳へた。

跋迦梨は曰ふやう。「友よ、私の言として、世尊の御足を頂拜してこのやうに曰つて呉れ。『世尊、跋迦梨比丘は重病で苦惱に惱んでゐます。世尊の御足を頂禮してこの樣に申します。世尊、私は色受想行識は無常であると曰ふ事を疑ひません。無常のものは苦惱であると曰ふ事に惑はありません。無常にして苦惱のものであり、變易の法に欲を起し貪を起し愛を感じないといふ事にも惑はありません』と。

比丘等は「承知をした」と跋迦梨比丘に答へて、世尊の許へと立ち歸つた。跋迦梨は比丘等が去つて間もなく、刀を取り上げた。比丘等は世尊に跋迦梨の語を申し上げた。

爾時世尊告諸比丘共詣金師精舍跋迦黎屍所見跋迦黎死身有遠離之色見已語諸比丘、汝等見是跋迦梨比丘死身在地有遠離之色不、諸比丘白佛已見。世尊復告諸比丘遶跋迦梨屍四面周有闇冥之相圍遶身不。諸比丘白佛已見。世尊告諸比丘、此是惡魔之像周匝求覓跋迦梨善男子識神當生何處、佛告諸比丘跋迦梨、善男子不住識神以刀自殺。

爾時世尊爲彼跋迦梨說第一記。

* * * * * *

迦葉比丘

(1)一時佛住王舍城迦蘭陀竹園、爾時世尊告諸比丘、當如月譬住如新學慙愧軟下攝心斂形而入他家如明目士夫臨深登峯攝心斂形難速前進、如是比丘如月譬住、亦如新學慚愧軟下御心斂形而入他家、迦葉比丘如月譬住亦如新學慙愧軟下諸高慢御心控形而入他家、如明目士夫臨深登峯御心控形正觀而進、佛告比丘於意云何比丘爲何等像類應入他家。諸比丘白佛言、世尊是法根法眼法依唯願廣說、諸比丘聞已當受奉行。佛告諸比丘、諦聽善思當爲汝說、若有比丘於他家心不縛著貪樂於他得利他作功德欣若在己、不生嫉想亦不自擧亦不下人、如是像類比丘應入他家。爾時世尊以手捫摸虛空告諸比丘、我今此手寧著空縛空染空不。比丘白佛不也。世尊告比丘比丘之法當如是不著不縛不染心而入他家、唯迦葉比丘以不著不縛不染云心而入他家於他得利及作功德欣若在己不生嫉想不自擧不下人、其唯迦葉比丘應入他家。爾時世尊復以手捫摸虛空告諸

その時、世尊は比丘等を呼びかけ給ふやう。「比丘等よ來れ、伊師耆利山側黑曜岩の處へ行かう。良家の子跋迦梨は刀を取り上げた」。かくて世尊は、比丘等を伴ひて、伊師耆利山側黑曜岩の處へ行き、その途中にて遠くより尊者跋迦梨が床の上で身體や肩を動かし展轉してゐるのを見給うた。

其の時又烟の如き魑魅の如きものが、東に行き西に行き北に行き南に行き、又上下四維に走つてゐた。世尊は比丘等にその烟の如き魑魅の如きものが東西南北に走つてゐるのを見るかと尋ね給ひ、彼等の見るといふ答を得て、仰せられた。

「比丘等よ、これは惡魔波旬が、良家の子跋迦梨の識神が何處へ行いて生れるかと探してゐるのである。比丘等よ、跋迦梨はその識神何處に生れるといふことなく涅槃へ入つたのである。

---

(1) 雜阿含卷四一(辰四・37)
同本巴利雜阿含 XVI. 3 (Vol. II P. 197—8)

或る時、世尊は舍衛城祇孤獨園に住して、比丘等に向つて、この様に宣うた。

比丘等よ、在家の人の家に近づく時には、月の譬の如く、心も身體も調順して行けよ、在家の人の家に於ては、常に新入の比丘の如く、謙虚にして居れよ、比丘等よ、譬へば人が、古井戸や、山の崖や、川の淵を眺き込む時に心も身體も調順へてする様に、在家の人の家に近づく時も、斯くの如くにせよ。比丘等よ、迦葉は月の譬の如く、身心を調順して、在家の人の家に近づき、新入の比丘の如く謙虚にしてゐた。比丘等よ、汝等は、在家の人の家に近づくには、如何なる具合にして行つたら善いと思ふか。

比丘等は御答へ申し上げた。「世尊、世尊は我等の法の本、有眼者、我等の歸依所であります。若し世尊が御示し下されたらば、誠に仕合せであります。世尊の御示しの如く、比丘は執持するでありませう」。

時に世尊は御手を空に振りて宣ふやう。比丘等よ、喩へば、この手が空に著かず捕はれず縛られざるが如く、比丘は何處の家に至るも、その家に心を著せず、捕はれず縛られない様にせねばならぬ。「得んと欲するものは得るやう、功德を欲するものは功德を得るやうに」と念じ、自ら得て喜び滿足するが如く、他人の所得に於ても喜び滿足する。比丘等よ斯くの如き比丘にして初めて在家の人の家に近づくべきである。

比丘、於意云何、我今此手寧著空縛空染空以不。諸比丘白佛言不也世尊。佛告比丘、其唯迦葉比丘心常如是、以不著不縛不染之心入於他家。爾時世尊告諸比丘、何等像類、比丘應清淨說法、諸比丘白佛、世尊是法根法眼法依唯願廣說、諸比丘聞已當受奉行。佛告比丘、諦聽善思當爲汝說、若有比丘作如是心爲人說法何等人於我起清淨信、心爲本已當得供養衣被飲食臥具湯藥、如是說者名不清淨說法、若復比丘爲人說法作如是念、世尊顯現正法律離諸熾然不待時節卽此現身緣自覺知正向涅槃而諸衆生沈溺老病死憂悲惱苦、如此衆生聞正法者以義饒益長夜安樂、以是正法因緣、以慈心悲心哀愍心欲令正法久住、心而爲人說是名清淨說法、唯迦葉比丘有如是清淨心、爲人說法以如來正法律乃至令法久住心而爲人說、是故諸比丘當如是學、如是說法於如來正法律乃至令法久住心爲人說法。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

浮木の譬

(1)一時佛在摩竭國界與大比丘衆五百人俱、漸至江水側、爾時世尊見江水中有大材木爲水所漂、卽在水側一樹下坐、爾時世尊告諸比丘、汝等頗見木爲水所漂乎、諸比丘白佛言、唯然見之、世尊告曰、設當此木不著彼岸又不中沒、復非在岸上、不爲人所捉、復非爲非人所捉者、復非爲水所廻轉、復非腐敗者、便當漸漸至海、所以然者、海諸江之原本、汝等比丘

比丘等よ、迦葉は何處の家に至るも、その家に心を著せず、捕はれず縛らるゝことがなかつた。「得んと欲する人は得るやう、功德を欲するものは功德をなすやうに」と念じて、自ら得て喜び滿足するやうに、他人の所得にも喜び滿足するのである。

「比丘等よ、汝等はいかに考ふるや。比丘の不淨說法とは如何なるものにして、淨說法とは如何なるものなるか」。

比丘等はこれに御答へ申し上げた。「世尊、世尊は我等の法の本、有眼者、我等の歸依所であります。若し世尊が御示し下されるならば、誠に仕合せであります。世尊の御示しの如く、比丘は執持するでありませう」。

「比丘等よそれでは、善く聞いて之を思念せよ」と、世尊は仰せられた。比丘等は「かしこまりました」と御答へ申し上げた。

「比丘等よ、比丘にして、このやうな考で說法するものがあるとする。『人が私の說法を聞いて吳れゝば善い。聞いて喜んで吳れゝば善い、喜んで私に喜んだと曰ふしるしを示して吳れゝば善い』。比丘等よ、かういふ考で說法するのが、不淨說法である。比丘等よ、又かういふ考で法を說くものがあるとする。『法は世尊に依つて善く說かれた法である。現世に果報あり、時を隔てず果報あり、來り見よと云ひ得る法であり、涅槃に導く法にて、識者の銘々が個人々々知るべき法である。私の說くこの法を人が聞き、聞いて了解し、了解してその樣に行つて吳れゝば善い』。こういふ考で、善き法の性質に契つて他に法を說き、慈に依つて說法し、同情を以て說法し、愛憐を起して說明する。比丘等よ、斯くの如きを淨說法と曰ふのである。

比丘等よ、迦葉は實に斯くの如く說法したものである。比丘等よ、汝等も亦、迦葉の如く法を說かんと心掛け、このやうに行はねばならぬ。

(1) 增一阿含卷三八(昃三 .10)參照雜阿含卷四三(辰四 .49)
同本巴利雜阿含 XXXV. 200 (Vol. IV. P. P. 179-181)
世尊が憍賞彌 (Kosambi) 國の恒伽河の岸にゐ給うた時のことである。

世尊は大きな材木が恒伽河の流れに浮いて流れて行くのを御覽ぜられて、比丘等を呼びかけ給うた。「比丘等よ、汝等はあの大きな材木が恒伽の流れに浮いて流れて行くのを見るか」。比丘等は「世尊、私共も見ます」と御答へ申し上げた。

「比丘等よ、若しあの材木がこちらの岸にも近付かず、向ふの岸にも近付かず、中流にも沈まず、陸へも上らず、人にも取られず、非人にも取られず、渦にも卷き込まれず、內から腐りもせずば、比丘等よ、あの材木は海に向ひ、海に注ぎ、海に停まるであらう。何故なれば河の流れが海に向ひ海に注ぎ、海に入つて停まるからである。比丘等よ、汝等も亦その樣に、こちらの岸にも近付かず、向うの岸にも近付かず、陸へも上らず、中流に沈まず、人にも取られず、非人にも取られず、渦にも卷き込まれず、內から腐りもせずば、比丘等よ、汝は涅槃に向ひ、涅槃に注ぎ、涅槃に停るであらう。そは何故なれば、比丘等よ、正見は涅槃に向ひ、涅槃に注ぎ、涅槃に入りて停まるからである。

亦如是、設不著彼岸、不著此岸、又不中沒、復非在岸上、不爲人非人所捉、亦不爲水所廻轉、亦不腐敗、便當漸漸至涅槃處。所以然者涅槃者正見正治正語正業正命正方便正念正定是涅槃之原本。爾時有牧牛人、名曰難陀、憑杖而立、是時彼牧牛人遙聞如是所說、漸來至世尊所而立、爾時牧牛人白世尊言、我今亦不著此岸、不在彼岸、又非中沒、復非在岸上、不爲人捉、復非爲非人所捉、不爲水所廻轉、亦非腐敗、漸當至涅槃之處、唯願世尊聽在道次、得作沙門。世尊告曰、汝今還主牛、已然後乃得作沙門耳。牧牛人難陀報曰、斯牛哀念犢故自當還家、唯願世尊聽在道次。世尊告曰、此牛雖當還家、故須汝往付授之。是時牧牛人即受其教、往付牛已還至佛處、白世尊言、今已付牛、唯願世尊聽作沙門、是時如來即聽作沙門、受具足戒。有一異比丘白世尊言、云何爲此岸、云何爲彼岸、云何爲中沒、云何在岸上、云何不爲人所捉、云何不爲非人所捉。云何不爲水所廻轉、云何不腐敗。佛告比丘曰、此岸者身也、彼岸者身滅也、中沒者欲愛也、在岸上者五欲也、爲人所捉者如有族姓子發此誓願、持此功德福祐作大國王、若作大臣、非人所捉者如有比丘有此誓願生四天王中而行梵行、今持功德生諸天之中、是謂名爲非人所捉、爲水所廻轉者此是邪疑也、腐敗者邪見邪治邪語邪業邪命邪方便邪念邪定此是腐敗也。是時難陀比丘在閑靜之處而自修剋、所以族姓之子剃除鬚髮出家學道者、修無上梵行、生死已盡梵行已立所作已辨更不復受有、即於座上成阿羅漢。

この樣に曰はれて。或る比丘は世尊に御尋ね申し上げた。「世尊、こちらの岸とは何でありますか。向うの岸とは何でありますか、中流に沈むとは何の意味でありますか。陸へ上るとはどういふ事でありますか。又人、非人、渦に取られるとは何の事でありますか。内から腐るとは何を意味するのでありますか」。

「比丘よ、こちらの岸とは六內所のことである。向うの岸とは六外處のことである。中流に沈むとは、樂欲のことである。陸へ上るとは我慢のことである。比丘よ、人間に取られるとは、比丘が在家の人に交り、喜び悲しみを同じうし、彼等が樂しめば自分も樂しみ、彼等が苦しめば自分も苦しみ、起り來る用事に自分から彼等の仲間になる。これが人間に捕はれる意味である。比丘よ、非人に取られるとは、茲に比丘が、或る天界に生れる願を以て梵行を修する。『この戒行に依り、苦行に依り、梵行に依り天とならう』と。比丘よ、これが非人に取られる意味である。比丘よ、渦に取られるとは五欲のことである。比丘よ、內から腐るとは、比丘が惡戒にして、性質が惡く、不淨にして善をなさんと勇まず、自分のなしたことを覆ひ包み、沙門に非ずして沙門と見せ、梵行者に非ずして梵行者と見せ、內の腐れが溢れ出づる我落俱多のものゝことである」。

その時、牛飼の難陀といふものが、世尊から遠からぬ所に立つてゐたが、世尊にこの樣に申し上げた。「世尊、私はこちらの岸に近付かず、向うの岸に近付かず、中流に沈まず、陸へ上らず、人間に取られず、非人に取られず、渦に取られず、內から腐らぬでありませう。世尊、私は世尊の御傍で出家し、具足戒を受けたいと思ひます」。

「難陀よ、それでは汝はその牛を主人に返して來るが善い」。

「世尊、この牛は抛つて置いても犢可愛さに獨りで歸つて行きます」。

「難陀よ、それでも汝はその牛を主人に返して來るが善い」。

そこで牛飼の難陀は、その牛を主人の所へ返して、世尊の御許へ來て出家と具足戒を受けたいと願うた。出家と具足戒とを得て、間もなく精進して阿羅漢の一人になつた。

六獸の譬

一[1]時佛住拘睒彌國瞿師羅園、爾時世尊告諸比丘、譬如士夫遊空宅中、得六種衆生、一者得狗、即執其狗繫著一處、次得其鳥、次得毒蛇、次得野干、次得失收摩羅、次得獼猴、得斯衆生、悉縛一處、其狗者樂欲入村、其鳥者常欲飛空、其蛇者常欲入穴、其野干者樂向塚間、失收摩羅者長欲入海、獼猴者欲入山林、此六衆生悉繫一處、所樂不同、各各嗜欲到安處、各各不相樂、於他處而繫縛故、各用其力向所樂方而不能脫、如是六根種種境界各各自求所樂境界、不樂餘境界、眼根常求可愛之色、不可意色則生其厭、耳根常求可意之聲、不可意聲則生其厭、鼻根常求可意之香、不可意香則生其厭、舌根常求可意之味、不可意味則生其厭、身根者常求可意之觸、不可意之觸則生其厭、意根常求可意之法、不可意法則生其厭。

此六種根種種行處、種種境界、各各不求異根境界、此六種根其有力者堪能自在隨覺境界。如彼士夫繫六衆生於其堅柱、正出用力隨意而去、往反疲極以繩繫故終依於柱。

諸比丘我說此譬、欲爲汝等顯示其義、六衆生者譬猶六根、堅柱者譬身念處、若善修習身念處、有念不念色、見可愛色則不生著、不可愛色則不生厭、耳聲鼻香舌味身觸意法於可意法則不求欲、不可意法則不生厭、是故比丘當勤修習多住身念處。佛說此經已、諸比丘聞佛所說歡喜奉行。

* * * * * *

（1） 雜阿含卷四三(辰四 .48)

同本巴利雜阿含 XXXV. 206 の後半 (Vol. III. p. p. 198-200)

「比丘等よ、喩へば人あつて、種々の境界の六種の生物を捕へて强い繩で縛つて置くとする。蛇、鰐魚、鳥、犬、野干、猿、この六種の生物を捕へ、强い繩で縛つて、其繩を結び合せて放つとする。この時、種々の境界から來たこの六種の生物は、各々自分々々の境界を求める。蛇は塚に歸らうと求め、鰐魚は水に歸らうと求め、鳥は空に飛ばんと求め、犬は村に歸らんと求め、野干は墓に歸らんと求め、猿は森に歸らんと求める。比丘等よ、その時、六種の生物は銘々疲れて、その中の力の勝つたものゝ方へ引きずられて走りその支配の下に行く。比丘等よ、誰でも身念住を修めず屢々行はざれば、その眼は可愛の色に引かれ、不可愛の色を厭ふ。………耳鼻舌身又同じく、………、心も可愛の法に引かれ、不可愛の法を厭ふ。比丘等よ、斯くの如きを制御しないといふのである。

比丘等よ、制御するとは如何なることか。比丘等よ、茲に比丘ありて、色を見て、可愛の色に心着せず、不可愛の色に心憤らず、身念住に住し無量心に住するのである。さうしてその心解脫と慧解脫とを如實に知るのである。かくてその起り來る惡不善の法は殘りなく滅するのである。………………心を以て法を知り、可愛の法に心着せず、不可愛の法に心憤らず、身念住に住し無量心に住するのである。さうしてその心解脫と慧解脫とを如實に知るのである。かくてその起り來る惡不善の法は殘りなく滅するのである。

比丘等よ、喩へば人あつて、種々の境界の六種の生物を捕へて强い繩で縛つて置くとする。蛇、鰐魚、鳥、犬、野干、猿、この六種の生物を捕へ丈夫な繩で縛り、堅固な柱か杙に縛りつけるとする。この時種々の境界から來たこの六種の生物は、各々自分々々の境界を求める。蛇は塚に歸らんと求め、鰐魚は水に歸らんと求め、鳥は空に飛ばんと求め、犬は村に歸らんと求め、野干は墓に歸らんと求め、猿は森に歸らんと求める。比丘等よ、その六獸はやがて疲れて來て、その柱なり杙なりの傍に或は立ち或は坐し或は臥するであらう。比丘等よ、斯くの如く誰でも身念住を修め屢々行へば、その眼は可愛の色に引かれず、不可愛の色を厭はず……………心も可愛の法に引かれず、不可愛の法を厭はない。比丘等よ、斯くの如きを制御といふのである。

比丘等よ、堅固な柱又は杙とは身念住のことである。比丘等よ、この故にこの樣に學ばねばならぬ。身念住を修し、屢々行ひ、乘用とし、土臺とし、身念住に常に住し、積集し、企圖せねばならぬ」と。

六方禮經

(1) 一時佛在羅閱祇耆闍崛山中與大比丘衆千二百五十人俱。爾時世尊時到着衣持鉢入城乞食。時羅閱祇城內有長者子、名曰善生、清旦出城詣園遊觀、初沐浴訖擧身皆濕向諸方禮、東西南北上下諸方皆悉周遍。爾時世尊見長者善生詣園遊觀初沐浴訖擧身皆濕向諸方禮、世尊見已卽詣其所告善生言、汝以何緣清旦出城於園林中擧身皆濕、向諸方禮。爾時善生白佛言、我父臨命終時遺勑我言、汝欲禮者當先禮東方南方西方北方上方下方、我奉承父敎不敢違背、故澡浴訖先叉手東面向東方禮、南西北方上下諸方皆悉周遍。爾時世尊告善生曰長者子有此方名耳非爲不有、然我賢聖法中非禮此六方以爲恭敬。善生白佛言、唯願世尊、善爲我說賢聖法中禮六方法。

佛告長者子、諦聽諦聽善思念之當爲汝說。善生對曰唯然願樂欲聞。佛告善生、若長者長者子知四結業不於四處而作惡行、又復能知六損財業、善生是謂長者長者子離四惡行禮敬六方、今世亦善後獲善報、今世根基後世根基於現法中智者所稱獲世一果、身壞命終生天善處、善生當知、四結業者一者殺生二者盜竊、三者婬逸、四者妄語、是四結業。云何爲四處、一者欲、二者恚、三者怖、四者癡、若長者長者子於此四處而作惡者則有損耗。佛作頌曰、

欲瞋及怖癡、　有此四法者、　名譽日損減、　如月向于晦、

佛告善生若長者長者子於此四處不爲惡者則有增益、爾時世尊重作頌曰、

(1)　長阿含卷一一(昃九•57–59)參照中阿含卷三三(昃六•64–66)
同本巴利長阿含第三一經 (Vol. III. p. p. 180–193)

私はこの樣に聞きました。世尊が王舍城竹林栗鼠養餌所にゐ給うた時であつた。良家の子浸伽羅迦 (Singalaka) は、時よき時に起き出で城を出でゝ、(郊外にて)、衣を濕し、髮を濕し、合掌して、東方南方西方北方下方上方の諸方を拜んでゐた。

世尊は〔いつもの樣に〕、早朝衣を著け鉢を取り、乞行の爲に王舍城にお入りなされたが、その途中にて、浸伽羅迦が諸方を拜してゐるのを御覽なされてこの樣に仰せられた。

「良家の子よ、汝は何故にかく、時善き時に起き出て、城を出て、衣を濕し髮を濕し合掌して、東西南北上下の諸方を拜してゐるのであるか」。

「世尊、私の父が亡くなりまする時に、私にこの樣に申しました。『愛子よ、汝は諸方を拜するが善い』と。世尊、それで私は父の語を尊び敬ひ重んじて、時善き時に起き出て、城を出でゝ、衣を濕し髮を濕し合掌して東西南北上下を拜して居るのであります」。

「家主の子よ、神聖なる敎律に於ては、この樣にして六方を拜すべきではない」。

「世尊、然らば神聖なる敎律に於ては、如何樣に六方を拜すべきでありますか。世尊、どうぞ神聖なる敎律に於て、六方を拜すべきやう、私に法を御說き下され」。

「家主の子よ、それでは善く聞けよ、聞いて之を思念せよ、說き聞かせるであらう」。「かしこまりました」と浸伽羅迦は答へた。世尊は次の樣に御說きなされた。

「良家の子よ、聖弟子は四業垢を廢し、四處に於て惡業をなさず、財產を蕩盡する六個の口に交らず、從つて彼は(以上の)十四の惡から遠離し、六方を謹み護つてゐるのである。さうしてその結果今世も後世も勝利を得、死後は善趣天界に生れるのである。

「廢せられたる四業垢とは何であるか。良家の子よ、殺生は業垢である。偸盜は業垢である。欲邪行は業垢である。妄語は業垢である。この四種の業垢を廢捨してゐるのである」。世尊はつゞいて、これを偈にして宣うた。

殺生と偸盜と、　　　妄語と他人の妻を犯すとは、
賢者の讚へぬところと、　　　(古より)曰はる。

「四處に於て惡業をなさずとは如何なることか。良家の子よ、人々は欲惡路に行いて惡業をなし、瞋惡路に行いて惡業をなし、痴惡路に於て惡業をなし、怖畏惡路に於て惡業をなすものである。良家の子よ、然るに聖弟子は決して、欲惡路に行かず、瞋惡路に行かず、痴惡路に行かず、怖畏惡路に行かない。これが四所に於て惡業をなさずといふことである。世尊は續いて之を偈にして宣うた。

欲と瞋と怖畏と愚痴とに依りて、　　　法を犯すもの、
その人のほまれは日々に消ゆ。　　　月の黑分に於けるが如し。
欲と瞋と怖畏と愚痴とに依りて、　　　法を犯さぬもの、
その人のほまれは日々に增しのぼる。　　　月の白分に於けるが如し。

於欲恚怖癡、　不爲惡行者、　名譽日增廣、　如月向上滿、

佛告善生、六損財業者、一者躭湎於酒、二者博戲、三者放蕩、四者迷於伎樂、五者惡友相得、
六者懈墮、是爲六損財業、善生若長者子解知四結行不於四處而爲惡行、復知六損財業
是爲於四處得離供養六方、今善後善、今世根基後世根基於現法中智者所譽獲世一果
身壞命終生天善處。善生當知飲酒有六失、一者失財、二者生病、三者鬪諍、四者惡名流布、
五者恚怒暴生、六者智慧日損、善生若彼長者長者子飲酒不已其家產業日日損減。善生
博戲有六失云何爲六、一者財產日耗、二者雖勝生怨、三者智者所責、四者人不敬信、五者
爲人疎外、六者生盜竊心、善生是爲博戲六失、若長者長者子博戲不已其家產業日日損
減。放蕩有六失、一者不自護身、二者不護財貨、三者不護子孫、四者常自驚懼、五者諸苦惡
法常自纏身、六者喜生虛妄、是爲放蕩六失、若長者長者子放蕩不已其家產業日日損減。
善生迷於伎樂復有六失、一者求歌、二者求舞、三者求琴瑟、四者波內早、五者多羅盤、六者
首呵那、是爲伎樂六失、若長者長者子伎樂不已、其家產業日日損減。惡友相得復有六失、
一者方便生欺、二者好喜屏處、三者誘他家人、四者圖謀他物、五者財利自向、六者好發他
過、是爲惡友六失、若長者長者子習惡友不已其家產業日日損減。懈墮有六失、一者富樂
不肯作務、二者貧窮不肯勤修、三者寒時不肯勤修、四者熱時不肯勸修、五者時早不肯勤
修、六者時晚不肯勤修、是爲懈墮六失、若長者長者子懈墮不已其家財業日日損減、佛說

「財産を蕩盡する六個の口に交らずとは如何なることか。良家の子よ、酒を飲みて放逸に耽るは財産の耗る口である。時を外れて街頭を彷徨ふは財産の耗る口である。歌舞祭禮に遊び廻るは財産の耗る口である。賭博放逸に耽るは財産の耗る口である。惡友と交はるは財産の耗る口である。懶惰に耽るは財産の耗る口である。

「良家の子よ、酒を飲み放逸に耽るに左の六つの禍がある。現世の富の消耗、嫌諍爭論、病起り、惡名流れ、怒り易くなり、第六に智慧が減ずる。良家の子よ、これが飲酒放逸の六つの禍である。

「良家の子よ、時外れに街路を彷徨ふにも六つの禍がある。彼れ自身が護られない。妻子が護られない。財産が護られない。惡所に於て怖れに襲はれる。虚言が多くなる。多くの苦法に纏はられる。良家の子よ、これが時外れに街頭を彷徨ふものゝ六つの禍である。

「良家の子よ、歌舞祭禮に遊び廻るに六つの禍がある。『舞は何處、歌は何處、音曲は何處、講談は何處、鼓は何處、太鼓は何處』と探し廻るやうになる。良家の子よ、これが朋黨を結んで遊び廻る六つの禍である。

「賭博放逸に耽るに六つの禍がある。勝者に怨を起し勝ちて心悲しみ、現在財産を消耗し、法廷に立ちて語ることが出來ず、朋友にさげすまれ、婚姻に望み手なく、妻子を充分に養ふことが出來ぬ。良家の子よ、これが賭博放逸に耽るものゝ六つの禍である。

「良家の子よ、惡友に交はるに六つの禍がある。賭博者、泥醉者、欲に底のないもの、虚僞者、瞞着者、殘忍者、かういふものゝみ彼の友になり仲間となる。良家の子よ、これが惡友に交はる六つの禍である。

『良家の子よ、懶惰に耽るに六つの禍がある。餘り寒いと曰つては仕事をせず、餘り熱いと曰つては仕事をせず、遲いと曰つては仕事をせず、早いと曰つては仕事をせず、空腹だと曰つては仕事をせず、滿腹だと曰つては仕事をせない。このやうに仕事に贅澤を並べてゐて、未だ生ぜざる富は生ぜず、既に生じた富も無くなつて仕舞ふ。良家の子よ、これが懶惰に耽る六つの禍である。世尊は續いてこれを偈にして宣うた。

是已復作頌曰、

迷惑於酒者、　還有酒伴黨、　財産正集聚、　隨已復散盡、　飲酒無節度、
常喜歌舞戲、　晝則遊他家、　因此自陷墜、　隨惡友不改、　誹謗出家人、
邪見世所嗤、　行穢人所黜、　好惡著外色、　但論勝負事、　親惡無反復、
行穢人所黜、　爲酒所荒迷、　貧窮不自量、　輕財好奢用、　破家致禍患、
擲博群飲酒、　共伺他婬女、　翫習卑鄙行、　如月向於晦、　行惡能受惡、
與惡友同事、　今世及後世、　終始無所獲、　晝則好睡眠、　夜覺多悕望、
獨昏無善友、　不能修家務、　朝夕不肯作、　寒暑復懈墮、　所爲事不究、
亦復毀成功、　若不計寒暑、　朝夕勤修務、　事業無不成、　至終無憂患、

佛告善生、有四怨如親汝當覺知、何謂爲四、一者畏伏、二者美言、三者敬順、四者惡友。佛告善生、畏伏有四事、云何爲四、一者先與後奪、二者與少望多、三者畏故强親、四者爲利故親、是爲畏伏四事。佛告善生、美言親復有四事、云何爲四、一者善惡斯順、二者有難捨離、三者外有善來密止之、四者見有危事便排擠之、是爲美言親四事。敬順親復有四事、云何爲四、一者先誑、二者後誑、三者現誑、四者見有小過便加杖之、是爲敬順親四事。惡友親復有四事、云何爲四、一者飲酒時爲友、二者博戲時爲友、三者婬逸時爲友、四者歌舞時爲友、是爲惡友親四事。世尊說之已復作頌曰、

世に飲み連れといふものあり、
友よ友よとなづかしむも、
利のある所に、
交はるの友なり。
日昇りて遅く起き出づること、人妻と親しむこと、
怒に囚はるゝこと、不利を齎らすこと、
悪友と、吝なること、
この六つは人を害なふ。
悪友、よからぬ連れ、
悪しきおこなひは
此の世彼の世にて共に、
人を害なふ。
博奕と、飲酒と及び歌舞と、
晝寝と、時ならぬ出歩るきと、
悪しき友と、吝なると、
これらの六つは人を害ふ。
博奕を弄び、酒を呑み、
他の愛人の許にたはむれ、
卑しきと交はりて、長ぜると交はらざれば、
月の黒分に於けるが如くに退轉す。
酒を呑みて、富なく貧しく、
渇けば水小屋に走りて飲み、
水に浸るが如くに債に浸れば、
その人は速に家なき人となるべし。
晝は眠るを常とし、
夜起き出でゝ見歩るき廻り、
常に酔ひつぶれては、
家に住むこと能はじ
『餘りに寒し、餘りに熱し、
餘りに遅し』など云ひて、
仕事を怠れば、
利はその人を去るべし。
熱と寒さを、
草程にも思はず、
人のなすべきことを、
なす人は樂より離るゝことなし。

「良家の子よ、この四種の友に似て友に非ざるものを知らればならぬ。貪欲なる人、語の巧みな人、諛らふ人、浪費する人、この四人は友に似て友に非ざるものと知らればならぬ。

「良家の子よ、貪欲なる人は四つの理由にて、友に似て、友ではない。貪欲である。少を與へて多を欲する。怖い爲になすべきことをする。利の爲に交はることである。良家の子よ、語の巧みな人は四つの理由にて、友に似て友ではない。過去のことで親愛を示し、未來のことで親愛を示し、愚にもつかないことで手傳をして見て、現在に起つた大事なことには逃げを張ることである。良家の子よ、諛らふ人は四つの理由で友に似て友ではない。その悪を許し、善を許さず、面と向つては讃め、陰では貶ることである。良家の子よ、四つの理由で、浪費の人は友に似て友ではない。酒を呑むのに友となり、時外れて街頭を彷徨ふに連れとなり、歌舞祭禮に飛び廻る時に友となり、博奕放逸の時に友となることである」。世尊は續いて之を偈にして宣うた。

貪欲の友、
語巧みの友、
諛ひの友、
浪費の友、
これらの四は友に非ず。
賢者は斯く知りて、
遠く避くること、
怖ろしき道を避くるが如くせよ。

畏伏而强親、　美言親亦爾、　敬順虚誑親、　惡友爲惡親、　此親不可恃、
智者當覺知、　宜速遠離之、　如避干嶮道、

佛告善生有四親可親多所饒益爲人救護、云何爲四、一者止非、二者慈愍、三者利人、四者同事是爲四親可親多所饒益爲人救護當親近之、善生彼止非有四事多所饒益爲人救護、云何爲四、一者見人爲惡則能遮止、二者示人正直、三者慈心愍念、四者示人天路、是爲四止非、多所饒益爲人救護。復次慈愍有四事、一者見利代喜、二者見惡代憂、三者稱譽人德、四者見人說惡便能抑制、是爲四慈愍、多所饒益爲人救護、利益有四、云何爲四、一者護彼不令放逸、二者護彼放逸失財、三者護彼使不恐怖、四者屏相教誡、是爲四利人多所饒益爲人救護、同事有四、云何爲四、一者爲彼不惜身命、二者爲彼不惜財寶、三者爲彼濟其恐怖、四者爲彼屏相教誡、是爲四同事、多所饒益爲人救護、世尊說是已復作頌曰、

制非防惡親、　慈愍在他親、　利人益彼親、　同事齊己親、　此親乃可親、
智者所附近、　親中無等親、　如慈母親子、　若欲親可親、　當親堅固親、
親者戒具足、　如火光照人、

佛告善生當知六方、云何爲六方、父母爲東方、師長爲南方、妻婦爲西方、親黨爲北方、僮僕爲下方、沙門婆羅門諸高行者爲上方。善生夫爲人子當以五事敬順父母、云何爲五、一者供奉能使無乏、二者凡有所爲先白父母、三者父母所爲恭順不逆、四者父母正令不敢違

「良家の子よ、この四種の親友を知らねばならぬ。助けになる友、苦樂を共にする友、能く忠言して呉れる友、同情ある友である。

「良家の子よ、助けになる友は四種の理由に依つて親友である。放逸に流るゝを護り、放逸者の財産を護り、怖るゝ者の歸依となり、必要の起つた場合には富を二倍にして返すことである。良家の子よ、苦樂を共にする友は、四種の理由に依つて親友である。その人の秘密を發かず、秘密を秘し、災厄の時に捨てず、その人の爲には生命をも捨てることである。良家の子よ、能く忠言して呉れる友は四種の理由に依つて親友である。惡を防ぎ、善を納め、未だ聞かざるを聞かしめ、生天の道を示すことである。良家の子よ、同情ある友は四種の理由に依つて親友である。その人あらざれば喜ばず、その人あれば喜び、譏む可からざるを譏むるを停め、讃むべきを讃むるを歡ぶことである」。世尊は續いてこれを偈にして宣うた。

助けの友、　苦樂を共にする友、
忠言を與ふる友、　同情ある友、
この四を親しき友と、　賢者は知りて、
母の子に於けるが如く、　親しく交れよ。
賢者は戒を具へて、　火の光の如く輝く。
富を集むる、　蜂に慣ひ、
富を積むこと、　蟻塚を積むが如く、
斯くの如く富を集めて、　在家の家にありて利は足らはん。
かくてその四分の富を散じて、　善き友と交れよ。
一分の富にて暮し、　二分の富にて業を營み、
殘りの富を蓄へて、　災厄に備へよ。

「良家の子よ、如何に聖弟子は六方を護み護るか。良家の子よ、今この六方を知らればならぬ。東方は父母、南方は師、西方は妻子、北方は友、下方は下僕、上方は沙門婆羅門と知らればならぬ。

良家の子よ、子は五事を以て東方の父母に事へればならぬ。「我れは父母の供奉者たるべし。父母の仕事は我れなすべし。家系は立つべし。遺産を守り傳ふべし。父母の死後は布施をなすべし」、この五事を以て子に事へられて、東方の父母は又五事を以て子を愛憐

背、五者不斷父母所爲正業、善生夫爲人子當以此五事敬順父母。父母復以五事敬親其子、云何爲五、一者制子不聽爲惡、二者指授示其善處、三者慈愛入骨徹髓、四者爲子求善婚娶、五者隨時供給所須、善生子於父母敬順恭奉則彼方安穩無有憂畏。善生弟子敬奉師長復有五事、云何爲五、一者給侍所須、二者禮敬供養、三者尊重戴仰、四者師有教敕敬順無違、五者從師聞法善持不忘、善生夫爲弟子當以此五法敬事師長。師長復以五事敬視弟子、云何爲五、一者順法調御、二者誨其未聞、三者隨其所問令善解義、四者示其善友、五者盡以所知誨授不悋、善生弟子於師長敬順恭奉則彼方安穩無有憂畏。善生夫之敬妻亦有五事、云何爲五、一者相待以禮、二者威嚴不闕、三者衣食隨時、四者莊嚴以時、五者委附家內、善生夫以此五事敬待於妻。妻復以五事恭敬於夫、云何爲五、一者先起、二者後坐、三者和言、四者敬順、五者先意承旨、善生是爲妻之於夫敬待、如是則彼方安穩無有憂畏。善生夫爲人者當以五事親敬親族、云何爲五、一者給施、二者善言、三者利益、四者同利、五者不欺、善生是爲五事親敬親族。親族亦以五事親敬於人、云何爲五、一者護放逸、二者護放逸失財、三者護恐怖者、四者屏相教誡、五者常相稱歎、如是親視親族、則彼方安穩無有憂畏。善生主於僮使以五事教授、云何爲五、一者隨能使役、二者飲食隨時、三者賜勞隨時、四者病與醫藥、五者縱其休暇、善生是爲五事教授僮僕。僮使復以五事奉事其主、云何爲五、一者早起、二者爲事周密、三者不與不取、四者作務以次、五者稱譽主名、是爲主待僮

せねばならぬ。惡を停めさせ、善をなさせ、學問を學ばせ、適當な嫁をめあはせ、程よき時に財產を相續させる。斯くの如くして東方は護られ、安穩にして怖畏がないのである。

良家の子よ、弟子は五事を以て南方の師匠に仕へねばならぬ。師來る時座を立ちて迎へ、給事し、柔順にて、供養し、敬んで敎を受ける。師匠は弟子にこの五事を以て仕へられ、又五事を以て弟子を愛憐する。自ら能く調順したるが如く調順せしめ、自ら善く獲たるを獲させ、總ての學術を正しく說きて敎へ、友達の間にその名の聞ゆるやうになし、諸方に守護をなす。かくして南方は護られ、安穩にして怖畏がないのである。

「良家の子よ、夫は五事を以てその西方の妻に仕へねばならぬ。尊敬と、禮義と、不行狀なきことゝ、家內に於て權威を與ふることゝ、衣飾を與ふることである。西方の妻はこの五事を以て夫に仕へられて、又五事を以て夫を愛する。よく順序を立てゝ働き、善く下男下女を取り扱ふ法を知り、貞操を守り、財產を守り、總ての仕事に巧みにして怠らない。かくして西方は護られ、安穩にして怖畏がないのである。

「良家の子よ、良家の子弟は五事を以て北方の友達に仕へねばならぬ。布施と愛語と利行と同事と毒ある語を曰はないことである。この五事を以て良家の子弟に仕へられて北方の友達は五事を以て良家の子弟を愛する。放逸に流れんとするを護り、放逸になつてゐる時その財產を護り、怖畏あればその歸依となり、災厄ある時に捨てず、彼の妻子を給養して恩を返す。かくして北方は護られ、安穩にして怖畏がないのである。

「良家の子よ、主人は五事を以て下方の下僕に仕へねばならぬ。力に從つて仕事を割りつけ、食事と給料を與へ、病氣の時には看護し、珍しいものは分ち與へ、時々休養せしむることである。この五事を以て主人に仕へられ、下方の下僕も五事を以て主人を愛する。朝は主人よりも早く起き、夜は主人よりも遲く臥し、正直にて、仕事を上手になし、主人の譽を傳へる。かくして下方は護られ、安穩にして怖畏がないのである。

「良家の子よ、良家の子弟は五事を以て沙門婆羅門に仕へねばならぬ。慈身業と、慈口

使則彼方安隱無有憂畏。善生檀越當以五事供奉沙門婆羅門。云何爲五、一者身行慈、二者口行慈、三者意行慈、四者以時施、五者門不制止、善生若檀越以此五事供奉沙門婆羅門。沙門婆羅門當復以六事教授之。云何爲六、一者防護不令爲惡、二者指授善處、三者教懷善心、四者使未聞者聞、五者已聞能使善解、六者開示天路、善生如是檀越恭奉沙門婆羅門則彼方安隱無有憂畏。世尊説已重説偈曰、

父母爲東方、　師長爲南方、　妻婦爲西方、　親族爲北方、　僮使爲下方、
沙門爲上方、　諸有長者子、　禮敬於諸方、　敬順不失時、　死皆得生天、
惠施及軟言、　利人多所益、　同利等彼己、　所有與人共、　此四多負荷、
任重如車輪、　世間無此四、　則無有孝養、　此法在世間、　智者所選擇、
行則獲大果、　名稱遠流布、　嚴飾於牀座、　供設上飲食、　供給所當得、
名聲遠流布、　親舊不相遺、　示以利益事、　上下常和同、　有此得善譽、
先當習伎藝、　然後獲財業、　財業既已具、　宜當自守護、　出財未至奢、
當選擇前人、　欺誑觝突者、　寧乞未擧與、　積財從小起、　如蜂集衆花、
財寶日滋息、　至終無損耗、　一食知止足、　二修業勿怠、　三當先儲積
以擬於空乏、　四耕田商賈、　擇地而置牧、　五當起塔廟、　六立僧房舍、
在家勤六業、　善修勿失時、　如是修業者、　則家無損減、　財寶日滋長、

業と、慈意業と、その人々に對して戸を閉さぬと、食事の供給とである。良家の子よ、この五事を以て良家の子に仕へられて、上方の沙門婆羅門は、六事を以て良家の子を愛憐する。惡より遠からしめ、善をなさせ、慈心を以て愛憐し、未だ聞かざるを聞かしめ、既に聞けるを明了にせしめ、生天の道を說く。良家の子よ、五事を以て良家の子に仕へられた沙門婆羅門はこの六事を以て良家の子を愛憐するのである。かくして上方は護られ、安穩にして怖畏がないのである。世尊は續いてこれを偈にして宣うた。

東方は父母、　南方は師、
西方は妻子、　北方は友、
下方は下僕、　上方は沙門婆羅門、
これら六方を拜せよかし、　さらば在家の家に利足らはん。
賢者、戒を具へ、　柔和にて解智を有し、
謙虛にして頑くなに非ざれば、　ほまれを得ん。
勤勉にして怠ることなく、　災厄にたじろがず、
行爲に汚れなく智慧あれば、　ほまれを得ん。
交遊廣く善く友をつくり、　博愛にして慳を離れ、
主となり導きとなり先達とならば、　ほまれを得ん。
布施と愛語と、　此の世に於て利行し、
分に應じて何處にても、　如法に事を同じうす。
これは世間の(四)攝事、　車の行くに軸の轄の要あるが如し。
この(四)攝事なければ、　世に孝養なかるべし。
敬と供奉とを受くればこそ、　父母は子の爲にするなれ、
かくて賢者は、　この四攝事を行ふが故に、
大なる果報を得て、　ほまれながる。

浸伽羅迦は、かく說き終り給うた世尊にこのやうに申し上げた。

「世尊殊勝であります。世尊殊勝であります。世尊よ、喩へば倒れたるを起し、蔽はれたるを顯はし、迷へるものに道を示し、『眼あるものは形を見よ』と暗に光を齎らすやうに、世尊は種々に法を御說きになりました。世尊、私は世尊と法と比丘僧伽に歸依いたします。世尊、今日より生命ある限り歸依する優婆塞として私を受け納れて下さい」。

如海呑衆流。（下略）

*　*　*　*　*　*

大緣方便經

(1)一時佛在拘流沙國劫摩沙住處、與大比丘衆千二百五十人俱、爾時阿難在閑靜處作是念言、甚奇甚特世尊所說十二因緣法之光明甚深難解、如我意觀猶如目前以何爲深、於是阿難即從靜室起、至世尊處頭面禮足在一面坐白世尊言、我向於靜室默自思念、甚奇甚特世尊所說十二因緣法之光明甚深難解、如我意觀如在目前、以何爲深。

爾時世尊告阿難曰、止止勿作此言、十二因緣法之光明甚深難解、阿難此十二因緣難見難知、諸天魔梵沙門婆羅門未見緣者若欲思量觀察分別其義者則皆荒迷無能見者。阿難我今語汝老死有緣、若有問言、何等是老死緣。應答彼言生是老死緣。若復問言、誰是生緣。應答彼言有是生緣。若復問言、誰是有緣。應答彼言取是有緣。若復問言、誰是取緣。應答彼言愛是取緣。若復問言、誰是愛緣。應答彼言受是愛緣。若復問言、誰是受緣。應答彼言觸是受緣。若復問言、誰爲觸緣。應答彼言六入是觸緣。若復問言、誰爲六入緣。應答彼言名色是六入緣、若復問言、誰是名色緣。應答之言識是名色緣。若復問言、誰爲識緣。應答之言行是識緣。若復問言、誰爲行緣。應答之言癡是行緣。阿難如是緣癡有行緣行有識緣識有名色緣名色有六入緣六入有觸緣觸有受緣受有愛緣愛有取緣取有有緣有有生緣生有老死。憂悲苦惱大患所集是爲此大苦陰緣。

(1) 長阿含卷一〇(昃九•50-54)同本巴利長阿含一五經(vol. II p.p. 56–72)

The Exalted One was once dwelling among the Kurus, in Kammassadamma. And Ānanda came to where the Exalted One was, bowed in salutation before him, took a seat on one side, and he said to the Exalted One:— 'Wonderful, Lord, and marvellous it is, that whereas this doctrine of events as arising from causes is so deep and looks so deep, to me it seems as clear as can be!'

'Say not so, Ānanda! Deep is this doctrine of events as arising from causes, and it looks deep too. It is through not penetrating it, that this generation has become a tangled skein, a matted ball of thread, like to munja-grass and rushes, unable to overpass the doom of the Waste, the Woeful Way, the Downfall, the Constant Round.

If you, Ānanda, were asked:— "Is old age and death due to a particular cause?" you should say:— "It is." And to the question:— "From what cause is old age and death?" you should say:— "Birth is the cause of old age and death."

'If you, Ānanda, were asked:— "Is birth due to a particular cause?" you should say:— "It is." And to the question:— "From what cause is birth?" you should say:— "Becoming is the cause of birth."

'If you, Ānanda, were asked:—— "Is becoming due to a particular cause?" you should say:— "It is." And to the question:— "From what cause is becoming?" you should say: "Grasping is the cause of becoming."

'In this way, Ānanda, you should say:— "Craving is the cause of grasping, Sensation is the cause of Craving, Contact is the cause of Sensation, Name-and-form is the cause of Contact, and Cognition is the cause of Name-and-form.

Thus then is it, Ānanda, that cognition, with name-and-form as its cause; name-and-form, with cognition as its cause; contact, with name-and-form as its cause; sensation wiih contact as its cause; craving, with sensation as its cause; grasping, with craving as its cause; becoming, with grasping as its cause; birth, with becoming as its cause; old age and death, with birth as its cause; grief, lamentation, ill, sorrow and despair, all come into being. Such is the coming to pass of this whole body of ill.

'I have said that birth is the cause of old age and death. Now in what way that is so, Ānanda, is to be understood after this manner. Where there no birth of any sort or kind whatever of any one anywhere—that is to say, of gods to godhood, of Gandharvas after their kind, of Yakshas after their kind, of goblins after their kind, of humans to humanity, of quadrupeds to the animal kingdom, of birds to winged things, or of insects to the insect world were there no birth after the several kind of every one of these classes of beings, then, there being no birth whatever, would there, owing to this cessation of birth, be any appearance of old age and death?' 'There would not, lord.'

'Wherefore, Ānanda, just that is the ground, that is the basis, that is the cause of old age and death, to wit, birth.

'I have said that becoming is the cause of birth. Now in what way that is so, Ānanda, is to be understood after this manner. Were there no becoming of any sort or kind whatever of any one anywhere, that is to say, being no becoming whatever, would there, owing to this cessation of becoming, be any appearance of birth?' 'There would not, lord.'

'Wherefore, Ānanda, just that is the ground, that is the basis, the genesis, the cause of birth, to wit, becoming.

佛告阿難緣生有老死此爲何義若使一切衆生無有生者寧有老死不。阿難答曰無也。是故阿難以此緣知老死由生緣生有老死我所說者義在於此。又告阿難緣有有生此爲何義、若使一切衆生無有欲有色無色有者寧有生不。答曰無也。阿難我以此緣知生由有緣有有生。我所說者義在於此。又告阿難緣取有有此爲何義、若使一切衆生無有欲取見取戒取我取者寧有有不、答曰無也。阿難我以此緣知、有由取、緣取有有。我所說者義在於此。又告阿難緣愛有取此爲何義、若使一切衆生無有欲愛有愛無有愛者寧有取不。答曰無有。阿難我以此緣知、取由愛緣愛有取、我所說者義在於此。

又告阿難緣受有愛此爲何義。若使一切衆生無有樂受苦受不苦不樂受者寧有愛不。答曰無也。阿難我以此緣知愛由受、緣受有愛、我所說者義在於此。阿難當知、因愛有求、因求有利、因利有用、因用有欲、因欲有著、因著有嫉、因嫉有守、因守有護。阿難由有護故有刀杖諍訟作無數惡。我所說者義在於此。阿難此爲何義、若使一切衆生無有護者、當有刀杖諍訟起無數惡不。答曰無也。是故阿難以此因緣知、刀杖諍訟由護而起、緣護有刀杖諍訟、阿難我所說者義在於此。

又告阿難因守有護此爲何義。若使一切衆生無有守者寧有護不、答曰無也。阿難我以此緣知、護由守、因守有護、我所說者義在於此。阿難因嫉有守此爲何義。若使一切衆生無有嫉者寧有守不。答曰無也。阿難我以此緣知、守由嫉、因嫉有守、我所說義在於此。阿難因著

'I have said that grasping is the cause of becoming. Now in what way that is so, Ānanda, is to be understood after this manner. Were there no grasping of any sort or kind whatever by any one at anything— that is to say, no grasping at the things of sense, no grasping through speculative opinions, no grasping after mere rule and ritual, no grasping through theories of soul— Then there being no grasping whatever, would there, owing to this cessation of grasping, be any appearance of becoming?' 'There would not, lord.'

'Wherefore, Ānanda, that is the ground, the basis, the genesis, the cause of becoming, to wit, grasping.

'I have said that craving is the cause of grasping. Now in what way that is so, Ānanda, is to be understood after this manner. Were there no craving of any thought or kind whatever by any one for anything— that is to say, no craving for sights, sounds, odours, tastes, tangibles or ideas— then there being no craving whatever, would there, owing to this cessation of craving, be any appearance of grasping?' 'There would not, lord.'

'Wherefore, Ānanda, just that is the ground, that is the basis, the genesis, the cause of grasping, to wit, craving.

'I have said that sensation is the cause of craving. Were there no sensation of any sort or kind whatever in any one for anything, that is to say, no sensations born of impressions received by way of sight, hearing, smell, taste, touch, or imagination,— would there be any appearance of craving?' 'There would not.'

'Wherefore, Ānanda, just that is the ground, the basis, the genesis, the cause of craving, to wit, sensation.'

'Thus it is, Ānanda, that craving comes into being because of sensation, pursuit because of craving, gain because of pursuit, decision because of gain, desire and passion because of decision, tenacity because of desire and passion, possession because of tenacity, avarice because of possession, watch and ward because of avarice, and many a bad and wicked state of things arising from keeping watch and ward over possessions:- blows and wounds, strife, contradiction and resort, quarrelling, slander and lies.

'I have said that many a bad and wicked state of things arising from keeping watch and ward over possession, blows and wounds, quarrelling and the like, come into being. Were there no watch and ward of any sort or kind whatever by any one over anything, then would there, owing to this cessation of watch and ward, not be any coming into being of those many bad and wicked states of things.'

'I have said that watch and ward is because of avarice. Were there no avarice of any sort or kind whatever in any one about anything, then there would not be any appearance of watch and ward.'

'I have said that avarice is because of possession. Were there no possession of any sort or kind whatever by any one of anything, then there would not be any appearance of avarice.'

'I have said that tenacity is the cause of possession. Were there no tenacity of any sort or kind whatever shown by any one with respect to anything, then there would not be any appearance of possession.'

'I have said that tenacity is because of desire and passion. Were there no passion or desire of any sort or kind whatever in any one for anything, then there would not be any appearance of tenacity.'

'I have said that passion and desire is because of decision. Were there no purpose of any sort or kind whatever devised by any one for anything, then there would not be any appearance of passion and desire.'

有レ嫉、此爲二何義一、若使三一切衆生無レ有レ著者寧有レ嫉不。答曰無也。阿難我以二此縁一知、嫉由レ著因レ著有レ嫉我所説者義在二於此一。阿難因レ欲有レ著此爲二何義一、若使三一切衆生無レ有レ欲者寧有レ著不。答曰無也。阿難我以二此縁一知、著由レ欲因レ欲有レ著、我所レ説者義在二於此一。阿難因レ用有レ欲此爲二何義一、若使三一切衆生無レ有レ用者寧有レ欲不。答曰無也。阿難我以二此義一知、欲由レ用因レ用有レ欲我所説者義在二於此一。阿難因レ利有レ用此爲二何義一、若使三一切衆生無レ有レ利寧有レ用不。答曰無也。阿難我以二此義一知、用由レ利因レ利有レ用、我所レ説者義在二於此一。阿難因レ求有レ利此爲二何義一、若使三一切衆生無レ有レ求者寧有レ利不。答曰無也。阿難我以二此縁一知、利由レ求因レ求有レ利我所レ説者義在二於此一。阿難因レ愛有レ求此爲二何義一、若使三一切衆生無レ有レ愛者寧有レ求不。答曰無也。阿難我以二此縁一知、求由レ愛、因レ愛有レ求、我所レ説者義在二於此一。

又告二阿難一因レ愛有レ求至二於守護一、受亦如レ是、因レ受有レ求、至二於守護一。佛告二阿難一縁レ觸有レ受此爲二何義一、阿難若使三無眼無色無眼識一者寧有レ觸不。答曰無也。若無二耳聲耳識鼻香鼻識舌味舌識身觸身識意法意識一者寧有レ觸不。答曰無也。阿難若使三一切衆生無レ有レ觸者寧有レ受不。答曰無也。阿難我以二是義一知、受由レ觸縁レ觸有レ受、我所説者義在二於此一。阿難縁二名色一有レ觸此爲二何義一若使三一切衆生無レ有二名色一者寧有二心觸一不。答曰無也。若使三一切衆生無二形色相貌一者寧有二身觸一不。答曰無也。阿難若無二名色一寧有レ觸不、答曰無也。阿難我以二是縁一知、觸由二名色一縁二名色一有レ觸我所説者義在二於此一。阿難縁レ識有二名色一此爲二何義一、若不レ入二母胎一者有二名色一不。答曰無也。若

'I have said that decision is because of gain. Were there no gain of any sort or kind whatever by any one of anything, then there would not be any appearance of decision.

'I have said that gain is because of pursuit. Were there no pursuit of any sort or kind whatever by any one after anything, then there would not be any appearance of gain.

'I have said that pursuit is because of craving. Were there no craving of any sort or kind whatever by any one for anything,— that is to say, the lust of the flesh, the lust of life eternal and the lust of the life that now is— then, there would not be any appearance of pursuit.

'So now Ānanda, these two aspects of craving from being dual become united through the sensation.

'I have said that contact is the cause of sensation. Were there no contact of any sort or kind whatever between any one and anything whatever,— That is to say, no reaction of sight, hearing, smell, taste, touch or imagination— then, there would not be any appearance of sensation.

'I have said that name-and-form is the cause of contact. Those modes, features, characters, exponents, by which the aggregate called 'name' manifests itself,— if all these were absent, then there would not be any manifestation of a corresponding verbal impression in the aggregate called (bodily) 'form.'

Those modes, features, characters, exponents, by which the aggregate called 'form' manifests itself— if all these were absent, then there would not be any manifestation of an impression of sense-reaction in the aggregate called 'name.'

'And if all those modes, &. c., of both kinds were absent, then there would not be any manifestaton of either verbal or sensory impression.

'So that, if all those modes, &. c., by which name-and-form manifests itself were absent, then there would be no manifestation of contact.

'I have said that congnition is the cause of name-and-form. Were cognition not to descend into the mother's womb, then would not name-and-form become constituted therein.

'Were cognition, after having descended into the mother's womb, to become extinct, then would not name-and-form come to birth in this state of being.

'Were cognition to be extirpated from one yet young, youth or maiden, then would not name-and-form attain to growth, development, expansion.

'Wherefore, Ānanda, just that is the ground, the basis, the genesis, the cause of name-and-form, to wit, congnition.

'I have said that name-and-form is the cause of cognition. Were cognition to gain no foothold in name-and-form, then there would not, in the coming years, be manifested that concatenation of birth, old age, death and the uprising of ill.

識入胎不出者有名色不。答曰無也。若識出胎嬰孩壞敗名色得增長不。答曰無也。阿難若無識者有名色不。答曰無也。阿難我以是緣知、名色由識緣識有名色我所說者義在於此。阿難緣名色有識此爲何義、若識不住名色則識無住處若無住處寧有生老病死憂悲苦惱不。答曰無也。阿難若無名色寧有識不。答曰無也、阿難我以此緣知、識由名色緣名色有識我所說者義在於此。阿難是故名色緣識識緣名色、名色緣六入、六入緣觸、觸緣受、受緣愛、愛緣取、取緣有、有緣生、生緣老死憂悲苦惱大苦陰集。阿難齊是爲語、齊是爲應、齊是爲限、齊是爲演說、齊是爲智觀、齊是爲衆生。阿難諸比丘於此法中如實正觀無漏心解脫、阿難此比丘當名爲慧解脫如是解脫比丘如來終亦知、如來不終亦知、如來終不終亦知、如來非終非不終亦知、何以故阿難齊是爲語齊是爲應齊是爲限齊是爲演說齊是爲智觀齊是爲衆生如是盡知已無漏心解脫比丘不知不見如是知見。

阿難夫計我者齊幾名我見名色與受俱計以爲我、有人言受非我我是受、或有言受非我我非受受法是我、或有言受非我我非受受法非我但愛是我。阿難彼見我者言受是我當語彼言、如來說三受樂受苦受不苦不樂受、當有樂受時無有苦受不苦不樂受、有苦受時無有樂受不苦不樂受、有不苦不樂受時無有苦受樂受、所以然者阿難樂觸緣生樂受若樂觸滅受亦滅、阿難苦觸緣生苦受、若苦觸滅受亦滅、不苦不樂觸緣生不苦不樂受、若不苦不樂觸滅受亦滅、阿難如兩木相攢則有火出各置異處則無有火、此亦如是、因樂觸緣

'In so far only, Ananda, can one be born, or grow old, or die, or dissolve, or re-appear, in so far only is there any process of verbal expression, in so far only is there any process of explanation, in so far only is there any process of manifestation, in so far only is there any sphere of knowledge. in so far only do we go round the round of life up to our appearance amid the conditions of this world— in as far as this is, to wit, name-and-form together with cognition.'

'Now with declations concerning the soul, Ānanda, how many such declarations are there? Either the soul is declared to have form and to be minute, in the words :- "My soul has form and is minute." Or the soul is declared to have form and to be boundless :- "My soul has form and is boundless." Or the soul is declared to be formless and minute :- "My soul is formless and minute." Or the soul is declared to be formless and boundless : — "My soul is formless and boundless."

And in each case, Ānanda, he who makes the declation, makes it with regard either to the present life, or to the next life, or else his idea is : "My soul not being like that, I will refashon it into that likeness." That being so, Ānanda, we have said enough about the case of one who is given to the theories that the soul has form and is minute, ...has form and is boundless, and so on. ....

"And under how many aspects, Ānanda, is the soul regarded? The soul is regarded either as feeling, in the words :— "My soul is feeling"— or the opposite :— "Nay, my soul is not sentient"; or again : — "Nay, my soul is not feeling, nor is it non-sentient; my soul has feelings, it has the property of sentience." Under such aspects as these is the soul regarded.

'Herein, Ānanda, to him who affirms :— "My soul is feeling" — answer should thus be made :— "My friend, feeling is of three kinds. There is happy feeling, painful feeling, neutral feeling. Of these three feelings, look you, which do you consider your soul is?"

'When you feel a happy feeling, Ānanda, you do not feel a painful feeling, or a neutral feeling; you feel just a happy feeling. And when you feel a painful feeling, you do not feel a happy feeling, or a neutral feeling, but just a painful feeling. And when you feel a neutral feeling, you do not then feel a happy feeling or a painful feeling; you feel just a neutral feeling.

故生樂受、若樂觸滅受亦俱滅、因苦觸緣故生苦受、若苦觸滅、受亦俱滅、因不苦不樂觸緣生不苦不樂受、若不苦不樂觸滅受亦俱滅。

阿難此三受有爲無常、從因緣生盡法滅法、爲朽壞法、彼非我有我非彼有、當以正智如實觀之、阿難彼見我者以受爲我彼則爲非、阿難彼見我者言受非我我是受者當語彼言、如來說三受苦受樂受不苦不樂受、若樂受是我者樂受滅時則有二我、此則爲過、若苦受是我者苦受滅時則有二我、此則爲過、若不苦不樂受是我者不苦不樂受滅時則有二我、此則爲過、阿難彼見我者言、受非我我是受、彼則爲非。阿難彼計我者作是說受非我我非受受法是我、當語彼言一切無受。汝云何言有受法。汝是受法耶。對曰非是。是故阿難彼計我者言受非我我非受受法是我彼則爲非。阿難彼計我者作是言受非我我非受受法非我但愛是我者當語彼言、一切無受云何有愛汝是愛耶。對曰非也。是故阿難彼計我者言受非我我非受受法非我愛是我者彼則爲非阿難齊是爲語齊是爲應齊是爲限齊是爲演說齊是爲智觀齊是爲衆生、阿難諸比丘於此法中如實正觀於無漏心解脫、阿難此比丘當名爲慧解脫、如是解脫心比丘有我亦知無我亦知有我無我亦知非有我非無我亦知、何以故阿難齊是爲語齊是爲限齊是爲應齊是爲演說齊是爲智觀齊是爲衆生、如是盡知已無漏心解脫、比丘不知不見如是知見。佛語阿難彼計我者齊已爲定彼計我者或言少色是我、或言多色是我、或言少無色是我、或言多無色是我、阿難彼言少色是我者、定少

'Moreover, Ānanda, happy feeling is impermanent, a product, the result of a cause, liable to perish, to pass away, to become extinct, to cease. So too is painful feeling. So too is neutral feeling. If when experiencing a happy feeling one thinks:— "This is my soul,"— when that same happy feeling ceases, one will also think:— "My soul has departed." So too when the feeling is painfull, or neutral. Thus he who says:— "My soul is feeling,"— regards, as his soul, something which, in this present life, is impermanent, is blended of happiness and pain, and is liable to begin and to end.

'Wherefore, Ānanda, it follows that this aspect:— "My soul is feeling"— does not commend itself.

'Herein again, Ānanda, to him who affirms:— "Nay, my soul is not feeling, my soul is not sentient,"— answer should thus be made:— "My friend, where there is no feeling of anything, can you there say:— 'I am'?"' 'I cannot, lord.'

'Wherefore, Ānanda, it follows that this aspect:— "Nay, my soul is not feeling, my soul is not sentient,"— does not commend itself.

'Herein again, Ānanda, to him who affirms:— "Nay, my soul is not feeling, nor is it non-sentient; my soul has feeling, it has the property of sentience,"— answer should thus be made:— "My friend, were feeling of every sort or kind to cease absolutely, then there being, owing to the cessation thereof, no feeling whatever, could one then say:— 'I myself am'?" 'No, lord, one could not.'

'Wherefore, Ānanda, it follows, that this aspect:— "Nay, my soul is not feeling, nor is it non-sentient; my soul has feelings, it has the property of sentience,"— does not commend itself.

'Now when a brother, Ānanda, does not regard soul under these aspects,— then he thus refraining from such views, grasps at nothiug whatever in the world; and not grasping he trembles not; and trembling not, he by himself attains to perfect peace. And he knows that birth is at an end, that the higher life has been fulfilled, that what had to be done had been accomplished, and that after this present world there is no beyond!

'And of such a brother, Ānanda, whose heart is thus set free, if any one should say:— "His creed is that an Arahant goes on after death"— that were absurd. Or: "His creed is that an Arahant does not go on·········does, and yet does not, go on········· neither goes on nor goes not on after death"— all that were absurd. Why is that? Because, Ānanda, whatever verbal expression there is and whatever system of verbal expression, whatever explanation there may be, and whatever system of explanation, whatever communication is possible and whatever system of communication, whatever knowledge there is and whatever sphere of knowledge, whatever round of life and how far the round is traversed,— by mastery over all this that brother is set free. But to say, of a brother who has been so set free by insight:— "He knows not, he sees not"— that were absurd!'

色是、我我所見、是餘者爲非、多色是我者、定多色是我我所見、是餘者爲非、少無色是我者定少無色是我我所見是餘者爲非、多無色是我者定多無色是我我所見是餘者爲非。佛告阿難七識住二入處諸有沙門婆羅門言此處安隱爲救爲護爲舍爲燈爲明爲歸爲不虛妄爲不煩惱。

云何爲七、或有衆生若干種身若干種想、天及人、此是初識住處、諸沙門婆羅門言、此處安隱、爲救爲護爲舍爲燈爲明爲歸、爲不虛妄、爲不煩惱。阿難若比丘知初識住知集知滅知味知過知出要、如實知者、阿難彼比丘言彼非我我非彼、如實知見、或有衆生若干種身而一想、梵光音天是或有衆生一身若干種想、光音天是、或有衆生一身一想遍淨天是或有衆生住空處、或有衆生住識處、或有衆生住不用處、是爲七識住處、或有沙門婆羅門言此處安隱爲救爲護爲舍爲燈爲明爲歸、爲不虛妄爲不煩惱。阿難若比丘知七識住知集知滅知味知過知出要如實知見、彼比丘言彼非我我非彼如實知見是爲七識住。

云何二入處、無想入、非想非無想入是、爲阿難此二入處、或有沙門婆羅門言此處安隱爲救爲護爲舍爲燈爲明爲歸、爲不虛妄爲不煩惱。阿難若比丘知二入處知集知滅知味知過知出要如實知見、彼比丘言彼非我我非彼、如實知見、是爲二入。

阿難、復有八解脫、云何八、色觀色、初解脫、內色想觀外色、二解脫、淨解脫、三解脫、度色想滅有對想不念雜想住空處四解脫、度空處住識處五解脫、度識處住不用處六解脫、度不用

'There are seven resting-place for Cognition, Ānanda, and two Spheres. Which are the seven ?

(1) 'There are beings differing in body and differing in intelligence, for instance, human being and certain of the gods and some of those in purgatory. (2) 'There are being differing in body but of uniform intelligence, for instance, the gods of the Brahma-heaven who are there reborn by means of the First(Jhāna). (3) 'There are being uniform in body and differing in intelligence, for instance, the Luminous Gods. (4) There are beings uniform in body and of uniform intelligence, for instance, the All-Lustrous Gods. (5) 'There are being who, by having passed wholly beyond all consciousness of sense-reaction, by having turned the attention away from any consciousness of the manifold and become conscious only of "space as infinite," are dwellers in the realm of infinite space. (6) 'There are beings who, by having passed wholly beyond the realm of infinite space, and become conscious only of "cognition as infinite," are dwellers in the realm of infinite cognition. (7) 'There are being who, by having passed wholly beyond the realm of infinite congnition, and become conscious only that "there is nothing whatever," are dwellers in the realm of nothingness. (1) 'The Sphere of being without consciousness. (2) 'Next to that, the Sphere of beings who neither have consciousness nor yet have it not.

'Now there, Ānanda —— in that first resting- place for Cognition, of differing bodies and differing intelligence, —— to wit, human beings and certain of the gods and certain of those in purgatory —— think you that he who both knows what that state is, and how it comes to be, and how it passes away,—— knows too the pleasures of it, and the miseries of it, and the way of escape from it,—— think you that it were fitting for such an one to take delight in it ?' 'Nay, lord.'

'And in those other six resting-places for Gongnition, and in those two Spheres,—— think you that he who both knows them for what they are, how they come to be, and how they pass away, knows too the pleasures of them, and the miseries of them, and the way of escape from them, —— think you that it were fitting for such an one to take delight in them ?' 'Nay lord.'

'But, Ānanda, when once a brother has understood as they really are the coming to be and the passing away, the pleasures and the miseries of, and the way of escape from, these seven resting-places for Cognition, and these two Spheres, that brother, by being purged of grasping, becomes free. And then, Ananda, he is called Freed-by-Reason.'......

'Now these, Ananda, are the eight stages of Deliverance. Which are they ?

(1) 'Having one's self external form, one sees (these) form. This is the first stage.

(2) 'Unaware of one's own external form, one sees forms external to one's self. This is seccond stage.

(3) '"Lovely!" —— With this thought one becomes intent. This is the third stage.

處二住有想無想處一七解脫滅盡定八解脫、阿難諸比丘於二此八解脫一逆順遊行入出自在如レ
是、比丘得二俱解脫一。

* * * * * *

妻・夫を歸佛せしむ

(1)一時佛住二舍衞國祇樹給孤獨園一、時舍衞國中婆肆吒婆羅門女信二佛法僧一歸レ佛歸レ法歸二比丘僧一、於二佛法僧一已離二狐疑一、於二苦習盡道一亦離二疑惑一、見レ諦得果得二無間慧一、其夫是婆羅豆婆遮種姓婆羅門、每至二左右所爲作時一有二小得失一、卽稱二南無佛一、向二如來所住方面一、隨レ方合掌三說二是言一、南無多陀阿伽度阿羅呵三藐三佛陀身純金色圓光一尋方身圓滿、如二尼拘律樹一、善說妙法牟尼之尊仙人上首是我大師。

時夫婆羅門聞レ之、瞋恚不レ喜語二其婦一言、爲二鬼著一耶、無レ有二此義一捨二諸三明大德婆羅門一而稱二歎彼禿頭沙門一、黑闇之分世所レ不レ稱、我今當下往共二汝大師一論議足上レ知二勝如一、婦語レ夫言、不レ見下諸天魔梵沙門婆羅門諸神世人能共二世尊如來應等正覺金色之身、圓光一尋、如下尼拘律樹上圓滿之身、言說微妙仙人上首、我之大師一共論議者上、然今婆羅門且往、自可レ知レ之、時婆羅門卽往二詣佛所一、面相問訊慰勞已退坐二一面一而說レ偈言、

爲レ殺二於何等一　而得二安隱眠一　爲レ殺二於何等一　令三心得二無憂一、

瞿曇所二稱歎一、

爾時世尊知二婆羅門心之所念一而說レ偈言、

(4) ' Passing wholly beyond perception of form, all perception of sense reaction dying away, heedless of all perceptions of the manifold, conscious of space as infinite, one enters into and abides in the sphere of space regarded as infinite. This is the fouth stage.

(5) 'Passing wholly beyond the sphere of space regarded as infinite, conscious of reason as infinite, one enters into and abides in the sphere of cognition regarded as infinite. This is the fifth stage.

(6) 'Passing wholly beyond the sphere of reason regarded as infinite, conscious of there being nothing whatever, one enters into and abides in the sphere of nothingness. This is the sixth stage.

(7) 'Passing wholly beyond the sphere of nothingness, one enters into and abides in the sphere of "neither-consciousness-nor-unconsciousness. 'This is the seventh stage.

(8) 'Passing wholly beyond the sphere of "neither-ideation-nor-non-ideation." one enters into and abides in a state of suspended perception and feeling. This is the eighth stage. 'These, Ānanda, are the eight stages of Deliverance.

'Now when once a brother, Ānanda, has mastered these eight stages of Deliverance in order, and has also mastered them in reverse order, and again, in both orders consecutively, so that he is able to lose himself in, as well as to emerge from, any one of them, whenever he chooses, wherever he chooses, and for as long as he chooses— when too, by rooting out the Taints, he enters into and abides in that ēmancipation of heart, that emancipation of the intellect which he by himself, here in this present world, has come to know and realize —— then such a brother, Ānanda, is called "Free-in-both-ways." And Ānanda, any other Freedom-in-both-ways higher and loftier than this Freedom-in both-ways there is not!'

— Dialogues of the Buddha II p. p. 50 — 70.

(1) 雑阿含巻四二(辰四•44) 同本巴利雑阿含VII.1.1. (vol. I. p. 160-1)

The Exalted one was once staying near Rājagaha, in the Bamboo Grove, at the Squirrels' Feeding-ground Vihāra. Now at that time a Dhanañjāni Brahmanī, the wife of a certain brahman of the Bhāradvāja family, was a fervent believer in the Buddha, the Norm, and the Order. And she, while serving the Bhāradvāja with his dinner, came before him and gave vent to the triple inspired utterance; Glory to the Exalted One Arahant Buddha Supreme! Glory to the Norm! Glory to the Order!

And while she had so said the Bhāradvāja brahmin exclaimed: 'There now! at any and every opportunity must the wretch be speaking the praises of that shaving friar! Now, wretch, will I give that teacher of thine a peace of my mind!'

'O brahmin, I know of no one throughout the world of gods, Māras or Brahmās, recluses or brahmins, no one human or divine, who could so admonish that Exalted One, Arahant, Buddha supreme. Nevertheless, go thou, brahmin, and then thou wilt know.'

Then the Bhāradvāja, vexed and displeased, went to find the Exalted One; and com-

殺於瞋恨者、　而得安隱眠、　殺於瞋恚者、　而心得無憂、　瞋恚爲毒本、
能害甘種子、　能害於彼者、　賢聖所稱歎、　若能害彼者、　其心得無憂、

時婆羅豆婆遮婆羅門聞佛所說示敎照喜次弟說法、謂說施說戒說生天法、說欲味著爲災患煩惱、清淨出要遠離隨順福利清淨分別廣說、譬如清淨白氎易爲染色、如是婆羅豆婆遮婆羅門卽於座上、於四聖諦、得無間等、所謂苦集滅道是、婆羅門見法得法知法入法、度諸疑惑、不由他度、於正法律得無所畏、卽從座起偏露右肩合掌白佛、已度世尊已度善逝、我今歸佛歸法歸比丘僧、已盡其壽命爲優婆塞證知我、時婆羅豆婆遮婆羅門聞佛所說歡喜隨喜、作禮而去還歸自家。其婦優婆夷遙見夫來、見已白言已與如來應等正覺純金色身圓光一尋如尼拘律樹圓滿之身妙說之上仙人之首大牟尼尊爲我大師共論議耶。其夫答言、我未嘗見諸天魔梵沙門婆羅門諸神世人有能與如來應等正覺眞金色身圓光一尋如尼拘律樹圓滿之身、妙說之上、諸仙之首牟尼之尊汝之大師共論議也、汝今與我作好法衣、我持至世尊所出家學道、時婦悉以鮮潔白氎令作法衣、時婆羅門持衣往詣世尊所、稽首禮足退住一面白言、世尊我今可得於世尊法中出家學道修梵行不。佛告婆羅門、汝今可得於此法律出家學道修諸梵行。卽出家已獨靜思惟所以善男子剃除鬚髮著袈裟衣出家學道、乃至得阿羅漢心善解脫。

*　*　*　*　*　*

ing into his presence, exchanged with him greetings and compliments, friendly and courteous, and sat down at one side. So Seated, he addressed the Exalted One in a verse:—

What must we slay if we would happy live?
What must we slay if we could weep no more?
What is't above all other things, whereof
The slaughter thou approvest, Gotama?

The Exalted One:— Wrath must ye slay, if ye would happy live,
Wrath must ye slay, if ye would weep no more.
Of anger, brahmin, with its poisoned source
And fevered climax, murderourly sweet,
That is the slaughter by the Aryans praised;
That must ye slay in sooth, to weep no more.

When the Exalted One had thus spoken, the Bharadvāja brahmin said to him: 'Most excellent, lord, most excellent! Just as if a man were to set up that which had been thrown down, or were to reveal that which was hidden away, or were to point out the right road to him who had gone astray, or were to bring a lamp into the darkness so that those who had eyes should see external objects — even so, lord, has the lord Gotama shown me this doctrine in various ways, I even I, lord betake myself to the Exalted One as my refuge, to the Norm, and to the Order. I would leave the world under the Rule of Gotama; I would take orders.'

So the Bharadvāja brahmin left the world under the Exalted One, and was ordained. And not long after his ordination the venerable Bhāradvāja, remaining alone and separate, earnest, ardent and strenuous, attained ere long to that supreme goal of the higher life, for the sake of which the clansmen rightly go forth from home into the homeless; yea, that supreme goal did he by himself, even in this present life, come to understand and realize. He came to understand that rebirth was destroyed, that the holy life was lived, that his task was done, that for life as we conceive it there was no hereafter.

And that Bhāradvāja became one of the Arahants.

— The Book of the Kindred Sayings I. p.p. 199-201.

巴利雜阿含 I. 1. 5 (Vol. I. p. 3) 雜阿含卷三六(辰四•4)

How many should he cut? How many leave?
How many should he further cultivate ?
How many ties transcending can he win
The name of Brother 'Who-has-crossed-the Flood'?
'Tis Five that he should cut, Five should he leave,
And Five that he should further cultivate.
Five ties transcending, his it is to win
The name of Brother 'Who-has-crossed-the Flood'.

— The Book of Kindred Sayings I, p. 5.

十上經一法の部

[1]一時佛、遊鴦伽國、與大比丘衆千二百五十人俱、詣瞻婆城止宿伽々池側、以十五日月滿時、世尊在露地坐、大衆圍繞竟夜說法、告舍利弗、今者四方諸比丘集皆各精勤捐除眠睡欲聞說法、吾患背痛欲少止息、卿今可爲諸比丘說法。時舍利弗受佛敎已、爾時世尊卽四牒僧伽梨、偃右脅臥、如師子累足而臥、爾時耆年舍利弗告諸比丘今我說法上中下言皆悉眞正義味具足梵行淸淨、汝等諦聽善思念之、當爲汝說、時諸比丘受敎而聽、舍利弗告諸比丘有十上法除衆結縛得至泥洹盡於苦際又能具足五百五十法今當分別汝等善聽諸比丘有一成法一修法一覺法一滅法一退法一增法一難解法一生法一知法一證法。云何一成法、謂於諸善法能不放逸。云何一修法謂常自念身。云何一覺法謂有漏觸。云何一滅法謂是我慢。云何一退法謂不惡露觀。云何一增法謂惡露觀。云何一難解法謂無間定。云何一生法謂有漏解脫。云何一知法謂諸衆生皆仰食存。云何一證法謂無礙心解脫。

二法の部

有二成法二修法二覺法二滅法二退法二增法二難解法二生法二知法二證法。云何二成法謂知慚知愧。云何二修法謂止與觀。云何二覺法謂名與色。云何二滅法謂無明愛。云何二退法謂毀戒破見。云何二增法戒具見具。云何二難解法有因有緣衆生生垢有因有緣衆生得淨。云何二生法盡智無生智。云何二知法謂是處非處。云何二證法謂明與解脫。又有三成法三修法三覺法三滅法三退法三增法三難解法三生法三知法三證法。云何

(1) 以下360頁まで、長阿含第八(昃九・44–47)

以下361頁まで、巴利長阿含三十四經、Dasuttara Sutta (vol. III. p. p. 272–292)。

或時世尊は瞻波の伽々羅池畔に、約五百の比丘衆と共に滯在してゐ給ふた。其時長老舍利弗は、「友よ、比丘等よ」と呼びかけて、次の様に語り出した。

私は涅槃に導き苦惱の終をなし、總ての繫縛を解かしむる十上法を說くであらう。

友よ茲に、多くの助になる一法、修めればならぬ一法、分別して知られればならぬ一法、捨てればならぬ一法、退墮分の一法、增上分の一法、難解の一法、生ぜればならぬ一法、知られればならぬ一法、實現せればならぬ一法がある。多くの助けになる一法とは何であるか。善法に於て放逸たらざることである。修めればならぬ一法とは何であるか。正しく身を觀ずることである。分別して知られればならぬ一法とは何であるか。有漏有取著の觸である。捨てればならぬ一法とは何であるか。我慢である。退墮分の一法とは何であるか。正しからざる思惟である。增上分の一法とは何であるか。正しき思惟である。難解の一法とは何であるか。無間斷の心の定である。生ぜしめればならぬ一法とは何であるか。不動の智である。知られればならぬ一法とは何であるか。總ての衆生は食に依つて住することである。實現せればならぬ一法とは何であるか。不動の心解脫である。以上の十法、實にして眞、如にして不虛不妄の十法は正しく如來に依つて證られたのである。

茲に又多くの助けになる二法、修めればならぬ二法、分別して知られればならぬ二法、捨てればならぬ二法、退墮分の二法、增上分の二法、難解の二法、生ぜしめればならぬ二法、知られればならぬ二法、實現せればならぬ二法がある。多くの助けになる二法とは正念と正心である。修めればならぬ二法とは止と觀である。分別して知られればならぬ二法とは名と色である。捨てればならぬ二法とは無明と有愛である。退墮分の二法とは罵詈と惡友である。增上分の二法とは溫言と善友である。難解の二法とは何であるか。衆生を汚し又は淨むる因と緣である。生ぜしめればならぬ二法とは滅智と不生智である。知られればならぬ二法とは有爲界と無爲界である。實現せればならぬ二法とは明と解脫である。……………

茲に又多くの助けになる三法、修めればならぬ三法、分別して知られればならぬ三法、捨てればならぬ三法、退墮分の三法、增上分の三法、難解の三法、生ぜしめればならぬ三法、知られればならぬ三法、實現せればならぬ三法がある。多くの助けになる三法とは善人と交はる事、正法の聽聞、法に契ふ行跡である。修めればならぬ三法とは三三昧、即ち有覺有觀の三昧、無覺唯觀の三昧、無覺無觀の三昧である。分別して知られればならぬ三法とは三受即ち樂受、苦受、不苦不樂受である。捨てればならぬ三法とは三愛、即ち欲愛、有愛、殊勝有愛である。退墮分の三法とは三不善根、即ち貪、瞋、痴である。增上分の三法とは三善根、即ち不貪、不瞋、不痴である。難解の三法とは三出離界、即ち愛欲の出離たる遠離、色の出離たる無色界に昇ること、總ての存在有爲緣起の滅たる出離である。生ぜしめればならぬ三法とは三智即ち過去に對する智、未來に對する智、現在に對する智である。知られればならぬ三法とは三界即ち欲界、色界、無色界である。實現せればならぬ三法とは三明即ち宿命智明、衆生死生智明、漏盡智明である。……………

三成法一者親近善友二者耳聞法音三者法法成就云何三修法謂三三昧空三昧無相三昧無作三昧。云何三覺法謂三受苦受樂受不苦不樂受。云何三滅法謂三愛欲愛有愛無有愛。云何三退法謂三不善根貪不善根恚不善根癡不善根。云何三增法謂三善根無貪善根無恚善根無癡善根。云何三難解法謂三難解賢聖難解聞法難解如來難解。云何三生法謂三相息止相精進相捨離相。云何三知法謂三出要界欲出要至色界色界出要至無色界捨離一切諸有爲法彼名爲盡。云何三證法謂三明宿命智天眼智漏盡智。諸比丘是爲三十法如實無虛如來知已平等説法。

四法の部

復有四成法四修法四覺法四滅法四退法四增法四難解法四生法四知法四證法。云何四成法謂四輪法一者住中國二者近善友三者自謹愼四者宿植善本。云何四修法謂四念處比丘內身身觀精勤不懈憶念不忘捨世貪憂外身身觀精勤不懈憶念不忘捨世貪憂內外身身觀精勤不懈憶念不忘捨世貪憂受意法觀亦復如是。云何四覺法謂四食摶食觸食念食識食。云何四滅法謂四受欲受我受戒受見受。云何四退法謂四扼欲扼有扼見扼無明扼。云何四增法謂四無扼無欲扼無有扼無見扼無無明扼。云何四難解法謂有四聖諦苦集盡道諦。云何四生法謂四智法智未知智等智知他心智。云何四知法謂四辨才法辯義辯辭辯應辯。云何四證法謂四沙門果須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果。

復有五成法五修法五覺法五滅法五退法五增法五難解法五生法五知法五證法。云何

茲に又多くの助けになる四法、修めればならぬ四法、分別して知られればならぬ四法、捨てればならぬ四法、退墮分の四法、增上分の四法、難解の四法、生ぜしめればならぬ四法、知られればならぬ四法、實現せればならぬ四法がある。多くの助けになる四法とは四輪卽ち適當な土地に住すること、善人に親近すること、自己の正しき願、前生の善根である。修めればならぬ四法とは四念處卽ち、比丘が熱心に正心正念に身を觀し、受を觀じ、心を觀じ、法を觀ずることである。分別して知られればならぬ四法とは、四食卽ち麤細の團食、第二が觸食、第三が思食、第四が識食である。捨てればならぬ四法とは四暴流卽ち欲暴流、有暴流、見暴流、無明暴流である。退墮分の四法とは四結卽ち欲結、有結、見結、無明結である。增上分の四法とは四離縛卽ち欲結の縛を離れ、有結の縛を離れ、見結の縛を離れ、無明結の縛を離れることである。難解の四法とは四三昧卽ち退下分の三昧、住分の三昧、增上分の三昧、厭離分の三昧である。生ぜしめればならぬ四法とは四智卽ち法智、類智、他心智、世俗智である。知られればならぬ四法とは四聖諦卽ち苦聖諦、苦集聖諦、苦滅聖諦、苦滅道聖諦である。實現せればならぬ四法とは四沙門果卽ち豫流果、一來果、不還果、阿羅漢果である。……………

茲に又、多くの助けになる五法、修めればならぬ五法、分別して知られればならぬ五法、捨てればならぬ五法、退墮分の五法、增上分の五法、難解の正法、生ぜしめればならぬ五法、知られればならぬ五法、實現せればならぬ五法がある。

多くの助けになる五法とは五勤支卽ち(一)比丘茲に「かの世尊は應供正等覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊に在ます」と如來の菩提を信ずる。(二)比丘無病にして體苦なく冷に過ぎず熱に過ぎず、消化に具合よき體熱を有し精勤に堪へること。(三)諂ならず誑ならず、師又は知識の同梵行者の前に如實に自己を告白すること。(四)惡法を捨て善法を發得するために精進し、堅固に刻苦し善法に對する責任を固持すること。(五)諸行の生滅に關し智慧と淨き厭離を具へて、正しく苦惱の滅盡に達することに關し智慧を有すること。修めればならぬ五法とは五支具足の正三昧卽ち喜が遍滿し、樂か遍滿し、他心智が遍滿し、(智)光が遍滿し、觀察の相ある三昧である。分別して知られればならぬ五法とは五取蘊卽ち色取蘊、受取蘊、想取蘊、行取蘊、識取蘊である。捨てればならぬ五法とは五蓋卽ち貪欲蓋、瞋恚蓋、疎懶睡眠蓋、掉擧惡作蓋、疑蓋である。退墮分の五法とは五心固陋卽ち、比丘が師に疑惑を抱き傾注せず信樂せず、從つて熱心と專心と堅忍と精勤にならない。これが第一の心固陋である。又比丘が法に疑惑を抱き傾注せず信樂せず。從つて熱心と專心と堅忍と精勤にならない。これが第二の心固陋である。又比丘が僧伽に疑惑を抱き傾注せず信樂せず、從つて熱心と專心と堅忍と精勤にならない。これが第三の心固陋である。又比丘が學則に疑惑し傾注せず信樂せず、從つて熱心と專心と堅忍と精勤にならない。これが第四の心固陋である。又比丘が同學の梵行者に對して怒り腹立ちいら々々して剛情になれば從つて熱心と專心と堅忍と精勤にならない。これが第五の心固陋である。

五法の部

五成法謂五滅盡枝、一者信佛如來至眞十號具足、二者無病身常安隱、三者質直無有諛諂直趣如來涅槃徑路、四者專心不亂諷誦不忘、五者善於觀察法之起滅以賢聖行盡於苦本。云何五修法謂五根信根精進根念根定根慧根。云何五覺法謂五受陰色受陰受想行識受陰。云何五滅法謂五蓋貪欲蓋瞋恚蓋睡眠蓋掉戲蓋疑蓋。云何五退法謂五心礙結、一者比丘疑佛疑佛已則不親近已則不敬恭是爲初心礙結、又比丘於法於衆於戒有穿漏行不眞正行爲汙染行不親近戒亦不恭敬是爲四心礙結、又復比丘於梵行人生惡害心心不喜樂以麤惡言而毀罵之是爲五心礙結。云何五增法謂五喜本一悅二念三猗四樂五定。云何五難解法謂五解脫入、若比丘精勤不懈樂閑靜處專念一心未解得解未盡得盡未安得安何謂五若比丘聞佛說法或聞梵行者說或聞師長說思惟觀察分別法義心得歡喜得歡喜已便得法愛、得法愛已身心安隱、身心安隱已則得禪定、得禪定已得如實智是爲初解脫入、於是比丘聞法歡喜受持諷誦亦復歡喜、爲他人說亦復歡喜、思惟分別亦復歡喜於法得定亦復如是。云何五生法謂賢聖五智定、一者修三昧現樂後樂生內外智、二者賢聖無愛生內外智、三者諸佛賢聖之所修行生內外智、四者猗寂滅相獨而無侶而生內外智、五者於三昧一心入一心起生內外智。云何五知法謂五出要界、一者於欲不樂不念亦不親近但念出要樂於遠離親近不怠、其心調柔出要離欲因欲起漏亦盡捨滅而得解脫是爲欲出要、瞋恚出要、嫉妒出要、色出要、身見出要亦復如是。云何五證法

增上分の五法とは五根卽ち信根、勤根、念根、定根、慧根である。難解の五法とは五出離界卽ち茲に比丘あつて、樂欲と瞋恚と困惱と色と己身とを思惟して、心を入れず喜ばず滿足せず傾注せず、反對に離欲と不瞋と不困惱と無色と己身の滅を思惟して、心を入れ喜び滿足し傾注すれば、彼の心は幸なるもの善く修習(おさ)められたるもの苦惱より善く脫れたるもの、よく解脫したるものにて、その樂欲と瞋恚と困惱と色と己身との緣より生ずる諸漏、障礙、不幸より脫し、その受を受けない。これが樂欲と瞋恚と困惱と色と己身との五出離と曰はれる。次に生ぜしめればならぬ五法は五智具足の正定である、五智とは、この定は現在未來共に安樂の果を生ずといふ智、聖なる離欲であるといふ智、惡人の行ふものでないといふ智、寂定微妙にして欲情を漸次に滅しうる安靜の狀態にて、一心の集中に達し、非難せられ差し止めらるべき有爲の行業でないといふ智、私はこの定に正念に出入するといふ智、この五心が內心に生ずることである。次に知られねばならぬ五法とは、五解脫所卽ち(一)比丘が師又は師に等しき同學者の法を說くを聞き、その義と法を了解し悅を生じ喜を生じ身の輕快を覺い樂受を受け心を一點に集中する。(二)其の法を他に廣說し、その義と法を了解し………心が一點に集中する。(三)其の法を合誦し、(四)其の法を尋伺し屢々考察し、(五)或る禪定の相をよく摑まへ思念し考察し智慧に依つて獲得し………心を一點に集中する。これが五解脫所である。實現せねばならぬ五法とは五法蘊卽ち戒蘊、定蘊、慧蘊、解脫蘊、解脫智見蘊である。

六法に就いても前同樣である。

多くの助けになる六法とは六憶念法、卽ち比丘が同門者に對し慈身業を表裏なく行ふ、慈意業を表裏なく行ふ、慈口業を表裏なく行ふ。又如實に食を得、其得た食を鉢に殘つてゐる分までも、公平に持戒の同學者と分けて共に食する。又壞れず破れず變せず汚れず、識者に喜ばれ欲情に着せず禪定に導く戒を同學者と共に表裏なく守つて住する。又神聖にして涅槃に導く力あり、人をして正しく苦惱の終邊に至らしむる(正)見を同學者と共に抱いて住する。これが愛すべく重んずべく和合無諍論協同一致に致らしむる憶念すべき六法である。修めればならぬ六法とは、六念所卽ち念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天である。分別して知られねばならぬ六法とは六內處卽ち眼處、耳處、鼻處、舌處、身處、意處である。捨てればならぬ六法とは六愛身卽ち色愛、聲愛、香愛、味愛、觸愛、法愛である。

謂五無學聚無學戒聚定聚慧聚解脫聚解脫知見聚。

復有六成法六修法六覺法六滅法六退法六增法六難解法六生法六知法六證法。云何六成法謂六重法若有比丘修六重法可敬可重和合於衆無有諍訟獨行無雜、云何六於是比丘身常行慈敬梵行者仁愛心名曰重法可敬可重和合於衆無有諍訟獨行無雜復次比丘口慈意慈以法得養及鉢中餘與人共之不懷彼此復次比丘聖所行戒不犯不毀無有染汚智者所稱善具足持成就定意、復次比丘成就賢聖出要平等盡苦正見及諸梵行是名重法可敬可重和合於衆無有諍訟獨行不雜。云何六修法謂六念、念佛念法念僧念戒念施念天。云何六覺法謂六內入、眼入耳入鼻入舌入身入意入。云何六滅法謂六愛、愛色愛聲愛香愛味愛觸愛法。云何六退法謂六不敬法、不敬佛不敬法不敬僧不敬戒不敬定不敬父母。云何六增法謂六敬法、敬佛敬法敬僧敬戒敬定敬父母。云何六難解法謂六無上見無上聞無上利養無上戒無上恭敬無上念無上。云何六生法謂六等法於是比丘眼見色無憂無喜住捨專念耳聲鼻香舌味身觸意法不喜不憂住捨專念。云何六知法謂六出要界、若比丘作是語我修慈心更生瞋恚餘比丘言汝勿作此言勿謗如來如來不作是說欲使修慈解脫更生瞋恚者無有是處、佛言除瞋恚已然後得慈、若比丘言我行悲解脫生憎嫉心行喜解脫生憂惱心行捨解脫生憎愛心行無我行生狐疑心行無想行生衆亂想、亦復如是。云何六證法謂六神通一者神足通證二者天耳通證三者知他心通

退墮分の六法とは六不敬即ち玆に比丘が師を敬重せず、從順ならず、法を敬重せず、從順ならず、僧伽を敬重せず從順ならず、學則を敬重せず從順ならず、不放逸を敬重せず從順ならず、友情を敬重せず從順ならず。この六法である。增上分の六法とは六敬法即ち師を敬重して從順、法を敬重して從順、僧伽を敬重して從順、學則を敬重して從順、不放逸を敬重して從順、友情を敬重して從順なることである。難解の六法とは六出離界である。それは比丘がこう云ふかも知れぬ。「私は慈心解脫を修め屢々行ひ、用ひそれに依つて身を修め住し積み重ねよく企てたが、猶瞋恚が私の心を捕へて居る」と。この比丘はこの場合こう敎へられねばならぬ。「それはさうではない。長老よ、さう云つてはならぬ。世尊を非難してはならぬ。世尊を非難するは善くないことである。世尊はその樣に仰せられぬ」と。

此は非理である。有り得ざることである。慈心解脫を修め屢々行なひ用ひそれに依つて身を修め住し積み重ねよく企てゝ然も瞋恚が彼の心を捕へてゐるといふはあり得ざることである。此の慈心解脫といふは瞋恚からの離脫である。同樣に悲心解脫は害心からの離脫である。又喜心解脫は不滿からの離脫である。捨心解脫は貪欲からの解脫である。無相解脫は有相の離脫である。我慢を去るは疑惑の槍からの離脫である。

生ぜしめねばならぬ六法とは六常住處即ち(一)眼を以て色を見、(二)耳にて聲を聞き、(三)鼻にて香を嗅ぎ、(四)舌にて味を味はひ、(五)身にて觸に觸れ、(六)意にて法を知り、喜ばず悲しまず捨心正心正念に住することである。知らねばならぬ六法とは六無上即ち見無上、聞無上、得無上、學則無上、侍無上、念無上である。

實現せねばならぬ六法とは六通である。(一)比丘玆に種々の神變を現じ、一にして多となり、多にして一となり、或は現はれ或は隱れ牆壁山を超ゆ障礙なく行くこと空の如く、大地を出沒すること水中の如く、水上を踏んで行くこと大地の如く、空中に趺座して住すること翼ある鳥の如く、彼の大威德あり大勢力ある日月をも手を以て捫摸し、梵界へすら肉身を以て至り住する。(二)清淨にして人耳に勝れた天耳を以て天音並に人音遠近共に聞く。(三)他衆生の心を心を以て知り、有貪の心離貪の心、有瞋の心離瞋の心、有痴の心離痴の心、散亂の心無散亂の心、大心小心、有上心無上心、寂靜心無寂靜心、解脫心無解脫心をそれぞれに知る。(四)數多き前生の事を知り、一生二生五生十生五十生百生千生百千生、數多の成劫壞劫成壞劫に於て、其の處々に於ての名、氏、種姓、職業、經驗せる苦樂、壽量死所、次の世の生所等總て細かい處まで一緒に想ひ起す。(五)清淨にして人眼に超越したる天眼を以て衆生の死生勝劣美醜幸不幸各々その業に從つて展轉するを見る。「あの衆生達は身口意の三惡行を具へ聖者を誹謗し邪見を抱き邪見の業に耽り身體解けて死後苦所惡趣無樂所地獄に生れるであらう。又この衆生達は身口意の三善行を具へ聖者を誹謗せず正見を抱き、正見の業に從ひ身體解けて死後善趣天界に生れる」と。(六)諸漏盡きて無漏となり、心解脫慧解脫を現法に於て自ら知り實現し證入して住することである。

七法の部

證四者四者宿命通證五者天眼通證六者漏盡通證。

復有七成法七修法七覺法七滅法七退法七增法七難解法七生法七知法七證法。云何七成法謂七財信財戒財慚財愧財聞財施財慧財爲七財。云何七修法謂七覺意於是比丘修念覺意依無欲依寂滅依遠離修法修精進修喜修猗修定修捨依無欲依寂滅依遠離。云何七覺法謂七識住處若有衆生若干種身若干種想天及人是是初識住、復有衆生若干種身而一想者梵光音天最初生時是是二識住、復有衆生、一身若干種想光音天是是三識住、復有衆生一身一想徧淨天是是四識住、或有衆生空處住是五識住、或識處住是六識住、或不用處住是七識住。云何七滅法謂七使法欲愛使有愛使見使慢使瞋恚使無明使疑使。云何七退法謂七非法謂比丘無信無慚無愧少聞懈墮多忘無智。云何七增法謂七正法於是比丘有信有慚有愧多聞不懈墮强記有智。云何七難解法謂七正善法於是比丘好義好法好知時好知足好自攝好衆集好分別人。云何七生法謂七想不淨想食不淨想一切世間不可樂想死想無常想無常苦想苦無我想。云何七知法謂七勤勤於戒行勤滅貪欲勤破邪見勤於多聞勤於精進勤於正念勤於禪定。云何七證法謂七漏盡力於是漏盡比丘於一切諸苦集滅味過出要如實知見觀欲如火坑亦如刀劍知欲見欲不貪於欲心不住欲、漏盡比丘逆順觀察如實覺知如實見已世間貪嫉惡不善法不漏不起修四念處多修多行五根五力七覺意賢聖八道多修多行。

七法に就いても前同樣である。

多くの助けになる七法とは七財即ち信財、戒財、慚財、愧財、聞財、捨財、慧財である。修めねばならぬ七法とは七覺支即ち念覺支、擇法覺支、勤覺支、喜覺支、除覺支、定覺支、捨覺支である。分別して知らねばならぬ七法とは七識住である。(一)身も異なり、想も異なる衆生がある。即ち人間と一部の天(六欲天)と及び一部の四惡趣の衆生である。これが第一識住。(二)身は異にして想は一なる衆生がある。即ち梵天界に初めて生れた衆生である。これが第二識住。(三)身は同一にして想の異なる衆生がある。即ち光音天の衆生である。これが第三識住である。(四)身も想も同一な衆生がある。即ち徧淨天の衆生である。これが第四識住である。(五)總ての色想を超越し、有對の想を離れ異想を思念せず、空は無邊なりと知つて空無邊處に住する衆生がある。これが第五識住である。(六)空無邊處を超越し『識は無邊なり』と知つて識無邊處に住する衆生がある。これが第七識住である。

捨てねばならぬ七法とは七隨眠法即ち欲貪隨眠、瞋礙隨眠、見隨眠、疑隨眠、慢隨眠、有貪隨眠、無明隨眠である。退墮分の七法とは七不正法即ち不信、無慚、無愧、小聞、懈惰、妄念、無智である。增上分の七法とは七正法即ち信、慚、愧、多聞、精進、正念、有智である。難解の七法とは七善人法即ち、法を知り、義を知り、自己を知り、食の量を知り、時を知り、會衆を知り、人を知ることである。生ぜしめねばならぬ七法とは七想即ち無常想、無我想、不淨想、禍想、棄想、離欲情想、滅想である。知らねばならぬ七法とは、比丘が學則の受持に熱心にして未來もその受持を離すまいと期し、法の觀察を得るに熱心にして未來もその觀察を失はぬと期し、惡欲の征服に熱心にして未來もその征服を止めぬと期し、靜思惟に熱心にして未來もその靜思惟を離れぬと期し、精進を得るに熱心にして未來もその精進を得ることを止めまいと期し、正念深慮に熱心にして未來もその正念深慮を離れぬと期し、入見道に熱心にして未來も入見道を離れまいと期することである。實現せねばならぬ七法とは七滅漏力である。即ち(一)漏盡の比丘が、「諸行は無常なり」と正慧に依つて如實に見れば、それはその滅漏の比丘の力となり、この力に依つてその比丘は「我が漏は滅せり」と諸漏の滅盡を他に知らしむるに至る。(二)又「欲欲は炭火の草を燒く喩の如し」と正慧に依つて如實に見れば、それはその滅漏の比丘の力となり、この力に依つてその比丘は「我が漏は滅盡せり」と知らしむる。(三)又その比丘の心が遠離に傾き遠離に向ひ遠離に止まり遠離に住し離欲を樂しみ、總ての諸漏より起る諸法を滅する狀態にあれば、これはその滅漏の比丘の力となり、その比丘はこの力に依つて「我が漏は滅せり」と知らしむるに至る。(四)又その比丘が四念住をよく修習すれば、これはその滅漏の比丘の力となり、その比丘はこの力に依つて「我が漏は滅せり」と知らしむるに至る。(五)又その比丘が五(無漏)根をよく修習すれば、これはその滅漏の比丘の力となり、その比丘はこの力に依つて「我が漏は滅せり」と知らしむるに至る。(六)又その比丘が七覺支を修すれば、これはその滅漏の比丘の力となりて、その比丘はこの力に依つて「我が漏は滅せり」と知らしむるに至る。(七)又その比丘が八正道を修すれば、これはその滅漏の比丘の力となりてその比丘はこの力に依つて「我が漏は滅せり」と知らしむるに至る。

八法の部

復有八成法八修法八覺法八滅法八退法八增法八難解法八生法八知法八證法。云何八成法謂八因緣不得梵行而得智得梵行已智增多云何爲八於是比丘依世尊住或依師長或依智慧梵行者住、生慚愧心有愛有敬、是謂初因緣未得梵行而得智得梵行已智增多復次依世尊住隨時請問此法云何義何所趣、時諸尊長卽爲開演甚深義理是爲第二因緣、既聞法已身心樂靜是爲三因緣、既樂靜已不爲遮道無益雜論、彼到衆中或自說法或請他說猶復不捨賢聖默然是爲四因緣多聞廣博守持不忘諸法深奧上中下善義味諦誠梵行具足聞已入心見不流動是爲五因緣、修習精勤滅惡增善勉力堪任不捨斯法是爲六因緣、有以智慧知起滅法賢聖所趣能盡苦際是爲七因緣、觀五受陰生相滅相此色色集色滅此受想行識識集識滅是爲八因緣、未得梵行而有智、得梵行已智增多。云何八修法謂賢聖八道正見正志正語正業正命正方便正念正定云何八覺法謂世八法利衰毀譽稱譏苦樂。云何八滅法謂八邪、邪見邪思邪語邪業邪命邪方便邪念邪定。云何八退法謂八懈怠法、何謂八懈怠比丘乞食不得食便作是念我於今日下村乞食不得身體疲極不能堪任坐禪經行今宜臥息懈怠比丘卽便臥息不肯精勤未得欲得未獲欲獲未證欲證是爲初懈怠、懈怠比丘得食既足、復作是念我朝入村乞食得食過足身體沈重不能堪任坐禪經行今宜寢息、懈怠比丘卽便寢息不能精進未得欲得未獲欲獲未證欲證、懈怠比丘設少執事便作是念、我今日執事身體疲極不能堪任坐禪經行今宜寢息、懈

八法に就いても前同樣である。

多くの助けになる八法とは、茲に初梵行者をして未だ得ざる智慧を得せしめ、得て益々增上發展圓滿ならしむる八因緣がある。それは(一)師又は師に等しき同門者に近づいて住し、烈しき慚愧を感じ愛と敬とを具してゐる。(二)師又は師に等しき同門者に近いて住し、烈しき慚愧を感じ愛と敬とを具へ時々赴いて「尊者これはどういふ意味でありますか、どういふ義でありますか」と問ひ尋ねる。其時その長老は、顯はれざるを顯はし明かならざるを明にし種々の疑惑を解いて與れる。(三)法を聞いて心身二つ乍ら暢かになる。(四)戒を持ち、波羅提木叉に照して身を制御し善行を具足し、小罪にも恐れを見學則を受持して練學する。(五)多聞にして聞いて受持し(心に)積み重ね、初中後共に美しく文義共に備はる法と圓滿圓淨の梵行とを宣傳するを屢々聞き口に反復し心に受持し屢々思念し智見に依つて了解する。(六)惡法を離れ善法を發得する爲に精進し堅忍に努力し不撓不屈である。(七)正念を有し最上の記憶辨別を具足し、長い以前の言語行爲を記憶し想記する。(八)五蘊の生滅を觀じ、此は色、色の生、色の滅、此は受想行識、受想行識の生、受想行識の滅と觀じて住する。これが初梵行者をして未だ得ざる智慧を得せしめ、得たる智慧を益々增上發展圓滿ならしむる八因緣である。修めねばならぬ八法とは八正道支卽ち正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。分別して知らねばならぬ八法とは八世法卽ち利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂である。捨てねばならぬ八法とは八邪卽ち邪見、邪思、邪語、邪業、邪命、邪精進、邪念、邪定である。

怠比丘卽便寢息、懈怠比丘設欲執事便作是念、明當執事必有疲極今者不得坐禪經行
當豫臥息、懈怠比丘卽便臥息、懈怠比丘設少行來便作是念我朝行來身體疲極不能堪
任坐禪經行我今宜當臥息懈怠比丘卽便臥息、懈怠比丘設欲少行便作是念、我明當行
必有疲極今者不得坐禪經行當豫寢息懈怠比丘卽尋寢息不能精進未得欲得未獲欲
獲未證欲證是爲六懈怠、比丘設過小患便作是念、我得重病困篤羸瘦不能堪任坐禪經
行當須寢息、懈怠比丘卽尋寢息不能精勤未得欲得未獲欲獲未證欲證、懈怠比丘、所患
已差復作是念我病差未久身體羸瘦不能堪任坐禪經行宜自寢息、懈怠比丘卽尋寢息
不能精勤未得欲得未獲欲獲未證欲證。云何八增法謂八不怠云何八、精進比丘入村乞
食不得食還卽作是念、我身體輕便少於睡眠宜可精進坐禪經行未得者得未獲者獲未
證者證、於是比丘卽便精進、是爲初精進比丘、乞食得足便作是念我今入村乞食飽滿氣
力充足宜勤精進坐禪經行未得者得未獲者獲未證者證、於是比丘卽尋精進精進比丘
設有執事便作是念、我向執事廢我行道今宜精進坐禪經行未得者得未獲者獲未證者
證、於是比丘卽尋精進、精進比丘設欲執事便作是念、明當執事廢我行道今宜精進坐禪
經行未得者得未獲者獲未證者證、於是比丘卽便精進、精進比丘設有行來便爲是念、我
朝行來廢我行道今宜精進坐禪經行未得者得未獲者獲未證者證、於是比丘卽便精進、
精進比丘設欲行來便作是念、我明當行廢我行道今宜精進坐禪經行未得者得未獲者

退墮分の八法とは八疎懶因卽ち(一)爲さればならぬことがあるに拘らず、「仕事があるが、すれば疲れる、横にならう」と横臥する。(二)仕事をし終つて、「仕事をした爲、疲れた、横にならう」と横臥する。(三)旅行せればならぬに拘らず、「旅行すれば疲れるから横にならう」と横臥する。(四)旅行をして來て、「旅行した爲に疲れた横にならう」と横臥する。(五)村又は町へ乞行に出掛け疎食なり甘食なり充分に得ないで、「乞行に行つたが、思ふ丈け得られないで仕事が出來ない程に疲れた、横にならう」と横臥する.(六)乞行に出掛けて疎食なり甘食なり充分に得たとき「乞行で餘り澤山食物を得て食べて煮たての豆の樣に身體が重くなつた、横にならう」と横臥する。(七)輕い病氣になつて、「病氣だから横になるべき時だ、横にならう」と横臥する。(八)病氣が癒つて間のない時、「病氣は癒つたがまだ間もないので仕事が出來ない程に無力である。横にならう」と横臥する。これが未た得ざるを得、達せざるを達し實現せざるを實現する爲の努力を缺く八疎懶因である。增上分の八法とは八精進因卽ち(一)比丘が爲さればならぬ仕事に對してこの樣に思ふ。「茲に私のせればはらぬ仕事があるが、それをしてゐては佛陀の教を思惟することが容易でない。私は得ざるを得、達せざるを達し、實現せざるを實現する爲に努力しやう」と。(二)仕事をなし終つてこの樣に思ふ。「私は仕事をしてゐて佛陀の教を思惟することが出來なんだ。私は得ざるを得………實現せざるを實現する爲に努力せればならぬ」と。(三)旅行せればならぬ時にこの樣に思ふ。「旅行をせればならぬが、旅行をしてゐて佛陀の教を思惟する事は容易ではない。それ故に私は未だ實現せざるものを實現する爲に努力をしやう」と。(四)旅行し終つてこの樣に思ふ。「私は旅行をして來たがその爲に佛陀の教を思惟することが出來なんだ。私は得ざるを得………實現せざるを實現する爲に努力せればならぬ」と。(五)乞行に出て粗食又は甘食を思ふ樣に得られなんだ時この樣に思ふ。「乞行をしたが食物を思ふ丈け得られなかつた爲、私の身體は輕快である。私は未だ得られざるを得………實現せられざるを實現する爲に努力しやう」と。(六)乞行に出て欲する丈けの食物を得た時にこの樣に思ふ。「私は乞行に依つて欲する丈けの食物を得、身體は事に堪ゆうる樣に力が具つた、私は未だ得ざるものを得………實現せざるものを實現しやう」と。(七)輕い病氣に掛つた時この樣に思ふ。「私の病氣は今輕いが重くなるかも知れぬ。今の内に私は未だ得ざるものを得、………實現せざるものを實現しやう」と。(八)病氣が癒つて間のない時にこの樣に思ふ。「私の病氣は癒つて間がないが、又起るかも知れぬ。今の中に私は得ざるものを得………實現せざるものを實現しやう」と。此が未だ得ざるを得、達せざるを達し實現せざるを實現する八精進因である。

獲未證者證、於是比丘卽便精進、精進比丘設遇患時便作是念我得重病或能命終今宜精進未得者得未獲者獲未證者證於是比丘卽便精進、精進比丘患得小差復爲是念我病初差或更增動廢我行道今宜精進坐禪經行未得者得未獲者獲未證者證、於是比丘卽便精進坐禪經行是爲八。云何八難解法謂八不閑妨修梵行云何八、如來至眞出現於世說微妙法寂滅無爲向菩提道有人生地獄中是爲不閑處不得修梵行、如來至眞出現於世說微妙法寂滅無爲向菩提道而有衆生在畜生中餓鬼中長壽天中邊地無識無佛法處是爲不閑處不得修梵行、如來至眞等正覺出現於世說微妙法寂滅無爲向菩提道或有衆生生於中國而有邪見懷顚倒心惡行成就必入地獄是爲不閑處不得修梵行、如來至眞等正覺出現於世說微妙法寂滅無爲向菩提道、或有衆生生於中國聾盲瘖瘂不得聞法修行梵行是爲不閑、如來至眞等正覺不出世間無有能說微妙法寂滅無爲向菩提道而有衆生生於中國諸根具足堪受聖敎而不値佛不得修行梵行是爲八不閑。云何八生法謂八大人覺道當少欲多欲非道、道當知足無厭非道、道當閑靜樂衆非道、道當自守戲笑非道、道當精進懈怠非道、道當專念多忘非道、道當定意亂意非道、道當智慧愚癡非道。　何八知法謂八除入、內有色想觀外色少若好若醜常觀常念是爲初除入、內有色想觀外色無量若好若醜常觀常念是爲第二除入、內無色想外觀色少若好若醜常觀常念是爲三除入、內無色想外觀色無量若好若醜常觀常念是爲四除入、內無色想外觀

難解の八法とは梵行を行するに適せざる八處卽ち(一)茲に世尊應供正等覺者が出世し給ひ、寂靜に導き涅槃に導き正覺に至らしめる法が善逝に開示せられたとして、地獄に墮し、(二)畜生に生れ、(三)餓鬼に生れ、(四)長壽天に生れ、(五)野蠻無智にして比丘比丘尼優婆塞優婆夷の到る事なき邊國に生れ、(六)假令中國に生れても、「布施の要もない、供犧の要もない、供養の要もない、善惡の結果はない、此の世界も他の世界もない。父も母もない、化生の衆生もない。此世他世を自ら知り自ら證り他に開示し正しく行なひ正しく生活する沙門婆羅門もない」といふ惡見異見を抱いてゐる。(七)假令中國に生れても無智愚鈍聾啞にして善說か惡說かを了解する力がない。(八)假令中國に生れ智ありて賢、聾啞でなく善說か惡說かを了解する力があつても、その時、如來應供正等覺者が出世在まさず、寂靜に導き涅槃に導き正覺に至らしめる法が善逝に依つて開示せられない。これが梵行を行するに適せざる八處である。

九法の部

色青青色青光青見譬如青蓮華亦如青波羅捺衣純一青色青光青見作如是想常觀常念是爲五除入、內無色想外觀色黃黃色黃光黃見譬如黃華黃波羅捺衣黃色黃光黃見常觀常念作如是想是爲六除入、內無色想觀外色赤赤色赤光赤見譬如赤華赤波羅捺衣純一赤色赤光赤見常觀常念作如是想是爲七除入、內無色想外觀色白白色白光白見譬如白華白波羅捺衣純一白色白光白見常觀常念作如是想是爲八除入。云何八證法謂八解脫色觀色一解脫、內有色想觀外色二解脫、淨解脫三解脫、度色想滅瞋恚想住空處四解脫、度空處住識處五解脫、度諸處住不用處六解脫、度不用處住有想無想處七解脫、度有想無想處住想知滅八解脫。

復有九成法九修法九覺法九滅法九退法九增法九難解法九生法九知法九證法。云何九成法謂九淨滅枝、法戒淨滅枝心淨滅枝見淨滅枝度疑淨滅枝分別淨滅枝道淨滅枝除淨滅枝無欲淨滅枝解脫淨滅技。云何九修法謂九喜本、一喜二愛三悅四樂五定六如實知七除捨八無欲九解脫。云何九覺法、謂九衆生居、或有衆生若干種身若干種想天及人是初衆生居、或有衆生若干種身而一想者梵光音最初生時是是二衆生居、或有衆生一身若干種想光音天是是三衆生居、或有衆生一身一想遍淨天是是四衆生居、或有衆生無想無所覺知無想天是是五衆生居、復有衆生空處住是六衆生居、復有衆生識處住是七衆生居、復有衆生不用處住是八衆生居、復有衆生住有想無想處是九衆生居。云

生ぜしめねばならぬ八法とは八大人覺卽ち、(一)小欲はこれ如法多欲はこれ不如法、(二)知足はこれ如法無厭はこれ不如法、(三)閑居はこれ如法朋黨を好むはこれ不如法、(四)精進はこれ如法懶惰はこれ不如法、(五)正念はこれ如法妄念はこれ不如法、(六)寂靜はこれ如法不寂靜はこれ不如法、(七)有智はこれ如法無智はこれ不如法、(八)戲笑の悞悅を離るゝはこれ如法戲笑を樂しむはこれ不如法であると念じ覺ること。

知られねばならぬ八法とは八勝所卽ち、(一)內に色想あるもの、少分美醜の外色を見、その外色に打ち勝ち、「我は知る、我は觀る」と明かな觀念を有する。(二)內に色想あるもの、多分美醜の外色を見、その外色に打ち勝ち、「我は知る、我は觀る」と明かな觀念を有する。(三)內に色想なきもの、少分美醜の外色を見、その外色に勝ち、「我は知る、我は見る」と明かな觀念を有する。(四)內に色想なきもの、多分美醜の外色を見、その外色に勝ち、「我は知る、我は見る」と明かな觀念を有する。(五)內に色想なきもの、喩へばウムマー華の青色青顯青光なるが如き、又兩面の毛ある婆羅那斯のモスリンの青色青顯青光なるが如き、この樣な青色青顯青光の外色を見それらに打ち勝ち、「私は知る、私は見る」と明かな觀念を有する。(六)內に色想なきもの、喩へばカニカーラ華の黃色黃顯黃光なるが如く、又兩面の毛ある婆羅那斯のモスリンの黃色黃顯黃光なるが如き、この樣な外色の黃色黃顯黃光の外色を見、この外界に打ち勝ち「私は知る、私は見る」と明かな觀念を有する。(七)內に色想なきもの、喩へばバレドウヂーワカ華の赤色赤顯赤光なるが如き、又兩面の毛ある婆羅那斯のモスリンの赤色赤顯赤光なるが如き、この樣な赤色赤顯赤光の外色を見、それに打ち勝ち「私は知る、私は見る」と明かな觀念を有する。(八)內に色想なきもの、喩へば金星の白色白顯白光なるが如く、又兩面の毛ある婆羅那斯のモスリンの白色白顯白光なるが如き、この樣な白色白顯白光の外色を見、その外色に打ち勝ち、「私は知る、私は見る」と明かな觀念を有すること。

實現せねばならぬ八法とは八解脫卽ち、(一)內に色想あつて外色を(不淨と)觀ず、これ第一解脫。(二)內に色想なく外色を(不淨と)觀ず、これ第二解脫。(三)外色を淨なりとのみ決定して見る、これ第三解脫。(四)總ての色想を超越し、有對の想を滅し、異想を思惟せず。「空は無邊なり」と知つて、空無邊處に入つて住す、これ第四の解脫。(五)總ての空無邊處を超越して「識は無邊なり」と知つて識無邊處に入つて住す、これ第五の解脫。(六)總ての識無邊處を超越して「何もあることなし」と知つて無所有處に入つて住す、これ第六の解脫。(七)總ての無所有處を超越して非想非々想處に入つて住する、これ第七の解脫。(八)總ての非想非々想處を超越して想受滅に入つて住する、これ第八の解脫である。

九法に就いても前と同樣である。

多くの助けになる九法とは、正思惟を根とする九法卽ち、(一)正思惟から悅が生ずる。(二)悅から喜が生ずる。(三)心が喜ぶに依つて身體が暢達（のびやか）になる。(四)身體が暢達になるから樂を經驗する。(五)樂を經驗するから心が定に入る。(六)入定の心に依つて色の性を知り得る。(七)如實に性を知つて厭ふ。(八)厭ふから欲情を離れる。(九)欲情を離れるから解脫する。

何九滅法謂九愛本、因愛有求因求有利因利有用因用有欲因欲有著因著有嫉因嫉有守因守有護。云何九退法謂九惱法有人已侵惱我今侵惱我當侵惱我我所愛者已侵惱今侵惱當侵惱我所憎者已愛敬今愛敬當愛敬。云何九增法、謂無惱彼已侵我我惱何益已不生惱今不生惱當不生惱、我所愛者彼已侵惱我惱何益已不生惱今不生惱當不生惱、我所憎者彼已愛敬我惱何益已不生惱今不生惱當不生惱。云何九難解法謂九梵行、若比丘有信而不持戒則梵行不具、比丘有信有戒則梵行具足、若比丘有信有戒而不多聞則梵行不具、比丘有信有戒有多聞則梵行具足、若比丘有信有戒有多聞不能說法則梵行不具、比丘有信有戒有多聞能說法則梵行具足、若比丘有信有戒有多聞能說法不能養衆則梵行不具、若比丘有信有戒有多聞能說法養衆則梵行具足、若比丘有信有戒有多聞能說法能養衆不能於大衆中廣演法言則梵行不具若比丘有信有戒有多聞能說法能養衆能於大衆廣演法言則梵行具足、若比丘有信有戒有多聞能說法能養衆能在大衆廣演法言而不得四禪則梵行不具、若比丘有信有戒有多聞能說法能養衆能於大衆廣演法言又得四禪則梵行具足若比丘有信有戒有多聞能說法養衆在大衆中廣演法言又得四禪不於八解脫逆順遊行則梵行不具、有比丘有信有戒有多聞能說法能養衆於大衆中廣演法言具足四禪於八解脫逆順遊行則梵行具足、若比丘有信有戒有多聞能說法能養衆在大衆中廣演法言得四禪於八解脫逆順遊行、然不能盡有漏成無

修めればならぬ九法とは九清淨精勤支卽ち、(一)戒淨淸淨精勤支、(二)心淨淸淨精勤支、(三)見淨淸淨精勤支、(四)度惑淨淸淨精勤支、(五)道非道知見淨淸淨精勤支、(六)道跡知見淨淸淨精勤支、(七)慧淨淸淨精勤支、(八)般若淨淸淨精勤支、(九)解脫淨淸淨精勤支である。分別して知られればならぬ九法とは九有情居卽ち(一)身も異なり想も異なる衆生がある。卽ち人間と一部の天(六欲天)と及び一部の四惡趣の衆生である。これ第一有情居、(二)身は異にして想は一なる衆生がある。卽ち梵天界に初めて生れた衆生である。これ第二有情居。(三)身は同一にして想の一なる衆生がある。卽ち光音天の衆生である。これ第三有情居。(四)身も想も同一なる衆生がある、卽ち徧淨天の衆生である。これ第四有情居。(五)無想無感の衆生がある、卽ち無想天である。これ第五有情居。(六)總ての色想を超越し有對の想を滅し異想を思念せず「空は無邊なり」と知つて空無邊處に入る衆生がある。これ第六有情居。(七)總ての空無邊處を超越して「識は無邊なり」と知つて識無邊處に入る衆生がある。これ第七有情居。(八)總ての識無邊處を超ゑて「何もあることなし」と無處有處に入る衆生がある。これ第八有情居。(九)總ての無所有處を超越して非想非々想處に入る衆生がある。これが第九有情居である。

捨てればならぬ九法とは渴愛から起る九種法卽ち、(一)渴愛に依つて求、(二)求に依つて得、(三)得に依つて決定、(四)決定に依つて欲貪、(五)欲貪に依つて着、(六)着に依つて占取、(七)占取に依つて慳、(八)慳に依つて守、(九)守に依つて棒を取り劍を取り、鬪爭諍論、嫌譁、讒謗、妄語等種々の惡不善の法が起る。これが渴愛を根本とする九種法である。

退墮分の九法とは、九種の憤怒因卽ち、(一)「私に不利をした」と怒を結び、(二)「私に不利をなす」と怒を結び、(三)「私に不利をなすであらう」と怒を結び、(四)「私の愛するものに不利をなした」と怒を結び、(五)私の愛するものに不利をなす」と怒を結び、(六)「私の愛するものに不利をなすであらう」と、怒を結び、(七)「私の憎むものに善い事をした」と怒を結び、(八)私の憎むものに善い事をすると怒を結び、(九)私の憎むものに善い事をするであらう」と怒を結ぶことである。增上分の九法とは、九種の憤怒の制止である。卽ち(一)「私に不利をしたが然し今怒つて何の得があらう」と怒を制止し、(二)「私に不利をしてゐるが今怒つて何の益があらう」と怒を制止し、(三)「私に不利をするであらうがそれを今怒つて何の得があらう」と制止し、(四)「私の愛するものに不利をなしたがそれを怒つて何の得があらう」と怒を制止し、(五)「私の愛するに不利をしてゐるがそれを怒つて何の益があらう」と怒を制止し、(六)私の愛するものに不利をするであらうがそれを怒つて何の益があらう」と怒を制止し、(七)「私の憎むものに善い事をしたが、それを怒つて何の得があらう」と怒を制止し、(八)「私の憎むものに善い事をしてゐるがそれを怒つて何の益があらう」と怒を制止し、(九)「私の憎むものに善い事をするであらうがそれを怒つて何の益があらう」と怒を制止することである。

難解の九法とは九個の異相、(一)界の異、(二)界異なるに依つて觸の異を生じ、(三)觸の異に依つて受の異を生じ、(四)受の異に依つて想の異を生じ、(五)想の異に依つて思惟の異を生じ、(六)思惟の異に依つて欲の異を生じ、(七)欲の異に依つて煩熱の異を生じ、

漏心解脫智慧解脫於現法中自身作證生死已盡梵行已立所作已辨更不受有則梵行不具、若比丘有信有戒有多聞能說法能養衆能在大衆中廣演法言成就四禪於八解脫逆順遊行捨有漏成無漏心解脫智慧解脫於現法中自身作證生死已盡梵行已立所作已辨更不受有則梵行具足。云何九生法謂九想、不淨想觀食想一切世間不可樂想死想無常想無常苦想苦無我想盡想無欲想。云何九知法謂九異法、生果異因果異生觸異因觸異生受異因受異生想異因想異生集異因集異生欲異因欲異生利異因利異生求異因求異生煩惱異因煩惱異。云何九證法謂九盡若入初禪則聲刺滅入第二禪則覺觀刺滅入第三禪則喜刺滅入第四禪則出入息刺滅入空處則色想刺滅入識處則空想刺滅入不用處則識想刺滅入有想無想處則不用想刺滅入滅盡定則想受刺滅。

復有十成法十修法十覺法十滅法十退法十增法十難解法十生法十知法十證法。云何十成法謂十救法一者比丘二百五十戒具威儀亦具見有小罪生大怖畏平等學戒心無傾邪、二者得善知識、三者言語中正多所含受、四者好求善法分布不悋五者諸梵行人有所施設輙佐助不以爲勞難爲能爲亦敎人爲、六者多聞聞便能持未曾有忘、七者精進滅不善法增長善法、八者常自專念無有他想憶本善行若在目前、九者知慧成就觀法生滅以賢聖律而斷苦本、十者樂於閑居專念思惟於禪中間無有調戲。云何十修法謂十正行、正見正思正語正業正命正方便正念正定正解脫正知。云何十覺法謂十色入、眼入耳

(八)煩熱の異に依つて求の異を生じ、(九)求の異に依つて得の異を生ずることである。生ぜしめねばならぬ九法とは九想即ち(一)不淨想、(二)死想、(三)食厭想、(四)一切世界無樂想、(五)無常想、(六)無常苦想、(七)苦無我想、(八)廢捨想、(九)離貪想である。知らねばならぬ九法とは九順次住即ち、(一)比丘は欲を離れ不善法を離れ、有覺有觀離生喜樂の初禪に入りて住す。(二)次に覺と觀とを靜め、內喜一心無覺無觀定生喜樂の第二禪に入りて住す。(三)喜を離れ捨念に住し正心正念にて一身に賢聖の所謂、捨に住し正念なるものは樂に住すと云ふ樂を覺ゆ第三禪に入つて住す。(四)樂を捨て苦を捨て前の喜と憂とを滅し不苦不樂捨念正心淸淨の第四禪に入りて住す。(五)總ての色想を超越し有對の想を離れ異想を思念せず「空は無邊なり」と知つて空無邊處に入つて住する。(六)總ての空無邊處を超越し「識は無邊なり」と知つて識無邊處に入つて住する。(七)總ての識無邊處を超越して「何もあることなし」と無所有處に入つて住する。(八)總ての無所有處を超越して非想非々想處に入つて住する。(九)想受滅に入つて住することである。實現せねばならぬ九法とは九順次滅即ち、(一)第一禪を發得して樂欲の想滅す。(二)第二禪を發得して覺觀の想滅す。(三)第三禪を發得して喜滅す。(四)第四禪を發得して出息入息滅す。(五)空無邊處を發得して色想滅す。(六)識無邊處を發得して空無邊處想滅す。(七)無所有處を發得して識無邊處想滅す。(八)非想非々想處を發得して無所有處想滅す。(九)想受滅を發得して想と受と滅することである。

十法に就ても前同樣である。

多くの助けになる十法とは十作依歸法即ち、(一)比丘あつて戒を持し波羅提木叉に一身を制御して住し善行を具へ小罪にも恐れを見、學則を受持して居れば、彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(二)多聞にして聞いて受持し積み重ね、初中後共に美しく文義共に完備せる法と圓滿圓淨なる梵行を宣傳するを屢々聞き受持し、口に繰り返し心に思念し知見に了解すれば、彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(三)善友善侶を有すれば彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(四)溫順にして、謙遜にならしむる法を具足し、忍耐あり右繞の禮を受くる人(即ち世尊)の敎誨を守れば、彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(五)梵行者のなすべき仕事に巧みにして勤勉、方便もあり思惟もあり、成し果すに充分な力があれば、彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(六)法を愛樂し、その興隆を喜び殊勝の敎律に崇高き歡喜を有すれば、彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(七)自分の得たる衣、鉢、座、藥のいかなるものにても滿足すれば、彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(八)不善法を捨て善法を發得する爲に努力し熱心に堅忍に精進して撓まざれば彼を衆の歸依たらしむることが出來る。(九)記憶正しく最上の記憶辨別力を有し長い以前の言語行爲を記憶想起する力あれば、彼を衆の依歸たらしむることが出來る。(十)智慧あり、五蘊の生滅に關する智を有し神聖なる涅槃に達し正しく煩惱の終滅に達せしむる智慧を具へれば彼をして衆の依歸たらしむることが出來る。

修めねばならぬ十法とは十遍所即ち、(一)上下四維に一にして無限なる地遍を觀ずる。(二)水遍を觀ずる。(三)火遍を觀ずる。(四)風遍を觀ずる。(五)靑遍を觀ずる。(六)黃遍を觀ずる。(七)赤遍を觀ずる。(八)白遍を觀ずる。(九)空遍を觀ずる。(十)識遍を觀ずる

入鼻入舌入身入色入聲入香入味入觸入。云何十滅法謂十邪行、邪見邪思邪語邪業邪命邪方便邪念邪定邪解脫邪智。云何十退法謂十不善行迹身殺盜婬口兩舌惡罵妄言綺語意貪取嫉妬邪見云何十增法謂十善行身不殺盜婬口不兩舌惡罵妄言綺語意不貪取嫉妬邪見。云何十難解法謂十賢聖居、一者比丘除滅五枝、二者成就六枝、三者捨一、四者依四、五者滅異諦、六者勝妙求、七者無濁想、八者身行已立、九者心解脫十者慧解脫云何十生法謂十稱譽處若比丘自得信已爲他人說、亦復稱歎諸得信者、自持戒已爲他人說亦復稱歎諸持戒者、自少欲已爲他人說亦復稱歎諸少欲者、自知足已爲他人說亦復稱歎諸知足者、自樂閑靜爲他人說亦復稱歎樂閑靜者、自多聞已爲他人說亦復稱歎諸多聞者、自精進已爲他人說亦復稱歎諸精進者、自專念已爲他人說亦復稱歎諸專念者、自得禪定爲他人說亦復稱歎得禪定者、自得智慧爲他人說亦復稱歎得智慧者。云何十知法謂十滅法正見之人能滅邪見諸緣邪見起無數惡亦盡除滅、諸因正見生無數善盡得成就正思正語正業正命正方便正念正定正解脫正智正智之人能滅邪智、諸因邪智起無數惡悉皆除滅諸因正智起無數善法盡得成就。云何十證法謂十無學法無學正見正思正語正業正命正方便正念正定正解脫正智、諸比丘是爲百法如實無虛如來知已平等說法。爾時舍利弗佛所印可諸比丘聞舍利弗所說歡喜奉行。

ことである。分別して知らればならぬ十法とは十處卽ち、(一)眼處、(二)色處、(三)耳處、(四)聲處、(五)鼻處、(六)香處、(七)舌處、(八)味處、九身處、(十)觸處である。捨てればならぬ十法とは十邪卽ち、(一)邪見、(二)邪思、(三)邪語、(四)邪業、(五)邪命、(六)邪精進、(七)邪念、(八)邪定、(九)邪智、(十)邪解脱である。退墮分の十法とは十不善業道卽ち、(一)殺生、(二)偸盗、(三)邪淫、(四)妄語、(五)離間語、(六)惡口、(七)綺語、(八)貪、(九)瞋、(十)痴である。增上分の十法とは十善業道卽ち、(一)離殺生、(二)離偸盗、(三)離邪淫、(四)離妄語、(五)離離間語、(六)離惡口、(七)離綺語、(八)不貪、(九)不瞋、(十)不痴である。

難解の十法とは十聖住卽ち、(一)五支廢捨。樂欲、瞋、懶惰睡眠、掉擧惡作、疑の五支を廢捨す。(二)六支具足。眼を以て色を見、耳を以て聲を聞き、鼻を以て香を嗅き、舌を以て味を味はひ、身を以て觸に觸れ、意を以て法を知り喜ばず悲しまず捨心正念正心に住す。この六支を具す。(三)一守護、一身をよく心を以て守護す。(四)四靠背、推理して一(衣鉢座藥)を使用し、推理して一(寒暑等)を忍び、推理して一(危險なる動物)を避け、推理して一(貪邪見等)を退ける。(五)獨眞驅逐、凡常の沙門婆羅門の凡常の獨眞(ひとりよがりの教)をすべて退け投げ棄て驅逐し離脱する。(六)求欲の滅却、樂欲の求欲を滅し、存在の求欲を滅し梵行の求欲を滅す。(七)無垢の思惟、樂欲の思惟を廢し、瞋の思惟を廢し、害の思惟を廢し無垢の思惟を有す。(八)寂靜の身行に住す、樂を捨て苦を捨て前の喜と憂とを滅し不苦不樂捨念正心清淨の第四禪に入つて住すること。(九)善解脱心、心貪より解脱し瞋より解脱し痴より解脱すること。(十)善解脱慧、「私の貪瞋痴は廢捨せられ、根絕せられ根を切られた多羅樹の樣に未來不生の法になつた」と知ること。

生ぜしめればならぬ十法とは十想卽ち、(一)不淨想、(二)死想、(三)食厭想、(四)一切世間無樂想、(五)無常想、(六)無常苦想、(七)苦無我想、(八)廢棄想、(九)離貪想、(十)滅である。知らればならぬ十法とは十衰滅因卽ち、(一)正見に依つて邪見は衰滅し邪見から生ずる種々不善の法も衰滅し種々の善法が生起圓滿する。(二)正思に依り邪思は衰滅し邪思から生ずる種々惡不善の法も衰滅し種々の善法生起圓滿する。(三)正語に依り邪語及び邪語より生ずる惡不善の法も滅し種々の善法生起圓滿する。(四)正業に依り邪業及び邪業より生ずる惡不善の法衰滅し種々の善法生起圓滿する。(五)正命に依り邪命及び邪命より生ずる惡不善の法衰滅し種々の善法生起圓滿する。(六)正精進に依つて邪精進及び邪精進より生ずる惡不善の法は衰滅し種々の善法生起圓滿する。(七)正念に依り邪念及び邪念より生ずる惡不善の法は衰滅し種々の善法生起圓滿する。(八)正定に依り邪定及び邪定より生ずる惡不善の法は衰滅し種々の善法生起圓滿する。(九)正智に依り邪智及び邪智より生ずる惡不善の法は衰滅し種々の善法生起圓滿する。(十)正解脱に依り邪解脱及び邪解脱より生ずる惡不善の法は衰滅し種々の善法生起圓滿する。實現せればならぬ十法とは十無學法卽ち、(一)無學の正見、(二)無學の正思、(三)無學の正語、(四)無學の正業、(五)無學の正命、(六)無學の正精進、(七)無學の正念、(八)無學の正定、(九)無學の正智、(十)無學の正解脱である。

斯く實にして眞、如にして不虛不妄の諸法は正しく如來に依つて證知せられたのである。

法の相續者

世尊は舍衛城の祇多林、給孤獨園に御住ゐなされてゐた時のことである。世尊は『比丘等よ』と呼びかけ給ひ、比丘等は『世尊よ』と答へ奉つた。世尊はこのやうに仰せられた。

『比丘等よ、私の法の相續者となつて、單なる物質の相續者となつてはならぬ。私は汝等を愛するが故に「どうぞ、私の弟子達が、私の法の相續者となり、單に物質の相續者でないやうに」といふのである。

比丘等よ、もしも汝等が、單に私の物質の相續者となつて、法の相續者とならない時には、こういふ非難が汝等の上にも私の上にも起るであらう。「師の弟子は單に物質の相續者として住み、法の相續者ではない」と。比丘等よ、もしも汝等が法の相續者であつて、單に物質の相續者でない時には、汝等の上にも又私の上にも、こういふ非難がなくなるのである。

比丘等よ、それであるから、私の法の相續者となつて、單なる物質の相續者となつてはならぬ。

比丘等よ、茲に私が、供養の食物を充分に一杯に滿足するまでに食べて、猶其處に餘つて、捨てるべき食物があるとする。其の時二人の比丘が外方から飢と疲れで遣つて來るとする。私は彼等にこのやうにいふ。

「私はこの供養の食物を一杯に充分に滿足するまでに食べた。然し猶茲に餘つて捨つべき食物がある。もし食べやうと思はゞ食べよ、汝等が食べなければ、私は今、草の生長を害はない所へ捨てるか、或は生物を痛めない水の中へ注ぎ入れるであらう」と。

そこで一人の比丘はこのやうに考へる。「世尊は供へられた食事を一杯に充分に滿足するまでになされて、猶、餘つて捨つべき食物がある。もし私共が食べなければ、世尊は草の生長を害はない所へお捨てなされるか、或は生物を痛めない水の中へ注ぎ入れ給ふであらう。然し世尊は又このやうに仰せられた。「比丘等よ私の法の相續者となれ、單に物質の相續者となるな」と仰せられた。この食物は物質に屬するものである。私はこの食物を食べないで、飢と疲れを耐へて一日一夜(明日の食事まで)を過さう」と。

かくて彼は、その食物を食べないで飢と疲れを耐へて、一日一夜を過すであらう。

時に他の比丘はこのやうに考へる。「世尊は供へられた食物を一杯に充分に滿足するまでになされて、猶餘つて捨つべき食物がある。もし私共が食べなければ、世尊は草の生長を害はない所へお捨てなされるか、或は生物を痛めない水の中へ注ぎ入れ給ふであらう。私はこの食物を食べて、飢と疲れを醫して、一日一夜を過すであらう」と。

かくて、彼はその食物を食べて、飢と疲れを醫して一日一夜を過すであらう。

比丘等よ、第二の比丘はその食物を食べて飢と疲れを醫して一日一夜を過したが、然しこの私の第一の比丘は、より貰むべくより讃ふべきものである。何故なれば、その比丘は、長く小欲と知足とを以て、毒箭を除くがために努力と精進とをなすであらうから。

比丘等よ、それであるから、私の法の相續者となつて、單に物質の相續者となつてはならぬ。私は汝等を愛するが故に、「どうぞ私の弟子が法の相續者となつて、單に物質の相續者となつて異れるな」といふのである。

世尊はこれを宣ふて、座を立ちて、私室に入り給うた。

その時、長老舍利弗は、世尊の去り給ふ間もなく、「友よ」と比丘等を呼んだ。比丘等も「友よ」と長老舍利弗に答へた。長老舍利弗はこのやうに曰つた。

「友よ、閑居に住し給ふ師の弟子はいか樣に閑居を學ばず、又いかやうに閑居を學ぶか」。

「友よ我々はこの所說の義を知らんがために、長老舍利弗の近くへ遠くから來たのであります。もしこのことを長老舍利弗はよいと思召したなら、御說き下さい。我々比丘は長老舍利弗から聞いて憶持いたすでありましやう」と。

「友よ、玆に閑居に住し給ふ師の弟子が、閑居を學ばないとは、師が捨てればならぬものと仰せられた法を捨てず、却つて贅澤に流れて懶惰に耽り、墮落に先走り、閑居の軛を捨て去ることである。友よ、この時、上座の比丘に、三個の非難が起る。「閑居に住し給ふ師の弟子が閑居を學ばない」。これが上座の比丘に對する第一の非難である。「師が捨てればならぬものと仰せられた法を捨てない」。これが第二の非難である。「のみならず、贅澤に流れ懶惰に耽り、墮落に先走り、閑居の軛を捨て去る」。これが第三の非難である。友よ、上座の比丘はこの三個の非難を蒙むるのである。中位の比丘も、新比丘も又同樣にこの三個の非難を蒙むる。友よ、幽居に住し給ふ師の弟子は、このやうに閑居を學ばないのである。

「又友よ、幽居に住し給ふ師の弟子は、如何やうに閑居を學ぶか。友よ、玆に、幽居に住し給ふ師の弟子が、閑居を學び、師の捨てればならぬものと仰せられた法を捨て、贅澤に流れず、懶惰に耽らず、墮落の軛を捨て、閑居に急ぐ。

「そこで友よ、上座の比丘にも、中位の比丘にも、新比丘にも、三個の賞讚がある。「幽居に住し給ふ師の弟子は閑居を學ぶ」、これが、上座の比丘、中位の比丘、新比丘に對する第一の賞讚である。「師の捨てればならぬと仰せられた法を捨てる」、これが第二の賞讚である。「贅澤に流れず、懶惰に耽らず、墮落の軛を捨て、閑居に急ぐ」これが、第三の賞讚である。友よ、上座の比丘、中位の比丘、新比丘共にこの三個の賞讚を受けるのである。友よ、幽居に住し給ふ師の弟子は、このやうに閑居を學ぶのである」。

「友よ、貪欲は惡である。瞋恚も惡である。この貪欲を捨て、瞋恚を捨てるために、玆に、それに依つて見を生じ、智を生じ、寂靜と上智と正覺と涅槃に導く中道がある。

友よ、この見を生じ智を生じ、寂靜と上智と正覺と涅槃とに導く中道とは何であるか。これは八聖道支である。卽ち正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。友よ、これが見を生じ、智を生じ、寂靜と上智と正覺と涅槃とに導く中道である。

友よ、忿は惡である。恨は惡である。…………覆は惡である。惱は惡である。…………諂は惡である。誑は惡である。…………諂は惡である。誑は惡である。…………剛愎は惡である。喧騷は惡であえ。…………慢は惡である。過慢は惡である。憍は惡である。怠慢は惡である。友よ、これらの惡法を捨てるために、玆に、それに依つて見を生じ、智を生じ、寂靜と上智と正覺と涅槃とに導く中道がある。

友よ、この見を生じ、智を生じ、寂靜と上智と正覺と涅槃とに導く中道とは何であるか。これは八聖道支である。卽ち正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。友よ、これが見を生じ智を生じ、寂靜と上智と正覺と涅槃とに導く中道である」。

巴利中阿含第三 (vol. I. p.p.)
中阿含求法經 (昃六、8—9)

蜜　丸　喩

世尊が釋迦族の迦維羅城、尼倶律陀樹園に御ゐでなされた時の事である。世尊は早朝に衣を着け、鉢を取り、迦維羅城に乞を行し、食を終り、鉢を置いて、その日の日中を過さんがために、大林の奥に入つて、若いキルワ樹の根本に暑さを避けて御すはりなされた。

時に釋種の執杖（ダンタパーニ）はぶらぶらそゞろ歩きして、大林に入り、若いキルワ樹の根元に世尊を見奉り、世尊と慇懃なる挨拶の辭を交換し、杖に凭れて、一面に立ち、世尊にこのやうに申し上げた。

「沙門よ、あなたの主張はどういふのでありますか。何を説かれるのであるか」と。

「友よ、私の主張といふは、天界、魔界、梵界、沙門、婆羅門、人民、この一切人天の如何なる世界をも摑まないで立つといふことである。又、樂欲に着せずして住し、疑を離れ、孤疑を斷ち、有と非有の渇愛を脱したる婆羅門には、（彼此の）想は最早隨逐しないといふことである。これが私の説くものである」。

かく曰はれて、釋種執杖は叩頭（うな）つきつゝ、舌をまわし、三つの皺を額に寄せて、杖にもたれて去つた。

世尊は夕方燕座を立ちて、尼倶律陀樹園に近づき、設けの座に卽いて、比丘等にこの談話の始終を語り給うた。

時に一比丘が世尊に申し上げた。

「世尊、然し天界、魔界、梵界、沙門、婆羅門、人民、この一切人天の如何なる世界をも摑まないで立つとは世尊の教理は如何なることでありますか。又樂欲に着せずして住し、疑を離れ、孤疑を斷し、有非有の渇愛を脱したる婆羅門、世尊に、（彼此の）想は最早隨多しないとはいかなることでありますか」と。

「比丘等よ、何かの緣に依つて、人に、譚戲障礙の想が作用いて來るものであるが、若し、其處に（我我所の）喜びを見ず、（我我所の）樂しみを得ず、戀着せなければ、これは實に欲貪隨眠のおはりである。瞋隨眠のおはりである。見隨眠のおはりである。これは疑隨眠のおはりである。慢隨眠のおはりである。有貪隨眠のおはりである。痴隨眠のおはりである。棒を取り劍を取つての喧嘩、鬪爭、口論、相互の諂語、妄語のおはりである。茲にすべての惡不善の法が餘りなく消滅するのである」と。

かく世尊は宣うて座を立つて私室に入り給うた。

時に比丘等は世尊が去り給うたので、このやうに考へた。

「友等よ、世尊はこの教を略說し、廣く義を開演しないで、座を立ち、私室に入り給うた、誰が、この世尊の略說し給うた教を廣く開演して吳れるであらうか」と。

彼等はつゞいてこのやうに考へた。

「茲に長老大迦旃延は、師にも讃へられ、同門の智者にも尊敬せられてゐる。又彼はこの世尊の略說し給うた教を廣く開演することの出來る人である。我々はかの長老大迦旃延の處へ行つて、この義を尋ねやうではないか」と。

そこで、彼等諸比丘は長老大迦旃延の許に赴き、長老大迦旃延と慇懃なる挨拶の辭を交換し、一面に座して、長老大迦旃延にこの事を話した。

長老大迦旃延は、これに答へて次の如く曰つた。

「友よ、喩へば、木の赤木質を求むる人があつて、赤木質を探し求めて歩いて、赤木質のある直立した大樹に上り、根を越ね幹を越ねて、枝や葉に赤木質を探さうとしてゐるやうに、長老達は、師を離れて、私にこの義を尋ねやうと思つてゐられる。友よ、かの世尊は知る人の中の知る人、見る人の中の見る人、眼そのもの、智慧そのもの、法そのもの、梵そのもの、唱道者、敎示者、義の開顯者、不死の與へ手、法主、如來で在ます。先きこそ、世尊に、この義を問ひ奉り、世尊の御說きなされる通りに憶持する時であつたではないか」。

「我等の友、迦旃延よ、實にその通り、世尊は知る人の中の知る人、見る人の中の見る人、眼そのもの、智識そのもの、法そのもの、梵そのもの、唱道者、敎示者、義の開顯者、不死の與へ手、法主、如來で在します。さうして先きこそ世尊にこの義を問ひ奉つて、世尊の說明なされる通り憶持する時であつたのであります。然し長老大迦旃延も亦師にも讃へられ、同門の智者にも尊ばれ、この世尊の略說し給うた敎を廣く開演することの出來る人であります。長老大迦旃延よ、氣を惡くしないで說明して下さい。

「それでば友よ、善く聽き善く注意せよ、私は說くであらう」。

「かしこまりました」と、比丘等は答へた。迦旃延はこのやうに語り出した。

「友よ、世尊は、略して說き給うた。何かの緣に依つて、人に調戲障礙の想が作用いて來るものであるが、もし其處に(我我所の)喜びを見ず、(我我所の)樂を得ず、戀着せなければ、これは實に、欲貪隨眠、瞋隨眠、見隨眠、疑隨眠、慢隨眠、有貪隨眠、痴隨眠のおはりである。又これは、棒を取り、劔を取つての喧嘩鬪爭、口論、相互の諂語、妄語のおはりである。茲にすべての惡不善の法は餘りなく消失するのである」。

かく世尊は略說し給うた。私はこの略說せられた義を廣說して、このやうに了解してゐます。

友よ、眼と色とに對して眼識が起る。この三者が接して、觸が起る。觸に對して受が起る。感受すれば認知(想)する、認知すれば思惟する。思惟すれば、分別する。分別する所から、その緣に依つて、人に、過去未來現在の眼所緣の色の上に、すべての調戲障礙の想が作用いて來る。

「友よ、耳鼻舌身の場合もこれに同じく、又意の場合もこれに同じい。卽ち心と法とに對して意識が起り、この三者會合して觸が起り、觸に對して受が起り、感受すれば認知し、認知すれば思惟し、思惟すれば分別する、この分別から、この緣に依つて、人に過去未來現在の意所緣の法に對して、調戲障礙の想が生じて來るのである。

「友よ、それで、眼と色と眼識とあるから、觸の生起があるのである。觸の生起があるから、受の生起があるのである。受の生起があるから、想の生起があるのである。想の生起があるから、思惟の生起があるのである。思惟の生起があるから、調戲障礙の想の作用が顯はれるのである。

友よ、耳と聲、鼻と香、舌と味、身と觸もこの眼と色とに等しい。

友よ、意と法と意識とあるから、觸の生起があるのである。觸の生起があるから、受の生起があるのである。受の生起があるから、想の生起があるのである。想の生起があるから、思惟の生起があるのである。思惟の生起があるから、調戲障礙の想の作用が顯はれるのであ

る。

友よ、それで、眼と色と眼識となければ、觸の生起はあり得ない。觸の生起がなければ、受の生起はあり得ない。受の生起がなければ、想の生起はあり得ない。想の生起がなければ、思惟の生起はあり得ない。思惟の生起がなければ、調戲障礙の想の作用は顯はれ得ない。

耳と聲、鼻と香、舌と味、身と觸もこれと同じい。

又意と法と意識となければ、觸の生起はあり得ない。觸の生起がなければ、受の生起はあり得ない。受の生起がなければ、想の生起はあり得ない。想の生起がなければ思惟の生起はあり得ない。思惟の生起がなければ、調戲障礙の想の作用は顯はれ得ない。

友よ、私は世尊の略說し給うた敎を開演してこのやうに了解してゐる。然し、長老達にして欲するならば、世尊の御許に行いてこの義を問ひ奉り、世尊の開說し給ふ通り憶持するがよろしい。

時に彼等比丘達は長老大迦旃延の所說を歡喜し、座を立つて、世尊の御許に赴き、世尊を禮して、一面に座し、世尊にこのやうに申し上げた。

「世尊、私共は、かの長老大迦旃延の許へ行いて、世尊の略說し給ふた義を尋ねました。さうして長老大迦旃延は私共にこのやうな具合に、こういふ語句(ここは)を以て義を開說して與れられました」。

「比丘等よ、大迦旃延は學者である。大智者である。比丘等よ、もし、汝等が、私にこの義を尋ねるならば、私も亦かの大迦旃延が說明した樣に說くであらう。何故なれば、これは、その眞の意味であるからである。汝等はその樣に憶持するがよろしい」。

かく曰はれて、長老阿難は世尊にこのやうに申し上げた。

「世尊、喩へば人あつて、飢と疲勞に死ぬやうになつて、蜜丸を得たとします。彼は味ふに從つて、益々甘美美妙な味を得まするやうに、世尊よ、心あり、賢しい比丘はこの法敎に依り智慧に依つて義を尋ねるに從つて、益々滿足を得、心の喜を得ました。世尊、この法敎は何と名くべきでありまするか」。

「それでは阿難陀よ、この法敎をば、蜜丸敎と憶持せよ」。

巴利中阿含第十八 (vol. I. p.p. 108—114)
中阿含蜜丸喩經 (昃六、36)

鋸 譬 喩 經

或る時世尊は舍衞城の祇園精舍においでなされた。

「その時、長老モーリヤパグナ (Moliyapagguna) は、異常に比丘尼達と親密になつてゐた。人あつて彼等の前で、比丘尼の惡口をいへば彼は喜ばず、怒つて議論をなし、又比丘尼の前で彼の惡口をいへば、比丘尼は喜ばず、怒つて議論をなした程、彼と比丘尼等とは親密な往來をしてゐた。

時に或る比丘が世尊にこの事を申し上げた。世尊は、その比丘に仰せられた。

「それでは、私の語を以てモーリヤパグナを呼んで與れ、『友よ、師は汝を御呼びなされてゐる』と」。

「かしこまりました、世尊よ」と作んの比丘は、世尊に御答へして彼の所へ行き、このやう

に曰つた。

『友よ、師は汝を呼んでゐられる』と。

『承知をしました。友よ」と、

彼はその比丘に答へて世尊の御許へ赴き、世尊を禮して一面に座した。世尊はこのやうに仰せられた。

『パグナよ、汝が、異常に比丘尼等と親密になり、誰か比丘が汝の前で比丘尼等の惡口をいへば汝は腹を立てゝ喜ばず、議論をなし、比丘尼等の前で誰か比丘が汝の惡口をいへば比丘尼等は腹を立てゝ喜ばず、議論をなす程に、汝は比丘尼等と親密な往來をしてゐるといふは事實であるが』。

『世尊、その通りであります』。

『パグナよ、汝、良家の子は信仰に依つて、家を出てゝ家なき沙門となつたのではないか』。

『世尊、その通りであります』。

『パグナよ、その信仰に依つて、家を出てゝ、家なき沙門となつた汝良家の子が、比丘尼等と異常に親密になるといふことは醜いことではないか。それであるから、パグナよ、誰か汝の前でその比丘尼達の惡口をいふ時には、汝は家に着するものゝ欲情と覺とを捨てねばならぬ。さうしてそこでこのやうに學ばねばならぬ。「私の心は變らぬであらう。惡しき語は私の口から洩れぬであらう。同情と愛憐を以て慈心に住するであらう。密かに怒りを抱くといふこともいたすまい」と、パグナよ、汝はこのやうに學ばねばならぬ。

パグナよ又、もし誰かゞ汝の前で、それ等の比丘尼等を手を以て打ち、土塊を以て打ち、棒を以て打ち、劔を以て打つても、汝は家に着するものゝ感情と覺とを捨てねばならぬ。さうしてこのやうに學ばねばならぬ。「私の心は變らぬであらう。惡しき語は我の口から洩れぬであらう。同情と愛憐とを以て慈心に住するであらう、密に怒を抱くといふこともいたすまい」と、汝はこのやうに學ばねばならぬ。

パグナよ、又たとへ人あつて汝の面前で、汝の惡口をいつても、汝は家に着するものゝ感情と覺とを捨てねばならぬ。さうしてこのやうに學ばねばならぬ。「私の心は變らぬであらう。惡しき語は私の口から洩れぬであらう。同情と愛憐と以て慈心に住するであらう。密かに怒を抱くといふこともいたすまい」と。汝はこのやうに學ばねばならぬ。

パグナよ、又汝は、たとへ或る人が汝を手を以て打ち、土塊を以て打ち、棒を以て打ち、劔を以て打つても、汝は家に着するものゝ感情と覺とを捨てねばならぬ。汝は、このやうに學ばねばならぬ。「私の心は變らぬであらう。惡しき語は私の口から洩れぬであらう。同情と愛憐とを以て慈心に住するであらう。密かに怒を抱くといふこともいたすまい」と、波瞿那よ汝はこのやうに學ばねばならぬ。

其の時世尊は比丘等を呼びかけ給うた。『比丘等よ、或る時、私の比丘達の心は善く調うてゐた。私は、その比丘達を呼びかけて曰つた。「比丘等よ、私は日に只一度の食を取つてゐる。その爲に、無病にして苦しみなく、健全にして、體力あり愉快な生活をなしてゐる。汝等もこのやうに一食を取り、一食を取る事に依つて、無病無苦健全にして體力あり、愉快な生活を營めよ」と。然し、比丘等よ、私の比丘達には、この教訓の必要はなかつたのである。只正念を起してゐる必要があつたのである。

比丘等よ、喩へば、平かな地面の四辻に、立派に育つた馬が馬車に繫がれて立つてゐる、刺棒もそろつてある。それに巧みな宰領さ御者さが乘り込んで、左手に手綱をさり、右手に刺棒を取つて、思ふ所へ何處へでも、御し去り御し來るがやうに、比丘等よ、私の比丘は(この馬車のやうであるので) この教訓の必要はなかつたのである。只正念を起してゐる必要があつたのである。

それであるから、比丘等よ、汝等は不善を捨てゝ、善法に住せよ。かくして汝等はこの法さ律さに於て增長發展を得るであらう。

比丘等よ、喩へば、村又は町の近くに大きな沙羅林がある。その樹皮がよごれて、生長し雜れてゐる。其處へ、その森を愛し森のためを思ひ繁茂させたいさ思ふ人が顯はれる。彼は曲んだ生氣のない芽枝を切つて捨て、森の內部を清淨に掃き淨め、眞直な性質のよい芽枝は保護をする。比丘等よ、かくして、その沙羅の森はやがて生長繁茂するであらう。

比丘等よ、丁度このやうに、汝等にして不善を捨て、善法に居を占むれば、汝等はこの法さ律さに於て增上發展するであらう。

比丘等よ、長い以前にこの舍衞城にエーデーヒカーさいふ家婦があつた。比丘等よ、このエーデーヒカーには、このやうな美しい名聲が上つてゐた。「エーデーヒカーは親切である。謙遜である。靜かである」さ。

比丘等よ、又エーデーヒカーには迦利(カーリ)さいふ名の下女があつた。怜悧にして勤勉で、よくその仕事を充分に果す下女であつた。

比丘等よ、時に迦利はこのやうに思つた。私の主人にはこのやうな美しい名聲が上つてゐる。「エーデーヒカーは親切である。謙遜である。靜かである」さ。然し實際、私の主人は內心怒を持つてゐてそれを外に顯はさないのでなからうか。或は又實際に怒るさいふことのない人であらうか。或は私が、これまで、仕事を一所懸命にして來たので內心には腹を立てることがあつても外に顯はさなかつたのでなからうか。或は元來さういふことのないのであらうか。一つ私の主人を試めして見やう」さ。

比丘等よ、そこで、迦利は、朝寢坊をして日中に起き出てた。比丘等よ、エーデーヒカーは迦利にこのやうに曰つた。

「迦利よ、迦利よ」。

「御主人、何で御座います」。

「何故おまへ、そんなに遲く起きるのかへ」。

「御主人(あなた)には何にも關係がないぢやありませんか」。

「何でもないことがあるものかね、この惡たれめ、こんなに遲く起きて」さ家婦は喜ばず、額に筋を立てゝ怒つた。

比丘等よ、その時、迦利はこのやうに思つた。「私の主人は內心に腹を立てゝもそれを外に顯はさなかつたのだ。ないのぢやない。私がこれまで一所懸命に仕事をして來たので內にある怒を外に顯はさなかつたのだ。ないのぢやない。もつさ主人を試めして見やう」さ。

比丘等よ、そこで迦利は前よりはもつさ遲く起きた。比丘等よ、エーデーヒカーは迦利にこのやうに曰つた。

「迦利よ、迦利よ」。

「御主人何で御座います」。

「何でお前はそんなに遲く起きたのかへ」。

「御主人には何にも關係(さしさはり)がないぢやありませんか」。

「何でもないことがあるものかれ、この惡たれめ、こんなに遲く起きて」。

と家婦は腹を立てゝ喜ばず、面白くない語を放つた。

比丘等よ、そこで迦利はこのやうに思つた。「私の主人は內を腹を立てゝゐて、それを外に顯はさなかつたのだ、ないのぢやない。私がこれまで一所懸命に仕事をして來たので、內にある怒を外に顯はさなかつたのだ、ないのぢやない。私はもつと主人を試して見やう」と。

比丘等よ、そこで、迦利は前よりももつと遲く起き出てた。比丘等よ、エーデーヒカーは迦利にこのやうに日つた。

「迦利よ、迦利よ」。

「御主人何で御座いますか」。

「何でお前はそんなに遲く起きたのかへ」。

「御主人には何も關係がないぢやありませんか」。

「何でもないことがあるものかれ、この惡たれめ、こんなに遲く起きて」。

と、家婦は怒つて喜はず、戶の閂をする棒を取つて、頭を打つて傷つけた。

比丘等よ、時に、迦利は頭を傷つけられ．血をたら〻〻垂して、飛び出して、近隣に怒鳴つた。

「御覽、親切な人の仕業を御覽、謙遜な人の仕業を御覽、靜かな人の仕業を御覽。實際、たつた一人の家婢を持つ主人が、「遲く起きた」と日つて、戶の閂を取つて頭を打つて、傷つけるやうなことがあるものでしやうか」と。

比丘等よ、かくて、それから間もなくエーデーヒカーには、このやうな惡名が起つた。「エーデーヒカーは、恐ろしい不親切な女である。躁暴である。ガミ〻〻女である」と。

比丘等よ、丁度このやうに、比丘は、誰でも面白くない語が自分に觸れない間は非常に親切である。非常に謙遜である。非常に靜かである。然し比丘等よ、自分に面白くない語が觸れる時に、その比丘が果して親切と見られるか、謙遜と見られるか、靜かなものと見られるかの定まる時である。

比丘等よ、私は、衣と鉢食と座具と藥具を得たるが故に口も柔和にして行も柔和な比丘を柔和とは日はない。そは何故なれば、比丘等よ、その比丘にして、衣と鉢食と座具と藥具とを得なければ、口も行も柔和でないからである。

比丘等よ、比丘にして、法を尊重恭敬して、口も行も柔和であれば私はその比丘を柔和であるといふ。比丘等よ、それであるから斯くの如く學ばねばならぬ。「法を尊重恭敬して、口も柔和であり、行も柔和であらう」と。汝等は斯く學ばねばならぬ。

比丘等よ、玆に汝等が他人に依つて語らるゝ五つの語の道がある。卽ち

時に適ひ、或は時に適はず、

事實に適ひ、或は事實に適はず、

柔かに、或は粗く、

爲になるやうに、或は爲にならないやうに、

慈心を以て、或は惡心を以て、

である。比丘等よ、汝等は、他人に時に適ひ或は時に適はずに話されても、事實に適ひ或は事實に適はずに話されても、柔かに、或は粗く話されても、爲になるやうに、或は爲にならないやうに話されても、慈心を以て、或は惡心を以て話されても、汝等はこのやうに學ばねばならぬ。「決して私の心は變らぬであらう。惡語は私の口を洩れぬであらう。同情と愛憐とを以て慈心に住し、內心にさへ怒を抱かぬであらう。その人を慈の伴ふ心を以て浸して住するであらう。それからその地を延して、全世界を廣大無量な慈心を以て怨みなく憎みなく浸して、住するであらう」と。汝等はこのやうに學ばねばならぬ。

比丘等よ、喩へば、人あつて犂(すき)と袋とを持つて遣つて來る。而してこのやうにいふ。「私はこの大地の土を無くしやう」と。そこで彼は「土よ無くなれ、土よなくなれ」と曰つては此處彼處の土を堀つては此處彼處に撒き散し、此處彼處に穴を掘つては此處彼處に投げ捨てる。比丘等よ、汝等はいかに思ふか。この人はこの大地の土をなくすることが出來るであらうか」。

「世尊、それは出來ません。何故なれば、この大地は量を超ゑて深く、いかに、その男が骨を折り力を盡しても、土をなくすることは出來ませんから」。

比丘等よ、丁度そのやうに、汝等は他人に依つて五つの語道、卽ち、時に適ひ、或は時に適はず、事實に適ひ、或は事實に適はず、柔かに、或は粗く、爲になるやうに或は爲にならないやうに、慈心を以て或は惡心を以て語らるゝ。比丘等よ、汝等は他人に時に適ひ或は時に適はず、事實に適ひ、或は事實に適はず、柔かに或は粗く、爲になるやうに、或は爲にならないやうに、慈心を以て或は惡心を以て話されても、汝等はこのやうに學ばねばならぬ。「決して私の心は變らぬであらう。惡語は私の口を洩れぬであらう。同情と愛憐とを以て慈心に住し、內心にさへ怒を抱かぬであらう。その人を慈心を以て浸して住するであらう。それから。その地を延して、全世界を廣大無量な慈心を以て、怨みなく憎みなく、浸して住するであらう」と。汝等はこのやうに學ばねばならぬ。

比丘等よ、喩へば、人あつて、漆、薑黃、黑、茜の色料を持つて來て、このやうにいふ。「私はこの空に繪を畵かう。繪を顯はして見やう」と。比丘等よ、汝等はいかに考ふるか。この人は空中に繪を畵くことが出來やうか、物の形を顯はすことが出來やうか』。

『世尊、それは出來ません。空は形もなく見ることも出來ないもので、いかにその人が骨を折り力を盡しても、繪を畵き、物の形を顯はすことは出來ません』。

比丘等よ、又喩へば、人あつて、枯草で作つた燃ゑ上る松明を持つて來て、このやうにいふ。「私はこの枯草で作つた燃ゑ上る松明を以て、この恒河を燃し乾かすであらう」と。比丘等よ、汝等はいかに考ふるか。この人はその枯草で作つた松明を以て恒河を燃やし乾かすことが出來るであらうか』。

『世尊、それは出來ません。恒河は量を超ゑて深く、いかにその人が骨を折り力を盡しても枯草の松明では恒河を燃し乾かすことは出來ません』。

比丘等よ、又喩へば、茲に柔かにしなやかに善く完全に鞣し、サラ〳〵といふ音もバラ〳〵といふ音もしなくなつた猫の皮があつて、或る人が、棒か土瓶の破片を持つて來て、このやうにいふ。「私はこの柔かにしなやかに、善く完全に、鞣し、サラ〳〵といふ音も、バラ〳〵といふ音もしなくなつた猫の皮を棒か土瓶の破片でたゝいてサラ〳〵バラ〳〵といふ音をさ

せやう」と。比丘等よ、汝等はいかに考ふるか。この人はこの柔かにしなやかに善く完全に鞣され、サラヽヽバラヽヽといふ音のしない猫の皮を棒か土瓶の破片でサラヽヽバラヽヽといふ音をさせることが出來やうか』と。

『世尊それは出來ません。何故なれば、この猫の皮は柔かにしなやかに善く完全に鞣され、サラヽヽバラヽヽといふ音のしなくなつたものですから、その人がいかに骨を折り力を盡しても、棒や土瓶の破片を以てはサラヽヽバラヽヽといふ音を立てさせることは出來ません』。

『比丘等よ、丁度そのやうに、汝等が他人に五つの語道即ち、時期に適ひ或は時期に適はず、事實に適ひ或は事實に適はず、柔かに或は粗らく、爲になるやうに或は爲にならぬやうに、慈心を以て或は惡心を以て語られても、汝等はこのやうに學ばればならぬ。「決して私の心は變らぬであらう。惡語は私の口を洩れぬであらう。同情と愛憐を以て慈心に住し、內心にさへ怒を抱かぬであらう。慈心を以てその人を浸し、それよりその地をひろげて、全世界を廣大無量な慈心を以て怨みなく憎みなく、浸すであらう」と。比丘等よ、汝等はこのやうに學ばればならぬ。

比丘等よ假令、賤しき盜賊が兩齒の鋸を以て汝を捕へて支肢を切斷するであらうとも……かゝる場合に心の暗くなるものは、私の敎を守らぬのである。…………比丘等よ、汝等はこのやうに學ばればならぬ。「私の心は決して動かぬであらう。惡語は私の口を洩れぬであらう。同情と愛憐とを以て慈心に住し、內心にも怒を抱かぬであらう。慈心を以てその人を浸し、それよりその地をひろげて、全世界を廣大無量の慈心を以て怨みなく憎みなく浸すであらう」と、比丘等よ、汝等はこのやうに學ばればならぬ。

「比丘等よ、汝等は、この鋸譬喩の敎訓を屢々繰り返して心に思ひ見よ。比丘等よ、汝等はこの語道に、大なり小なり罪垢を見るか」。

「世尊、決して私共は見ません」。

「比丘等よ、それではこの鋸譬喩の敎訓を繰り返して心に思ひ見よ、そは汝等にとつて長き利益幸福となるであらう」と。

巴利中阿含第二一（vol. I. p.p. 122—130）
中阿含牟犁破群那經（昃七、48—49）

天　　音

『比丘等よ、諸天の中に時々三種の天音が起る。三とは何であるか。比丘等よ、聖弟子が、鬚髮を剃り落して、黃衣を着け、家を出でゝ家なき沙門とならんと欲する時、諸天の中に天音が起る。「この聖弟子は、惡魔と戰はんと欲す」と。比丘等よ、これが時々諸天の中に起る第一の天音である。比丘等よ、次に又聖弟子が菩提の因分たる七法（四念住、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分、八正道の修習(つとめ)に專注してゐる時、諸天の中にこの天音が起る。「この聖弟子は惡魔と共に戰つてゐる」と。比丘等よ、これが諸天の中に時々起る第二の天音である。比丘等よ、次に又、聖弟子が諸漏を滅ぼし盡し無漏の心解脫慧解脫を現法に於て自ら實證し實現して住する時、この天音が諸天の中に出づる。「この聖弟子は戰に勝つた。彼は戰場に勝利を占めてゐる」と。比丘等よ、これが諸天の中に時々起る第三の天音である。比

丘等よ、この三種の天音が時々諸天の中に起るのである。

Iti-vuttaka p. 75.

天人の五衰

比丘等よ、天が天身を沒せんとする時には、五種の前相が顯はれる。花鬘が萎み、衣が汚れ、腋の下に汗が流れ、身體に臭氣が生じ、自分の天の住處を喜ばなくなる。比丘等よ、この時諸天は死せんとするはこの天子であると知つて、三つの語を以て勵ます。「君よ、善き所に行けよ。善き所へ行いて、善き所得を得よ、善き所得を得て、其處に確立してあれ」と。

かく曰はれて、或る比丘は世尊にこのやうに申し上げた。『世尊諸天が善き所と考へてゐるのは何處でありますか。諸天が善き所得と考へてゐるのは何でありますか、諸天が、善き確立と考へてゐるのは何でありますか』。『比丘等よ、諸天は人間界を善き所と考へてゐる。人間であつて如來の說き給ふ敎法と、戒律に信を得る。これを諸天は善き所得と考へてゐるのである。その信が固着し、根が生て確立し、堅固にしていかなる世界に於ける沙門婆羅門諸天、惡魔、梵天に依つても動亂せられない。比丘等よ、諸天はこれを善き確立と考へてゐるのである。

Iti-vuttaka p.p. 76-77

法を見ざれば我れを見ず

『比丘等よ、比丘あつてたとへ、僧伽梨の裾を取つて、私の後に從ひ、私の足跡を踏んで來ても、彼にして若し貪欲にして、烈しい欲情を有し、心怒り、おもひ汚れ、忘念にして不正心、寂靜ならず、心亂れ、感官を制御してゐなければ彼は私から遠い、私も亦彼から遠い。そは何故なれば、丘比等よ彼の比丘は法を見ないからである。法を見ないものは私を見ないからである。比丘等よ、その比丘がたとへ、百由旬離れて住んでゐても、彼にして貪欲ならず、烈しい欲情を抱かず、心怒らず、おもひ汚れず、正心正念にして、寂靜、心一點に集中し、感官を制御してあれば、彼は私の傍にゐるのである。私も亦彼の傍にゐるのである。そは何故なれば、比丘等よ、彼の比丘は法を見るからである。法を見るに依つて私を見るからである。

Iti-vuttaka p. 91

汝等は法の相續者なり

こは世尊の宣ふ所、阿羅漢の宣ふ所と私は聞いてゐる。

『比丘等よ、私は乞ふものに施し、いつにても施すに用意あり、最後身を持てる婆羅門である。無上の大醫手術師である。汝等はその私自身の子、口より生じたるもの、法より生じたるもの、法より化作したるものにして法の相續者である。財の相續者ではない。比丘等よ、茲に二種の施がある。財施と法施である。この二種の施の中、法施が勝れてゐる。比丘等よ、茲に二種の捨がある。財捨と法捨である。この二種の捨の中、法捨が勝れてゐる。比丘等よ、茲に二種の資助がある。財の資助と法の資助である。この二種の資助の中、法の資助が勝れ

てゐる。比丘等よ茲に二種の供犧がある。財の供犧と法の供犧である。この二種の供犧の中、法の供犧が勝れてゐる。

Iti-vuttaka p. 101.

下流の湖の喩

『比丘等よ、喩へば、人あつて、河の流れに、樂しく面白さうに浮んで行くとする。それを眼ある人が岸に立つて、これを見てこのやうにいふ。「君は何故さう樂しく面白さうに河の流れに浮んで行くのか。下の方には波が立ち、渦があり、鰐魚と藥叉の住む湖がある。君は其處へ着いて、死か或は死ぬ程の苦しみに遇うであらう」と。比丘等よ、その時、彼はその人の聲を聞いて、手足を以て流を過ぎらうとつとめるであらう。比丘等よ、私の說いたこの喩は義を知らしめんがためである。さうしてこれがその義である。比丘等よ河の流れといふは渇愛の名である。比丘等よ、樂しさうに面白さうにといふは、六內處の名である。比丘等よ、下流の湖といふは、五下分結の名である。比丘等よ、波立つてゐるとは、忿と惱の名である。比丘等よ、渦があるとは、五欲の名である。比丘等よ、鰐魚と藥叉が住むといふは、女の名である。比丘等よ、流れを橫切るといふは、出離の名である。比丘等よ、手足を以て勤めるといふは、精進の名である。比丘等よ、岸に立つ眼ある人とは、如來應供等正覺者の名である。

Iti-vuttaka p.p. I13–115

世間の幸福と禍と離脫

比丘等よ、私は未だ菩提を得ずして、菩薩であつた時に、この樣に考へた。

「世間の幸福とは何であるか、禍とは何であるか。この禍から如何にして脫れることが出來るであらうか」と。

比丘等よ、私はつゞいて考へた。「この世に於て、樂と喜とを起さしむるものが、この世界の幸福である。この世が無常苦惱轉變の法であると曰ふことが、この世の禍である。この世に於て欲望貪欲を制御し廢棄すれば、これがこの世からの離脫である。…………

比丘等よ、私はこの世間の幸福を探して步いた。さうしてこの世間の幸福に達して、そのあり丈けを智慧を以て見極めた。

比丘等よ、私はこの世間の禍を探して步いた。さうしてこの世間の禍に達して、そのあり丈けを智慧を以て見極めた。

比丘等よ、私はこの世間の離脫を探して步いた。さうしてこの世間の離脫に達して、そのあり丈けを、智慧を以て見極めた。

比丘等よ、私は斯くの如く、世間の幸福を幸福と、禍を禍と、離脫を離脫と、如實に知らない間は、私は天界魔界梵界を含む一切の世界、沙門婆羅門人民、一切の人天に對して、我は無上正等覺を成じたとは宣言しなんだ。

比丘等よ、私は斯くの如く、世間の幸福を幸福と、禍を禍と、離脫を離脫と、如實に知つた時、私は天界魔界梵界を含む一切の世界、沙門婆羅門人民、一切の人天に對して宣言した。

我は無上正等覺を成じた。私の心解脱は不動である。これは我が最後の生である。この外に再生はないとの智見が生じたと宣したのである。

比丘等よ、もし世間に幸福がないならば、衆生は世間に執着しない。世間に幸福があるから世間に執着するのである。比丘等よ、もし世間に禍がないならば、衆生は世間を厭はない、世間に禍があるから、世間を厭ふのである。比丘等よ、世間に離脱の法がないならば、衆生は世間を離脱しない。世間に離脱の法があるから、世間から離脱するのである。

比丘等よ、衆生にして世間の幸福を幸福と、禍を禍と、離脱を離脱と、如實に知らない間は、彼等衆生は、天界魔界梵界を含む一切の世界、沙門婆羅門人民、一切人天の世界から離脱せず、出離せず解脱せず、その境界を脱しない心を以て住するのである。

比丘等よ、衆生にして世間の幸福を幸福と、禍を禍と、離脱を離脱と、如實に知る時は、彼等衆生は天界魔界梵界を含む一切の世界、沙門婆羅門人民一切人天の世界から離脱し、出離し解脱して、その境界を脱した心を以て住するのである。

巴利增一阿含三の部 101-102 (Vol. I. P.P. 258-260)

音樂と舞踊と哄笑と

比丘等よ、音樂は聖律に於ては嘆きである。舞踊は聖律に於ては亂心である。過度に齒を出して笑ふは、聖律に於ては小供らしいことである。比丘等よ、それ故に音樂と舞踊とを止めよ、喜ばしいことがあるならば只微笑むに止めよ。

巴利增一阿含三の部 103 (Vol. I. P. 261)

三　法　印

比丘等よ、如來のこの世に出で給ふ、出で給はぬに拘らず、このことは定まり、法として定まり、法として極つてゐるのである。「諸行は無常である」と。如來はこれを證り、これを知り抜き給ふ。これを證り、これを知り抜いて、「諸行は無常である」と示教し宣布し、審に說き、明かに教へ給ふのである。

比丘等よ、如來のこの世に出で給ふ、出で給はぬに拘らず、このことは定まり、法として定まり、法として極つてゐる。「諸行は苦惱である」と。如來はこれを證り、これを知り抜き給ふ。これを證りこれを知り抜いて、「諸行は苦惱である」と示教し宣布し、審かに說き、明かに教へ給ふのである。

比丘等よ、如來のこの世に出で給ふ、出で給はぬに拘らず、このことは定まり、法として定まり、法として極つてゐるのである。「諸法は無我である」と。如來はこれを證り、これを知り抜き給ふ。これを證りこれを知り抜いて、「諸法は無我である」と示教し宣布し、審かに說き、明かに教へ給ふのである。

巴利增阿含三の部 134. (Vol. I. p. 286)

阿那律の得果

或る時、阿那律尊者は、世尊の御側へ行いてこの様に申し上げた。

「世尊、私は屢々人間の肉眼に勝れた清淨な天眼を以て、婦人が死して後、苦所惡趣無樂所の地獄に落ち込むのを見ますが、婦人はどうして死んで地獄に落ち込むのでありましやうか」。

「阿那律よ、婦人は三法を具へてゐるから、死んで地獄に入るのである。三法とは、阿那律よ、婦人は朝は、慳(やぶさか)の汚れに心を捕はれて家にとゞまり、日中は嫉妬に心を捕はれて、家にとゞまり、夕暮には欲情に心を捕はれて家に居ることである。阿那律よ、婦人はこの三法を具へて、死後地獄に入るのである」。

他の時、阿那律尊者は、舍利弗尊者の處へ行いて、挨拶を交した後で、この樣に曰つた。

「我が友、舍利弗よ、今日では、私は人間の肉眼に超ゐ勝れた清淨な天眼を以て、千世界を見渡すことが出來ます。私の精進は不屈不撓であります。私の樹立した正念は不動であります。身體は寂かに暢かにして動搖なく、心は一點に集中して靜まつてゐます。しかも、私の心は取着を離れ、諸漏より脱れることが出來ません」。

舍利弗はこれに答へて、次の如く敎へた。「我が友、阿那律よ、卿が『私は人間の眼に超ゐ勝れた清淨な天眼を以て千世界を見渡す』といふは、それは卿の慢心である。阿那律よ、卿が『私の精進は不屈不撓である。私の樹立した正念は不動である。身體は寂かに暢かにして動搖なく、心は一點に集中して靜まつてゐる』といふのは、それは卿の掉擧である。阿那律よ、又卿が『それに拘らず、私の心は取着を離れて、諸漏より脱れることが出來ない』と云ふはそれは卿の悔である。もし尊者阿那律にして、これらの三法を離れ、これらの三法を思はずして、不死界に心を運ばれたならば、誠に結構である」と。

それから後、尊者阿那律は、これらの三法を離れ、これらの三法を思はずして、ひたすらに不死界に心を運んだ。彼は獨り人々を離れて住み、熱心に誠實に住ゐ、遠からずして、正しく、良家の子が、家を出てゝ家なき沙門となる目的の、無上の梵行の終を、この現在に實現實證して住し、生は盡き、梵行は成就し、成すべきことは成し遂げ、これより外の生はないといふ智見を生じた。尊者阿那律はかくて阿羅漢となつたのである。

巴利增阿含三の部 127, 128 (Vol. I. p.p. 281-282)

安　　眠

世尊が阿臈毘(アーラーヰ)の、牛の通ふ道に當るシンサパ林にて木の葉を布いてゐ給ふた時のことである。阿臈毘人波吒迦(ハツタカ)は、森の中を逍遙ひ歩いてゐて、世尊の林の中に木の葉を布いてゐ給ふを見奉り、世尊を禮して、一面に座し、世尊にこの樣に申し上げた。

「世尊、昨夜は快く御眠りになりましたか」。

「公子よ、その通り私は快く眠りを取つた。私はこの世に於て快く眠るものゝ一人である」。

「世尊、冬の夜は寒くあります。中間の八日(摩祛月 Māgho の終四日と、頗勒窶拏月 Thagguna の初め四日)は霜の降る時であります。大地は牛が踏み締めた樣に堅くなつてゐます。それに木の葉の敷物は薄く、木々の枯葉はがさ〻〻震いてゐます。黄衣は冷たく、季節の風はピユウ〻〻寒く吹いてゐます。それに拘らず、世尊は、公子よ、私は快く眠りを取つた。私はこの世に於て快く眠るものゝ一人であると仰せられました」。

「公子よ、それでは私が問を掛けるから、思ふやうに答へるが善い」。

「公子よ、汝は如何に考へるか。茲に家主又は家主の子の層樓の家があつて、內も外も強く塗り堅められ、風の吹き込む隙間もなく、戶を閉め窓を閉めてあるとする。其處には臥榻があつて、長い毛の房々した毛氈を掛け、白氈を掛け、花模様の織込みの毛氈を掛け、カーダリ羚羊の美しい褥を布き、上には傘蓋をつるし、兩端の紅い枕を置き、テーラ油の燈がともつてゐる。その上、四人の妻妾が彼を慰める爲に侍してゐる、とする。公子よ汝は如何に考へるか。その人は樂しく眠るであらうか」。

「世尊、その人は樂しく眠ります。彼はこの世に於て樂しく眠るものゝ一人であります」。

「公子よ、然し、汝はどう思ふか。その家主又は家主の子は、身心に貪欲生の熱氣を生じて、その熱氣の爲めに寢苦しいことはないであらうか」。

「世尊、その通りであります」。

「公子よ、この家主又は家主の子が、その熱氣に燒かれて寢苦しむその貪欲を、如來は棄て離れ、根抜きにし、頭を切られた多羅樹の樣に未來不生の法としたのである。それで私は樂しく眠るのである」。

「公子よ、汝は如何に考へるか。かの家主又は家主の子は、瞋恚及び愚痴より生ずる熱氣を身心に生じて、その熱氣の爲に燒かれて寢苦しまないであらうか」。

「世尊、その通りであります」。

「公子よ、この家主又は家主の子が、その熱氣に燒かれて寢苦しむ瞋恚と愚痴を、如來は棄て離れ、根抜きにし、頭を切られた多羅樹のやうに、未來不生の法にしたのである。それで私は樂しく眠るのである。

欲に汚れず、
煩惱を滅ぼせし婆羅門は、
よろづの願望(ねがひ)を斷ち、
心平安に達して、
依を離れ淸涼にして、
常に樂しく眠る。
胸の怖れを離れ、
靜かにして樂しく眠る。

巴利增阿含三の部 34 (Vol. I. p.p. 136-188)
增阿含二〇 (昃一、95)

沙門現在の果報

或る時、世尊は王舍城の耆婆所有の菴婆林に、千二百五十人の大比丘衆と共に御住ゐなされてゐた。

その時、摩揭陀の王にて、希提希の子なる阿闍世王は、第四月の十五日布薩の日、卽ち「水蓮の滿月の夜」(Komudi)、數多の大臣に圍繞せられて、高樓の階上に座してゐた。さうして(月の美しさに)次の歡びの偈を歌うた。

友よ、樂しや月あかき夜、
麗はしや、友よ、月明かき夜、
幸多きかな友よ、月明かき夜。
美しや友よ、月明き夜、
心よしや、友よ、月明かき夜、

と「今宵、沙門婆羅門の中、誰を尋ねやう。私の心が(この上にも)歡ぶやうに誰を尋ねやう」と。

((その時、大臣達は代る〳〵、六師外道を訪ひ尋ねるやうに勸めたが、最後に耆婆の勸めに依つて、五百の女象に宮女達を乘せ、自らは龍象に跨りて、松明を持たせて、簿鹵肅々として耆婆の菴婆林に向つた))。

やがて菴婆林に近づいて、阿闍世王は恐怖に囚はれ、毛髪を竪立たせ、戰慄を禁じ得ず、耆婆にこのやうに曰つた。「耆婆よ、おまへは私をだまして敵に與へるのではあるまいね。千二百五十人の大比丘衆がゐると云ふのに、嚏(くさみ)や咳(せき)の音もなく。何の音もしない」。

「恐れ給ふな、陛下、私は陛下を欺し、裏切るものではありません。御進みなさい。あの阿屋に燈がともされてゐます」。

阿闍世王は象で行ける所まで進み、象を下れて、歩行にて阿屋の傍へ近づき、耆婆を顧みて尋ねた。「耆婆よ、世尊は何處に在ますであるか」。

「あの方が世尊であります。眞中の柱の傍に東面して座り、比丘達に圍まれて居給ふ方が世尊であります」。

阿闍世王は、世尊の御傍へ近づいて一面に立ち、清明な湖の様に、寂然として座つてゐる比丘衆を眺めまわした。さうして思はず叫んだ。

「あゝ、我が子、優陀夷跋陀羅が、この比丘達の持つてゐるやうな、靜かさを持つてゐたらばなー」。

「陛下よ、陛下は陛下の愛するものに思ひを遣らるゝのでありますか」。

「世尊よ、私は皇子優陀夷を愛します。それで私は、皇子がこの比丘達の持つてゐる靜かさを持つてゐたらばと思ふのであります」。

かくて、阿闍世王は世尊を禮し、比丘等に合掌して、一面に座し、世尊にこの様に申し上げた。「世尊、世尊にして若し許しを御與へ下さるならば、私はある事に就いて御問ひ申したいことがあります」。

「陛下よ、望みの儘に御尋ねなさい」。

「世尊、此の世には種々な職業があります。例へば象師、騎手、御者、弓術師、旗手、士官、兵糧方、王家の出の士官、戰士、突撃者、鹿皮をつけた戰士、奴隷、料理人、理髪師、湯番、カレー料理人、花屋、洗濯人、織工、籠職人、陶工、簿記者、印鑑師等であります。これら、又はこの外の職業がありますが、總て彼等は現在に目に見ゆる報酬を得て居ります。その職業に依つて、自分と父母と妻子と友人とを幸福にし滿足させてゐます。又沙門婆羅門に對して、高い目的(めあて)のある布施、卽ち天界に生れさせ天界の善果を得せしむる布施を致します。世尊は沙門にはこの様な現世に於て目に見ゆる果報があることを御說きなされることが出來ましやうか」。…………

「大王よ、陛下は何と考へられますか。此處に陛下の宮廷の人々の中に、一人の奴隷があつて、陛下に奉仕し、早く起き遲く寢れ、陛下の仕事を何時でも出來るやうに用意し、陛下に愉快を與へる様に働き、柔和な語を語り、陛下の御顏色を伺つてゐるとします。其の奴隷がこの様に考へます。「功德の果報は何といふ奇特不可思議のものであらうか。この王も人であり、私も人である。然るにこの王は五欲の樂しみに身を浸し樂しんでゐられる。丸で天の如しである。然るに私は王の奴隷であり、下僕であり、早く起き遲く寢れ、何時でも仕事の出來る様に用意し、樂しみを與へるやうに仕事をし、柔和な語を語り、主人の顏色を伺つてゐ

る。私はこれから功德を積まう。鬚髮をおろし、黃衣を着け、家を出でゝ家なき沙門となるであらうと。彼はかくして出家をなし、身口意を制し、只食と家とを得て滿足し遠離して住します。それを人あつて陛下に告げます。陛下、御承知でありますか、陛下の奴隸が出家となつて、身口意を制して只食と家とを得て滿足し、遠離して住してゐますと。これを聞いて、陛下はこう曰はれるでありましやうか。その男を來させて、今一度奴隸にせよと」。

「世尊、さうではありません。私は彼を尊敬して座より立つて迎ひ、彼を請して座に卽かしめ、衣食住藥その他の用具を供養し、法に依る保護を滯りなく致すでありましやう」。

「陛下よ、それでは、これが現世の目に見ゆる沙門果でないでしやうか」。

「世尊、確にこれは現世の目に見ゆる沙門果であります」。

「陛下よ、これが私の云ふ現世の目に見ゆる沙門果の第一であります」。

「世尊、この外に、この樣な現世の目に見ゆる沙門の果報を示すことが出來まするか」。

「陛下よ、出來ます。茲に農業をして稅を拂ひ、王の富を增してゐる家主があるとします。彼もその奴隸の如く考へ、奴隸の如く行つて同じい結果に達します」。

「世尊、世尊はこの果報よりも、もつと勝れた、もつと善い現世の沙門果を示すことが出來ますか」。

「陛下よ、出來ます。陛下よ、諦に聽いて善く注意をなさい。私は說きましやう」。

「かしこまりました」と阿闍世王は答へた。世尊は說き出し給うた。

「陛下よ、如來がこの世界に出現し給ふ。應供、等正覺、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊に在ます。如來は天界魔界梵界、沙門婆羅門人民を含む一切世間を、自ら知り自ら證りて他に敎へ給ふ。如來は初中後共に美しく、文義共に具足したる法を說き、圓滿淸淨の梵行を示し給ふ。

この法を家主又は家主の子、或はもつと下賤の生れの者が聞いて、如來に信心を起す。さうしてこの樣に考へる。俗家の生活は障りに滿ち、塵の小道である。出家の生活は大空の樣に自由である。俗家にゐて、一向に淸淨圓滿完全の梵行を行ずることは謂れなきことである。寧ろ鬚髮を剃除して、黃衣をつけ。家を出でゝ家なき沙門とならうと。かくて彼は多少の富と親戚の者とを捨てゝ出家となる。

彼はかく沙門となりて、波羅提木叉に身を制して住する。善行正行を具へ、小罪にも恐れを見、學則を受持し、學足に身を制し、身口共に善業を具へ、生活法を淸淨にし、戒を守り、感官の戶を守り、食するに量を知り、正心正念を具し、滿足してゐる。

大王よ、比丘が戒を守るとは如何なることか。茲に比丘ありて、殺生を止め、殺生を離れ、杖を棄て刀を棄て、粗暴を耻ぢ仁に滿ち、總ての衆生を愛憐して住する。これがその戒の一分である。偸盜を止め偸盜を離れ、與へられたるものを取り、與へられるを待ち、正直に心を淸からにして住する。非梵行を離れ、梵行をなし、卑しき所行なく、淫を遠離する。

妄語を止め妄語を離れ、眞實の語を語り、決して眞實から迷ひ出でず、至誠にして誠實、世間を誑ろかさない。讒謗を去り讒謗を離れ、人々の間の爭を起すやうに、此處で聞いて彼處に話し、彼處に聞いて此處に語ると云ふことをしない。分れてゐる人々の和解者、融會者にして、和合者に勇氣をつける人、平和の作り手、平和を愛し喜ぶ人、平和を作る語を語る。…………(以下種々の戒を出す)。

大王よ、その比丘はこのやうに戒を具へてゐるから、戒にて身を制してゐるといふことに就いては、何處にも恐れを感じない。喩へば灌頂をした刹帝利の王が、敵を降伏し終つて、敵に就いては、何處にも恐怖を感じないと同じである。彼はこの聖戒蘊に依つて、内心に混りなき樂を經驗する。

大王よ、比丘は如何にその官能の戸を守るか。大王よ、比丘は目を以て物を見ても、その相を取らず隨相を捕へない。眼根を制御しないで住する時に生じて來る貪欲、不快、惡不善が從つて來ない樣に、眼根を制し守つてゐる。耳鼻舌身意共に眼の場合と同樣である。彼はこの神聖な官能制御を具へて、惡の交はることなき樂を内心に經驗する。

大王よ、比丘が正心正念であるとは如何なることであるか。大王よ、茲に比丘は行くにも歸るにも正念に、前を見、周圍を眺むるにも正念に、手を屈け手を延すにも正念に、衣を着け鉢を取り、食べ飮み嚼み甜るにも正念に、大小便の用に立つ時にも正念に、行住坐臥覺醒の時、談話の時、沈默の時、正念によることである。大王よ、これが比丘が正心正念にゐるといふことである。

大王よ、比丘は如何やうに滿足してゐるか。大王よ、茲に比丘は、衣は身體を包めは足り、食は腹を滿たせば足り、それで滿足してゐる。さうして何處へ行くにも夫れ丈げで行くのである。喩へば鳥が何處へ飛ぶにも、翼一つを荷として行くやうに、比丘も、肉體を包む丈けの衣と、腹を滿たす丈けの食にて滿足して、何處へ行くにもそれで行くのである。

この神聖な戒蘊を持し、官能の制御をなし、正心正念を持し、神聖な明察をなし、尊い滿足を持つて比丘は、樹の下、山、谷、山洞、墓地、林の中、廣野、藁塲の閑居を擇ぶ。食後には鉢を傍に置いて、趺座して身を端しくし、念を正しうする。

彼は世間に對する貪欲を捨て、貪欲を遠離して住し、心を貪欲より清める。瞋恚の惡を棄て、瞋恚を遠離して住し、總ての生類を愛しいつくしみ、心を瞋恚より清める。惛眠を棄て、惛眠を遠離して住し、想(おもひ)輕く、注意深く、正心にて、心を惛眠より清淨にする。掉悔を捨て、騷狂を離れて住し、内に寂靜にして、心を掉悔より清める。疑を捨て、疑を超え、惑を離れ善法に對して心を疑より清める。

大王よ、喩へば、人あつて借金をして商賣を初め、成功してその借金を返し、猶妻子を養ふべき餘分が殘つて喜を得、滿足するが如く、

又喩へば人あつて、重い病に苦しみ、食物は消なれず、身體に力がなかつたのが、その病を離れ、食物は消なれ、身體に力を得て喜び滿足するが如く、

又喩へば、人あつて牢獄につながれてゐたのが、その監禁の縛めを脫れ、平安にして何の損害もなく喜び滿足するが如く、

又喩へば、身の自由を奪はれた奴隷であつて行きたい所へ行けなかつたものが、その奴隷の境遇を脫して、自由民となり、行きたい所へ行けるやうになつて喜び滿足するが如く、

又喩へば、富者が、多くの財寶を携へて、食物のない危險の多い、道の遠い荒野に入り、後、其の荒野を出てゝ、安全に平安に危險に遇はずに自分の村に歸つて喜び滿足するやうに、

大王よ、丁度その樣に、比丘はこれらの五蓋のある中は、自分を債務者、病人、囚徒、奴隷、荒野にさ迷ふものゝ如く見る。大王よ、これらの五蓋のなくなつた時、比丘は自分を債務を離れたもの、病の癒つた人、牢獄を出てたるもの、自由民、安全の人と眺めて、喜びを

生じ愉悅を生じ、從つて身體が暢(のびや)かになり、心が靜まつて定に入る。彼は欲を離れ不善を離れ、有覺有觀の離生喜樂の第一禪に入つて住する。彼の身體は遠離より生ずる喜樂に浸り透り滿たされる。彼の身體全體の中にこの遠離から生ずる喜樂の滿ち々々ない處はない。

大王よ、喩へば巧みな洗湯屋又は洗湯屋の丁稚が金屬の壺に、洗湯に用ゆる香粉を入れて、一滴づゝ水を注ぐとする。夕方になつて、その洗湯の石鹼玉が水滴を含み、水滴を吸ひ、内も外も水滴に滿たされて少しも流れ出ない。大王よ、この樣にその比丘の身體は遠離から生ずる喜樂に浸り透り滿たされ、身體の何處にもその喜樂の滿ち充ちない處はないのである。大王よ、これが比丘の現世の果報であり、先の現世の果報よりも勝れて微妙な果報である。

大王よ、比丘は更に進んで覺と觀とを靜め、内喜一心無覺無觀定生喜樂の第二禪に入つて住する。彼の身體は定より生ずる喜樂に浸り透り充ち、身體中、この定生の喜樂に滿たされぬ處はない。

大王よ、喩へば深い湖があつて、絕えず泉から水を湧き出してゐる。そしてその湖には東西南北共に水の入口がない。天は雨を降らさない。この時、この湖はその泉から湧き出る冷たい水で浸つて一杯に充ち滿つる樣に、その比丘の身體の何處にも定生の喜樂が滿ち充たない處はないのである。これが現世の沙門の果報であり、先きの現世の果報よりも勝れた微妙な果報である。

大王よ、比丘は更に進んで、喜を離れ捨念に住し正心正念に一身に、賢聖の所謂「捨に住し正念なるものは樂に住む」と云ふ樂を覺え、第三禪に入つて住する。彼はこれに依つて、(荒々しい)喜のない樂に浸り透り充ち、身體中この喜のない樂に滿たされぬ處はない。

大王よ、喩へば青蓮紅蓮白蓮の池があり、その蓮は水中に生じ、水中に生長し、水中より出でず、水の底から滋養を得、その頂から根まで、冷たい水で浸り透り滿つる樣に、その蓮の何蓮にも冷たい水の滿ちない處はないと同じである。これが沙門の現世の果報であり、先の現世の果報より勝れた美しい果報である。

大王よ、比丘は更に進んで、樂を捨て苦を捨て、前の喜と憂とを滅ぼし、不苦不樂捨念淸淨の第四禪に入つて住する。彼はその身體を淸淨と透明の感で滿される。全身何處もこの淸淨と透明の感に滿たされぬ處はない。

大王よ、喩へば人あつて白淨の衣を頭から被ぶつて坐し、全身何處も白淨の衣に包まれぬ處はないと同じである。これが沙門の現世の果報であり、前の現世の果報よりも勝れた微妙な果報である。

彼は斯くして、寂靜淸淨透明にて欲情を離れ罪の汚れを去り、從順にて何時にても働く用意あり、堅固にて何物にも煩はされない心を以て、知見に向けて働かす。さうしてこの樣に知る。この身體は物質である。四大所造である。父と母との所產である。飯と汁菜との積集である。無常、斷滅、破壞の法である。私の識も亦、これに依り、これにくゝられてゐる。

大王よ、喩へば、玆に水晶の玉がある。光輝あり、質が良く、八角にて、切り方も善く、透明淸徹にて少しの疵もなく、何の點に於ても勝れてゐる。これに青、黃、赤、白、橙の糸を通す。それを眼ある人が、手に取つて眺むれば、これは水晶の玉である…………これに青、黃、赤、白、橙の糸が通してあると知る。丁度このやうに、比丘が寂靜淸淨透明にて、欲情を離れ、罪の汚れを去り、從順にて何時にても働く用意あり、堅固にて何物にも煩はされな

い心を以て、知見に向けて働かせば、この身體は物質である。四大所造である。父と母との所産である。飯と汁菜との積集である。無常斷滅破壞の法である。私の識もこれに依り、これにくゝられてゐると知るのである。大王よ、これが比丘の現在の果報であり、先の果報よりも勝れた美しい果報である。

次に彼はこの寂靜淸淨…………何物にも煩はされない心を以て心所成の身を化作せんと働かする。彼はこの身體から、他の身體を化作する。色ありて意所成であり、總て四肢を具へ、感官も皆缺ける所がない。

大王よ、喩へば、人あつて、葦を莖から引き出し、劍を鞘から拔き、蛇を脫皮（かは）から拔く、彼はこれは葦、劍、蛇、これは莖、鞘、脫皮と知り、葦、劍、蛇は一つのもの、莖、鞘、脫皮は一つのもの、葦、劍、蛇は莖、鞘、脫皮から引き出したものと知る樣に、この身體は、他の身體から化作したもの、色を有し、意所成にて、總て四肢を具へ、感官も缺ける所はないと知る。大王よこれが比丘の現世の果報であり、先の現世の果報よりも勝れた微妙な果報である。

彼は又この寂靜淸淨…………何物にも煩はされない心を以て、種々の神通に向けて專注する。一であつて多となり、多であつて一となり、姿を顯はしては姿を沒し、壁、壘、山を貫いて障碍なきこと空を行くが如く、大地に出入すること水中の如く、水を割らずして行くこと大地の如く、趺坐して空中に停まること翼ある鳥の如く、かの大威力ある日月をも手を以て捫摸し、梵界へさへ此の肉身を以て行くのである。

大王よ、喩へば陶工又は陶工の弟子が、善く用意をして置いた土塊から、自分の思ふいかなる形の壺でも作ることに成功するが如く、又喩へば巧みな象牙彫又は象牙彫の弟子が、善く準備をした象牙から、自分の思ふ種々の形の象牙細工を作るに成功するが如く、金細工人又はその弟子が、よく整へた黃金から、自分の欲する種々の金細工を作るに成功するやうに、大王よ、この比丘は種々の神變を現ずる。これが比丘の現世の果報であり、先きの現世の果報より勝れた微妙な果報である。

彼は又この寂靜淸淨…………何物にも煩はされない心を以て、天耳に向けて專注し、淸澄な人間の耳に勝れた天耳を以て、天音、人音、遠い音、近い音すべてを聞く。大王よ喩へば、人あつて公道を行き、鑼鼓、小鼓、法螺貝、角鼓、大鼓の音を聞いて、聞き分けるやうに、天耳を以てすべての音を聞く。大王よこれが比丘の現在の果報であり、先の現世の果報より勝れた微妙な果報である。

彼は又この寂靜淸淨…………何物にも煩はされない心を以て、他の人の心を知るに向けて專注し、…………すべての他の心を知る。大王よ、喩へば若は怜悧な男又は女が、淸らかな輝いてゐる鏡なり、澄んだ水器に顏を寫して、黑子（はくろ）のあるのはありと知り、ないのはないと知る如く、他人の心をすべて知る。大王よ、これが比丘の現世の果報であり、先の現世の果報より勝れた微妙な果報である。

彼は又寂靜淸淨…………何物にも煩はされない心を以て宿命の知識に向けて專注し、…………前生のことを詳かに知る。大王よ喩へば、人あつて自分の村から他の村へ行き、又別の村へ行き、それから自分の村へ歸つて、あの村では、この樣に立ちこの樣に坐り、この樣に語りこの樣に默つてゐた。あちらの村では、この樣に立ちこの樣に坐り、この樣に語りこの

樣に默つてゐた。それから自分の村へ歸つて來たと知る樣に、宿世のことを詳かに知るのである。大王よ、これが比丘の現世の果報であり、先の現世の果報よりも勝れた微妙な果報である。

彼は又この寂靜淸淨…………何物にも煩はされない心を以て、衆生の死生の知識に向けて專注し、…………衆生の死生を一々に知る。大王よ、喩へば眼ある人あつて辻の眞中の高臺に立つて、人々の家に出入し、車にて街路を往來し、辻の眞中に坐するを見て、その樣に知るが如く、衆生の死生を一々に知る。大王よ、これが沙門の現世の果報であり、先の現世の果報よりも勝れて微妙な果報である。

彼は又次にかくの如く寂靜淸淨…………何物にも煩はされない心を以て、漏の滅盡の知識に向けて專注し、如實にこれは苦、これは苦の因、これは苦の滅、これは苦の滅に至る道、これは漏、これは漏の因、これは漏の滅、これは漏の滅に至る道と如實に知る。斯く知り斯く見ることに依つて彼の心は欲漏から脫し、有漏から脫し、無明漏から脫する。かくの如く解脫して、解脫したといふ知識が生ずる。生は盡きた。梵行は成就した、なすべきことは成し終つた。この生の後に他の生は受けないと知る。大王よ、喩へば山の頂の平地にある淸澄透明の湖の岸に立つて、眼ある人が、牡蠣、貝殼、石、小石及び泳いだり、立ち停つたりしてゐる魚の群を眺めて、これは淸澄透明な湖である、其處に牡蠣、貝殼、石、小石及び魚の群がゐると知るやうに、彼は漏盡を知る。大王よ、これが比丘の現世の果報であり、先の現世の果報より勝れた微妙な果報である」。

かく語られて、摩揭陀の王にして、韋提希の子、阿闍世王は世尊にこの樣に申し上げた。「世尊、最勝であります。世尊最勝であります。世尊は、喩へば倒れたるを起し、隱れたるを顯はし、迷へるものに道を示し、眼あるものに物を見るやうに暗黑に光をもたらすやうに種々の法を示されました。世尊、私は世尊と法と僧伽とに歸依をいたします。世尊、今日以來生涯、歸依する優婆塞として私を納れて下さい。罪は私を打ち敗かしました。世尊、私は主權の事から、正法の人、正法の王なる私の父を弑するやうな不信愚暗の善からぬ奴でありました。世尊、私は世尊が、私のその罪を罪と知つて、この以後犯すことなきことを領受して下さるやうにお願いたします」。

「大王よ、陛下は實際、罪に打ち敗かされ、正法の人、正法の王なる父を弑する樣な、不信暗愚な不善の人でありました。然し大王よ、私はその罪を罪と見て、法に依つて悔い改めるならば、私はその罪を受け入れるでありましやう。大王よ、罪を罪と見て、法に依つて悔い改め、以後その制抑に入るは聖者の律に於ける利益であります」。

かく日はれて阿闍世王は世尊にこの樣に申し上げた。「世尊、今私達は御暇いたしたいと存じます。私達は多忙で、仕事が澤山ありますから」。「大王よ、そればは陛下のよろしきやうに」。阿闍世王は、世尊の御語に歡喜し、座より立ち世尊を禮し、右に繞つて去つた。

世尊は阿闍世王が去るや、比丘等を呼び掛け給うた。「比丘等よ、王は非常に感激した。もしも王にして正法の人、正法の王なる父王を弑さなんだならば、王は今此の座に於て、欲垢を離れ天眼を生じたであらう。

巴利長阿含第二沙門果經 (Vol. I. p.p. 47-86)
同本長阿含卷一七（昃九、87-89）

現在の果報ある法

或る時、一婆羅門、世尊にこの樣に申し上げた。

「喬答摩よ、あなたは現世に果報のある法さ曰はれるが、如何樣に現世に果報があるのでありますか、如何樣に、直接の結果があり、來り見よさ他を呼びて示し得べき、心に持つ價値あり、識者の銘々知るべき法でありますか」。

「婆羅門よ、貪欲、瞋恚、愚痴に燃やされ、打ち勝たれ、捕へられた心は、自害を思ひ、害他を思ひ、自他兩害を思ひ、心の中に苦惱、憂慼を覺ゆる。貪欲、瞋恚、愚痴を去れば、自害を思はず、害他を思はず、自他兩害を思はず、心の中に苦惱、憂慼を覺ゆない。婆羅門よ、この法は斯くの如く現世に果報のある法である。直接の結果あり、來り見よさ他に示し得べき、心に持つ價値あり、識者の銘々知るべき法である」。

巴利增阿含三の部 53 (Vol. I. p.p. 156–157)

舍利弗尊者の遺偈(上座偈)

舍利弗尊者は或る日自督を述べて左の如く歌はれた。

如實に行ひ、如實に思ひ、　正念を失はず、心行共に放逸ならず
內に樂しみ、心よく靜まり、　獨に滿足(みちたら)へるをこそ比丘さいふべけれ。(九八一)
濕めりたる食、又は乾ける食を取りて、　甚しく飽くに至らず、
腹に滿たず、食に量あり、　比丘よ、正念に出家の行を守れ。(九八二)
四五口の食を取りて、　水を飮めよ。
これにて、熱心なる比丘の、　平安に住はんには足らん。(九八三)
自己に相應しく、　その目的に契ふのみの衣を受く。
これにて、熱心なる比丘の、　平安に住はんには足らん。(九八四)
跏趺して坐するに、　雨、その膝を濕らすに至らず、
これにて、熱心なる比丘の、　平安に住はんには足らん。(九八五)
樂さ苦さ見、　苦を失さ見、
この兩端に我々所を執ぜざれば、　何物か世に如何にこの人を停めん。(九八六)
我れに惡欲なく、　怠らず、精進の力乏しきことなく、
寡聞なることなく、惡しき行なくば、　何物か世に如何に我を停めん。(九八七)
多聞にして、智慧あり、　戒に善く身を攝め、
心の靜かなる樣勤むる人ならば、　我れ我が頭の上にも立てたし。(九八八)
調戲を事さし、　調戲を樂しむ獸(の如き)人は、
無上の安穩、　涅槃を得ることを能はず。(九八九)
調戲を離れ、　調戲なきを樂しむ人は、
無上の安穩、　涅槃を得べし。(九九〇)

○

或る時、尊者は、その弟、離波陀(レバタ)の住む、アカシヤさ荊棘が繁り、水なき林を見て、次の二偈を以て、之を勵まされた。

村にもあれ、林にもあれ、　又窪地(くぼち)なりとも、陸地(くがち)なりとも、
阿羅漢の住み給ふ所は、　愛すべき地なり。(九九一)
人々の樂しまぬ所なれど、　林は樂し。
樂欲を求めざる、　離欲の人は、其處に樂しむ。(九九二)

○

婆羅門羅陀(ラーダ)は尊者に導かれて、教團の人となつた。或る時遊行に出で、羅陀の優しき行持を見て左の詩を以て、之を勵ました。

過失(あやまり)を示し、　咎むる賢者を見なば、
伏藏(たから)を示す人の如くに、　これにつかへよ。
かゝる人に事ふるは、　是にして、非あることなし。(九九三)

○

舍利弗の共住者であつた阿說示(アツサヂ)は、プナバスと共に、迦尸(カーシ)のキターギリ邑に住みて、佛陀の教說を守らなんだ、舍利弗は目連と共に、佛命に依つて、赴いて教誨したが、彼等の聞く所とならなんだ。舍利弗はこの偈を歌うて去つた。

訓誨(いま)しめ、示教(おし)へ、　惡しき事より避けしめよ。
その人は善き人に愛され。　惡しき人に忌まれん。(九九四)

15

尊者の甥、長爪(デーカナカ)梵士が、歸佛する時の事であつた。人々は梵士が、その歸佛前に、長い修養の用意のあつた事を語つてゐた。舍利弗は、それを自分の身の上に引き取つて、只要は佛陀の教を熱心に聞くにあることを語つた。

有眼者、佛陀、世尊が、　他に法を說き給ひし時、
我れ義を求めて、　法を說き給へるに耳傾けぬ。(九九五)
我が法を聞けるは無益ならざりき。　我れは解脫して、無漏となりぬ。
宿命と天眼とは　(我が願に非ざりき)。(九九六)
衆生の死生を知ると、他心通と、
清淨の天耳通とは、　我が願にあらざりき。(九九七)

○

舍利弗は嘗て目連と共に、王舍城に近き、鳩洞(カポータカンダラ)精舍にあつた。月明の夜、頭を剃り立ての舍利弗が、露地に坐してゐると、一夜叉來つて、したゝかに、その頭を打つた。舍利弗はこれに動じなかつた。

髮を剃り、僧伽黎を纏ひ、　樹の下に坐し、
智慧第一の上座、　舍利弗は禪思す。(九九八)
無尋伺定を得たる、　正覺者の弟子は、
聖なる沈默(しじま)に依りて、　かくまで通達せり。(九九九)
巍然たる岩山の、　動かざる如く、
愚痴を滅ぼせる比丘は、　山の如く動かず。(一〇〇〇)

○

或る日、沙彌を連れて、乞行に出かけた途中、尊者の衣が少しはだけた。沙彌が注意をしたので、尊者は、これを謝して次の一偈を歌うた。

罪垢(けがれ)なく、常に、　　清淨を求むる人には、
毛の端程の惡も、　　虚空の大きさに見ゆるなり。(一〇〇一)

○

生死を超越せる境地を、左の二偈を以て顯はした。

我れは死を喜ばず、　　生をも願はず、
正心、正念に、　　この身を捨て去るべし。(一〇〇二)
我れは死を喜ばず、　　生をも願はず、
(務了りて)賃金を待つ雇人の如く、　　時の至るを待つ。(一〇〇三)

○

或る日の說法の後で、左の二偈を唱ひた。

兩端に死あり、　　前も後も死のあらざるなし。
勤め修めよ、失ふこと勿れ、　　瞬時(ごき)を空しく過すこと勿れ。(一〇〇四)
邊境の市(まち)の、　　內外共によく守らるゝが如く、
善く自己を守れ、　　時を空しく過すこと勿れ。
そは時過ぎなば、　　泥梨に墮ちて悲しむべければなり。(一〇〇五)

○

舍利弗は又、或る日俱稀羅尊者を見て、次の三偈を以て、その德を讃へた。

心靜かにして、安らかに、　　善き語(ことば)を語り、心、掉擧(あが)ることなく、
惡法を吹き散らす、　　風の樹葉(このは)を散らすが如し。(一〇〇六)
心靜かにして、安らかに、　　善き語を語り、心、掉擧ることなく、
惡法を拔き拂ふ、　　風の樹葉を散らすが如し。(一〇〇七)
心靜かにして、擾亂(みだ)さるゝことなく、　　罪垢(けがれ)を離れて、こゝろ澄み、
持戒美しく、賢き人は、　　苦惱を盡す人となるべし。(一〇〇八)

○

提婆達多が、佛陀に乖いて、敎團を去つた時、跋耆(ワツキ)の比丘等が、これに從つた。舍利弗は、佛命に依つて、その比丘等を敎悔し、敎團に引き戻したが、次の四偈はその時の偈である。

在家の人にも、出家にも、　　信賴すべからざる人あり、
初めは善にして、後に惡しく、　　惡しくして、更に善ならんとする人あり。(一〇〇九)
貪欲と瞋恚と、　　惛沈と掉擧と、
疑惑と、この五つは、　　比丘にとりて心の垢なり。(一〇一〇)
不放逸に住する人は、　　あがめらるゝも、
また毀しらるゝも、　　三昧より動かず。(一〇一一)
禪思して、心撓まず、　　微妙の見を抱きて止觀し、
取著を滅ぼすを樂しむ人、　　この人は善き人と日はる。(一〇一二)

○

次の偈は、佛陀と自分との關係を述べたものである。

大海も大地も、
山も蒼穹も、
師の勝れし解脱には、
比喩とならず。(一〇一三)
(師に)従ひて(法)輪を轉じ、
寂靜にして、大智ある上座は、
地と水と火の如く、
他を染めず、また、他に汚されず。(一〇一四)
智慧波羅密に達せる、
大覺、大牟尼は、
愚かの如くなれど愚かならず、
常に清涼に遊行す。(一〇一五)
我れは師を敬へ、
佛陀(ほとけ)の教説(おしへ)をなし遂げぬ。
三明に達し、
生有を受くることなし。(一〇一六)

○

その入涅槃の前に、自分の周圍に集まつた比丘等に左の遺偈を與へた。

不放逸にして果を成ぜよ、
これ我が教誡(おしへ)なり。
いざ我れ涅槃に入らん。
我はすべてより解脱を得たり。(一〇一七)

迦葉尊者の遺偈

群衆と連れ立ち、屢々在家を訪ふ比丘等を見て、左の誡めの偈が讀まれた。

群衆の長となりて遊行する勿れ。
心亂れ、三昧得難し。
衆の群がるを苦と見て、
群衆(の中に入る)を喜ぶなかれ。(一〇五一)
牟尼よ、人々の家に近づく勿れ。
心亂れ、三昧得難し。
盛んに味欲を貪る人は、
(眞(まこと)の)樂(たのしみ)運ぶ善利を無みす。(一〇五二)
在家の禮拜供養は、
沼の如しと曰はる。
細微(ほそ)き矢は抜き難く、
惡人の尊敬は捨て難し。(一〇五三)

○

衣食住と藥の四依に關して比丘等を勵ます偈。

(山の)住家を降りて、
市(まち)に入り、食を乞ひしが、
癩人の食を取れるを見て、
恭しく近づきぬ。(一〇五四)
くづれたる手にて、
食をつかみ、
我が鉢に入れしが、
指も亦(我が鉢に)落ちぬ。(一〇五五)
垣の根方に座り、
その食を取りぬ。
食べつゝも、また食べ終りても、
厭惡(いとひ)の情(こゝろ)、起らざりき。(一〇五六)
與へらるゝ食を取り、
腐尿を藥とし、
樹下を住居とし、
糞掃衣を衣とす。
これらを受用してこそ、
(眞に)「四方の人」たれ。(一〇五七)

○

晩年、「どうして尊者は年老いて、こんな岩山に毎日登ることが出來るのですか」と問はれて、次の四偈がその答である。

人々のよぢ登りて、
生命(いのち)を失ふものある岩山なれど、

佛陀の法嗣(ほさけよつぎ)、迦葉は、
神通力にて、
正心、正念、
悠然さして登る。(一〇五八)
迦葉は、市に食を乞ひ終り、
取着なく、
岩山に登りて、
恐怖(おそれ)を離れて禪思す。(一〇五九)
迦葉は、市に食を乞ひ終り、
取着なく、ものみな燃ゆる中に、
岩山に登りて、
清涼に禪思す。(一〇六〇)
迦葉は、市に食を乞ひ終り、
取着なく、なすべきこさを終りて、
岩山に登りて、
無漏にて禪思す。(一〇六一)

○

更に、人々に、「そんなら、尊者は何故にこんな岩山に住はるゝのか。竹林か又はそれに似た林が善いではないか」さ日はれて、次の十偈を唱ひた。

カレーリの花鬘(はなかづら)に蔽はるゝ、
大象の吼ゆる、
樂しき地、
樂しき岩山、我れを娛しましむ。(一〇六二)
色は雲の青きに似て美しく、
紅色の瓢虫(ひさごむし)集ひ掩ふ、
清涼の水を湛ね、
この岩山、我れを悅ましむ。(一〇六三)
碧雲の峯の如く、
大象の吼ゆる、
勝れし樓閣に例ぐふべく、
この樂しき岩山、我れを悅ましむ。(一〇六四)
雨にうるほひて樂しき山臺(うてな)、
孔雀の聲のこだまする所、
聖者の集ふ所、
この岩山、我れを悅ましむ。(一〇六五)
專心正念に、
專心に義利を求むる比丘、
禪を欲する我にはこれにて足る。
平安を求め、
我れにはこれにて足る。(一〇六六)
瑜伽を求めて專心なる、
專心なる比丘の我にはこれにて足る。
斯くの如き我にはこれにて足る。(一〇六七)
雲の空を蔽ふが如く、
亞麻の花、地を蔽ひ、
諸々の鳥群がる、
この岩山、我れを悅ましむ。(一〇六八)
在家の人々は來らず、
野の獸群れ、
空の鳥集ふ、
この岩山、我れを悅ましむ。(一〇六九)
澄める水あり、大いなる岩あり、
顏黑き猿さ鹿さ住み、
水草に蔽はれたる、
この岩山、我れを悅ましむ。(一〇七〇)
五種の樂器に依りては、
心を集中(あつ)め、
正しく法を止觀する人の、
かくの如き樂我れに起らず。(一〇七一)

○

在家の事を好む、施物を貪ぼる比丘等を誡めて、

多くの業(ごう)をなすこさ勿れ。
人々を避け離れよ。張り合ふこさ勿れ。
味欲を貪ぼり、その爲に勸めて止まざる人は、
(眞の)樂を運ぶ善利を無みす。(一〇七二)
多くの作業をなすこさ勿れ。
この不利を齎らすものを避けよ。

身體苦しみ勞れ、

苦しみて心靜まることなし。(一〇七三)

○

次の諸偈も或る場合の誡めである。

脣を動かすのみにては、
しかも首を堅くして遊行し、
愚かの人は自ら、
その心頑強(かたくな)なる人をば、
「我は勝れり」、
「我れは劣れり」、「我は等し」などの、
智慧ありて、如實に語り、
心、寂靜に至れる人を、
同學の中に、
正法より遙かなること、
常に正しく、
梵行を增進する人、
心、掉擧(あが)り、輕躁なる比丘は、
猿の獅子の皮をつくるが如く、
心、掉擧(あが)ることなく、輕躁ならず、
山洞の獅子の如く、

(眞に)我れを知り難し、
我れ優れたりと思へり (一〇七四)
勝れざるを勝れりと思へり。
識者は讃へず。(一〇七五)
「我は勝れることなし」、
憍慢に動かぬ人。(一〇七六)
戒によく身を攝め、
識者は讃ふ。(一〇七七)
尊敬を得ざる人は、
空の大地と離るゝが如し。(一〇七八)
慚と愧に止住し、
その人に生有盡きん。(一〇七九)
糞掃衣を纏ふも、
これに依りて輝くことなし。(一〇八〇)
愼深く、諸根を攝むる比丘は、
糞掃衣に依つて輝やく。(一〇八一)

○

或る夜、梵界の諸天が、下つて舍利弗を敬禮し、これを見たる劫賓那(カツピナ)が微笑せるを見て、左の五偈を歌うた。

これら多くの諸天は、
その數一萬、
賢にして、法の將軍たり、
舍利弗を拜して、
「歸命し奉る、生よき弗よ、
爾の禪思し給ふ所は、
諸佛の行處は深遠にして、
無髮を裂く智を有する、
かく、諸天が、應供者、
その時、劫賓那(カツピナ)に、

神通あり、名譽(ほまれ)あり。
すべて皆梵界の天なり。(一〇八二)
大禪者、大定者、
合掌して立てり。(一〇八三)
南無し奉る、最勝人よ、
我等が知る所に非ず」。(一〇八四)
不可思議なり。
我等集まるも知る所に非ず」。(一〇八五)
舍利弗を供養するを見て、
微笑顯はれぬ。(一〇八六)

○

次は、自身の事に就いて、大獅子吼した偈である。

佛陀の福田に於て、
頭陀の德に於て、我れ勝れり。
我れは師を敬へ、

大牟尼を除いては、
我れに及ぶものなし。(一〇八七)
佛陀の教說(おしへ)を成し遂げぬ。

重き荷をおろし、
喬答摩は、計量を超え給ひ、
蓮の水に汚れぬが如し。
念住を頭とし、信を手とし、
大智者は常に、
他の生有なし。(一〇八八)
衣と座臥と食とに汚されず、
意、出離に存し、三有を離れたり。(一〇八九)
智慧を頭とし、
清涼に遊行し給ふ。(一〇九〇)

(數字は上座偈の偈の番號なり)

第三編　僧　　伽

第一章　僧伽の意義及使命

佛陀を首とせる佛陀の弟子、比丘比丘尼の團體を僧伽 (Sangha) と稱す。僧伽は其の語意、單に集合 (Assembrage) を意味すれども、この集合は和合を生命とする團體なるが故に、和合團體 (Fraternity) と譯すべきものなり。

抑も佛弟子は、佛陀が屢々敎誨し給ひしが如く、自らを歸依とし自らを燈明とし、以て解脫の要道を修むべきものなるが、斯くの如き修道は、愛欲に汚れ煩累多き家庭にありてなし難き所なれば、佛弟子は家を出でゝ、煩累を避け、自由の身となり、同一目的のもの相集まりて和合の團體を作り、相勵まして修道に便ならしめたり。されば僧伽を最も簡單に定義すれば、「僧伽は佛陀を歸主と仰ぐ出家の修道團體なり」となすを得べし。然れども茲に注意すべきは、僧伽の名は、佛敎敎團特有の稱呼に非ずして、當時の遊行者中、團體を形成するもの多くこの稱呼を用ひ、耆那敎々團も僧伽と呼ばるゝこと是れなりとなす。蓋し佛陀は、自己の敎團を呼ぶに、當時の一般の風習に從うて、僧伽の名を以てし給ひしものなればなり。

上述の如く、僧伽とは其の本義に於て、佛陀を師主と仰ぐ出家の修道團體なるが、猶佛敎々團に於ては、この僧伽の用例に廣狹の差あり。

第一は最も廣義の僧伽にして、世界中の總ての佛敎信者を含めて云ふ。卽ち比丘、比丘尼、沙彌 (Sāmanera)、沙彌尼 (Sāmanerī)、式沙摩那 (Sikkhamānā 沙彌尼がその期間を過ぎて後、比丘尼戒を受くるに就き、更に一定の期間、師に就いて學受する時期に名づく)、優婆塞 (Upasaka)、優婆夷 (Upāsikā) の七衆を總括して云ふ。この內前五者を內衆といふ。

第二は四方僧伽 (Catuddisāsangha 招提僧と音譯せり) といふものこれにして、上の內衆を總括して云ふものなり。故にその範圍頗る廣く、凡聖を問はず、來不來を論せず、從つて、「來不來の四方の僧伽」(Āgatānāga‘acatuddisāsangha) の名に依つて顯はさるものこれなり。こ

の内に、應供僧伽 (Dakkhineyya Sangha) と世俗僧伽の別を立つることあり。應供僧伽とは、供養に値する僧伽の義にして、四向四果の聖者の團體を指す。巴利雜阿含經等に「四雙八輩より成れる世尊の弟子衆は敬ふべく、貴むべく禮すべく世界に於ける無上の福田なり」とあるはこれなり。世俗僧伽とは、凡聖の區別を立てず、一般に云ふ語にして、內容より云へば四方僧伽と同一なりと云ふを得べし。

第二は狹義の僧伽にして、一定の限られたる地方(卽ち結界內)に住み、その地方の僧伽會議に列する比丘(又は比丘尼)の團體を云ふ。これを現前僧伽(Sammukhī Sangha 略に現前僧)と云ふ。この僧伽は恰も今日の敎區の如き意義を有す。この用例は專ら戒律的(法律的)意義に用ひられ、律書 (Vinaya Text vol. II. p. 268) には更にこれを左の五種に分てり。

(1) 四人僧伽　授具足戒と自恣と復席 (Abbhāna 刑罰を受けし比丘を期滿ちて復席せしむること。漢譯、出罪) との三作法をなすことを得ず。

(2) 五人僧伽　中國にありて行ふ授具足戒 (邊國にありては行ふことを得) と復席の二作法をなすことを得ず。

(3) 十人僧伽　復席の作法をなすことを得ず。

(4) 二十人僧伽　總ての作法をなすことを得。

(5) 二十人以上僧伽　總ての作法をなすことを得。

集團がもし三人以下なる時は衆群 (gaṇa) と曰ふ。

斯くの如く僧伽の用語例に廣狹の差異あり、僧伽の二字が其の何れの義に用ひられたるかは、文章前後の關係に依りて知ることを得べし。又僧伽は性の上より、比丘敎團、比丘尼敎團の二種に分れ、比丘敎團にありては、沙彌 (Sāmanera) はその半會員にして比丘は全會員なり、比丘尼敎團にありては、沙彌尼(Sāmanerī)と式沙摩那(Sīkkamānā) とはその半會員にして比丘尼 (Bhikkhunī) はその全會員なり。

扨てこの僧伽は釋尊成道第一年ベナレスに行いて、憍陳如等の五比丘を敎化し、天下六阿羅漢あるに至りたる時、初めて成立せしものにして、爾來その敎勢の擴張と共にその敎團も增大し、成道第四年、比丘尼八敬戒の制を設けて、その入團をも許し給ふに至れり。

既に云ふが如く、僧伽は自らを歸依とし自らを燈明とする出家の團體なり。而してその團體結合の力は、佛陀を師主と仰ぐ同一の信仰なり。この信仰に依つて統一せられ、中心として佛陀を仰ぎ、その力に統攝せらるゝが故に、無諍(Avidha)と和合(Sāmaggi)とをその特調とす。從つて團體の事を決するには合議に依る共和制を取り、合法の決議に依らざれば、如何なる些事と雖もこれを處理する道なし。斯くて僧伽は、比丘比丘尼の修道證悟の道場となり、又敎法の傳播護持を任務とする器關となれり。

それ佛陀を師主と仰ぐが故に、彼等の行業には既に模範あり、即ち「正覺者は達せざる道に達し、知られざる道を知り、說かれざる道を說きし人にて、弟子はその道に從つて步み、後ろより附隨して來るものなり」。されば佛陀を主師親と仰ぎて、その示し給へる理想の實現に進む。

僧伽は團體なるが故に、それぞれ團體の法規あり。團體に屬する個人は、この法規を遵奉せざる可からず。尊者劫賓那嘗て布薩の日に思へらく、「予は清淨なれば、別に衆に依つて清淨を認めらるゝことを要せず。今日布薩に列せざるべし」と。佛陀その心中の所念を知り、その前に顯はれて宣はく、「劫賓那よ、汝の如き清淨なるものにて、初めて布薩に列すべし。汝の如きものが列席せずして僧伽を如何せんとす」と。個々の團員が、團體全部を負うて、その團員としての責任上、その團體の法規を守るべきを示したるなり。

斯くの如くして、僧伽は一方その修道の道場としての使命を果し、他方敎法の護持機關となりて、內にありては法燈を繼續し、外に向つては道を宣傳す。比丘衆は佛陀の步み給ひし道を步みて、その所說の敎法を後代に流布せしむる責任あり。廣く曰へば、在家の信者亦この敎法宣布の責任ありと雖も、分つて曰へば、在家の人は財施をなし、出家の比丘は法施をなして、二者相俟つて敎法を維持し得るものなるが故に、說法と傳燈とは主として比丘衆の責任なり。故に曰く、

在家と出家と二者相依り
無上安穩の正法を精勤す。
衣服飮食臥具は在家(之を施し)

畏怖の排除は出家これに酬ゆ。(Iti-vuttaka. 107)

この傳燈の責任ある僧伽なるが故に、之を三寶の一、僧寶として之を崇め、四果の優婆塞猶沙彌を拜せざる可からず、(Sutta-nipāta A. p. 277)。これ沙彌が不還果の優婆塞より尊きに非ずして、沙彌がやがて傳燈の責任と權利を有する比丘となればなり。

既に僧伽は、佛陀を師主として、その佛陀の妙法を體現する道場たる以上、理想としては人天一切の衆生を、その教團の中に包括せざる可からず。この理想は又僧伽の傳燈的生命として現はれ來り、佛陀の命に依りて成道の第一年には、既に六十の阿羅漢は、二人して一つの道を行かざる樣にして廣く教法を外に傳へ、後漸次に增加し來る比丘衆を加へて、安居三ケ月の外は多く一處に定住せず、處々に遊行して有緣の人々に法を說くを常とせり。かの富樓那尊者が、今の Bombay 地方、當時の Suppāraka に傳道せし時、佛陀に暇乞してその傳道の覺悟を述べし精神は、獨り富樓那尊者のみならず、一切の比丘の抱持せし所にして、この精神が佛陀の一生中に佛教を全印度に偏ねからしむるに至りしものにて、阿育王時代に至つては、遠く西は Bactoria、東は緬甸、南は錫蘭、北は Himaraya を超ゆる迄にその教線を擴張せし所以なりとす。

上述の如く僧伽の意義や深くその使命や重大なり。故に佛陀は、「我れは僧伽に强き尊敬を有す」と云ひ、「僧伽を供養するは我れを供養するよりも大なり」と云ひ、「これ世間に於て、見るを得ざるもの、供養に値するもの、最上の福田、一由旬行いても見るべきもの、糧食を携えても、行いて見るべきもの、この中には天に達せるもの(Devapatta)、梵に達せるもの (Brahmapatta)、不動に達せるもの (Ānejjapatta)、聖に達せるもの (Ariyapatta) あり」と嘆し、又次の八未曾有法を以て僧伽の戒律を讃嘆せし所以なりとす。八未曾有法とは

(一) 大海が次第に深くなりて、急に深處となることなきが如く、この僧伽の法と律も次第に學びて得べく、急に了解すること難し。

(二) 大海の水が岸を越えざるが如く、我が說きし法と律とを、弟子衆は生活のために犯すことなし。

(三) 大海が死屍を留めざるが如く、この僧伽には惡戒邪命食の

人を入れず。

（四） 四大河が大海に入りて、同一海水となるが如く、四姓この僧伽に歸して、同一「釋種の子」となる。

（五） 大海の水に增減なきが如く、諸の比丘無餘涅槃界に入るも、無餘涅槃界は增減せず。

（六） 大海が同一鹹味なるが如く、この僧伽の法と律との味も、解脫の一味なり。

（七） 大海には種々の寶あるが如く、この僧伽の法と律には、四念處四正勤五根五力等の寶あり。

（八） 大海には種々の大身の衆生住するが如く、この僧伽には四向四果の聖者あり。(A. VIII. 19. 同本增一阿含卷三七)

第二章　僧伽の生活　戒律

上述の如く僧伽は偉大なる使命と、偉大なる內容とを有す。然らばその僧伽の實際は如何。吾人は茲に僧伽全體としての實際生活に就て、少しく研究する所あらんとす。

今僧伽全體としての生活を驗するに當り、僧伽が一個の宗敎團體たる以上、僧伽の生活が宗敎的實踐を本質とすることは申す迄もなき事なるが、この宗敎的實踐修行は既に第二編法の下にて大略說き了りたれば、この宗敎的實踐を容易ならしむる爲めの敎團の制度及び法規に就いて研究し、進んでその制度及び法規が各個人の宗敎的體現に、如何なる效果を及ぼせしかを見るを順序とす。

先に述べしが如く、僧伽は佛在世にありては佛陀を、佛陀入滅後は學德兼備の上座を上首とする共和團體なり。而してこの共和團體は、全印度に廣がれる廣漠の團體なれば、その合議を便ならしめんが爲めに、地方的集團に分たる。この地方集團は結界作法に依つて定めらるゝものにして、その結界內の比丘はその集團の合議に列し、布薩會に列する權利と義務とを有す。然れども比丘はもと遊行者にして、一處に定住せざるが故に、この地方的集團の結束は、比較的に一時的のものにして集散し易く、既に地方的集團が集散し易きが故に、その集團と敎團全體との關係は今日の敎區と本山との關係の如く堅固ならず、この點に於て敎團全體の結束の上に不利あり、佛陀入滅後の敎團に於て、この不利は遂にその分裂を招來するに至れり。

敎團の法規は佛陀自ら隨時に制定し給へり。「隨時に」とは、或る比丘の行爲が、その敎團の平和を破るか、比丘の修道に妨害となることなるかの時、その行爲を緣として、再びその行爲をなすべからずと制定し給ふを云ふ。これを隨犯隨戒と云ふ。經(M. n. 65)にはこれを漏に根を持つ法の顯はれるに隨つて戒を設くと云へり。故にもし敎團の團員が悉く舍利弗目連大迦葉の知き人物なりしならば、或は戒の制定はあらざりしやも計られず、設ひ制定ありとするも極めて簡略なりし事ならんと思はる。敎團の團員がその數を增すと共に、數多き中には如何はしき人物も出て來りたれば、勢ひ多數の制戒を見るに至りしも

のとす。

されば制度及び法規は佛陀これを定め給ひ、僧伽はこの制度及び法規の施行をなし來れるなり　然れども立法の精神に戻らざる限りに於ては、敎團の決議に依りて制度及び法規の一部を改廢することは可能なり。故に佛陀は佛陀の滅後には、「些少の戒法は之れを廢捨するも可なり」と宣ひしなり。然らば立法の精神とは何ぞや。曰く開悟の理想に向つて進まんがために、現實の生活を簡易にし、障碍なからしめ、邪法(Saddhamma Patirūpaka) の顯はるゝを防ぎ、正法(Saddhamma) を護持すること是れなり。佛陀がその食に於て一坐食の制を設け、その衣に於て三衣の制を立て、個人の所有に於て八物を限り給ひしが如き、又種々の戒を制し給ひしが如き、皆この精神よりなされしものなり。今次の數章を立て準次に敎團の法規を見行かんとす。

入團作法
戒律の大綱及び刑罰
結　界
布薩(說戒)と安居及自恣
衣食住
個人所有と僧伽所有
僧伽作法及び滅諍法
以上の法規が生活に及ぼせし實際的效果

第三章　入　團　作　法

入團とは僧伽の一員となることにして、佛陀傳道の初めに於ては、この作法最も簡單にして、佛陀を信じ出家して佛弟子とならんと欲するものが、その意志を表明すれば、佛陀は「我れに來れ、比丘よ」(Ehi Bhikkhu) と呼び給ひ、それにて入團を了りたるものなり。又この比丘たらしむることも釋尊のみなし給ひしものなるが、後年その傳道の地域廣がり、弟子の數も從つて增大するに及び、佛陀は一定の作法を設けて、自餘の比丘をしてこの作法に依つて他を出家せしむることを許し給へり。その作法も初めは簡單にして三歸依なりしが、漸次に復雜になれり。因に入團作法の種類に就いて十誦律等に依れば、左の十種を擧ぐ。

（一）　自然無師得
（二）　五比丘得道得
（三）　自誓得
（四）　答問得
（五）　邊地五人得
（六）　八敬得
（七）　遣信得
（八）　善來得
（九）　三歸得
（一〇）　白四羯磨得

今これを多少整理して說明すれば、

（一）　自然自師得とは佛陀御自身の得道を云ひ、

（二）　五比丘得道得とは初轉法輪の時、五比丘が得道するに從つて敎團中の人となりたるを云ひ、

（三）　善來得とは佛陀傳道の初期に、Ehi bhikkhū（來れ比丘よ）と宣ふのみにて入團を許されたるを云ひ、此の中に自誓得、答問得、八敬得を收むべし、自誓得とは大迦葉が自誓して具足戒を得たりと云ふものにて十誦律(五十一)薩婆多論(二)に依るものなるが、大迦葉と優留毘羅迦葉を混せるやの嫌あり。答問得とは蘇陀那(或は須波迦)沙彌

が佛陀の問に對し賢こき答をなしたりとて具足戒を得たりといふ一事實を指して云ふ。

八敬得とは比丘尼の初めなる摩訶波闍波提が八敬戒を守る約束をなして入團を許されたるを云ふものにして、律本には「來れ云々」の語なきも時代よりすれば善來得に收むべし。

（四） 三歸得とは三歸依文に依りて入團を許す簡單なる作法なり。

（五） 白四羯磨得とは續いて說明せんとするものにして、三師七證一白三羯摩に依りて入團を許す作法なり。邊地五人得とは中國なれば入團作法に必要なる十人の僧を得ること易きも、邊地にありては困難なるが故に、五人にて作法を秉する（行ずる）を云ふ。遣信得とは娼婦 Aḍḍhakāsī（半迦尸）の出家を請ひし時、嘗てなじみし遊冶郎のAḍḍhakāsī を道に要して捕へんとせしより Aḍḍhakāsī の要求に依り使を遣はして出家せしめたる特別の一例を云ふなり。

扨てこの白四羯摩作法は幾多の變遷を經て完備せる作法にして、巴利律典大會部 (Mahāvagga) 受戒犍度、四分律受戒犍度（列五）に記載せられ、今日錫蘭等にて現に行はれ居るを云ふものなり。

扨てこの入團に二種あり、一は沙彌の入團にして二は比丘の入團なり。沙彌の入團は年齡二十歲に滿たざるものが、入團を請ふ時に、將來一人前の比丘たらしめんとして、その準備をなさしめん爲めに入團を許す作法にして、後者はその沙彌が準備時代を終り、滿二十歲に達して敎團の full member（足數）として加入を許さるゝ時に受くる作法なり。前者を出家 (Pabbajja) の式と云ひ、後者を授具足戒 (Upasampada) の式と云ふ。

先づ沙彌の入團式より云へば、入團者は滿七歲以上なるを要し、式日に、法臘十年以上の上首（戒和尙）首座に坐し、他は相向ひて坐す。入團者は俗服にて介添の比丘三黃衣を持ちて入り、提言者 (Kammavācaya) に導かれ、上首を拜し小さき贈物をなして尊敬の意を表し、三度入團の許可を乞ふ。「我れを憐れみ、これらの衣（俗服を指す）を取り去り、悲哀を脫して涅槃に入ることを得んが爲に我が入團を許し給へ」と。上首はその時黃衣を取りて、入團志願者の頭に卷きつけ、暫らく人身無常の默想の表白をなす。その時志願者は退いて「衣を著

くれども、これ禮義のためと寒暑を防ぐ爲めなり」といふ趣意の表白を繰り返しつゝ衣を著變へ、法衣を著け終つて、改めて一新沙彌として顯はれ、上首の前に跪き、上首に從つて三度づゝ三歸依を述べ十戒を守るを誓ふ。十戒とは

1) 不殺生　　2) 不偷盜
3) 不邪婬　　4) 不妄語
5) 不飲酒　　6) 不非時食
7) 離高廣大床　　8) 離華鬘
9) 離歌舞觀聽　　10) 離金銀寶物

これなり。斯くてこの三度の表白を終り、一新沙彌とし退くなり。沙彌は Sāmanera 又は Samaṇuddesa を音寫せしものにて、小さき沙門、將來沙門と呼ばるべきものゝ義なり。斯くて沙彌は師に從ひて經律を學び、滿二十歳に達して具足戒を受けて一人前の比丘となる。

今比丘受具足戒の事を簡單に記述すれば、

第一　學力試驗　一人前の比丘たるに相應しき學力の有無の試驗にして、僧伽の前にて合掌三拜し、姓名と鄉里と所屬の寺と師匠(Upajjhāya)と出家後の年數と、兩親の許可を得たるか否かを問はれたる後、巴利語經典の暗誦を施さるゝなり。この試驗に及第して、その姓名と住所と所屬寺の名と師匠の名が小さき塔婆様の貝多羅葉に彫り込まれて、茲に受具足戒者としての資格を具ふるに至る。

第二　行列　この資格者は受戒前に釋尊の故事に慣ふて、出家前出來る限りの盛裝せる俗服をつけて市中を行列す。蓋し浮世の榮華のなし納めをする意味なり。

第三　受戒　授戒堂(Upasampadāgāra)に僧伽相集まり、上座は扇を取つて正面に坐す。敎授阿闍梨、受戒者に三衣一鉢の用意出來たるやを尋ね、一度座を退いて受具足戒の作法を敎へ、再び僧伽の前に顯はれ、受戒者をして僧伽に向つて三度受戒を請はしむ。

大德等よ、私は僧伽に受戒を請ひます。大德等よ、僧伽が愛憐を以て私を低い位置(沙彌の位置を指す)より引き上げて下さる樣に願ひます。(三返)

終つて羯磨阿闍梨は僧伽の許可を得て、受戒者に向つて障碍の有無を

匡す。

「那伽よ、聽けよ、今は汝の誠を語り眞實を述べねばならぬ時である。私は汝のありし事共を問ひ尋ねるであらう。有ることはあると答へ無い事は無いと答へねばならぬ」。

「那伽よ、汝にこの樣な病氣はないか。癩、鼠瘡、胎毒、肺病、癲癇はどうぢや」。「大德その樣な病氣はありません」。

「汝は人間であるか」。「大德、さうであります」。

「汝は男子か」。「大德、さうであります」。

「汝は自由人か」。「大德、さうであります」。

「借財はないか」。「ありません」。

「官公吏でないか」。「ありません」。

「父母の許可を得てゐるか」。「大德、さうであります」。

「滿二十歲であるか」。「さうであります」。

「汝の鉢と三衣は用意してあるか」。「用意してあります」。

「汝の名は何と云ふか」。「那伽と申します」。

「師匠の名は何と云ふか」。「大德、私の師匠は長老帝須上座と申します」。

唐招提寺傳授戒作法は四分律所傳に依り、この所にて、邊罪、犯比丘尼、賊心入道、內外道を壞つもの、黃門、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血、非人、畜生、二形生の十三難と、自己の姓名、和尙の姓名、年滿二十、衣鉢具足、父母聽許、負債人にあらず、奴にあらず、官人に非ず、丈夫なり、無病なりの十遮を問ふ。

この問答終りて、羯磨阿闍梨は僧伽に向つて動議を呈出す。

「大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この那伽は長老帝須に就いて受戒を乞ふてゐます。障碍もなく鉢も衣も用意してあります。那伽は長老帝須に依つて受戒を乞ふてゐます。もし僧伽にして都合好ければ、僧伽はこの那伽に長老帝須を師匠として具足戒を授けるでありましやう。これが動議であります。(一白)

動議の呈出後續いて曰ふ。

「大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この那伽は長老帝須に就いて受戒を乞ふてゐます。障碍もなく鉢も衣も用意してあります。那伽は長老帝須に依つて僧伽に受戒を乞ふてゐます。僧伽は長老帝須を師匠として那伽に具足戒を授けます。諸師にして

この那伽の受戒に異議がなければ默つてゐて下さい。異議があれば發言して下さい。(これを三返繰り返す。三羯磨と云ふ)。

斯く僧伽の異議の有無を確むること三度にして茲に發言するものなければ、羯磨阿闍梨は一段聲を高め、

僧伽は茲に那伽に長老帝須を師匠として具足戒を授けました。僧伽に異議はありません。それ故に默つてゐられたものと私は了受します。

此の宣言に依つて、茲に沙彌は引き上けられて一新比丘となる。その時の時刻を計つて之を貝多羅葉に記し登錄を終る。次に新比丘は左の四依法と四重禁とを敎へらる。四依法とは

1) 比丘は乞食に依らざるべからず。

2) 比丘は糞掃衣に依らざるべからず。

3) 比丘は樹下を住處とせざる可からず。

4) 比丘は腐尿藥を藥とせざる可からず。

四重禁とは

1) 非梵行　　2) 偷　盜

3) 殺　生　　4) 法についての謗

この授具足戒に列席する僧伽の數は三師七證と稱して十人を要す。三師とは戒和尙(Upajjhāya法臘十年以上たるを要す)、羯磨師(Kammācariya 法臘五年以上)、敎授師 (Anusāsayācariya 同上)の三師にして、その受戒に同意し、作法が正しく行はれたるを證明するに七人の僧を要するの謂也。但し邊國にて、十人の僧を集むるは困難なれば五人以上なれば受戒せしむを得る別の定めあり。

かくて受戒したる新比丘は師(Upajjhāya) 又は阿闍梨(Ācārya) の許にありて、弟子(Antevāsika) と呼ばれ、五年の間經と律とを學び精神的指導を受く。出家に取りては師は父にして弟子は子なれば、師弟は相愛の間 各その務を果すべきものとす。

以上受戒作法の大要を述べたり。茲に外道の出家にして轉じて佛門に入らんと乞ふものあれば、茲に四ヶ月の試練の時期を置き、別住(Parivāsa) せしめて後受戒せしむるを則とす。

第四章　戒律の大綱及び刑罰

先に云ふが如く、佛陀は隨時に比丘の行爲中、修道の妨害となり、僧伽の平和を破り、自他に不利を齎らすが如き行爲を禁じ給へり。佛陀はその教法に於て、人々の頭腦を整理して道行に便ならしめ給ひしが如く、實際の行爲に於ても、涅槃の一路を進むに就いて妨害となるものを擧げて之を禁止し給へり。これを戒といふ。戒(Sīla)は行爲習慣の義にて又誡禁條項の義を含む。この誡禁條項を守つて犯さゞるものを善戒者(Sussīlo)と云ひ、犯すものは惡戒者(Dussīlo)と云ふ。この誡禁せられたるものに重罪(Thullaccaya 偸蘭遮)と小罪(Dukkata 突吉羅、惡作)とあり、小罪はその數夥しきに上れども、その主なるものを擧げ、重罪卽偸蘭遮罪と合せて、比丘には二百二十七、比丘尼には三百〇五戒を數ふ。今これを項目に分ちて示せば左の如し。

	比丘	比丘尼	五篇門	
波羅夷 (Pārājikā)	4	8	婆羅夷	重罪
僧殘 (Sanghādesesā)	13	17	僧殘	重罪
不定 (Aniyatā)	2		突吉羅	小罪
尼薩耆波逸提 (Nissagiya Pācittiyā)	30	30	波逸提	小罪
波逸提 (Pācittiyā)	92	160	波逸提	小罪
提舍尼 (Patidesaniyā)	4	8	提舍尼	小罪
衆學法 (Sekhiyā Dhammā)	75	75	突吉羅	小罪
滅諍法 (Adhikarana-Samathā Dhammā)	7	7	突吉羅	小罪
	227	305		

註(一)　偸蘭遮罪は普通、波羅夷罪僧殘罪の未遂罪に名くるものとすれども、今はその

原始的意義より解して圖記の如く分類せり。波逸提、提舍尼は普通突吉羅罪卽惡作に攝せざれども、これも其の性質上波羅夷僧殘の二罪と對して突吉羅罪卽ち輕罪に攝し置きたり。

註(二) 比丘戒二百五十、比丘尼戒五百と呼ぶは普通なれども、これも律本に依りて相違あり、圖記せるは南方所傳なり、今諸律本に依りて數を擧ぐれば左の如し。

	巴利	五分	四分	十誦	僧祇	有部	
波羅夷	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	僧 尼
僧殘	13 17	13 17	13 17	13 17	13 19	13 20	僧 尼
不定	2 0	2 0	2 0	2 0	2 0	2 0	僧 尼
尼薩者波逸提	30 30	30 30	30 30	30 30	30 30	30 30	尼 僧
波逸提	92 160	91 207	90 178	90 178	92 141	90 180	尼 僧
提舍尼	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	4 10	尼 僧
衆學法	75 75	86 85	100 100	107 107	77 64	82 82	尼 僧
滅諍法	7 7	7 7	7 7	7 7	7 7	7 7	僧 尼
	227 305	237 262	250 348	257 355	229 277	232 340	僧 尼

比丘及比丘尼の禁戒は、之を委さに下に巴漢對照して出すべしと雖も、今略してその大要を說明せんに、(一)婆羅夷罪は邪淫、偸盜、殺生及び證らずして證れりとする詐僞の四罪にして、波羅夷 (Pārājika) とは棄てらるものゝ義にて、この四罪は比丘として重罪なるが故に波羅夷と呼ばれ、一旦この四罪の一を犯したるものは共に住むべからず (Asamvāsa) として排棄せらるゝなり。

(二) 僧殘 (sanghādisesa) は、故意に失精し、故意に他を毀謗し、諫誡を用ひずして猶破和合の計畫を有するが如き十三罪を云ひ、波羅夷に次ぐ重罪なり。この罪は初め (ādi) の僧伽作法(罪を定めて刑罰を與へる)に依つて別住の刑に處せられ、殘り (Sesa) の僧伽作法 (摩那埵作法と復席作法) に依りて六夜摩那埵の刑を受け、後罪より洗はれて僧伽に復位するもの故に僧殘《Sangha (kamma) + ādi + sesa》罪と云ふ。若し比丘にしてこの中の一罪を犯せば六夜の摩那埵 (Mānatta 輕き別住にて、今日の所謂禁足に近き罰なり。六夜中種々の特權を奪はる) を受けざる可からず。又若しその罪を犯して之を覆藏(かくす)せば、其の

覆藏せし日數丈けの波利婆舍（Parivāsa 重き別住なり、摩那埵と輕重の差のみ）を受け、其の後六夜の摩那埵を受く。六夜の摩那埵を受け終りて如法に行持すれば、出罪（復席）作法に依りて、僧伽中に復位するを許さるゝなり。

この僧殘罪は、僧伽にありては重罪なるが故に、これに對する僧伽作法は頗る嚴肅莊重なるを要す。先づ僧伽の前に被告人を出席せしめ、その席上、先づ被告人に警告し、犯せる罪を自覺せしめ、次に正しくその犯罪を告訴し、被告人をしてその僧伽衆の前にありてその罪を發露悔過せしめ、覆藏せし場合はその覆藏に對する波利婆舍（別住）の刑を請はしめ、覆藏なき時は直に六夜の摩那埵を請はしむ。覆藏者には課刑の波利婆舍を終りて後、摩那埵を請はしむ。僧伽はこれに對して、一白三羯磨（動議を提出して後三度僧伽の同意不同意を聞くことなり）の作法に依りて課刑す。六夜の摩那埵を終りて後、罪比丘は二十人以上の僧衆の會合に對して出罪作法を請ひ、僧伽は一白三羯磨の作法に依り出罪作法をなし、その比丘をして罪より淸からしむるなり。

（三）　二不定は、婦人との關係に於て、他より疑はるゝ所行ありし時、その所爲が調査せらるべきを要するが故に不定と云ふ。この場合に二種あるが故に二不定と云ふ。調査の結果、罪定まれば、その罪狀に依りて刑罰を受くるなり。

（四）　尼薩者波逸提は、衣服坐具鉢等の所有物に就いて、所定以上の物を有し又は不如法の態度ありし場合、その品物は沒收せられ、自ら僧伽の前にて懺悔せざる可からざる罪なり。これに三十を分つ。尼薩者耶（Nissagiya）は沒收の義にして、波逸提（Pācittiya）は懺悔の義なり。漢譯に波逸提を墮と譯し、墮獄の罪なるが故に墮と云ふと云ふは非なり。

（五）　波逸提は妄語、毀訾、故意に虫を殺し、相謀りて婦人と同行し、同宿する等の九十二罪にして僧伽の前にて懺悔すべき罪なるが故に波逸提と名づく。罪體は前の尼薩者波逸提と同じ。只前者は事財物に關する故、財物を沒せられたる上四人僧伽の前にて懺悔すべく、後者は執着心瞋恨心等の妄心に關するもの故只別衆三人の衆中に懺悔すべきのみ。

（六） 提舍尼は、親戚ならざる比丘尼より食を受くる等の四種の不相應事にて、他に對して告白すべき罪なる故に波羅提舍尼 (Patidesaniya 告白すべきもの)、略して提舍尼と云ふ。誰にても一人の比丘の前にて、告白悔過するを法とす。

（七） 衆學法は食事の仕方、在家白衣の人の家に近づき入りて住する心得作法、說法の時の心得規定を敎ふるものにて、四分律五分律共にその數百を數ふる故、これを百衆學と呼べり。この心得規定に乖く時は突吉羅(惡作)を犯すとなす。これに故意にて犯すと、知らずして犯すとあり、故意にて犯す時は、上首比丘に對して悔過するを要し(對首懺)、故意ならざる場合は、氣が付くと共に自己の心を責めて悔過するを要す(責心悔)。

（八） 七滅諍は、僧伽中に諍の起らんとする場合、若くは起りたる場合、その諍を靜むる法にて、僧伽の諍は(一)法相の是非を論議するより起る言諍、(二)比丘の犯せし罪過を求覓する覓諍、(三)比丘の犯せし罪の虛實輕重を判ずるに依つて起る犯諍、(四)他の行ひし僧伽作法の如法不如法の論議をする事諍の四種あり。この爭を滅する法規として、七滅諍法を定む。されば滅諍法は誡禁の事項に非ず、從つて如上の諸戒と並ぶるは當を得ざるが如しと雖も、諍の起りし場合その上首たるものはこの七種法の一に依つてその諍を靜めずば突吉羅罪なる故に、茲に列するなり。故意に乖犯せしものは對首懺、故意ならざる時は責心悔なること前項に同じ。

以上吾人は茲に戒法の大要を述べしが、詳細は下四五六頁以下に至り、讀者の自ら巴漢對照に依りて、硏究せられんことを請ふ。茲に吾人はこの誡禁に對し、必然に起り來る刑罰について、一應の敍述をなしてこの項を終らんとす。

イ。不供住 (Asaṁvāsa)、波羅夷罪を犯すものは根本的に比丘に非ず、求道の人に非ざるが故に、これを斥けて僧中にあらざらしむ。これを不共住と云ふ(僧伽の刑罰中最も重きものにて、所謂斷頭刑なり。別住に異なる)。但し四波羅夷罪の中、婬行は猶恕すべき點あるが故に、佛陀は死馬を奸せし難提比丘を許して僧中にあらしめ給ひしことあり。然し旣にこの大過ありしが故に、一生數多の特權を奪はれたり。

ロ。放逐（Pabbājaniya 滅擯）、比丘の三業いらだたしく又無慚にしてその三業他を害すること甚しき場合、放逐の刑に處す。卽ちその住處より放逐せらるゝものにして、處罰を受けしものは他に移り住まざる可からず。

ハ。差止（Ukkhepaniya 擧）、自ら罪を犯せるを自覺し乍ら、又他よりその犯罪の注意を受け乍ら、知らざる振りして自白せざる剛情なる比丘に課する刑罰にて、比丘としての權利を剝奪するものなり。彼は他の依止となるを得ず、沙彌を蓄ふるを得ず、如何なる場合も他の非を擧ぐるを得ず、他より同梵行者としての待遇を得ず。而してこの差止の宣告は一結界內の僧伽より、他結界內の總ての僧伽に傳へらるゝが故に、彼は何處に行くも僧權の停止を蒙むるなり。

ニ。梵壇刑（Brahmadaṇḍa）、佛陀入滅に臨み、闡怒（Channa）比丘に課するやう命じ給ひし刑にて、他比丘諸共に犯罪の比丘を無視默殺し、共に語らず誡めず敎へざるを云ふ。故に之を默擯と云ふ。

ホ。呵責（Tajjaniya）、爭を好み、怠慢にして、三寶を批議するものに課する刑罰にて、僧伽會合の上呵責し、授戒、他の依止となること、沙彌を蓄ふること、尼を敎誡すること等の種々の特權の停止を命ずるなり。

ヘ。監視（Nissaya）、呵責作法を受くべきものにしてその上愚かなるものに課する刑にて、特權の停止は前刑と同じく、その期間中、監視者の下に就きその監視を受け、その監視者に見慣ひ、法を聞き質疑し學習せざる可からず。

ト。令謝罪（Paṭisāraṇiya）、在家の人々の不利を計り、在家の人々に三寶の誹議をなし、謂れもなく在家人を非難せし場合、課せらるゝ刑にて、その比丘は僧伽の附する副使と共に、その在家人に行いて謝罪するを要するなり。

チ。波利婆沙（Parivāsa）、別住と翻す。別住とはもと、外道者來つて佛敎々團に入らんと請ふ時、四ケ月獨房に居らしめ、其の行跡を驗して後入團せしむるを法とす。この獨房居住を波利婆沙と云ふ。但し佛陀は、其入滅の前に、外道にして釋種のものと、螺髻外道（Jaṭila）とはこの四ケ月獨住を除く旨を令し給へり。今は、僧殘罪を犯せしも

が自己の犯罪を覆藏する時、その覆藏せし日數だけ獨房に居住せしむるを別住刑となす。獨宿してその犯罪を靜思せしむる義なりとなせり。この別住中は僧權の停止を受くるは他の刑罰に同じ。

リ。摩那埵（Mānatta）、僧殘罪に對する主罰にて、六日の間別住を課せらるゝなり。前の波利婆沙に比し輕し、この六日間は特に他比丘の下位に立ちて尊敬を表せざる可からざるが故に摩那埵（尊敬を示すの意）と云ふ

因に記すべきは、在家の信者に對する刑罰なりとす。苟も一宗教が成立して、その教團を維持する限り、在家人に對する賞罰も當然の結果として起らざる可からず。元より、その教團が宗教的生命に燃ゆることが、最も大切なることにして、これに依つてすべての在家信者との接渉は解決せざるべしと雖も、もし、宗教的生命の火熱衰へ、只徒に在家の信者に諛び諂ふに至らば、其の教團はそれに依つて聰ての死滅をトせらるゝと共に、在家の信者に取りても一大損失なりと云ふべし。而して佛陀教團の在家信者に對する刑罰は、所謂伏鉢なるものにして、鉢を伏してその人の施を受けずと云ふことなり。(一)在家の信者が、比丘の施に損失を與へんとするとき、(二)比丘に害を與へんとするとき、(三)比丘の住居を奪はんとするとき、(四)比丘を譏謗するとき、(五)比丘の和合を破らんとするとき、(六)佛陀を非難するとき、(七)法を非難するとき、(八)僧伽を非難するとき、この刑罰はその人に宣せらるゝものとす。

第五章　結　　界

結界 (Sīma) とは境界を限定するの意味にして、諸方に離れて住する比丘比丘尼が、各々其の便宜に從つて相集まり、布薩をなし、僧伽作法をなすに就いて、地形其の他の便利を參酌して境界を定め、その境界内の組を作るを云ふ。而してこの境界は三由旬(約二十一哩)を越ゆるを得ずと云へば、今日の宗派に謂ふ所の敎區内の組に該當すと云ふを得べし。この組を一僧伽と云ふ。一僧伽はその數四名以上にして、(三名以下の時は別衆又は衆 Gaṇa と云ふ)。毎月兩度ノ布薩會には必ず相集まりて說戒し、僧伽の事件ある每に全部集合の上に僧伽作法をなすべきものとす。僧伽とは先にも云ふが如く、佛陀を師主と仰ぐ人々、在家の煩累を避けて出家し、相集まりて道を修むる團體なれば、この大僧伽に屬するものが、時々會合して相誡しめ相勵まし、僧伽の僧伽たる所以、卽ち修道の道場たる意義を完成すべきは云ふまでもなし。而してこの僧伽に於て相互の關係の上になすべきことは、これを私的にして云へば、師弟相依り相助けて道に進み、同梵行者相誡しめ相引いて敎をなすにあり、公的にして云へば、佛陀の命じ給ひしが如く半月每に說戒して敎團の規律を新に眼前に喚び起し、新たなる同行を迎ふるが爲に授戒作法をなし、敎團の威嚴と規律を保たんが爲に、犯罪者に對する刑罰の作法をなすにあり。斯くすることに依つて、始めて敎團はその修道の道場としての意義を全ふすると共に、その像法(似像の法、似て非なる法卽ち邪法)の顯はるゝを防ぎ正法を久住せしむる使命を全ふするなり。然れども漫然として僧伽と云へば、その境域廣大にして集合し難く、假令集會し得と云ふとも、途中又種々の難あり。河あれば水難あり、曠野あれば賊難あり、村に入りては女難ある等、半月每の集會の爲に却つて壽命難(水難、火難、賊難)、梵行難、別衆難(僧會不參の難、破僧難)に遭遇することあり。今これらの難を免がれて集會し僧伽の意義を全ふせしめんが爲に最大限度三由旬の境域を限定して結界し、組を形づくるなり。

但しこの結界は、佛陀が各所の聚落々々にて、布薩をなすを許し給ひしより起れるものにて、初め佛陀は、佛陀在住の場所に、比丘等

を集めて布薩をなし給ひしが、斯くては遠隔の地にあるもの、又は遊行の途次にあるものゝ困難至大なれば、佛陀は「若しは村、若しは邑、所住の境界所に從つて說戒する」を許し給ひ、この聽許に從つて、各地散在の比丘は、其地々々に於て界を定め、界內の比丘相集まりて布薩せしなり。事情斯くの如きが故に、この結界は、時と事情の相違に依つて差別あり、南山律にては律本中より六相の別を拾ひ擧げ、これを次の作法結界に對して自然結界又は自然界と名けたり。今便宜上、その列名に依りて解釋して進めば、

一、不可分別聚落　聚落の道路の具合にて、同法の僧(共に集りて布薩をなすべき比丘の意)の來不知り難きと、其の聚落の籬柵等整然たらず見定め難き聚落を不可分別聚落と呼び、この聚落にては、七樹六間の間を界量として結界し、其の中にて布薩す。(0—0—0—0—0—0—0、この間六十三步を普通とす)。

二、可分別聚落　同法の僧の來不の知り易く聚落の籬柵等の整然たる場合、之を可分別聚落と稱し、この聚落の場合には、その籬柵を界標として結界し、その中にて布薩す。

三、無難蘭若　一阿蘭若に住する衆僧の中、僧伽作法に不同意するものなき場合を無難蘭若といふ。この時は一拘盧舍(約五百間)を界量として結界す。

四、有難蘭若　右の場合に於て、僧伽作法をなす時、持戒清淨の比丘にしてその作法に同意せざるものあれば、これを有難蘭若と曰ふ。この場合に於ては、其の不同意者は方五里以外に出で、更に二十八肘外に至り、七盤陀羅 (abhantara 約三十五丈)を限量とし結界し、僧伽作法をなす。又甲地の比丘衆の中に、乙地の比丘來り住せる時、甲地の比丘、僧伽作法をなさんと欲し、しかも乙地の比丘のその會議の席に異議を唱ふるを恐るゝ場合、自ら別衆となりて、その乙地の比丘の知らざる內に、結界外に出でゝ、更に新に結界して、其處にて僧伽作法をなすも、この結界法に攝せらるゝなり。

五、道行界　以上は比丘等の滯在の時なるが、今比丘等遊行の場合、途中にて布薩の爲め又は僧伽作法の爲に集會する必要ある時は、一處に停まり、縱橫二里(約十町)を限量とし結界して集會をなす。

六、水界　これも比丘遊行中、船中にて說戒等の爲に集會する必要ある場合には、健康なる比丘が水を取りて投げ得る距離を限量として結界し集會して作法す。今日錫蘭にて布薩堂が池中に設けある所あるは遊行中の布薩を意味するものなるべく、この場合の結界はこの水界に依る。

扨て結界の方法には以上の六相ありしが、後この六相結界の種々の不便を見、佛陀は、標相を立てゝ、僧伽作法に依つて結界することを許し給へり。而してその作法結界の形の上より云へば、方形、圓形、鼓形、半月形、三角形の五種の形あり、冬期、氷が張りつめたる場合と橋梁の架しある場合を除いて河湖海は結界內に含むを得ず。又その結界內にありても、男女居住(之れを律語にて云へば村といふ。)の家や、病比丘の房、無常院、別住所(別住の比丘の住する所)は結界外と定むるを法とす。されど男女居住の家を攝する場合なきにあらず。

而してこの結界をなすに就いて茲に標相を定むる必要あり、山、河、池、林、大石、井、埠、樹木、垣、林、道を標相とし、これらの標相を定めて域標とし、この域標內を結界す。今この結界を了解し易からしめんが爲に、左に結界の作法の一例を出すべし。

僧伽は先づ型の如く集合して、上首、地形に善く通曉したる一比丘と左の問答をなす。

「東方は何の標相であるか」。「大德、水であります」。「これは水標相」。

「東隨方は何の標相であるか」。「大德、水であります」。「これは水標相」。

「南方は何の標相であるか」。「大德、水であります」。「これは水標相」。

「南隨方は何の標相であるか」。「大德、水であります」。「これは水標相」。

「西方は何の標相であるか」。「大德、水であります」。「これは水標相」。

「西隨方は何の標相であるか」。「大德、水であります」。「これは水標相」。

「北方は何の標相であるか」。「大徳、水であります」。「これは水標相」。

「北隨方は何の標相であるか」。「大徳、水であります」。「これは水標相」。

斯くの如く標相を定め終りて、次に羯磨師は左の動議を呈出す。

「大徳等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。周圍の標相は告知されました。若し僧伽にして都合好ければ、この標相を以て結界と指定し、同住一布薩界と致します。これが動議であります」。

斯く動議を呈出し終つて、次に

「大徳等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。周圍の標相は告示されました。僧伽はこれらの標相を以て、同住一布薩界の結界を指定します。若し諸師にして善しと思はゞ、默してゐて頂き、惡しと思はゞ發言して頂きたい。

僧伽に依り、これらの標相を以て、同住一布薩界の結界は定められました。僧伽は善しと思ふが故に默してゐられました。私はこの様に了受します」。

註　茲に結界作法中の一例として擧げたるこの作法はその結界地が、水に圍まれたる島なるを以て東西南北共に水を以て限界とし標相として結界したるなり。

以上說戒等の僧伽作法をなす集團を定むる結界を作法攝僧界と曰ふ。謂ふ心は僧伽の作法に依りて僧衆の衆團を定むるの謂なり。この外に攝衣界と攝食界と稱する特別の結界あり、攝衣界とはその結界內丈け三衣すべてを纏はざるも三衣を離れざるに同じといふ特定の場所を云ふ。この結界に依りて比丘はその結界內にて三衣の一々を纏はざるも離衣宿戒に背かざるを得る也。この攝衣界にも、自然攝衣界と、作法攝衣界との別あり、自然攝衣界とは比丘遊行中の如き僧伽作法をなす能はざる場合、宿泊せし所に自然に生ずる界量にして、律典には十五種の自然界を擧け。一々に又勢分といふものあり、界外十三步（七十八尺、支那にて定めたる古制にて、四分律六に依れば投石の距離）を限り界內と同じく取り扱ふものとす。十五種とは種々の律本に出でたるものを集めたるものにて、左の如し。

（1）　僧伽藍界

（2）村界
- イ　聚落界
- ロ　家　界
- ハ　族　界
- ニ　外道舍
- ホ　重　舍
- ヘ　遊行營所

（3）樹　界　　（4）場　界
（5）車　界　　（6）船　界
（7）舍　界　　（8）堂　界
（9）庫　界　　（10）倉　界
（11）阿蘭若界　　（12）道行界
（13）洲　界　　（14）水　界
（15）井　界

次に作法攝衣界とは伽藍精舍に居住し、其の住處一定せる場合、僧伽作法に依りて界限を定むるものあり。この作法攝衣界には勢分といふものなし。而してこの攝衣界の結界には、男女共住の家（俗家のこと、律語にて云へば、村）を避くるを要し、若し地形上避くるを得ざれば、更に俗家の周圍を結（限界）して近づかざる樣になすを常とす。これに現結懸（はるか）除と現除懸結とあり、現結懸除とは攝衣界の結界をなす時、其の結界內に若し俗家移り住まば、その家を更に結すべしと豫じめ宣するを云ひ、現除懸結とは結界せんとする場所內に．既に俗家ある場合、その俗家を結して（これを內相と云ふ）、この上に攝衣界の結界（これを外相と云ふ）をなし、後ち俗家去らば同界に攝するを宣するを云ふ。

攝食界とは、厨房を結界することにて、元來比丘はその食を乞食に依つて得、食物を煮又は食物を貯ふるを得ざるものなるが、實際の僧苑生活に於てはその僧苑內に食物を煮、又は貯ふるは必要なることなれば、內宿（食物と一緒の處に臥すること）、內煮（食物を僧苑內に煮ること）の罪を免がれしめん爲に、特に僧苑中の厨房を結界して、比丘この結界內に立ち入らざれば內宿內煮の罪を犯さずといふ意味なり。

總て上根の人なれば、在家にありても修道を全うし、證悟を得べけん

も、中根下根の人にありては、何等の拘束なしに、修道の實を擧げんことは、不可能なれば、斯くの如き種々の結界法に依り、比丘の外的生活を規定し、煩惱惑染の外襲に備へ修道を全うせしむるなり。

第六章　布薩(說戒)と安居

布薩 (Uposatha, Upavasatha) とは元來近住の義にして、僧衆集合近坐するの意なり。もと外道のなす所なりしが、頻婆沙羅王、比丘の修道に便利あるを見、世尊に請うて佛教内の一行事となさしめしものなり。月の十五日と三十日に、集合に便利なる一定區劃内(結界内)の僧侶相會し、半月の修道を顧みて、己れの足らざる處あれば之を告白し、戒に於て犯せる所あれば之を懺悔して、過まてるを改め道に進み、戒の撮要卽ち波羅提木叉 (Pātimokkha) を誦し、之を聞いて各自反省して次の十五日精進して涅槃に進むの力を養ふものなり。比丘の公的生活に於て、この布薩と安居とは、比丘をして修道にいそしましむる力にして、宗教的意義の豐かなる施設なりとす。波羅提木叉に就いては演習に全文を出したれば、讀者の親しく就いて研究せられんことを望む。

安居及び自恣

安居(Vassa)とは、印度の雨期にありては一は遊行に不便なる爲め、一はその時期には虫類湧き出でゝ步行の際踏み殺さんを恐れて、雨期中一處に居住して遊行せざるを云ふ。この期間に左の三種あり。

（一）　前安居――印度曆第四月十六日入安居
印度曆第七月十五日出安居

（二）　中安居――印度曆第四月十七日より
印度曆第五月十四日までに入安居
印度曆第七月十六日より
印度曆第八月十三日までに出安居

（三）　後安居――印度曆第五月十五日入安居
印度曆第八月十四日出安居

卽ち前安居は印度曆第四額沙荼月 (Āsālha) の十六日(年に依つて異なれども陽曆八月二十七日頃に當る)より、第七額溼縛庾闍月(Assayuja)の十五日(十一月二十六日)に至る三ヶ月九十日間、これ本安居にして、比丘はこの安居に從つて、額沙荼月の十六日より、入安居すべきなれども、事情許さゞるものは、翌十七日より一ヶ月の中間卽ち第五月室羅伐拏月(Sāvana)の十四日までに安居に入るものとす。而してこの室

羅伐拏月の十五日より、迦刺底迦 (Kattika) 月の十四日までの九十日を後安居と稱し、前安居と後安居の中間、卽ち頞沙荼月の十七日より、室羅伐拏月の十四日までに安居に入り、それより九十日間安居して、頞濕縛庾闍月の十六日より迦刺底迦月の十三日までに安居を出づるものを總て中安居と稱せり。場所としては塚間、巖窟内に安居するものあり、村又は邑附近の小屋にて安居するものあり、又は僧苑にありて安居するものもあり。塚間巖窟の場合は別として、小屋又は僧苑にありては先づ房舍を修治し、後、安居に入る。これに心念安居と對首安居の別あり。心念安居は、只一人安居する場合、その附近に比丘なければ、自ら自己の心に向つて茲に安居すべき旨を宣して安居を結する(結するとはなすの義)を云ひ、對首安居は二人乃至三人にて安居する場合、他比丘に對して、安居に入るべきを述べて安居を結するを云ふ。

「大德よ、我れ比丘何某、茲に某所に於て、前三月安居いたします。房舍は修治いたしました」。

かく述ぶること三度、その對人は

「知つて放逸であつてはならない」。「受持いたしました」。

「誰を持律者にするか」。「某師を持律者とします」。

「疑あらば往いて尋ねよ」。「かしこまりました」。

の三問答を授け、終りて安居に入る。因に安居を結する作法は別衆法と稱し、一人に對して告白すれば足れりとせり。

比丘等は平和と相互扶助と沈思と得達とを旨とし食物は多く在家の信者之を運び、彼等は比丘等が來つて、その所有の舍に安居し、自ら行いて彼等の說法を聞くを樂しめり。又この安居中には比丘は他行する事を得ず。他行するも多くその日の中に歸るを常とし、外泊の場合は七日を限りて僧伽の許可を受けて外出す。これを受日と呼べり。もし受日作法せずして他行外出すれば失安居の罪を犯す。又外難起りて他に移らざるべからさる場合出界するを破安居と云ふ。而してこの安居を終りてなすべき事に、自恣と迦絺那衣法と解界と結界との四あり。

自恣 (Parivāra) とは、安居の終れる日、前安居ならば第七月頞濕縛庾闍の十五日、後安居ならば第八迦刺底迦月十五日特に僧伽に向つて、安居中、犯罪に就いて疑あれば恣に告發して責めんことを請ふことな

り。蓋し宗教的寒稽古を終りてその總勘定を受くるが如き意義なりとす。

先づ僧伽集合して、有能の比丘、今日は自恣の日なれば、茲に自恣を開くべきを宣し、次に長老先づ衣を正し一肩に肩掛け、片膝を地に著け、合掌して云ふ。「大德等よ、私は僧伽が私に就いて見又は聞き、或は嫌疑あらば私を責めよと願ひます。大德等よ、私に對し哀憐を以て語つて下さい。私は罪を犯したことを悟ればそれの償を致します」と。三度この宣言を繰り返す。斯くてその罪を語り出すものなければ、合掌を解いて座に就く。斯く順次に下位の比丘に及ぼす。佛陀嘗て五百の大比丘衆と共に、膽波の伽々羅池畔に迦剌底迦月の滿月の夜、安居を終りて自恣をなし給ふ。迦剌底迦月の滿月の夜は水蓮の夜と呼ばれて、月の勝れて善き滿月の夜なり。滴るが如き月光を浴びて、大聖釋尊、寺庭に大衆に向つて、佛陀自身の罪を責めんことを求め給ふ。一人の聲を發するものなく、又咳をも敢てするものなし。滿座寂として只月光の滴たるあるのみ、佛教々團の卽興詩人婆耆舍がこの景に打たれて、卽興の詩を歌ひたることは第一編に既に說ける所なりとす。自恣は布薩の特殊なるものにて、宗教的實踐上頗る意義深きものとす。

迦絺那衣法とは、安居及び自姿終りて、比丘等が、次安居迄一年間著用すべき三衣を調ふるに就いて、五ケ月間、離衣宿戒等の戒法の緩和を受くるを云ひ、迦絺那衣 (Kathina) と稱する衣（形の異なるに非ず、その戒法の緩和を許すことを示す標相として用ふる大衣をこの名を以て呼ぶなり）を受くることに依つて、この戒法の緩和が顯はさるゝが故に、迦絺那衣法と云ふ。迦絺那 (Kathina) とは原義堅固、困難を意味し、衣體堅固なる木綿を用ゆる故、迦絺那衣と呼ぶと云ひ、或は戒を堅固ならしむる理由を以て名づくと云ひ、その迦絺那衣は、浣ふこと染めること、縫ふこと悉く、一日中になさざる可からざる故、困難衣の意味なるべしと考へられ、この衣の奉施は特に功德ある故に、又僧伽この衣を受くれば、その僧伽内の比丘等は皆下に出す五事の開許を得る程この衣が功德ある故に普通に功德衣と翻譯せられ、かく種々の義解ありと雖も、恐らく、迦絺那(衣を縫ふ時の枠)を用ひて、その枠にあてはめて縫ひ上げるものなるが故に迦絺那衣と呼ばれたるも

のなるべし。勿論總て他の衣も迦絺那を用ひて作れども、今は總卽別名にて云ふ。

或る年の安居終りて、Pātheyya の比丘等、世尊を訪ひ奉らんとて、途中雨に逢ふて衣皆濕ふ。依つて世尊はこれを緣として迦絺那衣法を定めて、もし必要ならば（喩へば雨期の爲に衣がじめじめと濕りたるが如き）攝衣界外にても、三衣の一々を纏はずとも、離衣宿戒を犯さず等の五事を開許し給ふ。五事とは左の如し。

1. 三衣の一々を纏はずして、行乞外出をなし得（Asamādanacāra. 第二尼薩耆耶波逸提の緩和）。

2. 招待せられざる家に行乞をなし得（Anāmantacāra 四十六波逸提の緩和）。

3. 別衆食（Gaṇabhojana. 三十二、三十三波逸提の緩和にて、多勢にて一家に行いて食を乞うて食すると、僧伽全體一度に食べずに代り合うて食べることを許さるゝなり）。

4. 必要丈けの衣は取ることを得（Yāvadatthacīvarr. 第一波逸提長衣戒の緩和）。

5. 種々の理由にて僧伽に入りし僧伽所有の衣は分ちて彼等の個人所有となし得（Yo tattha cīvaruppādo so tesaṁbhavīssati）。

第一は、四分律には不失衣とあり、離衣外出を得ることにて、雨期の爲めに濕りたる衣を著けずとも界外に出で得るを云ふ。

第二は、四分律には、食前食後不囑比丘入聚落とあり、平常ならば二人して一家の招待を受けたる場合、他の一人に告げずして、外の招待せざる家に乞行するを得ざれども、安居又は安居後は在家人の供養を喜ぶ時なる故に、又新衣を受くる爲に在家人との交渉の多きを要する時なるが故に、招待を受けざる家へ自由に行いて食を取るを許されたるなり。

第三の別衆食は、四分律にも別衆食とあり、別衆食とはその現前僧中の幾人かゞ分れて別に食を取るを云ひ、平生なれば禁ぜられたることなれども、前に云ふが如く、在家人の供養を好む時なる故一家に多勢にて食を乞うて食するを得、又安居後は故衣をつくろひ、新衣を縫ひ、遊行に出づる等多忙の時なるが故に、手のすき次第食べるといふ

が如く代り合うて別衆にて食べることを許されたり。四分律にては展轉食戒として第四に出せども、南傳にはこの第三の中に入れたり。

第四は四分律には長衣とあり、長衣を蓄ふるは第一波逸提として禁せられたれども、この安居後は、既に著古して壞れ、長き雨期の爲めに濕り汚れたる故衣を、新衣に變へる時なるが故に、衣の分配終りて、新衣を得る迄は、臨時に、且つ所有を定めずして、好む丈け入用丈けの衣を用ゐ得ることを許されたり。他より衣の施入あり、衣の分配終り、三衣を調へ終れば、この特許は消滅す。衣の施入少なく、三衣を調ふること困難なる場合を豫想して、五ヶ月間の許可あるなり。

第五は、四分律にはなく、他より施入に依つて僧祇物（僧伽所有の意）となれる衣を悉く現前僧にて分配所有することを得る許可なり。この許可に依つて、比丘等は正しく、四方僧伽に供養せられたる衣を自己所有に移して、三衣を調ふるを得るなり。

この五事の開制あるは、前述の如く、雨期を終りて新衣を調ふる時節なると、從つて俗家が供養をなして功德を積まんと欲する時期なる等の理由に依りてなり。而してこの五事は安居を完全につとめたる比丘に與へらるゝものにして、破安居、後安居、無歳（法臘滿一年に達せざるもの）、差止、別住の刑を受けたる比丘はこの特權を得ず。而してこの特權の附與は、迦絺那衣の製作に依つて顯はされ、前安居をつとめたる比丘居住の僧伽にては、先づ淨布を得て、次に浣裁縫の主事を僧伽作法に依りて推擧し、この主事をして浣染裁縫せしむ。而してこの迦絺那衣は一日にて作り上げざる可からざるもの故（律語にてこれを卽日來といふ）現前僧これを手傳うて一日に浣洗より染色、裁縫悉くなし終る。既に裁縫し終れば、再び僧伽作法をなして、僧伽之を受け、五事の開許この時より實行せらる。而してその作られたる迦絺那衣は前安居をなし終りし人の中、最も衣の破れたる人に與へ、他の前安居人は心念に受持して、先揭の五特權を得るなり。迦絺那衣は衣體及形等は普通の衣に異なることなきも、只これが安居後の五特權を標示する象徵となるもの故に、特別の名を與ふ、俗家は特にこの衣の奉施を功德ありと喜ぶが故に、早朝に來つてこの衣財を施すなり。五事の開許實行せられて、若し僧伽に貯の衣あればこれを比丘の間に分

配し、貯へなく又施入の衣なければ、比丘は五事の開許を受け五ケ月間施衣の機會を待ち得るなり。迦絺那衣作法語及び、五事の權利を遮止する迦絺那衣遮法は今これを略す。

第七章　衣　食　住

我等は第二編に於て、佛教の出發點が、現實の苦惱の痛感にあり、而してこの苦惱が、その源を我等の心中の樂欲に發することを見たり。されば佛道修行とは、一言にして言へば、心中の樂欲に對する戰鬪たり。外境に對して飽くなき貪欲の心、快樂を逐ふて止まる所を知らざる享樂の心、この心を如何にすべきかの問題は、佛教の終始を蓋ふ大問題なりと云ふべし。先きに論ぜしが如くこの貪欲の心は滅すべきものなるか、將た淨化すべきものなるかの問題は別として、兎に角、この現實に起り來る貪欲心に對する戰鬪が佛道修行なりと云ふを得べし。さればこそ、比丘はその入團の初めに於て、四依の教を受くるなれ。四依とは、一、食は乞食に依り、二、衣は糞掃衣に依り、三、住は樹下に依り、四、藥は腐尿藥に依ることなり。この四依は比丘の一生を通ずる行持にして、修道の要諦この中に攝在すと云ふを得べし。

さり乍ら、若しこの四依をして、唯一つの比丘の生活の樣式として、茲に些少の彈力性をも許さゞれば生活を整ふべき法規は却つて生活を縛し、心そのものが法規の下に呻吟することゝなり、却つて法規制定の趣意を沒するに至る。故に佛陀は提婆が、(一)比丘は終世糞掃衣を纏ふべし。(二)終世乞食に依つて食すべし。(三)一坐食なるべし。(四)常に樹下を家とすべし。(五)鹽及び五味を受く可からずとの五事を制して、比丘の生活を限定せんと請ひし時、その弊の却つて恐るべきを察して之を許し給はざりき。且つ又長き實際の修道生活に於て、單にこの四依を以て、生活を規定せんことは不可能たるべし、それも上根上品の人々のみなればまだしもなれども、數千の弟子を包含する大教團にして斯くの如き狹き生活規定に依りて、實際の生活をなさんことは絕對に不可能なり。されば佛陀は法規は法規として存し、重きを心の持ち方に置きて、宗教の教化に依りて、比丘の心を陶冶し、法規をして心を支配せしめず、心をして自由に法規を越えざる生活をなし得る樣に修養せしめ給へるなり。故に佛陀の制定せられし戒律は、これを外的に見れば、極めて律法的の如くなれども、今一層深く、これを教化の上より見れば、精神に依りて、律法を支配し行くものなり

しを知るべきなり。

されば佛陀の敎化は、時々比丘等の享樂氣分に向つて鐵鎚を下し給ふ。施を受けて食する場合、味覺を貪らんがために、カレー飯の汁と飯とを指先にて混ずべからずと制し、味覺の盛んならんとするや、曠野に於て、一人子の肉を食ふが如くに思へと誡しめ、醱酵の飲料を禁じ給ふも、一はそれに依つて亂心を來さんことを恐るゝと共に、又一には、安價なる陶醉を防がんが爲めなり。又一切の見世物見物觀劇等を禁じ給ふも、稍ともすれば人の陷らんとする藝術的救濟を難じ、その魅惑的趣味を退け給ふなり。かくして精神の方向が樂欲の飽滿を求めず、享樂の趣味に走らずば、必ずしも四依に依つて、極端なる出塵の生活をなすに及ばず。四依は比丘の基礎生活の規範として、その規範以外に餘分（Atireka）を設け給ふ。然し既にその生活が樂欲に對して宣戰せる生活なれば、餘分も又制限なき能はず。故に衣、食、住、藥共に制限ある餘分（Atireka）ありて、凝滯なく修道の生活の車輪を滑かに動かさしめたるなり。以下少しくその餘分に就いて說く所あらんとす。

衣。先づ衣體の方より云へば、糞掃衣(Pansukūlika)は比丘の正しき衣たり。糞掃衣とは冢間塵溜め等に捨てられたる布片を拾ひ集めて、縫ひ合せたるものを云ふ。阿那律尊者は一生涯この糞掃衣以外を受用せざりし人なり。佛陀はこの糞掃衣を正しき衣體として、別に次の六種の衣體を許し給ふ。六種とは亞麻布、綿布、絹布、毛布、麁布、大麻布なり。かく六種の衣體を許し給へるは、在俗の信者の財施の志を無みす可からざると共に、糞掃衣は數多き比丘にありて、必ずしも得易きものに非ざればなり、皮の類は衣としても敷布上掛としても使用を禁せられたれども、邊國にありて事情の異なる所にては上掛として用ゆるを許されたり。斯くの如く衣體に種々あれども、之を糞掃衣に擬して、自他の執着を拂はんが爲に、完布をも縱橫に數多に切斷し更に縫ひ合せて、黄色（Kāsaka）に染むるを法とするなり。又衣の種類の方より曰へば、衣服を著くる用意が、一は禮儀のため、一は寒暑を防ぐにあるが故に、下着衣（Antarāvāsaka 腰卷）、大衣（Sanghāti）、上着衣(Uttarāsangha）の三衣を具ふるを要す。釋尊の當時、印度の佛

教化區域にありて、暑と共に寒を防ぐに三衣にて足れるは佛陀の親しく實驗し給へたることなり。而してこの三衣は鉢と共に比丘の唯一の財產にして、比丘は他に遊行に出づる時、この三衣を纒ひ、鉢を手にして出て、跡に心を留めざること、猶、鳥の翼を負ふて空を飛び行くが如し。

猶三衣以外に用ひられたる衣の種類は、

雨時衣（Vassika satika 雨時安居の時にのみ用ゆ、普通の衣より小形なり）。

覆瘡衣（Kandhu paticchā 瘇物の生ぜし時、膿の他に流るゝを防ぐ布片なり）。

外套（Pāvāra）

掩腋衣（Kacchā. 右肩より左腋に掛ける幅狹き布片にて汗の流るゝを防ぐ）。

帶（Kāya-bandhana）僧伽梨の上をしめるもの。

浴衣（Ūdaka-sātaka 比丘尼の水浴の時用ゆる衣にて、乳以下を覆ふ腰卷）。

等に過ぎず。比丘は三衣一組現に使用するもののみを有するを許されたれども、他人の施に依り又他の事情に依りて餘分を有する場合には、十日以內にその一組を他の比丘に與ふるか、又は衣としての使用を罷めて、他の用に變ゆるを要す。但し邊國にありて事情異なり、自分の留守中に衣を受け乍ら十日以內に歸らざる時は、假令十日を過ぐるも歸りて其の衣を手にする迄は餘分を所有するを得（この場合は所有すと雖も自分の手にはあらざるなり）。

食。食は乞食に依るを正しとす。乞食とは鉢を手にして、村又は町に入りて戶每の入口の前に立ちて食の施さるゝを俟つなり。食を乞ふと云ふと雖も、微かも他の施心を刺擊するの擧に出づ可からず、只默して立ち、與へらるればその功德の、その人を涅槃に導かんことを念じて謝し、與へられざれば去るのみ。而して施者の家を擇ぶることを得ず、貧富を問はず戶每に乞を行ずるを則とす（Sapadhāna）。只學家（Sekha Sammatakula）を避くるを用意とす。學家とは信仰深き優婆塞優婆夷の、家の貧しきに拘らず、施心大にして、敎團の施に其の財を

蕩盡したるものを云ふ。學家を避くるは、學家は既に敎團の責任として園田を與へ、供養物の遺餘を與へ房舍財具を給するに拘らず、彼等は猶己れの衣と食とを擧げて施さんとすることの余りに痛々しければなり。

斯くの如き用意の下に行はるゝ乞食が、比丘の正食にして、尊者薄拘羅の如き、その驚くべき告白(上二五九頁を見よ)に見ゆるが如く、入團以來八十年只この正食に依りて法器を持ち來れり。尊者大迦葉また終生四依の行者たり。大迦葉或る時靈鷲山を下りて、王舍城へ行乞の途次、癩病人の垣に凭りて食するを見、行乞の法則に依りて、先づその病人の側に立つ。病人はその崩れ亂れし手もて、鉢中より食を掴みて、大迦葉の鉢に投ず。大迦葉は退いて樹下に至り、その食を食べて、少しも厭穢の心なかりしと云ふ。されど斯くの如きは、之を範として垂るべきも、未だ全ての比丘に則として强ゆべきに非ざれば、佛陀は、一方財施者の心をも汲みて、餘分として(一)僧伽に寄贈せられし食、(二)僧伽中の比丘を特に名ざして送られたる食、(三)招待、(四)切符にて分配せらるゝ食、(五)二週日毎に施入せらるゝ食、(六)布薩の日に施入せらるゝ食の六種を許し給へり。

次に食物そのものに就いて言へば、印度古代の常食はカレー飯なれば、普通の施食は、白飯とカレー汁と汁の中の菜なり。而してこの三者に就て、前に述べしが如く、美味のために汁の多からんこと、菜の多からんことを望む可からず、又その味を善からしめんために、故意に巧みに三者を混ずべからざるものとす。猶米飯の代りに麨を用ゆることあり、カレーの菜の中には肉、及魚を混ずるを得るも、肉は自分の食用として殺されたる場合、魚は自已の食用として捕はれたるを、見聞き若しくは疑ある場合は不法として禁示せらる。

この外に煎餅、團子、糖菓の如きものあり、午前の食として許され、午後に至りては齒にさわりて食せらるゝものを禁止せらる。これはかの一日一座食の制より來るものにして、食物に四種を分ち、前二者は午前の食、後二者は午前午後を通じて許さるゝものとす。四種とは

(一) 蒲闍尼食 (Bhojanī) 飯、麨、乾飯、肉、魚及び諸種の雜飯、粥等の類を云ひ、正食となるものなり。

（二） 佉闍尼食 (Khajjanī) 果物、糖蜜、團子、煎餅、菓子、砂糖、胡麻、根、枝、葉、華等これにして、嚙んで齒にさはるものを云ひ非正食とせらる。

（三） 漿食 (Peyya) 飲みものにて、これに時漿と非時漿と分れ、時漿には乳、酪漿、羹、米汁、粉汁等の漉さゞるものを含め、午前中の飲料と限られ、非時漿は梨果(mango)、閻浮果、棗果(banana?)、甘蔗、甤果、舍樓伽、婆樓師果、蒲桃等、穀類より作りしものを除き、第二佉闍尼食より取りたる漿を淨漉し澄淸せしめ、初夜まで飲むことを許さるゝものなり。重病の時の藥としては第一蒲闍尼食より取れる肉漿、飯漿等も許さる。

（四） 奢耶尼食 (Leyya) 酥、油、蜜、糖蜜、酪等の舐りて食する食物にて、藥として午後も用ゆることを許さる。

以上四種の食は、これを食物として見れば、食の部に編入し得られ、これを病人の受用するものとして見れば藥の部に入るゝを得、故に玆にては說明をこれ丈けにて留め、藥の下にて今少しく說く所あるべし。

猶玆に一言を加へんとするは、日本にて許され來れる非時食の法なり。饂飩、蕎麥、葛、昆布、素麵、團子、菓子、果物、豆腐、くわゐ、小豆、澤庵等は蒲闍尼食と佉闍尼食にて午後は禁示せられたる食なれども、古例として日本にては非時の食として食するを許され來れり。

住、樹下は比丘の住居として擇ばれ、炎熱の地、樹下、石上は凉風を思はせ、居所としての樹下はさまで苦しからざるが如しと雖も、るが如き暑熱の時は、防熱の設備完たき家屋の內部の樂しさを偲び、風雨の折、又は寒冷の時は、「壁の厚く塗られ、窓の戶の善く閉めれたる」家を思ひ、加ふるに蚊虻の苦ありて、又一の苦行たるを免がれず、されば佛陀は餘分として(一)精舍(Vihāra)、(二)半家根家(Addhayoga)(三)層樓 (Pāsāda)、(四)露臺 (Hammika)、(五)崛 (Guha) 等を許し給へり。頻婆沙羅王、竹林を佛陀に奉献せしを始めとして、須達多長者は給孤獨園を造營して僧伽に献し、毘舍佉女は鹿子母講堂を献上せり。かくて敎線の擴張と共に、比丘比丘尼の數を加へ、彼等の居住せし精舍も數十を加ふるに至れり。林園或は石崖は多く遠離獨棲修習の比丘の居住せし所にして、その主なるものは既に上三二頁に記せし所

なりとす。かく比丘比丘尼等はその敎團所有の精舍、林園を領せしが、これらの寺觀以外に或は陶屋、阿屋（旅行者等のために立てられしもの）に起臥し、或は草鴉に夜を過し、制底に日を送りしことも、その修習時又は遊行時には頻繁たりしなり。斯くの如く、彼等の居所はその種類頗る多しと雖も、村内又は町の中に入りて宿るが如きことは殆んど絶對になかりしものとす。精舍は常に町又は村に程近く、晝に出でゝ食を乞ひ易く、又在俗の信者聞法のために至り易く、夜は人屋を離れ靜寂にして「人いきれなき所」に建てられたり。只比丘尼は身を護るの要あるがため、市中村內にその精舍を有するを許されたり。

藥 (Bhesajja)。比丘の主藥としては、四依に敎へられたるが如く腐尿藥(Pūtimuttaṁ)なり。腐尿藥とは牛尿にハリータキ (Harītaki) 果を入れ、これを土中に埋めて醱酵せしめたるものなり。然し乍ら病はその種類多く、心の病に對して敎化の藥の數多きを要するが如く、身の病に對しても、種々の藥を要することは勿論なれば、その藥が甚しく比丘に不相應ならざる限り、當時の醫學の知識が與へし藥は受用するを許されたり。外科療法の如きも亦、比丘に甚だしく似合はしからざるものは（例へば痔病の時、刀にて患部の切開を受くるが如きは比丘に不相應なることゝなさる）禁止せられたるを見る。

扨て上に說きしが如く、上出の四種の食は法器を維持する材料として見れば、之を食に攝すべく、病を對治する材料として見れば、之を藥に攝し得べし。故に佛陀は病比丘の事緣ある每に、藥を開して時藥、非時藥、七日藥、盡形壽藥の制を立て給へり。古來、律宗にては、總ての食を飢渴の二病を除く藥と見て、藥法の下に、總ての食を攝して論ずる例なれども、既に四依の本制ありて、衣食住藥として、食と藥とを分別したるが故に、予は反復の嫌あるを恐れたれども、食と藥との別項を設けて說明するの至當なると又便宜なるとを信じて、分別せり。

（一） 時藥　午前中にのみ、受用すべきものゝ意味にて、（a）蒲闍尼食、（b）佉闍尼食、（c）時漿あり。（說明は食の下を見よ）。

（二） 非時藥　午後に飮むを許さるゝものにて、上の漿食の下に出せし果漿及び肉汁、血、米穀の汁なり。酒も油を飮み易くする爲め、

色と香と味を無くして少量に用ゆることを得。もし日本の律傳の如く非時食を許すとせば、この中に非時漿藥と非時食藥とを分つべし。

（三） 七日藥 七日の間自己の受用物として貯へ得るものゝ意味にて、比丘普通の五藥、生蘇、蜜、糖蜜、酪、油を云ふ。七日藥なるが故に、七日貯へ終れば、看病人、又は淨人（Kappiyakāraka 料理して食し得る様にして吳れる人、喩へば果物は生命あるが故に、比丘は直接に果物を食するを禁ぜられ、淨人二三度その皮に刀を入れ適當に致しましたと三回稱へて與ふるなり）に施さゞるを得ず。且つ又規則として比丘はこれらの食物を自室內に貯へ、又自ら煮ることを禁ぜらる。

（四） 盡形壽藥 食物に非ざる藥、又食物にしても、食氣を起さゞるものなるが故に貪著の心を起さしめず、從つて生涯自室に貯ふるを許され、又自ら煮るを許さるゝもの。これには種類頗る多し、左に列名してこの項を終るべし。

根

薑黃	生姜
鳶尾草	白鳶尾草
Ativisa	黑藜蘆
Usīra	Phadda muttaka
及その他の根	

葉

Nimba	Tulasi
Kuṭaja	Kappāsika
Paṭola	及び他の葉

香料（食欲を出さしめん爲め食物に加ふるもの）

Nimba	Nattamāla
Kaṭaja	Sakkava
及び他の香料	

果物

Vilaṅga	Āmalaka
Pippala	Myrobalans
Marica peppers	Gotha

Harītaka　　Vibhītaka
及び他の果物

ゴム

Hingu　　Takapatti
Hingu lac　　Takapanni
Sipāṭika　　Sajjulasa
Taka　　及び他のゴム

鹽

海鹽　　Ubbidā 臺所鹽
黑鹽　　赤鹽
岩鹽　　其他

香粉（瘡物を乾かす爲めに用ゆるもの）

目藥

黑塗料　　Geruka
Rasa 塗料　　Kapalla
Sota

目藥に混する香

旃檀　　Kaliya
多伽羅香　　Bhaddamuttaka
黑 Amisāri

大便、小便、灰、土、燒米灰、牛尿等。

第八章　個人所有と僧伽所有

我等は茲に、人類顯現の初まりに關する佛教の神話を紹介して、所有に對する佛教的觀念を明にし置くことの便利なるを感ず。

成劫の初め、天人、光音天より此の世界に下生して人類の祖となる。彼等は喜を食として未だ他の食を取らず、從つて身體頗る輕快なりしが、彼等は地上に數寸の厚さに布かれたる地味を嘗めて、初めて貪の心あり。その貪の心の增盛するに連れて地味隱る。然れども野に米稻生じて耕さゞれども彼等の用を俟てり。依つて彼等は食時に米稻を刈りて食とす。中に懈怠のものあり、食の時每に野に行くを煩はしとなし、數回分を刈り貯めて用に供す。茲に所有の觀念顯はれて貪著の心募る。貪著の心增して野生の米稻姿を沒し、初めて人、食を得るに勞苦を要するに至る。勞苦して食を得、貯へて他の奪はんことを恐る。依つて力と智慧ある人を、推選して王者の位に卽かしめ政を見せしめ、巡邏を設けて各人の所有を守らしむ。事漸やく繁くして人間の苦惱漸く增すと。

我等は今は、この神話が含蓄する深遠なる意義を研究せんとするものに非ず、只、所有といふ事實が、懈怠と貪欲の心より衝動せられて起れるものなりといふ佛教的見方を示せば足れり。

抑も我等の迷妄の起原は、既に第二編法の下にて述べたるが如く、「我」を他より切り離して個別的に觀じて之を愛著するより起る。「我」は帝網重々の大法界大生命の一結子にして、茲に有愛及び勝有愛を起すべきものに非ず、自然自爾の生活に歸れば、江河の流れの滔々として、海に向ひ海に傾き海に入りて停まるが如く、大生命の流れに掉し、法性常樂の涅槃に入りて停まるなり。さればこそ「諸法無我」は佛教三大旗幟の一にして、その中に所有の觀念を否定せる無我所を合せ含めて云ふなり。

我等既に欲の心より、所有の觀念に支配せらる。從つて我等の心は物の支配を受けて、その囚はれとなる、今我等の心をしてこの物に役せらるゝの境を脫せしめんが爲に、佛陀は物の實相を明かにして諸行無常と敎へ、ものみなは遷流變轉の法なれば無價値にして我所と執す

べきなしと敎へ給ふ。之を主觀的に曰つて無我と敎へ、客觀的に無我所と示し、任運自爾の生活に入らしむ。

敎旣に斯くの如くなれば、敎團の實際生活に於て、物質に對する比丘の態度も自ら明かなりとす。物質は嘗て心を役せし潜越の座より下りて、己が正當の位置に下り、法器を持ち、生命を繼がしむるものとなれり。衣は寒暑を防ぐと禮義を守るため、食は法器を持たしむるため、住は雨露をしのぐためのものなり。これ四依の本制ある所にして、假令律令として佛陀の制令なしとするも、苟も佛陀の敎を奉して涅槃の道行に進むものならば、取つて則とすべき生活態度なりとす。さればこそ、既出の如く、大迦葉は終生四依の本制に從つて頭陀行を守り、阿那律も糞掃衣を著け鉢食又乏しきを堪へ、憍陳如も森に退いてその晩年を送り、死して衣物の價僅かに五錢なりしなれ。

然し乍ら、一人の比丘として、その生活に要する器具は、三衣一鉢以外に種々あり。この生活の要する器具は或は個人所有として、或は現前僧物(その住所に現に住する比丘の共有物の義、輕物と稱す)として、或は四方僧伽の所有(重物と稱す)として許さる。

先にも云ふが如く、一概に比丘と稱すと雖も、數千の團員を包容する敎團にありては、上根の機あり、中根の機あり、又下根の機あり、大迦葉の如き上根にして特に峻嚴の性格の人は、四依の本制に從つて生活し、その生活の要具は、安陀會(下着衣 Antarāvāsaka)、僧伽梨(大衣 Sanghāti)、鬱多羅僧(上着衣 Uttarasanghā)、鉢(Patta)、針(Suci)、濾水囊(Parissavana)、帶(Kāyabandhana)、剃刀(Vāsi)の八物なり。これを比丘の八物と云ふ。(北方にては、安陀會、僧伽梨、鬱多羅僧、鉢、濾水囊、尼師壇=坐具の六物とす)。

中根の機類にありては、上の如き生活は餘りに簡單峻嚴にして堪え難き所なれば、普通の比丘の生活の要具、下駄(Pāduka)、靴(Upāhana)、襪、楊子、耳ホジリ、ピンセット、爪切り、指はめ、拂子、扇、藥壺、手巾、面巾、坐蒲團、蚊幮等その所有として許さる。後世百一物の名目あるは、種々の要具を一個づゝ所有するを許さるゝの義にして、百は多數を示すの意なりとす。

又下根の機にありては、上二根の如くその生活を單純化する能はざ

るが爲に、佛陀は彼等の爲に猶別の餘裕を設け給へり。喩へば長衣を受けて(長衣とは、身に着用する以外の餘衣の義)十日間はこれを保存するを許され、衣鉢を受くる代りに衣鉢を償ふべき價を受け、料理せる米穀果實の外に未料理の米穀果實を受くるを許されたる等これなり。但し長衣は十日間内に他に施與せざる可からず、未料理の米穀果實は、在家の淨人をして、食ふるに適當なるものとなさしめざる可からず、衣鉢の代價は淨人をして代つて受け取り、己れの爲に衣鉢を償はしめざる可からず。猶この外に說淨の法あり。說淨の法とは、これに依つてその長衣を十日以上貯へ乍ら、三十尼薩耆波逸提の第一長衣戒を犯すことを免がれしめ、種果を食して第十一壞生種戒を犯すを免がれしめ、錢寶を貯へてしかも第十九畜錢寶戒を犯すを免がれしむるものにて、下根下品の比丘の爲に特に開制し給ひたるものなり。後世の比丘は多くこれに依つて便利を受く。これに二種あり、一を眞實淨と云ひ、淨人若くは同心の比丘に預け置き、必要の場合に、その淨主(預り主のこと)に問うて用ゆるを云ふ。二に展轉淨とは、第三者に依りて不在の比丘に淨施し、而もその比丘不在なるが故にその施物を自己の處に置き、必要なれば隨意に用ゆるを云ふ。但し常にその比丘に與へたりといふ思を有せざるべからず。又淨人も同心の比丘も居らざる時は、獨り淨施法に依り十日毎に、淨施すといふことを繰り返せば足れりとす。

次に伽藍、園林、果樹、住房、住房附屬物、銅瓶、燭臺、木牀、繩牀、臥褥、枕、氍氀、車轝、澡罐、錫杖、守伽藍人等は、僧伽全體の所有にして、之を四方僧物と稱し、又重物と稱す。僧伽に屬する比丘は、僧伽物管理者の監督の中に、自由に受用することを得。

假りに茲に一比丘病死すとすれば、その比丘の所有物(これを無常物と云ふ)中、三衣はその看護の比丘の所有に歸し他の輕物は悉く、現前僧物(卽ちその病比丘の住せし所の僧伽の所有)となる。沙彌の無常物は師匠の有に歸し、別住者の無常物は屍と共に燒くを法とす。別住者はその時僧外の人なれば也。

斯くの如くして、佛陀は機の上下に從つて寬狹あれども、個人の所有を限定して、是を最小限度に留めしめ、他を現前及び十方僧伽の所

有として、律令の上よりしても、比丘等の所有觀念を破り、我と我所との迷妄を知らしめ、道行に進ましめ給へり。

第九章　僧伽作法及び滅淨法

予は既に、入團作法の項以下に於て、種々の作法に就いて記す所ありしが、今一括してその作法の性質意義種類等を説明せんとす。

作法とは原語羯磨 (Kamma) の譯語にして、教團會議の方式を云ひ、その普通なるものより云へば、參列、動議提出、討議、決議、開散の五樣式よりなり。參列は、その議事の性質に依りて、全員出席と否との區別あれども、その主なるものに依りて云へば、全員出席に依りて初めて會議の合法性を生じ、病氣等のために參列する能はざるものは、與欲(屆出)を送りて、その結議に不同意なきを示さゞる可からず。全員集會して、次に先きに撰ばれたる羯磨師(作法師)、先づ動議を提出して、續いてその動議に就いて、各員の意見を聞かんことを求む。茲に討議と云ふと雖も、寡默を守る比丘の集會なれば、世の常の會議の如く、喧擾に論議するに非ずして、その動議に對し、贊するものは默し、反對するものはその意見を述ぶるのみ。茲に發言する物なければ、作法師は動議をその儘に決議として宣言し、反對意見あれば、審に聽取したる上、多數決に依つて其の贊否を決し、最後の決議を宣して解散するなり。而してこの動議の提出、意見の聽取、決議の宣言に用ひらるゝ語の形式は作法語 (Kammavāca) と稱せられ一定せり。

而してこの作法には、それに出席する人數の上よりして云へば、一人にてなす作法あり、二人又は三人にてなす作法、四人以上にてなす作法あり。一人にてなす作法は心念作法と稱し、輕き突吉羅罪を犯し懺悔する場合、自ら自らの心に對して懺悔するを曰ふ。二人又は三人にて爲す作法は、對首作法と稱し、三衣や鉢を受持し、又は捨する場合に他の一人又は二人に對して、その受持又は與捨の事を告ぐるが如きこれなり。四人以上にてなすべき作法は、衆法作法と稱せられ、これに四人以上にてなす作法、五人以上にてなす作法、十人以上にてなす作法、二十人以上にてなす作法の四種あり、自恣、受戒、復席(出罪)の三作法を除き、他の衆法作法は皆四人以上の人數に依りてなされ、自恣作法、邊國の受戒作法等、中國の受戒作法、復席作法を除きたる他の總ての衆法作法は、五人以上にてなすことを得、復席作法を除き

たる他の總ての衆法作法は、十人以上にてなすことを得、復席作法以下總ての衆法作法は二十人以上にてなすことを得るなり。復席作法は重罪の比丘の、一度、放逐の刑を受けたるものを再び僧伽內の一員に引き上ぐる重大なる作法なるが故に、二十人以上の僧衆を得ざれば、作法を爲すことを得ざるなり。

更にこれを、その作法の上よりして、衆法作法を白羯磨、白二羯磨、白四羯磨に分つ。

白羯磨とは、一白(告知)作法にて、日常の行事の輕き事柄に用ゐ、その事件には、僧衆の同意不同意を求むる要なきが故に、たゞ僧伽の前にて告知するのみなるを曰ふ。例せば、剃髮の時の告知、迦稀那衣を受くる時又は捨する時の告知、布薩及び自恣の告知等より、三十尼薩耆波逸提中二十七尼薩耆波逸提の懺法も、亦この白羯磨を用ゆ。

白二羯磨は、一白一羯磨にて、一白は動議の提出、一羯磨は一返、僧衆の同意不同意を求むるなり。而して不同意者ならざれば動議の如き決議を取るものなり。安居中、受日乞法(安居中外泊の許可を乞ふ作法)、離宿指定作法(攝衣界の結界作法)、大房舍處分作法、外道四月別住試練作法、痴狂者に對する作法、僧物布施の作法、看病の比丘に衣を與ふる作法、尼僧團へ遣はすべき敎誡僧を定むる作法、令謝罪作法、淨地結界(攝食界)等皆この白二羯磨に依りて行はる。

白四羯磨は一白三磨羯にて、一動議提出、三返意見の聽取をなすものにて、事件が重大なる故に、慇懃綿密に事を運び、三返同意不同意を聞き、反對するものなければ、動議の如き決議を取るなり。この作法を秉する(律語にて、行ふの義)時には、結界內の衆僧悉く集合し參加するを要し、病にて臥し、又は法緣にて他出の場合、缺席せざるを得ざれば、與欲して、その決議に同意するの意を申し送る必要あり。受戒作法、追放、擯斥等の治罰作法、滅諍作法及び僧殘懺法等は皆この白四羯磨に依る。

對首作法中に二あり。一は衆法對首作法、二は普通の對首作法なり。衆法對首作法とは衆法作法にてなすべき事件なれども、その地に數多き比丘居らざる爲め、對首作法にてなすものを云ふ、喩へば布薩及び自恣作法、死僧の衣物を分與する作法等は元來衆法作法なれども、僧

衆居らざる場合には一人又は二人の比丘に對してなすなり。普通の對首は上述の如し。

心念作法には三あり、一は衆法心念作法、二は對首心念作法、三は普通の心念作法なり。衆法心念作法、對首心念作法は衆法作法又は對首作法になすべきものを人數なきため、只一人にてなすもの、普通の心念作法は上出の如し。

次に二百五十戒に加へられたる七滅諍法も、僧伽の作法に屬するものにて、諍の起らんとする場合、若くは起りたる場合、その諍を靜むる法にて、かゝる場合、その僧伽の上座、又は律に明かなる人が、適當に處置して其の諍を滅せざれば、突吉羅罪を犯すことゝなるもの故に、二百五十戒中に列するなり。僧伽の諍には先に出せしが如く言諍、覓諍、犯諍、事諍の四種あり。これを滅する方法として、左の七種の滅諍法の制定あるに至れるなり。

(一) 現前毘尼 (Sammukha vinaya) 僧伽中、敎と律とに就き、又は罪の犯不犯、及びその重輕に就いて諍議起れる場合、之を靜めんが爲になす作法にて、第一に僧伽總て出席し、出席し能はざる比丘は、その決議に不同意なき旨の承認 (Chanda 與欲)を送り、第二に依つて以て論議の正邪を決すべき敎法と律との出席あり、第三に論議の當人原被兩告出席して、事理を明白ならしめて論議を決す。若しその僧伽にて決することを得ざれば、他の僧伽にその問題を移して正邪を決せしむ。又、比丘罪を犯し、その罪が放逐、差止、令謝罪、呵責等の刑に相當し、僧伽にしてこれらの一を課刑せんとする場合には、犯人を僧伽の前に出席せしめ、審問の上自白せしめて然る後、課刑の作法をなすが如き、この現前毘尼に屬す。

(二) 憶念毘尼 (Sativinaya) 比丘ありて、他より無根の罪を以て難せられし場合、もしこの事件を不問に付せば諍議の起る端となるやも知れず、依つて僧伽の集會を促がし、その席上にて、所定の作法に依り、嫌疑を受けし比丘に、「汝重罪波羅夷を犯せるを憶念(記憶)するや否や」と問ひ、「我れ斯くの如き犯罪を憶念せず、我れ生れて以來、夢の中にても斯くの如き犯罪をせしを知らず」と云ふ答を得て、玆に憶念毘尼作法をなす。卽ち嫌疑を受けし比丘、一肩に上着衣を著け長

老比丘の足を拜し、右膝を下につけ、合掌して曰ふ、「大德等よ、私は某々等に依つて無根の破戒の嫌疑を受けました。私はその事柄に對し、極めて正しき記憶を以て茲に僧伽に憶念毘尼を乞ひます」。斯くの如く請ふこと三度、茲に於て僧伽は、有能の比丘を選んで作法師となし白四羯磨に依つて、僧伽の同意を求めて、その清淨を證明し、茲に其の事件を終るものなり。

（三） 不癡毘尼（Amūlha vinaya） 比丘事緣に依りて迷亂し、種々比丘として不似合なる言行あり、後正氣に返りて後悔しつゝあるに、他の比丘猶强いてその所行を追及する場合、該比丘僧伽の前にその證明を乞ふ、僧伽依つて白四羯磨をなして、痴狂中の不故心犯罪なるが故に、今正氣に歸れば、清淨僧なりと證明して、事件を終らしむる法なり。

（四） 自言毘尼（Patiññāya） これは犯罪の比丘に課刑するには、必ずその自白を俟つてなすべき規則なり。喩へば輕き突吉羅罪を犯せるものには、他の一人警告してその罪を知らしめ告白せしめて、之を懺悔せしめ、重き尼薩耆波逸提罪又は波羅夷罪なれば、僧伽の前にて警告して、その罪を知らしめ告白せしめて、放逐、差止、依止、令謝罪、呵責それぞれ相當の刑に處するなり。斯くして諍議なからしむるなり。

（五） 多人語毘尼（Yebhuyyasīkā） 比丘の犯罪又は他の事件に就いて、僧伽中に諍論を生じ、論議盡きずして猶盛んならんとする時には、茲に符票を以て決を數に取ることを許さる。但し、その取票者は有能にして公平なる人を選ぶを要し、取票の用意としては僧伽の分裂を來すが如き恐れある場合には取票せず、投票は極めて各自の自由意志にてなさしむる樣なさゞる可からず。

（六） 罪處所毘尼（Tassa Pāpiyyasikā） 比丘罪を犯して、僧伽の中にて尋ねられ、一度は告白し、一度は否定し、妄語する場合、この妄語より、僧伽中に諍論の端を起さんことを恐れて行ふ作法にて、先づ僧伽中にて、その罪を指摘し、その罪を憶ひ起さしめ、然る後罪を宣告して、作法師、僧伽に諜りて、その罪よりも重い罪に該當する刑を課して、その諍論を未然に防ぐ。この刑に處せられたる比丘は比丘とし

ての多くの特權を失ふなり。

（七） 草覆地毘尼（Tiṇavatthāraka） 比丘等互に相爭ひ、事件紛糾し來りて、之を現前毘尼にても多人語毘尼にても決すること能はず、若し、强いてなさんとすれば僧伽の分裂を來すが如き恐れある場合、僧伽作法に依りて、僧伽全體の合意の上に、草の地を覆ふが如く、その諍議の事件を葬り去ることゝなり。但し、四波羅夷罪の如き重罪と、事の俗人に關する事柄は、この法にて葬り去ることを得ず。

この中、上に擧げたる四種諍が如何なる滅諍法に依つて靜めらるゝかと云へば、言諍は現前毘尼と多人語毘尼に依つて決せらる。卽ち、現前毘尼にて靜むるを普通とし、若しそれにて決せざれば、事件を他の僧伽に移して論諍を決せしめ、事件の紛糾にて、多數の比丘の出席が却つて不都合なれば委員會を開いて決議せしめ、斯くして猶正邪を決する能はざれば票符に依つて多數決に依るものとす。この投票法にも、今日の記名と不記名に相應する秘密投票、囁きの投票、公然投票の三種あり。

覔諍は、現前毘尼と憶念毘尼、現前毘尼と不痴毘尼、現前毘尼と罪處所毘尼との何れかに依つて決せられ、犯諍は現前毘尼と自言毘尼、現前毘尼と草覆地毘尼に依つて決せられ、事諍は現前毘尼にて決せらるゝなり。

かの有名なる毘舍離十事の非法事件は、所謂この四種諍の中、言諍にして、七滅諍中の現前毘尼と多人語毘尼に依つて決せられたるものなるが、毘舍離自由派の比丘等が、この決議に服せずして、異派をなし敎團の分裂を來したるは、その論諍の出發點がいかにもせよ、決議に對する態度よりして波逸提罪を犯せるものと見ざる可からざるなり。

* * * * * *

吾人は玆に此の僧伽作法の項を終らんとするに至りこ僧伽作法語の二三を譯錄して、讀者の便に供せんとす。

（a） 自恣作法語（白羯磨）

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。今日は自恣の日であります。僧伽にて若し都合好ければ、僧伽は玆に自恣を致します。

(b) 布薩堂を定むる作法語(白二羯磨)

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。若し憎伽にて都合好ければ、僧伽は斯く々々の精舍を布薩堂と定めます。これが動議であります。

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。僧伽は斯く々々の精舍を布薩堂と定めます。若し諸師にして善しと思はゞ默してゐて頂き、惡しと思はゞ發言して頂きたい。

斯く々々の精舍は僧伽に依つて布薩堂と定められました。僧伽は善しと思ふが故に默してゐられました。私は斯く了受します。

(c) 布薩堂廢止の作法語

文句前に同じ、只「かく々々の布薩堂を廢する」の語を「斯く々々の精舍を布薩堂と定むる」の語と代ふ。

(d) 離衣宿界を定むる作法(白二羯磨)

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。同住一布薩界の結界が、僧伽に依つて定めてありますが、(この結界作法語に就いては上四二〇頁を見よ)、若し僧伽にて都合善ければ、この結界內にて、更に三衣を著けずとも三衣を離れざるものとなる地域を、村及び村附近(村とは律語にて、婦人の住する俗家を指して云ふ)を除いて定めます。これが動議であります。

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。同住一布薩界の結界が僧伽に依つて定めてありますが、僧伽はこの結界內にて、更に三衣を著けずとも三衣を離れざるものとなる地域を村及び村附近を除いて定めます。若し諸師にして善しと思はゞ默してゐて頂き、もし惡しと思はゞ發言して頂きたい。

僧伽は結界內に、更に三衣を著けずとも、三衣を離れざるものとなる地域を、村又は村附近を除いて定めました。僧伽は善しと思ふが故に默してゐられました。私はこの樣に了受します。(この結界に就いては上四二〇頁を見よ)。

(e) 同結界革除の作法、(b)に準じて知るべし。

(f) 屋舍の位置見分者指定作法語(白二羯磨)

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この斯く々々の比丘は貰ひ集めた材料で、他人を主としない、自分の爲めに作られる小舍を作りたいと欲し、僧伽に小舍の位置の見分を願うてゐます。若し僧伽にして都合好ければ、僧伽は斯く々々の比丘を、斯く々々の比丘の小舍の位置見分に指定します。これが動議であります。

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この斯く々々の比丘は、貰ひ集めた材料で、他人を主としない、自分の爲に作られる小舍を作りたいと請うてゐます。僧伽は斯く々々の比丘を、斯く々々の比丘の小舍の位置見分者に指定します。若し諸師にして善しと思はゞ默してゐて頂き惡しと思はゞ發言して頂きたい。

僧伽は斯く々々の比丘を、斯く々々の比丘の小舍の位置見分に指定しました。僧伽は善し

さ思ふが故に默してゐられました。私はこの樣に了受します。

(g) 別住を與ふる作法語(白四羯磨)

大德等よ、私は僧殘罪を犯しました。さうして一日(乃至十日)之を覆くしました。大德等よ、私は僧伽に、覆藏した丈け相當の(日數)の別住を乞ひます。

(この願を三度反覆する)

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この比丘は僧殘罪を犯し、一日(乃至十日)覆藏いたしました。彼は僧伽に覆藏した丈け相當の(日數)の別住を請うてゐます。若し僧伽にして都合好ければ、僧伽はこの比丘にその覆藏した丈け相當の日數の別住を與へます。これが動議であります。

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この比丘は僧殘罪を犯し、一日(乃至十日)覆藏しました。彼はその覆藏した丈けの(日數)の別住を請うてゐます。僧伽はこの比丘に覆藏した丈けの(日數)の別住を與へます。諸師にして善しさ思はゞ默してゐて頂き、惡しさ思はゞ發言して頂きたい。

(この意見聽取を三度反覆する)

僧伽はこの比丘にその覆藏した日數に相當の別住を與へました。僧伽は善しさ思ふが故に默してゐられました。私はこの樣に了受します。

私は別住を守ります。謹しんで務を守ります。

私は別住を守ります。謹しんで勤を守ります。

私は別住を守ります。謹んで勤を守ります。

大德等よ、私は僧殘罪を犯し。一日(乃至十日)覆藏しました。大德等よ、私は僧伽に私の覆藏した日數の別住を請ひました。僧伽はその覆藏した日數の別住を私に與へられました。私は別住致します。大德等よ、私は知られました。僧伽が「私が知られた」さ云ふこさを承認し給はんこさを願ひます。

(h) 六夜摩那埵を與ふる作法語(白四羯磨)

私は別住を離れます。私は務を離れます。

私は別住を離れます。私は務を離れます。

私は別住を離れます。私は務を離れます。

大德等よ、私は僧殘罪を犯し、一日(乃至十日)覆藏しました。大德等よ、私は覆藏した日數の別住を僧伽に請ひ、僧伽は私に覆藏した日數の別住を與へられました。大德等よ、私は別住を住み終うせました。大德等よ、私はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を僧伽に願ひます。

(この願を三回反復する)

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。此の某比丘は僧殘罪を犯して、一日(乃至十日)覆藏し、その覆藏した日數の別住を僧伽に願ひました。僧伽はその覆藏した日數の別

住を與へました。彼はその別住を住み終うせました。この某比丘はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を請うてゐます。僧伽にして都合好ければ、僧伽はこの某比丘にその僧殘罪に對する六夜の摩那埵を與へます。これが動議であります。

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この某比丘は僧殘罪を犯して、一日（乃至十日）覆藏し、その覆藏した日數の別住を僧伽に願ひました。僧伽はその覆藏した日數の別住を僧伽に與へました。彼はその別住を住み終うせました。この比丘はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を請うてゐます。僧伽はこの某比丘に六夜の摩那埵を與へます。若し諸師にして善しと思はゞ默つてゐて頂き、惡しと思はゞ發言して頂きたい。

（三度この意見聽取を反復する）

僧伽はこの某比丘に、僧殘罪に對する六夜の摩那埵を與へました。僧伽は善しと思ふが故に默してゐられました。私はこのやうに了受します。

私は摩那埵を守ります。私は務を守ります。

私は摩那埵を守ります。私は務を守ります。

大德等よ、私は僧殘罪を犯し、一日（乃至十日）覆藏しました。大德等よ、私は僧伽に私の覆藏した日數の別住を請ひました。僧伽はその覆藏した日數の別住を私に與へられました。大德等よ、私はその別住を住み終うせました。大德等よ、私はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を僧伽に請ひ、僧伽はその僧殘罪に對する六夜の摩那埵を私に與へられました。私は摩那埵を行ひます。大德等よ、私は知られました。僧伽が「私は知られた」と了受し給はんことを願ひます。

（ｉ） 復席作法語（白四羯磨）

私は摩那埵を離れます。私は務を離れます。

私は摩那埵を離れます。私は務を離れます。

私は摩那埵を離れます。私は務を離れます。

大德等よ、私は僧殘罪を犯し、一日（乃至十日）覆藏しました。大德等よ、私は覆藏した日數の別住を僧伽に請ひ、僧伽は私に覆藏した日數の別住を與へられました。大德等よ、私は別住を住み終うせました。大德等は私はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を僧伽に請ひ、僧伽は私に六夜の摩那埵を與へられました。私は摩那埵を果し僧伽に復席を願ひます。

（この願を三回反復する）

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この某比丘は僧殘罪を犯し、一日（乃至十日）覆藏し、その覆藏した日數の別住を僧伽に請ひ、僧伽はその覆藏した日數の別住を與へました。彼はその別住を住み終せました。この比丘はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を請ひ、僧伽はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を與へました。彼は摩那埵を果して、僧伽に復席を請うてゐます。僧伽にして若し都合好ければ、僧伽はこの某比丘を復席させます。これが動議であります。

大德等よ、僧伽は私の云ふ所を聞いて下さい。この某比丘は僧殘罪を犯して、一日（乃至十日）覆藏し、その覆藏した日數の別住を請ひ、僧伽はその覆藏した日數の別住を與へました。彼はその別住を住み終うせました。この某比丘はその僧殘罪に對し、六夜の摩那埵を請ひ、僧伽は彼に摩那埵を與へました。彼は摩那埵を果して、僧伽に復席を願うてゐます。僧伽は彼を復席せしめます。若し諸師にして、善しと思はゞ默してゐて頂き、惡しと思はゞ發言して頂きたい。

（この意見聽取を三回反復する）

僧伽は某比丘を復席せしめました。僧伽は善しと思ふが故に默してゐられました。私はこの樣に了受いたします。

第十章　以上の法規が生活に及ぼせし實際的生活

以上吾人は、佛教々團の制度及法規の大體を略叙せり。茲に於て、吾人は眼を轉じて、これらの制度及び法規が、比丘の實際生活に對して、如何なる影響を及ぼせしか、その出家の唯一の目的たる涅槃の實現に對して如何なる力を與へしかを見ざる可からず。

古語に曰く、迷上の四句は四句皆非なり、悟上の四句は四句皆是なりと。簡易の生活そのものが是なるに非ず、禁欲の生活そのものが是なるに非ず、遠離の生活そのものが是なるに非ず、和合の生活そのものが是なるに非ず。迷情倒想の下よりする生活なれば、又、その迷情倒想よりする利用を妊む生活なれば、假令それが、簡易、禁欲、遠離、和合のものなりとも、畢竟するに、魔境の生活にして、道の生活に非ず。佛教々團生活は、涅槃の實現てふ一大理想の炬火に照され、既に佛陀と云ふ涅槃の體現者のなし給へる生活なれば、その生活の簡易は修道の妨害を少なくする爲忽、禁欲は、欲情を妨止して眞智の開顯を得るため、遠雜は、世間の忽忙を離れ、道に驀進する爲め、和合は相携へ相助けて共に涅槃を實證せん爲めなり。故にその生活は、苦行者の生活の如く自苦の生活に非ず、樂欲者の生活の如く耽樂の生活に非ず、所謂二邊を離れたる中道の生活にして、この中道の生活が、最も健全に涅槃の實現に達すべき道なるが故なり。この中道の生活の中にありては、上根上品の人は、所謂頭陀行を行じて、四依本制の生活をなし、下根下品、世の垢欲深きものは、暫らく許されたる餘分の生活をなして目的にすゝむ。要は道の爲めの生活にして、生活の爲めの道に非ず、道のためにその本性に從つて生活を改造するは善し、生活の爲めに道の體現を抑壓すべからず。さればその生活は、法然上人が、「在家にて念佛申されずば出家にて申すべし、出家にて念佛申されずば在家にて申すべし」と宣ひし念佛の生活に同じく、理想體顯の爲めに最も都合好き生活なりとす。茲に道の權威あり、宗教の力あり、我等は先に印度の教學史に於て、道が道として、宗教が宗教としてその獨立を宣し、權威を示せしは釋尊より初まると云ひしはこれが爲めなり

とす。

佛教々團中には、或は王家の難を恐れて出家せしものあり、或は貧に迫られて教團に衣食せんがために出家せしものありと雖も、その最も多くは信ありて佛陀の跡を踏まんが爲めに出家せしものなり。其の家族の大小はあれ、その財寶の多少はあれ、皆その家族と財寶とを捨てゝ乞食の群に入りしものなり。世尊宣はく、「比丘等よ、乞食は生活の最後のものなり。鉢を手にして、世に卑しめられて乞食をなす。しかも比丘等よ、良家の子は豐かに生活し乍ら、その豐かな生活を捨てゝ乞食に入れるが、そは王の恐れに依つてに非ず、盜賊の恐れに依つてに非ず、借金の爲めに非ず、恐怖の爲めに非ず、生活の困難の爲に非ず、唯生老病死愁悲苦憂惱の全苦蘊を滅せんが爲なり」と。比丘等が乞食に依るは、その生活全體を證悟の目的の爲に提供し、一座食の制を守るはその少食に依つて頭腦の働きを明快にし、以て道の思念に專注せんが爲めなり。閑靜の所に住し、樹下を家とするは、その執着を一掃して道念に豐滿ならんが爲めなり。須菩提嘗て歌ふらく、

我が小屋は善く葺かれ善く覆はれたれば、
雨よ、思ひの儘に降れよ、
我が心又善く靜まり、惡汚(けがれ)を脫れ、
いと熱心に住めば、雨よ、心の儘に降れよ(上座偈)

と。以て其の道念の堅く修善の深きを知るべし。四依の本制を立て、個人の所有を八物に限るは、物質に對する根本觀念を改造して、所有の衝動を殺ぎ、從つて一方には諸行無常の物質が執着に値ひせざるを示すと共に、一方には、施物に依つてする比丘生活が全然他に依るもの(Parapatibaddho me jīvikā)なるを以て、物資に對して最も敬虔に使用の態度を取らしむるなり。憍賞彌國優顚王(Udena)の後宮 Sāmavatī 皇后、阿難に五百領の衣を送る。優顚王怒り且つ怪みて阿難に至り、左の問答をなす。

「大德は斯くの如き多くの衣を如何に處置せらるゝや」
「大王よ、私は衣の破れた比丘等に分ち與へます」。
「その破れた衣を如何にせらるゝか」
「その破れた衣にて床被を作ります」

「古い床被を如何にせらるゝか」。
「枕の嚢を作ります」。
「古い枕嚢をどうなされるか」。
「敷物を作ります」。
「古い敷物をどうなされるか」。
「足拭を作ります」。
「古い足拭をどうなされるか」。
「雑巾に致します」。
「古い雑巾を如何にせらるゝか」。
「大王よ、私共はその雑巾をこまざいて泥と混せ、壁の塗込に用ひます」。

と。所有の觀念なきものにして初めて、物資の絕對價値を見、從つてその完全なる使用をなし得べし。親鸞の敎徒がよろづのものを佛物として受用し、水の一杯にも頂いて恩寵を謝するも、多少その行き方を異にするも、結果に至りては同一なるは、經濟論の最終は宗敎的解決に依らざる可からざるを示すものと云ふべし。

斯くの如く一方に個人の所有を限定すると共に、他の生活の資具は擧げて、敎團所有として、宗敎的共產主義を實行し、僧伽羯磨に依つて、僧伽一切の事理を處斷し、大膽なる合議制を實現し、敎團の一員としての權利を許して個性の尊嚴を自覺せしめ、敎法の護持機關としての僧伽に列するの責任を負はしめ、嚴重なる戒律を制定し、犯者には作法に依つて課刑し、以て愈々罪の恐るべきを知らしむ。「小罪にも恐れを見る」とは、斯くして養はれたる團員の罪惡に對する觀念の銳敏なるを示す。課刑せられたるもの叉多く悔悟し、後に勤めて悟を開く、敎團に依りて梵壇罰(Brahmadaṇḍa)に處せられたる闡怒(Channa)は、間もなく證悟して阿羅漢となり刑を免がる。

既に比丘の生活は道の爲めの生活なり。されどその獨住の時なると共住(くぢゆう)の時なるとに論なく、總て道に捧げらる。一人ゐては精勤に身受心法を觀じて正念を失はず、相集まりては「法話か聖なる沈默か」に入りて、その宗敎的精進を緩めず、安居、布薩、自恣の施設ありて、別時精勤をなし、心身の淨化を得、此の間些かの懈怠遊戲を許さず。名

利勝他の戲論を禁じ、詩的懈慢の餘裕なし。佛陀、曾つて比丘に獨住の意義を問ひ給ひしに、曰く、「獨り住み、獨り乞行し、獨り歸り坐すを云ふ」と。佛陀宣はく、「それも獨住なり。されど茲に勝れたる獨住あり。過去を逐はず、未來を願はず、現在自身の所得に對して貪欲を鎭滅するこれなり」と、又宣はく、「五欲に欲を離るゝこれ獨住なり」と。入つては師に從つて法を聞きて法相を明らめ、同梵行者と語つて所解を開き、出でゝは森に獨住し修習して貪欲を滅す。勤行不退の四字は、正しく比丘の生活を顯はすに好名目なりとす。

斯くしても猶斷じ難きは、愛欲の心なり。絕ち難きは名利の念なり。佛敎々團の比丘等は、如何許り、この爲に惡戰苦鬪せしか。

四度も五度も　　我れは精舍を去りぬ。
心を攝むるを得ず、　　心の寂靜を得ざりき。
(Thera G. 37)

我れ出家してより　　二十五年、
暫しの間も　　心の靜かなるを得ざりき。
(ibid. 67)

こゝろ樂欲に汚れて　　靜かなるを得ざりければ、
我れは兩手を擧げて泣きつゝ　　精舍の門をくゞりて逃げぬ。
(ibid. 68)

思惟正しからず、　　樂欲に惱まされければ、
我が心攝まらず、　　散り亂れぬ。(ibid. 77)
煩惱にまつはられて、　　樂想を逐ひ、
貪欲のとらはれとなりて　　心の靜かなるを得ざりき。
(ibid. 78)

瘦せて色は黃ばみ、　　かくて七年の間もまよひしが、
夜も日も惱みて、　　安樂を得ざりき。(ibid. 79)
我れは繩を取り、　　森に入りき。
卑しき俗の家に歸らんよりは　　死なんこそ好けれと思ひければ。
(ibid. 80)

中には修道の生活に堪へずして退轉するものあり。質多象舍利子(Citta hatthi sāriputta)の如きは六度還俗して漸やく道に達せり。繩を取りて

森に入りしものあり、刀を取つて喉を刺さんとせしものあり、絶壁より飛ばんとせしものあり。火に入らんとせしものあり。要はその求道の態度眞劍にして、寸毫の偷安をも許さゞるなり。

或る時、我れ精舍に入りて　驚きを立てぬ。
「我れ邪の道にはまりて　渇愛の虜となりぬ」と(上座尼偈 94)
生命は短かし　老と病に害はる。
この身のこはるゝまでは　放逸なるべき時に非ず。(ibid. 95)

斯くの如く、彼等は眞劍に勤む。而も、佛陀は今日禪家の師家が、その參禪の子弟に痛烈なる警策を與ふるが如く、時々峻嚴秋霜の如き教訓を垂れ給ふ。上二六四頁に出せる木積喩の如き是れなり。彼等は斯くの如くして法規と制度に縛しめられて、心身を鍛へ、時々の警策に鞭たれて、證悟の一道を歩む。先なるものは後を導き、後なるものは先に依つて道を修め、相率ひて涅槃に入り、優遊自適の生活者となる。この人を呼んで四方人 cātuddeso と云ふ。四方人とは四方に障碍なく恐れなき人の謂なり。又この人を僧伽を輝かす人と云ふ。

第十一章　教團の人々

釋尊教團にありては、既にその人々の性格に從つて、種々の分担とも名づくべきものありたるが如く。巴利小會部(IV. 4. 5) には、誦經者 (Suttantikā)、持律者 (Vinaya dharā)、說法者 (Dhammakathikā)、釋定者(ghayina) の別を擧げ、中阿含經には、持經者 (Suttantikā)、持律者(Vinayadharā)、持目次者(Mātikādharā)を出し、增一阿含經 (VI. 51) には、持法者 (Dhammadharā)、持律者 (Viṅayadharā)、持目次者(Mātikādharā) の數種を示せり。持經者は持法者と同一にして、阿難尊者の如く經を憶持する人々、持律者は優波離比丘、パターチヤーラー尼の如く、律法に委しく律命を傳持する人、持目次者とは、增一阿含經註に依れば兩波羅提木叉の受持者なりとあり、漢譯に持母者とあるこれなり。說法者とあるは、難陀比丘の如く比丘尼敎誡に巧みなる人、舍利弗尊者、富樓那尊者の如く民衆に對して口業の敎化を盛んにする人を云ふ。禪定者とは、獨住を喜び禪定を樂しむ人を云ひ、須菩提尊者、薄拘羅尊者の如きその一例なり。元よりこの持律者、持經者の區別は、さ程明瞭なるものに非ず、從つてこの名稱は役職の如く比丘等の肩書となれるものに非ざるは云ふ迄もなく、只その性格に從つて大體に於て、自然に斯くの如く區別し得と云ふに過ぎず。後、佛滅百年に至りて、論部の名出て來り、經律以外に論部を傳持する比丘を生ぜり。彌蘭陀王經に、「我も論部を奉じ、尊者も論家なり」との語をなす優婆塞あるに見れば、當時に至りては、在家の信者中にも、論部の奉戴者を生じ來れるを見るべし。比丘が佛陀とその敎法とを信じて、その敎を奉じ、自己の證悟に向つて道を修するは、一般に共通なる點なるは云ふまでもなけれども、彼等の各々其の性能に從つて、或は持經者となり、或は持律者となり、或は法話者となりたるは、斯くの如くして長短相補ひ、彼此互成して、法燈を傳持し、團體を維持したるものとす。然れども、光と闇とは相對し、利害互に相伴ふが如く、斯くの如く性格と、才能の相違は、稍もすれば、互成の利を忘れて、互破の害に走らんとする弊あり、時として他利を主とする法話者と、自利を旨とする禪定者との間に、意志の阻隔を見んとする恐れあり（巴利增

一阿含 VI. 46)、憍賞彌に於ける比丘の不和は、法話者と持律者との間の些細の意見の相違が原なりしと云ふ (Dhp. A. I. P. 43)。佛陀在世に於て、既に斯くの如くなれば、後世、律の傳持に重きを置くものと、經の相承を主とするものと、論に依つて家を立てんとするものとの相違を來せるは、また止むを得ざるものと云ふべきか。されば、佛陀は敎法の受持、三藏の受持と云ふことが、體顯なき物知りに終らんことを恐れて、屢々これを訓誨し給へり。

斯くの如く、佛弟子は各々その性に從つて機能を發揮し、大體に於て互成互顯の德に依りて、敎團の和合と威信を持てり。佛陀は、その數千の比丘比丘尼中及び數多き優婆塞優婆夷の中より、八人を擧げて、比丘比丘尼優婆塞優婆夷の模範となし、衆をして之に則らしめんとなし(巴利雜阿含 XVIII. 3. 3. 漢、增一阿含四・昃一、13)、數十子を擧げて、その特調を示して衆を鼓舞し給ひたり(巴利增一阿含 vol. I. 4-12 漢、增一阿含三昃一・9-12)。今その八人及び、特長ある人々を擧げて、佛陀の僧伽が如何なる人々を包含せしかを示し、此の編を終らんとす。

(一) 模範の八人

比丘の模範	舍利弗	(Sāriputta)
	目犍連	(Moggallāna)
比丘尼の模範	差　摩	(Khemā)
	蓮華色	(Uppalavaṇṇa)
優婆塞の模範	質　多	(Citta)
	波吒迦	(Hatthaka 普通手長者と譯せり)
優婆夷の模範	拘讎鬱多羅	(Khujjuttarā)
	ヹルカンデヤー難陀母	(Velukandiyā Nandamātā)

(二) 比丘中の勝れたる人々

(1) 阿若憍陳如 (Añña Kondañña)　耆宿第一。婆羅門、迦維羅衞城に近き Donavatthu の人、五比丘の一、最初に佛弟子となる。

(2) 舍利弗 (Sāriputta)　智慧第一。婆羅門、摩揭陀國 Nālaka 村の人、目犍連と友にして携へて佛陀に至り、上足の弟子となる。佛陀彼を嘆じて法將と宣ふ。弟妹六人悉く出家す。

(3) 大目犍連 (Mahāmoggallāna)　神通第一。婆羅門、摩揭陀國

拘利多村の人、舍利弗に伴はれて佛弟子となり、比丘の模範と賞せらる。

(4) 大迦葉 (Mahākassapa) 頭陀行第一。婆羅門、摩揭陀國の Mahātiṭṭha 婆羅門村に生る。その妻 Bhaddā Kapilāni も比丘尼となる。佛滅後、教團を率ひて第一結集をなす。

(5) 阿那律 (Anuruddha) 天眼第一。刹帝利、釋迦族、甘露飯王の子、摩訶那摩の弟、迦維羅衞城に生る。終生糞掃衣を纏ふ。佛滅後、佛法頭領の一なり。

(6) 拔提 (Bhaddiya Kāligodhaputta) 高貴第一。刹帝利、釋迦種、迦維羅衞城に生る。阿那律に導かれて出家す。Kāligodhā は母の名なり。

(7) 侏儒跋提 (Lakuṇṭaka Bhaddiya) 音響清徹第一。毘舍、舍衞城の長者の子、侏儒にして容貌醜陋なり。

(8) 賓頭盧 (Piṇḍola-Bhāradvāja) 獅子吼第一。婆羅門、憍賞彌優塡王の輔師の子、神通を顯はして佛陀に叱責せらる。優塡王を化す。

(9) 富樓那 (Puṇṇa Mantāniputta) 說法第一。婆羅門、迦維羅衞城より遠からぬ Donavatthu 村に生る。阿若憍陳如の甥に當る。

(10) 大迦旃延 (Mahākaccāyana) 分別敷演第一。刹帝利、于禪尼國 Caṇḍapajjota 王の輔師の子、阿盤底(Avanti)市に生る。得道後、專ら鄕里の布教をなす。巴利語文典の祖と稱せらる。

(11) 周利槃毒 (Cullapanthaka) 形體化作第一。入四禪第一。毘舍、王舍城の人、摩訶槃毒の弟、記憶力乏しきを以て佛道修し難かりしを、佛陀の拂塵の教に依つて悟る。

(12) 摩訶槃毒 (Mahāpanthaka) 入四無色定第一。毘舍、周利槃毒の兄。

(13) 須菩提 (Subhūti) 無諍住第一。應供養第一。毘舍、給孤獨長者の弟なる須摩那長者の子。舍衞城に生る。常に好んで空定に入る。般若の教理は尊者を祖とすと云ふ。

(14) 佉提羅林住者離婆多(Revatakhadiravaniya) 森住第一。婆羅門、舍利弗の弟、摩揭陀の Nālaka 村に生る。常に森に住して定を樂しむ。

(15) 疑者離婆多(Kankha Revata) 禪定第一。毘舍、長者の子、舍衞城に生る。時々舍利弗と法を語る。

(16) 守籠那 (Soṇa Kolivisa) 精進第一。毘舍、長者の子、瞻波の人。富家に生れ蒲柳の質にも拘らず、刻苦精勵す。佛陀箜篌の喩を以て修行も急ならず寛ならず、中を得ざる可からずと敎へ給ふ。

(17) 億耳守籠那 (Soṇa Kuṭikaṇṇa) 美說第一。毘舍、長者の子、阿盤底市に生る。大迦旃延の弟子となる、耳に億金の耳環を垂れし故に億耳と呼ばる。

(18) 尸婆羅 (Sivali) 所得第一。刹帝利、拘利城に生る。王家の出、舍利弗に依つて出家す。四事の供養豐かなる故、所得第一と曰はる。

(19) 跋迦梨 (Vakkali) 信解脫第一。波羅門、舍衞城に生る。佛身を愛樂して常に見んことを欲す。佛陀「法を見るものは我を見る」と敎化し給ふ。病苦に堪えず刀を取つて自殺す。

(20) 羅睺羅 (Rāhula) 學行第一。刹帝利、迦維羅衞城に生る。釋尊の實子、舍利弗に依つて沙彌となる。中途にして怠慢に流る。佛之を誡しめ給ふ。

(21) 賴陀惒羅 (Ratthapāla) 以信出家第一。毘舍、俱流の人、父の長者の富、王家を救ふに充分なるが故に、護國(Ratthapāla) の名あり。その出家及び得道後の歸鄕は經典中諸處に記載せられ、馬鳴の名曲に依つて巧みに書かれて名高し。

(22) 軍頭那 (Kundhāna) 取籌第一。傳記不詳、籤を取るに好運なり。

(28) 婆耆舍 (Vangīsa) 卽興詩作第一。婆羅門、舍衞城の人、頭骸骨を叩いてその死者の行衞を知る術に達し、國々を遍歷す、佛弟子となりてより、時々その卽興詩にて佛陀及び諸大弟子を讃す。

(24) 優波先那番雁多子 (Upaenaa Vangantaputta) 周圍に愛樂せらるゝ第一。婆羅門、摩揭陀國 Nālaka 村に生る。舍利弗の弟。

(25) 陀驃摩羅子(Dabba Mallaputta) 坐臥具管理第一。刹帝利、阿奴比耶 (Anupiya) に生る。末羅人、七歲道を悟ると曰はる。坐臥處管理を司どり令名あり。

(26) 畢陵陀婆蹉 (Pilinda-vaccha) 天人所愛第一。婆羅門、舍衞城の人、小犍陀羅 (Cūla Gandhāra) と稱する呪術を通ず。天人の供奉を受く。

(27) 婆醯耶陀流知利耶 (Bahiya Dāruciriya) 速慧第一 毘舍、何處の人たるを知らず、法句經註 (II. p. 212) 等に依れば、海に遭難して Suppāraka に着し、木の皮の衣を著て遊行せしが、佛弟子となりて悟り後、牛に刺されて死す。

(28) 童子迦葉 (Kumāra Kassapa) 善説第一。毘舍、母、妊みしを知らずして入團し、僧伽にて生む。波斯匿王に育てらる。佛滅後、舍衞城方面の敎界の維持者なりしが如し。

(29) 摩訶倶稀羅 (Mahākoṭṭhita) 四無碍得達第一。婆羅門、舍衞城の人。倶稀羅と舍利弗の問答經典の諸處に記載せらる。

(30) 阿難陀 (Ānanda) 多聞第一、記憶第一、一を知つて十を知る第一、精勤第一、奉侍第一。剎帝利、迦維羅衞城に生る、釋尊の從弟、護法に從へば甘露飯王の子。跋耆子の忠言に依りて證悟し、二十五年間佛陀に侍者たり。百二十歳にて入涅槃せりと云ふ。

(31) 優留毘羅迦葉 (Uruvela Kassapa) 大衆第一。婆羅門、摩揭陀の人、其二弟と共に千人の大衆を率ゐて拜火の宗敎を奉せしが、佛成道一年其の弟子となる。

(32) 迦樓陀夷 (Kaludayi) 在家に喜ばるゝ第一。剎帝利、迦維羅衞城大臣の子、釋尊の友にて、佛成道後使して佛を歸城せしむ。優陀夷はその名、色黑きが故に黑優陀夷 (Kaludayi) と呼ばる。

(33) 薄拘羅 (Bakkula) 無病第一。毘舍、憍賞彌の長者の子、獨住禪定を樂んで終世人の爲に說法せず。

(34) 輸毘多 (Sobhita) 宿命通第一。婆羅門、舍衞城の人。

(35) 優波離 (Upāli) 持律第一。迦維羅衞城の理髮師なりしが、釋迦種の公子等と共に出家す。戒律に明かにして、敎團の種々の問題を解決す。第一結集の時、律藏を誦出す。

(36) 難陀迦 (Nandaka) 比丘尼敎誡第一。剎帝利、舍衞城の人、その敎誡理路整然、能く人をして理解せしむ。令を受けて屢々比丘尼を敎誡す。只言辭少しく長きに失することあり。佛之を誡め給ふ。

(37) 難陀 (Nanda) 諸根を護る第一。刹帝利、釋尊の異母弟。婚姻の日、佛陀に導かれて佛門に入り、長く樂欲の世界を慕うて苦しみしが、後、森に入りて糞掃衣者となり。諸根を制御して亂れざらしむ。

(38) 摩訶劫賓那(Mahākappina) 比丘敎誡第一。刹帝利。Kukkuṭa(印度北邊の小國)の王なりしが、佛陀の名聲を聞いて遠く來つて出家す。應果を得て後、初め涅槃の樂を味うて活動せざりしが、佛の誡めに依り、比丘敎誨に從事す。

(39) 左伽多(Sāgata) 火定第一。生所不明、嘗て佛陀の侍者たりしことあり。

(40) 羅陀 (Rādha) 機智第一。婆羅門、王舍城の人、老いて貧しく、佛門に入らんとして能はず、悲しみて瘦せ衰ふ。舍利弗得度を得せしめ、導いて應果を證らしむ。

(41) 盧王 (Mogharāja) 弊衣第一。婆羅門、聖者 Bāvaliya の弟子にて、師命に依り、佛陀の如何なる人なるかを見んとして佛陀に至り弟子となる。常に弊衣を纏ふ。漢譯には Mukharājā と見て面王と譯せり。

(三) 比丘尼中の勝れたる人々

(42) 摩訶波闍波提 (Mahāpajāpatī) 耆宿第一。刹帝利女、釋尊の叔母にして養母、難陀の生母、阿難を通じ、佛陀に請うて入門を許され、比丘尼の初めとなる。

(43) 差摩(Khemā) 智慧第一。刹帝利女、摩揭陀國沙伽羅(Sākala) に生る。頻婆沙羅王の妃となり、美貌を誇りしが、佛化に入り出家す。七相續尼の一。

(44) 蓮華色 (Uppalavaṇṇā) 神通第一。毘舍女、長者の女、舍衞城に生る。彼の女の出家に就いては、美貌のため婚約せんとするもの頗る多く、父爲に災を起さんことを恐れて出家せしむと云ふ說と、家庭の不幸の爲め處々を流浪し、懊惱の結果出家せりといふ說とあり。修養深く、比丘中の目犍連に比せらる。

(45) パターチヤーラー(Paṭācālā) 持律第一。毘舍女、舍衞城の長者の女、下男と戀して後種々の困難に遭遇し、一時に夫と子に別れ、狂心して流浪し、佛陀に救はれて佛弟子となる。諸比丘尼を引導する

こと頗る妙を極む。

(46) 法與 (Dhammadinnā) 說法第一。毘舍女。王舍城に生る。毘舍佉家主の妻となりしが、世を厭うて出家し、後、夫に法を敎ゆ。

(47) 難陀 (Nandā) 禪定第一。毘舍離附近の人、なるべし。Nādika 村にて佛陀に先ちて入涅槃す。

(48) 輸那 (Soṇā) 精進第一。毘舍女、舍衞城に生る。多くの子供を有せしが、夫の死後、子供等に虐待せられ、佛門に入る。老いて出家せしとて頗る修道に勤む。

(49) 奢拘梨(Sakulā) 天眼第一。婆羅門女、舍衞城に生る。

(50) 拔陀單陀羅拘夷 (Bhaddā Kuṇḍalakesā) 速慧第一。毘舍女、王舍城長者の女、盜人 Satthuka と戀に落ち、幾變轉の後、尼乾子外道の弟子となりしが、舍利弗に化せられて佛門に入る。

(51) 拔陀迦毘離(Bhaddā Kāpilanī) 宿命通第一。婆羅門尼、Madda の沙伽羅(Sāgala) 市に生る。大迦葉に嫁し、合議の上に共に出家せしが後、摩訶波闍波提の下に佛門に歸す。

(52) 跋陀迦栴延 (Bhaddā Kaccānā) 大智得達第一。釋尊の妃耶蘇陀羅の後身なり。

(53) キサー喬答彌(Kisāgotamī) 弊衣第一。舍衞城の貧女、嫁して幼兒の死に喪心し、佛陀の敎に心眼を開き出家す。

(54) シガーラカマーター (Sigālakamātā) 信解脫第一。王舍城の長者の婦、子を捨てゝ出家し得道す。

(四) 優婆塞中の勝れし人々

(55) 帝富沙と拔提耶 (Tapassu, Bhallika) 最初の優婆塞、兄弟にて今の Orissa の商人、或は Pokkharavatī の人と云ふ。佛成道後未だ菩提樹下を離れ給はざる時、その傍を過りて佛陀に歸俗す。佛の毛髮を得て歸つて奉祀す。

(56) 須達多 (Sudatta) 布施第一。給孤獨長者 (Anāthapiṇḍika) と稱せらる。毘舍、舍衞城の長者、祇園精舍の建立者。

(57) 質多(Citta) 說法第一。毘舍、舍衞城に近き Macchikasaṇḍa 村の人、智慧勝れ、屢々比丘等と法論す。舍利弗目犍連その德を聞いて尋ね行く程なり。不還果を證る。蓋し釋尊敎團の維摩居士とも云ふ

べし。

(58) 波吒迦 (Hatthaka 手長者) 四攝事第一。阿膩毘 (Alāvī) の人。阿膩毘夜叉(後代の大元帥明王)の爲に食はれんとせしを佛陀に救はる。人に長たるの德あり、五百の優婆塞を率ゐて佛陀に詣す。佛陀その八未曾有德を嘆じ給ふ。

(59) 摩訶那摩 (Mahānāma) 甘美食施第一。釋種の王、阿那律尊者の兄。常に佛陀を供養するを喜びしが、迦維羅衞城滅亡の時、池に入りて死す、大名と譯す。

(60) 郁伽(Ugga) 愛樂施第一。毘舍、毘舍離 Hatthi 村の人、美食、臥具の高價なるものを敎團に寄献す。佛陀、長者は六法 (三寶の信と聖戒聖慧聖解脫) を具し、八未曾有法を有せりと讃嘆し給ふ。

(61) 郁伽多 (Uggata) 僧伽給事第一。Hatthigama の人。

(62) 勇健 (Sūra Ambaṭṭha) 不壞の信第一。佛陀、長者を六法を具すと讃す。

(63) 耆婆(Jīvaka Komārabhcca) 人々に歡ばるゝ第一。王舍城娼婦の子、無畏王子に養はれ、長じて Takkasila に學び醫となる。王舍城王家の侍醫となる。佛陀を首とする敎團の醫を勤む。

(64) 那俱羅比多(Nakulapita) 信頼第一。毘舍、Bhagga の人、夫婦して佛陀の信者となり、善く敎を奉ず。

(五) 優婆夷中の勝れし人々

(65) 須闍多 (Sujātā) 刹帝利女、優留毘羅林近くに居住せし將軍の女にて、佛陀の苦行無效を知りて禪定に入らんとし給ひし時乳糜を供養せし人。

(66) 毘舍佉 (Visakhā Migāramātā) 布施第一。毘舍、鴦伽國に生る。陀難闍那 (Dhananjana) の女にて Sujātā (玉耶女)の姉、舍衞城の Puṇṇavaddhana に嫁す。東園鹿子母堂を僧伽に献す、其の他常に布施して僧伽に乏しきこと無からしむ。僧伽の母と稱せらる。

(67) 拘雛多羅(Khujjuttarā) 多聞第一、憍賞彌の皇后 Sāmāvatīの婢にて、法を聞いては、歸りて皇后に告ぐ。法敎を悉く受持す。せむしなるが故にせむしの鬱多羅と呼ばる。

(68) 沙摩和帝(Sāmāvatī) 睦住第一。憍賞彌の優顚王の妃、沙摩

(Sāmā) 尼の親友なり。阿難に五百領の衣を送る。

(69) 鬱多羅難陀母 (Uttarā Nandamātā) 禪定第一。毘舍女、阿盤底國 Velukaṇṭakī の人、難陀比丘尼の母。四禪に出入自在、五下分結を斷じ不動の心を得、舍利弗もその得脫の大なるを嘆せり。

(70) 須波婆左 (Suppavāsā) 甘味食施第一。刹帝利女、拘利城主の女、Sīvali 比丘の母、能く美食を以て佛陀を供養す。

(71) 須比耳 (Suppiyā) 病者看護第一。善く僧伽に至りて病者を看護す。或る時病比丘肉汁を要するを見、而も肉を得ること能はず。自らの股肉を割いて肉汁を作りて與ふ。

(72) 迦底耶仁 (Kātiyānī) 不壞の信第一。Kulalaghara 邑の人、次下の迦利女と親友なり。

(73) 那倶羅摩多 (Nakulamātā) 信賴第一。那倶羅比多の妻。夫の病みし時看護して曰く、夫よ、心を殘すこと勿れ。妾は優婆夷の達すべきものを達したればと。那倶羅比多、これに依つて病癒ゆ。

(74) 迦利 (Kālī Kulalagharikā) 洩れ聞きして歡喜せし第一の人、毘舍女？、Kulalaghara 邑の人、他人の佛德を嘆ずるを洩れ聞き、歡喜愛樂し預流果に入る。

（1） 四分戒本(列七•1)

波 羅 提 木 叉

開　　口

大德等よ、僧伽は我(が云ふ所)を聞いて下さい。

今日は十五日布薩の日である。若し僧伽にして都合善ければ、(今日)僧伽は布薩をなし、波羅提木叉を誦するであらう。布薩を修する前に僧伽のなすべき事は何であるか。それは諸君の清淨を宣言することである。(その後で)、私は波羅提木叉を誦するであらう。

我等は總て耳を傾け注意して聞きます。

(この中)、誰にても罪を犯した者は告白するが善い。犯罪のない者は默つてゐるが善い。諸君が默つて居れば私は諸君が清淨であると了解する。一つの問每に一つの答があらればならぬ。さうして又、こう云ふ會合には、三度尋ねられればならぬ。三度尋ねられて、どの比丘でも、知り乍ら犯した罪を告白しなければ、その比丘は知つて僞をいふ罪に墮する。知つて僞をいふ事は聖道の障礙と世尊は仰せられてある。それであるから、自分の罪を自覺し、清淨を求むる人は、(その罪を)告白せればならぬ。告白すれば輕くなるからである。

諸君、これで開口は終り、私は茲で諸君に尋ねる。諸君は茲に清淨であるか。再び問ふ、諸君は茲に清淨であるか。三度問ふ、諸君は茲に清淨であるか。…………諸君は總て茲に清淨である。それであるから、諸君は(私の問に對して)默つてゐる。私はこの樣に了解する。

（2） 四分戒本(列七•1)

波　羅　夷　法　(敗壞法)(四棄法)

諸君、茲に四波羅夷法を誦する。

一　いかなる比丘にても、比丘の修學と生活の法則を持ち乍ら、修學を捨てず、生活の法則を守るに力弱きを宣言せずして、不淨行を犯し、乃至畜生と相犯すは波羅夷罪である。共に住む可からざる罪である。

二　如何なる比丘にても、村なり林なりで、與へられざるものを取る。人々の盜みといふものをする。王者が盜賊を捕へて、汝は盜人である。馬鹿である。愚迷であると罵り乍ら殺すか縛るか放逐する樣な、(こういふ盜人の行爲を)するは波羅夷罪である。共に住む可からざる罪である。

三　いかなる比丘にても、知り乍ら、人間の生命を奪ひ、暗殺者を求め、死を讚へ、自殺を勸め、汝はこんなつまらない生活をして何になるか。死んだ方が善いではないかとの考への上に故意に種々に死を讚へて自殺を勸めるは波羅夷罪である。共に住む可からざる罪である。

四　如何なる比丘にても、實際證知することなしに、自分は超人の法、充足せる聖智見を得たりとて、我れは斯く知れり斯く見たりと人に告ぐる。その後他から責問せられ若くは責問せられずに、自分の犯した罪から清淨ならんことを欲して、友よ、私は知らずして知つたと曰ひ、見ずして見たと申しました。無益の僞を申しましたと曰ふ。之も增上慢か

大[1]德僧聽、今僧十五日布薩說戒、若僧時到僧忍聽和合、說戒白如是。諸大德我今欲說戒、衆集現前默然聽善思念之、若有犯者當發露、無犯者默然、默然故當知僧淸淨、若有他擧者卽應如實答。如是諸比丘在於衆中乃至三唱憶念有罪當發露、不發露者得故妄語罪、佛說故妄語是障道法、彼比丘自憶念知有罪欲求淸淨當發露、發露則安隱、不發露罪益深、諸大德我已說戒經序今問諸大德是中淸淨不(如是三說)諸大德是中淸淨默然故是事如是持。

四波羅夷罪

諸[2]大德是四棄法半月半月戒經中說。

(一)若比丘與比丘共戒同戒不捨戒戒羸不自悔犯淨行行淫欲法乃至共畜生是比丘波羅夷不共住。

(二)若比丘在聚落中若閑靜處、不與物懷盜心取隨不與取法、若爲王大臣所捉若殺若縛若驅出國、汝是賊汝癡汝無所知、比丘如是盜者波羅夷不共住。

(三)若比丘故自手斷人命持刀授與人歎譽死快勸死、咄男子用此惡活爲寧死不生、作如是心思惟種種方便歎譽死快勸死、是比丘波羅夷不共住。

(四)若比丘實無所知、自稱言我得上人法、我已入聖智勝法、我知是我見是、彼於異時若問若不問欲自淸淨故作如是說我實不知不見言知言見虛誑妄語除增上慢、是比丘波羅夷不共住。

らなら別であるが、又波羅夷罪である。共に住む可からざる罪である。

諸君、四種の波羅夷罪は茲に誦出せられた。この中、何れでも犯した比丘は、最早、他の比丘と共に住する事が出來ない。以前にもさうであつたが、以後もその如く、これは波羅夷罪であり、共に住む可からざる罪である。

此等の罪に就いて、私は諸君に尋ねる。諸君は此の點に就いて清淨であるか。再び問ふ、諸君は此の點に就いて清淨であるか。三度問ふ、諸君は此の點に就いて清淨であるか。諸君は總てこの點に就いて清淨である。それであるから諸君は私の問に對して默つてゐる。私はこの樣に了解する。

---

(1) 四分戒本(列七・1)

僧伽婆尸沙法 (僧殘法)

諸君、茲に十三僧殘を誦出する。

一 意思を以て、脫淫するは僧殘である。但し睡眠中はこの限りに非ず。

二 比丘にして、欲情に驅られ、卑しき心から、婦人の身と觸れ、手を取り、髮を手探り、その他身體のどの部分に觸れるも僧殘である。

三 比丘にして、欲情に驅られ、卑しき心から、恰も若き男が若き女をみだらな語で呼びかける樣に、麤惡な語で呼び掛けるのは僧殘である。

四 比丘にして、欲情に驅られ、卑しき心から、婦人の傍にて、自分の欲する給仕の德を讃嘆する「姉妹よ、私の如き戒を持ち、善法を具へ、梵行を修するものを、この交會の法を以て給仕するは供養の第一であると、この樣に云ふのは僧殘である」。

五 比丘にして、男の思を女に媒(ことづ)ち、女の心を男に通じ、夫婦にしたり、私通せしめたり、乃至一時の交會をなさしむるも僧殘である。

六 比丘が貰ひ集めた材料で、他を主人とせずに、自分の爲の小屋を作る時には、一定の量に依つて作らねばならぬ。その量といふは、長さが十二佛搩手、廣さが內規(のり)七搩手である。それにその場所を示す爲に比丘等を乞うて其處に導かねばならぬ。其の比丘等は、危險のない、又その周圍に空地のある場所を示さねばならぬ。然るに比丘が危險がある上に空地のない場所に、集めた木材で小屋を作り、比丘等を導いて、其の場所を示さないならば、僧殘である。

* 搩は Vidatthi の譯 Vidatthi は十二吋に當る。佛は Sugata の譯佛の臂から中指の端迄に至る尺度を佛搩手といふか。搩の字は四分律戒本五分律戒本にも出づ、Vinaya texts には今錫蘭にては Sugata vidatthi を六呎とすと曰へり。然し餘り長きに過ぐるが如し。二呎半位ならんか。

七 比丘にして、自分と他との共同の大きな精舍を建てる場合には、比丘等を導いて、その場所を示し、比丘等は危險のない空地のある場所を指示せねばならぬ。然るに比丘が危險のある空地のない場所に大きな精舍を建て、比丘等を導いてその場所を示さないならば、僧殘である。

諸大德我已說四波羅夷法、若比丘犯一一波羅夷法不得與諸比丘共住、如前後亦如是、是比丘得波羅夷罪不應共住、今問諸大德是中清淨不（如是三說）、諸大德是中清淨默然故是事如是持。

十三僧殘

[1]諸大德、是十三僧伽婆尸沙法、半月半月戒經中說。

(一)若比丘故弄陰出精除夢中僧伽婆尸沙。

(二)若比丘婬欲意與女人身相觸、若捉手若捉髮、若觸一一身分者僧伽婆尸沙。

(三)若比丘婬欲意、與女人婬欲麤惡語、隨所說婬欲麤惡語者僧伽婆尸沙。

(四)若比丘婬欲意、於女人前自歎身言、大姊我修梵行持戒、精進修善法可持此婬欲法供養我如是供養第一最、如是語者僧伽婆尸沙。

(五)若比丘往來彼此媒嫁持男意語女、持女意語男、若爲成婦事若爲私通乃至須臾頃僧伽婆尸沙。

(六)若比丘自乞作屋無主自爲己、當應量作是中量者長佛十二搩手、內廣七搩手應將餘比丘往看處所彼比丘當指示處所無難處無妨處、若比丘有難處妨處、自乞作屋無主自爲己不將餘比丘往看處所若過量作者僧伽婆尸沙。

(七)若比丘欲作大房有主爲己作、應將餘比丘往看處所、彼比丘應看處所無難處無妨處、若比丘難處妨處作大房有主爲己作不將餘比丘往看處所者僧伽婆尸沙。

八 比丘にして、若し怒り腹立ちの心から、こうしたら、必度、この梵行から離れさせる事が出來やうさ、無實無根な波羅夷法にて他の比丘を陷れる。その後、他から責問せられ又は責問せられずに、その事が無根であつたさ、罪を告白するは僧殘である。

九 比丘にして、もし怒り腹立ちの心から、こうしたら、必度この梵行から離れさせる事が出來やうさ、無實にして全く別の事であり、大した事でもないのを取り立て波羅夷法にて他の比丘を陷れ、その後、他から責問せられ、又は責問せられずに、その事が無實にして全く別の事であり、大した事でないのを取り立てた事を告白するは僧殘である。

一〇 比丘にして、和合の僧伽を破らんさし、破和合に至る原因を堅く執してゐる時には、他の比丘等は、彼にこの樣に曰はればならぬ。「大德よ、和合の僧伽を破らうさするな、破和合に至る原因を執するな。大德よ、僧伽さ和合せよ、僧伽は和合し、諍論なくして、一つの權威の下に安かに住するものであるから」さ。その比丘にして、比丘等に斯くの如く曰はれて、猶執するならば、それを飜へさせる爲に、三度迄諫めればならぬ。三度諫められて飜へせば善いが、飜へさなければ僧殘である。

一一 一人二人三人の比丘が、一人の比丘の組になり、その味方さなつて辨護し、この樣に云ふ。「大德等、この比丘に何事も云つてはならない。彼は如法に語り如律に語つてゐる。この比丘がこうださ思うていふ事は我等の望み喜ぶ所であり、彼の云ふ事は我々の忍可する所である」さ。比丘達は、それらの比丘に此の樣に曰はればならぬ。大德等よ、その樣に曰はるゝな。この比丘は如法に語らず、如律に語つて居らない。大德等も僧伽の破れを喜んではならない。僧伽さ和合せよ。僧伽は和合し諍論なくして、一つの權威の下に安かに住するのであるからさ。それらの比丘は比丘等にこの樣に曰はれて猶執するならば、それを飜へす爲に、三度諫めればならぬ。三度諫められて、飜へせば善し、飜へさなければ僧殘である。

(八)若比丘以瞋恚所覆故非波羅夷比丘以無根波羅夷法謗欲壞彼比丘淨行、彼於異時若問若不問知此事無根說我瞋恚故作是語、若比丘作是語者僧伽婆尸沙。

(九)若比丘以瞋恚所覆故於異分事中取片非波羅夷比丘以無根波羅夷法謗欲壞彼比丘淨行、彼於異時若問若不問知是異分事中取片、是比丘自言我瞋恚故、作是語者僧伽婆尸沙。

(一〇)若比丘欲壞和合僧方便受壞和合僧法堅持不捨、彼比丘應諫是比丘言、大德莫壞和合僧莫方便壞和合僧、莫受破僧法堅持不捨、大德應與和合僧歡喜不諍、同一師學如水乳合、於佛法中有增益安樂住、是比丘如是諫時、堅持不捨彼比丘應三諫捨是事故乃至三諫捨者善、若不捨者僧伽婆尸沙。

(一一)若比丘有餘群黨、若一若二若三乃至無數、彼比丘語是比丘言、大德莫諫此比丘此比丘、是法語比丘、律語比丘、此比丘所說我等心喜樂、此比丘所說我等心忍可、彼比丘應諫是比丘言、大德莫作是說言、此比丘是法語比丘、律語比丘、此比丘所說我等心喜樂、此比丘所說我等心忍可、何以故、此比丘非法語比丘非律語比丘大德莫欲壞和合僧、汝當樂欲和合僧、大德與僧和合歡喜不諍同一師學如水乳合、於佛法中有增益安樂住、是比丘如是諫時堅持不捨、彼比丘應三諫捨是事故乃至三諫捨者善、若不捨者僧伽婆尸沙。

(一二)若比丘依聚落若城邑住、行惡行汙他家行惡行亦見亦聞、汙他家、亦見亦聞、諸比丘語

一二　比丘にして惡性で、傳承され來つた學足の事に就いて、比丘等が如法に語る(を好まず)。自分に話しかけない様にし、「大德等、善惡共に私に話して呉れるな、私も大德等に善惡共に話し掛けない。私に話し掛ける事を止めて貰ひたい」と云ふ。比丘等はその比丘に次の様に語らればならぬ。「大德よ、人々が自分に話し掛けず。又自分も人々に話し掛けない様にしてはならぬ。人々も如法に自分に語り、自分も如法に人々に語る様にせよ。佛陀の僧伽は斯くの如く相互の會話と、相互の助けに依つて增長するからである。その比丘が、もしこの様に比丘等に曰はれても猶執してゐたならば比丘等はそれを飜へさせる爲に三度諫めればならぬ。三度諫められて飜へせば善し、飜へさなければ僧殘である。

一三　比丘にして、村又は町の附近に住し、在家の家庭に害になる様な惡行をしてゐて、その事が見られ聞かれ、在家の家庭も亂されて行く事が見られ聞かるれば、比丘等は、その比丘にこの様に曰はればならぬ。「大德よ、汝は在家の家庭に害になる惡行をしてゐる。さうしてそれが見聞され、その在家の家庭も亂れて行く事が見聞されてゐる。大德よ、この處から去るが善い、充分長く茲に住んだ筈だ」と。かく比丘等に曰はれて、その比丘が、比丘等は貪瞋痴に囚はれ恐怖に囚はれてゐる。同じい罪で或者は放逐され、或者は放逐されない」と曰ふならば、比丘等は更にこの様に曰はればならぬ。「大德よ、その様に曰つてはならない。比丘等は貪瞋痴に囚はれ恐怖に囚はれてゐない。同じい罪で或者は放逐し或者は放逐しないといふ様な事はしてゐない。大德よ、汝は在家の家庭に害になる惡行をしてゐる。さうしてそれが見聞され、それらの家庭が亂れて行くのが見聞されてゐる。汝はこの處から去るがよい。充分長く茲に住んだ筈だ」と。比丘等に斯く曰はれても猶執してゐるならば、比丘等はそれを飜へさせるために三度諫めればならぬ。三度諫められて飜へせば善し、飜へさなければ僧殘である。

諸君、十三僧殘法が誦出せられた。この中、九は直ぐに罪になり、四つは三度諫められてから罪になる。比丘にしてこの中孰れをか犯し、知り乍ら幾日か隱して置けば、その隱した日數丈け波利婆沙に留まらればならぬ。波利婆沙を終へて、更に六日間、摩那埵を受ければならぬ。摩那埵を受けて後、二十人の比丘の居る僧伽で、比丘として復席されればならぬ。もしその僧伽にして二十人の中一人でも缺けてゐてその比丘を比丘に復席したとすれば、その比丘は比丘に復席されず、その比丘等は非難される。これがこの場合の正しい仕方である。

諸君、この點に就いて私は諸君に尋れる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。再び尋れる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。三度尋れる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。諸君はこの點に就いて清淨である。それであるから、諸君は(私の問に對して)默つてゐる。私はこの様に了解する。

是比丘言、大德汝行惡行汙他家、行惡行亦見亦聞、汙他家亦見亦聞、大德汝行惡行汙他家、今可遠此村落去、不須住此、是比丘語彼比丘言、大德諸比丘有愛有恚有怖有癡、有如是同罪比丘、有驅者有不驅者、諸比丘報言、大德莫作是語言諸比丘有愛有恚有怖有癡有如是同罪比丘有驅者有不驅者、何以故、諸比丘不愛不恚不怖不癡、大德汝行惡行汙他家、行惡行亦見亦聞、汙他家亦見亦聞、是比丘如是諫時堅持不捨、彼比丘應三諫、捨是事故乃至三諫、捨者善若不捨者僧伽婆尸沙。

(三)若比丘惡性不受人諫語、於戒法中諸比丘如法諫、已自身不受諫語言、諸大德莫向我說若好若惡、我亦不向諸大德說若好若惡、諸大德止莫諫我。彼比丘諫此比丘言、大德莫自身不受諫語。大德自身當受諫語。大德如法諫諸比丘、諸比丘亦如法諫大德。如是佛弟子衆得增益展轉相諫、展轉相敎、展轉懺悔。是比丘如是諫時堅持不捨彼比丘應三諫、捨是事故乃至三諫、捨者善、若不捨僧伽婆尸沙。

諸大德我已說十三僧伽婆尸沙法、九初犯罪。四乃至三諫若比丘犯一一法知而覆藏、應强與波利婆沙行波利婆沙竟、僧應與六夜摩那埵行摩那埵已餘有出罪、應二十僧中出是比丘罪若少一人不滿二十衆出是比丘罪、是比丘罪不得除、諸比丘亦可呵、此是時今問諸大德是中清淨不(如是三說)、諸大德是中清淨默然故是事如是持。

諸大德是二不定法半月半月戒經中說。

(1) 四分戒本(列七•2)

二　不　定　法

諸君、茲に二不定法を誦出する。

一　比丘にして、或る婦人と二人にて、陰になつてゐて、交會に都合のよい場所に坐つてゐたのを、信用する事の出來る優婆夷が發見し、波羅夷罪か僧殘罪か、波逸提罪かこの三罪の一で訴へるとする。この時、其比丘がそれを承認するならば、その三罪の一で處罰せられねばならぬ。又はその信用する事の出來る優婆夷が訴へた罪で處罰せられねばならぬ。これが不定罪である。

二　又、その場處が物の陰になつて居らず、交會に相應しない處でなくとも、婬らな語を言ひ掛ける事の出來る場處に、比丘が婦人と二人切り坐つてゐたのを、信用する事の出來る優婆夷が發見し、僧殘罪か波逸提罪かこの二法の一で訴へるとする。この時、其の比丘が、それを承認するならば、その二罪の一で處罰せられねばならぬ。又はその信用する事の出來る優婆夷か訴へた罰で處罰せられねばならぬ。これが不定罪である。

諸君、二不定法は誦出せられた。諸君、私は尋ねる。この點に於て諸君は清淨であるかと。再び私は尋ねる。この點に於て諸君は清淨であるかと。三度び私は尋ねる。この點に於て諸君は清淨であるかと。この點に就いて諸君は清淨である。それであるから、諸君は私の問に對して默つてゐる。私はこの樣に了解する。

(1) 四分戒本(列七•2)

三十尼薩耆波逸提法

諸君、茲に三十尼薩耆波逸提法を誦出する。

一　衣服の事が竟り、又比丘が迦絺那衣を捨した後は、十日間餘衣を貯うることが出來るが、それを超ゆれば、尼薩耆波逸提罪である。

二　衣服の事が竟り、又比丘が迦絺那衣を捨した後は、僧伽の許可なしに、一夜でも三衣の用意がなければ、尼薩耆波逸提罪である。

三　衣服の事が竟り、又比丘が迦絺那衣を捨した後、比丘に更に不時の衣の供養があるとする。その場合、欲するならば受けても善いが、受けたら直に仕立てねばならぬ。然しその時、その衣が仕立て上るに不足ならば、それを補ふ望みのある時は、一ヶ月その儘に保存しても善い。一ヶ月以上保存すれば、假令補ふ望みのある時でも、尼薩耆波逸提である。

四　比丘が、身内の者でない比丘尼から、故衣を洗ひ染め打つて貰ふのは尼薩耆波逸提である。

五　比丘が、身内の者でない比丘尼から、衣を受けるのは、交換の場合は別として、尼薩耆波逸提である。

二不定

(一)[1]若比丘共女人獨在靜處覆處可作婬處坐、說非法語、有住信優婆夷於三法中一一法說、若波羅夷若僧伽婆尸沙若波逸提、是坐比丘自言、我犯是罪於三法中應一一治、若波羅夷若僧伽婆尸沙若波逸提、如住信優婆夷所說應如法治是比丘是名不定法。

(二)若比丘共女人在不覆處不可作婬處坐、作麤惡語說婬欲事有住信優婆夷於二法中一一法說若僧伽婆尸沙若波逸提、是坐比丘自言、我犯是罪於二法中應一一治若僧伽婆尸沙若波逸提、如住信優婆夷所說應如法治是比丘是名不定法。

諸大德我已說二不定法、今問諸大德是中清淨不(如是三說)。諸大德是中清淨默然故是事如是持。

三十尼薩耆波逸提

[2]諸大德是三十尼薩耆波逸提法、半月半月戒經中說。

(一)若比丘衣已竟、迦絺那衣已出畜長衣經十日不淨施得持、若過者尼薩耆波逸提。

(二)若比丘衣已竟、迦絺那衣已出、比丘於三衣中、若離一一衣異處宿經一夜除僧羯磨尼薩耆波逸提。

(三)若比丘衣已竟、迦絺那衣已出、若比丘得非時衣欲須便受、受已疾疾成衣、若足者善若不足者得畜經一月、為滿足故若過者尼薩耆波逸提。

(四)若比丘從非親里比丘尼邊取衣、除貿易尼薩耆波逸提。

(五)若比丘使非親里比丘尼浣故衣若染若打尼薩耆波逸提。

六 比丘にして、身内の者でない家主又は家婦に、正しい時以外に衣の供養を乞ふは、尼薩耆波逸提である。茲に正しい時と曰ふは衣を奪はれた場合、衣が痛み破れた場合を曰ふのである。

七 身内の者でない家主又は家婦が、多くの衣の内から擇び取る様に勸める場合、内衣一枚、外衣一枚の量を越ゑずに、衣を受けねばならぬ。それ以上を受ければ、尼薩耆波逸提である。

八 比丘に對して、身内の者でない家主又は家婦が一具の衣を購ふ代を用意し、この金で一具の衣を購ひ、かくかくの比丘に、その衣を着せやうと思ふ。その時、若しその比丘が、未だ提供されない以前に、その家に行つて、衣の事に就いて意見を述べる。「衣を買うこ下さる場合には、かく々々の衣を買うて著せて下さらば結構である」と。善いものを望んで、この様に云ふは尼薩耆波逸提である。

九 一比丘に對して、身内の者でない二人の家主又は家婦が、別々に一具の衣を購ふ代價を用意し、我々はこの代價で一具の衣を購ひ、かく々々の比丘にその衣を着せやうと思ふ。その時、もしその比丘が、未だ提供されない以前に、その家主等の家に至り、衣の事に就いて相談する。「家主等よ、汝等が用意した衣の代價で、二つを一つにして、かく々々の衣を購へ私に着せて下されば結構である」と。善いものを得んと望んでこの様にいふのは尼薩耆波逸提である。

一〇 一比丘に對して、王なり、王臣なり、婆羅門なり、家主なりが、使を遣はして、衣の代價を送る。「この代價で衣を購うて、斯く々々の比丘に衣を着せて下さい」と。その使がその比丘の處へ行いてこの様に云ふ。「大德、尊者の爲にこの衣の代價を持つて參りました。この衣の代價を受けとつて下さい」。斯く曰はれて、その比丘はその使にこの様に曰はればならぬ。「友よ、私は衣の代價を受け取る事は出來ぬ。衣を受け取るなら相應しい事ではあるが」と。そこで、その使が比丘にこの様に云ふ。「大德、尊者には尊者の世話をする人がありますか」と。比丘等よ、この時、その比丘は、寺男なり、優婆塞なりを、「友よ、この人が私の世話人である」と、示定せねばならぬ。彼の使はその世話人と約定をして、その比丘の所へ行いてこの様に曰はればならぬ。「大德、尊者が示定せられた世話人と約定しました。後に、その世話人の處へ行つて下さい。その人が尊者に衣を着せるでありませう」と。比丘等よ、それでその比丘はその世話人の處へ行つて二返三返迄、「友よ、私は衣が入用である」と警告し想ひ起させる樣にせねばならぬ。二返三返警告し想ひ起させる樣にして、衣を得るに成功すれば善し、成功せない場合には、四返五返六返、その事に就いて、行いて、默つて立つてゐねばならぬ。四返五返六返、その事に就いて、行いて默つて

(六)若比丘從非親里居士若居士婦乞衣、除餘時尼薩耆波逸提餘時者若比丘奪衣失衣燒衣漂衣此是時。

(七)若比丘奪衣失衣燒衣漂衣、是非親里居士若居士婦自恣請多與衣、是比丘當知足受衣若過受者尼薩耆波逸提。

(八)若比丘居士居士婦爲比丘辦衣價持如是衣價與某甲比丘、是比丘先不受自恣請、便到居士家作如是說、善哉居士爲我辦如是衣價與我爲好故、若得衣者尼薩耆波逸提。

(九)若比丘二居士居士婦與比丘辦如是衣價、我曹辦如是衣價與某甲比丘、是比丘先不受自恣請、到二居士家作如是說、善哉居士、辦如是衣價與我共作一衣爲好故、若得者尼薩耆波逸提。

(一〇)若比丘若王王大臣若婆羅門若居士居士婦遣使爲比丘送衣價、持如是衣價與某甲比丘、彼使至比丘所語比丘言、大德今爲汝故送是衣價受取、此比丘語彼使如是言我今不應受此衣價、若我須衣合時清淨當受、彼使語是比丘言、大德有執事人不。須衣比丘應言、有若守僧伽藍民若優婆塞、此是比丘執事人、常爲諸比丘執事。彼使詣執事人所、與衣價已還到比丘所作如是言、大德所示某甲執事人、我已與衣價竟、大德知時往彼當得衣、須衣比丘當往執事人所、若二反三反語言、我須衣、若二反三反爲作憶念、得衣者善、若不得衣、四反五反六反在前默然住、令彼憶念、若四反五反六反在前默然住、若得衣者善、若

立つてゐて、衣を得るに成功すれば善し、成功せない場合、それ以上に勤めて衣を得るは尼薩耆波逸提である。その衣を得るに成功しない場合には、その衣の代價を送つて與れた人の所へ、自分で行くなり、又は使をやつて、「あなたが比丘のために送つて下さつた衣の代價はまだ比丘の爲にならない。自分の事に御注意なさい。自分(の德)を空しくしない樣になさい」。と曰はしめればならぬ。

これがこの場合の正しい仕方である。

第一節、衣の部終り。

一一　比丘にして絹の雜つた敷物を作るは尼薩耆波逸提である。

一二　比丘にして羺羊の純黑の毛にて敷物を作るは尼薩耆波逸提である。

一三　比丘は新しい敷物を作る場合には、二つの部分が羺羊の純黑の毛、第三の部分が白色の毛、第四の部分の褐色の毛を用ゐねばならぬ。比丘にして二つの部分の羺羊の純黑の毛、第三の部分の白色の毛、第四の部分の褐色の毛を用ゐずして敷物を作れば尼薩耆波逸提である。

一四　比丘が新しい敷物を作つた場合には六年間用ゐねばならぬ。六年の中に、その敷物を捨てるなり又は捨てずして、新しい敷物を持つは、僧伽の許可のある場合は別として尼薩耆波逸提である。

一五　比丘にして座用の敷物を作る場合は、その敷物を醜くゝする爲に、古い敷物の縁から佛桀手丈け取つて用ゐねばならぬ。古い敷物の縁から佛桀手丈け取らないで、新らしい敷物を作れば尼薩耆波逸提である。

一六　旅行の途中で羺羊の毛を得る場合に、もし欲すれば受けても宜しい。その場合、運夫がなければ、比丘は自分の手で三由旬丈け運んでも宜しい。それ以上持ち運べば尼薩耆波逸提である。

一七　比丘にして、身内の者でない比丘尼に羺羊の毛を洗はせ染めさせ打たせるのは尼薩耆波逸提である。

一八　比丘にして金銀を受け、又は受けしめ、或は自分の爲に保管せられる事を許すは尼薩耆波逸提である。

一九　比丘にして銀の用ゐられる種々の商賣に關はるは尼薩耆波逸提である。

二〇　比丘にして賣買に關はるは尼薩耆波逸提である。

第二節、羺羊の部終り。

不得衣過是求得衣者、衣薩耆波逸提、若不得衣從彼所來處、若自往若遣使往語言、汝先遣使送衣價、與某甲比丘、是比丘竟不得衣汝還取莫使失、此是時（十事）

（一一）若比丘雜野蠶綿作臥具者尼薩耆波逸提。

（一二）若比丘新純黑羺羊毛作臥具者薩耆波逸提。

（一三）若比丘作新臥具、應用二分純黑羊毛三分白四分牻、若比丘作新臥具不用二分純黑羊毛三分白四分牻作新臥具者尼薩耆波逸提。

（一四）若比丘作新臥具應六年持、若減六年不捨故、更作新者、除僧羯磨尼薩耆波逸提。

（一五）若比丘作新坐具當取故者縱廣一磔手襍新上、爲壞色故若比丘作新坐具、不取故者縱廣一磔手襍新上壞色者尼薩耆波逸提。

（一六）若比丘行道中得羊毛、比丘須者應取、若無人持得自持行至三由旬、若無人持自持。過者、尼薩耆波逸提。

（一七）若比丘使非親里比丘尼浣染擘羊毛者、尼薩耆波逸提。

（一八）若比丘自手取金銀若錢、若敎人取、若口可受者、尼薩耆波逸提。

（一九）若比丘種種賣買金銀寶物者、尼薩耆波逸提。

（二〇）若比丘種種販賣者、尼薩耆波逸提（二十事）

（二一）若比丘畜長鉢不淨施得齊十日、若過者尼薩耆波逸提。

二一　十日間、餘分の鉢を貯へても宜しいが、十日を過ぐれば尼薩耆波逸提である。

二二　五ヶ所以下の傷れのある古鉢で新しい鉢と交換するは尼薩耆波逸提である。この場合、比丘僧伽はその鉢を沒收し、比丘僧伽の一番惡い鉢をその比丘に與へ、「比丘よ、これが汝の鉢である。毀れる迄持つてゐればならぬ」と曰はればならぬ。これが正しい仕方である。

二三　病比丘の用ゐる藥、卽ち生蘇、酪、油、蜜、糖蜜を受けた場合には、七日間貯へても宜しい。七日を過ぐれば、尼薩耆波逸提である。

二四　雨時の月が一月ある内に比丘は雨時衣を用意し、半月になつた時に、作つて着ても宜しい。もし雨時の月が猶一月以上ある内に雨時衣を用意し、半月以前に、作つて着るは尼薩耆波逸提である。

二五　比丘にして、自ら他の比丘に衣を與へ、後に腹立つことがあつて、面白くない事から、その衣を取り上げ又は他をして取り上げさせる事は尼薩耆波逸提である。

二六　比丘にして、自ら糸を請ひ求めて、機織に衣を織らせるのは尼薩耆波逸提である。

二七　一比丘に對して、身内の者でない家主又は家婦が、機織に衣を織らせてゐる場合、その比丘が未だ提供せられない前に、機織の處へ行いて、衣の事に就いて相談する。「友よ、この衣は私の爲に織られてゐるのであるが、長く幅廣く織つて吳れ、又善く平に滑に、善く梳いて織つて吳れ。さうすれば私も何かで御禮しやう」と。かくてその比丘は鉢中のものなり何なり與へるとする。これは尼薩耆波逸提である。

二八　カツテカ三月滿月の前十日に、比丘が急の特別の施としての衣を受けるとする。その場合には、急の特別の施であると考へて受ければならぬ。受けて、衣時竟る迄貯へて置いてもよい。それ以上貯へて置けば尼薩耆波逸提である

註。衣時とは衣のきまりを附け終る時迄の間を云ひ一ヶ月又は五ヶ月なり。カツテカ三月滿月の日とはアツサユヂヤ月滿月の日、次項のカツテカ月滿月の日と云ふは、カツテカ四月滿月の日ともあり、これが眞のカツテカ月の滿月の日なり。

二九　カツテカ月滿月の日に雨時が終つて、比丘が、危險があり恐怖のある樣な森の住居に住する時には、望みとあらば、三衣の内一衣を村の中の家に殘しても宜しい。而してもし必要のある場合には、六日間その衣から離れてゐても宜しい。それを過ぐれば、僧伽の許可がある外は尼薩耆波逸提である。

三〇　比丘にして、知り乍ら、僧伽へ向けられた所得を自分のものにするのは尼薩耆波逸提である。

(二一)若比丘破鉢減五綴不漏、更求新鉢爲好故、若得者尼薩耆波逸提、彼比丘應往僧中捨、展轉取最下鉢與之令持乃至破應持。

(二二)若比丘自乞縷使非親里織師織作衣者、尼薩耆波逸提。

(二三)若比丘居士居士婦、使織師爲比丘織作衣、是比丘先不受自恣請便到彼所語織師言、此衣爲我織、極好織令廣長堅緻齊整好、我少多與汝價、若比丘與價乃至一食直若得衣者尼薩耆波逸提。

(二五)若比丘先與比丘衣、後瞋恚、若自奪若使人奪取、還我衣不與汝、是比丘應還衣、取衣者尼薩耆波逸提。

(二六)若比丘病、畜蘇油生蘇蜜石蜜、齊七日得服、若過者尼薩耆波逸提。

(二七)若比丘春殘一月在、應求而浴衣半月用浴、若比丘春一月前求雨浴衣、半月前用浴者、尼薩耆波逸提。

(二八)若比丘十日未滿夏三月、若有急施衣應受、受已乃至衣時應蓄者、過蓄者、尼薩耆波逸提。

(二九)若比丘夏三月安居竟、至八月十五日滿已、若迥遠有疑恐怖畏難處、比丘在如是處住、於三衣中、若留一一衣置村舍內、及有因緣離衣宿、乃至六夜、若過者、尼薩耆波逸提。

(三〇)若比丘知他欲與僧物、自廻入已者、尼薩耆法逸提(三十事)。

諸君、三十の尼薩耆波逸提が誦出せられた。諸君、私はこの點に就いて諸君に尋ねる。諸君はこの點に就いて淸淨であるか。再び尋ねる。諸君はこの點に就いて淸淨であるか。三度尋ねる。諸君はこの點に就いて淸淨であるか。諸君はこの點に就いて淸淨である。それであるから、諸君は、(私の問に對して)默してゐる。私はこの樣に了解する。

九十波逸法

諸君。茲に九十波逸提法を誦出する。

一 知つて妄語するは波逸提。

二 汚ない語を用ゆるは波逸提。

三 比丘を毀譽するは波逸提。

四 比丘にして、未だ具足戒を受けないものに(自分に從つて)句々を逐うて、法を誦せしむるは波逸提。

五 比丘にして、未だ具足戒を受けないものと、二三夜以上、同宿するは波逸提。

六 比丘にして、婦人と同宿するは波逸提。

七 比丘にして、分別の年頃の男子(の列席)なしに、婦人に五六語以上、法を語るは波逸提。

八 比丘にして、未だ具足戒を受けない者に、超人の法を說くは、よしんば夫れが本當のことでも波逸提。

九 比丘にして、未だ具足戒を受けない者に、重大な罪を犯した者の事を語るは波逸提。

一〇 比丘にして、大地を掘り又は掘らしむるは波逸提。

第一節、妄語の部終り。

一一 植物を害ふは波逸提。

一二 遁辭を使ひ、(集會の時に、問に對して返事をなさないなどで)衆を惱ますは波逸提。

一三 對手に腹を立てさせたり、ぶつぶつ小言を並べたりするは波逸提。

一四 比丘にして、僧伽の床、椅子、蓆、座褥を露地に擴げ又は擴げさせて、出掛けて行く時に、それ等を仕舞はず又は仕舞はさせず、何事も日はずして去るは波逸提。

一五 比丘にして、僧伽に屬する住屋に臥床を作り又は作らせ、其處を去る場合に、臥床を片付けず又は片付けさせず、何事も日はないで去るは波逸提。

一六 比丘にして、僧伽に屬してゐる住屋に、知り乍ら、先着の比丘の場所を占領し、彼に邪魔になれば彼が去るであらうと、その目的で他の目的の爲でなく臥床を作るは波逸提。

九十波逸提

諸大德、我已說三十尼薩耆波逸提法、今問諸大德、是中清淨不(如是三說)。　大德是中清淨、默然故、是事如是持。

[1]諸大德、是九十波逸提法、半月半月戒經中說。

(一)若比丘故妄語者波逸提。

(二)若比丘種類毀呰比丘者波逸提。

(三)若比丘兩舌語者波逸提。

(四)若比丘與女人同室宿者波逸提。

(五)若比丘與未受大戒人、共宿過二夜至三夜曉者波逸提。

(六)若比丘與未受具戒人同誦者波逸提。

(七)若比丘知他比丘有麤惡罪、向未受大戒人說、除僧羯磨波逸提。

(八)若比丘向未受大戒人說過人法言、我知是我見是、見知實者波逸提。

(九)若比丘與女人說法過五六語者波逸提、除有知男子。

(一〇)若比丘自手掘地教人掘者波逸提。

(一一)若比丘壞鬼神村者波逸提。

(一二)若比丘妄作異語惱他者波逸提。

(一三)若比丘嫌罵者、波逸提。

(一四)若比丘取僧繩牀木牀臥具褥、露地自敷教人敷、捨去不自擧不教人擧者波逸提。

(一五)若比丘僧房舍內、敷僧臥具坐褥、若自敷教人敷、在中若坐若臥、從彼捨去不自擧不教人擧者波逸提。

(一六)若比丘先知比丘住處、後來於其中間、強敷臥具止宿、念言、彼若嫌迮者、當自避我去、作

一七 比丘にして他の比丘に對して腹を立て面白くない處から、彼を逐ひ出し又は逐ひ出さしむるは波逸提。

一八 比丘にして、僧伽に屬する住屋の上樓に、脚の取り外しの出來る床又は椅子に、力任せに座つたり又は臥するは波逸提。

一九 比丘にして、大きな住舍を作るに、戶口、や周圍の事や、門を掛ける處や、窓をつける仕事、又は屋根を葺くに二三重に葺く事を、草の生へて居らない處に立ちて、指示せねばならぬ。それ以上屋根を厚く葺く時には、假令草のない處に立つて指示してゐても波逸提である。

二〇 比丘にして、知り乍ら、生物の居る水を草や土に掛けたり、掛けしめたりするは波逸提である。

第二節、植物の部終り。

二一 比丘にして推擧されずに、比丘尼を敎誨するは波逸提である。

二二 比丘尼より說法を懇請されても、日沒後、比丘尼を敎誨するは波逸提である。

二三 比丘にして、正しき時の外に、比丘尼の住屋に行いて比丘尼を敎誨するは波逸提である。この場合、比丘尼が病氣の時は正しき時である。

二四 比丘が、「彼の比丘は所得のために比丘尼を敎誨する」と、この樣にいふは波逸提である。

二五 比丘が、身內の者でない比丘尼に衣を與ふるは交換を別として波逸提である。

二六 比丘が身內の者でない比丘尼に衣を縫うてやり又は縫はせて遣るは波逸提である。

二七 比丘が約束して比丘尼と一緖に、假令村の中へ迄も旅をするは正しい時の外波逸提である。この場合正しい時とは、道中が危險で恐ろしい事があり武器を携ふる必要がある時である。

二八 比丘が、約束して、比丘尼と一つ舟に乘り、彼岸に渡る目的の外、流れを上下するは波逸提である。

二九 比丘にして、知り乍ら、比丘尼の媒で得た食を食べるは波逸提、但し(施者の)在家人が初めからその考でゐた場合を除く。

三〇 比丘にして、比丘尼と只二人、隱密の處に座を設けるは波逸提。

第三節、比丘敎誨の部終り。

三一 無病の比丘は、公の休息處にては一食丈けを取らねばならぬ。これを過ぐるは波逸提である。

是因緣非餘威儀者波逸提。

(一七)若比丘瞋他比丘不喜、僧房舍內若自牽出、若敎人牽出、波逸提。

(一八)若比丘房重閣上、脫脚繩牀木牀、若坐若臥、波逸提。

(一九)若比丘知水有蟲、自用澆泥澆草、敎人澆者波逸提。

(二〇)若比丘欲作大房戶扉窻牖及諸莊飾具、指授覆苫齊二三節、若過者波逸提。

(二一)若比丘僧不差、敎授比丘尼者波逸提。

(二二)若比丘爲僧差敎授比丘尼、乃至日沒波逸提。

(二三)若比丘語諸比丘如是言、諸比丘爲飮食故敎授比丘尼者波逸提。

(二四)若比丘與非親里比丘尼衣、除貿易波逸提。

(二五)若比丘與非親里比丘尼作衣者波逸提。

(二六)若比丘與比丘尼在屛處坐者波逸提。

(二七)若比丘與比丘尼期同道行乃至聚落、除餘時波逸提。餘時者伴行有疑恐怖處、此是時。

(二八)若比丘與比丘尼期乘船若上水若下水、除直渡者波逸提。

(二九)若比丘知比丘尼讚歎因緣得食食、除施主先有意者波逸提。

(三〇)若比丘與婦人期同道行乃至聚落者波逸提。

(三一)若比丘施一食處無病比丘應受一食、若過者波逸提。

三二　多勢して一處（ひさところ）に行いて食を得て食するは、正しき時を除いては波逸提、茲に正しき時とは、病氣の流行の時、衣の施與のある時、衣を作つてゐる時、旅行の中途にある時、船に乘つてゐる時、比丘が非常に澤山集つてゐる時、沙門に一般の施食が行はれてゐる時である、これがその正しい時である。

三三　代り合うて食を取るは、正しい時を除いては波逸提である。正しい時とは、病氣の流行してゐる時、衣の施與の行はれてゐる時、衣を作つてゐる時である。これがその正しい時である。

三四　比丘が或る家に行いて、餅、又は菓子を入用丈け取る樣に曰はれる場合に、比丘は欲するならば、鉢に二杯又は三杯迄受け得る。それより以上を受くるは波逸提である。鉢に二杯又は三杯受けて、持ち歸り比丘等と共に分けて食べねばならぬ。これが正しき仕方である。

三五　比丘にして、食し了つた後、更に食する樣勸められた場合、殘食作法をせずに、堅食軟食いづれを食しても波逸提である。

三六　比丘にして、既に食を終つた比丘に殘りの食でない食、堅食軟食を食するやうすゝめる。「比丘よ取つて食べよ」と。故意にその欲望を起させ樣と思つて勸める。この場合、若しその比丘が食べれば波逸提である。

三七　比丘にして非時に、堅食軟食を食べれば波逸提である。

三八　比丘にして貯へて(一夜を超えた)堅食軟食を食べれば波逸提である。

三九　比丘にして病氣でない時に、自分の用に美食、喩へば、生酥、酪、油、蜜、糖蜜、魚、肉、乳、凝乳を乞うて食べれば波逸提である。

四〇　比丘にして、與へられざる食物を、口中に運べば波逸提である。水と洗口水を除く。

第四節、食の部終り。

四一　比丘にして、若し手づから、裸形者又は遊行者、又は女遊行者に食を與ふれば波逸提である。

四二　比丘にして、他の比丘にこの樣に語を掛ける。「來れ友よ、村又は町に乞行に行かう」と。かくて、出掛かけた後、彼に、食を受けしめない中に、彼を去らしめる。「去れ友よ、汝と一緒に語り座つてゐるのは愉快でない。獨り語り獨り座つてゐる方が愉快である」と。この理由から…………他の理由からでなく…………去らしむるは波逸提である。

四三　比丘にして夫婦食事をしてゐる家へ強いて入つて座するは波逸提である。

四四　比丘にして、屛所に私に婦人と座するは波逸提である。

(三二)若比丘展轉食、除餘時波逸提。餘時者病時施衣時、此是時。

(三三)若比丘別衆食、除餘時波逸提。餘時者、病時、施衣時、作衣時、道行時、船行時、大會時、沙門施食時、此是時。

(三四)若比丘至檀越家、殷勤請與餅麨飯、比丘須者應兩三鉢受、持至寺內應分與餘比丘食、若比丘無病過兩三鉢受、持至寺內不分與餘比丘食者波逸提。

(三五)若比丘足食竟、或時受請、不作餘食法、更食者波逸提。

(三六)若比丘知他比丘足食竟、若受請不作餘食法、殷勤請與食、大德取是食、以是因緣非餘、欲使他犯者波逸提。

(三七)若比丘非時食者波逸提。　(三八)若比丘食殘宿食者波逸提。

(三九)若比丘不受食、食若藥擧著口中、除水及楊枝、波逸提。

(四〇)若比丘得好美食乳酪魚肉、無病自爲已索者、波逸提。

(四一)若比丘外道男外道女自手與食者波逸提。

(四二)若比丘先受請已、若前食後食行詣餘家不囑餘比丘、除餘時波逸提。餘時者、病時、作衣時、施衣時、此是時。

(四三)若比丘食家中有寶、強安坐者波逸提。

(四四)若比丘食家中有寶屛處坐者波逸提。

四五　比丘にして婦人と一緒にひそかに只二人で座するは波逸提である。

四六　比丘にして招待せられ又は食事を贈られてゐながら、それを其處にゐる比丘に告げずに、食前又は食後に他の家へ乞行に出掛けるは波逸提である。茲に正しい時といふは、衣施與の時と衣を作る時である。

四七　無病の比丘は、四ヶ月間の(衣食住藥 茲では殊に藥)必要物の招待を受け得る。もし續いての招待か、永久の招待かに非されば、これより以上長い招待を受けるは波逸提である。

四八　比丘にして戰に出掛ける軍隊を見に行くは、正しい理由のない限り波逸提である。

四九　比丘は、如何なる理由があるにもせよ、軍隊へ行つたら二夜乃至三夜限り滯りうる。それ以上に過ぐれば波逸提である。

五〇　比丘にして、二夜三夜軍隊と一緒に留まる時、行進、陣列、行列、閲兵を見に行くは波逸提である。

第五節、裸行者の部終り。

五一　飲酒は波逸提である。

五二　指を以て他を突くは波逸提である。

五三　水中の遊戯をなすは波逸提である。

五四　(諫を受けて)、之に注意を拂はざるは波逸提である。

五五　比丘にして、比丘を恐怖せしむるは波逸提である。

五六　無病の比丘にして、正しき謂れなしに、身を温めん爲に火を焚き又は焚かしむるは波逸提である。

五七　比丘にして、正しき時の外、半月以內に沐浴するは波逸提である。茲に正しき時とは、熱い時のつゞく二ヶ月半、卽ち熱時の殘りの一月半、雨時の第一月であり、熱惱の時、病氣流行の時、仕事をする時、旅行の時、風雨の時これが正しい時である。

五八　比丘が正しい衣を得た時には、その衣を醜くする三の法がある中、孰れかを以て醜くせねばならぬ。卽ち靑くするか、泥色にするか、黑色にするかせねばならぬ。この三つの醜くする孰れかを用ゐないで、衣を受用すれば波逸提である。

五九　比丘が、比丘又は比丘尼、式沙摩那、沙彌、沙彌尼に自ら衣を與へ乍ら、その衣を許しを得ないで受用するは波逸提である。

六〇　比丘にして他の比丘の鉢、衣、尼師壇、針入、帶を假令戲れでも隱し又は隱さするは波逸提である。

第六節、飲酒の部終り。

(四五)若比丘獨與女人露地坐者波逸提。

(四六)若比丘語諸比丘如是語、大德共至聚落當與汝食、彼比丘乃至至聚落竟、不教與是比丘食、語言汝去、我與汝共坐共語不樂、我獨坐獨語樂、以是因緣非餘方便遣去者波逸提。

(四七)若比丘請四月與藥、無病比丘應受、若過受、除常請更請分請盡形請者、波逸提。

(四八)若比丘往觀軍陣、除時因緣波逸提。

(四九)若比丘有因緣至軍中、若過二宿至三宿者波逸提。

(五〇)若比丘軍中住若二宿三宿、或時觀軍陣鬪戰或觀遊軍象馬勢力者、波逸提。

(五一)若比丘飲酒者波逸提。

(五二)若比丘水中戲者波逸提。

(五三)若比丘擊攊他比丘者、波逸提。

(五四)若比丘不受諫者波逸提。

(五五)若比丘恐怖他比丘者波逸提。

(五六)若比丘半月洗浴無病比丘應受、若過受、除餘時波逸提。餘時者熱時病時作時、風時雨時遠行來時、此是時。

(五七)若比丘無病、爲炙身故露地然火、若敎人然、除餘時波逸提。

(五八)若比丘藏他比丘衣鉢坐具鍼筒、若自藏若敎人藏、下至戲笑者、波逸提。

(五九)若比丘淨施比丘比丘尼式叉摩那沙彌沙彌尼衣、不問主輒著者波逸提。

(六〇)若比丘得新衣當作三種染壞色青黑木蘭、若比丘得新衣不作三種染壞色青黑木蘭、

六一　比丘にして、故意に生物の生命を取るは波逸提である。

六二　比丘にして、知り乍ら、蟲のゐる水を呑むは波逸提である。

六三　比丘にして、知り乍ら、既に如法に定まつた事件を再び(僧伽の)羯磨に掛けんとするは波逸提である。

六四　比丘にして、知り乍ら他比丘の犯した重罪を隱屏するは波逸提である。

六五　比丘にして、知り乍ら滿二十歳に達せざる人を授戒せしむれば、その授戒は無效であり、それを助けた比丘等は非難に値し、授戒せしめた比丘には波逸提である。

註、ウパツヂヤーヤは波逸提、阿闍梨その他の gana は Dukkata なり。

六六　比丘にしてそれと知り乍ら、盜賊の隊と謀し合せて同じき道を行くは、假令次の村迄でも波逸提である。

六七　比丘にして、婦人と共に、謀し合せて、同じき道を行くは、假令次の村迄でも波逸提である。

六八　比丘がこの様に云ふ。「私が世尊の說き給ひし法を了解するに依れば、世尊の障礙の法と曰はれたものは、それを實行して見た者には、障礙の法とするに足らぬ」と。此の時、比丘等は、その比丘にこの様に曰はねばならぬ。「大德よ、この様に云ふな、世尊を非難してはならない。世尊を非難し奉るは善くない。世尊はその様に仰せられないからである。友よ、世尊は種々の方便を以て、障礙の法は障礙であると仰せられ、それを實行して見た人にとつても障礙の法であると仰せられた」と。その比丘が比丘等に此の様に曰はれて、前の様に固執してゐれば、その比丘は、比丘等にそれを止める様にと三度迄諫められねばならぬ。それで止めれば善し、止めねば波逸提である。

六九　比丘にして知り乍ら、上述の如き意見を持ち、未だ如法に取り扱はれず、その意見を離れない比丘と共に食し共に住し共に臥するは波逸提である。

七〇　沙彌が又この様に曰ふ。「私が世尊の說き給ひし法を了解するに依れば、世尊の障礙の法と曰はれたものは、それを實行して見た者には障礙の法とするに足らぬ」と。此の時、比丘等はその沙彌にこの様に曰はねばならぬ、「友、沙彌よ、この様に曰つてはならぬ。世尊を非難してはならぬ。世尊を非難するは善くない。世尊はその様に仰せられないからである、友よ、世尊は種々の方便を以て、障礙の法は障礙であると仰せられ、それを實行して見た人にとつても障礙の法であると仰せられた」と。その沙彌が比丘等にこの様に曰はれて、前の様に固執してゐれば、その沙彌は比丘等にこの様に曰はれねばならぬ。「沙彌よ、今日より汝は世尊を師と呼んではならぬ。二三夜比丘と同處に臥する事の出來るといふ沙彌の特權は汝にない。行けよ、去れよ」と。

新衣持者波逸提。

(六一)若比丘故斷畜生命者波逸提。

(六二)若比丘知水中有蟲飲用者波逸提。

(六三)若比丘故惱他比丘、乃至少時不樂者波逸提。

(六四)若比丘知他比丘有麤惡罪、而覆藏者波逸提。

(六五)若比丘年滿二十、當與受具足戒、若比丘知年未滿二十、與受具足戒、此人不得戒、諸比丘亦可呵彼愚癡故、波逸提。

(六六)若比丘知僧諍事起如法滅已、後更發擧者、波逸提。

(六七)若比丘知是賊伴期共一道行、乃至聚落者波逸提。

(六八)若比丘作如是語、我知佛所說法、行婬欲非障道法、彼比丘應諫是比丘言、大德莫作是語莫謗世尊謗世尊者不善、世尊不作是語、世尊無數方便說、行婬欲是障道法、彼比丘如是諫時堅持不捨、彼比丘應三諫、捨是事故、乃至三諫捨者善若不捨者波逸提。

(六九)若比丘知如是語人未作法如是惡見不捨、若俱同止宿一羯磨者波逸提。

(七〇)若比丘知沙彌作如是語、我知佛所說法、行婬欲非障道法、彼比丘諫此沙彌言、汝莫作是語、莫謗世尊、謗世尊者不善、世尊不作是語、沙彌、世尊無數方便說、行婬欲是障道法、彼比丘如是諫時堅持不捨、彼比丘應三諫、捨此事故、乃至三諫捨者善、若不捨者彼比丘應語此沙彌言、汝自今已後非佛弟子、不得隨餘比丘行、如諸餘沙彌得與大比丘二宿三宿、

比丘にして知り乍らこの擯斥せられた沙彌を鼓舞し、支持し、共に食し共に住み、共に臥するは波逸提である。

第七節、有生物の部終り。

七一 比丘にして、他の比丘に如法に戒律の事に就いて諫められる時に、この様に曰ふ。「友よ、私は賢こい他の持律の比丘に質問せない間は、この學足を學修しないであらう」と。これは波逸提である。

比丘等よ、學修せんと欲する比丘は學び、尋ね考へねばならぬ。これがこの場合の正しい仕方である。

七二 比丘にして、波羅提木叉の誦出せられてゐる時に、この様に曰ふ。こんな些細な學足を誦出して何にならう。惡作と煩はしさと混亂とを起す丈けである」と。この様に學足を毀るは波逸提である。

七三 比丘にして、半月毎の波羅提木叉の誦出せられる時に、この様に曰ふ。「友よ、私は今度初めて、この法は實に經に依つて傳へられ、經に含まれ、半月毎に誦出せられるのであると云ふ事を知つた」と。その場合他の比丘等はその比丘の事に就いて「この比丘は、二度も三度も或はそれ以上波羅提木叉の誦出せられる席に列してゐた」と知るならば、この比丘は無智を離れず、如法に處理せねばならぬ罪を犯してゐる。且つ次の様にその愚痴を告げ知らされねばならぬ。「友よ、汝は波羅提木叉誦出の席に列しながら、善く望まず善く注意して思念せないのは汝の不利であり汝の損失である」と。これはその愚痴の點に於て波逸提である。

七四 比丘が他の比丘に怒り腹立ちて打擊を加ふるは波逸提である。

七五 比丘が他の比丘に怒り腹立ちて、手を擧げて打たんとするは波逸提である。

七六 比丘が根もなき妄の僧殘罪にて他の比丘に言ひ掛り苦しむるは波逸提である。

七七 比丘が故意に、他の比丘を暫らくでも不安にさせ様とて、後悔のおもひを起さするは、若しその爲め許りで他に理由がなければ波逸提である。

七八 比丘が比丘等の不和を來し爭を起し諍論をしてゐるのを、(好奇心から)、彼等の曰ふ所を聞いてやらうと聞き乍ら立つてゐるのは、若しその爲め許りで他に理由がなければ波逸提である。

七九 比丘が、如法の僧伽作法に合意し乍ら、後に異議をつぶやくは波逸提である。

八〇 比丘にして、僧伽が(意見を徵せんと全體に)質問をしてゐる時に、合意をせず、座を立ち去るは波逸提である。

八一 比丘にして、和合僧伽に於て、衣を與へ乍ら、後に左の様につぶやく、「この比丘は親しいに任せて、僧伽物を私用す」と。これは波逸提である。

汝今無此事、汝出去滅去、不須此中住。若比丘知如是被擯沙彌、若畜同一止宿波逸提。

(七一)若比丘餘比丘如法諫時、作如是語、我不學此戒、乃至問有智慧持戒律者、我當難問、波逸提、欲求解者應常難問。

(七二)若比丘說戒時作如是語、大德何用此雜碎戒為、說是戒時令人惱愧懷疑、輕呵戒故、波逸提。

(七三)若比丘說戒時、作如是語、大德我今始知是法是戒經、半月半月戒經中說、若餘比丘知是比丘若二若三說戒中坐、何況多彼比丘無知無解若犯罪應如法治、更增無知罪、大德汝無利得不喜、汝說戒時不一心念攝耳聽法、彼無知故波逸提。

(七四)若比丘共同羯磨已、後如是語、諸比丘隨親厚以僧物與者、波逸提。

(七五)若比丘僧斷事時不與欲而起去而波逸提。

(七六)若比丘與欲已、後更呵波逸提。

(七七)若比丘知他比丘共鬪諍、聽此語已向彼說者波逸提。

(七八)若比丘瞋故不喜、打他比丘者波逸提。

(七九)若比丘瞋故不喜、以手搏比丘者波逸提。

(八〇)若比丘瞋故不喜以無根僧伽婆尸沙法謗者、波逸提。

(八一)若比丘刹利水澆頭王、王未出來藏寶、若入過宮門閾者波逸提。

八二 比丘にして僧伽の所得となるべきものを、知り乍ら餘人に廻し與ふるは波逸提である。

第八節、如法の部終り。

八三 比丘にして、王の未だ去らず、寶の未だ覆はれざる前に、刹利種灌頂王の宮室の閾を前以て通告することなしに超ゆるは波逸提である。

八四 比丘尼にして、林の中又は家の中以外で、寶石又は寶石に等しきものを取り上げ又は取り上げしむるは波逸提である。

八五 比丘にして、其處に居合はす比丘に告げず、又非時に村に入るは、それに特別の理由がなければ波逸提である。

八六 比丘にして、骨、象牙、牛角にて作つた針入を持つ時は破（こは）して仕舞はればならぬ、これは波逸提である。

八七 比丘にして寢臺又は椅子を作る時には、下の臺木を除いて、善逝の指長に依つて八指の高さに作らればならぬ。これを超ゆれば波逸提である。

八八 比丘にして、寢臺又は椅子を作り、中へ綿をつめたならば波逸提である。その綿は裂き出して仕舞はればならぬ。

八九 比丘にして、座具を作る場合には量に從つて作らればならぬ。その量とは、長さが善逝の搩手にて、二搩手、幅が一搩手半、四邊が一搩手である。これを過ぐれば波逸提である。

九〇 比丘が覆瘡衣を作る場合、量に從つて作らればならぬ。量とは、長さが善逝の搩手で、四搩子、幅が二搩手それを過ぐるものは、波逸提である、正しき量に切らればならぬ。

九一 比丘が雨時衣を作る場合、量に從つて作らればならぬ。量とは長さが善逝の搩手で六搩手、幅が二搩手半、それを過ぐれば波逸提であり、正しき量に切らればならぬ。

九二 比丘が、善逝の衣と等しき量又はそれ以上の衣を作れば波逸提である。正しき量に切らればならぬ。茲に善逝の善逝衣量と云ふは、長さが善逝の搩手で九搩手、幅が六搩手、これが善逝の衣量である。

第九節、寶の部終り。

諸君、九十二の波逸提法が誦出せられた。諸君、私はこの點に就いて尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。再び尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。三度尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。諸君はこの點こ就いて清淨である。それであるから諸君は(私の問に對して)默してゐる。私はこの樣に了解する。

(1) 四分戒本(列七•4)

四波羅提提舍尼法

諸君、又茲に四波羅提提舍尼法を誦する。

一 比丘にして、身內の者でない比丘尼が在家の家へ入つて得た堅食軟食を手づから受

(八二)若比丘若寶及寶莊飾具、若自捉敎二人捉一、除二僧伽藍中及寄宿處一、波逸提。若在二僧伽藍中一若寄宿處若寶及寶莊飾具、若自捉若敎二人捉一識者當レ取是因緣非レ餘。

(八三)若比丘非時入二聚落一、不レ囑二餘比丘一者波逸提。

(八四)若比丘作二繩牀木牀一足應二高如來八指一、除レ入二梐孔上一、截竟、過者波逸提。

(八五)若比丘持二兜羅綿一貯、作二繩牀木牀臥具坐褥一者、波逸提。

(八六)若比丘用二骨牙角一作二鍼筒一成者波逸提。

(八七)若比丘作二尼師檀一當レ應レ量作、是中量者長佛二搩手廣一搩手半、更增廣長各半搩手、若過者波逸提

(八八)若比丘作二覆瘡衣一當レ應レ量作、是中量者長佛四搩手廣二搩手、若過成者波逸提。

(八九)若比丘作二雨浴衣一當レ應レ量作、是中量者長佛六搩手廣二搩手半、若過成者波逸提。

(九〇)若比丘佛衣等量作レ衣、是中量者、長佛十搩手廣六搩手、是佛衣量、若過成者波逸提。

諸大德、我已說二九十波逸提法一、今問二諸大德一是中清淨不、(如是三說)、 諸大德、是中清淨、默然故、是事如レ是提。

諸[1]大德、是四波羅提提舍尼法、半月半月戒經中說。

(一)若比丘入二村中一、無病從二非親里比丘尼邊一自手受レ食食、是比丘應下向二餘比丘一悔上レ過言、大德、我犯二可呵法一所レ不レ應レ爲、我今向二大德一悔過、是名二悔過法一。

けて嚙食すれば、それを告白せねばならぬ。「友よ、私は非難すべき不相應な告白すべき罪を犯しました。それを茲に告白します」と。

二　比丘が、在家に招かれて食事をするに、比丘尼が其處にゐて、「此の人には菜汁を與へよ、この人には白飯を與へよ」と命令して立つてゐるとする。この場合、比丘等はその比丘尼を、「妹よ、比丘等が食事してゐる間は傍へ去れよ」とたしなめねばならぬ。もし斯くの如く、「妹よ、比丘等が食事してゐる間は傍へ去れよ」とたしなめる忠が、その中の一人の比丘にてもあらぬならば、彼等全體の比丘はそれを告白せねばならぬ。「友よ、私共は非難すべき不相應な告白すべき罪を犯しました。それを茲に告白します」と。

三　比丘にして、學家と定められし家に前に招待も受けず、又病氣でもなくて、行つて、堅食又は軟食を手づから受けて嚙食すれば、それを告白せねばならぬ。「友よ、私は非難すべき不相應な告白すべき罪を犯しました。それを茲に告白します」と。

註、學家と曰ふは信厚く、富少なき在家信者の家にして、得るに從つて之を施し自らは缺乏を忍ぶが如き家を曰ふ。之を僧伽作法をなして學家と定むるなり。

四　危險の多い物騷な場所と目されてゐる森に居住してゐる比丘が、その危險なる事を以前に(檀越に)語らずして精舍の中で、手づから堅食軟食を受け嚙食すれば、それを告白せねばならぬ。「友よ、私は非難すべき不相應な告白すべき罪を犯しました。それを茲に告白します」と。

諸君、四波羅提提舍尼法は誦出せられた。諸君、私はこの點に就いて尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。再び尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。三度尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。諸君はこの點に就いて清淨である。それであるから諸君は(私の問に對して)默してゐる。私はこの樣に了解する。

---

(1)　四分戒本(列七・5)

衆　學　法

諸君、又茲に衆學法を誦する。

一　「下着衣をよく身體に纏ふべし」と學び守らねばならぬ。

註、臍と兩膝をよく覆ふを云ふ。

二　「身のまわりによく衣を纏ふべし」と學び守らねばならぬ。

三　「善く僧伽梨をつけて、人々の住家へ行くべし」と學び守らねばならぬ。

四　「善く僧伽梨をつけて、人々の家に座すべし」と學び守らねばならぬ。

五　「善く身根(感官)を鎭めて、人々の家に行くべし」と學び守らねばならぬ。

六　「善く身根を鎭めて、人々の家に行いて座すべし」と學び守らねばならぬ。

七　「眼を伏せて、人々の家に行くべし」と學び守らねばならぬ。

八　「眼を伏せて、人々の家にて座すべし」と學び守らねばならぬ。

九　「衣をからげずに人々の家に行くべし」と學び守らねばならぬ。

一〇　「衣をからげずに、人々の家に座すべし」と學び守らねばならぬ。

第一節、終り。

(二)若比丘在白衣家食、是中有比丘尼指示、與某甲羹與某甲飯、諸比丘應語彼比丘尼食、大姉且止須諸比丘食竟、若無一比丘語彼比丘尼如是言、大姉且止須諸比丘食竟。是比丘應向餘比丘悔過言、大德我犯可呵法所不應爲、我今向大德悔過、是名悔過法。

(三)有諸學家僧作學家羯磨、若比丘知是學家先不受請、無病自手受食食、是比丘應向餘比丘悔過言、大德我犯可呵法所不應爲、我今向大德悔過、是名悔過法。

(四)若阿練若迥遠有疑恐怖處、若比丘在如是阿練若處住、先不語檀越、僧伽藍外不受食、在僧伽藍內無病自手受食食、是比丘應向餘比丘悔過言、大德我犯可呵法所不應爲、我今向大德悔過、是名悔過法。

諸大德、我已說四波羅提提舍尼法、今問諸大德、是中清淨不、(如是三說)、諸大德是中清淨默然故是事如是持。

衆學法

(1)諸大德是衆多學法、半月半月戒經中說。

(一)齊整着內衣應當學。

(二)齊整着三衣應當學。

(三)不得反抄衣入白衣舍應當學。

(四)不得反抄衣入白衣舍坐應當學。

(五)不得衣纏頸入白衣舍應當學。

(六)不得衣纏頸入白衣舍坐應當學。

(七)不得覆頭入白衣舍應當學。

(八)不得覆頭入白衣舍坐應當學。

(九)不得跳行入白衣舍應當學。

(一〇)不得跳行入白衣舍坐應當學。

一一 「高聲で笑ふことなしに、人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
一二 「高聲で笑ふことなしに、人々の家に座すべし」と學び守らればならぬ。
一三 「聲を低く、靜かに、人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
一四 「聲を低く、靜かに、人々の家に座すべし」と學び守らればならぬ。
一五 「身體を搖ぶることなしに、人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
一六 「身體を搖ふることなしに、人々の家に座すべし」と學び守らればならぬ。
一七 「腕を搖ぶることなしに、人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
一八 「腕を搖ぶることなしに、人々の家に座すべし」と學び守らればならぬ。
一九 「頭を搖ぶることなしに、人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
二〇 「頭を搖ぶることなしに、人々の家に座すべし」と學び守らればならぬ。
第二節、終り。

二一 「臂に手を當てることなしに人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
二二 「臂に手を當てることなしに人々の家に座すべし」と學び守らればならぬ。
二三 「頭を裹まずに、人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
二四 「頭を裹まずに、人々の家に座すべし」と學び守らればならぬ。
二五 「膝をかゝめずに、人々の家に行くべし」と學び守らればならぬ。
二六 蹲居(うづくま)ることなしに(正しく)人々の家に座すべしと學び守らればならぬ。
二七 「恭しく施食を受くべし」と學び守らればならぬ。
二八 「鉢に注意して施食を受くべし」と學び守らればならぬ。
二九 「菜汁が正しい量の施食を受くべし」と學び守らればならぬ。
註、菜汁は白飯の四分の一量たるべし。
三〇 「鉢の緣一杯迄施食を受くべし」と學び守らればならぬ。
第三節、終り。

三一 「敬虔に施食を食すべし」と學び守らればならぬ。
三二 「鉢に注意して施食を食すべし」と學び守らればならぬ。
三三 「家から家に乞ひし食を食すべし」と學び守らればならぬ。
註、戶每にあの家この家と擇ぶことなきを云ふ。
三四 「菜汁の量の程善き施食を食すべし」と學び守らればならぬ。
三五 「(自分の好きな處を擇び取る爲に)、上から押して食事をせざるべし」と學び守らればならぬ。
三六 「よく甘く食べやうといふ思ひから汁にせよ、菜にせよ、白飯に包み混ぜて食事をせざるべし」と學び守らればならぬ。
三七 「病氣でなくて、自分のためにと特別に汁なり白飯なり乞はざるべし」と學び守らればならぬ。
三八 「妬みの心で、他人の鉢を見ざるべし」と學び守らればならぬ。
三九 「餘り大きい團食を作つて食せざるべし」と學び守らればならぬ。
四〇 「圓く一口程の大きさに作つて食すべし」と學び守らればならぬ。
第四節、終り。

四一 「團食が口の際まで運ばれる迄、口を開かざるべし」と學び守らればならぬ。
四二 「食事をする時に、手を全體口の中に入れざるべし」と學び守らればならぬ。

(一一) 不レ得レ蹲二坐白衣舍一、應當レ學。

(一三) 不レ得下扠レ腰入二白衣舍一坐上、應當レ學。

(一五) 不レ得下搖レ身入二白衣舍一坐上、應當レ學。

(一七) 不レ得下掉レ臂入二白衣舍一坐上、應當レ學。

(一九) 好覆レ身入二白衣舍一坐、應當レ學。

(二一) 不レ得下左右顧視入二白衣舍一坐上、應當レ學。

(二三) 靜默入二白衣舍一坐、應當學。

(二五) 不レ得下戲笑入二白衣舍一坐上、應當レ學。

(二七) 平鉢受レ飯、應當レ學。

(二九) 羹飯俱食、應當レ學。

(三一) 不レ得下挑二鉢中央一食上、應當レ學。

(三三) 不レ得下以レ飯覆二羹上一更望上レ得、應當レ學。

(三五) 當下繫二鉢想一食上、應當レ學。

(三七) 不レ得二大張レ口待レ飯食一、應當レ學。

(三九) 不レ得下揣飯搖二擲口中一食上、應當レ學。

(四一) 不レ得二頰レ飯食一、應當レ學。

(一二) 不レ得三扠レ腰入二白衣舍一、應當レ學。

(一四) 不レ得三搖レ身入二白衣舍一、應當レ學。

(一六) 不レ得三掉レ臂入二白衣舍一、應當レ學。

(一八) 好覆レ身入二白衣舍一、應當レ學。

(二〇) 不レ得三左右顧視入二白衣舍一、應當レ學。

(二二) 靜默入二白衣舍一、應當レ學。

(二四) 不レ得三戲笑入二白衣舍一、應當レ學。

(二六) 正意受食、應當レ學。

(二八) 平鉢受レ羹、應當レ學。

(三〇) 以レ次食、應當レ學。

(三二) 無病不レ得三爲レ己索二羹飯一、應當レ學。

(三四) 不レ得下視二比丘鉢中一起中嫌心上、應當レ學。

(三六) 不レ得二大揣飯食一、應當レ學。

(三八) 不レ得二含レ食語一、應當レ學。

(四〇) 不レ得レ遺二落飯食一、應當レ學。

(四二) 不レ得二故嚼レ飯作レ聲食一、應當レ學。

四三 「食物を口に入れて置いて物語らざるべし」と學び守らればならぬ。

四四 食物を吐き飛ばさずに食すべしと學び守らればならぬ。

四五 食を嚼み、口をもがもがさせて食せざるべしと學び守らればならぬ。

四六 頰をふくらませて食せざるべしと學び守らればならぬ。

四七 手を振り動かさずに食すべしと學び守らればならぬ。

註、指について飯粒をおとさん爲め手を振ること。

四八 「飯粒を散らさずに食すべし」と學び守らればならぬ。

四九 「舌を出すことなしに食すべし」と學び守らればならぬ。

五〇 ヂヤブヂヤブと唇の音を立てずに食すべしと學び守らればならぬ。

第五節、終。

五一 スル〜〜といふ音を立てずに食すべしと學び守らればならぬ。

五二 「手指をねぶらずに食すべし」と學び守らればならぬ。

五三 「鉢を甜(ねぶ)らずに食すべし」と學び守らればならぬ。

五四 「唇をねぶらずに食すべし」と學び守らればならぬ。

五五 「食物の附いた手指で、水瓶を持たざるべし」と學び守らればならぬ。

五六 「飯粒のついた鉢を洗つた水を、家の中に棄てざるべし」と學び守らればならぬ。

五七 「手に傘を持つてゐる人に、彼が病氣でなければ私は、法を説かぬ」と學び守らればならぬ。

五八 「手に杖を持つてゐる人に、彼が病氣でなければ、私は法を說かぬ」と學び守らればならぬ。

五九 「手に劍を持つてゐる人に、彼が病氣でなければ、私は法を說かぬ」と學び守らればならぬ。

六〇 「手に武器を持つてゐる人に、彼が病氣でなければ、私は法を說かぬ」と學び守らればならぬ。

第六節、終り。

(四三)不レ得二嚼レ飯食一、應當レ學。

(四四)不レ得二舌舐、食一應當レ學。

(四五)不レ得二振レ手食一、應當レ學。

(四六)不レ得下手把二散飯一食上、應當レ學。

(四七)不レ得三汚手捉二食器一、應當レ學。

(四八)不レ得三洗鉢水棄二白衣舍內一、應當レ學。

(四九)不レ得二生草上大小便涕唾一、除レ病、應當レ學。

(五〇)不レ得二淨水中大小便涕唾一、除レ病、應當レ學。

(五一)不レ得二立大小便一、除レ病、應當レ學。

(五二)不レ得下與二反抄衣人一說法上、除レ病、應當レ學。

(五三)不レ得下爲二衣纏レ頸人一說法上、除レ病、應當レ學。

(五四)不レ得下爲二覆レ頭人一說法上、除レ病應當レ學。

(五五)不レ得下爲二裹レ頭人一說法上、除レ病、應當レ學。

(五六)不レ得下爲二扠レ腰人一說法上、除レ病、應當レ學。

(五七)不レ得下爲乙着二革屣一人甲說法上、除レ病、應當レ學。

(五八)不レ得下爲乙着二木屐一人甲說法上、除レ病、應當レ學。

(五九)不レ得下爲二騎乘人一說法上、除レ病、應當レ學。

(六〇)不レ得二佛塔內宿一、除二爲守視一、應當レ學。

(六一)不レ得三佛塔內藏二財物一、除上爲二堅牢一故下應當學。

(六二)不レ得下着二革屣一入中佛塔中上、應當レ學。

(六三)不レ得下捉二革屣一入中佛塔中上、應當レ學。

(六四)不レ當下着二革屣一遶二佛塔一行上、應當レ學。

(六五)不レ得下著二富羅一入中佛塔中上、應當レ學。

(六六)不レ得下捉二富羅一入中佛塔中上、應當レ學。

(六七)不レ得二佛塔下食留レ草及食汚レ地捨去一、應當レ學。

(六八)不レ得下擔二死屍一從二佛塔下一過上、應當レ學。

(六九)不レ得三塔下埋二死屍一、應當レ學。

(七〇)不レ得三塔下燒二死屍一、應當レ學。

(七一)不レ得三向レ塔燒二死屍一、應當レ學。

(七二)不レ得下遶二塔四邊一燒二死屍一使中臭氣來入上、應當レ學。

(七三)不レ得下持二死人衣一塔下過上、除レ爲二浣染香薰一、應當レ學。

(七四)不レ得二塔下大小便一、應當レ學。

六一 「足屐をつけてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六二 「革履をつけてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六三 「乘物に座つてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六四 「寢てゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六五 「蹲居つてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六六 「頭被で頭を裹んでゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六七 「衣で頭を裹んでゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六八 「自分が大地に座つてゐる時、座についてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

六九 「自分が低い座についてゐる時、高座に座つてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

七〇 「自分が立つてゐる時、座つてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

七一 「自分が後ろから步いてゐる時、自分の前を步いてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

七二 「自分が道端を步いてゐる時、道の眞中を步いてゐる人に、彼が病氣でなければ法を說かない」と學び守らればならぬ。

七三 「病氣でなければ、立ち乍ら、大小便をせない」と學び守らればならぬ。

七四 「病氣の時でなければ、草の上に大小便をせない」と學び守らればならぬ。

七五 「病氣の時でなければ、水の中に大小便をせない」と學び守らればならぬ。

第七節、終り。

諸君、玆に衆學法は誦出せられた。諸君、私はこの點について尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。再び尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。三度尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。諸君はこの點について清淨である。それであるから、諸君は(私の問に對して)默してゐる。私はこの樣に了解する。

(七五) 不得向佛塔大小便、應當學。
(七六) 不得遶佛塔四邊大小便使臭氣來入、應當學。
(七七) 不得持佛像至大小便處、應當學。
(七八) 不得塔下嚼楊枝、應當學。
(七九) 不得向塔嚼楊枝、應當學。
(八〇) 不得遶塔四邊嚼楊枝、應當學。
(八一) 不得塔下涕唾、應當學。
(八二) 不得向塔涕唾、應當學。
(八三) 不得遶塔四邊涕唾、應當學。
(八四) 不得向佛塔舒脚坐、應當學。
(八五) 不得安佛像在下房、已在上房住、應當學。
(八六) 人坐已立、不得爲說法、除病、應當學。
(八七) 人臥已坐、不得爲說法、除病、應當學。
(八八) 人在座、已在非座、不得爲說法、除病、應當學。
(八九) 人在高座、已在下座、不得爲說法、除病、應當學。
(九〇) 人在前、已在後、不得爲說法、除病、應當學。
(九一) 人在高經行處、已在下經處、不得爲說法、除病、應當學。
(九二) 人在道、已在非道、不得爲說法、除病、應當學。
(九三) 不得攜手在道行、應當學。
(九四) 不得上樹過人頭、除時因緣、應當學。
(九五) 不得絡囊盛鉢貫杖頭置肩上行、應當學。
(九六) 人持杖、不應爲說法、除病、應當學。
(九七) 人持劍、不應爲說法、除病、應當學。
(九八) 人持鉾、不應爲說法、除病、應當學。
(九九) 人持刀、不應爲說法、除病、應當學。
(一〇〇) 人持蓋、不應爲說法、除病、應當學。

諸大德、我已說衆學法、今問諸大德、是中清淨不(如是三說)。諸大德、是中清淨、默然故是事如

(1) 四分戒本(列七•5)

七　滅　々　法

諸君、玆に七滅諍法を誦する。
續いて起る論諍を靜めるために、
一　現前毘那耶
二　憶念毘那耶
三　不迷亂毘那耶
四　告白毘那耶
五　多數決
六　頑固の人を處理する作法
七　草にて覆ふが如く事件湮滅の作法が行はれねばならぬ。

1　Cullavagga IV. 14, 16　一、出席し得る僧伽は總て出席する。缺席の者は承認狀を送る。二、法と律…………依つて以て事件を決すべき…………の出席。三、原被兩告の出席。
2　Cullavagga IV. 4, 1–11 IV. 14, 27 明日に、又自意識的に無實である言ひ掛りに對する判決、一肩に衣をかけ長老の前に跪き、兩手を合せて述べる、かくかくの罪名を着せられてゐるが、全く無實故僧伽がその罪名を除き給はんことをと。一比丘立つて三度この義を僧伽に問ひ、皆默然たれは決す。
3　Cullavagga IV. 5 迷亂してゐる時の罪。迷亂中の犯罪なるを明かにし僧伽に容謝を乞ふ以下前項の如し。
4　被告が罪を告白した場合、Cullavagga IV. 8.
5　Cullavagga IV. 9. 適當なる人、集投票者となる。投票を作るにも動議(Ñatti) を出して問ふ。
6　Cullavagga IV. 11. 頑固にして告白せざる人の場合には、更に重積惡作法をなす。
7　Cullavagga IV. 13.

諸君、七滅諍法が誦出せられました。私は諸君に尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。再び尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。三度尋ねる。諸君はこの點に就いて清淨であるか。諸君はこの點に就い清淨である。それであるから、諸君は（私の問に對して）默つてゐられる。私はこの樣に了解する。
諸君、開口は誦せられ、四波羅夷法は誦せられ、
十三僧殘法は誦せられ、二不定法は誦せられ、
三十捨墮法は誦せられ、九十二波逸提法は誦せられ、
四波羅提提舍尼法は誦せられ、七十五)衆學法は誦せられ、
七滅諍法は誦せられた。(二二七戒)
世尊の(語の)如く經に傳へられ、經に含まれ、半月每に誦出せらるゝ。總て此の事に就いて和合し和解し、諍論なく學ばねばならぬ。

比丘波羅木叉終り。

是持。

七滅諍法

諸[1]大德是七滅諍法、半月半月戒經中說。若比丘有諍事起、卽應除滅。

(一)應與現前毗尼、當與現前毗尼。 (二)應與憶念毗尼、當與憶念毗尼。

(三)應與不癡毗尼、當與不癡毗尼。 (四)應與自言治、當與自言治、

(五)應與覓罪相、當與覓罪相。 (六)應與多覓罪相、當與多覓罪相。

(七)應與如草布地、當與如草布地。

諸大德我已說七滅諍法、今問諸大德、是中清淨不、(如是三說)。

諸大德、是中清淨、默然故、是事如是持。

諸大德我已說戒經序、已說四波羅夷法、已說十三僧伽婆尸沙法、已說二不定法、已說三十尼薩耆波逸提法、已說九十波逸提法、已說四波羅提提舍尼法、已說衆學法、已說七滅諍法、此是佛所說戒經半月半月說戒經中來、若更有餘佛法、是中皆共和合、應當學。

漢文個有名詞索引

ア

カ

サ

タ

ナ

ハ

漢字件名索引

サ

タ

マ

ヤ

ラ

法　　數

一 の 數

二 の 數

三 の 數

四 の 數

五の數

六の數

七の數

八の數

九の數

十の數

歐字固有名詞索引

A

B

V

Y

歐字件名索引

■ 本書の發行に就て

本書は遲くとも本年二月末を以て發兌の運びに至る豫定に有之候處當時一般印刷製本向取譯輻湊の爲め意の如く進捗不致荏延今日に及び候段深く大方に陳謝仕候

本書の印刷裝幀殊に本文原文漢譯對照組等は意外に印刷勞作を要したるものに有之相當嚴密の注意を以て其工を進めたるも尙未だ不備の点不少候は遺憾とする次第に御座候得共既に本書を以て一部の教科書に採用する事を諾されたる大谷大學等の學年期差逼り忽ち其課業に支障を來たすのみならず一般讀者諸彦よりも屢々配本の督促を受け候儘茲に一先づ製本發兌する事と致し候此段幾重にも御諒恕奉希候

猶は著者赤沼先生が本書の發行を微力小生の手に委せられ完成を見る迄非常なる苦心を拂ひて指導扶掖に努められたる事と我が大谷大學が率先して本書を佛典基礎學の教科用書に認定せられ多大の便宜を與へられたる事並びに内外出版株式會社須磨氏が比較的短時日に困難なる印行の業を完成せられたる事に對し厚く感謝の意を表し申候

敬具

大正十年四月　日

丁子屋書店主　西村九郎右衛門

特約店全國各著名書林

大正十年四月十日印刷
大正十年四月卅日發行

阿含の佛教奧附

著述者　赤沼智善

著作權所有

正價金拾圓

發行兼印刷者　京都市下珠數屋町東洞院西入橋町八番戸
西村九郎右衛門

發行所　京都市下珠數屋町
振替（東京四五九七
　　　大阪一〇二九〇）
丁子屋書店

內外出版株式會社印行

佐々木月樵先生述

（日本文化經典第一編華嚴經）

夜摩天宮會及其解說

華嚴經は佛教唯一の文化經典也。そのうち、「眞」と「美」との表現は、「夜摩天會」の一篇に究まる。舞臺は「行」の審判者たる閻摩王國、寶莊嚴殿上、主人公と地方の人々の會話に自然と道德と宗教との調和を表示し、最後に人間死後有無の大問題を提起す。場々展開し行く所の「行」の描寫は「智」と「信」と相撃ち相亂れて、そこに釋尊の「昇天」と共に何人も調高き「十林」の歌をきゝ、絢爛、目を奪ふが如き「華聚」の繪卷に接しつ最後にすべてを「無盡」の「行」に解決するあるを見る。著者は斯界の權威華嚴經全部の內容は勿論、その絢爛と芳醇とを巧みに本會解說の上に縮寫して以て第一義の天地を開顯せり。敢て宗教者、思想家、藝術家の一續を薦む。

四六判洋裝
正價金壹圓五拾錢
送料金八錢

佐々木月樵先生述

（日本文化經典第二編華嚴經）

華嚴聖歌

四六版洋裝・
正價金貳圓
送料金八錢

華嚴經は釋尊が成道の時、內に燃へし不滅の靈火である。龍樹は之を龍宮に體驗して大乘佛教の始祖となり、賢首はまた之に基きて無盡の哲學を構成した。而して近く我奈良朝文化の精髓は正しくその藝術的表現にして親鸞や明慧の謙倉佛教の大革命もまた此の經典の點火にかゝる。今や佛典中長篇難解の本聖典は茲に編者の苦心によりて各聖歌は原形其まゝに新舊兩譯を對照して以て何人にも初めて讀易きものとなつた。されば何人も之に依つて過去に於ける我佛教文化の根底を知るのみならず我思想界も亦佛教文化復興の黎明期の今や目前に迫りつゝある事を察知せよ。

發行所　京都市下珠數屋町　振替大阪 東京四五九七 一〇二九〇　丁子屋書店

佛陀の教化 阿含篇

近刊

安井廣度先生新著

無盡藏なる教化資料の源泉を本書に探るべし

『阿含經』は釋尊一代の言行錄である。ちやうど孔子に於ける『論語』に相當する。從來佛敎者の多くが『阿含』を離れて釋尊と其說法を知らうとしたのは大いなる誤謬であつた。

甞つて谷大研究院に於いて『阿含經』の專攻者であつた著者は、其後益々本經の研究を進め茲に極めて平易なる原文一致を以て其重複と繰返しを避け、阿含の根本敎義を基調として最も須要な敎說を譯出し、莊重雄大な釋尊の敎化振りを巧みに此一篇に躍動せしめた。

面白い譬喩、因緣、適切なる訓誡、說示、諸弟子の修道と其敎化、又は其當時の外道を折伏せられたる實例、諷刺、卽興、凡そ世尊一代の言行盡く網羅し漏す所はない赤沼先生の『阿含の佛敎』と相俟ちて天下の讀書子を驚喜せしむるであらう。

出據を明らかにし難句を註す苦心洗錬、阿含の聖話

はじめて通俗的に世に紹介せらる

發行所
京都市下珠數屋町
振替〔東京四五九七 大阪一〇二九〇〕
丁子屋書店

印度古代地圖



阿含の佛教附地圖

佛教

表紙古代印度文字　著者自筆
背文字　日下無倫氏
背カット　旭谷左右氏
扉文字　東南精一氏
装禎　丁子屋書店主
製本　島田辰五郎

Akanuma, Chizen
Agon no bukkyo

Spine label
supplied.
[illegible] 20.5.71